

奇譚クラス

■ 新しい風俗文献誌 ■

5
月
号



5

May-'68

待望の特集遂に実現!

団鬼六作・長篇羞恥責小説

前篇続篇合併 花と蛇

好評のS文学集大成

絶世の美女財閥遠藤家の令夫人静子が悪鬼たちの手によって誘拐される冒頭のシーンから美貌の探偵助手京子が単身敵地にのり込んで捕獲されるに至る前篇(38年8月号より連載)の発端より暴力団の本拠に妙齡の花恥しき美女が次々と略取され、そこに展開される数々の汚辱と羞恥責の饗宴を団先生の流暢な筆で描き尽された続篇(39年11月号より41年12月号まで)に至るまで一挙に登載。堂々四百数十頁に亘るサディズム文学の傑作を贈ります。この一冊によつて「花と蛇」の書き出しから全部通して読むことが出来ます。四十年に亘つて本誌に連載しSファンの熱狂的な絶讃を浴びた小説『花と蛇』を是非お求め下さい。

団鬼六作「花と蛇」

収録内容見出し一覧

前篇

- 第一章 発端 (静子令夫人誘拐された令夫人送られた着衣)
- 第二章 陥穽 (二度の嫌がらせ)
- 第三章 美人探偵 (落花紛々)
- 第四章 浣腸図 (強制屈伏)
- 第五章 救援者 (羞恥地獄観)
- 第六章 救援の失敗 (逆転)

りもの

- 第七章 好餌 (京子の屈伏)
- 第八章 悪魔の哄笑 (毒牙は迫る)
- 第九章 地下室 (悪鬼の饗宴)
- 第十章 翻弄 (屈辱と羞恥)
- 第十一章 蛇の執念 (裸踊り)

続篇

- 第一章 密室の秘密ショー
- 第二章 脱走の失敗 (美津子の脱走)
- 第三章 華やかな饗宴 (悪魔の計画)
- 第四章 地獄屋敷へ新顔 (新たな獲物)
- 第五章 翻弄されるカップル (美少年と美少女)
- 第六章 一千万円の身代金 (嵐のあと)
- 第七章 身代金奪取の失敗 (小夜子の受難)
- 第八章 涙の宣誓文 (美女と木馬)
- 第九章 恐怖の逆転劇 (悪魔の相談)

- 第十章 奇妙な三々九度 (鬼女の嬌声)
- 第十一章 飼育される白い動物 (美しき敗北者)
- 第十二章 悪魔と悪女の悪業 (恐ろしい仕事)
- 第十三章 屈辱の地獄図絵 (猫とねずみ)
- 第十四章 逃走の恐怖と失敗 (風前の灯)
- 第十五章 悪魔達の残忍な所業 (朝の酒)
- 第十六章 落花無残の修羅場 (白いコンビ)
- 第十七章 淫らな美女の調教 (嵐の後)
- 第十八章 すさまじいショー (の展開)
- 第十九章 汚水にまみれた宝石 (流血)
- 第二十章 華々しき美女の屈伏 (一難去って)
- 第二十一章 対峙する美女と美女 (嵐に立つ)
- 第二十二章 あくどい陥穽 (修羅図)
- 第二十三章 羞恥図絵の展開 (復讐の生贄)

直接お申込み

定価五〇〇円

略号「花特」

限定版
写真集

△美しき縛しめ▽ 第七集

山原清子
妖艶緊縛

刺青の魅力を探ぐる 写真集

頒価一部 一〇〇〇円(〒共) 略号△美7▽

最近撮影の力作 未公開の秘蔵写真集

刺青の女王Ⅱ山原清子の魅力の隅から隅までを抉ぐり出し、その美しさを最高度に発揮した強烈な刺青女体緊縛フォト結集版(思わず息をのむ凄いポーズ満載)

限定版
写真集

△美しき縛しめ▽ 第八集

大塚啓子・鈴木晃子・山原清子

女斗と緊縛競艶写真特集

一部 一〇〇〇円 略号「美8」

「女性対女性」の激しい女斗美の躍動!

女性が女性を縛る緊縛プレイの写真化動きのある相互縛り場面の美しい展開

◎フアンの要望に依えて特に作成した女性対女性の女斗美、女斗場面並に女性同志の緊縛場面を若々しい三人の女性によって力いっぱい演技してもらった躍動的フォト集。

限定版
写真集

△美しき縛しめ▽ 第九集

「女性刑罰拷問特集」△西洋篇▽

革具に拘束される女

媚態
七十二葉

頒価一〇〇〇円(送共) 略号△美9▽

モデルⅡ清楚な美木乃々子Ⅱグラマーで美貌の大塚啓子真白で肉づきのよい女体が黒光りのする革具或は褐色の牛革具によって厳重に縛しめられる、さまざまな姿態を七十二葉の華麗なフォトによってグラボア写真集として、ここに提供します。

△女性刑罰拷問特集▽ (日本篇) 「略号美5」は売切。本集も残部少し。すぐお申込みを。御申込先はいずれも大阪阿倍野局私書函第十四号箕田京二へ。

限定版グラビア印刷M結集アルバム

Mフォト・「女王様に飼育される日々」

頒価一部 一〇五〇円(送50円) 略号「M特」

◎全頁七十三葉のM傾向ばかりのグラビア写真

待望久しくして初めて刊行されたM派ばかりの限定版M写真集です。今までMモデル募集に応募してきたM男性モデルを網羅し、それらのM男性が色々の女王様に奉仕し飼育される生態のかずかずを豊富な写真資料によってマニアの

方に提供するグラビア写真集の結集版です。発行以来数カ月、すでに残りが少なくなりました。売切れになりますと絶対に入手は出来ませんし再版はいたしません。未入手の方は、どうか今のうちに是非お申込み願います。

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Akatsukisupai

Osaka Japan



定価三五〇円

5月号 ¥ 350

女性愛読者の初々しい緊縛フォト紹介

「長井葉津子さん」

四月号の一六四頁で懸賞「告白」を手記体験「入選作品」白肌のアザを掲載して一躍有名になった長井葉津子さんは、五月号でも山本一章氏の「カメラ・ルポ」に登場して、その初々しい緊縛裸身を度々解の諒解のもとに数度に亘って緊縛フォトを撮影、特に彼女の好みに従って、イルリガートル、エネマシリンジ、イルリガートルなどを着用して浣腸フォトの撮影にも成功しました。

極鮮明な印画紙に焼付けた長井葉津子嬢の飾り気のない美しい緊縛フォトと浣腸フォトを是非ご覧下さい。まるで直接彼女と逢っているような楽しい気持ちにさせてくれることと思います。

股間縛り首縄正面

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よれV
小柄だがピチピチとした若肌が首縄と股間縛りで映えている。

両手吊り正面晒し

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よれV
両手首をX型に吊られて無防備の白い肌が擦り責めを待っている。

全裸高手小手麗身

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よれV
一糸まとわぬ麗わしの肌が厳し

い高手小手の縄目に喘いでいる。

全裸股間縛り媚態

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よれV
始めて受ける羞恥の縄目に巧まざる媚が魅惑的に全身に漲る。

強烈変型エビ縛り

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よれV
柔軟な肢体は首が膝頭に喰い込む程屈曲されても全裸美を保つ。

正座猿ぐつわ仕置

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よれV
豆絞りの猿ぐつわで全裸のハツコは正座させられてうなだれる。

凄絶海老責め地獄

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よれV
海老責めにされた全裸の女体は僅かに脚をばたつかせてもがく。

女体一つ折り縛り

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よれV
白いお尻を高々と空に突き立てて二つ折りに縛られ女体は狂う。

あぐら縛り全裸晒

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よれV
強制されたアグラは若い彼女にとっては死よりも辛い仕置だ。

イルリの浣腸責め

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よれV
イルリの嘴管から浣腸液は迫ってくるが縛られている身は……

エネマと縛の恐怖

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よれV
可憐な臀部にエネマの管は不気味だが縛られた全裸の身が……

浣腸器を愛撫する

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よれV
身はたとえ全裸で縛られていても、いとしい浣腸器の管を口に……

襲いくる嘴管の先

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よれV
お尻をつき出した浣腸ポーズの裸身に今まさに襲いくる嘴管。

エネマ責めの恐怖

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よれV
豆絞りの猿轡、強烈な縛り。エネマのゴム管は情容赦なく迫る。

強制浣腸責め序曲

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よれV
浣腸に興味があるのだと告白したのだけど、この責めには……

中河恵子の臨月腹

出産を目前に控えて愈々最後の

チャンスの日、便々たる太鼓腹をレンズの前に晒してくれた。

見事な臨月腹妊婦

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河恵子 略号 八よれV
彼女の一番大きなお腹と乳房を中心に焦点を合せた見事な大写真。

臨月妊婦全裸鑑賞

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河恵子 略号 八よれV
便々たる臨月腹を晒すのも露出癖の彼女には一つの快楽だった。

転された緊縛妊婦

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河恵子 略号 八よれV
胎動する太鼓腹をどきりと投げだして縛られた裸身がうごめく。

臨月妊婦革紐縛り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河恵子 略号 八よれV
柔肌に喰い込む革紐が臨月の妊婦なるが故に一層痛々しいのだ。

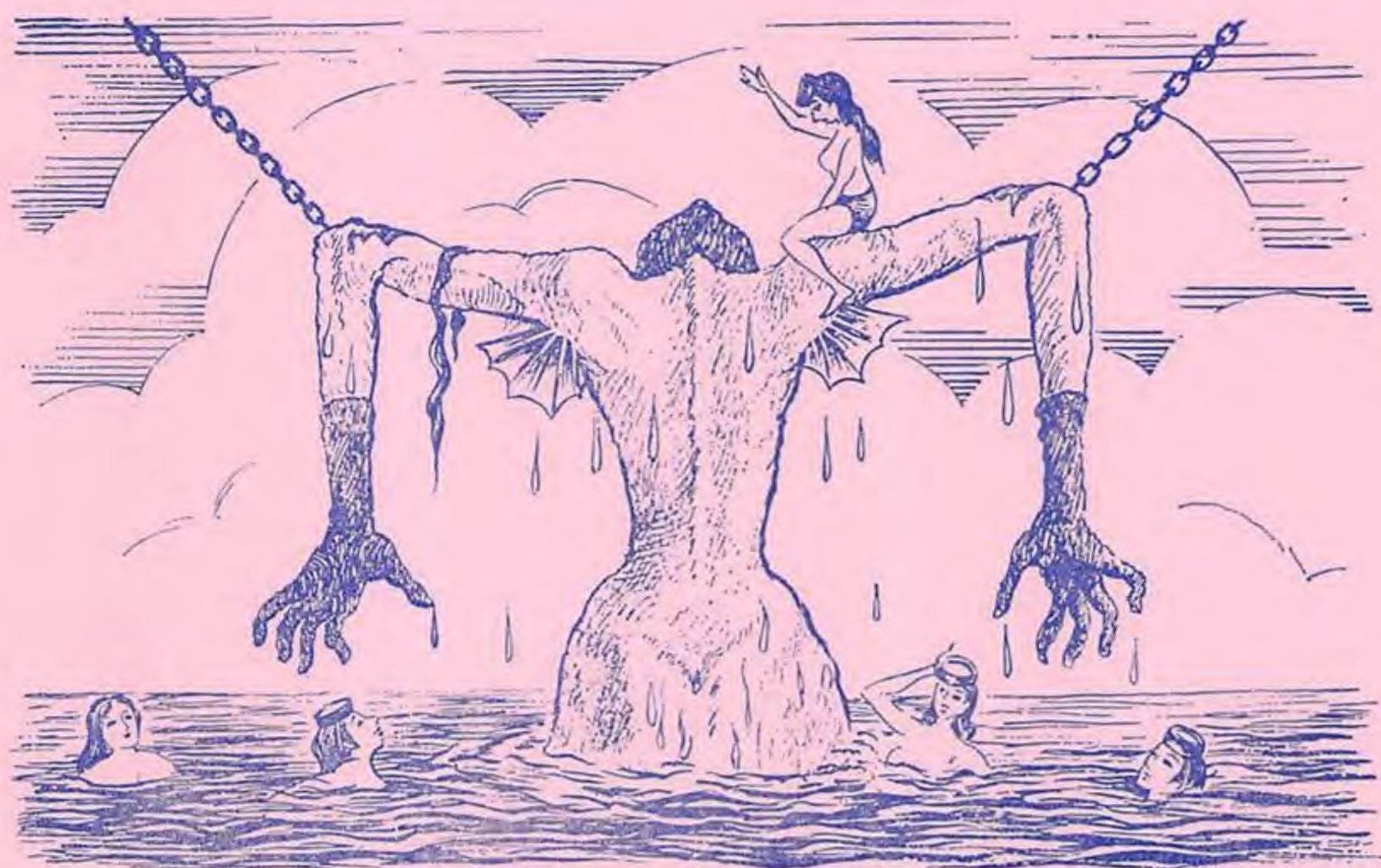
臨月妊婦麻縄縛り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河恵子 略号 八よれV
むごたらしい麻縄で荒々しく縛られて尚昂まる臨月の妊婦腹。

麻縄でくびった腹

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河恵子 略号 八よれV
トゲトゲしい麻縄が臨月の腹部をくびって一層巨大に見せる。

◎お申込みは大阪阿倍野局私書箱第十四号箕田京二宛へ願います。



奇譚クラブ

△第二三卷第六号・通刊第二四〇号▽

(昭和四十三年) 五月号 目次

△本 文▽

本誌自粛の徹底……………編集部……………(9)

SMカメラ・ハント△谷ナオミの巻▽

「真白き柔肌の甘き香り」……………辻村 隆……………(10)

(緊縛ピンク映画の彗星、谷ナオミのすべて)

読物紹介 倒錯人間の世界……………丸鬼土佐渡……………(34)

贗作イーリアス(中篇)……………黒淵 嬰一……………(36)

私のマゾ雑記帳……………馬場 好男……………(58)

告白 未知の願望……………河上 ユリ……………(65)

ガンペッタ「復讐」……………千葉 青鬼……………(68)

新連載 緋縮緬地獄(第一回)……………白鳥 大蔵……………(76)

H氏をめぐる美女四人……………芳野 眉美……………(89)

女性切腹 月形千浪の自刃……………六角京之介……………(96)

奇クサロン 編集部構成(233)

感度一〇〇の女	森 不惑
サロン楽我記(第四十七回)	辻村 隆
フオト 軽業(綱渡り・松づくし)	阿部 能丸
ジンタよ消える勿れ	夜乃 探郎
川柳「蛇 樽」	仲々 水洗
捕縄秘伝薬人形公開	人形会誌より
縄 日記	早木 夢二
イメージ画集	
アイデア「貫通？」	千葉 青鬼
クロッキー「縛女」	獅子内 謙
△詩▽「ある訓育」	菊地 淳子
時評・月刊誌と週刊誌と異常小説	太田 三郎
僕のイメージ画「極刑」	室井亜砂路
安井夫人のリードを期待して	早川 宏
フオト「陶酔のひととき」	安井喜久子
編集部だより	編集 集 部
△短歌▽「大鏡」	高村 初子
カメラ・ハント特集を待つ	瀬芽 富音
苦言と要望(「花と蛇」にふれて)	北山 読人
夫婦プレイのアイデア(安井夫人に)	浅井甲斐三
私の捕獲したベットの	柿 淳五郎
私評二点(廣作イリアス・カジバシ座「女牢」)	沢潟 しの
懐しの大道芸人(女の縄抜け)	予世場良三
△詩▽「小 春」	梶 天平
私のイメージ画集	
「さあ、びったりのを作りました」	原 由貴子
「ピラニヤは特に若い女を喜んで喰う」	桐原 紫門
△告白▽鞭打ちと逆さ吊り	関谷富佐子
ヨーロッパ旅行土産「女性乗馬フオト展」	佐伯 寿
ショート・ショート 鞭のあるバー	緑川奈緒美

マゾ・ストーリー「被虐の冷笑」	みはら・ひろし	(108)
風俗文献あれこれ話	山川 大三	(115)
机上籠郭Ⅱ法律雑考Ⅱ	井上 俊彦	(120)
懸賞入選作品 理恵女献身(第一回)	沢潟 しの	(124)
鬼六談義「狐の話」	団 鬼六	(140)
漫談千一夜物語 薔薇と蜜蜂	田代 俊夫	(150)
私はこの味覚をこよなく愛する	とやまかずひと	(165)
連載S小説「花と蛇」(続篇第四十二回)	団 鬼六	(168)
稿談「性風俗資料入門 補遺(最終回)」	斎藤 夜居	(186)
カメラ・ルポ「長井ハツコの巻」		
「この女(ひと)と」	山本 一章	(188)
連載小説 心傷たむ遍歴(最終回)	西条 操	(196)
五月号に寄せてⅡ奇クジャーナルⅡ	魔仁阿天狗	(209)
ピンク映画シナリオ「残酷・性の贅」	団 鬼六	(212)
読者通信	編集部選	(252)
(目次カット「怪物引揚」 室井亜砂路)		

☆ 今月の新しいモデルによる作品案内

「金原奈加子さん」

三月号の「奇クサロン」では、
め、その愛らしい表情を見せた
彼女が四月号の「サロン」でもそ
の若々しい肢体を惜しげもなくフ
アの前に開陳してくれました。

可憐表情全裸縛り

大手札四枚 一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 五〇〇円
あどけない表情で憧れを抱きな
がらも無垢の肌を始めて纏った縄
にとまどいを感じて若々しい羞ら
いを全身に漲らした緊縛姿態。

立縛り正面裸晒し

大手札四枚 一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 五〇〇円
胸から足首に至るまで肌に喰い
込むきびしい縄目を受けて正面向
いて立たされた肢体は柔肌を赤く
染め顔は羞らに伏眼勝ちだ。

両手吊り全裸晒し

大手札四枚 一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 五〇〇円
高々と吊り上げられたので全裸の
肢体を真向うに晒して、穴があれ
ば入りたき風情の可愛い表情。

雁字搦目後手縛り

大手札四枚 一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 五〇〇円
肉づきのよい白桃のような臀部
を晒して揃えた両腕両手首を、二

の腕と胸部をぐるぐると雁字搦目
に縛り上げられた後手縛り背面。

股間縛り柔肌責め

大手札四枚 一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 五〇〇円
始めて受けた柔肌に埋没する股
間縛りでライトの前に白肌を晒し
羞らう開も床に転倒させられ
表情の変化を微細に記録される。

猿ぐつわ開股責め

大手札四枚 一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 五〇〇円
首縄の高小手縛りで腰縄に股
間縛り、口の間に噛ました猿ぐ
わという縛りスタイルで伸びやか
な脚線が無理に開かせる責め。

豊満臀部強烈責め

大手札四枚 一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 五〇〇円
まだ世の荒風を受けたことのな
い豊かに息づく臀部を真正面に突
き出せられて縄にあえぐ女体は美
しい新鮮な果実を思わせるのだ。

強制全裸開股責め

大手札四枚 一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 五〇〇円
二の腕の柔肌がくびれる程の太
股を開かせようと束縛して両の太
股植物の葉が前を掩っている。

股間縛りで悶える

金原奈加子 略号 八〇〇円
双丘に深々と喰い込む股間縛り
で両手の自由を奪われた女体が畳
上を転々とするのが悶え続ける
ありさまを俯瞰して捕捉する。

全裸縛りに羞らう

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
金原奈加子 四〇〇円
可愛い裸身を更に美しくする
ように縄は女体をくびつてゆく。
投げだした両脚と全裸を羞らうよ
うに塵籠が僅かに陰翳している。

妊娠のお腹を見て

大手札四枚 一組 略号 五〇〇円
中河恵子 五〇〇円
妊娠して以来更に一層強い緊縛
と露出を望むようになった彼女が
出産までの僅かな一ときを燃えつ
きようと激しく息づく瞬間。

縛られた妊婦横臥

大手札四枚 一組 略号 五〇〇円
中河恵子 五〇〇円
胎動する胎児をお腹に抱えなが
ら厳しく高小手縛りに縛られた女
が畳の上の異様な姿態をこころ
がして恍惚の境地を楽しむのだ。

被虐に燃える妊婦

大手札四枚 一組 略号 五〇〇円
中河恵子 五〇〇円
快活なMモデルとして志願した
彼女が若い緊縛肢態と流暢な文章
で出発し、ここに妊婦モデルとし
ての昇華を遂げたおさめの写真。

尚見せたい妊婦腹

大手札四枚 一組 略号 五〇〇円
中河恵子 五〇〇円
縛られて尚も見せたい妊婦腹。
という川柳の心そのままだに被虐と
露出に限りない憧れを持つ恵子さ
んの太鼓腹を晒した緊縛ポーズ。

◎新作カラー・フォト

「奇クサロン」誌上にて度々姿を
見せている愛知葉子さんの奇抜な
アイデアによる新作天然色写真。

刑罰足枷開股縛り

カラー三枚 一組 略号 一〇〇〇円
愛知葉子 一〇〇〇円
「グラマー」な太股を八の字に高々
と開けさせる足枷が首に連結され
て締めつけられると、もうこれ以
上は開けない所まで股は開く。

菱縄開股と鉄砲責

カラー三枚 一組 略号 一〇〇〇円
愛知葉子 一〇〇〇円
全裸でお白洲に引き出された女
囚は菱縄をぎつしりと掛けられ
開股を強制されて喘いでいる。豊
かな裸身が鉄砲縛りで喘いでいる。

葉子の全裸を晒す

カラー三枚 一組 略号 一〇〇〇円
愛知葉子 一〇〇〇円
女性の羞恥を極限にまで露呈さ
せるため全裸の女囚に思いのまま
の姿態をとらせてS男の視線の楽
しみをほしいままにしている。

◎お申込みは、すべて大阪市阿倍
野郵便局私書箱第十四号、天星社
箕田京二宛でお願いいたします。

奇 譚 ク ラ ブ

昭和 43 年 5 月 号

(1968年・5月号<第22巻第6号・通刊第240号>)

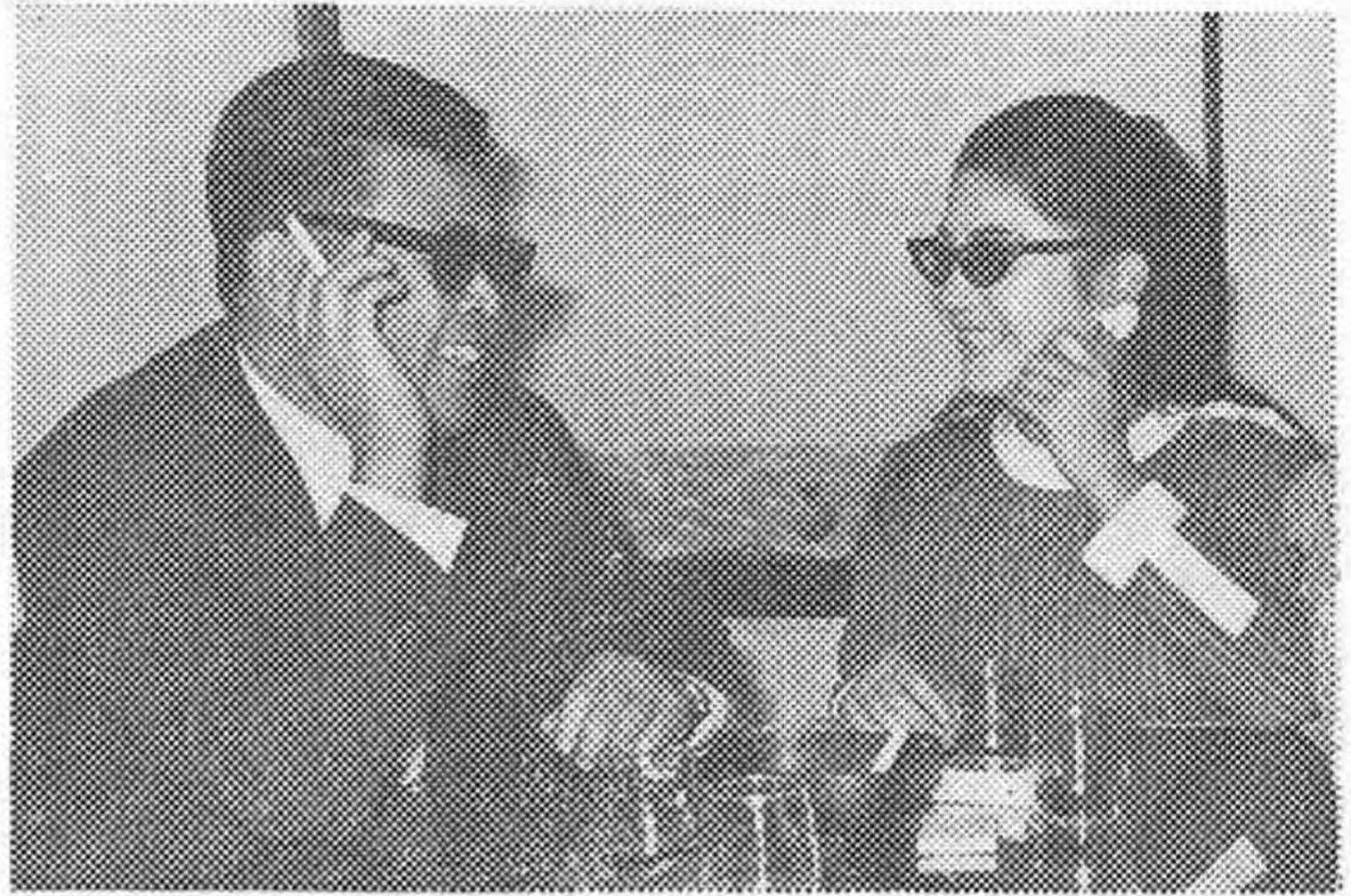


本誌自粛の徹底

一、本誌は特殊な風俗文献を研究する平和で
 穏健な社会生活を営む真面目な成人を対象
 として編集しておりますが、青少年の保護
 育成に関する条例には抵触しないよう、十
 分な配慮を今後更に徹底いたします。

一、本誌では従来巻頭を飾っておりましたグ
 ラビア写真並に口絵を全廃し、文中の挿絵
 の削減に努め、読む雑誌としての体裁を順
 次整えて参りましたが、更に挿入写真の減
 少及び見出し、キャッチフレーズの改訂な
 どによって煽情性を排除してゆきます。

一、本文の内容についても、刺戟の強いもの
 は極力掲載しないようにするのは勿論、掲
 載した文章は十二分に検討を加え、いやし
 くも青少年の健全なる育成に支障を与えな
 いよう努力いたします。尚、本誌の発行部
 数は最低限度にとどめ、その増大を企るた
 めの努力はいたしません。



SMカメラ・ハント△谷ナオミの巻▽

真白き柔肌の甘き香り

緊縛ピンク映画の彗星……………

……………谷ナオミのすべて

辻村隆

「えッ！ 本当なの、それ？」

「本当ですとも、一時間ばかり前、真鶴の鬼六先生の自宅から電話があったんですよ」

「凄いビッグ・ニュースですねえ。彼女、眼を瞞るようなトビキリの美人なんですよ。兎も角、近頃のピンク映画のうち、三本立の本本までは、彼女出演していますよ。何しろ突如として彗星のように現われた、引っ張りダ

コの売れっ子女優なんです」

「昨夜、K庵って料理屋から彼に電話したでしょう。あの時は専ら辰巳典子のことを喋べ

っていたけど、鬼六さん、私が珍しく上京してきたものだから、土産話のつもりで、交渉してくれたんですよ。彼も言ってたけど、何分にも谷ナオミも忙がしい体だから、ぎっしりスケージュールがつまっているらしいけれ

ど、鬼六氏の顔で、やっとO・Kとれたそうです。何だか今日一日、又愉しくなって来ましたよ」

「だけどもあ、彼女よくO・Kしましたね。辻村さんのカメラ・ハントに錦上華を添えますよ。いやあ、しかし鬼六先生の實力には驚きましたなあ」

賀山芳男氏は、真実感嘆の声を洩らした。

その声は上ずっている。

昨夜、辰巳典子をこのマンションの一室で撮り終り、彼女をタクシーで送り帰すと、彼も又、愛妻の待っている自宅へ引揚げていったのである。今日の谷ナオミの一件は彼の予想だにしていなかった。

一夜明けて、ひる前に顔を出した彼は、午後から私のおつき合いで、東京のあちこちを走り、時間があればカジノバシ座でも案内するつもりでやって来たのだから、意外な成行きに驚くのも無理はない。

「辻村さん、よくよくついてますね。辰巳典子、そして谷ナオミと連日ハント出来るなんて、こりゃ大したもんだ。この二人は近頃のピンク映画界での緊縛女優の双璧ですよ」

「ところが、悲しいかな、余り彼女に対する予備知識がないのでね。どんな映画に出てるの？」

「お情けないこと仰有る。昨夜言っただけでしょうあなた、ホラ、例の『密通刑罰史』の江戸篇で、医者嫁に、なった悪女。最初から縛られづめで、最後には全裸のところを、股ぐらを一刺しぐさりとやられて、大八車にハダカの俣のせられ

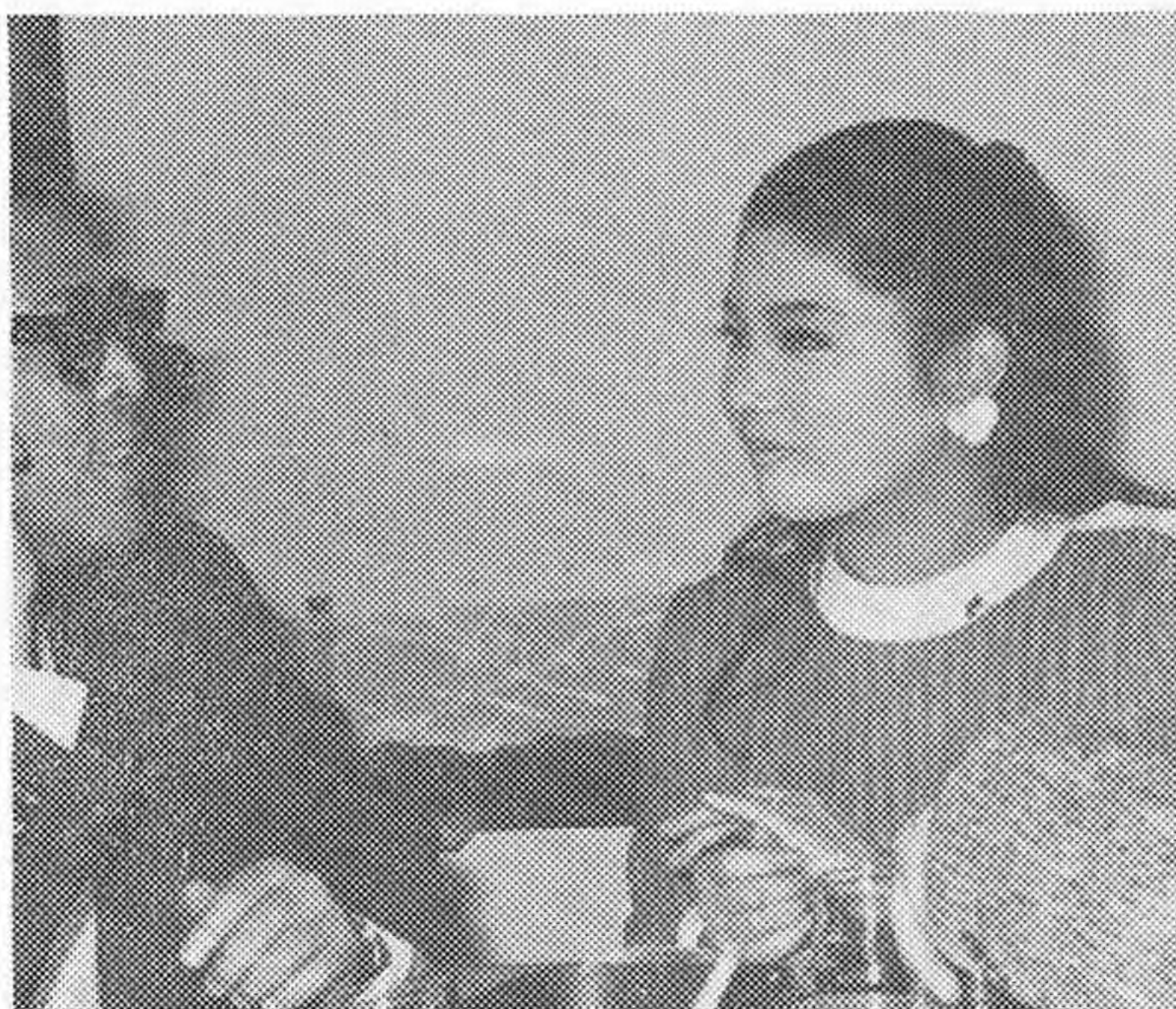
て引廻しにあう、あの子ですよ」

「ああ、あの人。あれなら美矢かほる以上の縛りが連続にありましたねえ。思い出した」
「それに、『惨奇、生体実験』とか『悪道魔十年』とか、『女体残虐図』とか、小森白監督のものなら大抵、顔を出していますよ。むしろ辰巳典子より縛られてるのは多いのかも

知れませんよ」

賀山芳男は急に雄弁になり出した。既に彼は、谷ナオミとのハントに一役買ったつもりでいるらしい。それに彼女の映画もよく見ている。『女体残虐図』の女主人公が谷ナオミと聞いて、ありありと彼女のイメージがよみがえって来た。浴場内での、あの水責めは、忘れることの出来ないショッキングなシーンであったからだ。そうか、あの娘が谷ナオミだったのか。そう聞かされると、私はピンク映画でも、しばしば彼女にお目にかかっていることに思い当たった。テープレコーダーを狂言廻しにして、乱交を描いた、『知りたい年頃』も彼女が主演だったし、『寝上手』もたしか彼女の映画であった筈だ。『性本能と結婚』の女子大生も彼女であったし、『めすオスの本能』にも出ている。一本の緊縛の内容を織り込んだ映画を見るため、ついおつき合いで、抱き合わせのピンク映画も見る羽目になる。そんな中に、谷ナオミは片っ端から出演していたのである。ただ、意識してみていなかったもので、さて彼女の容貌がどのようなであったかと、懸命に思い出そうとするが咄嗟には浮かんで来ない。

「若くて潑刺とした子のように、思えるんだ



が、さてとなると、彼女の容貌が浮かんでこないんですよ。たしかグラマーだったようにも思うんだけど、凄くいいおっぱいの……」

「恰度いいグラビア雑誌がありますよ。あれを御覧になると、ああこの娘かと思い出しますよ」

賀山氏は押入れを開いて、ゴソゴソやっていたが、やがて一冊の本を持ち出してきた。

「この表紙が彼女ですよ」

差し出されたグラビア誌は、別冊近代映画一月号であった。新春スペシャル・グラマーとサブ・タイトルが入っている。



表紙の豊満な裸で、ニッコリと微笑む娘はまさしく谷ナオミであった。バラバラと頁をめくる。祝真理、一星ケミ、内田高子、水城リカなどがつづいて、あったあった、クローズ・アップの彼女の裸身が三頁に亘って続いている。私は貪るように眼を凝らす。若さがピチピチと画面に躍動して、まるで私に囁きかけでもするかのように、黒い瞳が私をみつめている。私はしばし我を忘れて、グラビアに魅入っていた。

「いい子だなあ——」

つくづく溜息まじりの声が、思わず口から洩れる。

「でしよう。何なら東京のおピンク映画館でも覗いていらっしやいよ。きっとどの映画かに出演していますよ」

「うん、それもいいけど、折角上京しながら映画館で四時間近く時間を潰すのも惜しいしね」

私の返事は煮え切らなかった。だからといって、団鬼六氏と共に、初めて出会う彼女との時間は夜であったが、さ

りとて、今更ジタバタと彼女の映画をみに行く気もしない。歴々と蘇がえってくる『密通刑罰史』の悪女と『女体残虐図』の女主人公洋子の、強烈なイメージだけで、最早充分だったのである。映画を見るのは、じかに彼女と会う手段もなく、悶々の情はかしきれぬ場合のことで、今の私にとっては、もう八時間もすれば、否応なく、ジカに谷ナオミのナマのあでやかな潑刺とした姿にお目にかかれるのである。

「しかし辻村さん、鬼六さんは私がいても、御邪魔だと仰有らないでしょうかね」

それでも、賀山芳男氏は鬼六氏に気を使っ

て一応、遠慮して訊ねた。

「勿論いいでしよう。辰巳典子をお世話していただいたことも、あなたのマンションでこうして御厄介になっ

ていることも承知している筈なんですから。いやむしろ、お差支えなかったら、このマンションの部屋を拝借願え

ればと考えているのです」

「ええ、願ったり叶ったりですよ。そんな日のために、こうして日頃は遊ばせておいても

イザという時の為に借りてあるのですから」

「じゃあ遠慮なく使わせていただきますよ。第

一、人気スターの彼女が、ホテルの門を潜るところを、誰かに見つかったちゃって、噂のタネになってもいけないから、恰度いい」

「私も恰度いい。ビデオ又撮れますものネ。ところで、今夜何処でお会いになるのです」「もう一度、彼からここへ電話するといつてたけど、その間じっとしてられないしネ。こちらから、彼の上京した時に立寄るYプロの、事務所へ連絡するといったのですが、一応、午後八時頃、麻布六本木の『ドン・ルーチョ』というクラブで落合うことになってい

るんです。あなたもいらっしゃいよ。でも賀山さん、今日は何か御用あるとか仰有ってましたね?」

「あるにはあるんですが、構っちゃおられませんかよ。このチャンス逃がしたら、もう二度と巡り来ることないかと思うと、万難を排しますよ。何しろ、昨日丸一日、会社をおぼり出して蒸発してましたから、二、三是非会う人があるのです。でもすぐ片附けて『ドン・ルーチョ』に飛んでゆきますよ。プレイは勿論、緊縛出来るんでしょうね」

「そのつもりだけど、初対面でいきなり無理も出来ないけど、可能性ぎりぎり迄は追求してみたいですね」

「ああ、胸がムズムズして来ましたよ。こうなると午後の予定、急拠変更せにやなりませんが、辻村さんどうします?」

「私のことは構わないで下さい。独りで自由に歩き廻りますから。執れ夜、六本木の『ドン・ルーチョ』でお目にかかりますよ」

「東京見物や、カジバシ座が、お流れになりそうですね」

「いいじゃないですか、それよりももっともっと愉しいことが待っていますからね。今日時間があつたら、品川区に住んでいるモデル志望者の娘をたずねてみようかと思つてもいいのです。しかし、それもよしますよ。昨夜辰巳を撮って所期の目的は、果たしたのですから、本来なら、今日の夕方までに帰阪するつもりでしたが、思いがけない附録で、もう一日滞在します。実に久し振りの東京だから、少しあちこちを歩いてみたいんです」

「近頃の娯楽雑誌なみに、附録の方が立派になりそうですよ。だけど、谷ナオミはおろか団鬼六先生にも、お目にかかれるなんて、まるで夢のようですよ」

彼はシンから嬉しそうに、眼を細めて巨軀をゆすった。

近代映画の表紙をじっとみつめた俣、私の

心は既に谷ナオミに飛んでいた。謎めいたニソフのような表紙の微笑みが、私にそつと何か囁やきかけているようであった。

× × ×

青山のマンションをブラリと手ぶらで出た私は、午後八時までの長い昼の時間をどこでどうして過ごしたのか、さっぱり記憶に止めていなかった。気がつけば、次々と走り去る流しのタクシーをやっと捉え身を委ねて、新宿に降り立っていた。新宿コマの知人を訪れたが生憎の不在だった。本屋に立寄ると、私の眼はいつしか、ピンク映画のグラビア雑誌を探していた。

銀座も歩いた。渋谷にも廻ってみた。当てのないエトランゼは、足の向く俣、気のむくままに、大都会のあちこちの、とそ気分のぬけぬ溜り場の空気を吸っていたのだった。

大阪の淡白な味付けのうどんにくらべ、東京のうどんはまるで煮込みの様に真赤な汁にうどんが染まって、だだ辛く半分で喰べる気がしなくなり、そば屋を飛び出し、隣り合わせの喫茶に入って、コーヒーを啜りながら時間を潰す。

夜の帷りがおり始めた頃、私は団氏に電話した。彼は私のため、わざわざ時間を割いて



す？」

「ハア？」

キョトンとして、二人は私をまじまじとみつめた。

「Uという喫茶店ですけど」

「いえ、この辺りは何という処なんです？」

「新橋ですわ。くわしくいうと、港区新橋一丁目……」

一体何をきくのだろうか、不審な、警戒する目つきである。私はわざと大阪弁で礼をいう。

「ああ、そうでっか、おおきに。全然わからしまへんねん、助かりましたわ」

私はペコリと頭を下げると、二人の娘は可笑しそうに、声を殺して笑った。ミニスカートの可愛い娘達だった。

「分りました、新橋にいるんですよ。そうだ新橋だった」

「教えてもらっていましたね、聞こえてましたよ。で、今、何してるんです？」

「ぼんやりとお茶をのんでいますよ、暇つぶ

しにね」

「やれやれ、お気の毒に。ベテランの辻村さんも東京に出てくると、さっぱりですね。私ね、せかされているシナリオ、ここで書いているんですよ。もう少して一段落——」

「谷ナオミさん、大丈夫なんでしょうね。仲々キレイな人気スターっていうじゃないの。昨夜、辰巳典子と一緒にいった賀山氏から、いろいろと聞いたんだけど」

「ああ、例の社長さんですね」

「ええ、彼のマンション使わせてもらうことにしたんだけど、いいでしょう？」

「そりゃ結構ですよ。とすると、社長御一緒ですね」

「ええ、あんたを是非、紹介して欲しいって頼まれたんです」

「私は構いませんよ。スポンサーになってもらいましょう。彼女の方は連絡つきました。

仕事で少しおそくなるけど、夜の八時過には必ず来ってくれるそうです。まあ自慢じゃないが、辻村さんの長年のハントにも一寸見当らない素晴らしい、いい子ですよ。私が太鼓判押しますよ」

「お礼は見てのお帰りといいたいが、御好意大いに感謝してます。もう胸わくわくです」

上京し、しばしの時間を、シナリオ打合わせをかねて、ヤマベ・プロに身を寄せている筈であったのだ。

「今、何処にいるんです？」

「さあ、何処か分らない」

電話の彼の声が笑った。

「のんきですね、本当に分らないの？」

「ああ、ちょっと待って。誰かに聞いてみるから……」

受話器を置いて、一寸辺りを見廻す。斜め向いの入口に近く、二人連れのO・Lタイプの娘二人、喋っている。私は近附く。

「あ、失礼ですけど、ここは何処なんで

「大抵の場合、彼女のマネージャーがついてくるんですが、それじゃ辻村さん、カメラ・ハントに困るんですよ。だから私一存で任せてもらうよう交渉しましたので、彼女一人で来ますよ」

「ますます有難い。ああ夜が待ち遠しいですよ。今日一日、本当に長かった」

「それじゃ少し早いですが、今朝も言っていた麻布六本木の『ドン・ルーチョ』で午後七時半に会いましょう。クラブ組織なので、おそらく店をあけた許りですが……」

「『ドン・ルーチョ』とittedただけで、きけば分るのかしら？」

「分らなかつたらタクシーの運ちゃんに『ドン・ルーチョ』へ電話してもらいなさいよ。電話はね、四〇三の一七七六——。運ちゃん

はすぐ見当つきますから、連れてってくれますよ。ハハ、まるでおのぼりさんですね」

「何かしら、心細いね」

「いいから、いいから。辻村さんらしくないですよ。じゃあ」

オニ六先生、いささかあきれた口調で電話をきった。

私は『ドン・ルーチョ』の電話番号をしっかりとメモして自分のテーブルに戻る。先刻の



娘達が、独りぼっちの私を興味深げにみつめている。私はその視線に、照れた笑顔を送った。時計を覗くと、午後五時半を少し廻ったところ、約束の時間までにはまだ二時間近くある。無宿流れ者にも似た気易さが、この大都会の渦の中で、フト軽いアヴァンチュールを楽しみたくなってきた。見知らぬ街で、独りぼっちの心の空虚が、誰かに声をかけたく

なったとしても、それは黄昏のそぞろ佗しい雰囲気、そうさせたのではなからうか。

私は図々しく、彼女達に近附いた。

「お嬢さん達、食事未だ？」

黙って二人は顔を見合わせている。私はお構いなく言葉をつづける。

「昨日大阪から出てきたんやけど、友達と会う七時半まで、時間持て余してますね。西も東も分らんさかい、よかったら案内してくれない？ 奢りますよ」

「おじさん、関西ですよ？」

「ああ」

「この子、神戸ですよ」

長い髪の娘が、連れの娘を指さした。

「そう、神戸やったら知ってますよ、大抵のところは。流石に東京だなあ、関西からも随分出てきてるんですね」

「私達構いませんけど、おじさんに、お気の毒ですわ」

「いいや構いませんよ。ただし余り高くないところ」

食事代何千円もかかっちゃ、軽いアバンチュールにしては高すぎる。どうも関西人は、いざとなると勘定高い。

二人の娘は何か囁き合っていたが、どうや

ら意見一致したらしい。

「それじゃ、御案内しますわ」

「ああ、有難う。お蔭で退屈せずにすみそうだな」

私は素早く娘達の伝票を掴んだ。

ままよ、足まかせ。未知の土地で、見知らぬゆきずりの娘と食事をするのも又楽しからず哉である。そこからどんなハントが生まれるかも知れない。

とあるレストランの食事、娘との雑談、二本のビール、めくるめく窓ごしの銀座のネオン、心あたたまるひととき。

しかし、それは所詮、脇道。谷ナオミとのハントとはおよそ関係のない黄昏のひとつときの出来事に過ぎないのだ。クドクド書くのは止して、一時も早く先を急ぐとしよう。

× × ×

私が奢ったささやかな夕食の、せめてものおカエシのつもりか、二人の娘は六本木まで一緒にタクシーに乗ってくると、私の示した電話番号に、途中の公衆電話から掛けてくれた。

「分りましたわ。ここで降りて、歩いて五十分足らずですわ」

ぶすつとした仏頂面の運転手に金を払って

車を降りる。不親切なこんな運転手に探してもらおうより、若い娘二人に挟まれて歩いている方が遥かに心優しい。

目的がなければ、この俤、彼女達を誘ってみた誘惑にかられたが、いかに行き当りばったりの私とはいえ、今夜はそうも行かない。

「あッ、あそこですわ」

辺りを見廻しながら歩いていたら、年上の方の毛の長い娘が、指さした。その前に私は立つ。階段を数段昇ったところの右手に、いかめしい鋲打ちの木扉があった。中南米大使館御指定とある。

「どうも、わざわざ有難う。本当に助かったよ。じゃあ、さよなら」

若い娘達二人は、礼をいって手を挙げて立去ろうとする私に黙った俤じつと立ちつくしていた。或る種の期待を私に抱いていたに違いなかった。エトランゼの私に対して、あわよくば同行して、クラブへ誘ってくれるかも知れぬという淡い希みで、随いて来たのでは



なからうか。惜しいチャンスであったが、私は心を鬼にした。改めてもう一度「有難う、さよなら……」

私はもう振り向かず重い木の扉を押した。素朴な、中南米のシャトゥの外壁を、偲ばせるかのようにつくりの、クラブの内部は薄暗く、エキゾチックであった。ボーイが恭しく近よる。私は団鬼六氏の名を告げる。

「ああ、おききしております。どうぞ——」多忙なのか彼は未だ現われていなかった。お目当ての谷ナオミの姿も勿論見当らない。マダムがにこやかに挨拶に来た。鬼六氏の随分のなじみらしい。

かつてOSKで舞台のスポットを浴び、シヤンソン歌手として、テレビに映画に活躍し



たマダムも、今はこのクラブの若き女主人としておさまっていた。私の脳裡に、テレビの『悪魔のような素敵な奴』の一コマがありありと蘇がえる。あの頃とちっとも変らない。いやむしろ艶麗さを増していた。

時間が早いのか、私の他に中年の紳士が二人、静かにワインを汲みかわしているだけであつた。

「あの方、自民党のA代議士さんですよ」マダムの囁やきで改めてその方を振返る。ロマンス・グレーの上品な紳士の横顔に、うっすら記憶があつた。

私はブランデーを注文する。ここはクラブ組織なので、フリーの酔客は入れない。そのせいか宵の早さで、しばらく客足は途絶えて

いた。柔らかなラテン・ミュージックが物静かに流れて、ムードを徐々に、盛り上げていた。

背後で木扉の開く音。振返ると待ち兼ねていた団鬼六氏の姿が黒く浮かび、その背に寄り添うような一つの影。それはまぎれもなく谷ナオミに違いなかった。彼は内部を一瞥すると、つかつかと私を見つけて、近附いてきた。

「やあ、お待たせしちゃった。これ谷ナオミさん、こちら関西の辻村さんですよ」

私はしどろもどろに、彼女に挨拶した。余りにも素晴らしい彼女の出現に、圧倒されてしまったのである。卑俗な言葉を借りるならば、私のハントの歴史をふり返ってみても、

(こんな別嬪見たこと

ない)という言葉が、

ピタリと当て嵌る、抜

群の美しさであつた。

ネックと肩、手首、

裾などを白地でふちど

りした、ミリタリー調

の、真紅に黒のたて縞

の入った超ミニのワン

ピースの服が、豊満な

柔肌をピタリとくるみ、素直な黒髪が背に

長く垂れて、赤いリボンが紅ばらの様に、彼

女の髪を飾っていた。私と視線が合うと、谷

ナオミは、グリーンのサングラスの翳りの奥

で、あでやかに微笑んだ。純白の貝に似たイ

ヤリングがさらさらと、爽やかにそよいだ。

私は彼女の素顔の笑い顔を眼の前に始めてみ

た。その笑みは、たとえようもなく、ふくよ

かな感じの、純真な笑顔であつた。真白い真

珠のような綺麗な歯並びのその隙間から、ピ

ンクの舌がチラリと覗けてみえる。

私は椅子から立ち上って迎える。淑女はこ

く自然に、私の隣りの椅子に席を占めた。

「社長は？」

「未だ来ていないんです。今の処、私一人」

「何か料理注文しましょう、それじゃ。ナオ

ミちゃん、ブランデーでいい？」

「ええ、結構ですわ」

可愛い声だ。私はこの場で、カメラのと

れないことを悔いた。大抵なら手離さないカ

メラなのだが、午後からの独り歩きの、手ぶ

らの気楽さを考えて、いつもの鞆は持参しな

かったのである。

「少し疲れているんですの」

「どうして？」と鬼六氏。

「実演がすむなり駆けつけたんです」

「私は、ここの表で十分以上、待ったよ」

そうか、それで二人揃って現われた訳だ。

私は鬼六氏の、彼女に対する深い配慮を、その時、知った。

「私の顔のきくところなんです。辻村さん、遠慮なくやって下さいよ。この店自慢の南米料理を注文しましたから、一つ賞味して下さい」

「聞きしに勝る素晴らしさですね」

「何が？」

「彼女——」

「店かと思った。ナオミちゃんでしょう。ええ実にいい娘ですよ。今夜のことだって、私が頼むと、忙がしい体なのに時間を作ってくれたんです。可愛い娘ですよ」

「いやあ、恐れ入りました。流石、鬼六先生が褒めるだけあって、桁ちがいです。まるで夢のようですよ」

「辻村さん、お世辞がうまい」

「いや、本心、本当なんです。正直いって、映画のイメージとは全然、違うんですね。何といったらいいか、ミニの女王——そんな感じですよ」

谷ナオミは、心持ち頬を染め、くすりと笑

って軽く唇を手で押さえた。私の最大級の讃辞が撥ぐったかったのかも知れない。

ボーイがブランデーとオードブルを運んでくる。そっと取上げて、彼女は軽くワインを含んだ。

「素晴らしい人だなあ。溜息が出ますよ」

「あらッ」

谷ナオミは私を見て含み笑った。

「所詮は高嶺の花と思っていたのですが、まさかお目にかかれようとは、夢にも思いませんでしたよ。美しい、本当に美しい！」

お世辞でなく、私はウーンと唸って心から讚美した。

「随分、お上手ね」

ホホと軽く口に手を当てて、谷ナオミは艶然と笑う。私は正直いって、すっかりノボセ上っていた。

唯、美しいとか、綺麗とかいっても、数え上げてみれば、どこかに欠点をもっているものである。だが、この時見た、谷ナオミにはどこかといって、一点の非の打ちどころがなかった。すべての部分に、美人としての調和があざやかにとれていたのである。

クラブの仄暗い灯りの下で、真白い顔に、くっきりと眸が黒く輝き、すずしい眼もとを

長い睫毛が包んでいた。超ミニの真赤な服が豊かな柔肌をピッタリと包み込み、おそらくは豊かな乳房が、その中で息づきふくらんでいるであろうことを胸に描いて、私の心は増して急速に高鳴ってゆく。その姿態は盗みみる男共をして、惚ればれとさせずにはおかなかったのである。

「少しお聞きしてもいいでしょうか？」

「ええ、どうぞ……」

彼女は改めて、ハンドバッグから一葉の名刺をとり出して私の前に差出した。

和風の紙質をその俤生かした洒落た小型の名刺であった。今更見なくても分っている彼女の名前を改めてまじまじと見る。住所、電話もチャンと記入してある。私もあわてて名刺をとり出して彼女の前に置く。

団先生は、さして言葉を挟まず、ワインを両手で抱えるようにして掌で温めながら、私達のやりとりをみていた。

「いつ頃から映画に出られたのです？」

「去年の秋ごろからでしょうか、本格的なのは——」

「若い方にお年をきくのも失礼だけど……」

「昭和二十三年生れですわ。九州の福岡から学校を卒業して、間もなく上京したのです」

「その時ひどい目にあっちゃった。それも言っちゃえよ、ナオミちゃん」

鬼六先生が横から言葉を挟んだ。

「ある方に奨められて、虎の子の五十万円を懐ろにして上京したんです。紹介するのに何かと要るからといわれて、その五十万円をすっかり記者と名乗る人に盗られちゃったんです。怖いところですよ、東京は……」

「へえ、五十万円も」

「一時、もうどうしようかと思ったのですが、親切な方がいらっちゃって、プロを紹介して下さったんです。でも、その時はショックでした」

彼女は、そこで軽い溜息をした。

「まるで、ピンク映画を地でゆく筋道なんだね。私もそれをきいて義憤を感じましたよ。でも根はしっかりした明るい子でしょう。すぐ立直りましたね。今、じゃんじゃん稼いで今年の暮にはアメリカへ行くそうです。えらい子だよ、この人は……」

鬼六先生は、そこでポンと彼女の肩を叩いた。

「去年の秋『プレイボーイ』誌の外人カメラマンの方に申し込まれて、富士山へ登ってうつしたんです。その時約束してくれたの



ですけど、実現するかしないかは、未だ当てになりませんわ」

谷ナオミは一寸、照れて謙遜した。

「へええ、『プレイボーイ』誌なら一流ですね。やはりヌード？」

「ええ、まあ。でも随分寒かったですわ」

「アメリカのプレイボーイ誌に、あなたのフォトがのるわけですね」

「そう仰有ってましたけど」

「それで、彼女、英会話のレッスンに懸命なんだ。どう、えらい子だろう」

「まったく、きけばきくほど素晴らしい」

「それで私は、辻村さんに一言抗議するんだが、あんた私との熱海の対談で、ピンク女優

にはズベ公のような人が多い、と言ったと書いてあるが、これで随分、私は彼女達から抗議を受けたんだよ。私は言った記憶ないんだが、辻村さんの映画から受ける主観が入ったと思うけど、こいつは取消さないといけませんよ。辰巳典子にしたって、この子にしたって、皆真剣なんだ。しかも実生活は真面目そのものなんだよ。演技として判っきり区別しているんだよ。分るかね。この子の澄んだ眼をみたって分るでしょう」

鬼六氏はえらいことを言い出して来た。事実、現在眼の前にいる谷ナオミからは、そんな気配は微塵も窺がえなかった。私とても信憑性がなくて書いたわけではないのだが、それを一概にすべての女優にきめつけるのは誤りであることを、辰巳典子や谷ナオミからの受けとる感じで認めずにはいられなかった。

「謝らねばならないね」

「だろう。だから私は談義に書きましたよ。

この謝罪のために、彼女達の足下に、あんたを裸にひんむいて、雁字搦目に縛り上げて彼女達一人一人に鞭の洗礼をうけさせるとね」

M族なら、よだれの垂れそうな謝罪方法だが、私はニヤニヤ笑って、困ったというように眉をしかめて苦笑いしてみせる。

「谷ナオミさんになら鞭打ってもらいましょ。恰度いいや、私の同好の友達で、三百万円ぐらいなら金を出すから、映画つくらないかっていつてるんです。原作辻村隆、脚本団鬼六でネ。配給の方は鬼六先生にお願いするとして、友人の曰くには儲けなくともいい、モトが戻るだけでいいから、奇ク協賛の、うんと烈しいのを撮ってほしいといってるんですが、どうでしょう。時代ものなら高くつくから現代物でもいいんだが、サド侯爵の日本版といったようなものは——」

「さあね、非公開映画ならいざ知らず、一般

公開となると、これは問題ですからね。私だ

って以前は随分夢を抱いて書いたのですよ。

それが皆、ズタズタに削られるんです。所詮お色気ムードが主題になるんですね。近頃じゃあきらめて、プロの方向に歩みよりましたが、いくらすごいのを撮っても買ってくれなくちゃ、非公開映画と同じですからね。そんな持込みもいろいろあるんですよ」

「でもね、唄だって、例えば無名のグループの『帰って来た酔っ払い』というような、アングラ・レコードが自費出版して当たっているですよ。アングラ映画だって、撮りようによっちゃ当ると思うんだけど」

「それは、この業界を知らないから言えるのですよ。実際は（そんな甘いもんやおまへん

で）ですよ。しかし検討してみましようよ」

「その時は主演は谷ナオミさんと辰巳典子」

「滝リエ、林美樹にも応援を頼んで、S女性を登場させて、辻村さんをコテンコテンにやっつけます」

谷ナオミは、私達のやりとりを、愉しそうに微笑みをたやさ

ず傍聴していた。

「ナオミちゃん、一丁踊ろうか」

鬼六氏は少しよろけて立ち上った。

「辻村さん、ナオミちゃん本当はね、ゴーゴ―が大好きなんですよ。でも、こいつは私苦手でしょ、あんたもでしょ」

私もあわててうなずく。この年で今更ゴーゴ―も踊れない。

鬼六氏の要請で、マダムが久し振りにマイクに立った。鬼六氏の言をかりれば久し振りということ、何カ月も唄っていないそうであった。

早いテンポの「恋人よ我に還れ」の曲が始まり、マダムの流暢なすき通るような唄が流れ出す。

二曲許り、マダムの唄に合わせて二人は踊り、席に戻ってきた。鬼六氏のひたいにうっすら汗がにじんでいる。私はその間、かもしかのようにしなやかに躍動し、滑走する、谷ナオミのすらりと伸びた両脚の美しさに魅入られていた。

賀山社長が、息を弾ませて入ってくる。紹介をすませ、彼は感激一入の体で、谷ナオミのすべてを凝視し、深い讚美の溜息をついていた。一眼で彼が谷ナオミに参ったことは察



しられた。少し客が立てこんでくる。それらの人々の視線が期せずして、彼女に走ることを、私は我がことの様に誇らしく感じた。女性客も振り返って彼女をみつめている。

メキシコ風の男二人女一人のトリオの、外人の専属歌手が通りすがりに、セニヨリータと頭を下げる。鬼六氏と数語交わし、谷ナオミをみて、おーっと両手を拡げて讃美を送ってマイクの位置に立った。

「彼等、この専属なんです。ペルー人というが、いわばエトランゼでしょうね。アンデス山脈のふもと、インカ帝国の末裔だと自称していますが、その地方の民謡専門なんですよ」

女性の顔は沖縄式日本人の顔に近かった。トリオの哀切を帯びたメロデーが流れ、曲が変わって、私達は彼等の要請で、手を叩きながら調子をとってはやす。谷ナオミも美しい手で、軽く調子を合わせて叩いていた。

「楽しいですね、夢のようです」

私は甘い言葉を、そっと彼女に囁やく。

「私もですわ。素晴らしい夜ですわ」

「関西へ挨拶廻りか、何かで来られたら、きっと電話して下さいね。御馳走します」

「ええ、きつと」

甘く、眩くように彼女は私の耳許で囁き返した。トリオの唄は嫋嫋と流れ、切々と語韻は尾を曳いて胸をうった。

私の心は熱く燃えたぎってくる。『ドン・ルーチョ』の雰囲気は申し分ないとしても、私のSの心は、いっとき早く、彼女に飛びかかり、柔らかく白い、丸いものを引摺り出して、俄破と驚瀾みにし、キリキリと肌に喰い込む縄目に、のたうち廻る女体に、鞭をふるいたいという、兇暴にも似た衝動が湧き起ってくるのを押さえかねていた。

「ドン・ルーチョって、どんな意味なんですか？」

賀山氏はのんきに鬼六先生にきいている。

「人の名ですよ。日本でいう、小原庄助さんみたいな人。底抜けに明るく、お人好しで、のみ助で、南米の代表的人物なんです」

そんなことは、どうでもいい。私のハイド氏は寸秒をじれ始めていた。早く、早くと。心は既にプレイに向って、疼き始めている。

六本木から青山まで——。数十分後。

微醺を帯びた、賀山社長の外車は、助手席に私、後部シートに、鬼六氏と谷ナオミをのせて、ゆるやかにネオンの下を走っていた。

賀山氏がドン・ルーチョの正会員になった

ことは、いうまでもない。

× × ×

冷えきったマンションの一室に、急拠、暖房器具が総動員している。バスに激しく水しぶきの音。何もかもがこれからのプレイの前奏曲をかなでていた。

部屋の暖まるまでの暫しの間、私達はホームゴタツを囲む。昨夜と同様の雰囲気が醸し出されていた。違うことは、辰巳典子の占めた位置に、谷ナオミが足を伸ばしていることと鬼六氏が一枚加わったことだけであった。勝手しつたる部屋の中を、賀山社長は巨軀をこまめに動かして、準備に余念がない。

何か彼女に聞きたいことは山程もあった。

そのくせ、何から切り出していいやら、私の心は只管焦燥に走るだけである。

「一昨日『密通刑罰史』を見たんす。ナオミちゃん（ここで始めて心易く呼び掛けた）随分と縛られ役の悪女でした」

「あのホンは随分とストーリーが変ったんです。私、撮っていて、何が何だかさっぱり分らなかつたんだけど、アフレコで見るとチャンと筋になっていんです。矢張り流石に小森先生ですわ。でも随分ひどく縛られたり、責められたりするの、私達抗議しようかと

思ってるんです」

「緊縛がからむと、監督さんもS的傾向に走るから、自然そうなるのじゃないかな」

「あの最後のシーンの、大八車で全裸になったの引廻しあったでしょう。あれセツトじゃないんです。ロケしちゃって、しかも冬でしょう。戸外でハダカの尽、何時間も死んだようになって引きずり廻されたんです。とても口にはいえない苦しさでしたわ。寒くって寒くって……」

「お察しします。それだけに凄く迫力がありましたよ。『女体残虐図』でも、氷責めにあったでしょう?」

「ああ、あの映画『女体……』何とかて題なのですわ。撮っていて、よく最初のタイトルと変るから、私知らないんです。髪を縄でゆわえられて、氷の上に立たされたんです。段々と足の裏が感覚なくなっちゃって、痺れてしまいました。御覧になりましたの?」

「ええ、見ました。随分すごい責めの新手だと思いました。髪の毛だけで本当に吊られましたの?」

「ええ、少しの間だったけど、もう少し長く続いたら気を失ったかも知れせんわ。すごく痛くって痛くって。ポロポロと涙が出るん

です。あの日は体が綿のように、くたくたになりました」

「あの映画でまだ責めがありましたよ。ゴムホースを二つ折りして、本当はかなり力を入れて叩いていたけど」

「叩かれた瞬間、ウーンと痛いって思いますけど、氷責めや、髪で吊られたのや、大八車でのハダカよりは、ましですわ。でも当たり前が悪いとスゴく痛かったですわ」

「ナオミちゃん、よく縛られますね」

「どうしてでしょう」

「さあ、私にきかれても分らないが、素直なんじゃないかな、カントクさんに言われたら何でもハイハイとやっちゃうから、皆んなナオミちゃんが、使いいいんですよ」

「今、渋谷の地球座で、映画の合間に実演をやってるんです。それもやはり手錠はめられたりするんです」

「ハダカになって?」

「ええ」

「あんたの好きな人が、産業スパイで連れられてきて、信州の山奥で二人になる」

「そうなんです」

「色々責められたりするが、それは狂言でその男の人の心を掴むためのお芝居という」
「そうです。アラッ、どうして知っていらっしゃるの?」

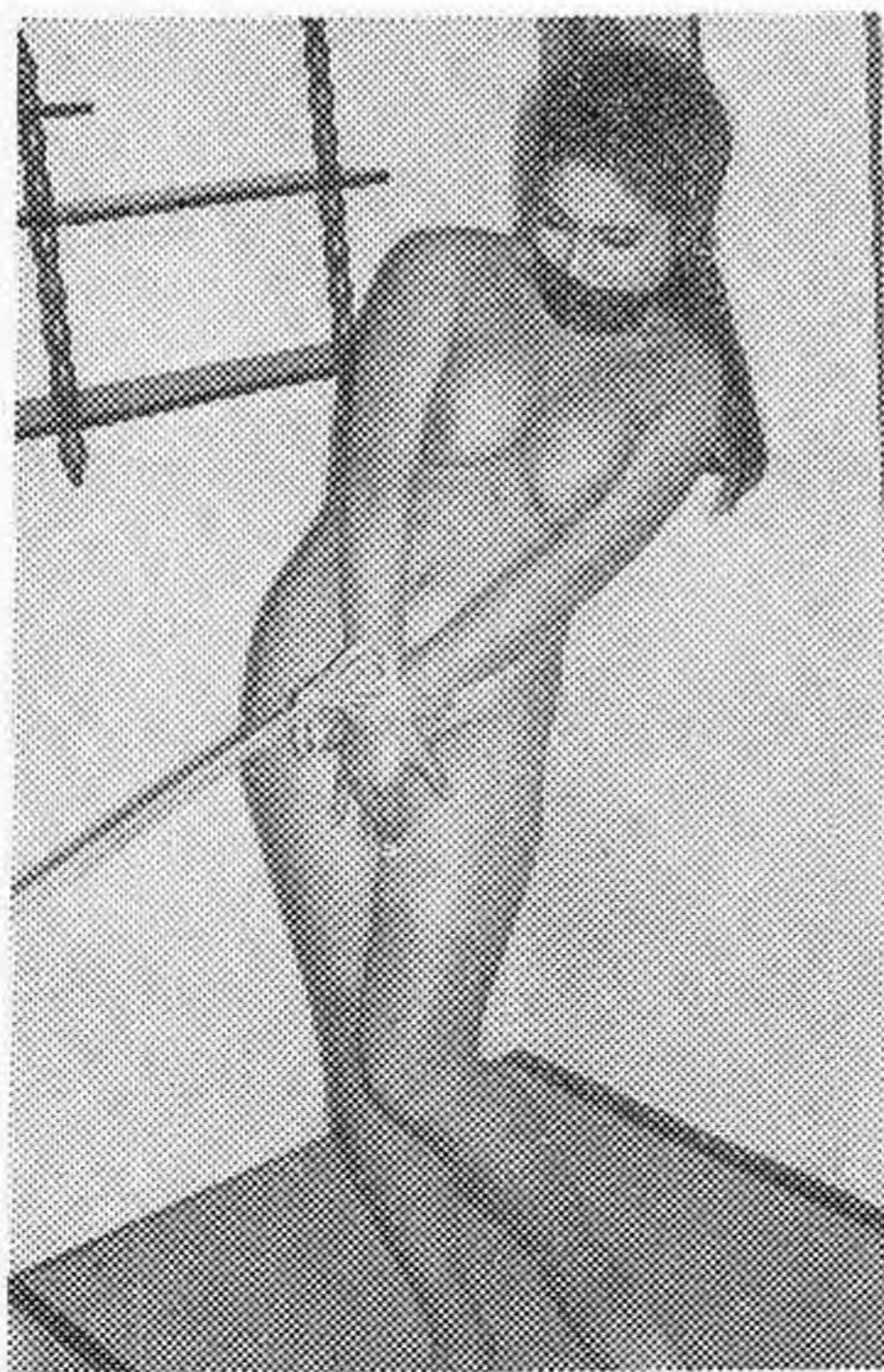
知っている筈である。銀座の地球座で見た辰巳典子のお芝居と同じストーリーなのである。辰巳典子と谷ナオミが、同じお芝居をやっているところが、現在の緊縛女優の双璧と呼ぶにふさわしかった。

「まあ、御覧になったのネ」

彼女は一寸ニランでみせた。

「いいえ、外のところでね」

この場所で、辰巳典子のことは口に出した



くなかったので、私は言葉を濁す。偶然の一致とはいえ『婦女暴行奇談』全八景の主人公を異なる場所で演じていた二人を、私は連日とする羽目になったのである。私は奇妙なえにしの糸を感じた。

「じゃあ、そろそろ始めたらどうです。ナオミちゃん、大体、私が言った様なことなんだけど、いいでしょう」

鬼六先生は、あらかじめ因果を含めておいてくれたらしい。谷ナオミは、あっさりとなずいた。

「何かストーリーあるんでしょうか？」

「いや、別に、ビデオで少しとりまします時、暴漢に襲われた娘という構成で、私がナオミちゃんを縛りますが、抵抗して下さいよ」

「何かお喋りするんですの？」

「いいえ、ありの尽で結構です」

私は背広の上衣をぬいだ。いよいよプレイが始まる。ホーム・ゴタツを片付け、鬼六氏は洋間のソファによりかかって、私のプレイ振りを、じっくりと眺めるべく、ニヤニヤしながら煙草に火をつけ、二、三服吸うと揉み消していた。

いつしか部屋の空気は柔らぎ、適温にぬくもりつつあった。私は二台のカメラを、昨夜

の如く装置した。一台は手持ちで、凡ゆる角度からねらい、もう一台の電動式は据付けておいて、長尺レリーズで、瞬間の動きをねらおうとした。賀山氏は、緊張した顔付で、ビデオカメラに内蔵された、小型のモニターテレビを覗き込んで、一心にズーム・レンズを動かして、焦点の調整に余念がなかった。

谷ナオミは、その間、洋間のソファにもたれこんで私達の動きを冷静に観察していた。彼女は静かにイヤリングを外し終った。

いよいよプレイの機は熟した。私は胸の鼓動を努めて押さえながら、洋間であらぬ方に視線をやっている彼女に声をかけた。時間は午後十時を既に過ぎているのだ。

「じゃ、いい？」

「ええ、どうぞ」

うなづくナオミを私は手招きして呼んだ。悪びれず彼女は、さっと立ち上ると、私の傍らに近寄ってくる。優美な曲線は目前にあった。匂う美貌は私の寸前で私の心を妖しく掻き乱した。

「脱ぎます？」

彼女は小声で私に聞く。潔ぎよい協力的な言葉が、快よく私の耳朶を打つ。私はフォトの記憶に、この超ミニスカートの姿を、いつ

いつ迄も止めておきたいと思った。

「いや、暫らくはその俣着ていて下さい。最初は服の上から、軽く縛ってみます。若し、きつかったり、痛かったら、すぐ仰有って下さい」

「かなり辛抱出来る筈ですわ」

彼女は見上げる様に、羞恥の頬で言った。私は彼女の腕をとると、背後に廻り、そっと長き背の黒髪に鼻をよせる。うなじの辺りから、えもいわれぬ、甘い香りが馥郁と鼻孔をくすぐった。チラリこぼれる真白き柔肌のそれは甘い香りであろうか。ぐっと抱きしめた衝動を、かろうじて殺して、私は一条の縄を二つに折り、神妙に首を垂れ、両手を背後に廻した谷ナオミの豊かな胸に、太縄を巻きつけていった。丸く盛り上る胸を数条の縄はしめつけ、縄端が彼女の後手を強く締めた。大きく口を開き、ピンク色の舌端を喘がせて、谷ナオミは声にならぬ悲鳴のポーズをとった。堂に入った絶叫のうめきが、ポーズに流れる。膝上三十センチのミニの裾から、露わな太腿が、私の衝動をかき立てるように、ニョキリと現われ、生毛が銀に、光って見えた。

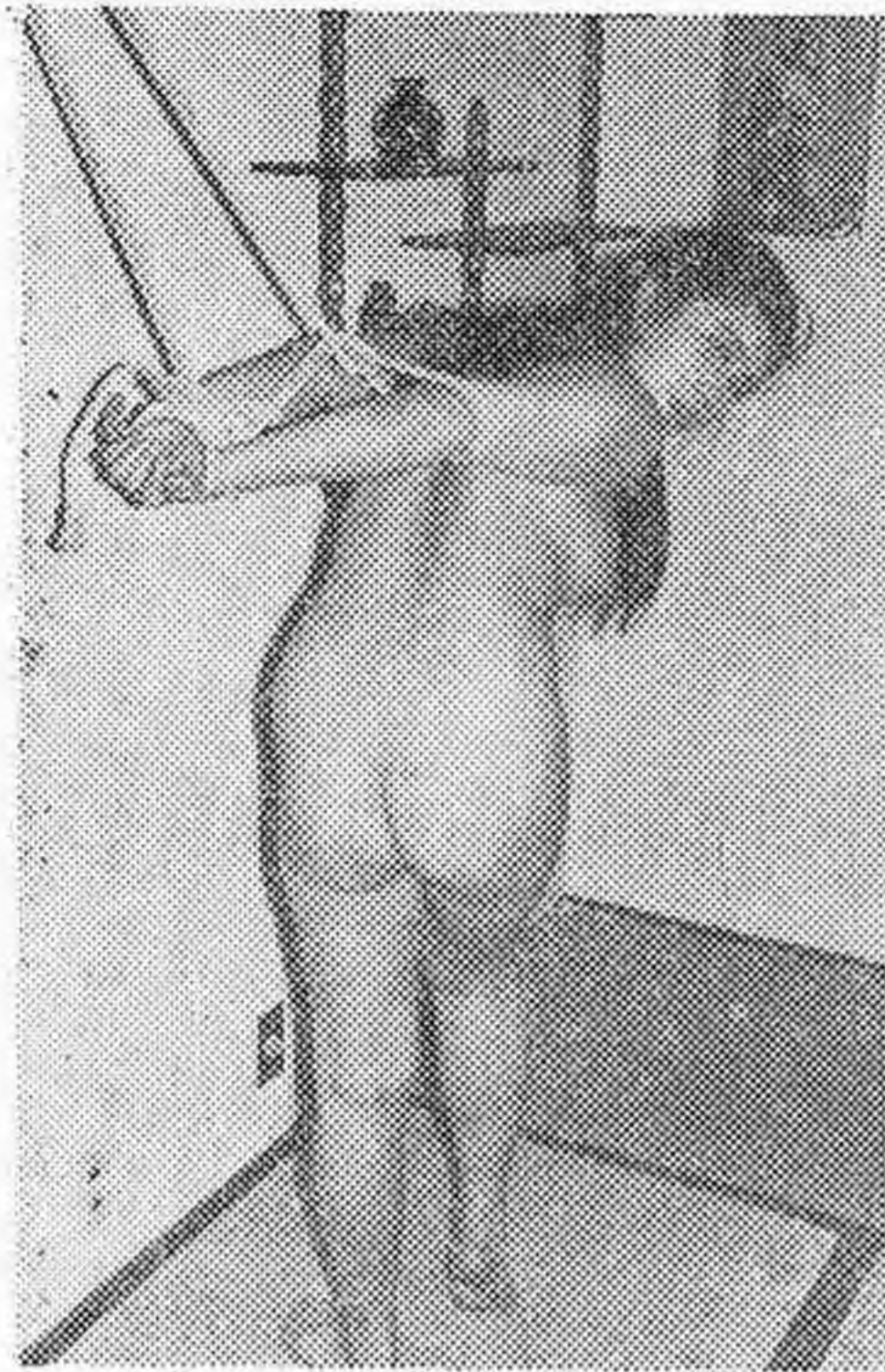
二台のカメラの閃光が幾度か、ナオミのポ

ーズにひらめいた。

× × ×

若く、ポリュームに溢れた谷ナオミの力は予想以上に強かった。ビデオのテープは微かな音を立てて、廻転を始めている。

私は彼女に飛びかかる。私の手をスルリと抜けて、彼女はからかう様に逃げる。追って抱きしめ、ぐいとねじ伏せた私を、バネ人形のように彼女は勢いよく潑ね返す。私はぶざまに、どたと後ろに引っくり返る。妖精のたわむれに似た、悪戯っぽい笑みが、ナオミの頬をほころばせている。彼女は面白がっているのだ。起き上って、再び足に組みつき、もがいて逃れようとする彼女の体に馬乗りに



なる。「アッ：アア、アア」と、閨のうめきに似た嬌声がナオミの口から洩れ、喘ぐ様に唇が開く。私はやっとの思いで、押さえつけ、ミリタリールックの緋の服に手をかける。

「いや、あーっ、止めて、アッ」

喘いだ唇から、拒否の悲鳴が部屋の空気を震わして流れた。ぐっと押さえつけ、無理矢理はいだ肩さきから、やっとなだらかな一つの線が現われてきた。柔肌は私の手を陶醉させ、麻痺させてゆく。ダイヤのように光り輝やく彼女の肌に、今私は粗々しい手を伸ばしていた。さながら猛り狂う一匹の野獣のように、私はこの柔肌を蹂躪しようとしていた。

くりくりした肉体の一部が私の手にあった。

谷ナオミの緋の服の下に、シユミーズはなかった。細いブラジャーが最後の一線のように、豊かな隆起をあふれさせ、申訳けのようにへばりついているに過ぎなかった。

ふるいつきたいような、この豊かな隆起に比して、その尖端の何とチツポケなことよ。乳首

は、膨れきった隆起の証明のようにかすかに桃色に染めて野いちごのようになっている。た。

乳量は円く膨れ上り、典型的な釣鐘型であった。何たる見事なオッパイ——。私はしばし暴力の手を止めて、その処女の象徴に見入っていた。思い出したようにナオミは暴れ出した。或いはそれはプレイへの催促であったかも知れない。美貌は一瞬にして刻々と様相を変え、激しく喘ぐそのあとに、唇を噛む悲愴さが走り、つと見るや、一変して哀調切々たる叫喚の顔に変貌した。表情の余りの豊かさは一驚しつつ、私は緊縛のプレイの方法を咄嗟に考えていた。

双肌をぬがせ、両手をしばらく上げると、素早く縄は、彼女の両手首に犇々と噛んでいった。呀ッ、呀ッと絶え間なくうめき、ナオミは喘いだ。柔肌の優美なる線が、丸味を帯びて拡がり、やがてくびれて狭くなってゆく。その彼方に、コリコリと堅くふくれた双つの球形があった。色白な、すらりとした両脚が双球から惜しげもなく伸びて、バタバタと宙にのたうっている。まるで素晴らしい彫刻のように、しなやかに伸びたその先に細い踵があった。足指がピクピクとうごめくのを見つ

めて、私はいきなり両足首を両手の縄に
いで締めていった。逆海老となって彼女は
けぞり、アアと叫んだ。

私は鬼六氏の方にチラリと眼をやる。のま
れたように彼は身じろぎもせず、私達のプレ
イを凝視している。鞭打ちの衝動がジーンと
体中をつき抜けた刹那、知らず知らず私の手
は、腰のズボンのバンドを抜きとっていた。

私は一度バンドをしごく。昨夜と同じポー
ズの、そして同じようなバンドの鞭打ちが始
まろうとしている。意識せずして、余りにも
同じコースを走りつづけていた私は、瞬間、
フト辰巳典子の幻影を谷ナオミの悦虐の肢態
の中にみた。

革バンドによる鞭打ちという行為を、彼女
は許容するだろうか、激しい不安にかられ
ながらも、いきりたったSの欲望は、もう私
自身の力ではとめようもなかった。

振り上げた革バンドが、発止と真白な球形
に潑ねる。

「アッ、ウーッ」

ガバとナオミは身をのけぞらす。演技でな
い苦悶の呻きが、赤い唇からほとばしる。

臀部から背中、ふくよかな腿へと、革バン
ドの鞭は、容赦なく微かな条痕を残しながら

走った。

恐怖と苦痛を伴った甘い絶叫が、革バンド
の振りおろされるたび毎に、彼女の口からつ
んざくように洩れた。

柔肌のあちこちが薄赤く染まり、縛られた
両手足は、痛々しく引きつっていた。ハッと
吾に還って、バンドを投げ出すと、ナオミの
肌を愛撫するように、そっと撫でさすってい
た。ぐったりとたたみに打ち伏して彼女は太
きく肩で息をしている。さりげなくその頬に
そっと唇を押しあてた時、甘いかぐわしい、
えもいわれぬ体臭と共に、陶醉に似たうめき
が、ナオミの唇から微かに洩れたのを、私は
聞き逃さなかった。

「御免なさい、痛かった？」

悪夢からさめたように私はきく。

「ウウン……」

乱れた髪が頬にかかり、彼女はうるんだ瞳
をあげて首を横に振ると、ニッと笑った。男
心をとろかさずにはおかないその笑顔――。

「本当に？」

「ええ、この程度でしたら――」

柔肌は強靱なのだ。両手足を背後に縛り合
わされたまま、体を浮かせて甘えるようにい
った。

「まだまだ我慢できますわ。でも手首が少し
痛いんです。構いませんけど……」

五指は既に、白紫に変色しているにもかか
わらず、谷ナオミは申訳けないような口吻
で、遠慮がちにそういった。熱いかたまりが
ぐっと私の胸にこみ上げてきた。

× × ×

すべてとした、陶磁のような柔肌は、私
の眼には余りにも眩しかった。今、自からの
手で、すべてを脱ぎ捨てた谷ナオミは、パン
ティ一枚きりの、ポリウムにみち溢れた見
事な裸身を誇示するかのよう、両手でこぼ
れそうな胸のふくらみを押さえて、部屋の片
隅で屹立して私の手を待っていた。

ヴィナスさながらの、輝やく許りの裸像が
微かに身震いし乍ら、スポットに妖しくもな
まめかしく照らし出されていた。

遠くからビデオカメラを操作していた賀山
社長も、遂にビデオを捨ててカメラの放列に
加わってきた。遠くから眺めるには、余りに
も勿体ない気がしたのであろう。彼女の一挙
一動を逃すまいと、彼女が少し体を動かして
ポーズを変えると、もう見境いもなく、前触
れもなく、矢鱈に彼のストロボは発光した。
より一枚でも多く、フィルムに刻みこんでお

きたいという彼の欲望は何も彼一人のことではなく、それは私にもいえることであった。

いつしか団鬼六氏も体を乗り出してきて、カメラを構える私の背後まで迫っていた。

三人の真剣な表情に、彼女は一寸照れた。

「あのう、こんなポーズだけでいいんでしょうか」

ピンク映画の濡れ場シーンに馴れた彼女にとって、これは余りにも初歩的なポーズだと彼女自身、考えたに違いない。

「いやいや、又縛りますよ。だがナオミちゃん、あまりの美しさに御兩人、参っているんだよ」と鬼六先生、私達の頭を冷すようにいった。この美女をこれからどう料理しようかと、三人のSプレイボーイは、可愛いししなやかな女獣めがけて、一斉に牙をといでいるのであった。恐らく銘々の胸に、銘々のプレイの構想が去来しているに違いなかった。

谷ナオミは、こうした私達に囲まれて、恬淡とした態度で、さりげないポーズをとっていた。

谷ナオミは私の縄捌きを、眼を落して丹念に観察している様であった。

「どこか痛い？」

「いいえ、ちっとも……でも、早いですのねえ。まるでこうした縛り方の順序がきまってもいるようですわ」

私は苦笑する。一番手馴れた、過去何十人かの女性に試みて来た緊縛だけに、彼女の眼からみても手際がよかったのであろう。

立ったポーズ、横ずわりのポーズと、私の指示通り、彼女はためらいなく思いの尽に動いてくれた。カメラを構えた瞬間、間髪を入れず彼女の表情は苦悶に変化し、半ば唇を開いて喘ぐようにした。緊縛に苦悶はつきものという観念が、彼女は願わなくともちゃんと心得ている様であった。苦悶と共に彼女の端麗な美貌は影を潜めてしまう。私にはそれが惜しかった。つい言わずもがなのことをいつてしまった。

「あのう、表情はその儘で構いませんよ。何だか気の毒みたいで」

「あらッ、私は又、こんなフोटだから、そうしないといけないのかと思って……」

「本当は有難いのですけど、折角の可愛い綺麗なお顔が消えますので。まさか笑いも出

来ませんけど、憂いにみちたといった表情で結構です」

何と素晴らしい人だろう。私の要請がすぐさま表情に出て、彼女は憂愁に閉ざされ、哀調を帯びた表情を見事に現わしていた。

凡ゆる角度から一通り撮り終ると、直ちに休む間もなく、緊縛の構図を変えることにする。先刻から私一人、彼女を縛っている。

「社長どうです、一度やりませんか？」

「と、とんでもない。辻村さんがなさってたんじゃ、私など、到底出る幕がありませんよ。どうぞどうぞ」

「鬼六先生、如何です？」

「さっきから、あまり縛り方が鮮やかなのでポカンと見とれているんですよ。まあ、最後にでも一寸やらせて貰いますかな」

こんな二人の返事。そこで又しても私の緊縛が始まる。

私は太縄で、胸から、腰、腹を縛って、彼女の両手を背後で縛り終ると、更に一本の縄を首にかけ、縄をよじり乍ら、立縄をかけていつて股に通して手首で一緒に縛り合わす。パンティはぎりぎり一杯まで下げていった。「あのう、辻村さん（彼女はここで始めて私の名を口にした）のお仕事は何をなさってい

首縄をかけて、胸で菱型に縛る定石的な緊縛のポーズであるが、私の手は彼女の肌とにかくに触れて、素早く動いていた。

「らっしやいますの？」

私に縛られながら、彼女は小声で訊ねた。鬼六氏や賀山社長が、この場では私に一応敬意を表しているの、この男、果して一体何者だろうかという疑問を抱いたのである。彼女にとっては私の正体が、さっぱり掴めなかったに違いない。

私は鬼六氏から、彼女には余り判つきりと目的を云わない方がいいと、事前にいわれていた。それは彼の配慮として、カメラ・ハントという言葉に、或いは警戒するかも知れないという気持が籠められていたのだと思う。

まさか縛り屋というようなショーバイがあるわけでもなし、といって奇クのカメラ・ハントのことを打明けるのも鬼六氏に悪いし、いずれ彼女のハントが発表された時、鬼六氏自身が私の口から彼女に伝えますよといった言葉を想い出して、彼に転嫁する事にした。彼が何とかうまく言ってくれるだろう。しかし彼女が、私を一体どのような人間に思っているかには興味があつた。彼女のお臍の辺りで縄をねじり乍ら、



「ナオミちゃんからみて、私、どんな人間に見える？」

と反問する。

「映画の御関係？」

「いいえ」

「私たちの出ている映画よく見ていらっしやるし、それにお精わしいし……」

「それは、好きだからさ、あんな映画」

流石にエッチねえとはいわなかった。彼女等のお客様なのだから。

「団先生のように、シナリオ書いていらっしやるの？」

「全然——」

「わかりませんわ。小説？」

「に近いものをね」

「私、近頃忙がしくって、余り読む機会ありませんけど、有名な方ですの？」

弱ったなこりゃ。有名どころか無名に近い存在である。まあ、奇クの読者の方や、同好の人なら少しは知っていてくれるだろうが。

股縄を引き絞って、手首の縄とつなぎ乍ら「こんなことを、やる方では一寸ね」

「まあ」

彼女は、結局要領を得ない顔付で口を閉じた。私という人間が、段々不思議な、謎めいた人間に見えてきたのであろう。

見事としか言いようのない、みずみずしいオッパイが、ポツカリと飛び出している。しやぶりつきたいような気持にかられているのは、あながち私一人ではあるまい。男なら、誰しも、この見事なオッパイに魅力を感じぬ者はなかったであらう。こんな素晴らしい女性を心おきなく縛れる果報をつくづく噛みしめていた。強くひきつめて、リボンで止めていた黒髪が、先程の暴力シーンでゆるみ、おくれ毛のはつれが首筋に垂れて、それが又ナオミを一入、妖艶にみせた。

私はもう、二人が傍らにおける事も忘れ果てて、この絶世の美女の緊縛のフォトを撮るこ

とに没入していった。いろいろのポーズを要求しても、彼女はハイと素直にうなずいて、一度で私の氣に入るような姿勢をつくってくれた。もう演技の表情はとらず、極く自然な緊縛に対する軽い苦痛の表情が、微かに彼女の容貌を変えているのみであった。

横転させれば、たたみに縄目の皮膚が擦れて、皮膚に深々と縄は喰込んでいたが、彼女はいとも神妙に黒い眸を上げらせて、私を凝視していた。

近々とクローズアップを撮り終り、やっと縄を解きにかかる。縄目の跡が真白い柔肌にくっきりと淡紅色となつて残っていた。



「一度、休みますか」

「ええ、有難う。でも、私どちらでも構いませんわ」

遠慮深げに応えて、彼女は裸の胸を抱えてうずくまった。

「まあ、熱いお茶でものんで下さい」

社長が湯呑みに、湯気の立つお茶を漉れて運んで来た。

「本当にいい体ですね。といって肥えてもおらず申し分ないですね」

「私、これで随分食事の方に氣を使っているんですのよ。なるべく、お野菜をいただくようにして、肥らないよう心掛けていますの

の。一寸油断すると、すぐ二、三キロふえちゃうんです。大変ですわ」
「美容体操なんかなさるの？」

「ええ、おうちへ帰った時など、いつもやるんですけど、ロケやお仕事の忙がしい時は、なまけちゃうんですのよ」

「こんな、縛られたフोटとるなんてこと始めて

でしょうね」

「映画でなら度々ありますが、フोटだけというのは始めてです。ヌード程度ならよくありますけど」

「どう思いました、私の縛り？」

「どうって？ そうですわね、縛るっていうのも、人によって随分縛り方が違うって事ですね。私の場合、映画許りですから、やはり演技を要求されます。相当きついようみえても、そうでない時もありますし、一寸みますと簡単な、何でもない平凡な縛り方なのに、腕がねじれていたり、手首がしびれたり、とても痛く感じる時もあります。時代ものなんか随分太い縄を使いますが、細いのに比べて反って痛くないんです。辻村さんの縛り方は、何ていうか、見た眼にはかなり沢山縄を使って、いろいろと工夫して縛ってありますが、案外痛くありません。解く時がとても早いのは、矢張りコツがあるんでしょうか」

彼女は緊縛に対して、かなり鋭い觀察をしていた。この娘なら、もしもこれから先も映画なんかで縛られる時、縛り方について、私の緊縛の方法なんかを縛る人にアドバイスするかも知れないと思った。

「辻村さん、時間も大分遅いようですから、

ここらでもう少し、パッパッとやって、彼女を早く解放させたらどうですか？」

鬼六氏が、チラリと腕時計に眼をやって私に声をかけた。あわてて時計をみると午後十一時を少し廻っている。なる程彼の云う通りだ。余りにも楽しい雰囲気にはたっていて時間の観念をすっかり失なっていたようだ。時間を気にするようなところを、気振りにも見せない彼女の態度は、立派としかいいようがなかった。

私はナオミに近づく。

「これが最後だから、脱いでくれる？」

頼むように言うと、彼女は一寸頬を染めたが、あっさり軽くなずいた。さっと立ち上ると、襦袢の死角で、パンティを脱ぐ気配がした。一糸纏わぬ谷ナオミの、盛り上った球形が二つ。深い谷間の曲線を描いて私の眼前にあった。彼女は私に背を向けて、顔だけが半面、私をみつめて、次の行為を待っているようであった。

「辻村さん、あっさりしたのを、ひとつやって下さいよ」

鬼六氏の声がかかる。熱海でもそうであったが、彼は緊縛のゴテゴテしたのよりも、処女の羞恥の極限を、露わに裸に現わしている

方を好んだ。私は緊縛の究極を希み、彼は縛りという形式による、女の羞恥の媚態を希んでいるようであった。

「辻村さん、猿轡これでどうでしょう」

社長が黒いなめし革の、箆口具を持ち出して来た。口に当る個所に、黒革の茄子型の挿入球がついている。私は裸身の彼女の前へ廻った。彼女は、両手を合わせて下腹部を押さえていた。その押さえた下腹部のところで、私は手首を交叉させて簡単に前で縛る。

箆口具をとり上げ、社長がハントした数十人とも知れぬ女性の唾液の泌み込んだ、茄子型球形を、私はナオミの口中へぐいと挿入する。一瞬、彼女は眉をしかめたが、あきらめた様にくわえ、のどの奥深くそれは押し込まれていった。髪の毛をかき上げて、首筋で尾錠を止める。

縄尻を握って、ぐいと強く引きよせると、彼女の裸身は弧を描いてよろめき、必死に両手首に力を入れて蔽いながら、二、三步よたよたと前のめりに歩いた。力が籠ったのか、細かな慄動と共に、みずみずしく張切った乳房は震え、柔肌のなめらかな体は、縄を引く私の手に軽い抵抗を伝えた。

快楽はのどもとまでかけ上り、私はもっと

開放的な情景をのぞんだ。

何か彼女の眼ざしが私に訴えるようにまたいた。

「どうしたの？」

「……………」

猿轡で言葉にならない。私は素早く箆口具を外す。大きい吐息が、甘い口腔の匂いと共に彼女の唇から吹き上げ、私の頬を温かくかすめる。

「かたまりが大き過ぎて、少し息苦しいんです」

「御免なさいね、もうしないから」

「口を蔽うだけなら、もっと強くしめられても平気なんですけど、口の中へ押し込まれると弱いすわ」

彼女は、やれやれという表情になった。

「じゃあ、次は後手だ」

私は二の腕をかなり強くしめ上げると、振り仰ぎ、カーテンレールに縄を通して、両手を縛り高々と挙げさせた。

全裸の正面を、私達三人の正面に向けかねて、彼女は腰を歪め、苦しい曲線を描いて吊り下げられた後手の痛みをやわらげようと努力していた。閃光は走り、社長はあわてて、ビデオに駆けよる。剥き出しの、汚れのか

らもとどめぬ、清らかな純白の聖女の裸像さながらの臀部に、私の熱い眼は走った。豊かに成熟した双つの丘は、私のバンドの洗礼を受けるのを待つかのように、これみよがしに突き出されていた。カメラを投げ出すと、私の手はいつしか、ズボンのバンドを引き抜いていた。

さっと一振りすると、パシリと小気味よい音が、さわやかに響き渡る。あっとのけぞって、彼女は唇を噛む。更に一閃——。まるで打ってくれと云わん許りに、めくるめくような、熟れ切った球形は、私の欲情を煽るかのように、けたたましく揺れていた。嬌声に似た悲鳴が、私のバンドの落下と共に、部屋の空気をなまめかしく波立たせていった。

× × ×

首から胸、二の腕、腹から太腿へ。股縛りの縄の残りが膝から胫まで、犇々と彼女の裸身を締めつけている。全身緊縛のきびしい構図で、彼女はかろうじて立っていた。これが最後というプレイが、私の緊縛を、このようなものにしてしまったのだ。彼女は折々は眉をしかめ乍らも、私の縛るがままに佇立していた。私の縄持つ手が、彼女の股の辺りを這って、もう観念したように、あらがわな

った。ゆたかな臀部のここかしこが赤く染まっている。私のバンドのきびしさを物語るかの様に——。

「どこか痛い？」

彼女は黙って首を振る。私の体内の血は、情熱のたかぶりでたぎりにたぎっていた。踵で重心をとらせて、じりじりと一廻転する間私のフィルムは容赦なく、十数枚も流れていた。やや悲しげな視線が、私の心に針とささった。しかし彼女は、この緊縛に対して、一言も抗議しなかった。易々として私の言うが俚に動いていた。何という素直な愛らしき童女であろうか。ピンク映画で数々の媚態や痴情のシーンをみせる彼女が、まるで嘘のようであった。清浄無垢な乙女そのものであった。その清浄さや、無垢さや汚れのなさ、ポチリとついたサクランボのような薄桃色のオッパイの先が何よりの証明であった。

私は彼女の体を抱きかかえるようにして、そっと横倒しにする。否応なくゴムマリのよくなフワフワした柔肌が、私の指先に喰い込む。ぐるぐると横転させて凡ゆる部分をとって行く。横転の度に、縄目のどこかがきしむのか、演技でない苦悶の喘ぎが微かにピンクの唇から洩れた。髪を飾ったリボンはいつの

間にかケン飛んで、背まで届く、豊かな黒髪は横転、反転につれて乱れて流れた。白い指先の五指が宙にもがいて激しく屈折する。

彼女の映画『女体惨虐図』が、その俚、ここにあった。正しく題名通りのことが、この部屋で延々と行われているのだ。

私の心は猛りに猛り、逸りに逸る。この円くなだらかな曲線を描く肩肉に、ガブリと歯を立ててみたい欲望にすらかられてくる。私の過去にもこんなにも私の心を疼かせる女体は、かつてなかった。いつも理性に負けて、ほどほどで止めてしまう私が、更に強烈なものを求めて荒れ狂おうとしているのだ。

うつ伏せになった彼女の体重のおもみで、あの見事なオッパイは、正月の飾り餅のように、丸く平べったく押しつぶされて、タタミの上でくねくねとこねられていた。

股縄の辺りに、残りの短い一本を繋ぎ、私は彼女の両脚首を持ち上げて縛りつける。身動きの出来なくなった彼女の黒髪を一束にして握むと、ぐいと顔を持ち上げる。

「アッ、アッ、アッ」

苦悶が長く伸び、彼女は体を海老にそらせた。その髪を掴んで私は右に移動する。くりくりと乳房はもまれて、タタミにこすりつけ

られ、身動きならぬ女体はうごめいて蠢動しながら、徐々に位置をずらして行く。

私の感激は、今や絶頂に達していた。この場で、突然心臓麻痺が起って、ポクリと逝っても、更に悔いがない思いが、灼熱の情念のほとばしりとなって、私の胸の疼きを高まらせていった。

黒髪を握った手を離して、私はドカリと、彼女の体の近くへ坐り込む。鬼六氏や社長の存在は眼中になかった。

私はそっと、ナオミの鼻をつまんでみる。耳たぶを引っ張ってみる。いたぶる動作が、余儀ない私の愛情の極限の発露の、精一杯の接触であった。

私は冷めたくなくて、白紫色に変わった彼女の後手の指を、自分の指に絡ませた。眼は眸と喰込む股縄の、その谷間に熱くそそがれていた。指を強く握ると、握り返す反応があった。その反応は何を意味するのだろうか。

彼女の想いが指に反応して、私に何を訴えようとしているのだろうか。

責めさいなみ、いじめ尽した感懐が、私の心をほのぼのと温い飽和状態に陥し入れていった。

握った指を離して、足首の縄をとくと私は

そっと彼女を抱きかかえて起す。壁に向って佇立した彼女の、緊縛をするすると解きほぐして行く。

プレイは終わった。みちたりた想いがしみじみと心の底まで泌み渡っていった。数分前の嵐のような欲情が嘘のようであつた。

「随分長い間縛ったままで、本当に御免なさいね」

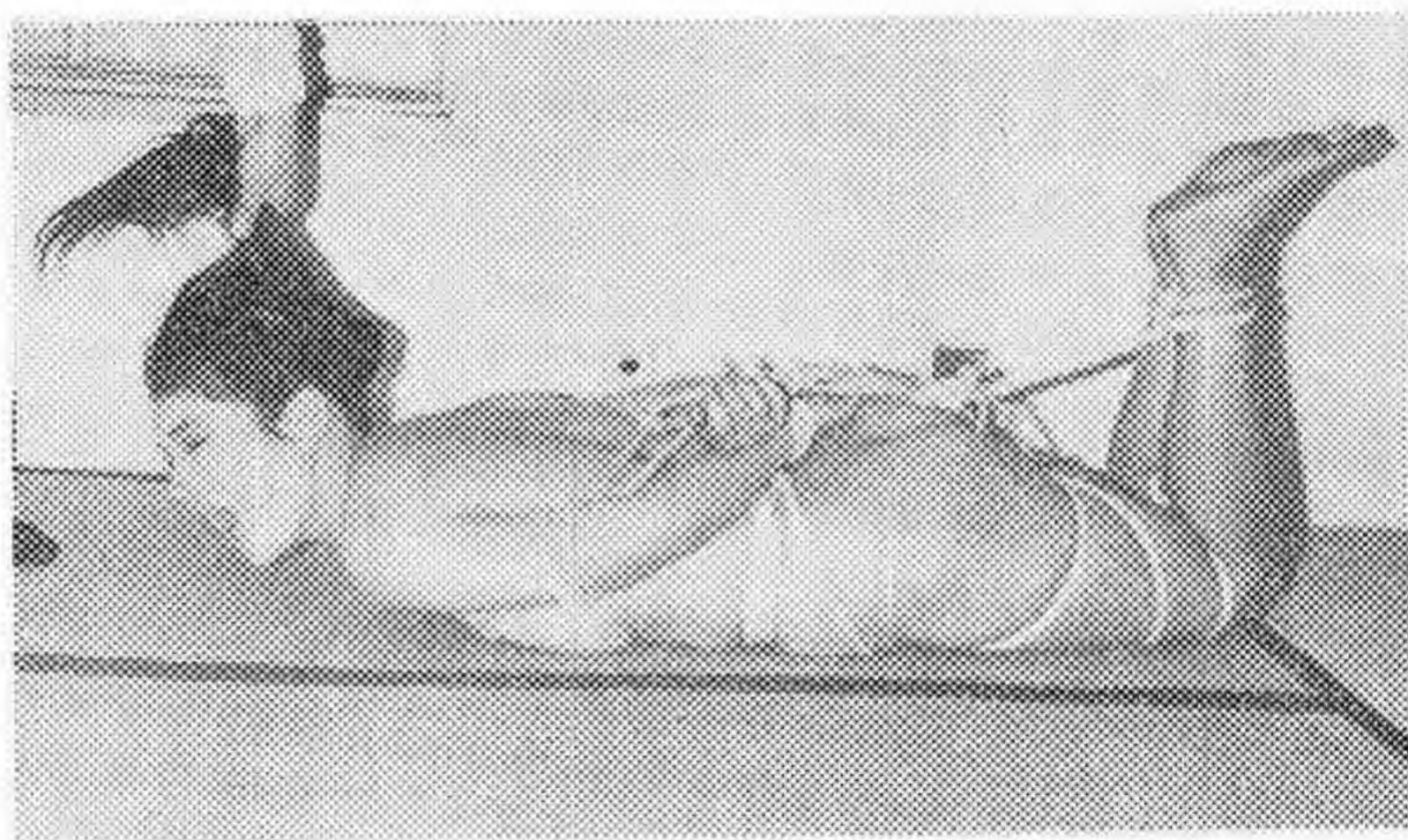
「いいえ、構わないんです。さして痛くありませんもの。もうこれでいいんですの？」

彼女は、なまめいた笑みを泛べた。

「ああ、やめましょう。お風呂わいてるそうです。お入りになりますか？」

「そうですか。では入れていただきますわ。どうもお疲れさま」

彼女は軽い会釈をして、スタスタと素裸の俣で、大手を振って天真ランマンなスタイル



でバスに消えた。私は呆然とした眼ざしで、その後ろ姿を見送る。ハントしたモデルも沢山あるが「お疲れさま」といわれた記憶は余りない。ビジネスと割切れればそれ迄としても、映画の場合、いつも口をついて出る言葉が、こんな場合でも咄嗟に、彼女にそう云わしめたのであろうか。

彼女の本来はMでないとしても、この数々の緊縛と鞭打ちに堪え、しかもフト洩らした刹那の悦虐の、歓喜の呻きは、彼女の心の奥底深くねむる、被虐の欲びをチラと覗かせたのではなからうか。過去の数々のリンチや責め、緊縛のシーンが度重なって行くうち、いつしか彼女自身気付かない、M的な陶醉が、そっと頭を拾っていたとしても不思議ではなかった。

プレイという言葉だけでは割切れない、微妙な心理が、しらずしらず彼女に働いていたとしても、それは彼女の、知らないところである。環境や周囲や又、私のような者の出現

が、彼女をM傾向へと走らせてゆく、大きな一つの原動力となっているのかも知れなかった。

バスから上って来た、桜色に染まった、湯気のホカホカ立つ彼女をソファに坐らせ、私達三人は順番に、裸身の彼女と記念撮影をした。アルカイクな微笑みが流れる、さながら天使のような美女と、こうして次々フォトをとること自体が、私達かなりそれぞれ、その道で馴れている筈の者にとって、これは珍しい現象であった。

完全に私達三人は、彼女にイカレてしまったといつてよい。左程に美貌は一段と際立ち桃色に染まった裸身は、美の権化の様に光り輝やいてみえた。

何かにとり憑かれていたのが、急にオチたように、私は放心状態にあった。

カメラも、縄も散乱した俛で、私はボンヤリとピースをくゆらせていた。鬼六氏が一番しっかりしているようであった。賀山社長も巨軀をソファにうずめて、ボンヤリと谷ナオミの横顔にみとれていた。

四人四様の短いひとときが経っていった。謂わば張りに張りつめた弓づるがプツンと切れた、それに似た状態であった。

「ナオミちゃん、もう帰る？」

鬼六氏が呟くようにきく。

「そうね、そろそろ……」

「じゃあ、私の車で送りましょう」

さっと社長が間髪を入れず言った。

彼女は既に身支度を整え終っていた。

「先生がた、どうなさいます？」

「うん、そうだな。辻村さん、もう一度六本木辺りまで出てみませんか、東京の最後の夜だから、一寸一風変わったスナックバーへ御案内しますよ。ナオミちゃんも少しつき合ったらどう？」

「ええ、それもいいですね。すっかり昂奮しちゃって、とてもこの俛じゃ眠れそうもありませんからね。じゃあ、社長の車で廻っていただきますしうか」

時計をのぞくと、午前零時を少し廻っている。あわてて、私は片付け始めた。

× × ×

六本木の、団鬼六氏の顔のきく穴倉スナックバー（ラ・ラグニディア）の、あなぐらの奥の片隅で、ボソボソ喋べる三人の男――。

団鬼六、芳野眉美、それに私の三人。三人三様に、銘々の想いに深沈して、話す言葉に力はなかった。

鼎談として、特筆すべきような三人の集いも、その弾まぬ話の原因は、あの谷ナオミにあったのだった。

「どう、よかったでしょ」と鬼六氏。

「シヨック、シヨック。もう快樂の極限ですよ」と私。

「ああ、お羨ましいことで」と眉美さん。

かねて芳野眉美に、鬼六氏の紹介を頼まれていた私は、上京を機会に三人で会いたく思っていた。それが、こんな慌しい合間になってしまったのだった。

マンションを出る時、芳野眉美のバーに電話して、彼に客の残りをおっぴり出して、急拠かけつけてもらったのである。鬼六先生の紹介もあったが、彼にひと目、谷ナオミの素晴らしい素顔を見せたかったのだった。私の念願は果せたが、それは実に慌しい、ほんのひとときであった。

時間を気にしていた彼女は、真赤なセーターの普段着姿の彼が、息せき切ってかけつけてくると、半時間足らずで、賀山社長の車で去っていった。

反芻するように、あの時の別れの光景が、歴々と臉に浮んでくる。

近くの路上に停めてある賀山氏の外車のそ

ばまで、私達はぞろぞろと、彼女を送って出ていった。

六本木の夜は更けて、夜風は肌に冷めたく人通りもう流石に疎らであった。酔っ払いが二人、ふらふらと近づくと、「おらは死んじまったぞ、おらは酔っ払ったぞ」と怪しげな声で近頃流行りのヘンな歌を唄い乍ら、彼

女のおでやかな姿をジロジロと見廻し、振り返りながら、散漫とした足どりで通り過ぎていった。

体の中をジーンと突きぬける様な佗しき、淋しさが先に立って、あの時の欲こびの快樂に対する感謝の表現は、何も出来そうになかった。

☆誌上読者コンテスト☆美人モデル募集

賞金

一、第一席	五万円	若干名
一、第二席	参万円	若干名
一、第三席	貳万円	若干名
一、第四席	壹万円	若干名
一、第五席	五千元	若干名

要項

一、参加者は、本誌を愛読しておられる女性の方でしたら、学歴、年齢、未婚既婚の

別は問いません。奮て御応募下さい。

一、写真選衡にパスした応募者の方全員に對して一名につき金壹万円の賞を呈し、更にその際撮影した写真を誌上に発表し、読者コンテストの投票の結果、第一席より第五席まで標記の賞金を進呈いたします。

一、応募者は、略歴に身長、体重、胸囲の概略を記載の上、手札型写真を同封してお申込み下さい。選外の際は一件書類は、返却いたします。

一、写真並に書類にて選衡にパスした方には賞金壹万円を贈呈の上、コンテストに発表の写真撮影し、コンテストの結果は追って御通知いたします。

一、写真撮影のための旅費などの費用一切は本誌にて負担いたします。

一、モデル・コンテストに對する読者の投票については、いづれ誌上に発表します。

一、締切は昭和四十三年五月末。
一、本誌八月号誌上より漸次発表の予定。

「どうも辻村さん、有難うございました」
車の傍らで、彼女はつましく頭を深く下げた。礼をいうのはこちらの方であるのに。

「ナオミちゃん、本当に何といったらいいか恐らく今夜の想い出は、一生忘れないでしょう。もう会える機会もないと思いますが、関西へ来られたら、是非電話して下さいね。所詮は『高嶺の花』のナオミちゃんと、こんなに愉しい一夜を過し、しかもあの様なプレイが出来るとは、夢にも思いませんでしたよ。本当に有難う。しっかり頑張ってくださいね」

「ええ、辻村さんもお元気で……。じゃあ」
親愛の情を籠めて、彼女はしなやかな片手をそっと差出した。

万斛の想いを籠めて、私はその手をかたく握りしめる。ふんわりと真綿のように柔い指が私の手のうちでとけてしまいくさである。この手からつながる、あの肌、あの隆起、あの球形。すべてが夢の又夢のようであった。助手席にのり込むと、窓を開いて、一杯の微笑みを泛べて彼女は手を振った。

私はその手に、わが手をさしのべ乍ら、谷ナオミの女体の映像を、しっかりと脳裡に焼きつけていた。彼女に幸せあれ！



読物紹介 倒錯人間の世界

丸 鬼 土 佐 渡

旅館「二葉」で料理された女のこと、「週刊実話」「週刊文春」のいずれも一月二三日号に出ていた。

「実話」によれば、

「右首に深い刺し傷、また胸部にも左肺に達する刺し傷があった。しかし捜査員をぞっとさせたのは、それ以外のキズ跡だった。

顔は両眉の上を横に切られ、口は両わきが大きくパツクリと裂かれている。

胴体は首の下から下腹部まで真直ぐに切り裂かれ、腹は大きく開かれて緑色の腸がとび出すほど。左乳房はえぐり取られ、右乳房も下から三日月型に半分切りとられている。乳房の下を横に、またそれと並行して下腹部の

あたりにも横に走る切り口。さらに「女のもの」は刃物でグサグサに刺してあり、内部はえぐられている。

そのほか、大腿部には試し切りのような形で、多くの切りキズ、刺しキズがあり、全身では九十七カ所ものキズである。

さらに解剖のため腹の切りキズをさらに広げると、その中から、まるでリンゴのように赤く血で染った乳房が現われた。

また「文春」によれば

「ミゾオチからヘソの真下まで、一直線に十センチ以上の深さに切りさかれ、腸まで切れていた。それから腹を真横に、つまり十文字の形に切っている。

女の身長は一六〇センチ、小肥りしているからだつきだったが、そのみごとな乳房を、左だけエグリとっている。局部はナマスのようにきざんで、そのうえ半分ほどエグリとろうとしているし、眉や唇を切っているかと思うと、全身いたるところに、まるで刃物で落書きでもするみたいに傷つけている。」

被害者は豊倉和江(34)という女だった。

四二年十二月末に発刊になった荒地出版社の「性倒錯の世界」(著者はいずれも学者)を見ると腹を裂かれて腸がとびだしている婦人。下腹部をえぐられ全身無数の刺傷のある婦人。腕や腿をしぼられ、首に革紐をまきつけられて、身体のいたるところに暴行と刺傷の跡がある婦人等々の写真が出ていたが、その中に

「欧米では、日本よりも遥かに多彩、強烈、残酷、怪奇、陰惨で、思わず肌を粟をもよおすような犯罪がおびただしくあるが、日本にはその例を見つけ出すのに苦労するほど少ない。日本に残虐異常性犯罪はなぜ少ないかという説明には、日本人は食物が悪くて、精神的体力的なエネルギーに乏しく、しつこさがなく、何事によらず徹底してやれない傾向があるせいと、民族的にもまれていない(他民族を征服したり、同じ人間を奴隷としてこき使うなどの制度が殆ど発達しなかった)。更に欧米にくらべ、遥かに文化的先進国で、早

くから人間の凶暴性を矯め、温雅に飼いならす文化が発達したため」とある。

とすると今回の猟奇事件は、肉食をこのむ上流階級の、女中等をおいて、人を人と思わぬ教育をうけた、しかし、なりあがりのもので、教養のない人間の仕業だということになるのだろうか。どうも日本では例外的な事件のようだが、現代のメカニズムで人間性をやぶられ、不満が一度にこういう行動になった変質者のような気もして、日本の行く末が案じられる。

○
一月十八日大阪日日新聞に「ミス・グアテマラ惨殺・全裸で拷問のあと」という見出しで、グアテマラのテロのことがでていた。それによると

「なかでもマルチネス嬢(26)の殺され方は残虐そのもので、グアテマラ代表としてミス・ユニバースコンテストにも出場したことがある彼女は、極右団体から脅迫状を受けとった後、一月上旬、四人の身元不明の男たちに自宅から連れ去られ、十二日グアテマラ市南方五十キロのエスキントラ付近で、全裸死体となって発見された。遺体はメッタ打ちされ、拷問を受けたあとが、歴然としていた。彼女はかねがね左翼に同情的で、ゲリラ活動にも関係していたとのこと」

それにしても外国にはすごいのが沢山いる

ものだ。最近古本屋でみつけた、週刊話題の三九年六月号に「首吊りリンチを楽しむ赤毛の誘拐魔」というタイトルで、全裸で木に吊るされたミリアム嬢の無残な死体の現場写真がのっていた。

なお、このような異常性愛史は小説現代に大場正史氏が連続物で紹介している。

○
「All Man」一九六八年特別号には白人娘が黒人娘に縛られて、責められる写真が出ている。机に白人娘をのせ机の脚に娘の足首を縛りつけ、パンティ一枚にして乳房の上下をロープで縛り、両腕も胴にくっつけて縛る。そうしておいて、黒人娘が白人娘の金髪をつかんでおおむかせ、悶える顔を見ながら鞭打っている写真である。

もう一つ、椅子に脚を開けて、白人娘を縛り、両手も皮紐で夫々固定して、猿轡をかませ、乳房のあたりを尻打の道具で打ち据える黒人娘も、パンティ一枚で、白人娘は猿轡の下で悲鳴をあげ、鞭の洗礼からのがれようと身をよじっている写真がある。

○
二月二日号「土曜漫画」に、またゼロ次元のことが出ていた。全裸で妊産婦の出産場面を公開し、十五センチの赤い蠟燭を生み出す場面があることなど。

高級なところでは、やはり谷崎潤一郎の文学ではないかと思う。

中央公論社の「日本の文学(23)」の口絵「少年」は楠木清方の筆で、ももわれに着物姿の娘が後手に縛られ、猿轡をされて欄干にくくりつけられて、白足袋をはいた足が露わになっている場面が描かれているし、収載されている谷崎文学「少年」の中には、格調高い筆運びによって、幾多のサド・マゾ的な描写がなされている。

光子という美しい娘が、縛られ、折檻されることを悦び、数々のいたづらを受け、マゾの境地に遊ぶのであるが、意外などんでん返しをみせ、それまでとはまるで逆に、いじめられていた光子が、傲慢であった信一、仙吉の両少年を奴隷同様に扱い始め、遂にサド的な女王となるという物語りなのである。

しかし、マゾ性の相当進行していたと考えられる光子が、突然のようにサド的になってしまった谷崎氏の創作に筆者は多少、矛盾があるようにも思う。それとも一般にいわれるようにサドとマゾはウラハラの関係にあり、マゾ人間がサド人間に豹変するのもかも知れない。だが、体験的にいって、サド人間がマゾ化するとは背けるのだが、マゾ人間、それも女性がサド化する……という点になると、無条件には溶けこみにくいのだ。諸賢のご意見を伺えたら有難いのだが……。

贗作イーリアス

(中篇)

黒 渕 嬰 一

旅順を守護する神々の陣容を見渡せば、
主神はヘルクレスを随えて白玉山に在り、
海正面を眺めれば、
西港なる太平洋第一艦隊の上に主女神。
黄金山を踏まえて青春女神。
老虎尾半島を脚下にして虹女神。
東正面本防禦線では東鶏冠山上に軍女神。
望台には従者の勝利女神。
西正面前堡の二〇三高地に坐す武神。

水師營上空で哨戒に任ずる商業神。
鳳凰山に前進して連絡を待つ曉女神。
剣山、太白山方面に進出待機する偵察兵は
北風神、南風神、東風神、西風神の四風神。
旅順西市街に蟠居する後方勤務員の神々は
農業女神と葡萄酒神。
旅順東市街には麗美女神と愛神の母子。併
し此の二神は守備兵の任務を果していない。
東港の船渠上には鍛冶工神。



居所を定めず各戦線を巡廻するのは従軍記者の歴史女神と叙事詩女神。
海洋女王、海王子、深淵神、閻魔女王は特別任務を帯びて玄界灘に行動中である。

六月十五日。ベゾブラゾフ中将の卒いるウ
ラジオストック艦隊は対馬海峡に出現した。
午前八時。門司より僅か四十浬の海上で和
泉丸が撃沈され、前線より復員中の後備輜重

兵を主とする百余名が捕虜になった。

続いて日本郵船の最優秀船常陸丸が遭難し、塔乗の近衛後備第一聯隊長須知中佐は軍旗を奉焼して自刃、将兵七百十二人、船員三十余人、馬三百二十頭が船と共に沈んだ。

更に、攻域砲兵司令部、鉄道提理部を載せた佐渡丸が魚雷二本を撃ち込まれた。併しロシア艦隊は沈没を確認せずに退去し、同船は半没状態で救助曳航された。

白玉山の下から悲痛な呻吟が漏れ聞える。逆海老に縛られ、黄金の鎖で全身を締め上げられた木花開耶姫が地底に埋められて悶え苦しむ声である。併し人間には聞えない。

西港の浜を見れば、革紐で縛られ、両足に重錘を付けられた天宇受女が泥中に立姿で首迄埋められ、満潮の度に海水を満喫しながら責苦に喘いでいる。だが次限の異なる人間界からは見えない。

六月十九日。

明治天皇は大山巖を宮中に召された。

「卿を満洲軍総司令官に任命する」

大山は辞退した。

「臣は参謀総長として国内に留まるべきであ

り総司令官には山県元帥が適任と存じます」

「山県は智謀過多。鋭敏且つ細心に過ぎる。各軍司令官が喜ぶまい。満洲には其方征け」
「それ程迄に仰せあるならお受け致します。併し大山は鈍物なるが故に総司令官に適する如く聞えますが」

「その通りである」

「恐れ入りました」

名君と名将が共に笑った。

明治の君臣、和やかなる事、斯くの如し。

高天原勢の配置は如何。

天照大神は猿田彦を伴い金州の上に在り。海を支配する須佐之男は大国主と須勢理姫を従えて旅順沖を間断なく巡察している。

大連上空に集り旅順を窺う神々は月読神、

武御雷神、邇邇芸尊、科戸神。

長山列島に待機する総予備隊は伊邪那岐、

思兼、豊受姫、石凝度姫。

櫛名田姫は大綿津見神と豊玉姫を連れて朝

鮮海峡方面を警戒している。

六月二十三日。ワイトゲフト提督は在旅順

の全艦隊を挙げ、ウラジオストックへ逃走する目的で出港した。既に損傷諸戦艦の修理も

終り、戦艦六隻、装甲巡洋艦一隻、巡洋艦四隻、駆逐艦十四隻が此の出撃に参加した。

東郷は戦艦四隻、装甲巡洋艦四隻其他を以て午前十時に出勤、旅順艦隊を追跡した。併し搜索不備で接敵したのは午後六時。夜闇の中に危く敵のウラジオストック逃走を許す処だった。だがワイトゲフトは短時間の砲戦で目的を放棄し、元の旅順口へ逆戻りした。

後ろ手に縛られた狩獵女神が曳出された。

左肩から腰迄を蔽う獣皮の短い胴着と編靴。

肩も腕も脚も惜し気なく露出し、菱縄は月光色の膚に緊しく喰い込んで首と胸を締め上げている。両足首には石凝度姫が入念に作った青銅の鎖。縄尻を把るのは美少女須勢理姫。

月読神「剣山を守る者は誰々ぞ」

狩獵女神「北風神、南風神、東風神、それに西風神でございます」

科戸神「オリムポスの風摩組だな。俺も風神

だが相手には少し物足りないぞ」

思兼神「四風の内、誰かが欠けると残りの者も全くの無能力者になると聞いて居ります」

六月二十三日。掃海と整備を終った大連港

に食糧、弾薬を積んだ輸送船が始めて入港し

第三軍に対する海路補給を確立した。

ロシア軍は此の重要な港を殆んど無傷で遺棄した。南山失陥に依り慌てて旅順へ逃走した為だが、此の堅牢な岩壁を爆破するに足る火薬は容易に入手出来るものではなかった。

月読神「オリムポスの風神達を追い散らせ」

逡巡芸尊、武御雷神、科戸神が進撃開始。

狩獵女神は足首も膝も縛られ猿轡を噛まされ縄尻を杭に繋がれて南山に留め置かれた。

第三軍司令官乃木は未だ二箇師団しか掌握せず、ステッセルは四万四千の陸軍、利用可能の水兵数千、召集可能の旅順市民多数を持ち、六月末ではロシア軍の方が優勢だった。にも拘らず乃木は断乎前進を命じた。

六月二十六日。歪頭山占領。此の山はロシア軍が抛れば大連を見下し、日本軍が登れば旅順を遠望する必争の要地である。

続いて老横山陥落。(剣山と改名された)

六月二十七日。太白山のロシア軍が逃走。

六月二十八日。大鉄匠山も無抵抗で放棄。

ロシア軍の損害二百十九名。

日本軍の死傷百五十名だった。

× × ×

主神「恥を知れ。戦わずに逃げるとは何事だッ。汝等それでもオリムポスの風神かッ」

北風神「申し訳ありません。でも敵は多勢で突然押し寄せて来たもので」

主神「余が蹴散してくれよう」

軍女神「父神は旅順をお守り下さいませ。わたしは参りましょう」

主神「愛い奴じゃ。余の側近を連れて行け」

主神は幾度も親征を号しながら未だ一度も実現していない。

× × ×

ロシア軍が逆襲を開始した。日本軍は未だ充分な兵力を展開し得ない。

七月二日。大鉄匠山が奪回された。続いて

太白山もロシア軍が取り戻した。

七月三日。ロシア軍は剣山を猛攻撃。

× × ×

科戸神「オリムポスの諸神は概ね敗退しました。軍女神だけが踏留まって戦っています」

× × ×

伊邪那岐「オリムポス随一の勇者だ」

七月五日。ロシア軍は剣山奪回を諦めた。

損失六百三十六名。日本軍の死傷二百五名。

× × ×

天照大神「東郷艦隊の状況は何うでしたか」

豊玉姫「極めて重大です。天から見下すのと近く寄って見るのでは大変な相違で、将兵は疲労し、戦意も注意力も低下しています。砲身は磨耗、艦底は汚損、機関も要修理。速力は低下し、精度は不安定となっています。旅順港内の敵艦は修理と整備を終り常時出撃可能。次回の交戦は勝敗不明です。その上にバルチック艦隊の東航があります。艦艇の入渠整備と乗員の訓練には二箇月が必要です」

天照大神「旅順攻略を任務とする乃木の責任は愈々重大です。皆で彼を守りましょう」

× × ×

七月四日。攻城砲兵司令部が大連に上陸。

七月十三日。後備第一旅団上陸展開完了。

七月十四日。第九師団宇品にて乗船開始。

七月十八日。後備第四旅団柳樹屯に上陸。

同日。乃木は第三軍に総進撃を発令した。

× × ×

主神「もう一度、敵の後方を攪乱して来い」

× × ×

海洋女王「心得ました」

七月二十一日。ウラジオストック艦隊は津軽海峡を通過した。

七月二十二日。九十九里浜沖に出現。

七月二十三日。東京湾附近で通商破壊。

× × ×

旅順を封鎖中の東郷は他を顧る隙が無い。

× × ×

七月二十五日深夜。第三軍前進を開始。

七月二十六日未明。曉霧を破る奇襲攻撃。

猛将乃木、一箇月の沈黙を破って行動開始するや其の勢は怒濤の如く、忽ち営城子、大鉄匠山を占領し、黄泥川を渡って太白山麓に迫る。併し太白山のロシヤ軍は頑強に抵抗。

七月二十七日。戦況発展せず。夜に入って第十一師団は「君が代」の喇叭を吹奏しつつ大夜襲を敢行、遂に太白山頂を奪取した。だがロシヤ軍は依然戦線を堅持して譲らず。

七月二十八日。コンドラテンコ少将がセミヨノフ大佐に逆襲を命じた。

乃木は司令部を営城子に進めて叱咤激励。遼東半島の狭隘な地型は迂廻も機動も許さない。日露両軍、勇気と体力を傾注して正面衝突を反復する。

× × ×

天界では軍女神アテナと月読神が火花を散らし、暁女神オーロラ、虹女神イリス、商業神ヘルメス、ヘルクレスの諸神が逡巡芸尊、武御雷神、科戸神等と激戦中。

× × ×

遂に、日本軍の決死隊が黄色火薬を装置してロシヤ軍陣地の掩蓋を爆破した。全線に動

揺が起り、鞍子嶺、老座山相次いで陥落。

遼東半島最後の防衛線を放棄したロシヤ軍

は旅順要塞に向って隊伍整然と退却。然り、正に文字通り「堂々と」。

日本軍の追撃砲火雨降する中を二伍縦隊で軍歌を斉唱しながら肅々と歩み去った。

日本軍の死傷二千八百三十六名。ロシヤ軍の損害千三百九十五名。大砲三門、機関銃九挺、小銃二百九挺を遺棄した。斯くてステッセルは遼東半島の土地悉くを喪失し、旅順要塞と周辺の小地域を残すのみとなった。

× × ×

虹女神イリス「敵の全軍が大挙進出して参ります」主神ゼウス「あの大激戦後に一日しか休まないで次期作戦を行える筈が無い。強行偵察だろう」虹女神イリス「いえ、確に本攻撃です」主神ゼウス「もう一度、見て来い」

× × ×

主神ゼウスと同じ誤算をステッセルも犯した。

彼は太白山方面の防衛に全兵力、全資材を注入した。旅順要塞東側を半月型に掩護する高地線の防禦強化はコンドラテンコ少将が夙に主張していた処だが太白山陥落当時は何等の工事も行われていなかった。前線から退却して来たロシヤ兵が配置に就くと同時に日本

軍が押し寄せた。ステッセルは乃木の攻撃が斯くも迅速だとは夢想もしていなかった。

千大山、鳳凰山、徐家屯等が見る間に陥落し、ロシヤ軍は旅順要塞内に遁入した。日本軍の死傷千二百五十八名。ロシヤ軍の死傷六百六十七名。旅順の城は東正面に於て大孤山と小孤山の二塁を残す他は全部の前衛陣地を失い、本防禦線を裸で露出する事になった。

× × ×

天照大神「諸神よ。御苦労でした。偵察結果の報告を聞かせて戴きましょう」

猿田彦「第一軍は榆樹林子及び様子嶺でロシヤ軍を破り、名將の聞え高いシベリヤ第三軍団長伯爵ケルレル中将は戦没した如くです」思兼神「第四軍は析木城で大勝しています」須勢理姫「第二軍は大石橋を占領しました」天照大神「日本軍の遼陽総攻撃が近いものと思われます。だが海上の状況は如何ですか」豊玉姫「旅順のロシヤ艦隊は石炭積込を急ぎ砲台に貸していた大砲を回収しています」天照大神「それは重大情報です。ウイトゲフトは間もなくウラジオストクに向け出港し旅順港外で東郷と大海戦を交えるでしょう」

× × ×

八月一日。バルチック海リバウ軍港に於て

太平洋第二艦隊所属艦の編成が完了した。
 八月六日。乃木軍は攻城砲陣地を完成。
 八月七日。第三軍が大孤山の攻撃を開始。
 八月八日。大連、徐家屯間の鉄道開通。
 同夜、大孤山が陥落した。海軍陸戦重砲隊は旅順港内の軍艦に間接射撃を浴びせる。
 八月九日。小孤山も陥ちた。此の日、戦艦



レトヴィサンは吃水線下に命中弾を受けて浸水七百噸の損害を生じた。

主神「ワイトゲフトが出勤するらしいぞ」
 主女神「ウラジオストック到着迄守ります」

旅順を退去したアレクセーフ大將はウラジオストックから旅順艦隊の出動を督促した。八月七日にはニコライ二世が勅令を以てウラジオストックに行くべく命じた。忠臣ワイトゲフトは承諾必謹、直ちに航準備。尤も旅順港内は乃木軍

の接近で既に安住の場ではなくなりつつあった。

須佐之男「姉神。敵が出動します」
 天照大神「大事な一戦です。わたしも参りましょう。今度こそ遁してはなりません」

八月十日。ワイトゲフト提督の旗艦ツエザレウイチを先頭にして大挙旅順を出動したロシア艦隊は戦艦六隻、巡洋艦四隻、駆逐艦八隻。別に病院船モンゴリヤ、総勢十九隻。若し此の艦隊がウラジオストック遁入に成功すれば封鎖は数倍困難なものとなるだろう。

全身を縛られて西港に首迄埋められているあめのうずめ天宇受女が眼を開いて港口を見た。此の姿勢で百日間縛られた尽である。人間の時間に換算すれば丸一日に等しい。不死の身体も相当弱っている筈だ。それでも観察を怠らない。
 — 旅順港内に残るのは修理未了のバヤーンと旧式、小型の弱艦だけだ。 —

午前六時半。東郷は三笠、朝日、富士、敷島の四戦艦を率いて会敵予想水域に急行。装甲巡洋艦四隻、巡洋艦三隻、駆逐艦十五隻が

各方面から集結しつつある。

黄海の決戦場へ急ぐ高天原の神々は天照大神を中心に、須佐之男神、大綿津見神、大国主神、猿田彦、須勢理姫。

旅順艦隊を守護するオリムポスの諸神は、主女神を総帥とし、息子の武神を先頭に立て虹女神、青春女神、暁女神、深淵神と続く。

ダリウやウエスコットの批評に依れば、此の日の東郷は「闘志を欠いていた」翌年五月の日本海海戦に於ける統帥が余りに傑出していた為に一層そのように思えるのかもしれない。確かに東郷は疲労していた。そして日本の全艦隊が疲れていた。人のみでなく艦も整備不良の連続使用で故障頻発の傾向にあった。併し艦隊運動を不活発ならしめた原因は他にある。それはバルチック艦隊の幻影だった。日本は主力艦の補充不可能。旅順艦隊を全滅させても味方の半数を失えば次の決戦で必ず敗れる。海軍が亡びたら満洲に出征中の陸軍は補給を断たれて衰滅の他はない。東郷は味方を損傷せずに勝つべく強制されていた。これでは奮迅迫撃を期待する方が無理だった。東郷は得意のα転回を行ってワイトゲフト

の前路を遮った。併しこれは主砲射程一杯の遠距離だったから何等の決定的影響も及ぼさず、無効果な長距離砲火の交換が延々四時間も続いた。(衆知の如く翌年五月の日本海海戦に於ける敵前転回は距離八千米で敢行されこれに続く主砲戦は三十分で勝敗決定した)

然も東郷はワイトゲフトの意図を察知出来なかった。六月二十三日の如く敵が旅順に逃げ戻って長期封鎖の継続となる事を恐れた。外洋遠く誘致し、旅順への帰路を断つのが東郷の目的だった。一方ワイトゲフトはウラジオストックへ逸出する機会を最初から狙っていた。両軍は完全に擦れ違い、東郷が気附いた時、ワイトゲフトは既に三万米彼方を遁走していた。

須佐之男「東郷が敵を通しそうだぞ」
天照大神「日没迄あと四時間しかない」
猿田彦「旅順艦隊は十四節で走っています」
大綿津見「日本戦艦は計画速力十八節だが今は整備不十分で十五節半しか出せません」
大国主「それでは七時迄追いつけないぞ」
須勢理姫「わたしが敵艦の速度を落します」
海の美少女は剣を咥え、レトヴィサンの舷側を目標に一跳躍して飛び込んだ。

「水線部に浸水。速度低下」
レトヴィサンに掲げられた信号を見てワイトゲフト提督は驚愕した。前日の被弾損傷部が原因不明の事故で破れ浸水が始まったのだ。

アレス 武神「東郷が追いついて来ます」
ヘーラー 主女神「勇敢な息子よ。東郷を狙いなさい」
アレス 武神「何うやって？」
ヘーラー 主女神「トロイ戦争の時、太陽神はパリスの放った矢をアキレスの踵に導いたでしょう」
アレス 武神「でも十二吋砲弾は質量も速度も矢とは比較になりません。運動エネルギー過大で制禦困難です」
ヘーラー 主女神「文句ばかり言わずに実行しなさい」

午後五時三十分。東郷の旗艦三笠はロシヤ艦隊の殿艦ポルタワの後方七千米に迫った。

須佐之男「東郷が敵艦を捕捉しました」
天照大神「あとは日本艦隊の砲術に期待しましょう。わたしは此処に立って日没後も残光が消えないよう雲を払っておきます。其方は下界へ降りて存分に戦いなさい」

ロシヤ艦隊主力は戦艦六隻。十二吋砲十六門、十吋砲八門。日本艦隊は戦艦四隻、装甲巡洋艦二隻を中核とし、十二吋砲十六門、十吋砲一門、八吋砲六門を持つ。隻数同じ。砲力又略々均等。勝敗の決定は訓練と勇氣あるのみ。

「東郷を倒せ」
アレス 武神が十二吋砲弾に飛び乗った。三笠を狙って弾道を導き、青春女神がこれに続く。

優速を利用して三笠はポルタワを抜き、セバストポリと並び、ペレスウエートに迫る。東郷の常用戦術たる隊主掩撃を逆用された形であり、敵弾は悉く三笠に向って集中した。彼我戦列の間隔は五千米。巨弾雨注の下、三笠は小転舵を繰返しつつ急追撃。最上艦橋の東郷はツエザレウイチを睨んで毅然と立つ。

「東郷が危い」
須佐之男神が子供達に突撃を命じた。
敏捷須勢理姫が直ちに武神へ体当り。勿論腕力は比較にならない。槍の柄で叩き落され海面へ転落した。だが十二吋砲弾は東郷を外れて艦橋下部に炸裂、殖田参謀等を倒した。

続く青春女神^{ヘーバ}には大国主神が斬りつける。これ亦、振り払われて転倒したが弾道乱れて艦橋左方に命中し、戦死四名、艦長以下六名負傷。弾片四散して最上艦橋を襲ったが東郷は微傷も負わなかった。

午後六時。三笠は遂にツエザレウイチと並航し、更に刻々と追い越しつつある。

須佐之男「傷を受けたのか。大丈夫か」

猿田彦「軽い向う傷です。東郷の前に立って弾片を受け止めてやった時に受けたもので、戦闘に支障ありません」

須佐之男「今度は此方が攻撃する番だ」

三笠の前部主砲が轟然と鳴る。十二吋砲弾二発に大国主神と須勢理姫が跨った。ツエザレウイチを目標に一直線。十拳^{とつか}之剣を抜き放った須佐之男が前駆して進路を掃蕩する。

武神^{アレク}が槍を構えて立ち塞がったが須佐之男は真向から斬り下げ、黄海の底へ叩き込んだ。

午後六時三十七分。日露両軍の戦史が期せずして共に「神の手に導かれた運命の一弾」と記す事件が突発した。

三笠より発射したと思われる十二吋砲弾一発がツエザレウイチの前橋根元に炸裂した。ウイトゲフト提督は全身飛散。鮮血に塗れた右脚と肩章の金モールのみが残った。

続く一弾が艦長以下の艦首脳を一掃した。

舵手は舵器を取舵に圧して悶死。死人に操舵されたツエザレウイチは肅々と左方に転回し始めた。後続艦はこれを知らず。二番艦レトヴィサンは直ちに旗艦の航跡を踏んで転舵。

然るにツエザレウイチの暴走更に止まず、遂に一回転して自軍戦列を横断し、為にロシヤ艦隊は大混乱。次席指揮官ウクトムスキー公爵は「我ニ続ケ」の信号を掲げんとしたが乗艦ペレスウエートは前橋も後橋も倒れて命令伝達的手段無し。此処ぞと東郷は接近猛撃。六隻のロシヤ戦艦は一束の薪の如く燃えた。

須勢理姫「父神様。敵が逃げて行きます」

須佐之男「追撃だ。残らず討ち果せ」

天照大神「日没です。深追いは慎まなければいけません」

黄海大海戦は終わった。併し両軍を通じ沈没した艦艇は一隻も無かった。これは翌年五月の日本海に於ける洋上殲滅戦と顕著な対照を

成すようだが当時の常識では黄海海戦の方が普通だった。装甲を有する軍艦は砲弾では沈まず、水雷で艦底を破壊する必要があると信じられていた。黄海海戦は主力艦隊の砲戦が日没直前で漸く勝敗決定し、夜間追撃した水雷戦隊は不活発で何の戦果も収めなかった。

ロシヤ艦隊の損害は寧ろ海戦後に生じた。大破したツエザレウイチと駆逐艦三隻は独領膠州湾に遁入して武装解除。駆逐艦レシテリヌイは芝罘で日本駆逐艦朝潮に捕獲され、駆逐艦二隻は英租借地威海衛で抑留、巡洋艦アスコリドと駆逐艦一隻は上海で清国政府に武装解除、巡洋艦ヂャナは遠くサイゴンに奔って仏官憲の為に抑留され乗員のみ帰国した。結局満身創痍の戦艦五隻と巡洋艦、駆逐艦、病院船各一隻が旅順口へ逃げ戻り、ウラジオストックに入り得た艦艇は一隻も無かった。

ノーウイクだけが行方不明だった。此の快速巡洋艦は太平洋から日本列島を迂回して宗谷海峡突破の機会を窺っていたが遂に対馬、笠置両艦に攻撃されて擱坐した。(同艦は戦後に日本側が浮揚し、鈴谷と改名した)

ヘルメス^{ヘルメス} × × ×
商業神「主女神様が発狂なさいました」
主神「心配するな。只のヒステリーだよ」

とした時間は全く与えられなかった。而してロシヤ軍は東正面本防禦線を最重要部分として築城していた。乃木は敢て此の正面に肉弾を擲げ打ち「迅速な攻略」を策した。

× × ×
科戸神が先ず挑戦した。北風神、南風神、東風神、西風神がこれに応じる。

大頂子山の上で彼我五風が渦を巻いた。

併し地中海四つの風のエネルギーを合しても東洋のモンスーンには及ばない。科戸神が一度風袋を開くとオリムポスの四風は忽ち吹き散らされた。北風神は翼を折られて重傷。他の三神も負傷して遁走する。

× × ×
八月十九日。第三軍五万七千六百六十五名が展開し、三百八十門の大砲が一斉に射撃開始。旅順を守るロシヤ軍は四万二千五百名。砲台、堡壘百九箇所。大小砲九百六十四門。砲弾の貯蔵は充分。直ちに全要塞が咆哮した。

× × ×
オリムポスの諸神が本防禦線に展開した。中央に主神と主女神。右翼に虹女神、ヘルクレス、暁女神、商業神を配し、左翼に青春女神、軍女神、勝利女神、閻魔女王を並べた後翼単梯陣。即ち鶴翼の備である。

× × ×
八月二十日。第一師団右翼は大頂子山を攻略、更に青石根山に迫る。併し左翼は竜眼北方堡壘で阻止された。日本軍砲兵は二日間の連続砲撃で漸く砲弾缺乏の色を呈し始めた。

× × ×
突撃配置に就いた高天原の神々は、老伊邪那岐を先頭とし、次に猿田彦と武御雷の強剛二神。第三列に天照大神、月読神、須佐之男神。第四列に邇邇芸尊、櫛名田姫、大国主神、須勢理姫を置く。密集尖角体形、即ち魚鱗の構えである。

× × ×
八月二十一日。乃木は馬を団山子北方高地に進めて全軍に総突撃を命じた。

× × ×
第九師団は盤竜山へ。
第十一師団は東鶏冠山へ。
榴霰弾の十字砲火を冒して壮烈果敢。突撃縦隊は各堡壘へ殺到する。

× × ×
主神が戦場一帯に雷電を投下した。ヘルクレスは強弓を把って急射撃。高天原勢は傷者続出して大苦戦。

× × ×
地雷の爆発。機関銃の掃射。

電氣鉄条網を破壊し、散兵壕を乗越え、無数の死傷者を顧みず、日本軍の突撃隊は堡壘直前に迫る。

× × ×
併しその前進は外壕の岸で止った。深さ七米。幅十二米。携帯梯子は届かない。壕底には尖った杭や釘を打った板が充満している。それでも決死の猛兵幾十幾百は飛び降りた。だが壕の中こそ死地だった。ロシヤ軍は壕の内壁に機関銃を据え、日本軍の突入を待っていた。対岸に登ろうとする将士は機関銃の掃射を受けて悉く撃ち落された。

× × ×
須佐之男神は臂に刺さった矢を抜き捨て、軍女神を目標に二竜山を駆け上る。
須勢理姫はP砲台上で勝利女神と接戦中。大国主神は盤竜山で虹女神と斬り結ぶ。櫛名田姫は主女神に向って突き掛った。

× × ×
昼間強襲に次ぐ大夜襲の反覆。併し堅塁は微動もしない。探照灯の光芒数十条。光弾幾百発。闇も白昼と交じり突撃隊は掃射された。

× × ×
主女神の槍が櫛名田姫の腰を刺した。実力の相違は如何とも為し難く、松樹山の谷へ転落し、背中を強打して起きられない。

「あれを搦めよ」

主女神ヘーラーが側近に命じた。商業神ヘルメスと閻魔女王ペルセフォネが駈け寄り、櫛名田姫を革紐で後ろ手に縛りあげ、陣営の内へ曳き込んだ。

× × ×

八月二十二日の朝が来た。夜襲成功せず、各堡壘前面は黒色軍服の死屍山積。日章旗鱗える下には斃死部隊のみ蹲り、地隙中に僅少な残兵が集合している。砲兵は弾薬缺乏。そして敵壘は一箇所も抜けていない。

全滅を賭して突撃続行か。再挙を計るか。

此の時、第九師団より急報が入った。

「盤竜山東堡壘ヲ占領セリ」

乃木勇躍して盤竜山に攻撃重点を移行。

「第九師団は盤竜山西堡壘を攻略せよ。第十師団は盤竜山に集結し、望台へ突撃せよ」

× × ×

須佐之男「昨夜の戦闘で妻が行方不明です」
伊邪那岐「主神ゼウスの雷電は思ったより強いな。多くの神々が傷ついた。併し敵も疲れていよう。もう一度突撃だ。必ず主神ゼウスを倒すぞ」

× × ×

白玉山の司令部では関東軍司令官ステッセル中将が狼狽していた。

「盤竜山は西堡壘も奪われた。日本軍は望台

を攻撃中だ。諸君、我等如何に処すべきか」

要塞司令官スミルノフ中将は泰然と不動。

「我が領土・尖端たる旅順を死守するのみ」

「望台が陥ちたら旅順市街に突入されるぞ」

「その時は水師營から鳳凰山に逆襲します」

だが勇将スミルノフはステッセルに指揮権

の大部分を横領されて実兵を持たなかった。

「第七師団長を呼べ。意見を聞こう」

コンドラテンコ少将は召還を拒否した。

「我が任務は戦闘にあつて議論ではない」

× × ×

主神ゼウス「日本兵は幾ら殺されても進んで来る。

ロシヤ軍の予備兵力も減少した。此の俛では

旅順が危いぞ」

主女神ヘーラー「コンドラテンコが北斗山砲台に立っ

ています。運命女神モイライ達の予言に依れば、あの

男が健在な限り旅順は陥ちないとの事です」

教場溝の谷に櫛名田姫が転がされていた。

両手両足を背中に纏められ、鞆の如く縛り固

められた上に眼には厚い眼隠し、口には固い

猿轡。傷と拘束に呻きながら転々とする。

幾箇所かに傷を負った主女神ヘーラーが憎らしそう

に槍の柄で櫛名田姫を突いた。

× × ×

八月二十三日。第十一師団の決死隊が望台

山頂に突入した。松樹山、二竜山、東鶏冠山等の諸砲台は一斉に集中射撃。コンドラテンコは予備隊を率いて逆襲する。望台は東正面防禦線の最高地点。此の要衝を挟んで彼我共に必死。一時は両軍悉く倒れて真空状態を呈し、山頂人影無し。

× × ×

老伊邪那岐が斬り込んだ。主神ゼウスは金剛鎌で打ち返す。彼我の諸神入乱れて全力衝突。

脳天を一撃された伊邪那岐が遂に支えず谷底へ転落した。科戸神が背負って後退する。

× × ×

八月二十四日。望台山頂はコンドラテンコの占める処となった。

日本軍の死屍は全山を埋めている。

此処に於て遂に乃木は強襲を断念した。

死傷一万五千八百六十名。消費砲弾十二万

発、銃弾三千五百万発。

ロシヤ軍の死傷千五百名。捕虜五名。

日本軍の獲たものは堡壘若干と小銃八十四挺、砲二十四門、機関銃一挺だった。

× × ×

主神ゼウス「大勝利だ。神聖飲料で乾盃しようぞ」
主女神ヘーラー「いえ。ロシヤ軍は崩壊寸前の処を、

日本軍の攻撃中止で救われたに過ぎません。

祝宴などとは以ての他。一層の御用心こそ然る可しと存じます」

主神「何時もうるさい奴だな」

主女神「何と仰せられました」

主神「いや、何も申さぬぞ」

八月二十五日。乃木は強襲法を正攻法に改めた。先ず戦力の回復。次いで占領地域の防禦強化。更に攻囲線の推進と交通壕の構築。

天照大神「第一回総攻撃は失敗しましたが、日本兵の勇氣は余す処無く發揮されました。此の勇氣を失わず、新工夫を加えるなら次の攻撃は必ず成功するでありますよう」

ロシア軍も又、防備を強化していた。本来旅順要塞は明治四十二年完成を目標として居り、幾多の堡壘は未整備だった。ステッセルは旅順市民を徴集し、ウクトムスキーは水兵を陸軍に編入し、軍艦の大砲を悉く砲台に揚げた。築城の名手コンドラテンコが堡壘増設を指揮した。機雷を埋めて地雷とし、魚雷発射管を山頂に据えて魚雷は陸正面を向いた。

青春女神「母神様。捕虜は何処に監禁するの

が宜しいでしょうか」

主女神「年増だが、美しい女です。主神様に

近く置いてはなりません。二百三高地が空いています。彼処なら戦場からも遠いから丁度良いでしょう。鞍部に埋めておきなさい」

二百三高地は二つの峯を持ち、その中間は広い鞍状地になっている。荷物の如く全身を縛られた櫛名田姫は身動きも出来ない俛、鼻孔だけを露して岩山の中に埋められた。

日本軍は塹壕を掘って本防禦線に迫った。併し旅順一帯は悉く硅質の硬岩。いや旅順全体が巨大な一枚岩に載っているようなものである。日本軍は十字鍬が棒になる迄掘った。ロシア軍も傍観していない。連日連夜、攻路頭を襲撃して破壊を計った。尺寸の地は百千の血を以て争われた。

天照大神「北方の戦況はかうでしたか」
科戸神「大山巖の日本軍十三万五千とクロパトキンのロシア軍二十二万五千は遼陽に對陣し、始めて全力決戦を展開しました」

豊玉姫「八月二十五日の夜。日本の第二師団が先ず世界に類の無い師団夜襲に成功して弓張嶺を占領。ロシア軍は戦線整理の為後退」

武御雷神「日本軍は追撃して首山堡一帯の高地に迫ったが此処でロシア軍は頑強に抵抗」
須勢理姫「八月三十一日に至るも首山堡陥落せず、第四軍、第二軍は損害続出して苦戦」
猿田彦「此の時、黒木第一軍は太子河を秘密渡河して遼陽東方に進出、ロシア軍左翼を脅威しました」

武御雷神「クロパトキンは首山堡を放棄し、予備隊を直率して黒木第一軍に決戦を挑む」
豊玉姫「三日間の総攻撃。九月四日に至りクロパトキンは遂に総退却を発令。整然と奉天に後退し、日本軍は遼陽を占領しました」
科戸神「ロシア軍の死傷二万。日本軍の死傷二万三千。砲七門と小銃二千三百二十挺を捕獲し、捕虜八十四を得ました」

天照大神「遼陽会戦に於て日本軍は確に勝利を収めた如くですが、それは辛勝に過ぎず、砲弾缺乏と兵士の疲労で追撃の余力を欲き、ロシア軍の大部分を逸したと思われます。真の決戦は次の機会に持ち越されました。旅順攻略に依る乃木軍の決戦参加が全戦役の勝敗を決するでありますよう」

九月五日。クロンスタット軍港に於てバルチック艦隊の検閲が行われ、ニコライ二世は

聖像を、アレクサンドラ皇后は祭壇用掛布を諸艦に下賜した。

天照大神「水源地附近に敵が潜伏しているようです」

科戸神「何も見えませんが」

天照大神「冥府の隠れ笠を被ってしようとも我が輻射の透視を免れる事は出来ませぬ。御覧なさい」

日本一の名射手は全箭を番え、太陽光線の如き直射一閃。忽ち、矢に貫かれた冥府の隠れ帽子が高々と宙に舞い竜眼北方の谷間では姿を露わした閻魔女王が頭を抑えて大慌て。天照大神「敵の隠密です。捕えて来なさい」科戸神と須勢理姫が先を争って駆け出す。

九月十七日。乃木は旅順要塞西翼前方の前衛堡壘に対する正攻撃を発令した。

第一師団は水師營堡壘及び二百三高地へ。

第九師団は竜眼北方堡壘を攻撃する。

第十一師団は東正面のロシヤ軍を牽制。

大頂子山の陥落で前線に露出した二百三高地は今回始めて攻撃目標に加えられた。

敏捷須勢理姫が先ず閻魔女王に迫った。彼

私の美少女が互に短剣を閃かせて一上一下。

だが閻魔女王は剣の巧者ではない。隠れ帽子を失って全く自信喪失。太陽に曝されて昼の梟の如き無能者と成り果てた。一方須勢理姫は海洋大王を討って以来の自信過剰。とても勝負にならない。閻魔女王は剣尖も足元も乱れて斬り立てられ、幾箇所も傷を負った。

九月十九日。海軍重砲及び攻城砲の射撃に続き、水師營南方堡壘団、竜眼北方堡壘、南山坡山に対する歩兵攻撃が開始された。

剣を捲き落された閻魔女王は悲鳴をあげて逃げ出した。須勢理姫が猛然と追いかける。科戸神が大手を振って旅順街道を遮断した。逃げ場を失った地下の美少女は鳳凰山へ駆け上ろうとしたが。

山上には太陽光燦然たる天照大神が諸神を随えて立っている。閻魔女王は光輝に眼を射られて眩暈を起し、途端に足を滑らせて谷間へ真逆様に転げ落ちた。天照大神が弓を伸べて背中を押さえつける。美少女は両手を突って張り、呻き悶えるが大盤石に抑えつけられた如く身動きも出来ない。其処へ走り寄った科戸神が苦もなく後ろ手に振じ上げ、荒縄で縛

りあげた。

九月二十日。第九師団は竜眼北方堡壘、一名クロバトキン堡壘を攻略し、野砲四門、三十七耗砲二門、機関銃二挺、小銃八十挺を奪取した。此の堡壘は旅順の水源地を保護する重要陣地である。此の為、水師營南方堡壘団のロシヤ軍にも動揺が起り、第一師団左翼は直ちに第四堡壘を攻略、更に砲兵の掩護射撃を受けつつ中核陣地の第一堡壘に迫る。第二第三堡壘のロシヤ軍も遂に潰走、水師營南方高地の前衛陣地は斯くて悉く陥落した。

此の間、第一師団右翼は前日に引続き南山坡山を攻撃しつつあったが敵散兵壕に対する砲撃効果を見て午後四時突撃を敢行、夕刻に入ってロシヤ軍は屍体百三十、三十七耗砲二門と弾薬多量を遺棄して敗走した。日本軍は更に進んで二百三高地西南塹壕を奪取する。

ロシヤ軍は松樹山、二竜山、案子山以下の諸砲台から竜眼北方堡壘を乱打し、日本軍は占領拠点の防禦工事を急いだ。

夜に入るや日本軍の第十五、第十六聯隊は二百三高地を夜襲せんと進出したがロシヤ軍は優勢な砲兵の掩護下に大逆襲を行い、西南麓の散兵壕迄も奪回し去った。

須勢理姫「閻魔女王はもう少しで、わたしが捕える処でしたのに」

科戸神「俺の手の中に転げ込んで来たのだ。そんなに怒るなよ」

天照大神「須勢理姫の武勇を認めましょう。

風の神よ。縄尻を姫に渡しなさい」

漸く機嫌を直した海の美少女は喜び勇んで冥府の美少女を引っ立てた。閻魔女王は振

した栗色の髪に面を埋めていたが縄を引かれて悄然と立ち上がる。単衣は裂けて脇も蔽わ

ず、白蠟の如き両腕は高く背に廻り、拳を固く握り締めた手首は固く十文字に縛られ、蒼

白な頬は一層血色を失って半透明に見えた。

× × ×

九月二十一日。第一師団は二百三高地に向って続々と増援を派遣した。敵の掃射を冒して山麓に兵力を推進した。砲兵も全火力を山上に集中し、十五糎重砲一門と散兵壕数箇所を爆破し、守兵多数を倒した。ロシヤ軍も此の山の重要性を意識し、各方面から援兵が駆けつけた。戦闘は急速に高潮した。

× × ×

月読神「閻魔女王を捕えたそうではないか」
須佐之男「冥府の女王と言うから口が裂けて

牙の生えた恐しい魔女を想像していたが何と可愛らしい小娘だったよ」

月読神「汝の娘も少女で勇士だろう」

主神と農業女神の間に生れた永遠の復活を象徴する美少女は白昼の光に半裸の身体を露し、緊しい縄目に喘ぎながら蹲る。

傍には夜の支配者狩獵女神が月光色の膚を太陽に曝して後ろ手に縛られ、眼を閉じて動かない。

× × ×

九月二十二日。旅順要塞陸正面防禦司令官コンドラテンコ少将が一箇大隊を率いて北斗山の司令部から二百三高地に來援した。折しも日本軍は二箇聯隊を以て夜襲準備中だったがロシヤ軍は突如先制攻撃を敢行、手榴弾の雨を浴びせて聯隊長二人を傷つけ、旗手を殺し、軍旗の一部を焼いた。日本軍は辛くも態勢を再建し、更に二回の突撃を反覆したが二百三高地は固くして抜けず。四日間に亘る正攻撃は前衛陣地の大部分を奪取したが最重要な二百三高地の前で遂に挫折した。日本軍の死傷者は四千八百四十九名に上った。

× × ×

農業女神「わたしの少女が見えませぬ」
主神「余が探してやるから暫く待つて居れ」

農業女神「いえ、待てませぬ。娘が冥王に誘拐された時も、あなたはそう仰言ったのに何もなさらず女の後ばかり追っておいでで、わたしだけがシチリヤからエレウシス迄尋ね歩いたものでした。今すぐ松明を持って捜しに参ります」

主神「困った事を申すな。間もなく乃木の第二回総攻撃が始まろう。兵糧役の其方が居なくては諸神も戦が出来なくなるのだ」

主女神「よいではありませんか。娘に惹かれて戦が出来なくなるような未練者は要りませぬ。行かしておやりなさいませ」

× × ×

九月二十八日。旅順の戦況を視察していた満洲軍総参謀長児玉大将は報告書に記した。「二百三高地ハ我が攻囲線ノ接近シタル今日ニ於テ急ニ重キヲ置クニ至レルモノノ如シ。コレ比較的近距离ニテ旅順ノ内部ヲ砲撃シ、且ツ観測シ得ルハ此地ニ優ルモノナク、コレマタ十九日ノ攻撃ニ於テ彼ガ極力固守セシ所以ナルベシ。」

× × ×

閻魔女王「從姉様。腕が痛い。胸が苦しい」
狩獵女神「わたしなんか四箇月も縛られていのよ。手も足も感覚が無くなったみたい」

閻魔女王「通力を使って何とか解けないの」
 狩獵女神「両手を後ろに縛られて通力が使えるわけがないわ。あなたは何うなの」
 閻魔女王「あたしも駄目。冥府の隠れ帽子を失くしたら何も出来なくなるのよ」
 狩獵女神「口惜しいわね。わたし達はオリムポスの遊撃兵として有名だったのに捕虜になつて太陽に曝されて、こんなに縛られて」
 閻魔女王「あい、あい」（ギリシャ語の泣声は哀、哀）
 狩獵女神「泣くんじやないよ。あなたが身を揉むと、わたしの胸も縄が締まるのよ。冥府の女王なら縛られても姿勢を起しておいで」
 閻魔女王「縄目が固くて泣くのじやないの。隠れ帽子を落したからよ。夫に叱られるわ」
 狩獵女神「呆れるわ。縛られているのに、そんな事を気にしているのね」
 閻魔女王「いっしょに心配してくれないの」
 狩獵女神「付合えないわ。まるで子供よ」
 閻魔女王「意地悪ッ。もういいわよッ」
 狩獵女神「仕様のない娘ね」
 閻魔女王「うわあーん。ああーん」
 狩獵女神「手を出して御覧。後ろだけど握つてあげる」

九月二十八日。日本の議会は後備兵役の五箇年延長を可決し、後備歩兵四十八箇大隊が編成可能になった。これは日本が兵員を補充する最後の努力だった。

月読神「大連に巨大な火砲が揚陸されたぞ」
 思兼神「二十八糎榴弾砲です。本来は海岸要塞に装備して軍艦を撃つ大砲でした。火器も弾薬も旧式だが大きいのが利点です。平時に六箇月かかって装備するのですが何とか一箇月で射撃可能にしようと努力しています」

攻城砲兵司令官豊島少将は二十八糎榴弾砲を見て手を合わせ「有難や」と拝んだ。十五糎級とは比較にならぬ巨砲六門が並んだ。

十月一日。射撃開始。旅順攻防戦は十年後の世界大戦に対する予行演習の観が有った。

主神「トロイの木馬にも相当しようぞ」

二十八糎榴弾砲が撃ち続けた。
 盤竜山北堡壘の掩蓋と機関銃が飛散した。
 特務艦アンガラは卵殻の如く破壊された。
 松樹山散兵壕で百五十八人が吹っ飛んだ。
 東鷄冠山北堡壘正面の五十七耗砲は爆碎。
 同堡壘のペトン製側防穹害を貫通した一弾は機関銃三挺と兵員多数を埋没し去った。

地底の宮殿では冥王が驚愕狼狽していた。
 「恐しく大きな砲弾が炸裂したぞ。地が裂けて冥界の王国が太陽に晒されるのではないかな。トロイ戦争の時はもう少し静かに闘ったものだ。全く近頃の人間は何を仕出かすか解らん。鍛冶工神の火より激しい爆弾を發明して地球を割ったりしたら大変だ。此の国は太陽光線に照らされると分解してううから」

十月六日以来、奉天方面の避難民が続々南下し、クロパトキンの大挙進出を思わせた。
 十月八日。大山嶺は先制攻撃を發令。
 十月九日。彼我の前衛が各方面で接触。
 十月十日。沙河大会戦が開始された。
 十月十一日。日露兩軍全力衝突を反覆。

十月十二日。第四軍は三塊石山を夜襲占領し、第二軍は前浪子街で野砲十六門を捕獲せるも全体に於て日本軍の攻勢進展せず。

十月十三日。日本軍の砲弾次第に欠乏。

十月十四日。ロシア軍退却の兆候あり。

十月十五日。日本軍の一隊万宝山を占領。

十月十六日。ロシア軍万宝山を逆襲奪回。

十月十七日。戦線平穩。沙河大合戦終結。

此の決戦に参加した日本軍十二万。その内死傷二万余。ロシア軍は二十二万を動かし、死傷四万一千。大砲四十五門、小銃六千十五挺、捕虜六百三十四名を遺して退却した。一応日本軍の勝利と言える。併し遼陽会戦と同じく砲弾欠乏の日本軍は追撃殲滅を行う余力が無く、ロシア軍も又遠く後退せず、両軍は沙河を挟んで延々八十軒の塹壕を築き、勢力均衡の陣地戦を現出した。正しく十年後の世界大戦に於ける西部塹壕戦の予告篇だった。

冥王は地底王宮の露台に立っている。

「ややッ。地上から隠れ帽子が降って来た。

金箭が刺さっているぞ。さては閻魔女王の身に何事か起ったな」

十月十四日午後九時。バルチック艦隊はリ

バウ軍港外に整列した。

十月十五日。戦艦七隻、装甲巡洋艦二隻、快速巡洋艦三隻、駆逐艦九隻、其他二十隻より成る太平洋第二艦隊は堂々とバルチック海を出撃し、極東に向った。

天照大神「バルチック艦隊の極東水域到着見込は何のように計算されますか」

思兼神「その準備は極めて大規模で、多数の給炭船を航路上の要所に配置し、艦隊は所要の給水、給炭、給糧、工作、給兵、病院の諸船を随伴し、水雷母艦を従え、その行程は予想外に迅速で、経済速力を以てしても明年一月には台湾海峡に出現するでしょう」

豊玉姫「東郷の諸艦は機関、砲身の整備と艦底の清掃に二箇月を要します。そして旅順の陥落が遅延すれば、バルチック艦隊は全速航海で本年中に東洋へ到着する事もあります」

天照大神「それは重大です。東郷は十一月末には本国へ帰還しなければなりません。乃木に残された時間は一箇月と少しだけです」

十月十五日調査の第三軍保有砲弾は一門当たり野砲百十四発、山砲百二十発に過ぎなかった。これでは発射速度の遅い三十年式野砲で

も一時間で発射し尽くして下う。

十月十六日。乃木は大本営に総攻撃用砲弾各三百発の支給を懇請したが否認された。当時は沙河合戦の末期で満洲軍全体が砲弾欠乏の危機に瀕していた。日本の砲兵工廠は昼夜運転の連続で増産の余力無く、国内の貯蔵は海岸要塞の二十八糎砲弾のみ。バルチック艦隊既に出撃せる現在、警備弾の国外搬出は非常な危険を冒す懼れがあったが、遂に勅許を以てこれを第三軍に緊急輸送した。

第三軍は陣中で木製十二糎砲を製作し、至近距離で使用して著功を収めた。日本古来の花火筒式簡易砲である。続いて十八糎木造砲が作られ、漸次増加して遂には二百二十六門に達した。此の考案は迫撃砲の前身である。

ディオニッス「農業女神様が行方不明です」

主神「娘の閻魔女王を捜しに出たのだ」

ディオニッス「神聖食糧が欠乏しています」

主神「其方では作れないか」

ディオニッス「神聖飲料なら沢山有りますが」

主神「酒ばかりでは仕方がありません」

ディオニッス「神聖食糧は農業女神様だけがエー

テルから合成なさいます」

主神「仕方が無い。天馬を皆で食べよう」

旅順の水源地は竜眼北方堡壘の陥落で途絶したがステッセルが予め市街に多数の井戸を掘らせていたので水には不自由しなかった。

主食の麦粉は未だ三箇月分有ったが肉類は七月で尽き、将校の乗用馬以外は喰べて了った。野菜は城外の平地で栽培していたが、収穫期直前に悉く日本軍占領地域に入り第三軍に刈られる事となった。城内では既に壊血病流行の兆候が見え、アレクセーフが遺棄した黄金の鉢にステッセルが大根を植えていた。

食糧の欠乏に較べて酒は甚だ豊富だった。但しビールは殆んど無かった。ロシア人は自国産を嫌い、極東地域では北海道のエビスビールを輸入して飲用する習慣だったらしい。

冥王「日本軍が地下に向って穴を掘り始めたぞ。余の王宮の財宝を盗みに来るのかな」

× × ×

東鶏冠山北堡壘に向って掘進する日本軍の塹壕は十月下旬に至って敵前五十米に達し、その総延長は四千米に及んだ。此処から攻路は地下坑道となり、工兵は穴を掘って堡壘に迫った。ロシア軍も対坑道を掘って応じ、互に相手の下に出て爆破せんと策した。

× × ×

高天原諸神が突撃準備配置に展開した。月読神、豊玉姫、邇邇芸尊は松樹山へ。

須佐之男神、大国主神、須勢理姫は東鶏冠山北堡壘へ。

天照大神、武御雷神、猿田彦、科戸神は二竜山堡壘へ。

半数の神が斬創や火傷を負っている。それにも屈せず戦列に加った。

× × ×

日本の坑道兵は足首に綱を縛って地下に挺身した。綱の端は坑道外の戦友が握った。

十月二十七日午後一時。ロシア軍は爆薬に点火して坑道を破壊した。綱を引くと三人の遺骸たる足と腕が各一本だけ戻って来た。

然るに此の火薬量は過大に失し、ロシア軍

は自ら堡壘前の鉄条網を吹き飛ばし側防穹害

の外壁迄露出させて了った。歓喜した日本軍

は翌二十八日午前一時、爆薬を以て外壁の一

部を破壊し、その夜には更に多量の火薬を以

て破孔を拡張し、石油を注いだ秣に点火して

陣地内に投入し、外岸壕の一角を占領した。

× × ×

オリムポス方も守備配置に就いた。

大鷲巢山（望台）の上に総帥主神。

ヘーラー

東鶏冠山に主女神。北堡壘上に軍女神。

P 堡壘に青春女神。白銀山頂に虹女神。

二竜山に商業神。松樹山にヘルクレス。

盤竜山北堡壘に暁女神。漸く負傷の癒えた

海洋女王は教場溝に在って主神を補佐する。

× × ×

十月二十六日。バルチック艦隊はスペイン西北部のヴィゴー湾に寄港した。

× × ×

鳳凰山上の雲中に杭を打ち並べ、後ろ手に縛られた二女神が縄尻を繋がれている。

プラチナ・ブロンドと栗色の髪。狩猟女神

と閻魔女王である。緊しく菱縄を掛けられ、

日本式に正坐させられている。

狩猟女神「総攻撃が始まるらしいわよ」

閻魔女王「ロシア軍に勝って貰いたいわね」

× × ×

十月二十六日午前八時三十分。二十八糎榴弾砲十八門を含む四百二十七門の日本軍攻城砲兵が総攻撃準備射撃の火蓋を切った。二十七日、二十八日、二十九日。猛砲撃が続く。

× × ×

砲撃の騒音で櫛名田姫が意識を回復した。

併し眼も口も封じられている。手と足は共に背中へ廻り、全身は革紐と鎖で膚が見えない

程に縛られ、二百三高地の土中に埋められて身動きも出来ない。それでも耳を働かせて主戦場の方向を探った。

「乃木は今度も東正面本防禦線を攻撃するよ。うだ。何故此の二百三高地を攻めないのだろうか。最強部分を攻めて成功すればよいが」

中央の第九師団は盤竜山北堡壘を奪取し、更に進んで二竜山とP堡壘を攻撃中。

右翼の第一師団は松樹山を目標とする。

左翼の第十一師団は東鶏冠山北堡壘及び其の後方高地一帯を奪取せんとする。

準備砲撃は既に五日間。効果充分と見た乃木は十月三十日を期し総突撃を命じた。

天界では神々が喚き叫んで激突した。

天照大神は剣尖鋭く青春女神を追い捲る。

月読神は暁女神を斬り立てて壓迫。

中でも剛勇須佐之男は真先駆けて東鶏冠山に攻め上り、宿敵軍女神に挑戦する。

敏捷須勢理姫は二竜山の脇を走り抜け、後方に控える主神に迫った。

其他の諸神も互に相手を撰んで接戦格闘。

第九師団左翼隊がP堡壘に突入した。午後

一時、堡壘の大部分を占領。

午後三時。ロシア兵二百名が逆襲。

夜に入るや約三百名のロシア兵が回復攻撃を行い、諸砲台は掩護射撃。堡壘内の日本軍は弾薬欠乏。午後十時三十分、遂に退却。

これを見た第六旅団長少将一戸兵衛は自ら一箇中隊を直率し、先頭に立って斬り込む。

午後十一時四十分。P堡壘は確実に占領。此の要地は一戸堡壘と改名された。

剛勇須佐之男は十拳之剣と八拳之剣を左右に振廻し、虚空に円盤を描いて銀光閃々。

山上に立って邀撃する軍女神は左手にゴルゴンの楯。右手に長槍。燦然たる金甲銀盔。

「今日こそ勝負を決しようぞ」

緒戦以来幾度目の対決か。十拳之剣が電光を発して一文字。ゴルゴンの火を吐く口が受け止める。続いて走る蛇桿の金柄槍。

「笑止なり。それが高天原随一の腕なるか」

脚を払われた須佐之男神は大孤山の麓へと転落する。

「女に負けてなるものか」

撥ね起きて再び山頂を目指したが又しても兜の真向を強打されて谷底へ真逆様。

「幾度なりとも来るがよい」

軍女神の嘲笑が天地に鳴り響いた。

松樹山へ、二竜山へ、東鶏冠山北堡壘へ。

側防穹害の破孔を躍り出た日本兵の躍進。

突撃陣地は砲台直前に推進してある。準備砲撃は超重砲を交えて既に百時間余。堡壘の地型は偵察され尽くして我が庭の如く、攻法と装備は改良され、各師団は補充兵を得て戦力、闘志共に更新充実。斯くの如く、凡ゆる条件は完備していたのだが予期に反して攻撃

発展せず停滞遅延の兆候あり。ロシア軍の防備も又、二箇月の間に強化されていった。艦砲や水雷が堡壘の間隙を埋め、水兵が陸正面配置に就いた。二十八糎榴弾砲以下の砲撃は砲座や銃眼や散兵壕を破壊したが、厚いペトンの下に隠れた地下兵営には達しなかった。ロシア兵は深く潜伏して猛砲火を避け、日本軍の突撃開始を待って機関銃と共に姿を現した。

須勢理姫が短剣と共に全身を叩きつける。

主神は辛くも避けた。脇腹に流星が飛ぶ。続いて一閃。顔面を窺い一束の黒髪が太刀風に散乱。主神は金剛鎌を振廻して防戦に大童。

須勢理姫は地に触れると見る間に反転跳躍。

飛燕の如き襲撃を繰返す。

× × ×

工兵が携帯橋を架け、土嚢を積み、爆弾を投げ込む。歩兵は外壕に突入し、斜堤を登攀し、堡壘咽喉部へ、軽砲線へ、重砲台へと迫る。敵前五米。此の時ロシヤ軍の機関銃が始めて火を噴いた。榴霰弾が頭上に炸裂した。第一線は瞬時に掃蕩され、僅少な残兵斜堤に伏臥して行動不能。後続の援兵又悉く途中に阻止されて敵壘に達せず。砲台前は斃死部隊の死屍山積。砲身を抱いて倒れた将校あり、日章旗と共に直立姿勢で蜂巢と化す兵あり。東鷄冠山北堡壘に突入せる第十二聯隊第一大隊の生存者十名は全滅寸前僅かに離脱。

× × ×

主神の金剛鎌が空中で須勢理姫を打った。

小柄な美少女は枯葉の如く飛んで松樹山に激突。二竜山へ撥ね返り、更に望台の麓へ転げ落ちた。意識朦朧。それでも一旦は起き上ろうとしたが既に主神は態勢充分。正確な雷火を投じて一撃すれば手足挫けて大地に転々。

「あれを始末せい」

主神は快心の微笑を浮べて海洋女王に命じる。深淵神の娘は教場溝より駆け寄り、革紐を解き出して海の美少女を後ろ手に縛った。

× × ×

十月三十一日。第一、第九師団の戦力既に尽き、攻城砲兵は弾薬欠乏。第十一師団のみ攻撃続行中。

併しロシヤ軍も消耗と疲労で戦力、闘志共に低下している。一部の砲台では白旗を用意した。コンドラテンコの勇気のみが崩壊を阻止した。堡壘下に噛りついていた第十二聯隊第二大隊の二箇中隊は遂に全滅した。

× × ×

須佐之男「姉神、無念です。軍女神に二度迄も恥を掻かされました。娘の須勢理は敵中深く突入して戻らず。我が一族殆んど失われて大国主を残すのみ。斯くなる上は全滅を賭しても最後の総突撃を」

天照大神「血氣の勇は真勇ではありません。今暫く敵の傲るに委せ機会を待ちましょう」

× × ×

十一月一日午前三時。東鷄冠山北堡壘に対する第十一師団の夜襲も成功せず、乃木は総攻撃を中止し攻路作業を強化すべく命じた。日本軍の死傷三千八百三十名。ロシヤ軍の損害四千五百三十二名。三大永久堡壘の攻略は遂に成功しなかった。

× × ×

天照大神「近代要塞を破壊するには二十八糎榴弾砲でも不十分だったようですね」

思兼神「四十糎級の口径が必要だと思います」
天照大神「そのような巨砲は十年しなければ現れますまい。恐らくは次の世界大戦か。乃木が旅順を陥す為の技術は如何にすべきか」
思兼神「地下を掘って堡壘真下に到り、多量の火薬を装置して爆破するしかありません」

× × ×

十一月三日。日本の天長節に当る日。

地球の裏側では白面瘦身のロジエストウエンスキーが旗艦スワロフの艦橋に立って極東の空を睨んでいた。

「あと六十日、乃木の攻撃を阻止せよ。必ず陥落以前に増援して見せるぞ」

バルチック艦隊はタンジールに到着した。少将フェリケルザムの率いる軽快部隊は此処より分離して地中海に入り、吃水深くしてスエズ運河を通過し得ない主力艦隊はヴェルデ岬に向ってアフリカ大西洋岸を南下した。

× × ×

後ろ手に縛られた須勢理姫は海洋女王に縄尻を把られてオリムポス諸神の居並ぶ中に引き据えられた。藍色の胴着は檻褌と化して垂れ下り、長い黒髪は海草の如く乱れて背中

手首を隠している。

主神「此の小娘が余の弟を刺したのか」

須勢理姫は黒曜石の如き眼を見開いて主神

を睨んだ。

主神「可愛い眼だ。そんなに怒るな」

眼尻を下げて頬を撫でようとした途端、美

少女は不意に立って主神の或る所を蹴った。

神にも急所は有るらしい。主神は眼を白黒。

海洋女王は慌てて縄尻を曳き、青春女神と

虹女神が首と足を抑えつけた。

主女神「海洋大王の妻に夫の仇を討たせておやりなさいませ」

後の女神が軽蔑の微笑を浮かべて言う。

主神「余にとっても弟の仇だ。其方に任せる

故、骨の碎ける迄、引叩け。容赦するな」

主神は痛そうに股を抑えた。

主女神「承知致しました。陛下御自身の分も

思い知らせてやりましょう」

後ろ手の縄附で暴れに暴れる須勢理姫を、

三女神が皆で掛けて押し伏せ、首を縄で締め

上げ、口腔一杯に海綿を詰め込んで固く猿轡

を嚙ませ、胸も肩も足首も膝も縛りあげた。

十一月十二日。バルチック艦隊はフランス

領ダカールに入港した。此処で待機中の給炭

船群から三万噸の石炭が積み込まれた。

「あと五十日。今に見よ」

ロジエストウエンスキーが独語した。

旅順は二人の男の目標となった。世紀の大

競争に全世界が瞠目した。

十一月十六日。艦隊はダカールを出港。

門型に組んだ木枠の横木から須勢理姫は逆

吊りにされた。虹女神と青春女神が鞭を持っ

て交替に打ち叩いた。主女神は愉快そうに、

これを眺めながら微笑している。

十一月八日。第三軍は満洲軍本隊から工兵

三箇中隊の増援を得て各師団に分属させた。

一方第三軍からは既に後備歩兵第九聯隊が満

洲軍に譲渡されていた。

十一月十一日。日本最後の予備軍たる旭川

第七師団が第三軍戦闘序列に加えられ、十三

日から大阪で乗船を開始した。

十一月十六日。第三軍から野砲兵第十七聯

隊及び騎兵第一聯隊が満洲軍に転属した。

第三軍が必要とするのは歩兵工兵だった。

満洲軍本隊は全兵力が沙河前線に集中した為

に戦線後方を守備する後備兵を欲していた。

綿屑の如く打ちのめされた須勢理姫が吊ら

れている。髪は地に垂れ、鞭跡は全身を彩色

し、氣力も体力も尽き果てて見える。後ろ手

の縄目は一度も解かれていない。併し主女神

は未だ満足していないようだ。一層の惨刑を

加える為に足の迅い虹女神を使者に出した。

鍛冶工神「母神よ。何か御用ですか」

主女神「青銅を溶かす火を燃やして下さい」

鍛冶工神「何に御使用になるのでしょうか」

主女神「あの娘の下で焚いて責めるのです」

鍛冶工神「利用可能な火山が有りません」

主女神「熔岩が無ければ原子核にしなさい」

鍛冶工神「私の任務は兵器の整備で、残酷な

拷問は性に合いません。それに年端も行かぬ

少女を責めるとは母神様らしくありません」

主女神「あの少女は須佐之男の娘で、主神様

に斬りつけ、海洋大王殿を刺した女ですよ」

傍の助手兼妻の女神は面白がった。

麗美女神「あなた。母神様の御命令に背くの

は悪い事よ。早く火を焚いて下さい。わたし

と愛神が囁を押します。」

鍛冶工神が進まぬ顔で人間の知らない火を

点じた。摂氏六千度の焰が燃え上る。逆吊り

の須勢理姫が横眼で睨み、幾らか顔色を変え

たが、すぐ唇を引結んで泰然と眼を閉じた。

× × ×

十一月十四日現在の旅順要塞守備兵力は正規兵三万七千二十八名。大砲六百三十八門。

馬三千九百三十二頭だった。食糧、弾薬は漸次欠乏し、殊に肉類は殆んど尽き、傷病者の回復は栄養不足で捗らなかった。城内には赤痢、チフス、壊血病が蔓延した。若しも乃木に時間が与えられたら旅順は熟柿が落ちる如く乃木的手中に転げ込んだであろう。併し乃木は待てなかった。クロパトキンが冬営期間を利用して奉天附近に兵力を増強中であり、ロジェストウェンスキーは刻々とアフリカを迂廻しつつあった。乃木は前進あるのみ。

十一月十六日。第三回総攻撃の計画が確定した。併し万全の準備を終わって行われた第二回総攻撃が失敗してから僅か三週間。装備も戦術も新工夫は無い。勇氣と意地のみで果して永久堡壘攻略の成算有り哉。

× × ×

鍛冶工神ヘフェストスの烈火が燃え上る。須勢理姫は脂汗を流して責苦に耐えた。氣流に煽られた髪が舞い躍る。不死の神には死の救済も無い。

麗美女神ダイアナ「此の娘は余りに美しい。わたしはわたしと較べられる程に美しい女を憎む。だからわたしは韃を押す。三段論法かしら！」

× × ×

日本の国民は第三軍の健在如何を論じた。乃木將軍よ腹を切れと叫ぶ遺族も居た。

旅順は陥ちない。大本營に第三軍司令官更迭論が抬頭し、滿洲軍總司令部にも伝えられた。大山巖は即時に交替を拒否した。「おいどんは乃木を替えぬ。乃木は第三軍の精神的支柱じゃ。総攻撃は乃木にやらせる」

× × ×

須佐之男「姉神。乃木の健康が心配です。泥小屋に住み、粗食を摂り、不眠で作戦を指導し、不休で前線を巡視して身体が保つてしょうか。二度の総攻撃失敗で精神的にも疲れている筈です。」

天照大神「確かに乃木の神経は疲労しています。併し彼の身体は鋼鉄より丈夫で、責任感も勇氣も日本一です。欠けるものが有るとすれば柔軟性と応変の知恵でしょう」

須佐之男「それを補う方法は」

天照大神「今に解ります」

× × ×

十一月二十二日。天皇陛下は第三軍に対し勅語を下賜された。

旅順要塞ハ敵カ天嶮ニ加工シテ金湯トナシタル処ナリ其攻略ノ容易ナラサル固ヨリ怪ム

ニ足ラス朕深ク汝等ノ労苦ヲ察シ日夜軫念ニ

堪ヘス然レトモ今ヤ陸海軍ノ情況ハ旅順攻略ノ期ヲ緩ウスルヲ得サルモノアリ此時ニ当リ第三軍總攻撃ノ挙アルヲ聞キ其時機ヲ得タルヲ喜ヒ成功ヲ望ム甚切ナリ汝等將卒夫レ自愛努力セヨ

忠臣乃木は恐懼感激、奮起を期した。

× × ×

十一月二十六日。

商業神ヘルメス「太平洋第二艦隊赤道を越えました」
曉女神オーロラ「ガボオン湾に入りました」
商業神ヘルメス「二万六千噸の石炭を塔載中です」
主神ゼウス「あと四十日だな」

× × ×

同じ十一月二十六日。乃木は第三回総攻撃の開始を命じた。

第一師団は松樹山へ。

第九師団は二竜山へ。

第十一師団は東鶏冠山北堡壘へ。

一般配備は第二回総攻撃に同じ。軍予備隊として第七師団を控置するのみが異なる。乃木の闘志と第三軍將兵の勇戦は期待し得よう。併し必要なのは成功の保証なのだ。大戦略は旅順港内の艦隊を十二月十日迄に戦闘不能とすべく要求していた。然るに砲弾は攻撃前か

ら不足し、堡壘は依然健在。

第三軍司令部の中にも東正面本防禦線に対する攻撃を中止して二百三高地に全力を傾注すべしという意見が出ていた。

× × ×

東鷄冠山の上に一団の黒雲が漂っている。

人間の眼には見えないが雲上には一本の柱が立ち、肉棒の如く縛られた須勢理姫が高々と揺められていた。主女神は柱の下に在って槍先で身動きも出来ない美少女を小突き北堡壘上に進み出た軍女神は高天原勢を嘲笑する。軍女神「此の娘の親は誰でしょう。何処に隠れているのかしら」

× × ×

十一月二十六日午前八時。砲撃開始。

午後一時。三大永久堡壘に対し総突撃。

主隊は胸墻爆破と同時に堡壘内へ突入し、別隊は咽喉部へ攻め上り、他の一隊は後方陣地を襲撃。全軍全滅を賭しての一斉攻撃。

× × ×

須佐之男神は娘の須勢理姫を救出せんとして主女神と対戦中。

これを援護する武御雷神は軍女神と接戦。

猿田彦はヘルクレスと壮絶な一騎討。

豊玉姫は隙を窺って待機し、天照大神は日

輪の輻射にも似た金箭の連続射撃。

彼方では主神が雷電を全戦線に投下する。柱頭高く縛られ、猿轡を固く噛まされた須勢理姫が身を揉みながら戦況を見ている。

× × ×

日本軍が松樹山と二竜山の散兵壕を奪取。

堡壘胸墻上では両軍兵士が猛烈な白兵戦。救援に駆けつけたロシヤ兵は機関銃を据えて敵も味方も一時に薙ぎ倒した。

× × ×

軍女神は槍先鋭く武御雷神の胸を貫いた。

科戸神は虹女神を組み敷いて縄を掛けた。

天界の諸神入乱れて奮迅激闘。

× × ×

東鷄冠山北堡壘の内庭に突入した日本兵は前後左右と頭上から掃射され数分間で全滅。

胸墻を爆破して斜堤を駆け登った一箇中隊は総員戦死。増援に突進した一箇中隊は二十米走る間に一人残らず斃れた。

× × ×

天照大神「恐る可きは主神の雷電です。彼の右手さえ傷つければ味方の勝なのですが」

豊玉姫「わたしが闇に紛れて斬りつけます」

× × ×

乃木は鳳凰山南方二百十八高地に立って総

指揮を執っていた。戦況不利。今や非常手段に依って局面打開を計るより他にない。

午後四時。乃木は水師營東溝東北高地脚に特別予備隊を集め、悲壯激越な訓辭を行って士気を鼓舞した。特別予備隊は中村少将を指揮官とし、各師団の精兵三千余を撰抜して編成した決死隊で、世に言う白鵞隊である。

× × ×

主神「敵の夜討だぞ」

電光が闇を照らす。黒装束の豊玉姫は正体を露しながら後退せず、左右の手に短剣を構えて疾駆一直線。

主神は雷火を連投。ヘモクレスは速射。

紫電一震、右肩を打ち短剣が砕け飛んだ。

併し突進は止まず。遮る暁女神を白玉山の彼方へ突き飛ばし、商業神と勝利女神を左右に蹴倒し、弱敵は見向きもせず主神に迫る。

乱箭は既に簍の如く、半身は雷火に焼け、髪を振乱した形相も凄じく驚走、又疾駆。

× × ×

午後八時五十分。白鵞隊は松樹山第四砲台に突入した。此処を奪って拠点とし、旅順街道を駆け抜けて旅順市街及び白玉山を急襲奪取せんとする大快挙である。これが成功すれば旅順要塞の指揮系統は寸断され、貯蔵品の

全部は失われるのだ。

地雷発火の火焰が奔騰する。砲台内は白兵戦の渦。ロシヤ軍は探照灯を点じて白礮隊を照破し、各砲台から榴霰弾を集中した。死傷続出。中村少将重傷。手榴弾は尽きて第一線遂に潰乱。後続部隊は闇中に道を失い、一時は生存者二十五名と報ぜられた。

× × ×

豊玉姫は主神の直前に至って遂に力尽き、その脚下に倒れた。

主神「勇敢な敵だ。名誉を尊重して特に入念に縛れ」

ヘルクレスが革紐を解き出し、最早歩行不能の豊玉姫を緊しく後ろ手に縛り上げた。

× × ×

十一月二十七日午前二時三十分。乃木は白礮隊に退却を命じた。併し第一線への伝達は困難を極め、進み過ぎた一部は後退の機を失し、その損害は一層激甚なものとなった。

× × ×

半裸の須勢理姫は柱の上に高く掲げられ、黒い縊褸を纏った豊玉姫は同じ柱の根本に繋がれている。両手は背に廻り、首から足先迄隙間も無く縛られた上、口には固い猿轡。

電光と騒音が遠退いた。

高天原勢は敗退したらしい。

× × ×

乃木は終夜眠らず煩悶する。東正面本防禦線の攻撃を続行すべきか。港内の軍艦を砲撃するだけの目的で、単なる一前堡に過ぎない二百三高地に主攻撃を指向すべきか。

× × ×

鳳凰山の上に三女神が縛られている。

プラチナ・ブロンドと栗色の髪の隣に純粋の金髪美女が加った。足の速い虹女神だ。

菱縄を掛けられ、膝を揃えて坐っている。

俊足無比の虹女神も腿の附根を縛られては脱走も抵抗も出来ない。

× × ×

天明の頃。松樹山西北斜面を見れば白礮隊の戦死者充滿して全山白色に染まり、乃木は無念の唇を噛んで鳳凰山南方高地に立つ。併し此の時、既に乃木は攻撃正面の大転換を決意していた。

× × ×

狩神「あなた、何処で捕虜になったの」
虹女神「二竜山から麓へ進み過ぎたのよ」
閻魔女王「戦況は如何なの。負けているの」
虹女神「いいえ。わたしは縛られたけれど、

味方が優勢なようよ。ほら、高天原勢は退却して来るわ」

× × ×

閻魔女王「よかった。あたし達、助けて貰えるわね」
狩神「一寸待って。高天原勢は逃げていないのではないようよ。西へ移動して行くわ」
虹女神「此の縛り方、少しも緩まないのね」
閻魔女王「菱縄と言うらしいわよ」

× × ×

十一月二十七日午前十時。乃木は新たな軍命令を発した。

「二百三高地を奪取せよ」

× × ×

科戸神「第三軍主力が西方に転回中です」
猿田彦「攻城砲も右翼に移動しています」
月読神「乃木は二百三高地を攻撃するものと思われます」

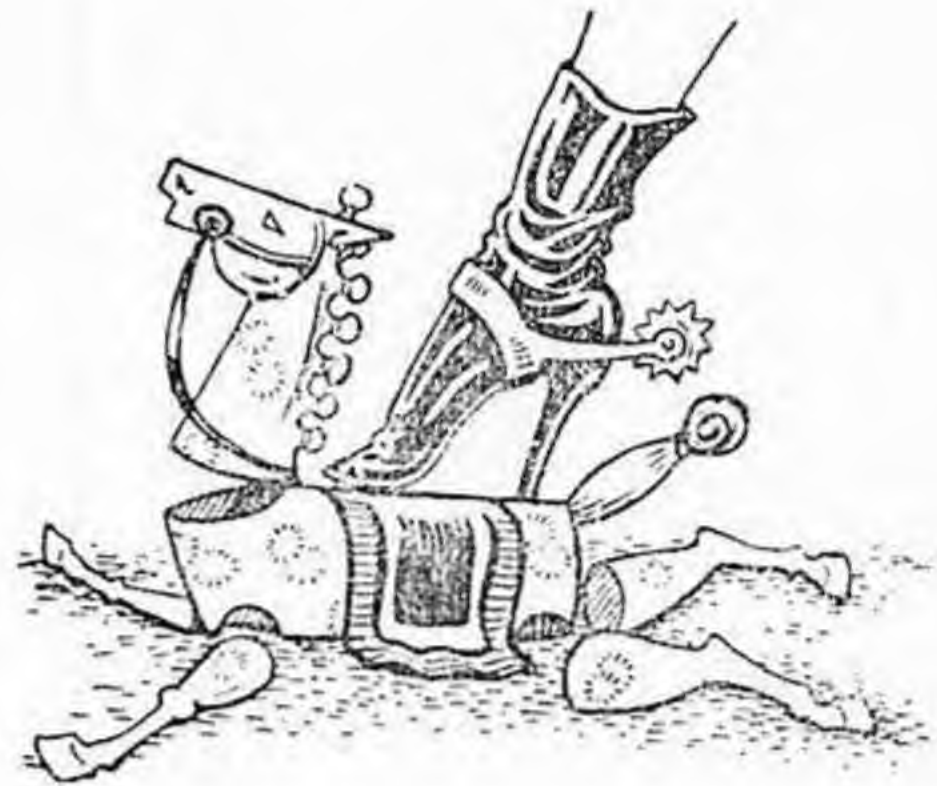
思兼神「ロシヤ軍もあの山に全兵力を傾注して防戦するでしょう」

須佐之男「姉神。いざ我等も二百三高地へ」

天照大神「今度こそは最後の決戦でありますぞ。諸神よ、奮え」

諸神「弥栄。弥栄」

「次回完結」



私のマゾ雑記帳

馬場好男

近頃の世相を「女性上位時代」というが、

久しい間、女性は上位を保っているらしい。

マスコミの力も大きいが、もっと大きいのは世の男どもの、男らしくなくなったことである。男らしくなくなったことをタナにあげて女性は強くなったといい、強くなりすぎたなどと嘆いている。

男も女も本来の性を完うしてこそ人生というものだが、それならマゾ男はどうなのだろうということになる。然し私は男らしい男が、マゾであってもかまわないし、そのような男が

本当の女性尊重主義者だと思う。

話は別だが、女性上位を反映するわけでも

あるまいが、「女性公論」の二月号は、ちょっと私をよろこばせてくれた。

意外とマゾむきの読物が、多かったのである。まずマゾッホの妻ヴァンダの手記で訳と解説を家政学院大学講師小島俊明氏が行っている。見出しに、夫は私のドレイになることを進んで誓い、屈辱と苦痛によって、この上もない幸福感に酔い痴れましたとある。

女性専門の雑誌にしては、珍しい企画であ

る。

昨年とあるから昭和四十二年らしいが、フランスで、このマゾッホの妻のヴァンダの手記が再刊され、忘れかけていたマゾッホの名が高まってきたという。

もともとこの手記は、マゾッホが死んで十二年後の一九〇七年に「わが生涯の告白」として、第一の夫人が「毛皮を着たヴィナス」の女主人公、ヴァンダの名を借りて書きあげたものだという。

女性公論二月号の二四二頁より二四九頁ま

で、出逢い、鞭打ちとフェティシズム、マゾッホとの会話、主従の契りの項にわけて書きあげられている。

つぎに、写真家の大竹省二氏が「ボクは女性性の踏台です」という小品をのせている。

女が男をだまして出世してゆく動物であることを、いろいろの例話を入れてサラッと書いてあるが面白い。

この大竹省二氏は、漫画サンデーにも、女尊男卑と題して短文を毎週書いているが、上品な色気を多く入れておもしろい。

それから同じこの雑誌（婦人公論）に「わが愛する七つの大罪」というのがある。

作者は堤玲子（わが闘争の作者でもある）で第七章まであり、近親相姦、SとM、同性愛、窃視症、幼児愛好者、露出狂、乱交のそれぞれを、作家自体の目で書いてある。特に第二章の、SとMでは、私はサディストである。マゾは痛いので嫌いだ、人が痛がるのは好きだと書き出し、美少年を素ッ裸にして細いベルトでしばりあげ、水をかけて責めながらコウコのおつまみでブランドーでもものみたいとある。

そしてこの項の終りに、何はともかく、われよし、人よし（鞭うち、うたれ）の民主々

義の両者にとって、死なない程度の拷問室とガス、水道ありの娼家こそ、ポンド切下げより大切に思いますぞ。イギリス王室殿、人生金ですむことは易いが、私たちは銭ではすまねえと、むすんでいる。

とにかく全項目とも、大たんて愉快だ。こんなに多くの読物を一冊のなかにまとめたこのレディ雑誌、本当にいいものだ。そこの週刊女性誌と違って、インテリ女性の読む雑誌だから、これらの記事は特に生きてくるようにも思えるし、世相をそのまま映しているようで、我が人生にもハリというものが出てくる。

もっともっと長生きしなければ、と思うことしきりである。

○

ブーツの女性が、この冬は特に多かった。ミニスカートと、このブーツは、なかなかいい。

胸をはって颯爽と靴音高く歩く若い女性の姿は、本当に女性上位時代そのままの姿だ。私など、靴底はゴム張りだから足音もたたない。

ひとところ、乗馬靴にこっているMの方がいらっしやったが、この方など先見の明があっ

たと思う。もう十数年も前に、必ずこういう時代が来ますよと、余り関心をもたない私に話していたが、マゾの奥義まで研究されていたその博学と、将来をみる目には敬服した。

過日、若い女性の来客が女房のところにあつたが、靴下の出来そこないかと思うほどのブーツである。二階の客間に行ったのを幸いに、立関にある彼女の靴の中に手をさしこんでみると私のひじの辺まで入る。やわらかい白い皮である。まだ脱いですぐのような肌の暖かさが感じられて快い。私は、つま先の方にまで指を入れ、手を出しては自分の唇でその間接の暖さを味わった。ブーツに口を入れて思いきり匂いをかぐと、皮の匂いにまじって女性特有の、やわらかな香りが感じられる。果ては、私はその靴に唇をつけ胸に抱きしめてみたが、こっそりと布でホコリを払い元通りにしておいておく。

階段を通して彼女の明るい笑い声が私の耳に入ったが、ひそかな私の楽しみの一駒でもあった。

○

或る新婚夫婦の会話と日記。

うれしく、なつかしく、また楽しい新婚時代である。

朝。

「あら、まだおめめがさめないのね、困った坊やね。ねえ、これで三回目よ」

「うーん」

「熱いコーヒーをいれますから、起きてちょうだいな」

「うーん、もう少し……」

「だめよオ、七時におこしてっておっしゃったのに、御返事はいいんだけど、すぐもぐっちまうんですもの。おくれたって知りませんよ」

「……」

「いいわ、もう私のせいじゃないのよ」

「……」

「ねえ、あなたったらア」

「……」

「しょうのない方ねえ、どうしてやろうかしら。冷いお水をかけてもいい？ ホラ、もう十分過ぎたわよ」

「うん、うん、おきるよ」

「はやくう」

「うわア、そんなに急にふとんをまくるなよすぐおきるよ」

「またかぶっちゃう。よおし、じゃこうしてあげるわ。もういつまでもねてて下さい、そ

の代りチツソクさせちゃうから。さあ、どうだ」

「う、う、お、おい、なにをする」

「ふとんの中にもぐりたいんでしょ。もう首を出しちゃダメ、これでもか」

「ク、クルシイヨッ。オーイ、ム、ム……」

「起きたければね返してちょうだい」

「オモタイヨオ」

「いやねえ、足なんかバタバタさせて、ふとんがきれちゃうわ。本当におきるか」

「オキル、オキル」

「じゃ、顔だけ許してあげる」

「フーッ、フーッ、ああ苦しい。こいつめ、

男の顔の上に尻をのせたな」

「あら、うそよ、お腹の上よ。顔の上は手でおさえただけよ」

「いや顔の上にお尻をのせた。もう少しで死ぬところだったよ」

「いいわ、乗らないのに乗ったといわれるなら、本当に乗りますわよ。いいこと」

「うわア、ゴメン、ゴメン。もうたくさん」

「ふ……どお、新妻、夫の上に馬のりになるって図よ」

「夫を尻にしく新妻だね」

「そうよ」

「君って意外におもいね」

「どうせ私はおデブです」

「いや、そうじゃないよ。そういう意味じゃないよ。これはね、おいしい、冗談じゃないよ、もう七時半だよ」

「え！ あッ、いけない。大変、大変」

「さあ、大いそぎだ。あッ、イテ、、、、、」

「どうしたの？」

「二十分も胸の上に乘られていたせいか、呼吸が出来ないんだ」

「いやあね、オーバー坊やさん」

「今夜のおかずは、なに？」

「そうなことより早く、早く」

「いそがしい奥様だ」

「あなたのせいよ。私のようないワイフは金のワラジでさがしたってありませんよ」

「はい、はい」

「ネクタイ、どれになさる？ わたしこれ大好きよ。去年のいまごろ、よくこのネクタイしてデートしたわね」

「なんでもいいですよ。どうせ僕は君一人だもの」

「あの時分は、とてもおとなしい人だと思っていたのだけど」

「おや、違ってたっていうのかい」

「ううん、ちよつとわがままなところ、あるわよ」

「もう行くよ」

「はい、ハンカチとチリガミ。行つてらっしゃい、早く帰つてね。バイバイ」

昼。

「(交換台)〇〇商事で御座います」

「私、佐藤の家内でございますが……いつも主人がお世話様になっております。ちよつと

佐藤におとりつぎ頂きたいのですが」

「ハイ、少々お待ち下さいませ」

「僕だよ、何か用事？」

「お仕事中ね、御免なさい。又叱られるわ。

ただ声が聞きたかったのよ」

「なあんだ、そんなことか」

「いけなかった？」

「ううん、でも、ちよいちよいやられると困るよ」

「気をつけます」

「わかればいいよ」

「ねえ、今夜なにが召上りたい？」

「何でもいいよ、そんなこと。もう切るよ」

「おこったの？」

「ちがうよ、いそがしいんだよッ」

「意地悪！ いいわよ、帰つて来たら朝のようにいじめてやるから」

「朝のように？」

「そうよ、お馬にするわよ。馬車ウマさん」

「たのしみに行っているよ。じゃ」

「サヨナラ」

夜。

「あの……」

「なんだい」

「よすわ、きまりが悪いもの」

「なんだ、いいだしてやめるなんて」

「だっていいの、なんでもないの」

「いったって、いいじゃないか」

「わらわない？」

「なんだか、わからないもの。笑うかもしれないさ」

「じゃ、よすわ」

「じゃ笑わないよ」

「今朝ね、あなたがおでかけのとき、あなたのうしろ姿をつくづく見ていたの……」

「……」

「あなたのうしろ姿って、とてもステキよ。

わたし、うれしかったわ」

「何かと思ったらそんなことが、バカだなア

は、、、、、」

「あら、笑わないって約束したくせに」

「だって、おかしいよ」

「また笑う。おこるわよ」

「そういえば電話でもおこっていたね。馬車ウマだなんて言ってたな」

「ねえ、お馬になって」

「君がなれよ」

「あなたみたいなのそんな大きな体をのせたらつぶれるわよ。夫が馬になるのよ」

「そうかなア」

「ね、早く」

「しょうがないなア」

「手づなは、このタオルでと」

「さあ、早くのれよ。動きますよ」

「まって、さアこれをくわえるのよ」

「ウ、、、、、クルシイヨ」

「さア、走れ。ハイドウ、ハイドウ」

×月×日

夫はまだ帰つて来ない、なにをしているのかしら、時間はもう十時になる。おみおつけもさめてはわかし、さめてはわかしで、まもなくになっているようだ。会社に出るときなにもいわないで、出たくせにどうして遅いのだろ

う。ふっと泣きそうになったので婦人雑誌をみる。「良人の操縦法」という記事がある。拾いよみしてみると、よその夫はこんなにもウソをつき、いうことを、きかないのかと思う。それにくらべたら私の夫は羊みたいだ。でも、こんなに遅いのは何故かしら。

こんなことも書いてある。

「こんなとき、決してあなたは泣いたり、さわいだりしてはいけません。つとめてニコやかにしながら、相手が何故おそくなったかを偵察するのです」

ティサツだなんて、いやだわ。夫婦でヒミツをもつのはいや。この時コツコツと足音がして玄関があくや「タダイマ」と夫の声。思わず「お帰りなさい」ととび出すと、ふすまのかげでいきなり夫にとびつかれ、だきしめられて唇をふさがれてしまう。呼吸が出来ないくらい苦しかったが、うれしかった。

体をゆるめてくれた時、わたしは夫にむしやぶりついた。

「バカ、バカ」

と夫の胸をこぶしで叩く。夫は逃げながら部屋を走る。私も追いかける。

「もうやめよう」

と夫が坐ったので、なおもむしやぶりつい

て夫の膝の上にまたがった。ミニスカートなので私の太ももがあらわになる。夫はその脚をパンパンと叩いて、

「キスしようか」

と笑う。

「いや、またお馬になって」と甘ったれると「よし、よし、あとでね」と夫は私を、まるで子供扱いだ。ああ、私は幸せだ。

○

店頭で数多く出ている週刊誌は、今は全くの花ざかりである。中には二流、三流をはるかに通りすぎて、五流位の内容のものもある。

「マンガエース」という二月二十三日号の表紙がおもしろかったので買ってみた。

マンガ絵の表紙だが裸の女がペンギン（山高帽をかぶり蝶ネクタイをしているので男）

の背に馬のりになって空をとんでいる絵だ。

そのペンギンが女をふり返って涙を出しているところが、いろいろに考えられて愉快である。パラパラめくってみると、女子寮にしのびこんだ男が四人の若い娘におもちゃにされた話や、隣の若夫婦がお馬ごっこをして遊んでいた話など、さし絵を入れて出ていた。この外、豊原路子の連続物らしい短文で「人間便器」というのがあって自分の経営している

ヌード・スタジオでのいろいろな話の中で、モデルに「君のオシッコをのませて」と、せがむ男の話などが出ている。

小説現代三月号の、大場正史の「マゾヒズム」に出ていたが、マゾは女性が多いように考えられ勝ちだが、実際は男の方が多いとある。マゾの男性がどんどん増えて、サド女性とマゾ男性のプレーが当り前のようになり、性生活もこれが前戯のようになっていたら楽しい世の中だと思う。

大映の「秘録おんな牢」は史実にもとずいて小伝馬町の牢内を再現したとあるが、この中でのおんな牢の物語である。見世物的なきらいが多分にあるが、結構楽しめる映画である。

安田道代のふんするおしのが十八才の若い女でありながら無実の罪で牢に入れられるが着物の上から首、胸、腰にかけた縄でうしろ手にしばられ、与力同心らに引きたてられてゆく場面がある。

縄尻をもった方が女でしばられているのが男ならなアと思ったりする。

むかしは、こうして被疑者にせよ捕えた時は町の中を後手にしばって引いていったので

あろう。

尤も現代でも、恰好こそ違え腰なわというのもあるし、戦争中、脱走兵などを刑務所に連れてゆくのに、うしろ手にしぼり、ゴムのコートのようなものを上にかけて護送したようである。ゴムコートのうしろに、縄尻が出るように小さな穴があげられていた。

戦争熾烈の時は憲兵のヒトリ舞台で、数多くの拷問や、残虐行為があったが、戦争の中のサディズムは本当になくしたものだ。先程の雑誌が見られるのも、平和な世の中であればこそだ。

○

ミニ・スカートの流行で、最近の女性は汽車の中などで、腰かけた時に出てくる膝小僧は平気で出すようになった。

ちよっと眼をやると、急いでスカートのすそをひっぱって膝小僧をかくしていた時代はすぎ去るのかも知れない。

この春のワンピースは、Aラインの復活でウエストをルーズにしてスソをひろがらせたミニが大半だという。カロラー・ラインというそうだが、服装からしてますますマゾ男をよろこばせてくる時代となる。

カロラーとは花冠の意味という、花のふく

らみをかさにしたような、ということらしいが、前にも書いたとは思うが、男の上に馬のりになるのには便利？　な服装である。車のカロラーは「ひょう」といっしょくたにされているが、これとても精かな女ひょうを連想出来ておもしろい。

ミニ娘がたくさんというキャッチフレーズで、新宿のキャバレー「V」にゆく。

時間がサービス・タイムだったせいか混んでいたが、私についたのは若いなかなかの美人であった。名前も「ナナ」さんで魅力的だし番号が七七番とは恐れ入った。胸のはだけた赤いワンピースだが膝上、二十五センチとあったところ。色が白くて眼の大きな女性で二本の太腿が又、ピチピチした張りきったいろあいで、キスがしたくなるような感じで形もいい。

「これは運がいい」と私は内心ほくそ笑み、少々浪費をしてもと考える。

ナナさんは体格もよく、胸のふくらみは、下からもちあげているにしても挑発的ないわゆるポインという表現がピッタリだ。

うまいことに、店が混んでいるので、私のような一人客にはホステス君たちがとりかこまない。然も席が一番おくの、柱のかげなの

で、要領よくやればテーブルの下に上半身だけを二ツに折って彼女の脚にキスも出来る。

私はビールをのみながら、わざと少しだがグラスをかたむけて、ナナさんの膝小僧にビールをこぼした。

「いやァー、つめたい！」

「あッ、ゴメン、ゴメン」

私はハンカチをとり出して、彼女のシームレスの靴下の上からぬれたビールを拭きとりはじめる。

「ううん、大丈夫よ、いいわよ」

というのを、丁寧に拭きとり、そっと私はその太腿に唇をつけた。

「ウワァ、しびれる！」

彼女は大げさに私に抱きついて、脚へのキスにお返しをするつもりか、私の頬にチュッとキスをして来た。

「これ、おわびだよ」

そっと千円札をにぎらせると、大きな眼をクルクルとさせて「有難う」とうけとる。

「ね、ナナちゃんの足の先きの方にキスしたいな」

というと、彼女は笑い出して「いいわよ」とハイヒールをテーブルの下でとると、「よししょ」と、右足を左足のものの上に組むよ

うにのせて、足の先をテーブルのフチにのせる。大たんな行為にいささかおどろいたが、すばやく？ 周囲を見廻して、その形のいいきれいな足の甲にキスし、指先を口にふくんでみる。肌と同じような色の靴下の上からだが触感がよい、彼女は足の私を私のひざにのせて「男の人から足にキスされたのはじめてよ。わたし、カンゲキ。ね、ラストまでいてくれるでしょう」

私はまさかあと三時間半以上もここに居るのはと思って、「またあらためてくるよ。今度は遅く来るから」というと、

「もうのまなくていいからいるだけいてよ」と、しんけんだ。

「じゃ、もう少しだけ」

といていたが、いつの間にか十一時半になってしまった。

おきまりのコースで、行きつけの寿司屋にゆく。彼女、あまりスレていないとみえて、案に相違して何となくオドオドとしている。みやげをもたせると、うれしそうにニコツとして、

「お礼にお茶を御馳走する」といい、自分のアパートに行こうという。

私も年がいもなく、今までつきあったのだ

しと自分でいいきかせてついてゆく。

街の路地を可成り入った小さな家の二階が彼女の部屋で、三畳一間である。女の子らしい部屋のかたがわの壁には、本棚がおかれ、ぎっしりと本がならべてある。なるほど、すれていないわけだと、心に思ったが、しらぬカオをしている。

私はすぐ帰ろうと、心にきめて、彼女がお茶をわかすのを待つ。

ドアの横がガス台になっていて、短いカーテンで仕切っており、そのカーテンの下に彼女の脚が形のいい恰好で、うしろをむいている。いろんなことを考えていたのが、どうも自分の娘に接するような気持ちになって、どうにもならない。

しばらくして、私は「そろそろ、帰ろうかな」と腰をあげようとする、

「小父サマ、何もしないのね」

といぶかしげにいう。愛くるしい顔だ。

「ウン、ナナチャンは子供みたいで……」

「あら、シツレイね、子供だなんて」

私はひょいと自分でも気づいて

「そうだ、ナナちゃんは子供だから、子供の遊びをしよう。さあ、僕がお馬になってあげるからのっていいよ」

と、せまい部屋の中で四ッ這うと、彼女は急に笑い出して。

「いや、そんなのいやよ、だって……」と困った顔でいう。

「さあ早くのれよ、僕も楽しくなるから」
「だってえ……」

といていたが、店での大たんさはかけらもなく、おずおずと私の背にまたがった。

違慮しながらなので、そう重さはなかったが背中彼女のぬくもりを感じるやいなや、夢中になって私は歩いた。

「キヤア、おちるッ」

と彼女は私の両肩に手をかけたが、今度はずっしりと重みが背中に加わった。白い足が私の顔の横をブラブラとすると私はつぶれそうになり、足が畳につくとホツとする。三回ほど這い廻ると、今度は彼女も馴れて上手に私の人間馬をのりこなす。

帰りに、

「また来ていいかい」というと、

「お店にね」と軽いなされたが、「又、お馬になってね」と笑った彼女の言葉に、私はおうに満足をして、足どりも軽く引き揚げたのである。

告白

未知の願望

河上ユリ

M。マゾ。被虐。緊縛。羞恥……それらの言葉を耳にし、文字を眼にただけで、頬にホテリを覚えてしまう私。何かチョットしたことがらから、とんでもない想像をしてはひとり楽しみ、ひとり顔をあからめている私。

冬……とは思えないような暖かな日。毎日通うマーケット街への道筋にある小公園で、珍らしい陽気に、誘われてか、子供たちが遊びまわっています。私もついベンチに腰を降し、買物籠を横に置きそれに手を掛けて、元気な子供達の動きを眺めるでもなく眼で追っていました。

突然、籠に何気なくかけていた手の甲に、冷たいものが触れ、ザラツとした奇妙な感覚があり、反射的に手を引き眼をやると、いつ上ったのか、可愛い仔犬が、買物籠の向う側

で、声も出さずに私を見上げて小さなシッポを振っていました。

私はその可愛さにつられ、手を差し伸べて頭をなげようとする、仔犬はクンクン鳴き出して私の手にジャレつき、盛んにペロペロ舐めるのです。冷たかったのは鼻先きで、ザラリと感じたのは舌でした。ベンチの上でヒツクリ返り、猫のように四ツ足で私の手首にカラミつき、人みしりもせずジャレつく仔犬の可愛さに私の顔はほころびました。

その犬の動きがピタッと止まりました。向うで遊んでいる子供達の中から、一際高い声が出たからです。その声は再び飛んで来ました。ピクッと起き上った仔犬は、その声の方を眺めました。そして、三度び目の呼び声に主人の姿を見つけたのでしよう。ピョンとベ

ンチをとび降り転げるように、砂場に立ってこちらを見ている、子供の方に走ってゆきました。

私は、その仔犬の後姿に眼を注いでいるうちに、最近とくにひどくなって来た、いつものクセが無意識のうちに出ていたのでした。

手の甲や指先に残る仔犬の舌の感触が、いつの間にかフクラハギに、モモに、おシリに感じ始め、胸や背にまで及んでくると、私はサルグツワの奥で、苦しい悲鳴に似た呻きを噛み殺します。

“や、やめてエ”

と、声にならぬ声をあげて、海老のように屈伸し、全身でそのザラザラした舌から逃れようと悶えると、強くクビリ上げられた胸の縄が、後で交叉してまとめられている両手首を更にしめつけ、上膊部の血行をせき止めるばかりにしばらく上げてくるのです。

“苦しいのか?”

どこからか声が聞えます。私はその声の主をさがそうと顔を挙げようすると、いきなりその半面が、なま暖かく柔らかいもので押し潰されそうになります。犬の足か、人間の足かはわかりませんが、足の裏であることだけはたしかです。舌をピタッと押え、歯の間

を割って、唇の両端を裂かんばかりに喰い込み、私のフックラした頬をヒョウタンのようにクビリ上げて、クビの後で結ばれているナイロンストッキング。その半面を足の裏で、そして反対側の半面を、敷物のように拡げたゴム引のレインコートの床でグイグイと圧迫されて、私の息はつまりそうです。

“悦しいんだろ?”

足の裏がグリグリとこじられて、私は全身で跳きます。肌を幾重にもクビリ、太モモから足クビまで容赦なく巻かれた縄以外は、総て太陽の光りに晒され、持ちまへの肌艶に加えてニジミ出した汗で輝きを増し、色白の肌がホンノリと桜色になって、ウネウネと悶えをくり返す私に、足の裏の主は冷酷に声をかけ、更に

“悦しいんだろ? どうなんだ。返事ぐらいするもんだぜ”

といいながら、顔を踏みつけた足を除けるどころか、縛ってある上膊部の上まで他の足でグイグイと踏みつけるのです。

“返事をしろっていつてゐるんだぜ”

と、執拗に足の主は無理なことを云って責め立てます。

“どうしてもしないつもりだな”

という声と共に、冷たいものがヒタツとおシりに押しつけられます。犬です。やはり私をこっしていじめているのは犬だったようです。その冷たいものは、今度はモモに、次にはおナカにと、とびとびに連続して私の肌を襲ってきます。たしかに犬の鼻先に違いありません。そして次には、あのザラツとした感触が、ところ構わず這い廻り始めたのです。

私は呻きながらのたうち廻ります。

“やめて、カンニンして!”

と叫んでゐるつもりですが、一向に声にならず、グイと踏まれている足裏の圧迫は、いつの間にか頬から胸の隆起へ、そしておナカやモモへと移動します。冷たい鼻先と舌が、圧迫のあとへ間断なく襲ってくるのです。そのうえ、思いもかけないところに、爪か歯かしりませんが、刺すような痛覚までが加わってきて、まます私はもたえ苦しみ、バカデツカク大きなレインコートの冷たさを全身の肌を感じてのたうち、転げまわらねばならぬのです。

“なぜ、なぜこんなにいじめるの?”

私が誇らかに自信を持っている乳房に、めり込みそうな圧迫と、冷たい鼻先とザラツとした舌、そして喰い込み貫ぬく、鋭い歯先と

爪、その上、ギッチリと締め上げられている縄目の痛覚。それらを一度に感じながらそう問いかけると、ハンサムな犬男の顔が眼の前に現れて、ニッコリ笑って云います。

“いやなら、やめよう”

私は、ハッとして大急ぎで首を横に振りました。イヤイヤをしたのです。もっといじめて……と云いかけた時、

「やめた!」

ハッキリとした声がしました。

今度の眼の前に現われたのは、走り廻って遊んでゐる多くの子供達でした。私はうろたえて自分の体を見廻します。チャンと家を出た時の服装をしています。両腕を伸ばし、上へ挙げてみました。背中へ廻わされてもいまませんし縛られてもいけません。ホッとすると同時に、カッと顔が火照ります。

私に、冷たい実感と舌の感覚を与えてくれたあの可愛い仔犬が、ずっと大きい他の犬とふざけているのが見えます。

すこしうろたえ気味に、つとめてさり気なくベンチから腰を上げる私でした。

全く、自分で自分がオカシイと思う時があるのですが、白昼、こんなに健康的な雰囲気の中でも、無意識のうちにこうした幻想の世

界に踏みこんでしまうことは最近はそんなに珍しくないことなのです。

ちょっとしたキツカケ、例えば、つい先月のお正月の間にでも、風あげに興じている弟を見てやりながら、自分が棒に縛りつけられて風に吹きさらされるところを連想したり、電線にひっかかった風の身の上を私自身に置き換えてみたり、近所の女の子の羽根つき遊びから、マリのように丸く縛られて吊り下げられた私が、数人のたくましい男の人の手で叩いたり突き上げられていじめられている情景を想像してしまう有様だったのです。

まだありました。三日の日でした。お友達に誘われて、その人のお家でカルタ遊びをしました。読み手の声と同時に勢いよく叩き押えられる絵カルタに、私を置き替えてしまったのです。

ズラリと並べられた多くの囚女は、ムキ出された肌に強く縄をかけられて、サルグツワに声をせきとめられて呻いています。それぞれ縛られ方は違うのですが、その多くの女は全部が私自身なのです。

とり手は沢山いましたが、揃って素晴らしい体格のハンサムな好青年ばかりです。ちょうど、アマチュアレスリングの選手のように

服装もそっくりのいでたちで、その青年たちが、読み手の声に応じて幾人も縛られた私の間を駆け抜け、ハイッとばかりにムキ出しの肌を叩いて、グイッと力まかせに押えつけてるのでした。その手は同時に幾本も襲ってきて、殆んど同時に叩きます。一本の掌はおナカを、もう一本の手は乳房を、そして他の手が、おシリや太モモを、相前後してピシャと高い音をたてて叩くのです。そればかりかそれらの手が同時に、先取権を主張するように、強い力で叩いたまま押えつけて他の人にさらわれまいとします。

私は何カ所かの同時打ちに悲鳴の変じた呻きをあげ、ところ構わぬ圧迫に跳くことも出来ないのですが、最初に叩かれたところはどこかを身振りで合図しなければなりません。

それを知らずと、遅れて叩いた手は放されはするのですが、放される瞬間に、押えつけていたのが一層強くなって、グイグイとこじりあげたり、つねり上げたり、ひっぱったりして、とり損ねた無念さをヤツ当りして行くのです。その度に私は呻いたり悶えたりしなければならぬのです。取得権の決った青年は、意気揚々として獲得カルタを自分の陣へ運びますが、それが、髪の毛を掴んで引ずつ

たり、太モモを握ってブラ下げたり、逆にして肩からひっかついだり、まともに運んでくれる人はありません。

何分、絵カルタの全部が私ですので、その苦痛の繰り返しは、とめどなしです。

運ばれた私は、さきに捕獲された私の上にキツチリと積み重ねられます。数がふえるにしたがって、下積みの私は幾人も体重をもろに受けて、全身を汗まみれにして重圧に耐え喘がねばなりません。

こんな妄想のトリコになり出したらとめどがなく、お蔭でカルタは少しもとれず、皆から、「彼氏のことを考えていたんでしょう」とさんざんヒヤカサレました。彼氏……そうかも知れません。でも、こんな変な夢をすぐに描いてしまい、本当にはいじめられるどころか、縄一つ巻かれたこともないのに奇妙な憧れを持つ病気？にかかってしまった女をお嫁にもらって下さる方がいらっしゃるものでしょうか。奇クの読者なら居られるでしょうが、未知のことだけに、Sと自認している方はやはりすこし怖い感じも致します。それはともかく、世間知らずの私がなぜこんな夢に溺れるのか不思議でなりません。

【ガンペッタ】

古来、コルシカでは裁判や法律より、銃とか、あいくちの方が尊ばれて来た。目には目歯には歯というような原始的な復讐、これをガンペッタ、という。

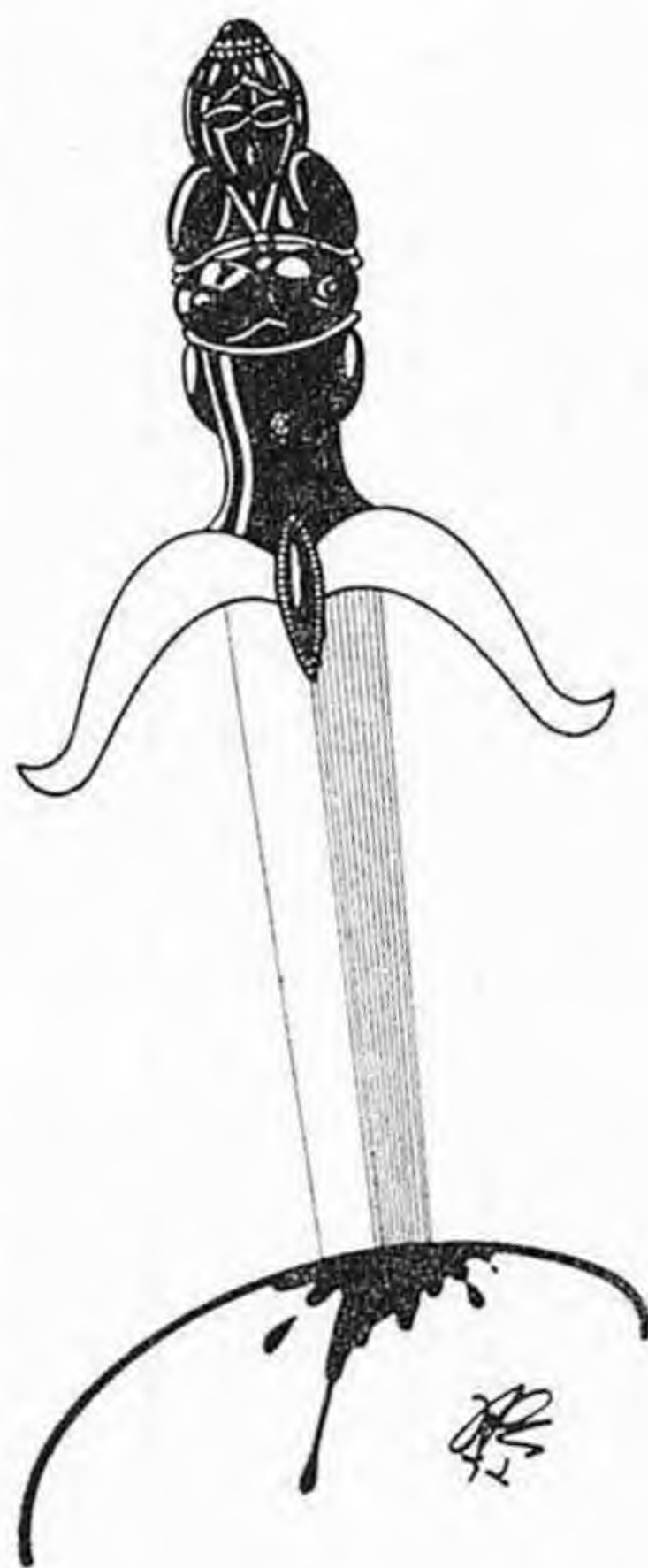
シーブ・シャンク

長い間しめ切ってあった土蔵の中は、プンと微臭かった。その匂いは、緋沙絵夫人に二十年前の記憶を、昨日のことのように蘇らせる。太古のままの原始的な本能が、緋沙絵夫人の総身を駆け廻っていた。今は憚るところもなく残虐な牝獣と化し去ったのだ。燐光を救っているようにさえ見える彼女の鋭い眼光に射すくめられた、二人の男女は怖れおのきながら寒々とした裸か身を頼りなげに寄

復

讐

(その10)



千葉青鬼

せあっていたのである。

声を出せば緋沙絵夫人とわかってしまう。

今のところ、新藤かねのマスクで三島を怯えさせていた方が都合がよかったから、一切沈黙したままで通すことにしている。

トシ子の方は新藤かねのことを知らないの
で、直感的に恋のさや当てと思いこんでしま
った。すでに薬の陶酔もどこへやら、命だけ
でも助かりたい。一刻も早く許されて外へ出
して貰いたいとの願いが、つのるばかりだっ
た。そのためには一切を、こんな恐ろしい三

島との色恋なんか捨て去っても惜しくないと
考えはじめていた。もともと互いに遊び半分
の積りだった。命をかけてまで守るべきもの
ではなかったのである。しかし、そうはいっ
ても、現在の三島にとっては手痛い裏切りに
は違いなかった。

トシ子は、いきなり緋沙絵夫人の足下に、
その若鮎のような裸身を投げ出すようにして
必死の眼差しで同情を買って貰おうとする。
気のついた緋沙絵夫人は、猿轡をはずしてや
った。

「すみません、許して下さい。どうか助けて下さい。わたしは何にも知らないんです。社長さんに無理矢理……。とうとう、こんなことになってしまったんです。わたしのせいじゃありません。ですから、ですから、たすけて下さい。わたしを、ここから、出して下さい」

うわずったような声が、トシ子の口からとび出して来た。緋沙絵夫人は、あくまで石のように黙りこくっている。

「何でも、何でもいたします。お金なら、お金ならあるだけ差し上げます。社長さんと別れます。ですから……」

興奮のあまり、舌がもつれて声も途切れがちになってしまう。

声が洩れないように窓も戸もピッタリ閉ざしてある土蔵の中には、何やら熱気のようなものが漂っていて息苦しくさえあった。百ワットの裸電球が低い天井からぶらさがってかすかに揺れていた。時代で薄黒くなった漆喰壁の表面を緋沙絵夫人のつくった影がゆらゆらと動く。その影と全く同じように、真黒なスラックスとセーターに身を固めた緋沙絵夫人は、豊満な肉体の微妙な曲線を余すと

ころなく誇示するかのように仁王立ちに立っていたのである。昨日まで新藤の前に褶伏していた女奴隷は、今日は夫とその情婦に復讐しようとする絶対的権力者に逆転した。どちらかといえば、緋沙絵夫人の心性からいってこうした状況の方が、遥かに似つかわしかった。理性の抑制さえなければ、いくらでも残虐になれるタイプの女性がある。今、緋沙絵夫人は既に理性を喪失してしまったようであった。彼女には、この憎むべき二人を如何にして苦しめ苛め抜くかということで一ぱいで新藤との約束事や恵利香の自由などは、どこかへとんで行ってしまっていた。

部屋の四隅には、かつて新藤かねを大の字なりに固定した鉄環が赤錆びたまま残っていた。後手ながら、わずかに自由を許された両足をつかって暴れまわる三島を押さえつけてその足首を別々に柔い綿ロープで縛りつけることは大して骨の折れることではなかった。そして右足に繋がる縄尻を一隅の鉄環に通した上で、今度はトシ子の左足首にククリつけた。二人の足首をつないだ綿ロープの長さは約一メートルばかりであった。次に、三島の左足を縛った方の綿ロープに小さな滑車を入

れて、又もやトシ子の右足に五〇センチ程の長さで結えつける。滑車には別の、ここは稍太目のロープがとりつけてある。この太い方のロープを、さっきの鉄環とは部屋に関して対角線の位置にあるもう一つの鉄環にくぐらせギョツと引き絞るようにすると二人の両足は嫌応なく「人」の字型に開いて行く。更にその太いロープ、シャンクの結びにして、緋沙絵夫人は全身をその縄尻にかけて、勢いよく引き締めるのである。何回か引締めているうちに、「人」「Y」と対照をなしていたフランスがやぶれはじめる。若くて肢体の柔軟なトシ子の両脚がドンドン開いて行くのに、固くなってしまう三島の足の筋肉が従って行けないからである。三島が限界ギリギリまでになったところで今度は全部の力がトシ子の足首にかかりはじめる。はじめてトシ子は悲鳴をあげた。

「痛いッ。いやッ。もうだめ。たすけて」
きれぎれにさけぶのを無視して、いよいよロープは引きしぼられる。二人とも、恰も車裂きの刑にあっているようなものであった。そしてとうとう、トシ子の両足はひらけるだけひらかされて、「人」の字が「上」の字型になったかと思われるばかりに、一直線にな

ってしまった限界ギリギリで漸く緋沙絵夫人は手を放したのである。こうなつては、どちらかが足をスボめようとする、相手の足を一層引っぱらなければならない。相互責めの連縛だった。緋沙絵夫人は少女時代勤労動員に行かされたことがあって、そこが適々軍需物資の出荷を取扱っている補給廠であつたところから、トラックの荷台に荷物を締めつけるロープの結束法、つまりシープシャンクを覚えていたのである。幼いころのちよつとした知識が、大きくなってから役立つことは多いが、まさかこんな所で応用されるとはさすがに考えも及ばないことであつた。

真四角な部屋の、埃の積つた板敷だった。その対角線をはさんで両足を対照的に固定されてしまった二人は、仰向けの苦しい姿勢のまま、ただウンウン唸るのがやつとの有様であつた。

緋沙絵夫人が、トシ子の耳に口をつけるようにして何かいった。ささやきの命令を受け顔をクシャクシャにしてトシ子は激しく首を横にふつた。思いなしかトシ子の全身は鳥肌が立っているようであつた。猿轡のままの三島は、無理に首を起こして、何が起るか見定

めようとする。

ピシリとトシ子の頬が鳴つた。緋沙絵夫人が力一ぱいハリとばしたからである。ワツと呻いてのけぞつたトシ子は、気が狂つたように

「いやです。そんなこと、死んでも出来やしない」

と叫んだ。

無言のまま緋沙絵夫人はトシ子の頭の方に廻つた。左手でトシ子のショートカットを掴む。いつの間にか右手に握っていた断ちバサミで、いきなりその髪を切刻みはじめた。びっくりしたトシ子は、

「ヒイーツ、やめ、やめてえ」

と金切声をあげる。そんなことには頓着なく、虎刈りながら、トシ子はイガ栗頭に仕上げられてしまった。あまりのことに呆然となつてしまったトシ子は、緋沙絵夫人が二人の足で作られた菱型の間に入ってシャガミ込んだのに気がつかなかつた。

「熱いッ」

火傷をしそうな熱気が、急に襲つたのである。自由にならない後肘に力を入れて、やつと上体を起してみると、ライターを手にして緋沙絵夫人が、トシ子の肌を焼こうとしてい

るではないか。火が皮膚に近づく毎に、チリチリと音がして特有の変な匂いが立ちこめはじめ。常軌を逸した事の成り行きに、トシ子は降伏を余儀なくされる。

「やめて、やめて。やります。やりますからやめて」

既に白旗は掲げられた。被征服者は征服者の言いなりとなることを誓つた。緋沙絵夫人は菱型の外に出て、トシ子の動作を見守るのであつた。

アクロバットダンサーのように一直線に足を開いているトシ子にとって、起き上るのは大変な難行苦行だった。それでも、ノロノロと上体を立て、やや横向けになって平衡を保つ。体操選手が平均台の上でよくやる姿勢である。だが体操選手でもないトシ子にとっては、関節が外れるかと思うばかりである。たちまちバランスを失つて、今度は三島の脚の間にドウとばかりに陥込んでしまった。しかし、これこそ緋沙絵夫人が要求した姿勢なのである。引きさかれるような痛みを辛じてこらえながら、トシ子は必死で上体をかがめていった。それにつれて、彼女の唇が三島の腹部をかすめた。

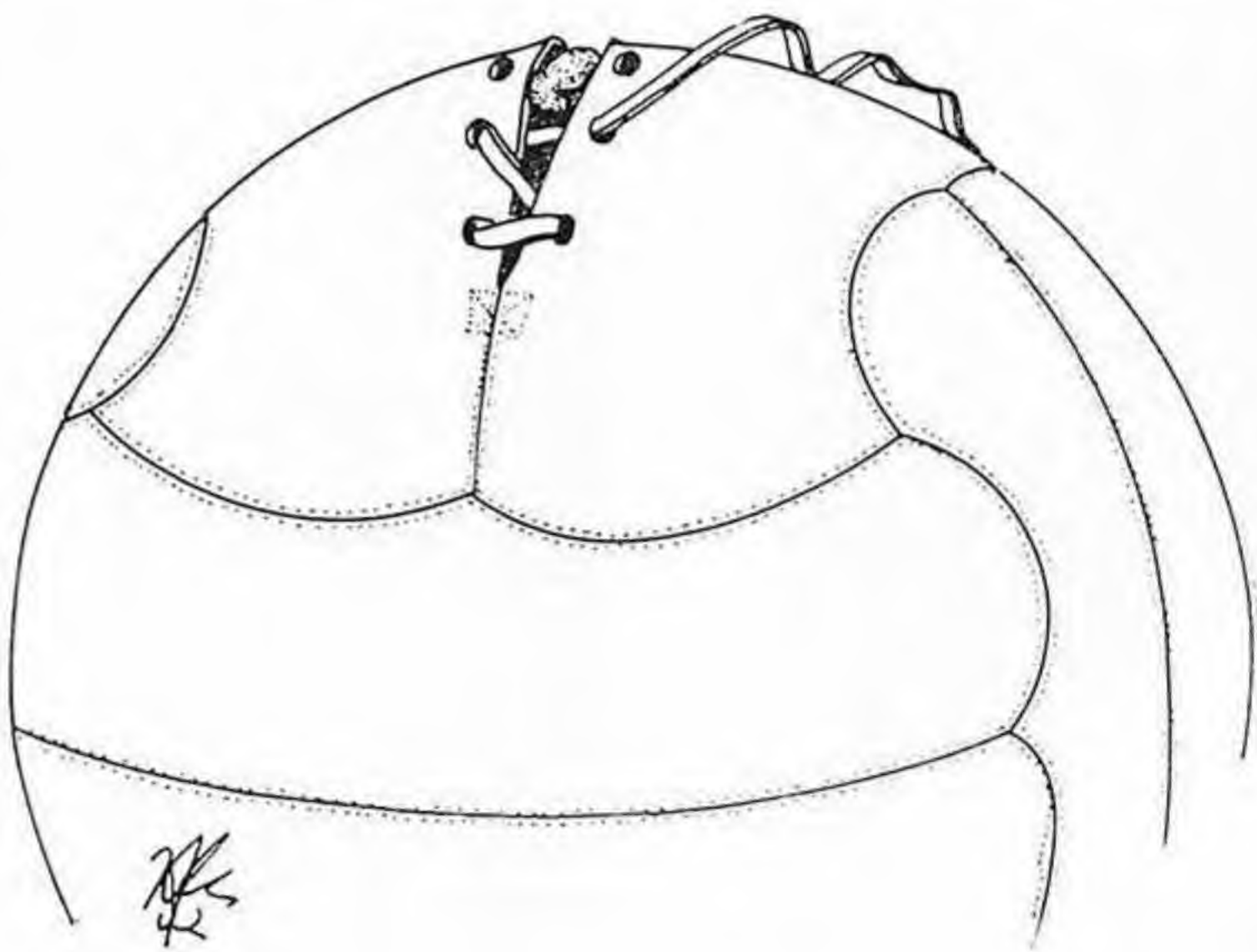
緋沙絵夫人の足が、トシ子の背中をふみつけた。言われなくてもトシ子にはその意味がよくわかった。早くやれという催促なのである。ゾツとするような嫌悪感に、ガタガタと慄えが来る。緋沙絵夫人の手が今度はトシ子の首筋をつかまえて二、三度、上下させた。こんな状態では、土台むりなことだと思いの、無理を承知の上で、やれという命令なのだ。泣く泣く従う他はないトシ子だった。

汗と涙と、鼻水と唾液、トシ子の分泌物がごちゃごちゃに混ぜ合っていた。その努力の甲斐があったともいうべきであろう。たしかにトシ子の類い稀な運動の効果は、三島の上に歴然と顕われてきた。

緋沙絵夫人は、いきなりトシ子の肩を蹴とばした。ハネ返るように仰向けにされたトシ子は、文字通り絹をさくような、悲鳴をあげた。大腿の関節がグリツとなって、激しい疼痛が彼女を貫いたからである。

まだ三島の腿のあたりにからみついていた腰紐を、緋沙絵夫人が解いてそのつけ根を今度は細いピアノ線で、ギリギリと力一ぱいに絞りながら結える。

緋沙絵夫人の手には、鋭利な断ち鋏があっ



た。アッという間もなく鮮血が飛び散る。いとも簡単に切りとられて、油汗をふき出して悶絶する三島。

いつ自分に鋒先が向ってくるかも知れないので、見まいとしても目をはなすわけには行かないトシ子は、その惨烈な光景を眼端に入ってしまった。スーッと身体中から血がひい

て行ってしまうような気がする。だが、長くそうしているわけには行かなかった。今度はトシ子の方にお鉢が廻ってきたからである。「ワッ」

ありったけの声で叫ぶ。両手、両足を拘束する縄目を引きちぎろうとでもするかのようになり身もだえする。トシ子は狂ったようにのたうちまわった。何故なら、緋沙絵夫人が血まみれの肉塊を手にしてトシ子に迫って来たからである。何とも言いようもない程おそろしいことだった。しかし、いくら抵抗しようとしたところで、抵抗しきれるものではない。両足が一直線になるまで引っぱられているのだ。僅かに動かせる上体といっても固く後手に縛られていては、緋沙絵夫人の陰惨な責手から逃れられるものではない。

坊主にされていなかったら、頭髮が逆立ってしまふのがよくわかったかも知れない。気がふれないのが不思議なくらいだった。残酷ということを絵で画いたような緋沙絵夫人は悪鬼の所業の後に糸と針を使いはじめたのである。丁度ハチ切れそうにふくらませたバスケットボールの空気口を、外皮に押し込んでハジけないように細い皮紐で締上げてとめる操作に似ていた。しかし、トシ子の方は生身

である。太い鉤針を通されるたびに、哀れな悲鳴をあげるのであった。皮膚に針を刺されるだけでも痛い上に、丈夫なナイロン糸がずれて、その上ギョツとしごかれるのだから、たまったものではない。冷汗を流し、歯噛みして身をよじったところでどうにもならぬ。物理的な苦痛でさえ此の通りなのに。場所が場所である。縫い込んだモノもモノである。厭悪感と屈辱感は悪鬼のようにトシ子を責めさいなむのであった。

正に地獄図絵であった。床に流れる血潮。プンと鼻をつくその匂い。しかし、あきれたことに緋沙絵夫人は、それにたじろぐ様子さえない。むしろ、その異常性をひき出されたような有様だった。動機は嫉妬であり、復讐であつたとしても、手段はその範疇を遥かに超え去ってしまった。血の色に酔ったように、眼を輝かしている姿は、いにしえのサロメか清姫かと思ふばかりのおそろしさであつた。

氣息奄々たる二人を前にして、緋沙絵夫人は漸くマスクをとる。そして、三島の猿轡も外してやった。極度の恐怖は氣絶することを

許さないのかも知れぬ。二人ともつき上げてくる激痛にあえぎながら、それでも必死の眼差で、緋沙絵夫人の出方を見守っているのであつた。

やっと口が自由になった三島は、相手が緋沙絵夫人であつたことで認めても、それを憤ることも、驚くことも出来ないくらいに打ちひしがれてしまっていた。わずかに、かすれたような声で、

「許してくれ、わしが悪かつた。何とでもする。これ以上わしを苦しめないでくれ」

と、くりかえすばかりだった。緋沙絵夫人がはじめて口を開いた。ゾツとするように冷い声だった。

「あなたは私を裏切つたのです。裏切者がそれ相当の罰を受けるのは当たり前です」

傷の痛みに呻きながら三島はもう死にもの狂いである。氣の違ったような緋沙絵夫人が何をするかわかつたものではない。ひょっとして、こんなぶざまな恰好のまま殺されてしまいでしたら恥の上塗りだとさえ思う。

「助けてくれ。これから何でもおまえのいいなりになる。もう浮気は絶対にしない。だから、助けてくれ」

大の男が自分の妻に対してこうして許しを

乞うみじめさすら、今の三島には客観する余裕がなかった。

「何でも、キット私の言う通りになさいますか？」

ニヤツと冷い微笑を泛べながら、緋沙絵夫人がききかえした。

「する。何でもする」

「それなら、これを喰べてごらんさい」

三島の鼻先きにつきつけられたのは、床に散らばっていたトシ子の髪の毛だった。

「髪の毛はアミノ酸を含んでいるそうです。

案外、栄養になるかも知れませんわね」

わざとらしく丁寧な口調で緋沙絵夫人が言う。哀れをとどめたのは三島だった。どんなことでもすると言いつつ手前、出来ないといつたらそれこそどんな事になるかわからない。目をつぶって、それを口で受け、無二無三に呑み込んでしまおうとしたが、軽い毛髪の束は簡単には喉を通らないのである。かえって、口中にへバリついてしまつて、どうにもならない。一本の毛がまぎれ込んでもうるさいものなのに、一握りといつていい程押し込まれては、その苦しみは又容易なものではなかった。おそろしさの一念でそれでもやつとのことで大部分が喉から下がつて行つたよ

うに感じられた。すると、
「こんどは、もう一つ特別なご馳走を差上げますわ」

緋沙絵夫人はこういいながら、身軽にトシ子の胴の上に馬乗りになったかと思うと。トシ子の胸の隆起の真中に小豆粒のようについ

ていている可愛らしい突起をツマミあげ、素早い動作でチョン切ってしまった。
「ギャーツ」

何でたまろう。魂ぎるような絶叫と共に、のけぞるように反りかえったトシ子は、みるみる噴出する血液で胸乳を染めながら気絶してしまった。

緋沙絵夫人の手のひらには、二つの小さな肉片がのっていた。ニンマリと悪魔の微笑をたたえて、三島の方に向き直ると、
「さあ、召し上れ」

三島は緋沙絵夫人が完全に錯乱していると信じた。気狂いに刃物——とは文字通りこのことである。

「まで、まってくれ。もう勘弁しろよ。そんなものが喰えると思うのか」

弱々しく抗議する三島であった。

「そうですか、喰べられないとおっしゃるんですね。それなら食欲が出るようにして差上げましょう」

緋沙絵夫人は、そういいながら三島の右足先にしゃがみこむのだった。右足をまたぐようにして背中を見せているので、三島からは手許が見えず、何が起るか見当もつかなかった。突如親趾の爪を鋸でも刺し込まれたような鋭い痛みが襲ってきた。

「ワァッ！」

と思いきり叫びながら、やっこのことで身をよじって覗き込もうとすると、丁度、緋沙絵夫人が、むしり剥がした爪をペンチに挟んでふりかえったところだった。

「いかが？」

能面のように固い笑みを泛べた緋沙絵夫人は、ペンチを三島の鼻先きにチラつかせながらいうのだった。

「まだ食欲がないとおっしゃるんでしたら、左の親趾の爪を剥がして差上げますことよ」
ツンと鼻先がキナ臭くなって、傷の痛みがズキズキと突き上げてくる。

「ま、まってくれ。たべる。いう通りに喰べるから……。」

「そう、お利口さんですわねえ。さあ、アー



ンとなさいませ」

嘲られてもどうすることも出来ない無念さに、にらみつけるような、眼ざしも哀れなかった。

「み、水をくれ。たのむ、喉が苦しい」

ニンマリ笑って緋沙絵夫人がとり出したのは新藤からいいつけられて嫌々ながら持ってきた筈の紹興酒の壺だったのである。あれだけ恥しく屈辱にふるえた壺だったので、幸か不幸か、三島に仕返ししようとする今の緋沙絵夫人の立場からいえば、好悪は正に逆転してしまったといえよう。自らが苦しんだ一個の壺は、ここでは三島をはずかしめる有力な武器となったのである。

出血にともなう強烈な渴きが三島をさいな

んでいた。夢中で、さしつけられた壺の口から、ゴク、ゴクと吞んでしまってから、顔色をかえる三島の表情を見て、

「ホホホホ……」

勝ち誇った緋沙絵夫人の甲高い笑い声が部屋中に響きわたった。

「それは私の不要になった、ものなんですわよ。おいしかったんでしょ」

「畜生！ 悪魔ッ」

さすがに怒り心頭に発した三島は、痛みを忘れて怒号した。

「そう、その通りかも知れませんか」

あくまで冷静な緋沙絵夫人が切り返す。

「でも、そうおっしゃるあなたは人の棄てた腐肉を狙うハイエナじゃありませんか」

そういうながら余った液体を三島の頭から撒きちらすのであった。

「プッ、やめろ。やめてくれ」

怒鳴っても、暴れても、所詮そうしたことの空しさを悟されるのが関の山だった。やがて、精も根も枯れはてたかのように黙りこんでしまう三島だった。疲労と貧血と、入りみ

だれたショックが次第に三島を混迷させていった。

夢うつつの中で、三島は緋沙絵夫人がこういうのを聞いていた。

「これでもうお別れです。あなたの裏切りを思うと、たとえ一ときでもあなたを愛した私が残念でたまりません。私にはもう生きて行く氣力がありません。あなたの手が届かないところへ行ってしまうでしょう」

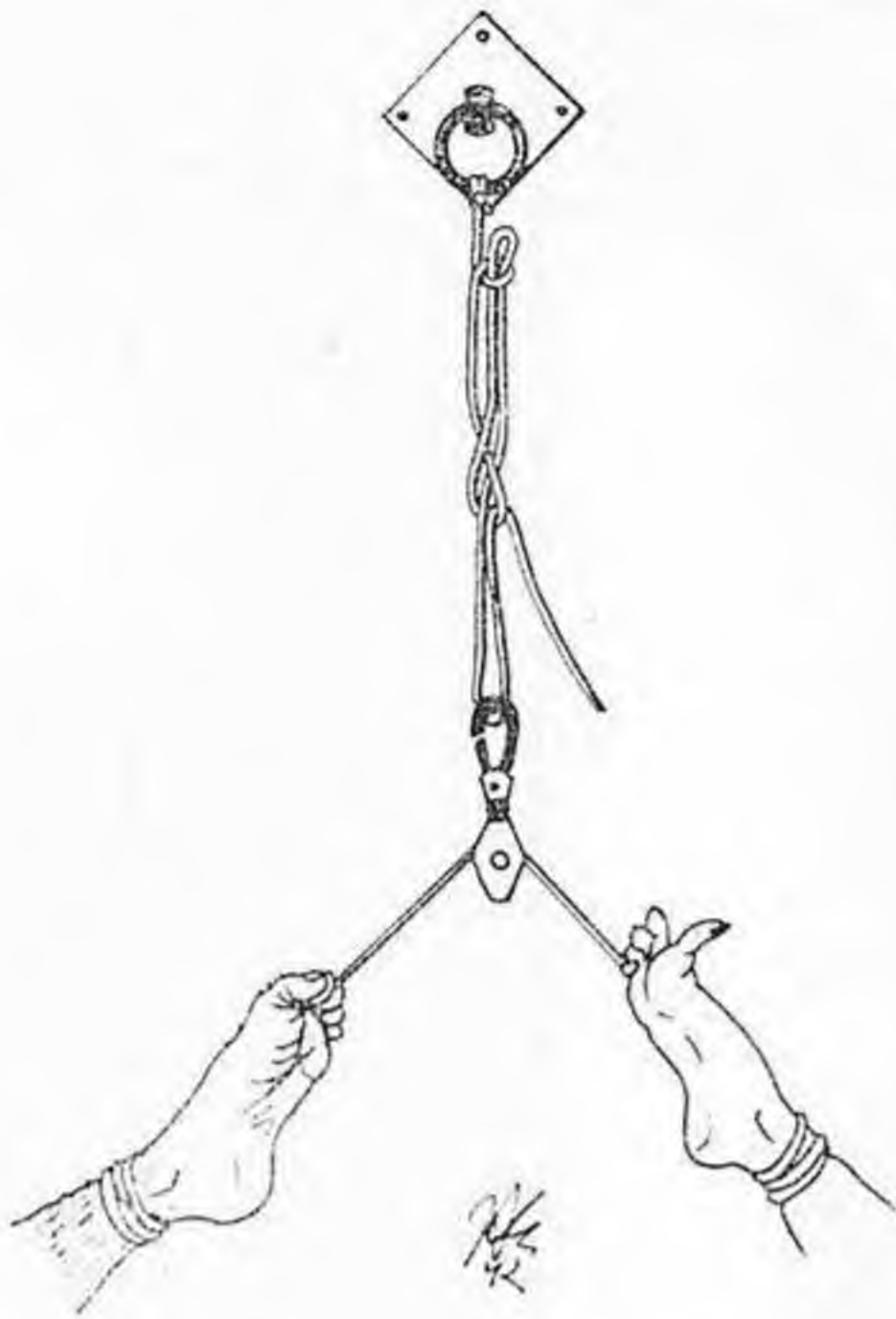
緋沙絵夫人は、さすが目の前がクラクラするようだった。血痕のしみこんだセーターとスラックスを脱ぐ、下着もとって棄てた。裸電球の黄色い光が、その裸身に深い陰影を作っていた。腹部を縦横に縛っているテグス系が、かすかに光って見えた。

全裸のまま、土蔵の外へ出る。熱しかった素肌が外気にひんやりと快かった。

まだ夜は明けはなれていなかった。

たった四時間ほどしか経過していなかったのに、緋沙絵夫人には、それが一ト月にも一年にも思われた。

ふたたび母家へとってかえし、勝手知った浴室で身体を洗い清めてから、着馴れた外出着を纏う。死に行こうとする身にはその他



新連載……時代伝奇小説



緋 縮 緬 地 獄

(ひちりめんじごく)

蔵 大 鳥 白 一 回 第

オランダ歌留多

「途方もねえことを考えやがったな。おい、新助、お京。一度この立花屋久六の杯を受けたものが、そうおいそれと、脱けだせると思っ
ているのかい。いえさ、逃げられると思っ
ているのかい」

立花屋久六の、それだけでなくとも赤黒くむく
んでいるような顔が、こみあげてくる怒りに
いっそう赤黒くなってふくれた。

「親分、ゆ、ゆるして……」

顔色が、蒼白になっている。久六のおそろ
しさは、十分に知っているお京なのだ。

そのお京よりも、新助のほうに血の気を失
って脅え、生きた顔色をしていない。肩のあ
たりが、わなわなとふるえている。

なにか言おうとするが、恐怖のために舌が
もつれ、声もでないようすだ。

いらだった源次が、その新助の横ッ面を、
ぴしゃりツとなぐりつけた。

「おい、新助、なんとかいっただろうだ」

源次は、立花屋久六の一の子分だ。

久六が、信頼しきっている男だ。

狡猾なこと、奸悪なこと、久六の身内では

一番だ。まむしの源次と呼ばれている。そこが久六の、信頼をよせるゆえんである。

お京も新助も、うしろ手に縛りあげられてこのうす暗い折檻土蔵の、湿っぽいゆかの上に引きすえられている。

すでに幾度か蹴られ、なぐりつけられているので、お京の髪の毛はみだれ、その乱れた髪の毛が、左の眼の上におおいかぶさって、凄艶とも、可憐ともいえる美しさをみせていた。

「ゆるしておくんなさい、親分、源次兄い。あっしは、逃げる気はなかったんだ。あっしは、このお京のあまにそそのかされたんだ」新助は首をのばし、久六と源次の顔をみあげながら、哀れっぽい声で、いくじなくわめきだした。

そのことばに、お京がキッと白い顔をあげた。新助の顔を、憎悪のこもった、するどい目でにらんだが、それはすぐに、軽蔑の色になった。

はじめにその話をもちかけたのは、新助のほうなのだ。

巾着切りの足を洗って、なんとかして堅気になりたい。生まれ変りたい。それにはお京さん、お前の手助けが必要だ。おれと一緒に

逃げてくれ……と、真剣な顔で、お京をくどいたものだ。

新助もお京も、同い年の二十一だが、お京がこの道へ入ったのは、いまから八年前である。つまり、お京は十三のときから、掏摸の修業をしている。

武州川越生まれの新助が、雪の降る晩に、空腹と寒さのために行き倒れて、立花屋久六の手に助けられたのは、いまから三年ほど前のことである。

それから、源次に従って、掏摸の手ほどきを受けたが、百姓生まれの新助は手先が不器用で、なかなか一人前になれない。

おまけに気の小さい男で、この商売にもっとも大切な度胸がない。

これまでに、なんども逃げだそうとしたのだが、掏摸の親分立花屋久六から、一度もらった杯を返すのは、容易なことではない。

そこで、お京に相談した。

お京は世話好きな女で、日頃から、不器用でよろまな新助に、同情をよせて、なにくれとなくかばってくれる。

その同情を、新助は、普通以上の好意と受けとったし、お京のほうも、いつまでも堅気のきまじめさが残っている新助に、惹かれる

ものを持っていた。

一緒に逃げよう、商売往来にはないこの渡世から、一緒に力を合わせて足を洗おう、と新助は思いきってお京に持ちかけた。

お京はお京で、じつは三年も前から、冷酷で残忍な久六の手の外へ脱けだす機会をうかがっていたのだ。

そこで二人、手に手をとって道行きとしゃれこんだまではよかったが、千住へあとひと足の掃部宿^{かみんじゆく}まできたとき、源次の手の者に追いつかれてしまった。

ちかごろ二人のようすがおかしいと、そこは、まむしと呼ばれる源次の嗅覚が、新助とお京の身辺を見張っていたのだ。

二人はたちまち縛りあげられ、駕籠で運ばれて、このざまだ。

「やい、新助。親分はな、お前のいのちの恩人だぜ。親分がお助けしなけりゃ、てめえなんぞ、三年前に大川端で凍え死んでいらあ。

その恩も忘れやがって……」

と、源次は、新助のわき腹を思いきり蹴りつける。ぎゃッと悲鳴をあげ、男のくせに、おいおい声をあげて泣きだした新助を、お京は軽蔑しきった目で眺めている。

こんな男と連れだって逃げるんじゃないかっ

た、という後悔が、チラと脳裡によぎる。

立花屋久六の、あつぽったく肉のついた唇が、下品にねじまがってひらいた。

お京の顔の前に、その分厚い下唇をにゅうとつきだし、ぺろりと舌でなめた。

「どうせ仕置きは覚悟の上だろう。ええ、おい、お京。並みの仕置きじゃ、おもしろくあるめえ。たいていのことじゃ、このずぶといあまは、蚊に刺されたほどにもこたえまい。素ッ裸にひんむいて責めあげ、その根性をいれかえてやろう」

「へい」

と、まむしの源次は神妙に頭をさげてうなずく。

おもしろくなってきやがったぜ、と内心、久六にまけないほどの舌なめずりをする。

ひごろから源次は、お京のからだを狙っていた。しかし、お京は源次を毛嫌いしてハナもひっかけない。

いくら誘いをかけても、全然のってこないお京を、源次は小面憎く思っていた。源次には、お京に対して、そんな私怨もあるのだ。

「やれ」

と、低い声で、久六は命令した。

「へいッ」

と、もう一度こたえて源次は腰をあげた。

反射的にお京はおびえ、肩をすくめた。

しかし、久六に対して、もう哀願のことばは吐かなかった。

いくら泣き声をあげても、こうなったら、途中でやめる久六ではないのだ。いや、泣き声をだせばだすほど、久六はよろこび、なおも続けるにちがいないのだ。

源次の吐く息が、お京の襟すじにかかる。

そして、まむしの頭のような手の指が、お京の肩にかかる。お京は、ぞおッとした。肩にとまった指が、しばらく離れないのだ。

まむしの吐くなまぐさい息が、こんどはお京の耳のうしろの、皮膚のうすいところにかかる。

お京は、二、三度全身をけいれんさせ、目をとじて、顎を首に埋めるように縮める。

着ているものを剥ぐには、いったん縄を解かなければならない。源次は、わざとお京の肌へふれる手さばきで、お京の手首にくいこんでいる縄から解きはじめた。

胸をしめつけていた縄が解かれたとき、お京は思わず、ホッと息をついて、胸乳のあたりをふくらませた。呼吸が、らくになったのだ。

源次の手が、帯のうしろにかかった。

本能的に、お京は前こごみになって抵抗した。その弱腰を、うしろから源次が、したたかに蹴りつけた。たまらずに、お京は前のめりになって頭からのめった。

ずるずると帯が解け、それからあとの作業を、源次は、らくらくとすすめた。

お京のからだから、着ているものが剥がれるたびに、いいにおいの風がおきて、金網行燈の火が、ゆらりとゆれた。

この土蔵のなかの湿っぽい空気が、しばらくのあいだ、小さな風にかきまわされた。

風がやんだとき、緋縮緬の腰のもの一枚だけが、お京の肌に残されていた。

ひと呼吸休んだ源次の手が、そのお京の右腕の手首を、がっちりとかみ、ぐいッとうしろにねじあげた。

肩の骨が、ぐきりと鳴り、その苦痛にお京は咽喉から声をあげた。

つぎに、左の手首の一番ほそいところをつかんで、これも背中になじあげる。

とみた瞬間、源次の手が縄にぎられ、その縄は、お京の左右の手首をひとつに合わせ、きりきりと音がでるほどつよく縛りあげていた。

「あ、あ、あッ」

と、お京はそのおぞましい縄の感触と苦痛に唇をひらき、うめき声をあげて、思わず中腰になる。

雪のように白い、そして、しっとりと湿りけをおびたお京の素肌が、手首だけをかたく背後に縛られたまま、のびあがるように中腰になって、くねくねと苦痛とおぞましさにうごめく。

その姿の、妖しいほどの美しさに、まむしの源次も、さすがに寸時息をのんで、目を吸いつけられた。

——な、なんて色っぽい女なんだ……

と、胸の中でつぶやく。

「どうした、源次」

と、久六にせかされて、源次はあわてて我にかえる。

どきまぎして、

「お京、てめえという女は、まったく……」

あとは意味のないことばを照れかくしにつぶやきながら、源次は縄をしごき、お京の二の腕から、胸を縛りあげていった。

降りつもった白い雪の上を、泥足で踏みこむような気持ちになって、源次はしだいに力をこめながら、お京の素肌に縄をかけてい

くのだ。

若い女の肌の健康な弾力が、縄のくいこみに反撥し、それがかえって、まむしの手に、こころよい抵抗を伝える。

縄が急所にくいこむたびに、お京は前ごごみになり、唇をあげて「アッアッ」という小さな悲鳴をあげる。

縄の一本が、こんもりした胸乳の真上からしめつけ、その白いまるい形を、無残にも半分に分けた。縄がみえなくなるほど、固くくいこんでいる。

胸と胸乳の上にたつぷりと縄の力を加えてひきしぼってから、源次は残りすくなくなった縄を、ふたたび、うしろ手首にからめてとめた。

「いい格好になったな、お京。いくら身の軽いお前でも、そう固く縛られちゃア、逃げるにも逃げられめえ」

久六が、にんまりと笑いながらいった。この男は、笑うといっそう下品な顔になる。

お京は膝をくずし、横坐りになっている。燃えたつような緋色の腰のものが、ぴたりと腰の線に貼りついている。

それが、二人の男の目をたのしませていることを知っているのだが、うしろ手に縛られ

た身では、どうにもならない。

腰を包んでいる赤い色彩と、雪のような上半身の白さと、その白い肌に噛みこんでいる木綿の縄の汚れた色との対照が、夢幻といていいほどの妖しさを、この土蔵の一隅にかもしだしている。

背中にねじあげられ、縄がくいこんでいる両腕の筋肉に、すこしずつ赤みがさし、お京は苦痛のために身をよじりだした。

いましめのために血行がとまって、赤く充血してくる部分と、血の気を失って白くなっていく部分があらわれる。

「ちくしょう！」

と、きこえないほどの小さな声で、いかにもくやしげにお京はうめいた。

立花屋久六の、ぼつてりと肉のついたまぶたの下目の色が、春風になぶられた草花のように和んで、そんなお京の姿態を眺めている。

お京を初めて女にしたときのことを、久六は思いだしている。

十三歳だった。まだこんなに肉がついていなかったし、色も白くなかった。

死にものぐるいになって抵抗した。久六はしかたなく、ありあわせの細紐で、お京の両

手を、うしろ手に縛りあげ、それからゆつくりと、目でたしかめながら、目的をとげた。

咽喉から笛のような声をだして、そのときのお京は泣いた。

お京は、相州小田原在の水呑み百姓の家から、久六が五両だして買ってきた娘だった。

金をだして身柄をひきうけた以上、煮て食おうと焼いて食おうと、買った者の勝手である。

まして、掏摸の親分が、身内の女のからだを自分のものにするのは、ごくあたり前のことである。

一度とどめをさしておけば、めったに逃げる女はいなかった。

その後、十七歳になった春、無理やり一部屋へとじめ、いやがるのを抱いたが、それからあと、久六はお京の肌に手をふれていない。

特定の女だけを可愛がることは、掏摸の親分としてはご法度である。手下の女は、十人近くいる。みんな、それぞれ若い。一人だけを抱いていると、ほかの女たちが嫉妬する、と久六は信じている。事実、嫉妬する女もいるのだ。

「親分、こいつは、どうしますか？」

と、源次が、緋縮緬を指さしていった。剥がさなくてもいいのか、という手つきをする。

その一枚残った赤い布きれのかげから、太腿のむっちりした白さが、はみだすようにこぼれ、源次の胸もとを、熱く、じいんとしびれさせる。

「まあ、あわてるな。じわじわとやるんだ。立花屋一家の掟のおそろしさを、ゆっくりと存分にきざみつけてやるんだ」

親分らしい貫録をみせて、久六がいった。しかし、緋縮緬に包まれている、白い、脂肪ののった、光るような色とまるみをもって、いるにちがいないその隠れた美肌を、源次に見せてやるのが、惜しくなっている。

——源次なんかの手にまかせねえで、おれが一丁、やってやるか……

と思ったとき、その久六の視線が、ふっとお京の尻から、三尺ばかりうしろへ離れた場所へ移って、一点に吸いついた。

そこには、お京のからだから解かれた帯がとぐろを巻いている。

その帯のかげから、上等のなめし皮の財布が、のぞいているのだ。

久六の目から、好色の光りが消えると、た

ちまち掏摸の親分の顔つきになり、その男物の皮財布に、ついッと手がのびた。

「いい財布だ」

と、さすがにするどい眼光になってつぶやき、じろりと視線を、お京の横顔に移した。

お京の帯の下から現われた財布である。お京がすりとったものにちがいない。

久六は、その財布をひろげた。小判が十枚でてきた。大金である。

さらにその内側の、ビロウドの布が小袋になっっている底から、オランダ歌留多の半片が出てきたとき、久六の分厚い下唇が、異様にひきしまった。

その歌留多は、一枚の半分が、斜めに切れているのである。歌留多の表面に描かれた異国のお姫さまの顔半分が、斜めに切れているのだ。

「だから、この財布をすった？」

と、久六の声音がやや変って、お京にきいた。

お京は、全身を固くして、その問いにこたえない。

「おい、なんとか返事をしろ」

源次が忠義面をして、お京の縄じりをつかみ、ぐいッと上へひきあげた。

ひとつにくぐられた両手首が、ねじれるように上へ吊りあがる。お京の顎が、前へ倒れる。唇を噛んで、手首の吊りあがる苦痛に耐えるのだ。

「あっしが知ってます」

と、横から新助が口をだした。

「久六の目が、ぎょろりと新助にむく。」

「じつは、お京と組んで、並び抜きをやったんで……。おれが最初に抜いて、それをお京に渡したんですが……」

すったものを仲間に渡してしまえば、その場で疑いがかかっても、そらッとぼけることができる。これが「並び抜き」だ。

相手が弱いとみれば、ひらきなあって詫言料をゆすることもできる。

「どんな男からすったのかときいているんだぜ」

と、久六がいらだつ。

「伊勢町の廻米問屋、大津屋彦兵衛のふところから、あっしがすったんです。まちがいありません」

すこしでも心証をよくしようとして、新助はべらべらとしゃべる。

「なんだと、伊勢町の大津屋の懷中から？」

久六は、新助の顔を見据えた。

「へえ、大津屋の主人が、手代をひとり供につれて、店から往来へでるところから尾けたんですから、まちがいありません」

「ふうむ……」

久六の手が、オランダ歌留多の半片を、裏にしたり、表にしたりして、しきりにもてあそんでいる。

久六の頭脳が、めまぐるしく回転しているのだ。

廻米問屋の大津屋彦兵衛が、抜け荷買いをしているという噂を、久六は小耳にはさんだことがある。たしか、町奉行所の同心、八木沢左内の口からきいたことだった。

大津屋の皮財布の奥底から出てきたオランダ歌留多の意味ありげな半片。

抜け荷買い、すなわち密貿易。

歌留多の半片は、抜け荷仲間の割り符ではないか。

久六の思案が、そこへたどりつくのに、それはどの手間もひまもいらなかった。

蛇の道は蛇というやつである。

自分が悪事を働いているやつは、他人の悪事にも敏感だ。儲け口のおいを嗅ぎつけるとくべつの鼻をもっている。

大津屋の身代は、数万両とも、数十万両と

も巷間に噂されている。

偶然手に入ったこのオランダ歌留多の半片で、その大身代をゆるがしてやろう。相手にとって、不足はない。

久六の腹の底から、火の玉のような闘志がわいてきた。お京と新助は、久六にとっては怪我の功名を働いたことになる。

「おもしろい商売になりそうだぜ」

思わず、久六はつぶやいた。

源次が「えッ？」という顔で、久六をふりかえる。

「おい、源次。お京と新助の始末は、お前にまかせる。好きなようにやれ。ただし、殺しちゃアいけねえぜ」

久六の目標は、きゅうに変わった。

源次の面上に、しめた、という色が一瞬浮かぶ。

大津屋彦兵衛にとっては、まったく覚えのないことだが、久六には三年前から、彦兵衛に対する恨みがあつた。

女のことだ。彦兵衛のいまの女房のお静は三年前まで柳橋で左棲をとっていた。そのころの名を小静といって、器量もよければ氣ツぶもいい、売れっ子の芸者だった。

その小静に久六は惚れて、通いつめていた

のだ。半年ほど通ううちに、なんだかんだと
いって、百五十両ほどの金を使わされた。

ケチな久六が、小静の機嫌をとるために、
百五十両も使ったのだから、よくよく惚れて
いたのだ。

ところが、そこへ横合いから大津屋彦兵衛
が現われ、あつという間に、トンビに油揚げを
さらわれた形になった。

大津屋は、先年、女房を病気で亡くし、後
添えをさがしていたのだが、一夜、柳橋の料
亭で廻米問屋仲間の寄合があったとき小静を
見染め、それから強引に口説きおとした。

小静の借金が千両近くもあったのをきれいに
払い、後妻として大津屋の家内へ入れた。

ケチでこせこせした醜男の久六よりも、い
かにも太っ腹で男前の大津屋彦兵衛のほうに
傾くのは、女としては当然である。

久六の職業は、おもてむき香具師の元締と
いうことになっている。

実際に、香具師の元締もやっているのだが
拘摸の親分のほうが、段違いに収入はいい。

おれは醜男だが金はたっぷり持っているぞ
と小判の音をさせて小静をくどいたが、かえ
って嫌われた。

どことなく暗い陰気な雰囲気をもった久六

よりも、豪放でさっぱりした大津屋に、心も
からだもなびくのは、女の身にとって仕方の
ないことだ。

まして大津屋は、小静をめかけではなく、
正妻にしようというのだ。

勝気と意地っぱりで売った小静が、ころり
とまいったのも、無理はない。

みごとにふられた久六は、小静を恨み、大
津屋を恨んだ。しかし、いくら恨んでみたと
ころで、どうなるものでもない。

この恨み、いつかは晴らしてやるぞと、執
念ぶかく心の隅にたくわえておいた。

大津屋の女房におさまったお静は、そんな
ことはもうすっかり忘れている。生来利口な
お静は、先妻の娘のお絹やお雪とも仲よく暮
らして、いい女房ぶりを発揮している。

久六の執念が、すりとった大津屋の財布か
ら出たオランダ歌留多の半片をみて、ぶすぶ
すといぶりだしたことなど、お静は夢にも知
らない。

悪徳役人

「しかし、久六。このオランダ歌留多だけで
は、証拠として弱い。当人がそんなもの知ら

ん、といったら、それまでだぞ」
といったのは、南町奉行所の同心、八木沢
左内である。

この男、目が異様に細く、目じりがキツネ
のように吊りあがっている。唇が紙のように
うすく、ぺらぺらとよく動く。冷酷で陰險な
性格が、顔の道具立によく現われている。

「しかし、八木沢の旦那。こう斜めに切り離
してあるところなんぞ、いかにも意味ありげ
で、臭いとは思いませんか。こいつは、う
まく段取りを踏めば、たいした儲けになると
思いますかね」

と、立花屋久六の舌には、熱がこもってい
る。

「臭いとは思う。おれはべつのほうから、大
津屋の抜け荷の証拠をあつめているんだ。し
かし、相手は大津屋だ。なかなか、しっぽを
つかませるようなへまはしねえ。ひとつ手順
をまちがえると、ビタ一文の儲けにもならん
ぞ」

と、八木沢左内は慎重だ。

同心とはいっても、収入はわずか三十俵二
人扶持。町なかでは威張っているが、幕府の
役人として軽い身分だ。

そこで、久六のような悪党の悪事を、知っ

て知らぬふりをし、ときには自分から片棒をかついで金をまきあげ、うまい酒をのみ、美しい女を抱いて、この浮き世を楽しんでいる八木沢左内だ。

「といって、このままじゃ、いつまでたっても、大津屋、しっぱなんか、つかませてくれませんか」

と、掏摸の親分はいらしてくる。

左内は、そんな久六の表情を、針のように細い目でうかがいながら、うすい唇をにやりとゆがめる。

「すこし手荒いが、手っとり早くて、おもしろい方法があるんだ。……大津屋に、先妻との間にできた娘が二人いるのを知っているかい？」

「知ってますよ。姉のお絹が十九歳、妹のお雪が十六歳。あっしはまだ見たことはねえけど、二人とも、伊勢町界限じゃ評判の器量よしだっというじゃありませんか」

「よく知ってるな、久六。……そのお絹をさらってきて人質にとり、大津屋に、半分に切れたオランダ歌留多の謎を白状させるんだ。大津屋は人一倍子煩悩だとさく。娘をカセに脅せば、たいがいのは吐くだろう。どうだ」

「なるほど、そいつは手荒いや。しかし、八木沢の旦那、あっしは掏摸や泥棒はずいぶんやったが、かどわかしかだけは、まだしたことがない。もし、お上に知れたら……」

「なにを言やがる。おめえの別宅が、隅田川に近い石浜神社の裏手の草ぶけえ土地にあるはずだ。あの馬鹿でけえ屋敷のなかに、一人や二人の娘をつれこんでも、だれにもわかるこっちゃねえよ」

「そりゃ、まあ、そうだが……」

「それにおめえ、その別宅には、えらく凝った地下部屋までつくってあるというじゃねえか。おあつらえむきとは思わねえか」

「けッ、そんなことまでご存知なんですか。あきれたもんだ」

「他人の秘密をさぐるのが、おれの仕事だからな」

「なるほどね。役人のくせに、旦那は考えることがあくだいよ」

久六は感心した。

「おれは考えるだけだ。やるのは、お前だ。おもてむきは香具師の元締、裏へまわったら掏摸の親分、こんな仕事をやるには、もってこいの子分たちがそろってるじゃねえか」

左内の弁舌に、久六はしだいに惹きこまれ

てきた。

「このオランダ歌留多を足がかりに、大津屋彦兵衛を、ゆすってゆすって、ゆすりぬこうという魂胆ですね、旦那」

掏摸の親分と悪徳役人は、たがいの目の奥をのぞきこむようにして、にんまりと笑いあった。

その夜のうちに、腕のたつ久六の子分たちが、手をつくして、大津屋の娘を一人、ひっそらってきた。

掏摸の子分と、香具師の仲間が力を合わせると、やってできない悪事はない。

香具師の元締である立花屋久六の家は、浅草の馬道うまみちにある。

そして、掏摸の親分である立花屋久六の家は、八木沢左内が「別宅」と呼んだ石浜神社裏の屋敷だ。

立花屋一家の者は、ここを花屋敷と呼んでいる。立花屋から「花」だけをとったのだ。

花屋敷とはきれいな呼び名だが、咲いているのは、悪の花だけである。

逃走をはかって捕ったお京と新助がとじこめられているのは、この屋敷の裏庭にある土蔵の中だ。

大津屋の娘がつれこまれたのも、この花屋

敷の、地下部屋のなかだった。

うしろ手に縛りあげ、さるぐつわを噛ませて声がでないようにし、おまけに目かくしまでしてある。

この花屋敷の位置をさとられないための用心だったが、踊りの稽古の帰りに、ふいを襲われ、縛りあげられて駕籠におしこめられた小娘に、目かくしなんかしなくても、とても距離や場所を計る心の余裕はなかったにちがいない。

地下部屋には、あるじの久六と、八木沢左内が、酒をくみかわしながら待っていた。

部屋の四隅の柱にかかっている金網行燈のなかで、百匁ろうそくが燃えている。

子分たちがひっかついできた娘の姿をみると、久六は思わず腰を浮かした。

「親分、ひっさらってきました」

息をはずませて、子分の一人がいう。

はじめに娘の目かくしをはずし、つぎに、さるぐつわを解いた。

目をきつく縛られていたので、布をはずされても、視点はなかなか定まらないようだったが、やがて、周囲にいる男たちの風態や人相が、娘の目のなかへ入ってきた。

同時に、恐怖を顔いっぱいにあらわして、

娘はさげんでいた。

「ここはどこです、あたしは、どうしてこんな所へつれこまれたんです、お願いです、帰して、おうちへ帰してッ」

うしろ手に縛った縄はまだそのままだ。

娘は、両肩を前後左右にふって、けんめいの哀願をしはじめた。

「うるせえ。ぎゃあぎゃあ、さわぐな！」

娘の頬を、銀三がびしゃりツと平手でたたいた。

この銀三の指図のもとに、三人の子分が巧妙に働いて、娘をうまくひっさらってきたのだ。あざやかな手際の誘拐だった。

まむしの源次を久六の右腕とすれば、この銀三は左腕だ。頭が切れて、悪事をおこなうのに、もってこいの度胸をもっている。

銀三に頬をうたれて、娘は壁際によろめいた。

自分の置かれた立場が、容易なものでないことを、ようやくさとったらしい。蒼白な顔色で唇をふるわせている。

みずみずしい結綿髷に、鹿の子絞りの振袖をきた娘の胸乳のあたりが、手ひどく巻かれた縄のために、ぎゅッとくびれているのが、ひどく痛々しい。

不安にみちた娘の白い顔をみつめていた左

内が、ふいに口をひらいて、

「ちがう、これはお絹ではない」

と、吐きだすようにいった。

えッ？ という顔で、久六と銀三が、左内をふりかえる。

「これは妹のほうだ。妹のお雪だ」

左内は、かるく舌うちして、銀三をみた。

「すいません、こりゃア、とんだ手違いで」

銀三が、髷に手をやって頭をさげた。

「まあ、いいじゃありませんか。姉にしろ、妹にしろ、大津屋の娘に変わりはねえ。彦兵衛のやつ、いまごろ青くなってますぜ」

お静の顔を、チラと思いうかべながら、久六がとりなす。

左内のうすい頬の肉が、病的にけいれんした。

「ばかやろう。おれは、姉のお絹をさらってこいと言ったはずだぞ。わからねえ唐変木だな。おれは、こんなしょんべんくせえ餓鬼よりも、姉のお絹のほうに執心なんだ」

久六が、あッというように口をあけた。なるほど、そうか。この旦那は金儲けだけではなく、女のほうにも賭けていたんだ。

欲と色との、二股をかけていたのだ。

いくら惚れていても、輕輩役人の左内と、大津屋の娘とでは、月とスッポンだ。自分の思いをとげるには、こうするよりはかに手はあるまい。

「おそれいました」

と、久六は、おどけて頭をさげた。

「それじゃ、こんどは姉のお絹をさらってきましょう。なに、わけはありません。大津屋の裏庭で、小火をだして、その騒ぎのすきにお絹をさらってきます」

と、大川へ魚でもすくいに行くような口調で、銀三がいった。

「あまり調子にのって、油断するなよ」

と、久六が注意する。

「わかっておりやす」

銀三は、三人の弟分にふりかえると、目で合図した。

三人の男は、うなずくと敏捷な動作で、この地下部屋から出ていった。久六にとってはたのもしい子分たちだ。

「たのんだぜ」

と悪徳役人も口をそえる。

「この小娘は、どうしましょうかね」

と、片隅でふるえているお雪に顎をしゃくって、久六がいった。

「どうするって、いまさら家へもどすわけにもいくめえ。あのしたたかな大津屋をゆるすには、娘一人を人質にするよりも、姉妹をふたりとも押さえておいたほうが、ききめはあるだろう。この地下部屋にしばらく置いておくんだな」

と、左内はあまりお雪には興味がないようである。

「八木沢の旦那、それなら、この妹娘のほうは、あつしが頂いても、ようござんすね」

と、左内の表情を横目でうかがいながら、久六がいった。

「ああ、かまわねえとも。だが、お雪はまだ餓鬼だぜ。掏摸でも教えこもっていうのか」

「まさか。……あつしはね、旦那、このところ、ちょっとばかり趣向が変りましたね」

久六は、卑しい声をだして笑った。そしてこの地下部屋の隅の、柱のそばへ寄って行った。

その柱には、黒い紐が一本吊りさがっている。

久六は、その紐に手をかけると、ちょっとんと引いた。

どこか遠くで、りん、りと鈴の鳴る音がきこえた。

どうやらこの紐は、地上の部屋へ連絡するためのものらしい。

ほんの数呼吸のうちに、久六のめかけのお仙が、だらしない格好で、この地下部屋へおりてきた。

お仙は、三十二、三歳になる、ひどくあだっぽい女だ。久六のめかけをしているような女だから、どこかくずれたところがある。

もとは両国あたりの出合茶屋の女中をしていたということで、頭のさきから、足の指さきまで、色気のかたまりといった感じの女である。

「なんだい、お前さん」

と、けだるそうな声で、お仙はいった。

寝巻に、黒襟の半纏をひっかけただけの姿で、それがまた、イタについている。左右の胸が大きくふくらんでいて、ひと呼吸するたびに、それが、ゆらゆらとうごく。

うしろ手に縛られ、おびえきった顔ですくんでいるお雪に、チラッと目をやったが、たいていとおどろいた顔もしない。

掏摸の親分のめかけをしていると、すこしぐらいのことには、ビクともしなくなるらしい。

「あたしはいま、寝酒をやっていたところな

んだよ」

と、お仙は不機嫌にいつて、あ、あ、あ、とあくびをする。なるほど、酒くさい息をしている。

「ばかやろう、主人のおれが、こうして一生けんめい働いているのに、宵の口から、酒をくらって寝ているやつがあるか」

「なにか、ご用？」

「用があるから呼んだんだ。おい、お仙、ここにいる小娘を、お前にまかせる。存分に料理してみろ。どんな手を使ってもいいぜ。ここにおいで。八木沢の旦那もご納得だ。ひとつ、腕によりをかけて泣かせてみる」

久六のこのことばに、ねむそうだったお仙の顔が、きゅうに生き生きと輝きだした。

「へええ……。なんとまあ、いいお嬢さんじゃないかね。なんの因果か知らないけど、こんなにひどく縛られて、かわいそうに……」などといいながら、改めて、しげしげとお雪の目鼻だちや、腰のあたりをうち眺めている。

そのうちに手をのばして、お雪の肩や胸をまさぐり、肉のつきぐあいをつかしかめるようなしぐさをはじめた。

このお仙の極端な変りかたに、さすがの八

木沢左内も、毒気をぬかれたような表情で見守っている。

久六が苦笑して、左内に説明する。

「このお仙というのは、妙な女でしてね、てめえが女のくせに、若い女とみると、へんに息をはずませやがるんです。まあ、見ていてごらんなさい」

そのうちにお仙は、お雪を縛った縄を解きはじめて。

お雪の表情が、パツとあかるくなった。

同性の手で縄を解かれれば、助かると思うにちがいない。

「ありがとうございます、恩にきます」

両腕が自由になったお雪は、思わず礼をいったが、お仙は、お雪を逃がすために縄を解いたのではなかった。

お雪を裸にして、もう一度その自由を奪うために、縄を解いたのである。

どこをどう押さえて、お雪の動きを封じたのか、あつという間に、帯も着物も、長襦袢も、お仙の手によって剥がされていた。

シミひとつない生娘の、なめらかな白い裸身があらわれたとき、お仙は、山犬が獲物にとびかかる前に低くうなるような声をあげて言った。

「お雪とは、よく名づけたねえ。……ほんとに、雪みたいに白い、いい肌をしているじゃないか……」

感嘆の声をあげたお仙は、ゆかにうずくまって羞恥をおおいかくそうとするお雪の両腕を、左右とも背後にねじりあげ、ひしひしと縄で縛りあげていったのだ。

お仙の、そのすさまじい勢いと、手際のよさに、左内もあつけにとられて眺めている。

手首を縛って、お雪の抵抗を封じると、背後から顎の下に手をかけて、ぐいと引き起こした。

こんもりとしてはいるが、まだ熟しきっていない乳房の上下に縄をまわしていくこませると、その愛らしいふくらみが、ぷくんと盛りあがり、うす赤いつぼみが、豆のように固くなる。

吸い寄せられるように、お仙の片手の指がそのつぼみをつまんで、ぎゅうツとひねりあげる。

「あ、あ、痛いッ！」

お雪の悲鳴は、もうお仙の耳に入らない。勢いにのって、びしびしと上半身を縛り終えると、お雪のからだを、ゆかの上どころがした。

「ゆ、ゆ、ゆるしてえッ！」

哀願の声も、途中でかすれる。

小さく、愛らしくとびだした乳首を、お仙は立ったまま、器用に足の指さきでつまんだりしていたが、やがて、べつの縄束をつかんでくると、お雪の左の足首に、それを巻きつけて縛った。

お雪の全身が縮み、足をとじ合わせて、わずかな抵抗をみせた。お仙はすかさず、お雪のまるい腰を蹴りつける。

この地下部屋の天井には、ふとい檜材ががちりと組みこまれてあり、そこに数個の鉄の鉤が植えてまれている。

お仙は、お雪の左足首を縛った縄じりを上に放り投げると、その天井の鉤に、巧みにひっつけた。

そして、縄の端を両手で、ずるずると引っぱった。縄はすぐ、ぴいんと張った。

「ひいッ」

という、みじかい悲鳴が、お雪の咽喉からふきあがった。

ゆかにころがされているお雪の左足首だけが、縄にひかれて、宙に吊られはじめた。

「あッ、あッ、ゆるしてッ、ゆるしてくださいッ」

お雪は、夢中で哀願した。

泣きながら、からだをごろごろと、ゆかにころがした。

しかし、お仙の手にある縄が引かれるたびに、お雪の片足は、むなしく宙に吊られていくのだ。左足首と、右足首が、じりじりと離れていくのだ。

それは、苦痛よりも、羞恥だった。死ぬことよりもつらい、十六歳の羞恥だった。お雪の全身の血が逆流した。

「や、やめて、やめてくださいッ」

血を吐くような哀願がほとばしりだした。

久六の目が、どうです、なかなかやるでしょう、という意味をこめて、左内に向いた。

左内は、細い目をいっばいにみひらいて、この無残だが、異様に美しい光景の展開に見惚れている。

その久六と左内の視線を皮膚に感じて、よりいっそう、お雪の羞恥はたかまり、のたうつのだ。

お雪の左足首だけを、ゆかの上二尺五寸ほどの高さに吊りあげておいてから、お仙はその縄じりを、柱の環につなぎとめた。

そして、改めて、なめるように顔を寄せる。お雪の肌のおいを嗅いだ。それから両

手で、母親が赤ん坊のからだを洗うように、

すみからすみまでを、ていねいに撫でさすった。その指さきの病的な熱っぽさに、お雪は戦慄し、声をあげて身もだえた。

「ああ……いい肌をしていること。あたしにや、もうこの若さはないんだ。ちくしょう、憎らしいねえ……でも、ごらんよ。恥ずかしいだろ。あの二人の旦那に、お嬢さんの、どこもかしこも見られているんだよ。恥ずかしいだろう、え？ そら、そら、ここも……ここも……恥ずかしいだろう？」

お仙は、うわごとのように、お雪の耳に、そんな他愛もないことをささやき、吐きかけるのだ。

ささやきながら、お仙の手が、乳首にのびて、つまんだ。その指に、しだいに力がこもり、お雪の唇がひらいた。

お雪の眉が、苦痛をこらえて寄り、全身がそこを中心にして火になった。

男たちの視線が、いま恥ずかしい自分の顔にそそがれていることを、お雪は生娘の本能で知っていた。

それが、どんなに卑しい目の色か、お雪には、見なくともわかつていた。

お雪は片足を吊られたまま、大きくのけぞ

った。すると、お雪の顔は、かえって男たちの前にさらけだされた。

お雪は、咽喉で泣きながら目をとじた。この屈辱には、我慢できなかった。しかし、我慢できないからといって、男たちの燃えるような視線から、どうやって避けられるだろうか。

「ねえ、旦那方、もっとこっちへ寄って、目の保養をなさいましよ。遠慮する柄じゃないでしょう。さあ、八木沢の旦那、もっとこちらへおいでなさいまし……」

お仙はふざけたような口調で、手招きするのだ。

男たちの立ちあがる気配がした。自分のそばに近寄ってくる足音がした。

お雪はもがいた。一寸でも、二寸でもいいから遠くへ逃げようとした。

しかし、うしろ手にぎっちり縛りあげられ、乳房を縛られ、片足を吊りあげられてころがされている身では、いくらもがいても無駄だった。

胸をしめつけている縄は、時がたつにつれて、生き物のようにきりきりと、お雪の柔軟な肌にくいこんでくるのだ。

男たちの足音が、お雪のからだの、すぐそ

ばでとまった。

お雪は、いつそう固く目をとじた。

「目をあけるんだよ。目をあけて、こっちをよく見なくちゃ駄目じゃないのさ」

意地悪い声とともに、お仙の手が、お雪のやわらかいところをつねった。

「ひいッ」

と、お雪は泣いて身をすくめた。足を吊っている縄が、ぴいんと張った。

二度、三度とお仙はつねった。つねることを楽しんでる。白いところ、やわらかいところ、敏感なところを狙ってつねるのだ。

女だから、女の急性はよく知っている。お雪のからだは、魚のはねるようにのけぞるのだ。

「あッ、あッ、ゆるして、もうゆるしてッ」

お雪の胸が大きな呼吸でふるえる。

十六歳のういういしい新鮮な皮膚の色が、まだらになった。

しかしそれは、けっして醜くはなかった。

すきとおるような白い肌についた赤い斑点は、痛々しいなかにも、不思議な美しさがあった。お仙の指が、その斑点の上を、こんどは狂ったように愛撫した。

「かわいい、かわいい、お嬢さん。あたしゃ

もう、たべたいくらいだよ！」

お仙は、お雪の顔の上に、自分の唇を押しつけて、むしゃぶりついていった。

寝巻に細帯だけというしどけない姿を、うしろ手に縛られた姉のお絹が、銀三に縄じりをとられて、この地下部屋にひきずられてきたのは、ちょうど、そのときだった。

髪をふりみだした中年女の唇の下に、悲鳴をあげてのけぞっている妹のあられもない姿を、信じられないものに触れた表情で、お絹は立ちすくんでいた。

まぎれもなく、それが妹だと知ったとき、

お絹の顔は蒼白になっていた。

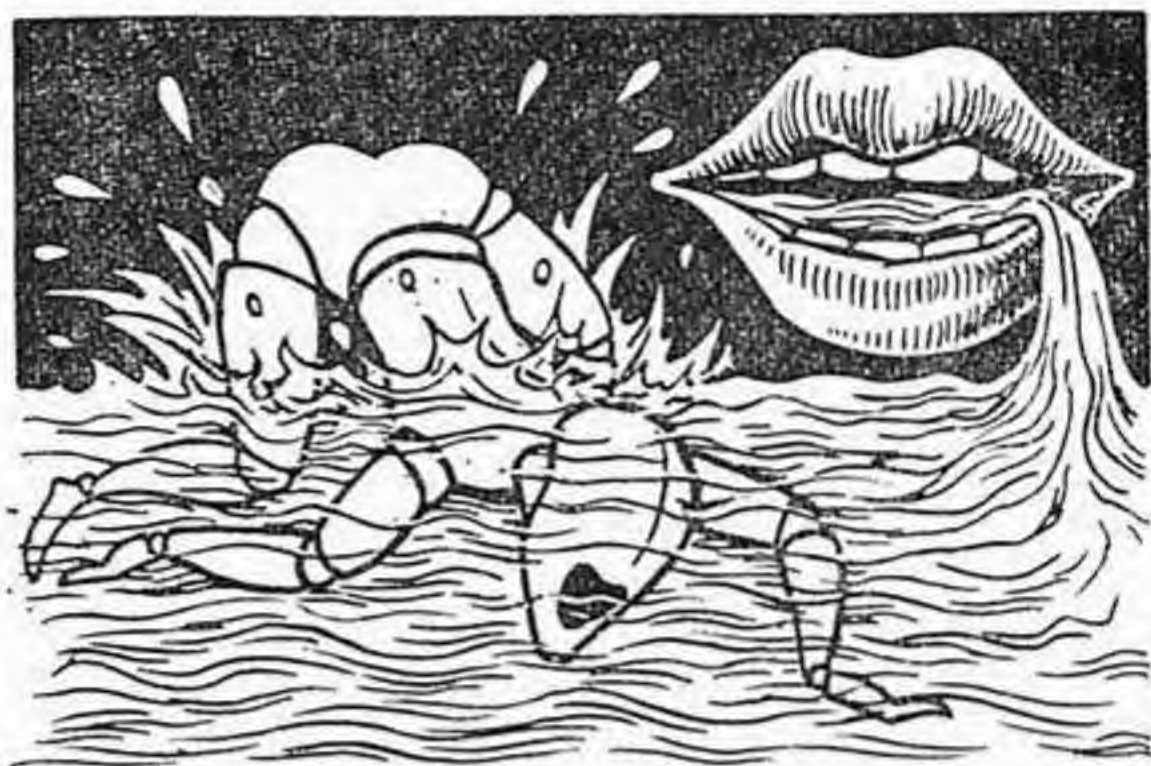
「お雪ちゃん！」

思わず妹の名を呼び、かけ寄ろうとしたお絹の縄じりを、銀三は無情にも力まかせに引いた。背中にあたかだかと縛られた両手首が、ぐいと引かれて締めあがり、お絹はその苦痛に、顔をしかめてよろめいた。

「お姉さん！」

苦しい姿勢で、お絹をみあげたお雪の顔面は、ぐっしりと涙でぬれていた。

(つづく)



H氏をめぐる美女四人

芳 野 眉 美

スナックにて

ビルディングの地下。一階は駐車場で、二階から上はマンション。カッコのいい車の奥にドアがあり、管理人の部屋かと思ったが、そこがスナックの入口だった。

ネオンがあるわけでも、バーの名前が書いてあるわけでもない。連れてこられなければわからない。会員制でもないらしい。

セントウのように下駄箱が並んでいるのは靴をぬげということか。紫色の絨毯とは、えげつない。人呼んで絨毯バー。

せまいハシゴがあつて地下へ。青線のハシゴを思い出したな。布団を敷けば一杯という部屋の三階だて、なかをとりもつハシゴとくらあ。女の子が裸のままハシゴを下りてくる。トイレは下。何を書きだしたのだった。

天井は低く背を丸めなければ立ってられない。穴倉のようなスナックの入口、せまいハシゴをそつと下りたところで、視界がパツと開けた、は、チト、オーバー。

テーブルもなければ、椅子もない。何もない。あるのは投げだされた足。きたねえ足だけ。野郎の靴下はいただけない。くさい。タ

ライが置いてあるのは、雨漏りでもするのかと思つたら、灰皿だった。

壁も紫で、紫一色とは、ここの経営者、キチガイじゃなからうか。詩人寺山修司先生が親分の、劇団天井棧敷のだしもの、新宿版千夜一夜物語のトルコオチチことフーテンお啓の、巨大なオッパイヌードが飾つてあるところをみると、男の客には理解あるらしい。

いや、女の客にもサービスしていた。隆々としたモノを誇示した裸体の戦士、ドカッと真中につっ立っている。ギリシャ彫刻。美しい。これが女性像だと、ワイセツ。というこ

とになっている。

誰だ、戦子に帽子をかけたのは。H氏。失礼しました。H氏、男どもの靴下はさけて、黒いネットのストッキングも悩ましい美女の前に、チャッカリ坐っていた。ミニスカートの腰のあたりに引き上げられて、神秘的白さがまばゆい。白と黒、いいねえ。

「わたくしはですねえ」

カバンから大型名刺をとりだし、美女にわたし、住所本名を名乗る。家の奥様に知られてもかまわないらしい。奥様はとても理解がある。ホント。

「おじさま、紳士ね」

H氏のずらりと並んだ肩書きが気に入ったのか、ネットストッキングの美女、にっこり笑って自己紹介。

「アミ、よろしくね」

長い金髪は、一目でかつらとわかったが、エキゾチックで、混血と間違えられそうなタレント、いや、ファッションモデルかな。その下に△志望▽とつく美女も多からう。

裸体の戦士からH氏の帽子をとり、モノの先にタバコの灰がついているのを新発見し、ボーイに水割りを注文して気がついた。H氏はアルコールはだめ。のむのは好きだが、の

むものが違う。

「ウドンの水割り」

関西人だから東京のウドンはからすぎる。「じゃないよ。なべやきうどんがあるのでしよう。うすあじにして下さい」

アミが吹きだして、ようやく存在が認められた。H氏、アミにいう。

「こちらのセンス、美しい女のひとですねえ、オシッコが大好きなんですよ」

こんな紹介ってあるかしら。アミは別に驚きもせず華奢な細い手をのばす。握手。冷たい手。慣れている。ヘンなことだったって誰も信じない。ブラックジョークだと思うよ。

「わたくしはですねえ、アミちゃんのそのアミのような靴下にキスしたいな」

キスしたいな、といいながらH氏、アミが何もいわないのに、かがんでアミの足の先にうやうやしく接吻していた。ロングブーツ（だろう、きっと）を脱いだあとの、独特の異臭があるはずだが、そのほうが、もち、いいに決まっている。

アミも、めんくらっただろうが、

「スケベなオヤジ」

グレンチェック三釦スーツの長身の若い男があきれたようにいった。女連れではない。

ごちゃごちゃくどいているより、直接行動のほうが話は早い。このテクニク、気の弱い男にはできない。その点、H氏、身体は小さいが、ハートは大きい。

H氏の大型手帳、かくしてききだした東南北の美女たちの住所電話番号がぎっしり。うそだと思ったら見てごらん。H氏の行動範囲は身体に反比例する。

「それでよろしいの」

H氏がすぐ顔をあげたので、おかしようにアミはいった。周囲の好奇心な視線がアミに集中したので、アミはちよつといい気持。

「舐めたかったら、足の裏でも舐めたら」ハスッパな声になる。

「ああ、女王さま」

H氏は叫んだね。すぐその気になる。

「女王さまだってよ」

客があまり笑うから、ボーイがおどろいてとんできた。

「もう少し静かにして下さい。その筋が、うるさいのです」

「オヤジ、舐めろよ」

無責任な声。

「わたくしとしてはですねえ、そのアミの靴下がないほうが舐めやすい……」

「脱いでやれ」

野次馬のほう喜んでる。

「脱がせて下さる？ オジサマ」

アミ、言葉は丁寧だが、すっかり女王きどり。ムードに酔ってきた。

「はい、女王さま」

H氏、アミが少しめくったミニスカートに手をのばし、ガーターからネットストッキングをはずしたと思ったら、アミのふくよかなふとももに顔を近づけた。

「いや、エッチ」

「わたくしとしてはですねえ、手でお脱がせするのは女王さまに失礼ですから、口で脱がせていただこうと……」

自作自演。マイペース。

「いいぞ、オヤジ」

観客が拍手して、アミはH氏の前に、ずいとのびやかな足をあげた。引っ込みがつかなくなかった。

女王さまが床に坐っているのでは気分がない。床に坐るのはドレイか犬である。てな顔でH氏、センスの顔を見た。いけねえ。

「センス、女王さまの椅子になって下さい」

「ヒヤア」

ジョウダンでしょう。逃げだす前に、

「センス、アミの椅子になって下さる」

とアミの甘い声につかまり、ニヤニヤ。

「よう、センス、協力してやれよ」

外野はだまっている。仕方なく、アミのお尻の下に四つ這い。やれやれ、これだからいやだよ。H氏と遊んでいると、何をやらされるかわかったものじゃない。

アミのちんまりしたお尻のあたたかい感触で、背中がむずむずする。ミニスカートはまくれて、白いビキニパンティだから、裸にひときい。

かくて、女王の座は確定。

「気持ち悪い」

H氏の唇が、アミのふくよかな肌にまた触れたらしい。うまくやっていやがる。と、

「なめくじ」

H氏、ネット・ストッキングで顔をけられて、勢よくうしろにひっくり返った。

「肌に触れたら承知しないよ」

アミの声ががらりと変って、まさに女王気分満点。

乗馬ズボンはいいとしても、麻のコーヒー袋の真中に穴をあけ、かぶっているような珍妙な上衣の、鼻下にドジョウヒゲをたくわえた男、まがいものの太い金の鎖のネックレス

をはずし、H氏の首に巻きつけて、うやうやしくアミ女王に捧げた。これまた演出家にしたいようないい男。

アミ、力強く金の鎖を引っ張り、H氏のどをしめられて、ゲツ。涙のため、よだれを流し、自分でゆるめて、女王のネットストッキングに包まれたすんなりした足に顔をすり寄せた。その調子。

「ストッキングだけをくわえて、じょうずに脱がすのだよ」

念をおされ、おずおず顔をもたげて、女王の匂うようなうちまたに。

「きたない」

金鎖の端で、女王はH氏の背中を打った。スーツの上だから、あまりいたくない。音だけがとおげさ。かんしゃくをおこし、

「誰か、鞭を持っていない？」

ぎらぎらと女王の目が輝いて、残酷な本性丸出し。乗馬ズボンの男、しまった、忘れてきた。これはうそ。はじめから持っていない。

「オヤジの皮バンドをとれ」

リンチゴッコの経験者。

女王の侍従よろしくかまえている乗馬ズボン、ドジョウヒゲの男、つかつかとH氏に近

寄って、ズボンから皮バンドを抜きとった。

間髪をいれず、だまっていたにもあやしいほどのホモ二人。二オクターブ半の奇声をあげて、H氏のズボンを足から引っ張った。

H氏、女王の足をかかえたまま床にたたきつけられ、勢いあまって、ズボンとモモヒキが宙にとんだ。H氏、サルマタだけとなる。「そんなことされると、その筋につかまってしまうのだけどなあ」

おおさわぎに驚いてかけつけた支配人、ブタ箱の経験者。弱り切った表情もあわれ。支配人の必死の制止もなんのその、半女性のホモ二人、H氏のサルマタもヒョイ、脱がせちゃった。

「上衣も脱がせてしまえ」

と外夜席。故に、H氏はスッパダカ。

「椅子が服を着ているものか」

というので、センセも右に同じく、チョンチョン。ビキニパンティからはみだしたアミ女王のやわらかなお尻のぬくみ、どうなってるの。

裸の玉座にチンザまりましたアミ女王、皮バンドを気分良さそうに振り廻し、思い切りH氏の背中にたたきつけた。

「ギャッ！」

と一言。インスタント鞭はひゅうひゅう空を切り、H氏の背中は無惨やな。

半女性の一人、四角いボックス型ハンドバッグからクリームをとりだしH氏のしなびたお尻をポンポンとたたき、指が意外に美しくしななってH氏のお尻にクリームをぬれば、もう一人の半女性、ホモのかたわれ、天井のシャンデリヤに輝くローソクを、プロレスラーのようなむっけき男の肩車から、一本ぬきとって、H氏のお尻に。

「シッポができた」

あやしげなるホモ二人、抱き合って接吻。十三分十四秒。見ているほうがつかれる。

「犬のシッポに火をおつけ」

うわずった声。女王は感極まって声をつまらせる。

ドジョウヒゲの侍従、ライターならぬ、火打ち石でローソクのシッポに火をつけた。古風だなあ。

いつの間にか、H氏の首は切りとられて、と思ったが、ネットストッキングがH氏の首に巻きついていていた。

「食いちぎるのよ」

女王の絶叫の意味がよくわからない。

「うすのろ、雄犬、ジジイ、食いちぎれとい

うのがわからないの」

女王の罵声はすさまじい。H氏の薄い髪をつかんで、ぎゅうぎゅうおしつける。H氏は、小さな薄いビキニパンティでチツソク寸前。パンティが食いちぎれるものかしら。実験した人の報告を待つ。

ローソクは短くなり、尻に火がついたH氏、夢中で首を振る。かぐわしい女王の匂いをかぐひまなし。もったいない。苦しい。熱い。

二人の重量が一度にかかって、玉座は背中から首すじに、肩に移動する。と、首すじが急にぬくまって、温水がサーッと頬につたわる。ペロリ。

「やった」

と思ったね。

「のむんだ、のめ、この野郎」

玉座はアミ女王の不要水で、しとど濡れた。これぞ濡れにぞ濡れし。

前門の洪水、後門の大火。H氏、ただパクパクと金魚よろしく口をあけるのみ。故に、女王の甘露水、すべてはセンセがいただく。その量の豊富なこと。美味也。死にたい。

「さて、おたちあい」

鼻下のドジョウヒゲ、H氏の帽子を手にと

って、観客を見まわした。

「これなる帽子に、いくらかでも、めぐんで下され。二人のドレイ、いや、二匹のあわれな雄犬を従える女王、アミの愛人、裸のフェアリーことナーニが、トラックのオカマをホッテ、顔をぐさり、七針も縫う重傷、モデルには致命的、入院費もことかくありさま、これなるチャリティショウに感激したとあればたとえ百円でも人のなさけ」

H氏とセンセ。いつのまにかレスビアン、アミとナーニのチャリティショウに一役買っていたとは、露知らず。

トルコにて

地下スナックの壁にはってあった、トルコオチチのデカイオッパイに刺激されたか、脱出したH氏とセンセ。とにかくトルコでもびしょ濡れの身体を洗おうということになった。

H氏、大型手帳をとりだし、最高にスケベなトルコサンをさがしだす。これにしよう。一人だけ。二人一緒に入ればいいじゃない。それもそうだ。

ハイヤーとH氏は叫んだが、東京ではめずらしい九十円タクシー。それいけ。

十分ばかりというのが、一時間も待たされたのは、気分が良くて客が延長したのだろう。待つのも楽し。

「あら。お二人ご一緒、うれしいわあ」

縦ロールが一杯ついたヘヤーもはなやかなサワリ。艶然と笑ってタオルを二人前、平然とかかえて個室へ。ちと退廃的。金色のハイヒールのサンダルの音も心地良い。

部屋のドアをボタンと閉めるなり、H氏のズボンに右手を伸ばす。早い、早い。

「あんた、いらっしゃい」

H氏を平然と掴まえたまま、センセにおいでを。センセ、近寄ったとたん、サワリの左手がぎゅっ。なんと強烈。

「お元氣ね」

あたりまえ。無造作に床に跪ずいたサワリにこやかに、H氏に唇を寄せる。

はい、交代。

「ヒヤア」

ぬめぬめする舌ざわり。つかまえて、はなさない。どうしよう。

H氏、スタコラ逃げ、背広を脱いで、浴槽に。ここでスタミナを消費しては、あとが続かない。遊びは、ヘンナコトをしないことが鉄則。だいいち、その筋にしかられる。

遊んで沈まず。守れない奴は女を愛する資格なし。

とはいふものの、

「ああ、だめだ」

とはいふものの、うるわしき女人。

「いいのかい」

「いいわよ」

サワリはにんまりして見上げ、分厚い唇がものほしそうに動く。

「はなせ」

「いや」

あつぽったいねっとりした唇が怪物のよう。粉砕機にはいったブタ肉のよう。

「助けて」

「いい湯かげん」

知らん顔のH氏。第三者。

「あっ」

はなすかと思えば、そのまま。サワリ、のどを鳴らした。

「おいしかった」

舌で唇を舐めまわし、センセの頬にチュッ、キスをした。かくて、センセ、無資格。失格。

サワリ、トルコの正装をかなぐり捨て、浴槽をまたいで、H氏を見下してにんまり。小

さな乳房だが、乳首だけが大きく、一人では寝られない性分。

H氏のあごをサラと撫で、

「おヒゲ、おすりしましょうか」

そのあられもないカッコで、H氏のホヤホヤしたヒゲをそるつもり。サワリの右手に、キラリ、鋭利なカミソリ。

「け、けっこうです。女王さま」

つい、いい慣れた言葉がでた。

「あら、お前たち、ヘンタイね」

ケケケ、と妖婆みたいな笑い声をあげ、サワリは仁王立ち。カミソリをぐいとH氏の貧相な胸に突きつけ。

「なら、ひっかけてやろうか」

細い身体の、あさ黒い肌が、にわかに輝いて、ずっとH氏に近づいたかと思うと、シャ。まるでシャワーだ。

H氏の顔から湯気が立つ。これぞ温泉マーク。サワリに頭からひっかけられて、H氏、これはたまらずと湯の中に、ブクブク。沈没。何もかも強烈。

「こら、逃げるか」

サワリ、お湯の中のH氏を掴める。世界の三大奇書、インドの聖典八カーマストトラVに、お湯の中でのたわむれは最高と書いてあ

る。

「助けて」

「いい蒸しかげん」

蒸し風呂のボックスから首をだし、センセ今度は知らん顔、蒸されて、胸から脚から汗がだくだく。これでサッパリ。早くカエロ。

「アフ、アフ、アフ」

と死にそうな声。タイルにのびたH氏の顔に、サワリがデンと坐っている。

「ホラ、どうだい」

サワリは楽しそう。このままでは、肉刑。

サワリのゆたかな重量。死んでしまう。

サワリの魅力的で惨忍な笑顔。H氏、完全にノックダウン。失神。

サワリ、攻撃の鋒先を、蒸し風呂から首だけだして見物しているセンセに向けた。チョロリと赤い舌で唇を舐める。これ、癖か。獲物をねらうカローラの風情。

とんではねたかと思うと、プロレスよろしくひきしまった両脚でセンセの首をはさみ、美容体操なみに、蒸し風呂の曲線を利用してサワリは逆にぶらさがった。身が軽い。

が、体重は意外に重く、首が千切れそうで、センセ、齒を喰いしばってこらえる。ひでえことになった。胸がドキドキ。

突如として噴水が舞い上る。消防車の放水よろしく、センセの顔に、ドヒヤ、ひっかかった。その水量のまた豊富なこと。よく続けて、あれだけでるもの。

「派手にやっているじゃない、サワリ」

個室のドアがあいて、トルコオチチの再来、ボインボインの同僚一人、荒縄を振り廻して入ってきた。タオルで髪を束ねた大女。「あまりにぎやかだから、みんなで覗いていたんだよ」

気がつかなかった。そういえば、その筋のお達しが忠実に守られて、個室の窓には何も掛けられていず、四つ、五つ、ひまな顔がニヤニヤ。スケベな顔ばかり。

息を吹き返したH氏を無造作に二つ折りにすると、大女は荒縄でガンジガラメ。あぐら縛りと海老責めをミックスしたような荒っぽい縛り方。ルールもなにもあったものじゃない。

なんせ、ボインは二十貫余。H氏、十三貫勝負ははじめから決まっている。

「八百屋でもらってきたんだよ、今、この荒縄」

覗いているうちに、自分でもイジメたくなってきたらしい。

ボイン、荷物のように、軽々とH氏を吊り下げ、ゆさゆさと浴槽へ。湯の中にヒョイ、H氏をつけた。湯責め。二度、三度。

「ひい」

とはなさない。とはいいながら。H氏、再び、失神。失神派の小説、かくやあらん。ネ。

H氏をほったらかして、ボイン。

「そいつのほうが苦くてピチピチしているじゃない」

魚と間違えていやがる。センセ、十六貫、H氏より、少し、マシ。胸毛のないのが玉に傷。

蒸し風呂に閉じ込められ、蒸されすぎての

女性写真モデル募集

分譲写真撮影のため

奮て御応募下さい

○本誌では、代理部分譲品用の写真を撮影するため、女性モデルを募集しています。
○本誌愛読者の方でしたら、年令、遠近は問いません。分譲品用ですから誌上に発表いたしません。誌上発表可能でしたら尚結構です。又、助手介添え或はプレイのみ出演御希望の方は御照会下さい。
○出演又は参加御希望の方は、年令略歴記

びているセンセ。仁王立ち。ボイン。今度は雷雨。そのドシャブリのスゲエこと。

「一度、こんなこと、やってみたかった」

立っていては標準が定まらず、ぐいとかがんであめあられ。ボイン、うれしそうにのたまわった。むせた、むせた。

サワリ、換気装置をまわし、空気のいれかえ。にござとる。

ボインがセンセの顔を占領したと知るとサワリ、センセの露出された未占領地を攻撃。

二対一。防戦隊、気が散ってアカン。

勝ち誇ったボイン、センセの顔を解放。縛ったH氏の背中といわず、尻といわず、スリッパで目茶苦茶にひっぱたいた。バシッ、バ

載の上編集部宛お申込み下されば、報酬その他詳細につき、お返事いたします。

○応募されました方々の個人的な秘密は固く厳守いたしますから御安心下さい。尚お好みの傾向を附記下されば好都合です。

○本誌の内容充実のため、並に皆様の文献研究資料作成のため、奮って御応募御参加下さるよう、お待ちいたします。余暇を利用しての御参加も大いに歓迎いたします。
○特に妊婦資料の作成に御協力下さる婦人を求めています。撮影可能の方は、遠近に拘らず御一報下さるようお願いいたします。

△奇ク編集部△

シッと恐ろしいほど音が大きく響き、マネージャーが驚いてとんできて、無言。

しばらくしてヘンタイか、と言。ヘンタイじゃねえや、とセンセの口が動いたが、ボインの象のような分厚い足の裏で口をふさがれて声にならず。残念。

ボイン、センセの顔をやたらと足の裏で踏みつけながら、飽きもせず、H氏の頭といわず、足といわず、もう夢中でなぐり続け、とめるもの、なし。

H氏の悲鳴、つかれて、なし。
泣くがごとく、むせぶがごとく、ただ、嘆息のブルース。

失神しては気付く用の瀑布。

激しき水流に堪えきれず、折角気付いてもまたも失神。とめどなし。悦虐派の小説、かくもまたあらん。ネ、ネ。

地獄図現出の極楽の園。

荒縄でがんじがらめのH氏、ボインの赤いパンティを頭からかぶせられていいおもちゃにされ、時間延長も三度。

センセ、サワリに起されて、新しくためた湯にひたり、幕。めでたし、めでたし。

(終)

創作女性切腹

維新秘話

月形千浪の自刃



作並写真

六角京之介

一、死の招待

外は雪。夜目にも白く、霏々として降りしきっていた。もう一尺は積もったろうか。しずかな無言の刻を、微かな堆積の瞬間、瞬間にきざみ、京洛の深更をいろどってゆく。

「ふーッ」

微醺を帯びて吐く息も白々と闇に鮮か。つと仰ぐ夜空に、次々と舞い降りてくる雪花はいつはてるともなく、早春の肌に滲みる冷たさを強く思いださせる。

頃は元治元年、維新動乱の風雲さらに急を告げ、世情まさに混沌たるその頃。如月末日の宵浅く、京都は祇園の料亭「一力」の立閑に立った白面長身の若き美剣士があった。

色飽くまで白く、鼻筋の通った、しかも円らにして黒々とした瞳のその武士は、身長五尺四寸、スラリと伸びた長身にもまして、豊かな胸の辺り、肉付きよく堂々たる体格の持主で、整った身なりには一分の隙もなく、ただ腰にたばさんだ朱鞘の大刀と赤い下緒が不似合いなくらいに眼を射て印象的だった。

しかも、その表情は、暗く、憂わしげであった。

剣士は女だった。月形千浪、三二才。京洛勤皇浪士の多くから尊敬され、慕われていた男装の女丈夫。なお類のない珍しい女道場主であり、女ながらも衆に秀れた鋭い太刀捌きの持主として、常に幕府刺客の暗殺団からつけ狙われつつも、巧みに剣の林を切り抜けてきた尊皇女剣客として有名であった。

いま、静かに戸外の雪景色に見入っている千浪——、何かもの思いにふけっている様子だった。

「江州の膳所、湖を前にした栗津松原の空ッ風。この頃はさぞきびしいことでしょう……あれから、もう三年。月日の経つのは、ほんとうに早いもの。でも、その間に私はずいぶん変った——」

過ぐる三年前、膳所藩の与論が勤皇、佐幕に分れ、勤皇派が敗れた。幾人かの同志が斬られ、或は自刃し、わたし達は再起を誓って国をあとに出奔したのだった。

夫と手に手をとって、駆落ちするように辿りついたのが、この王城の地、京都。巷の片隅で夫ともども腕に覚えの剣術教授、ささやかな町道場だったけれど、結構日々が楽しかった。でも、或る日その静けさが破られたのだった。夫の学問上の知己、長州藩上士の世

良兵馬様が突然訪ねて来られて……。それからだった、目まぐるしいさまざまな激動が身辺に渦を巻いたのは。

そう、日々に政局が狂瀾怒濤の变革を次々と遂げていった。世情がますます混乱して、収拾がつかなくなったのだわ。

いつしか勤皇派の一方の旗頭になった夫、月形、でもついに無理が祟って病魔に魅入られ、うそのようにあっけなくこの世を去ってしまった。その夫の遺志を継いだわたし、大義殉忠の決意で、それからずっと回想の一駒が次々と彼女の脳裏を掠めてゆく。

血腥さい京洛の巷、血汐の雨が降りそそぐ王城の街に白刃をくぐり身を挺して工作に心魂を傾けつくす日々。だがその間に、男まさんの彼女にも人並みの新しい恋が芽生えた。若い身空で夫に先立たれ、命を的の時々刻々ではあったが、豊満な若く美しい体と心をもてあます孤独のひと時、女志士千浪の心の片隅の忍び寄った人恋しさのかげり——。それが同志の一人、早瀬辰馬だったのである。

祇園の茶屋一力ではしばしば持たれた工作のための秘密会合で、長藩脱藩浪士、早瀬の若々しい白哲の面上にみなぎる積極果敢な情熱と、魅力的な弁舌の冴え。女である身の悲し

さ、二派三派に分れ甲論乙駁の長時間に亘る激論に、主張を抑えられ、胎頭する反対論の圧迫にとまどいがちだった彼女を、いつも助け且つ励ましてくれた青年美剣士早瀬のおもかげが、次第に彼女の胸の中で大きく拡がり始めたのも自然のなりゆきともいえた。

そして、二月も末に近いこの日。「一力」に早瀬と落ち合い、男と女として交す盃の中に遂に早瀬の胸の中へ崩折れてしまったのだ。亡夫への自責と悔恨。そしてきょう明日をも知れぬ生命の断ち難い思いへの訣別を込めて……。

沸り立つ情熱の奔流の中で早瀬もまた身を投げだし、彼女ともども忘我に呻き、燃える白い肌への烈しさを受けとめ、生けるものの感激をわかちあったのだが——。

突然、闇の中に灯がまたいた。雪明りの上に提灯の灯影がゆらぎ、町人まげの男が深々と頭を下げつつ近づいてくる。

「刻限でございます。お迎いに参りました」彼女の回想が途切れる。思わず顔が赤らむ。が、途端に新らしい、背筋を貫くばかりの緊張が総身に走った。思わず表情の固く硬張るのを意識せずにはいられなかった。

「死の使い、そう、死神の招きが、いまここ

にある。とうとう来るべき時が訪れた——”

この日の夕刻おそく、さんざめく弦歌の音を避けて、料亭一力の離れに通じ、早瀬が浴場に入って間もなく一通の封書が走り使いの男から彼女に届けられたのであった。名宛は早瀬辰馬、差出人藤岡九十郎、

“急、深更松ヶ崎大乘院じようの会合に出席され度し”文中に岡崎幸蔵の連署もある。

一昨夜、今出川の連泉院で緊急の会合をもったばかり、それを、いま再び……。そのときの会合では薩長連合の結成に踏み切る時機の問題について、一大激論が斗わされたのである。同志の長落志士藤岡、岡崎は連合結成への急先鋒だった。なおしばらく時期尚早を主張する月形千浪の態度を激しく非難し、ついには刀の柄を叩き噛みつかんばかりの凄まじさで決断を迫った。早瀬の取りなしでその場は収まったものの、いうにいわれぬ不穏険悪な殺気のみなごった会場の雰囲気。

しかし幕府諜者の潜入している危険を考えると、彼女にはこの会合でどうしても事態の真実を説明することがためらわれたのだった。事実とはや時間の問題である。桂、西郷、大久保の高級会談が或る場所で急速にまとめられ、進められていたのだ。彼ら首脳か

ら固く口止めされつつ、秘密裡に、味方にも告げず、それらの交渉をまとめて行く側面の努力と苦しさ。

その都度使者しやに立って頻繁な往復を重ねていた早瀬、”方々、何れ、もう遠からざる間に”と取りなしの言葉を告げる早瀬の表情はいつもの快活な明るさとは打って交り、如何にも苦しげだった。その早瀬の紅潮した面上に、射るように注がれる藤岡、岡崎の鋭い目！ 猜疑に暗く光るそのときの二人の目つきに不吉な予感を覚えていた彼女はいま、受取った封書の文面をひらいた瞬間、云い知れぬ戦慄せんりつと不安で胸に轟とどろくのを覚え、思わずそれを帯の内側に蔵しまい込んだ。とっさの間に彼女の思案は決まっていた。

“死のう、私が早瀬の身替りになって……”

彼らは私達二人を裏切者と思っている。説得にも限度がある。きつと彼らは私は斬るつもりにちがいない。そう、斬られよう。私だけは……でも早瀬はまだ若い、将来のある身体。私の任務はもう終わったも同然。あとは薩長連合盟約の締結を見るだけ、女の出る幕ではない。だが早瀬はこれからこそ必要な人物。早瀬だけは生かさなければ。藤岡らはきつと幕吏を誘い出しているに違いない。所司

代や新選組の刺客が多勢ひそ潜んでいるだろう。選り抜きの刺客達、わたしは生きては還れまい。でも、せめて盟約の締結だけは見届けてから——いいえ未練。何をいまさら、それよりも早瀬を助けねば”

嵐のような激しい血の燃え上りとともに送り、重ねた盃に早瀬はすっかり酔い、深い睡りに陥おってしまった。彼女は湯槽に入って豊満に息づく美しい己れの若肌をいとおしむように清め、今は覚悟の死装束。真ッ白な下着に黒い着物をまとった。そして父祖奥山新賀齊累代の銘刀村重をたばさむ。

かごに乗った。音もなくなお降り続く雪。

さくさくと雪を踏む人足の足音ともに、かごのタレからのぞく一力の軒灯がぼうっと霞んで、次第に遠のいて行くのだった。

“これでいい”

心の中にそっと呟く。早瀬の身柄は新選のこれも若い同志島村三之助少年へ下男に持たせてやった手紙で一切を託してある。あとひと刻もすれば駆けつけた島村の手で早瀬は洛北ほくの農家に誘導され、安全にかくまわれるであろう。

“わたしは、刺客達の刀槍に切り立てられ或いは飛道具によって、蜂の巣のように銃弾の

穴をこの身体に穿^{うが}たれるかも知れぬ。が、わたしは斗う！ 最期の一瞬まで……。この身に白刃の喰い込んだとき、敵は骨の髄まで銘刀村重によって切り下げられているのだ。死力をつくして斗い抜こう！ 敵も私も一人残らず斃れ伏すまで。

思わず齒を喰いしる。胸の鼓動が、凍^いてつく夜の寒気と緊張の中に音立てて聞えるようだ。

上泉伊勢守信綱に源を発する神陰流一門の道場主の息女に生れ、幼い時から女ながらも剣をとってきびしい修練に励んできた彼女。

長じて膳所本多六萬石藩校の道場主月形のもとへ嫁^かした彼女は、天性の美貌とともに、目にも止らぬ素早い必殺剣法の持主として、数奇な波乱の半生を歩んできたのである。幸か不幸か子をもうけず、いま唯一の女流剣法者、且つ女性志士としての、生死の戦いの場に臨む――

齡三二才、早春歡樂の花に先立ち、王城の地、寂として豈々の白雪に眠るとき、殉国尽忠の大義に、うら若い身命を堵^かけんとする女月形半平太、千浪。亡夫の志を果たして若き次代の青年志士に替り、斬撃^{げき}の魔手に美しいその肉体をさらし、死の招宴に赴く悲壮な決

意は、細く末尾を高々と刷いた、きれいな眉^{まゆ}のカゲリにくっきりとのぞかれるのであった。

二、大乘院の決斗

洛西、大乘院――。雪の中にその巨大な伽藍は闇を圧し黒々とそびえ立っていた。

導かれるままに本堂の広間へ通る。深閑として静まりかえった堂の中は広々として、畳を踏みしめる足音すらも微かなハネ返りのひびきをもたらしようだ。下男のもつ提灯のほのかな灯りに仏像の姿がおぼろに浮き上り無気味そのもの。

突如、その灯りが消え去った。バタバタと逃げ去る下男の後姿が、外の雪明りで目に入った途端、プーンとキナクさい臭い。飛道具！ さっと身を沈めた瞬間つんざく轟音。闇を縫った光箭^{せん}！ グワッ、眼前に火花が散った。右肩に熱鉄の痛み。思わず手をやる。ヌルヌルとした熱いもの。血。グツとこらえ左に半転しつつ床に転がり横に払った抜打ちの一閃！ 血しぶきが飛び、鉢金打った白鉢巻の刺客が柱の横に虚空を掴む。

「卑、卑怯、飛道具とは。奴ばら新選組かッ。さ、かねて覚悟の上、何れからなりとき

たれ。されどわが命、むぎむぎ呉れてはやらぬ。その方たちこの身を討たばもろとも、相討ち覚悟ッ」

うごめく無数の影に笠を投げつけて、声高に叱咤しつつ手早く羽織を脱ぎ、着物の前をくつろげるや双肌脱ぎ。大円柱を背にすくと立ちはだかる。村重の銘刀を青眼に構え、いまや必死の形相、月形千浪。銃弾は肩を掠めただけだった。

「何のこれしき。一人残らず斬り倒すまでは、私は何としても死ねぬ！」

ハッタとばかりに、闇をすかして円陣の人影を睨^{にら}み据える。いきなり明るい光芒が二筋三筋、眼を射た。討手の照射するがん灯の光に眼がくらむ。

「や、月形、女月形だ！ 早瀬ではないぞ」「うむ。さては悟ったな。しかしながら月形の妻女千浪どの。そなたも又、われらの狙いの一人。もはや観念されい。今宵こそは逃しはせぬ。新選組十番隊々長旗野亮一郎、幕命によってお命、確かに貰い受けた。行くぞッ」

ギラリ、短槍の穂先が光る。いつの間にかその数二十名に近く、堂の内外は刺客の嚴重な包囲陣、剣尖、槍ぶすまの林で埋まった。



「ええい」。横手から繰り出された長槍！
タアッ、飛び退く。ぐいッと柄をつかみ、身を乗り出した鎖かたびらの侍へ一振り。返す刃に背後の一人がのけぞる。たて続けの太刀さばきにまげのもとどりが切れ、グラリ、崩れる。長い黒髪がたちまちさんばらとなり肩から胸に流れた。

油断なく柱に寄りかかり身構える彼女の姿が、くっきりとがん灯の光に浮かび上った。漆黒の長い髪毛がいま洗ったばかりのように美しく光って碗を伏せたような形の良い乳房にかかっている。純白の下着が腰にずり下げ

られ、真ッ白のさらしがギリギリと乳の下から腋下を埋め、割れた裾から太腿が白くのぞき、スラリとした彼女の片足は、いま斬り倒した隊士の一人を力強く踏みつけていた。

集中された光の輪の中で月形千浪の引きしまったその半裸身は艶めかしく、場違いな美しい、輝きを放って、包囲陣の眼を却ってまばゆくそらせるのだった。

キリリと怒りに吊り上った細いきれいな眉の下で黒々と油断のない瞬きを見せる彼女の眼もとに圧倒され、討手は既に二人を失っていまや攻撃に慎重を期しつづあった。

「ヤァッ！」仏壇の蔭から一人、勇敢に側面を狙って双手突きに出た隊士。ガッ！千浪の剣がツバもとでこれを捕える。次の刹那、間髪を入れず引つ外され、首筋を深々と割られ朱に染んで転がった。振り向きもせず、返す刃で反面に迫った若い隊士の胸を薙ぐ。その瞬間、ダッ！肩を丸め身体ごと横からぶつかってきた巨漢、剣豪ながらも女の身、辛く剣は避けたがアッ

という間に撥ね飛ばされ仏壇の正面にしたたか背中を打ちつけた。それでも夢中で返した切尖は誤まらず、屈強な敵の眉間、ズンと刀持つ手が痺れるばかり、唐竹割りに斬り下げ、打ち倒したのであった。

白い下着にいまや返り血が点々。さきの銃傷、掠った弾傷ではあるが、息つく間もない激しい動きに再び出血をしたようだ。もたれた円い柱、その肩のあたりが憤血でビッショリ――。

開け放たれた本堂の扉。外は雪明りに、おそいこの夜の弦月が、いまや皎々と青い沈んだ光を放ち、堂の中に鮮やかな照り返しを投げかけていた。

血潮が点々と黒いシミをつくってあちこちに拡がっている。激斗に次ぐ激斗、孤軍奮斗の月形千浪。さすがに疲れが著しく、吐く息はフイゴのように荒い。盛り上った彼女の円い胸の隆起は大きく昂まり、そして下り、ひどく苦しそうだ。

が、相手の刺客達は彼女の力の尽き果てる隙間を待っているかの如く、間断なく、死闘の距離へ刀身をせばめてきた。一層の殺気が轟々と身に迫る。その動きに誘われて、彼女の剣もさらに強い殺気をはらませていた。い

まは捨身の斗魂が剣尖に凝結して――。

「しゃあーっ！」

瞬間、跳躍した正面の敵は、叩きつけるように黒い殺気を斜め落しに送りこんできた。同時に彼女の剣も、体を入れちがいに薙^ながれていた。無言の気合とともに重い手応えが、右腕の上膊にうづく。

「むうっ！」

刺客の短い呻きが床の上に落ちて、ごろっ
と一回転！ 円陣がザザッと崩れ、がん灯が
二ツ、攻囲の刺客の足もとでぶつかる。

「たあーッ！」

いきなり背後に鋭いかけ声、サッと繰り出
された白銀の一閃。機を狙った長槍の刺突！
弓なりに横へ体を反らし辛くも避けた彼女。

「とおーッ」

はじけるような矢^や声^{こゝろ}が、紅唇からほとばし
った。長柄が二ツに割れて相手はもろにふっ
飛ぶ。

「えいっ」

手も見せずに抜き放った脇差で迫った左
の男をけさ斬り！ 血煙り立ててのけぞる強
敵。そのまま崩れ立った円陣の中に割って入
った。もう無我夢中だった。阿修羅のように
獅子奮迅！ 斬撃、直突！ 自在に振り回す

両刀の凄まじい肉薄。柱の蔭に、廊下の片隅
に、襖の後に、円陣から散った刺客達は、そ
れでもそれぞれにすさまじい必殺の白刃をか
ざし、槍^{やり}を構えて肉迫してきた。

かん声、呻き、矢声！ そして絶叫、悲鳴
怒声、刀身に幾度か青い火花が散り、血しぶ
きの疾風が舞って、器物が壊れ、砕け、飛
び、生死をかけた嵐の奔^{ほん}濤^{たう}が寺院をゆるがす
のであった。

そして数刻の後、阿鼻叫喚^{あびきうわん}の修羅場に不思
議な静けさが訪れた。累たる屍の上に青い月
光が無言の冷たい光を投げている。柱に、床
に点々として際限もなくこぼれ黒い大きなシ
ミをこしらえた血の飛沫^{まつ}、胸をつくなま臭い
流血のたまり。刀や槍、そして銃までが随所
に転がって、なお無気味な青い光の縞を闇の
中で鈍く湛えていた。

三、敵 刃

「やった！ 遂に、遂に敵を全滅させた……
私は勝ったのだ、とうとう勝った！」

血ぬられた大刀を杖に、いまは身に幾創も
の傷を受け、頬にかかるさんばら髪、ズタズ
タに引き裂かれ、破れ果てた双肌脱ぎの着物
の裾。氣息えんえん、凄絶な寂しい微笑みを

湛えた月形千浪は、一人よろよと祭壇の前
に歩み寄って行った。

むしろにのどが渴く。ひりひりと灼きつ
くように渴いて、カラカラに干上り、気が遠
くなってしまうほど辛い。

祭壇に供えられているおびただしい供花、
供物。転り、押し潰されたろうそく、線香。
未だ倒されずに二、三本の花筒が青黒い闇の
中に浮いて見える。よろめきつつ更に数歩、
ようやく辿りついて一本の花筒を驚攔みにし
供花を抜きとり、そのまま口に持って行く。
グイ、グイと音立てて筒の中の水を飲み干
す。

旨い。ああ、思わずため息を洩らす。身体
の中にしみ入るような冷たさ。

ようやく生気を取戻したようだ。激斗に疲
れ、火照った身体は花筒の水を鮮やかに吸い
込み、求め、さらに一氣に残り水を……。

と、そのとき白布に祭壇の蔭から黒い影が
一ツ。見る間にそれは、彼女の背後に音もな
く忍び寄った。

ガラリ！ 手槍の穂先が、その黒い蔭の横
から無気味に光る――。

その頃、雪の降り止んだ京街道の積雪の上
を、必死になって走り急ぐ二ツの人影があっ

た。

眦を決し、懸命になって走る二人の侍。雪煙を蹴立て、裾を高々とはしよって駆けける彼らの面上には、夫々ひたむきな血走った眼、眉宇にみなぎる決死のひらめきがあった。しかも一人は左腕に厚い白布を巻き、ひどく血が滲^{にじ}んで、それは時々ポタポタと雪の上に溢れ落ち、紅の小さな点滴をつくっていた。あとの一人も片肌脱ぎにのぞく青い下着に、飛び散った血潮の痕が点々と生々しく、二、三の小さな手傷を負っていた。

千浪が大乗院に向ったあと、同志、少年剣客の島村三之助から事情を聞かされ、愕然色を失ない、彼女のあとを追うべくいきり立った早瀬達のもとに、蒼白な顔をひきつらせ慌しく駆け込んできた藤岡九十郎、岡崎幸蔵の二人。

「し、しまったッ」

「薩長の盟約は成ったぞ！ たったいまさき幹部の世良先生から連絡があった。済まぬ、大変なことをしてかしてやった。こ、この俺の首を斬って呉れ！」

悄然たる藤岡、岡崎の兩人――

「そ、それよりも一刻も早く千浪殿を救い出さねば！ 千浪殿が発たれてから、ずい分

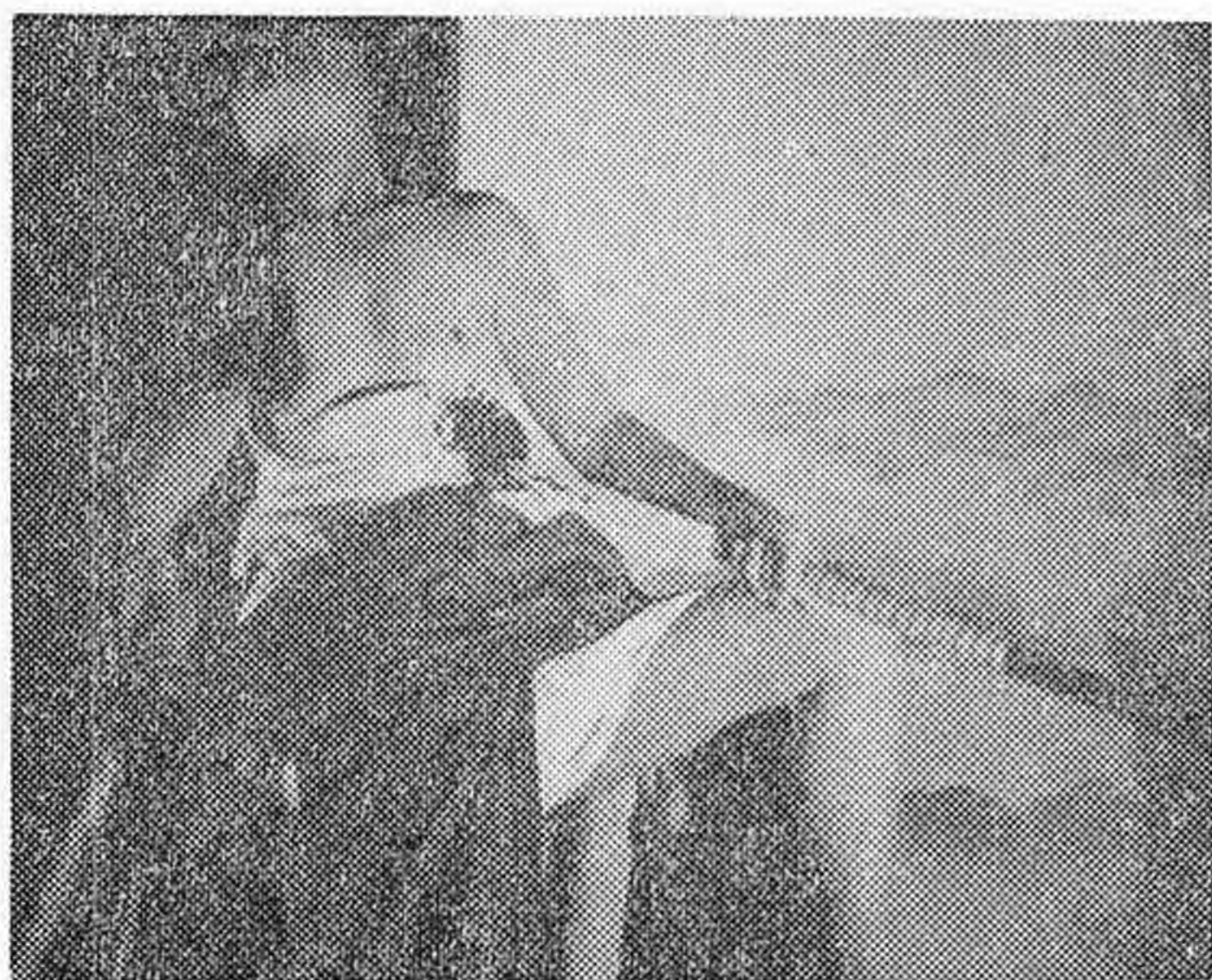
時が経っている。相手は新選組と浪士団の新徴組、選り抜きの剣客ばかり……

「月形が危い」

「そうだ、行こうッ」

「千浪殿。生きていてくれッ。頼む、生きていてくれえッ」

血を吐くような早瀬の叫び。急ぎ千浪救援に駆けつつあった四人の前に突如！ 折柄の



月光を背に立塞がった無数の黒い影。

大乗院に続く河津谷街道の入口を扼し、刀槍を擬^きしていた幕吏の一隊だった。

猛虎の勇を以てこれを打ち通らんとする勤皇志士。衆を待み断固阻止撃滅せんとする所司代役人。血風渦を巻いて必殺の気合！ 剣尖に火花が散り、血潮が乱れ飛んで激斗、また激斗！

やがて斗いの音絶えて白雪を朱に染め、幕吏の集団はあまさず斬り崩されたが、岡崎、島村の二人ともに倒れ、いまは浅傷を負った早瀬、藤岡の兩人。気もそぞろにただ救出の一念に燃え、ひた走りに大乗院目指して、雪の原野を懸命に駆け向って行く姿がそこにはあった。

そのとき、大乗院では、いましも月形千浪の背に近づいた不吉な黒い人影。

さらに、あと一息の水を求めて彼女が次の花筒に右手を伸し、ぐっと口につけたとき、俄かに背後に感じた無音の殺気^{おん}！

床に突き刺し杖にした村重の太刀、サッと手に取る一刹那！。稲妻の如き手槍の一閃！

「ええいッ！」

「ガッ！ 彼女の総身をつんざいた灼熱の衝撃！」

払う刀影一瞬おそく、青白く光る手槍の穂先は、真ッ白に輝く千浪の柔らかない脇腹に、無惨！ 深々と突き立てられた。

「う、うーむッ」

ほとばしる絶叫。まさに寸秒の差であったろうか。疲れ果てた彼女の、僅かな隙につけ入った手負いの刺客の一撃。

右脇腹に熱鉄の痛覚。グーッと突っ張り石の重味が右半身に拡がる感じ……。眼の前がスッと暗く翳る。雪明りの堂内が見えなくなつたようだ。

「あ、あッ。ふ、不覚！」

ぐらり、上体が大きくゆらぎ、思わず左に傾く。振りかぶつた左の手が刀を握つたまま石のように固く、動かない。

「わ、わたしの身体を、いま、天子様に、さ、捧げるべきときがきた」

瞬間、絶望の思いが胸の中に拡がる。

「あ、あッ、む、む、ね、ん！」

遂に大きくのけぞつた。右手は必死に手槍の千段巻を握り、無意識の中に脇腹に食い込んだ穂先を抜こうと焦っていた。

どっと脂汗が流れ、冷たく首筋を伝う。白い首をのけぞらし、そのまま後の柱にぶつかった。

薄れようとする意識の中で、渾身の勇を鼓して槍を抜く。そして手繰り寄せつつも、いたたまらず、どうと後に倒れた。途端にドッと鮮血が溢れ出た、それは見る見る中に白い裸形の胸高にめめた腹巻を、下着を濡らし、ぬらぬらと濃い鮮紅色の彩りを拡げて行くのだった。

「ぐえーッ」と、こらえかねた呻き――。

胸に衝き上げてくる不快な内臓の圧迫。仰向けに大の字に倒れた彼女の腰を掠めてさらに刺客の太刀風！ 手槍を奪われた敵は、すかさず大刀に持ち替え、手負いでよろめきつつも寸尺の差で襲ってきた。

「うーん」

よじつた身体を中心を走り抜ける猛烈な痛覚に、再び強い意識が蘇つた。

「とうッ」

声にない気合ではあったが全力を絞りこめて突き出した報復の一刀！ 顔前に迫った刺客は深々と心の臓を刺し抜かれ声も立て得ず投げ出された彼女の足もとに崩れる如くに倒れこんだ。そいつの胴に指先をかけて、ぐいッと大刀を抜く。

そのまま床に刀を突き立て、右手で力一杯脇腹を押さえつつ左の手に上体をかけて起き

上る。「ツー」激烈な痛み……。

そして、両手を刀の柄に托し、ようやく大刀を杖に円柱に凭れた。

青く冴え渡つた冬の夜の月。その丸い月が、外れた扉の広縁から顔の上にのしかかってくるような錯覚に見舞われる。

「このまま、死、死ぬのか……、せめて自、自害を！ 女刺客月形千浪、最期の止めは自らの手で。は、腹一文字にかさばいて、立腹を……。わ、わたしは敵の刃にかかって斃れたのではない。ひ、一人残らず刺客を倒し自刃をしたのだ」

気丈な彼女はバリバリと無念の歯を噛みならしつつ、なおも残つた最後の気力をふるい、いま我と我が手で自らの腹を、柱を背に立って割こうとするのだった。

激しい痛みにも、もう右の脇腹は痺れ、感覚を失っていくようだ。

ともすれば「ガクリ」と来そうな上体を、歯を食いしばり、首を仰向けて刀の杖に支え、すつくと立ち上った。

フッと哀愁の思いが脳裡を掠める。

「早瀬、早瀬様は島村の手でうまく逃げ去つたろうか、今夜の中にいち早くかくれ家まで立ち退いてくれればよいが……」

「賢明な島村少年のこと。きつときつと刺客の監視を避け、早瀬様をのがしてくれた筈」
 「矢張り私は剣の林の中で死ぬ運命だった。こ、これでよいの……」

病い勝ちで、とうとう最後まで夫婦のほんとうの愛を分かちあうことなく逝った、それでも優しかった亡夫。そして後めたさの自責の中で、狂おしいまでの恋に燃え沸いた早瀬との逢瀬。それらの思い出が、いま走馬灯のようを目まぐるしく眼に浮かぶ。

「だが、遂にわたしは薩長盟約締結の報を聞くことなくここで暗殺の刃に散ってしまふ。満身創痍、あられもないこの姿を、いまはもうつくろうすべもない。それが女の志士の宿命だったのか。でも、わたしは女剣客、力一杯斗った。無念にも最後に刺されはしたが、真新らしかった死装束。血ぬられ、破れ裂けたこの着物、これも女の剣士の非業の定めかも知れない。村重の妖刀に呪いあり、と云われていたけれど、ほんとうだった。」

わたしはこの村重のワザもので、いま自らの腹を見事にかさばいて果てて見せる。月形千浪、三三才、桜花にさきがけてこの一命を天朝に差し出しまする」

「云い知れぬ悲壮痛憤の思いにぐっと胸がつ

まり、無念の涙が滂沱として頬を伝うのであった。

そのとき、一陣の風が堂を吹き抜け、祭壇の上の白い巻紙を一つ床に転がしていった。

「遺書！」

巻紙に眼をやった彼女はその白さにふっと連想を走らせた、が、やがて悲しく首を横に振るのだった。

「この深傷。もはや書くこともかなわぬ」

ややあって、上体を支えていた彼女の身体はぐらっと前に傾いて。支えの大刀を、わざと手から外したのである。そのまま柱に吸いつくように俯いた身体をそこに巻きつける。

そして、いきなり腰に垂れていた小袖を千切りとった。それを、なお出血の続いている右脇腹にあてがう。

たちまちぼったりと血を吸い、したたらせ始めてきた小袖。いきなりそれを掌の下に、太い、円柱へ当てて、ひと息に、ぐい、ぐいと大きく書きなぐった。

「死而成護国鬼」

書き終ったとき、「アーツ、もう、いけぬ

あ、あッ」再び眼の前が真っ暗になった。クラクラッとした途端、そのまま尻餅をつく。

急速に意識が遠のいて行くのだった。ドッと

床につつ伏した。

乱れた裾に、またもや夜の風が音立てて吹き抜けていった。彼女のはだけた湯文字の下で透き通るような白い美しい肌、豊かな肉附きのなめらかな太腿に、青く浮き出た静脈が二筋。

もう、外はそよとも物音がしない。堂内にほんとうの静かな沈み切った死の冷たさと、腥い血潮の匂いが漂っていた。

四、割 腹

「しまった！ お、おそかったッ」

「月形、千、千浪どのう」

息せき切って大乗院の本堂に駆け入った二人、早瀬と藤岡。しかし眼に映じたものは、おびただしい血潮の海の中で累々と横たわっている暗殺者たちの屍と、いまは正面祭壇の横で、太い円柱の蔭に交り果てた姿で横たわっている月形千浪の、斗いに力尽き、深傷を負って倒れた凄惨な姿であった。柱に血でしただためられた彼女の遺書が、総てが終った絶望と、限らない痛恨の跡を止めている。

「し、しっかりせい、月形！ 月形殿……」

「千浪様、千浪様。お気を、お気をたしかにもたれよ」



千浪殿の努力が酬われたので
す」

滂沱たる涙で告げる藤岡。

「千浪様！ 岡崎、島村の両名は駆けつける途中、敵の包囲に遭って斬り死にされました。月形殿に申訳ない、お詫びの申し上げようもないと、ひたすら謝罪しつつ亡くなられたのです」

早瀬の報告に肯く千浪。

「さ、千浪殿！ 傷は浅い。拙者の肩に」

藤岡が早瀬とともに、千浪を急ぎ救い出そうと身を起したとき、がくつと、千浪のすっかり血の気の失せた顔が仰向けに落ちた。白いのどに暗い翳が射したようだ。

「わたしは、もう、いけませぬ。最期のおときが参ったようです。最早や助からぬこの深傷、せめてものことに、せ、切腹をさせて下さいませ。お願いです」

弱々しく、訴えるように告げる彼女の眼に悲しいあきらめと、安堵の喜びが、そしてなお残された僅かばかりの気魄と、力をふり搾り壮烈な自刃を遂げようというひたむきな意志の閃きがあった。

「連合しての討幕への斗いはこれからです。わたしに代って、天子様へ殉忠の大義を尽くして下さい。さ、さらばでございます。どうか、月形千浪の最期、とくと見届けてくださりませ」

言いかたも終らず、早瀬の腕に支えられ、胸に背をもたせかけたまま、右のさか手に持直した血ぬられし小刀。左手を添えるや左のわき腹にグツと突き立てた。

鈍い音とともにきっさき一寸五分ばかり、ぐつと腹に食い込むとみるや、ぐいつと両手に力を込めて引き回し始めた。

「藤岡様、早瀬様！ 月形千浪、いま天子様の御もとにこの命を参らせします——。ううッ、千、千浪、いま、あ……せ、切腹、千浪の腹を……」

刃は、へその下一寸ばかりのところを、なぞるように右へ切り進む。

「うむーッ」

刀の輝きなことごとく腹中に没して、思わず洩れる激痛の呻き声を、唇をきつと噛み懸命に押さえる。

じりッ、じりッとききまわすのにつれ、黄色い脂肪がはじけるように現われ、鮮血があふれ出し、腹を伝いはじめた。

急ぎ駆け寄って、血潮に塗れた彼女の upper body を抱き起す。後に回った早瀬は、彼女の両脇に手を入れて力一杯、轟とばかりに抱きしめゆすぶりつつ、しっかりと抱え起した。

「う、うーッ」

千浪は意識をとり戻した。かすみのかかった向うにまぎれもない懐しい早瀬と藤岡の顔があった。

「あ、早瀬様……藤岡様」

「千浪殿。おわかりか。お気をたしかに！ 許して下さい、それがしの短慮。申し訳ない、済まぬッ。遂に薩長の盟約が成りましたぞ。これも千浪殿の蔭の力。討幕の密勅もやがて下ることになり申した。喜んで下さい。」

「月形殿、千浪殿、みごとです。刃を止めずに……あ、あとひと息で、一気に引き回すのです」

腹切り刀が正中線を越えた。血をしたたらせながら右のわき腹めがけて、さらにぐぐぐと切り裂いていく。

「うむッ、うーッ！ 刃が、もう刃が動きませぬ。あーッ」

「千浪殿。耐えて、いま一息耐えて下さい。腹わたに切込んだのです。もっと、力を、刃を深く！」

「あッ！ むーッ」

堪えかねて洩らした叫声。腸を掻き切った苦痛、衝撃、全身を慄わせる。血が、さらに激しく、どっと溢れて白無垢に染んだ下着をさらに彩り、太腿を伝い、膝を染めつくすのであった。ついに無惨にも見事に切り開かれた下腹一文字の切口。

「ああッ！」

ふくよかな下腹を掻き切った月形千浪の清らかな美貌は、苦痛に喘ぎ、歪み、眉の根にくつきりと刻まれた一本の縦皺が寸前の死への惨憺極まりない自虐の斗いを無言の裡に物語っていた。

あえぎつつ、手を後に突いて背を早瀬の身

体に支えられ、刀を腹に立てたまま肩で息をつき、左手で押し出された腸をぐっと抑さえる。

「月形千浪殿、御見事。立派です、立派でござった。いざ、介錯を」

おびただしい血潮に彩られた蒼白い肌が喘ぎ、豊かな胸がひどく波打^{なみう}ってきた。

「ぐえーッ、ううッ」

胸の中がつき上って、もう口もきけなくなってきたようだ。

いまや、目の周囲はくろずみ、くちびるはすっかり血の氣を失った千浪。肩で息をするたびに、下腹に突き立てたままの刃は、柄までも噴血で、しとど濡れるのであった。

「まことの剣士らしく、お、終りまで、古式に則って、せ、切腹をひとり、な、なし遂げます、今……今はこれまで、ご、御免」

最後の声を、ふり搾るように告げると同時に、くわッ、と大きく目を見開いた。

脇腹の深傷と、下腹の自刃に身体が自由が利かず、意識が曇って、ともすればこん濁しそうになる。

それを、残る力をふりしぼり、必死に耐えて右腹から腹切り刀を引き抜くと、手をふるわせながら、刃を下向けに鳩尾に力一ぱい突

立てた。

「うむ！」

細く長い眉をぐっとひそめ、眼は虚ろに、それでも柱に大書した血文字に焦点を当てたまま……。

「ああッ！ むーッ」

きりきりと縦に切下げ、奥深く窪んだ臍を通って、下着の紐まで切下し、開いた傷口から溢れた腸がうねうねと波打った。耐え切れずぐうッとのけぞり、崩れそうになったが、支えられ、そして俯向くと、血まみれの左手を前に突いて、なおしっかりと上体を支える。両脇に腕を巻いて、早瀬が崩れようとすのを抱き止めていた。

「あッ！ あッ！」

耐えかねた絶叫が洩れ、そして徐々に細っていった。

ぎりぎりと食いしばった歯の間から、唇の端を伝って内から迸^{ほとばし}った血と黄色い胃液が洩れ、頬を伝い流れ落ちた。

そのまま、短刀を腹から抜くや持ち直し、乳の下に力一杯、体を慄わせたまま、

「グエッ」

崩れるように、前に倒れこみ、ガバッと伏せた――。

三才。幕末、王政復古を目前にして、薩長盟約締結の陰に咲いた一輪の花。美貌の尊皇女劍客、月形千浪は無惨、非業の刃に倒れそれでも最後まで斗い、且つ自らの刃で見事にその命を絶った。元治元年、春まだ浅き如月の洛西、深更、かくて大乘院に散ったのである。

美しい女志士月形千浪の壮絶なる最期を悼み、累々たる屍かばねの中に合掌して祈りを捧げる藤岡と早瀬。

激しい音もすさまじく狂い、うずまく怒濤にも似た世情に、その麗しい柔肌に流れる憂国の赤い血をたぎらせ、琴かき鳴らす手に剣を持ち、美しい微笑もて取り囲む白刃の林に

◎躍進記念◎ 百萬元懸賞 △原稿募集▽

▽賞金△

入選作品	一席	1篇	五万円	10篇
入選作品	二席	1篇	三万円	10篇
入選作品	三席	1篇	一万円	10篇
入選作品	四席	1篇	五千元	20篇

▽内容△

一、特異な風俗文獻誌を標榜する本誌の内容にふさわしい力作を、読む雑誌としての新しい脱皮を企図する本誌の内容充実のため、広く読者の間から懸賞募集いたします。

一、S並にMは勿論のこと、各種各様のフェテック、シユ一般、女性切腹、男性切腹、男女性美、女相撲、女性珍聞、生首狂、奇風俗、風俗嗜好、見世物、奇態、珍聞、奇習、珍奇風俗、風俗文獻、その他古今東西に亘る特異風俗に關する題材を広くとりあげて下さい。

一、題材を広くとりあげて下さい。

一、歓迎します。特に従前本誌にて余り扱ってない分野の傑作をお待ちします。

▽規定△

一、応募作品は、すべて未発表の自作の作品に限ります。作品中に引用部分があれば、その出処（作者、書名など）を明記願います。

一、原稿は、原稿用紙（縦書き）を換算して三十枚以上二枚まで、必ず二百字詰又は四百字詰の原稿用紙を、毎月十五日、入選作品は順次の号の締切日に、発表いたします。

一、懸賞第一、原稿は、他の一般原稿と区別するため、第一、原稿の原稿用紙に、懸賞第一、返信料の封の送付先は、その旨添記して下さい。

一、函第41号、送付先は、大阪市住吉郵便局私書箱募集係宛。出版株式會社、奇ク編集部懸賞募集係宛。出版株式會社、奇ク編集部懸賞募集係宛。出版株式會社、奇ク編集部懸賞募集係宛。

一、採否は誌上発表を以てご承知願います。

も動じなかった麗人劍士。思えば、その煉達の剣により、幾度、同志の危急が救われたところか。

断腸の念もだしがたく、今は魂なき美顔を見詰める藤岡、早瀬の両志士の眼からはとめどなく溢れる涙があり、押し止め得ぬ鳴咽が突き上げるのであった。国事に命を賭ける志士に似つかわぬこの涙。

それは、単に同志の一人を失った涙ではない。男としての惜別の情もだしがたきそれであった。

その後、この両志士の姿を北越を進む討幕軍の中に見た人は幾人かあった。しかし、維新後しばらく彼らの消息を聞くことはなかった。藤岡、早瀬の戦死が多くの人によって確認されたのは戦乱が収まり、明治に入ってからであるという。二人とも函館鎮圧の包圍戦で勇敢に斗い白兵戦の際、銃弾を受けて戦死していた。

二人の遺した所持品の中に、それぞれ小さく折り畳まれ、血に染んだ小袖の切れ端が入っていた。両名の月形千浪に寄せる心の中の想い、そして彼女の死を招いた討幕工作の史実や凄壮な最期の乱刃決闘を、いまは知るよすがもない。

（おわり）

マゾヒスチック ストーリー

被

虐

の

冷

笑



みはら

ひろし

頭を鉛の枷で締めつけられたように重い鈍痛が、こめかみを苛み、全身の蝶番は今にもはずれそうにきしんで鳴った。

窓のカーテンの隙間からは、すでに朝の空色の日光がしめやかに流れ込んで、閉じ込めた部屋の中を薄っすら明るくしていた。

ベッドの上で緩慢な動作で寝返りをうった淳は、毛布からはみ出させた長い脚を床に垂らして、上履を足探りする。それから上半身を大げさな努力を払って引き起し、ベッドに斜めに腰を下ろした恰好でベッド・サイドの

小卓からチョコレート色のチェスター・フィールドを箱ごと掴み上げ唇で器用に一本を咥えとり、白金のデコポンをカチリと鳴らす。

淳の吐き出す紫色の煙が、冷え冷えとした部屋の空色の朝の光を横切って漂う。淳は身震いした。煙草を咥えたまま、毛布を身体にまといつける。全裸であった。ぬっと立ち上がる。一米七八厘の肢体は贅肉を鍛練ですっかりしごきとって、すんなりとのび切った羚羊のような柔軟さを暗示していたが、それでも腕を動かすたびに、肩から二の腕、胸に

かけては、叩きつけたような筋肉が塊りとなって盛り上った。

浴室に入った淳は、シャワーの栓を捻る。

二つ並んだコックをいじって湯加減を調節する。激しい勢いで飛沫がとび散り、裸体にはじけた。淳は顔をかしめた。後向きになった背中から臀にかけて赤紫のみみず腫れが無惨に交叉し、赤黒い血が乾いた絵の具のようにこびりついていた。バス・タオルで背中を包んだ淳は、唸り声を上げた。

前夜、バーから連れ出した三人のホステス

達に痛めつけられた痕である。

それに二日酔いの頭が割れるようだった。

洗面台に頭をつつ込んで水道のコックを開いた。冷水を滝のように頭から浴びた淳は、ぶるぶると獣のように首を振った。水滴が飛び散る。全裸の身体にバス・タオルを腰に巻きつけた恰好でキッチンに入り、アルミ製のポットのふたをあけ湯栓の下において、コックを開いた。熱湯が白い蒸気と共に、歌うような音をたててポットの中にほとばしる。一杯になったアルミ・ポットと盆にのったコーヒ・セットを一緒に持った淳は、寝室に戻ってきた。ポットとコーヒ・セットを円卓の上に置いた淳は、ベッドの脇の肘掛椅子によろめくようにして腰を下した。二本目のチエスター・フィールドに火をつけ、啜る煙草のまま、マックス・ウェルのインスタントをカップの中に器用に振り込み、その上からポットの湯を注ぐ。スプーンで苛立しげに掻き廻し、ぐっと咽喉に流す。砂糖抜き之苦い液体が胃の腑にしみ、淳は手足を、猫がのびをするように突っ張った。濃いブラックをもう一杯、流し込む。四肢に活力が少しずつ甦って来る。淳は立ち上ってキッチンに戻り、冷蔵庫の扉をあけて、大きなハムの塊を取り

出した。パルマの生ハムである。ナイフで五センチほどの塊を削ぎ取り、残りを又、冷蔵庫の中に戻して扉をしめる。寝室に戻った淳は、とってきた冷たいパルマの生ハムを手掴みで噛みながら、今度は砂糖を入れたマックス・ウェルをゆっくりと味わった。

淳は、すっかり精力を取り戻し、生き返った。バス・タオルを腰からかなぐり捨て、ソファの上に昨夜から放り出しっぱなしになっていたコットン・リネンのダブル・カフスに両手を通し、シャツの裾を股の間に挟み込みながら、これもソファの上に引っかかっていたダーク・グレイのズボンをたくし込む。ジャージの上衣を引っかけて、小卓の上から鍵束を掴み上げる。

アパルトマンの階段を駆け下りた淳は、地階の駐車場にパークしてあった濃緑のGIL BERN・GENIEの扉をあけ、ハンドルの下に滑り込んだ。無駄のない直線的なデザインのツードアで、フォード・ゾディアックのエンジンをつけた二九九四CCの高性能車である。

車は勢よくスタートし、海岸沿いの朝のハイウェイを快適に突っ走った。やがて通りが混んできて交差点が多くなり、車は市街に入

ってスピードを落とす。

淳の事務所は繁華街を通り抜けた角の、くすんだ煉瓦の十階建のビル八階にあった。事務所といっても、殺風景な小部屋に机が一つ。机の上にはセロテープで割れ目を補強した汚らしい電話器が一台。机の前には来客用の、皮張りが破れて中の詰め物がはみ出した丸椅子が一つ。その外には、この来客用の丸椅子に机をへだてて、これも摺り切れた肘掛椅子にふんぞり返って、ビルの入口で買い求めた仏字紙を拡げている淳自身を除いて何もなかった。

淳は、その仏字紙の求人欄に目を通していった。

『女性秘書求む。高給優遇、委細本人と面談の上、決定。面接は十一日七日、十時AMー正午まで。ウインストン街、ヴォーティエール・ビル八二号室SACHER・MASOCH研究会』

淳が出した求人広告である。そして今日が十一月七日であった。もっとも、淳の部屋は事務所といっても看板が出ている訳けでもなく、部屋の番号を示すアルミの小さな番号札が扉の上に掲示されているだけだった。

淳は腕をかざして、薄型のパテック・フィ

リップを覗いた。細い銀色の針は十時半を指していたが、人の訪れる気配はなかった。淳は両足を机の上に放り上げ、椅子の背に頭をずらせて、うつらうつらと居眠りを始めた。

十一時、ノックの音。慌てて机の上から両足を引く。椅子が大きく傾いて、淳は顔をしかめる。

「どうぞ」チェスター・フィールドを一本啜えとって火をつけながら声をかける。

扉が開いて、土色の顔色をした貧相な男が入ってきた。鼻下に赤味があった鬚を生やしている。服装は立派だった。百ドルはすると思われる焦茶のウールの上下に、胸から緑色のハンケチを覗かせていた。靴は茶色のスウェイドだった。

男は丸椅子に腰を下して、ズボンのポケットから、これも緑色のハンケチを引っ張り出して額を拭いた。

「御用件から先に伺いたいですな？」

淳は煙草の灰を机の上に人差指ではじき落とし、それから首を曲げて机の横に、吹き落した。

「実は……」

男はハンケチをズボンのポケットに押し込み、それから内ポケットを探って紙片を取り

出して机の上に置いた。

「実は、この広告のことで……これは、おたくで出されたものですか？」

男は、もう一度ハンケチを引っ張り出して額を拭いた。

「ヴォーティエール・ビルの八二号室といったら、ここでしょうな」

淳は煙草の煙を机の面に吹きつけた。煙は机一杯に拡がって、しばらくはその上を這い廻っていた。

「実は広告のことで……その、こちらで研究されてる内容について、お聞きしたいと思ひまして——」

男は部屋の中をキョロキョロと見廻し、それから緑色のハンケチを膝の上で揉んだ。

淳は、男に意地の悪い目を向けた。

「身分証明書を見せて戴きたいですな。仕事の内容を理由もなしに、見も知らぬおたくにお知らせする義務はないように思うが……」

男は再び、ハンケチを額にあてた。

「いや、誤解されて気を悪くされては困りますな。実は、はっきり申しますと……」

男はもう一度、部屋の中を見廻し、それから内ポケットに手をつ突っ込んだ。男は葉巻を二本とり出して一本を啜え、一本を淳に差し

出した。葉巻の先が震えた。淳は机越しに手を延ばして葉巻を男の手から取り上げた。コロナ・コロナの特製である。一本五十セントはする筈である。葉巻を唇の間に突っ込んだ淳に、男はプラチナのフラミネールのライターをカチリと鳴らして差し出した。

「実はその、御研究の内容に興味がありました……つまりその、個人的なことですが、相手の女性に……という意味とお考え戴ければもしやこちらでそういう御関係で紹介して戴けるんではないかと……勿論、その費用については考えて居りました……」

「よく判りませんな、どうも。それにまだ、お名前も伺わなかったようだが……」

淳は、葉巻の煙を吐き出しながら言った。

男は、まだ火をつけてない葉巻を再びポケットにしまい込み、今度は名刺を取り出して淳の方に差し出した。

「絶対に秘密を守って戴かねば困るのですがこれで御信用戴けますな？」

淳は、男の名刺に目を落した。

——インター・コンティネンタル・バンク、支配人ロベルト・コンティ——

「なるほどシニョール・コンティ、しかし名刺で人を信用するのは早計だと思いますな。」

それでは、こういう名刺を出したら、どんな名刺を返して貰えますかな？」

淳は、机の抽出しをあげて十枚ほどの写真を取り出して、男の目の前に並べた。男の目の色が変り、土色の顔に赤味がさしてきた。男は手を延ばして一枚の写真を取り上げた。

一人の残忍な表情の女が右手に鞭をぶら下げ左手を腰に当てる仁王立ちになっている。足許には、肩から背中にかけてミミズ脹れを走らせた全裸の男が、後手に縛られて転がっていた。

男は息を呑んだ。

「大分、お気に召したようですね」

淳の声に男は慌てたように目を上げ、写真を机の上に戻した。その隣の写真は、やはり全裸の男が床の上に仰向けになり、それを女が足を上げて踏みつけていた。三枚目の写真は、男の顔の部分の拡大だった。仰向けの男の唇のあたりを、女の白い素足が無惨に踏みにじっていた。

四枚目の写真を男が手に取った。薄絹のネグリジェを着た女がベッドに腰掛けている。女の足許に跪ずいた男が、尿瓶を捧げ持ってひれ伏していた。

次に男が取り上げた写真は、同じ女がその

尿瓶を片手に持ち上げて傾けている所で、尿瓶の口からは糸を引いたような液体が、跪ずいたまま顔を仰向けた男の口の中に、一直線に垂れていた。

「勿論、何を飲まされてるか、お判りでしょうな」

はっと気がついたように顔を上げた男は、ポケットから引っぱり出した緑色のハンケチで、しきりに額を拭いた。

「さて、シニョール・コンティ、この名刺には、どんな名刺を出して貰えますかね？」

淳は、机の上に並べられた写真を両手で掻き集め、一まとめに重ねて振ってみせた。しばらくの間、淳の手にした写真の束を呆然と見つめていた男は、急に気がついたように内ポケットに手を入れて、黒光りするワニ皮の札入れを取り出した。男は百ドル札を一枚机の上に置いて淳に目を移した。

「なるほど、この名刺なら信用せざるを得ませんな、シニョール・コンティ」

淳は手にした写真束を机の上に置いて男の方に押しやり、それから男の置いた百ドル札を拇指と人差指でつまみ上げ、すかさずように見てから胸のポケットにしまい込んだ。男も慌てて写真束をとって内ポケットにしまい込

む。

「それで、御用件があったようでしたな？」

淳は今、札束をしまい込んだ胸のポケットの辺りを軽く叩いて目を上げた。

「つまり、その……」

男は両手を机の縁にかけて、身を乗り出した。

「今、戴いた写真のような女性をぜひ御紹介したいものでして。永年そのような機会を求めてきたのですが、実在の女性にお目にかかったことがありませんのでね。何とかお願いします」

「なるほど、それで新聞広告をみて、ここに来ればそんな女性が見つかると思像されたわけですか？ お生憎だが、とここでお帰り願ってもいいんだが、理解はある方ではないか。勿論、条件を出されるんでしょうな？」

「秘密だけは守って貰わねば困るんですが、秘密さえ守れる方法だったら、あとのことはそちらさんの条件に従いましょう」

「結構ですね。それでは明後日、同じ時間にこの事務所にお出で願いますか。その時に、女を御紹介する手筈をお知らせしましょう。一度、御紹介したら二度目からは、おたくの交渉次第で、その後、何度彼女と会おう

がこちらは関知しない。また、こちらでその女を他の男に紹介することもしない。つまりそれっきり、その女とこちらとは縁が切れておたくに売り渡すことになりますな。それで明後日に五百ドル、現金で御持参いただけますか？」

「結構です。全く結構です。ぜひ、そのようお願いします」

男は、ハンケチで額を拭いながら出ていった。

淳はまた、肘掛椅子に両腕をだらしなく垂れて、両足を机の上に組んだ。淳は、昨晚の三人のホステス達を頭に浮かべた。オルガがいいだろう。明後日までに連絡をつけておく必要がある。オルガなら、あのコンティという貧相な男を死ぬほどの目に遭わすことだろう。

十一時三十分、再びノックの音。

「どうぞ」

扉を開いて入ってきたのは、今度は女性だった。彼女は淳の机の前に真直ぐに進んで、にこっと微笑みかけた。こぼれるような白い歯が美しかった。

「こちらで秘書の募集をなさってるって……そうなんですよ？」

「新聞で御覧になったんですな。それで秘書を御希望という訳けで？」

「勿論、そうですわ。イタリア語にフランス語、それに英語も少し出来るんです。タイプと速記は二年の経験がありますわ。そちらの条件をお伺い出来るかしら？」

「その前に、貴女は、この仕事の内容が、どんなものか見当をつけてこられたんでしょうな？」

「だから、秘書の経験は二年あるって申し上げたんですわ。研究所でしょ？ 前には、ベルナルドさんの研究所に働いてたんです。お魚の研究なんです。深海魚の……でもベルナルドさんが交替になったんで、そこを止めたんです。だって、新任のマッキノンさんは秘書を連れておいでになったんです。ベルナルドさんの推せん状は、ここに持ってきてますわ」

淳は机の上に頬杖をついて女を見上げた。「いや、結構ですな。ただ残念なことに当研究所は、深海魚の方はやってないんでして。ま、いずれ御連絡差し上げましょう。いや、御住所は伺わなくて結構です。御足労でしたな」

淳は立って行って扉を開き、深々と頭を下

げた。

「では、どうぞ」

「貴方はベルナルドさんよりハンサムだし、親切みたいだわ。連絡、待ってますわ」

「そのうち、深海魚の研究を始めたら、きっと貴女にお願いすることになりますよ。何しろ、こちらは深海魚なんて始めてなんでね」

淳は、呆気にとられたような彼女のお尻に平手を当てて押し出した。女は腰をくねらせて出ていった。

十一時四十分、扉がすーっと開いて黒いスーツの着せた女が入ってくる。

「こちらで秘書を、お求めとのこと……」

女は細い声を出した。渋皮のような唇が神経質に動く。淳は机にかぶさるように肘をついて、上眼越しに女を一瞥した。中老未通女の見本である。

「これは遅すぎましたな。今、決まったところでした……」

女は、大事そうに両手で抱えていた古ぼけた革のハンドバッグを机の上に置いた。

「でも、あたくしの条件をお聞きになってませんわね。あたくしは、高くは望みませんのよ。ちゃんと仕事に見合うだけで結構なんですから」

淳は立ち上って机を廻り、女の骨ばった薄い肩に手をかけて、くろりと入口の方に廻れ右させた。

「私も秘書は仕事に見合うだけ居れば結構なんでしてね。二人では多過ぎる」

ぷりぷり怒って女が出て行くのと入れ代りに、音もなく二人の男が部屋の中に入りこんで扉の両側に立った。一人の男が静かに扉を閉めて、内側からカチリと鍵を廻した。入口に背を向けて机に戻りかけていた淳は、鍵の音に振り向こうとした。

「おっと、そのまま振り向かず、真直ぐ壁に向って進んでもらおうか。両手は頭の上に組んだ方がいい」

低音のきいた男の声が命じる。

「驚かされますな。だが一応、どういう仕掛けで、わたしをおどかしているのか見せてくれた方が、きき目があるように思うが……」

淳は、ゆっくりと両手を頭の上で組みながら言った。

「その方がいいだろうな。静かにこちらを向いてもらうか。妙なそぶりは、しない方がいい」

淳は、入口の方に向き直った。二人の男が突っただった。がっしりとした肩巾の広い

頑丈な男と、背の高い瘠せた男。ハード・ボイルド小説の典型的な悪漢二人組の組み合わせである。そして型通り、瘠せた背の高い方の男は、無表情な顔を口許にだけ皮肉な笑みを浮かべ続け、がっしりした方の男は、凶暴な目を剥き出しにする。二人共、手に拳銃をものものしく構えている。淳を狙った二つの銃口には、無恰好な消音器がついていた。

「なるほど、拳銃でおどかさうって寸法ですな。しかしまあ、その拳銃でわたしを射ってみたところで、おたく等に得のゆくこともない筈だし、わたしとしては拳銃など、わざわざみせてくれなくとも、同じ質問には同じ答えしかせぬつもりだが、どういう御用件ですか？」

「大きな口をたたくんじゃねえ！」

がっしりした方の男が、拳銃を握り代えて淳の口の辺りを殴りつけた。淳の唇が切れて唇の端から血が垂れる。

「その男は気が荒くってね、怒らさぬ方がいいぜ。ところで、組織のことは知ってる筈だろう？」

背の高い方の男が、相変らず無表情な顔でいった。

「組織？ 聞いたこともないですな」

「どちらでもよいが、これから知っておくことだ。大分、法外な商売をやって荒稼ぎをしているという情報が入ってるが、そういうのを俺達に取り締まっているのだ。勝手に好きなことはやらせない。組織を無視すれば、どういうことになるかは見当つく筈だ」

「だから歩合を組織に入れるようにしろ、とこういう訳けですな。それでいうことを聞かなかったら、腕の一本もへし折って、おどかしてこい、と。だが、射ち殺して来いとはいわれてない。いくら組織でも、真っ昼間のビルの中で一人殺したら、その跡仕末は面倒ですからな。だから、どっちみち使う気のないう拳銃はしまったらどうです？」

がっしりした方の男が拳銃を握りかえて、肩の方から斜めに振り下ろし、拳銃の柄が淳の顎に当たって淳はのけぞり、机の上に仰向けに転って机の後に落ちた。

拳銃を逆手に握った男が、机を廻り込む。待っていた淳は男の足を掴んで引き倒し、男の手から拳銃をもぎ取った。引き金を引くとシュッと空気銃を発射したような音がして入口に立っていた背の高い方の男の手から拳銃がふっとぶ。淳は立ち上って拳銃を構えた。淳の靴の踵で顎を踏み割られた背の低い方の

男は、口から血と折れた歯を吐き出しながら床の上でもがいている。背の高い方の男は、真青になって両手を上げた。

「俺は苦勞した稼ぎを、ただで人にくれてやるほどお人よしじゃない。組織とやらのボスに、そう伝えてもらおう。拳銃二つ、俺が預っておく。返して欲しかったら、ボスが自分で詫びを入れてくることだ。判ったら、この床の上でへばっている能なしを連れて、さっさと出て行ってくれ」

瘠せた背の高い方の男が、口の廻りを血みどろにした男を肩にかついで、よろめきながら部屋を出て行くと、淳は再び椅子に腰を下し、そして大きくため息をついた。

腕時計は十二時をさしていた。
扉が開いた。淳は目を見張った。

素晴しく背の高い大柄の女が立っていた。左手には豹の毛皮のコートを抱え、右手には黒革の鞭をだらりと下げている。黒のブラウス、黒革のミニスカート、そして膝の上まである黒革の長靴の^{ブーツ}高い踵の^{ヒール}先は、針のように細く^{ピン}とがっていた。ストレートに長く垂らした髪がブラチナに輝き、スペイン風に吊り上げて描いた眉の下に、濃いアイシャドウで隈どられた灰色の瞳が、じっと見つめている。

淳は呆然と女に見とれた。

「鈍い男だね。あたしのような女にあったらこういう態度をすればいいか、わからないのかい？」

低いハスキーである。淳は、はじめたように立ち上り、机を廻って女の前にひざまずいた。

「お前かい、広告を出したのは？」

女は薄い唇を舌なめずりした。淳は女の足許に更に低く頭を下げる。

「気に喰わないね、あの広告。秘書求むって何だい、あれは？ お前の方が御願ひするんだろ？」

「申し訳れございません。お願いです。どうぞ、お仕えさせて下さい。条件をおっしゃって下さいまし」

「ふん」女は片脚を上げて、長靴で淳の土下坐した頭を踏みつけた。

「条件だって？ あたしに向って、よくもそんな口をきくわね！」

鞭が空を切って淳の背中に激しく叩きつけられた。

「奴隷に条件があるものか、どんな使い方をしようと、あたしの勝手だろ？ 使うだけ使って、絞るだけ絞り、役に立たなくなったら

捨てるだけさ。稼ぎは、どのぐらいなんだい」

「毎月、三千ドルぐらいになります」

「ふん、まあいいわ。それが続く間は使ってやるよ。部屋と車の鍵をお寄越し」

女は机を廻って、今まで淳が坐っていた椅子にどっかと腰を下した。

「あたしの名は^{イザベル}Lezabel。どういう意味だか知らなきゃ、あとで辞書でもお引き。もう何人の男を喰いつぶしてきたかしらね。どこに行っても、お前みたいな変態男には事欠かないからね」

イザベルは、まだ床に両手をついて這いつくばったままの淳を、傲然と見下した。

「あたしは贅沢な女だからね、これから月五千ドルは稼いでもらうよ。これを、よく見るがいい」

イザベルは手にした鞭を机の上に置いた。

「この鞭一本で、あたしはしたい放題の贅沢をしてきたのさ。この鞭の下で、お前のような変態男^{マゾ}どもが、ヒイヒイ音を^ね上げ、断末魔の苦しみにのたうちながらも、最後の一滴まで血と脂を絞りとられるのさ。覚悟するがいい。手加減はしないよ」

淳は複雑な気持で、もう一度、床の上に深々と額を摺りつけた。

古本屋の親父談……

風俗文献

あれこれ話



山川大三

まず自己礼讃など

奇譚クラブと、その読者は直接的な連がりがあるが、古本屋も風俗文献などをあつかっている関係上、大いに縁^{えん}がある。しかも現在の^{えん}のようにどこの新刊書店でも奇譚クラブやそれに近い本など、なるべく店頭に出さないようにビクビクしている状態だから、ことさ

らマニアの方々の穴場として、その存在は貴重なものと自己礼讃したい。ただし、時流にのってドル箱としてモウケさして頂いてるのだからニテもヤイても喰^くえない代物かも知れないね。そう云っても、こちとらは生活がかかってるのだから、それだけ風俗誌の価値については真剣でもある。東京の某古本屋さんには発禁本研究で有名な城市郎氏がおとくいで

あることをPRして、店のハクを付けることに利用？ しているようだ。そんな事柄がすぐ古書目録にも影響されて、城氏を取り上げた書物は、チャンと（城市郎「発禁本」掲載）と但し書きがあつて古書価（おおむね稀少価値による相場）もピンとはね上っている。しかし、私の店もふくめて同業者間では、あまり悪書という言葉を使うことをしない。これなどは新刊書店側さんらといささか違う所と思う。なぜか、明治から現在あたりまでの桃色関係をいつも見ていれば年月が立派に資料として価値が形成されつつあることを知っているからだ。いまは政府公認の明治百年とかで、その声は高い。それにともなうて風俗史研究もとみにお盛んになってきたが、かつては日陰者であつた当時、発禁と汚点を付けられた物なども、どれだけ陽の目を見て活用されつつあるか。おかたい話はこれ位にして、古本屋のオヤジからみた風俗文献あれこれ話を商売にマイナスにならない程度におしゃべりしようか。

週刊誌古書価NO・1号？

「実話・三面記事」

私は二、三年前から週刊誌もある種類によ

って古書価が付くだろうと考えていた。まだ週刊誌は古本屋の店頭で一山いくらの時代である。ようやく戦後、乱発されたセンカ紙桃色雑誌が本誌でおなじみの斎藤夜居氏によって『カストリ雑誌考』として資料価値がうんぬんされるようになったが、まだ週刊誌までは「？」の状態だ。最近になって、ある古書目録に「秘本紹介」号ばかり——と説明付きで「実話・三面記事」が、けっこうなネダンを付けられて顔を見せたときに、私はこれなるかなとよろこんだ。いまになっては読み捨て誌だから、入手もむずかしいか。この秘本紹介の特集を別にして、あとの記事は興味本位な物で話の他だ。昭和三十六年当時、日本文芸社（東京都千代田区神田神保町二ノ三四）から発行されたが秘本紹介の頁（毎号ではなく発表は間をおいてる。筆者も選手交代制）は秘密出版物を公刊される誌上に可能な限り紹介その筆者の態度も真面目だ。『某大家の作とまで噂された濃艶の奇書紹介！』として『異色の秘本・地獄の享楽』とか『戦後文壇の新人の作とまで噂される異色の秘本紹介！』として『情熱の秘本・夜の噴水』など。ここで特に抜萃したいのはKK的な要素が濃厚な物を取り上げられていることであ

る。三十六年十二月二十六日号の『縮図』だ。紹介筆者は司青柿郎氏で、△異色の秘本、欲楽の秘密をあばく「縮図」▽「うら若き美貌の女医と彼女によって青春に目覚めた少年を縦の糸に、その少年を慕う女学生、サジストの画家を横の糸とし極彩色に織りなす人生の縮図！」と本文にタイトルがある。

「同じ題名の小説に、徳田秋声の代表作がある。だが、本篇の『縮図』はその偽作でも贋作でもなくまったく別なもの、秘本として新しく書かれたものである。むろんストーリーも違い、主人公の女医雪子とその甥の、十八歳の和夫少年との奇妙な関係からはじまり、思春期の少年哀歓・同性愛・サジ・マゾの異常性愛と展開して行く」と前書され「美しき叔母と少年」、「成熟した女の匂い」、「隣室のクラス・メイト」、「しなやかな白い指」の四章から成っている。

.....

「和夫は高校に入学したその年の夏、胸を患い、休学しているので、毎日、叔母の家でブラブラしているのだが、叔母の雪子は和夫の病状を心配して、和夫を故郷の岐阜県へ帰えそうと考えている。叔母ということになって

で、神田のS病院の内科女医としてはたらいでいる美貌の女性である」

「和夫、洗濯しておいてね。シュミーズとブラウス、それからこのパジャマもね……」と頼まれると、彼はよろこんで、そうした下着類を何時間もおかかって洗濯した。その和夫は、ふつうのノーマルな少年ではなかった。

雪子が出がけに脱ぎ捨てていったものを洗おうとして、洋服箆の奥を探していると、彼女自身で洗うつもりで洗った、下穿きを発見したときは、いまにも心臓がとまるかと思うくらい激しい動悸をおぼえるのだった。

少年は、その肌着の中に顔を埋めて美しき叔母の残り香を嗅いだ。うっすらと残っている痕に、叔母の白い肌の秘密に触れる思いがするのであった。太陽が物干し竿のその白い布をキラキラと照らした時、少年の体にはげしい衝動が流れた。（これから、和夫少年がいつもの如く雪子の脱ぎ捨てた下着を洗濯しているのを隣家の女高生文江が風呂場の窓越しに覗き、やがて、和夫はこの文江の女に負けて、ここで人生の春に目醒めるなどあり、また、その文江の父の二号、雪江と女医雪子のレスボスなどからんで終章は久しぶりに休暇をとって雪子は実家に帰り、父親の紹介で

朝倉三平という劇作をしている四十には間のある紳士とお見合いをさせられ、その次の日、雪子は朝倉のコレクションした東西の戯画がいっぱい詰まっている洋間を訪ねる。

「あら、朝倉先生はこんなものに興味をおもちなんですか？」潔癖な雪子が軽蔑の色をみせて「いやな先生……」と睨んだとき、朝倉はいきなり雪子の手首を掴んでいた。さつと、雪子の顔から血の気が退いてゆくのがみえた。「あんたみたいな、知性を顔にぶらさげた女を見ると、僕は我慢がならないくらい癢にさわってくるんだ！」「まあ、なんていうことを仰言るの！」

「覚悟してもらうんですな、僕は昨日、あんたをひと眼みた瞬間から、無性に虐めてやりたくなったんだ」朝倉は、雪子の坐っていたパイプ椅子を押し倒すと、用意しておいた麻縄で抵抗する雪子をうしろ手に縛り上げた。

「これで折檻してやるんだ！」そう叫ぶなり、脂肪ののった雪子の白い肌へ、革ベルトは痛烈なひびきを立てて鳴った。

つづけざまに三つ、四つ、五つと鞭が鳴った。そのたびに初めは苦痛に歪んでいた雪子

の顔にぶつぶつと玉の汗が噴きあがり、憎悪と恐怖の色がしだいに恍惚と瞳をうるませてくるのを見た。雪子は陶然となりながら白い肌を蛇のようにくねらせつづけた。

……………

とにかく適当にあたりさわりのない程度に司青柿郎氏の手によって発表されてあるのを、また私がとびとびに抜粋したのだから筋はあいまいになったようだが、巷間に流布されている春本の世界に、SM調のテーマが投げ込まれている点、興味が引かれようか。

「責めと緊縛よもやま話」など

本誌の在庫品切れ分の号のとおっぴょうしもない古書価については毎度、読者の声を誌上で拝見し、古本屋側としても誠にすまなく思っているが、この奇譚クラブなどは、はらいさげにくるお客さんも少なく、苦心して入手して店頭に出すので骨折り賃としても高くなるのは御理解願いたいのである。ところで四十二年十一月号の本誌で齊藤夜居氏入稿談性風俗資料入門、8Vが、奇譚クラブがいつしか十万部になんなんとする全盛期。これを見て、お前ばかり甘い汁を吸うのはけしからんと、対抗馬として進めて来たのが、東京の

『風俗草紙』である」と触れているが、この風俗草紙もなかなかやる気十分で二十九年四月号などは二百七十四頁で「特異風俗座談会・第一回、責めと緊縛よもやま話」を特集し五人の出席者の中には本誌でもなじみの深い松井籟子（作家）や伊藤晴雨（画家）の顔も見える。以下、このお二方のみの談話をぬき書きしよう（ほんの少しだけ）。

……………

伊藤「絹糸を撚った縄ならば、絶対に解けませんね。だから、刑事の持っている捕縄は全部絹です。それから芝居の宙乗りの縄も全部、絹です」

「縄のアトは一定の時間を経過すればなおります」「お湯に入れば一番いいがね。但し縄で縛って打っちゃって置くと、そこから擦りむけちまって、ウジが湧くというようなこともあります……。極端な場合は……」「私が若い時分（大正初期）には、モデルなんかもまだ縛られる経験のない頃だが、私はカフェーの女を狙ったものです。往来を歩いていて、これはものになる女がいるなと感じると、そのカフェーへパツと入って行く。かならず一人くらいそういう女がいる。そうすると、お前、芝居を観たことはないかい、芝居

は好きかい”と行って、好きだといったら芝居をやりたいかないかい、明烏^{あけがらす}というのをやってみないかい”とうまく誘う。当時五円も出すと島田のカモジが買えたものですから、それを買って来て、これでやってごらんといつて、早いところをやらせてしまったものです——これまでが伊藤晴雨の話——

松井「女の人を縛って喜ぶ男の人も、いやがる男の人もあるのと同じように、女の人の中にも、縛られていやがる人もあれば喜ぶ人もあるでしょう」司会者の「松井さんもお描きになる場合のご苦心もあるでしょう」に対して「私には吊らしてもらったりする人がないから困るんですよ（笑）この前のお宅（風俗草紙）の『夢魔』で、簞笥^{たんす}へ縛り付けたのを描く時にも自分でやってみたりしたのですよ（笑）ちょっと人が見ていたらやれませんか（笑）しかし一応は自分でやってみないとわからないものですからね——これまでが松井籟子^{るくろくび}の話——

なお、「出席者の横顔」の中で、伊藤晴雨氏（読者も既に御承知の「緊縛と責め」の大家）。松井籟子氏（本誌連載「淫雨熄まず」

の作者。女流作家に美人は少いという説を裏切って、女史は稀に見る美貌である」と紹介されている。この風俗草紙も、いまは廃刊になって、古本屋にのみ昔の夢を物語っている。まさか対抗馬^{たいかうま}変じて現在なお健在なる奇譚クラブ誌上に取り上げられるとは、世もふくざつですね。

「怪異、轆轤首^{るくろくび}」のこと

いつの頃からか、本誌の「原稿募集」の内容の中に「生首狂崇」という文字が見られるようになった。これから紹介するのは、ここに「見世物奇態珍聞」も加味された読物である。戦後も復刊され幾号かでて廃刊になった『苦楽』の戦前版によるものだ。大正十三年六月一日発行・プラトン社（大阪市東区谷町五丁目）第一巻第六号。この雑誌は当時、大衆向な作品が盛られているが、この号によって見ると菊池寛「石橋山」という戯曲が本文にかざられてあったり、小山内薫と谷崎潤一郎が選で、映画劇のストーリーを募集しているなど、一寸、クセのある物だった。そんな雑誌にのっている、小栗健次「轆轤首」という小説も、もっともらしい考証なども入っていて、ひねくった作風でもある。（以下抜粋）

「九段の招魂社で、轆轤首の見世物を見たのは今から三十五年前のことである。汚ない黒木綿の幕の前に、女が三味線を持って坐っている。女が三味線を弾いて、はやり唄のようなものを歌う。その内にその女の首がだんだんに上の方へ延びる——延びる——延びる——歌いながら延びる。そして、黒幕のてっぺんへ行つて止まる——そして、その高いところでは、つぱり歌い続けている——体は相変らず下に坐った俣^{また}で三味線を弾いている。勿論、それが仕掛けであることは、まだ十にならぬ私にも、すぐ分った」。「その首が——厚化粧^{あつけいしやう}をしていながら、人の世の疲れ^{つか}を隠し切れぬといったような、世にも頼りなげな、寂しげな顔で……又、その声の押し出すような絞るような苦しさ遣瀬^{やせ}なさ……私は恐い^{こわ}というよりは、むしろ可哀そうになった……見ている内に、涙^{なみだ}がにじんで来た」

「だが、一体轆轤首^{るくろくび}というものは、ほんとうに在るのだろうか。物の本を見ると、どうもあるらしい——少くとも、昔はあったらしい。『寝太^{ねごと}り』、『二口女^{ふたぐち}』、『離魂病^{りこんびやう}』などと同じ類で、人間の病的現象——変態——

畸形として存在したらしい。併し、なぜそう
 いったものを「轆轤首」と呼ぶのか、そのわ
 けが分からない。ラフカディオ・ヘルンの定義
 に依ると、轆轤首というのは、轆轤のように
 廻転する首で、それがその廻転の方向に従っ
 て、延びたり引っ込んだりするのを言うのだ
 としてあるが、果してどうだろう。若し、首
 が廻りながら延びるのなら、頭も廻りながら
 胴を離れるのか、頭はそのままで、単に頸だ
 けが廻転するのか、そこも分らない。だが、
 その轆轤首に種類が二つあることだけは確で
 ある。(一)寝ている間に、首が長く延びて、何
 処へでも勝手な所に行く (二)首が全く胴を離
 れて、首だけで方々歩く。そして、暫くして
 から又もとの胴へ帰る。この二つだ。それか
 ら、轆轤首は行燈の油を管めるものだとも言
 われている。絵を見ると大抵は女になってい
 る。昔の本に依ると、当人は知らないで――

〔伝言板〕○分譲品目録は作成が大変遅れ
 ておりますが予約お申し込み下さった方に
 は出来次第間違いなく発送申し上げます故
 それまでお待ち下さるようお願いいたします。○分
 譲品のお申し込みは大阪阿倍野郵便局私書
 箱第14号箕田京二宛に願います。○従来本
 誌上に広告しておりました代理分譲品は、
 ここ二年乃至三年ぐらい以前のもは在庫

丁度夢遊病者が自分知らずに外を歩くように
 寝ている間に、首が延びるのだとしてあ
 る」

「なお参考として、ヘルンが『狂歌物語』か
 ら抜いている轆轤首の歌を二、三首写して見
 よう――寝乱れの長き髪をば振り分けて／
 千尋に延ばす轆轤首かな。頭なき化物なりと
 轆轤首／見ておどろかむおのが姿を。束の間
 に梁を伝わる轆轤首／けたけた笑う顔の恐さ
 よ。六尺の屏風に延びる轆轤首／見ては五尺
 の身を締めけり。これを見ても、轆轤首に二
 種類あることは確だ」(ここまでは前書のよ
 うな物で後は轆轤首の物語がはじまるわけだ
 が、私としては「前書」の方に文献的な価値
 を考えるので、これでやめる。

このへんで、またの機会に

風俗文献のあれこれなど題名にすると、古

しておりますから未入手の方はお申し込み
 下さい。○尚御注文はすべて△略号▽にて
 お願いいたします。○切手代用にての御送金も
 結構ですが高額切手や紙に貼りつけたもの
 はお断りいたします。○本誌旧号の在庫は
 漸次減少しておりますから、御希望の方は
 お早目にお願ひします。第二希望品がござ
 いましたら、お書き添え下されば幸いです。

本屋の話だから、さぞかし珍本でも紹介と期
 待されつつ眼を走らした方々もあるでしょう
 が、残念でした。斎藤夜居氏の『性風俗資料
 入門』で毎回、惜し気もなく秘蔵の稀書を発
 表されては、いくら本屋が商売の私だって手
 も足も出ない。

そりゃあ、何といっても毎日古本に埋まっ
 て暮しているのだから、自然と稀書も珍本も
 接する機会が多くなるのはあたりまえのはな
 しで、またそうでなければオマンマの喰い上
 げということになる関係上、目を皿にして探
 さなきゃあならん時もある。

いきおい読む本も多くなる道理だが、だか
 らといって、これこそは、とばかりにいきお
 いこんで紹介出来るものが、そうざらにある
 わけのものでもなく、文献漁りもまた、ソ
 ナニ、アマイモンヤオマヘンデ”である。

なればこそ、「文献」の文献たる価値があ
 ろうというもの。

そこでむしろ逆を行って、手近かなもので
 とお茶をにぎしたが、この稿、少しでも「読
 む雑誌」としての奇譚クラブのお役に立てば
 嬉しいことである。

(終)



机上籠郭

法

律

雜

考

井 上 俊 彦

第二篇 婦女に関する契約

第一章 総 則

第一条（契約の目的） 契約は金銭に見積るところを得ざる婦女を以て其目的と為すことを得ず。

（解説） 婦女を買ったり借りたりするのは、何らかの利益となる目的をもつてするのが普通なので、取引、市場価値のない婦女を、契約の目的物とすることは許されません。

○

第二条（種類） 契約の目的婦女を指示するに種類のみを以てしたる場合に於て、其品質を定むること能はざるときは、債務者は中等の品質を有する婦女を給付することを

要す。

（解説） この場合の種類と、解釈上多々の学説を生じています。が、ここでは一応債権者の意思を重視して、婦女の性格と解するのが穏当でしょう。すなわちマゾ性の婦女とか、サド性の婦女、時には妊婦というのもあるでしょう。さらに細かく分類することもできます。そして品質とは秀優色可不可であつて、中等の品質とは結局良を意味することになります。

○

第三条（撰択） 契約の目的が数人の給付中選択に依りて定まるべきときは其選択権は債権者に属す。

（解説） 甲が乙の所有する数人の婦女のうち

の一人を買う契約を乙と締結したとき、選択権は甲が有することになります。むろん乙としては自分の所有する婦女が品質を異にする場合、良質の婦女を選択される危険があるので、損になるわけです。

第二章 贈 与

○

○

第四条（贈与） 贈与は当事者の一方が自己の婦女を無償にて相手方に引渡すことによつて其効力を生ず。

（解説） 上級の品位（秀優の品位）を有する

婦女については高価であるので、単に引渡しを受けただけでは第三者に対抗力はありません。たとえば、甲から乙が優位の婦女を贈与され、乙が引渡しを受けた場合、甲が丙にそ

の目的婦女の登録を移転させたとしたら、乙は丙にその婦女を渡さなければなりません。

○

第五条（書面によらない贈与）書面に依らざる贈与は各当事者之を取消すことを得。但履行の終りたる場合は此限りにあらず。

（解説）私にはこの条文が何故ここにおかれたか理解できない。一般法には類似の規定があるが、婦女法に於ては贈与の効力は引渡しを為して始めて生ずるものであり、それは履行したことに他ならない。この規定は無意味であり削除されるべきと思う。

○

○

第三章 売 買

第六条（売買）売買は当事者の一方が婦女を相手方に移転することを約し、相手方が之に其代金を払うことを約するに因りて其効力を生ず。

（解説）婦女を売買することは婦女の人権を害し、婦女売買を禁止する方向にある世界情勢に逆行するように思われるが、一方、婦女の売買を禁止すると、婦女は多くの場合一人の所有者に所有され、これでは婦女に気の毒である。また取引価値のある婦女を取引市場

からしめ出せばそれだけ市場は活気がなくなり、国の経済界の衰弱は目に見えている。故に婦女の売買は、一部の議員の反対はありはしましたが認められるところとなりました。

○

第七条（売主の瑕疵担保責任）売買の目的婦女に隠れたる瑕疵ありたるときは、買主は契約の解除及び損害賠償の請求を為すことを得。

（解説）ここで問題となるのは隠れたる瑕疵の意味です。婦女の身体、精神に隠れる瑕疵があったと言えるには、どのような状態のときでしょうか。

第一に身体上のものについては、手足の不具合は通常の場合、隠れた瑕疵とは言えないでしょう。もっとも、売主が義足等をつけさせて、買主に解らないようにした場合、隠れたる瑕疵となります。また身体に傷があるときは、契約のときにその婦女を検査して取引したのかどうかにより隠れたる瑕疵となるかどうかが決ります。

第二に精神上のものについては、多くの場合隠れたる瑕疵になるでしょう。

買主としては法律上の問題を起さないようにするために、信頼できる婦人科の医師の診

断書を必ず要求し、取引及び引渡しについては婦女の身体検査を厳重に行い、自らも婦女の肌を検める等して、婦女の若さを確める必要があります。

また往々にして、売主が処女だとして、婦女を売る場合がありますが、処女か否かは外見上では識別できず、処女膜とても再成方法があるので、買主は一応、売手の言葉は信じない方が得策かと思えます。

○

第八条（果実の帰属）未引渡しの婦女が果実を生じたるときは其果実は売主に属す。

（解説）ここでも果実とは「婦女に対する権利」で述べたように、婦女の出産した子供、それによる婦女の母乳、分泌物、排泄物等、婦女の体自体より生ずる物、また婦女を使用することによって得た物を意味します。

○

第九条（危険負担）婦女が売主の責に帰すべからざる事由に因りて滅失又は毀損したるときは、其滅失又は毀損は買主の負担に帰する。

（解説）この条文は売買契約締結後、その履行までの間に目的婦女が滅失、毀損した場合に適用があります。婦女が滅失毀損した場合

買主が代金を支払っていない時は、売主に対して支払う義務が残し、支払った場合はその返還を請求することができません。その代り目的婦女を保有することになります。

滅失とは死亡や逃亡及びこれと同視すべき場合のこと。毀損とは品位の下落、身体の傷害等を意味するでしょう。逃亡した場合は、追求権が買主に与えられます。

第十条（買主の代金支払拒絶権）買受けたる婦女が質権又は抵当権の目的たる——時は買主は代金の支払を拒絶することを得。

（解説）質権又は抵当権の実施により、買主は買受けた婦女を失うおそれがあるので、売主が質権抵当権を消滅させるまで代金の支払いを拒むことのできる権利を、買主に認めたものです。

また買主は質権者、抵当権者に売主の債務額を支払って質権、抵当権を消滅させることもできます。この場合は売主に婦女の代金を支払う必要はありません。

第四章 交 換

第十一条（交換）交換は当事者が互いに婦女を移転することを約するに因りて其効力を

生ず。

（解説）ここに言う交換とは、永久的な交換であつて、よく行なわれる一夜交換は含まれません。交換する婦女が同品位の場合には他に金銭等の受け取りは必要ではなく、異品位の場合は信義則により低品位の持主から高品位の持主へ適当な価格の金銭等を与えるのが通例です。

第五章 使用貸借

第十二条（使用貸借）使用貸借は当事者の一方が無償にて使用及び収益を為したる後返還を為すことを約して相手方より婦女を受取るに因りて其効力を生ず。

第十三条（借主の使用収益権）借主は契約に因りて定まりたる用法に従い其婦女の使用及び収益を為すことを要す。借主は貸主の承諾あるに非ざれば第三者をして借用婦女の使用又は収益を為さしむることを得ず。

（解説）無償で借りた婦女のまた貸しを禁ずる趣旨で、借主がもし守らなければ貸主より解除の請求ができることになります。

第十四条 賃貸借は当事者の一方が相手方に或婦女の使用及び収益を為さしむることを約し相手方が之に其賃金を払うことを約するに因りて其効力を生ず。

（解説）一般に婦女の使用とは男女関係を意味し、収益とはその実を得ると解されてはいませんが、ここでいう使用収益は、その範囲に限ることはなく、制限がありません。よつて実験用のモルモットとして使用しても、加虐の対象物として使用しても何らかまいません。また婦女の排泄物を得ることも収益になります。（婦女の排泄物を缶詰にして売る商売有り）ともかくあらゆる方法により婦女を使用し、婦女から産するものを収益できます。いわば賃貸借期間中は、所有権者とあたかも同様の地位に立つことになります。

第十五条（賃借権の対抗力）上級婦女の賃貸借は之を登録したるときは、爾後其婦女に付き物権を取得したる者に対しても其効力を生ず。

（解説）“売買は賃貸借を破る”と言われていのように賃貸借の目的婦女が売買された時は、婦女の借主は買主に対抗することができません。しかしそれでは価値ある上級婦女を

第六章 賃 貸 借

賃借している者にとって酷なので、登録した場合にのみ新たな所有者（質権者、抵当権者も同権）に対抗できるとしたのです。対抗できるとは賃借権の存続期間が終了するまで、婦女を引渡す必要が生じないということ、売買契約そのものの効力のないことを主張できるというわけではありません。

○

第十六条（賃貸人の修繕義務）(1)賃貸人は賃貸婦女の使用及び収益に必要な修繕を為す義務を負う。

(2)賃貸人が賃貸婦女の保存に必要な行為を為さんと欲するときは賃借人は之を拒むことを得ず。

（解説）賃貸人は契約の存続中婦女を使用、収益に適するようにしてやる積極的義務を負います。修繕とは、借主の責に帰すべからざ

る事由に因って生じた婦女の毀損の治療を意味し、いやしくも借主が引き起した婦女の欠損まで貸主は修繕する必要があります。たとえば、借主があまり激しく婦女を鞭打ったために婦女が治療を要するような場合、幾度もの強制浣腸のため婦女が生理的傷害を生じたような場合、立木に婦女を裸で縛っておいたところ、一夜明けて雪が降り、婦女が肺炎にかかった場合等。借主の行為と婦女の毀損との間に密接な因果関係があるときは、貸主に修繕義務はありません。

○

第十七条（賃借婦女の滅失）賃借婦女が賃借人の過失に因らずして滅失したるときは、賃借人は契約を解除することを得。

（解説）ここでも滅失とは婦女の死亡、逃亡及びこれと同視することのできる場合で、し

かもその死亡、逃亡等が賃借人の責に帰すべからざる事由によるとき、本条が適用されます。以前判例で、賃借人があまりにも婦女を残酷に扱ったので、婦女が逃亡した場合どうなるのが問題となりましたが、本条の適用はその場合には妥当でないでしょう。すなわち婦女の逃亡が賃借人の責に帰すべき事由によるものであると解し、賃借人は賃借期間中の借賃を支払う義務が残ります。結局婦女の人格を害しない程度の範囲で使用収益するものが隠当です。

○

第十八条（賃借権の譲渡等）賃借人は賃貸人の承諾あるに非ざれば、其権利を譲渡し又は賃借婦女を転貸することを得ず。

第十九条（類推適用）本法に適用なきときは一般法を類推して之を適用す。

.....

以上をもって一応、婦女法の解説を終りたいと思います。尚信頼できる筋からの情報によりますと、婦女に対する刑罰は特別な法典にする由。資料を入手次第、魔女裁判等を良く研究して、詳しい解説を附したいと心しております。

天星社刊 〆限定版グラビア写真集 在庫案内

山原清子『刺青の魅力を探ぐる』 一部一〇〇〇円（送共）略号「美7」
二女緊縛『女斗緊縛競艶写真持集』 一部一〇〇〇円（送共）略号「美8」
「革具に拘束される女」拷問特集西洋篇 一部一〇〇〇円（送共）略号「美9」
M写真集「女王様に飼育される日々」 一部一〇五〇円（送共）略号「M特」

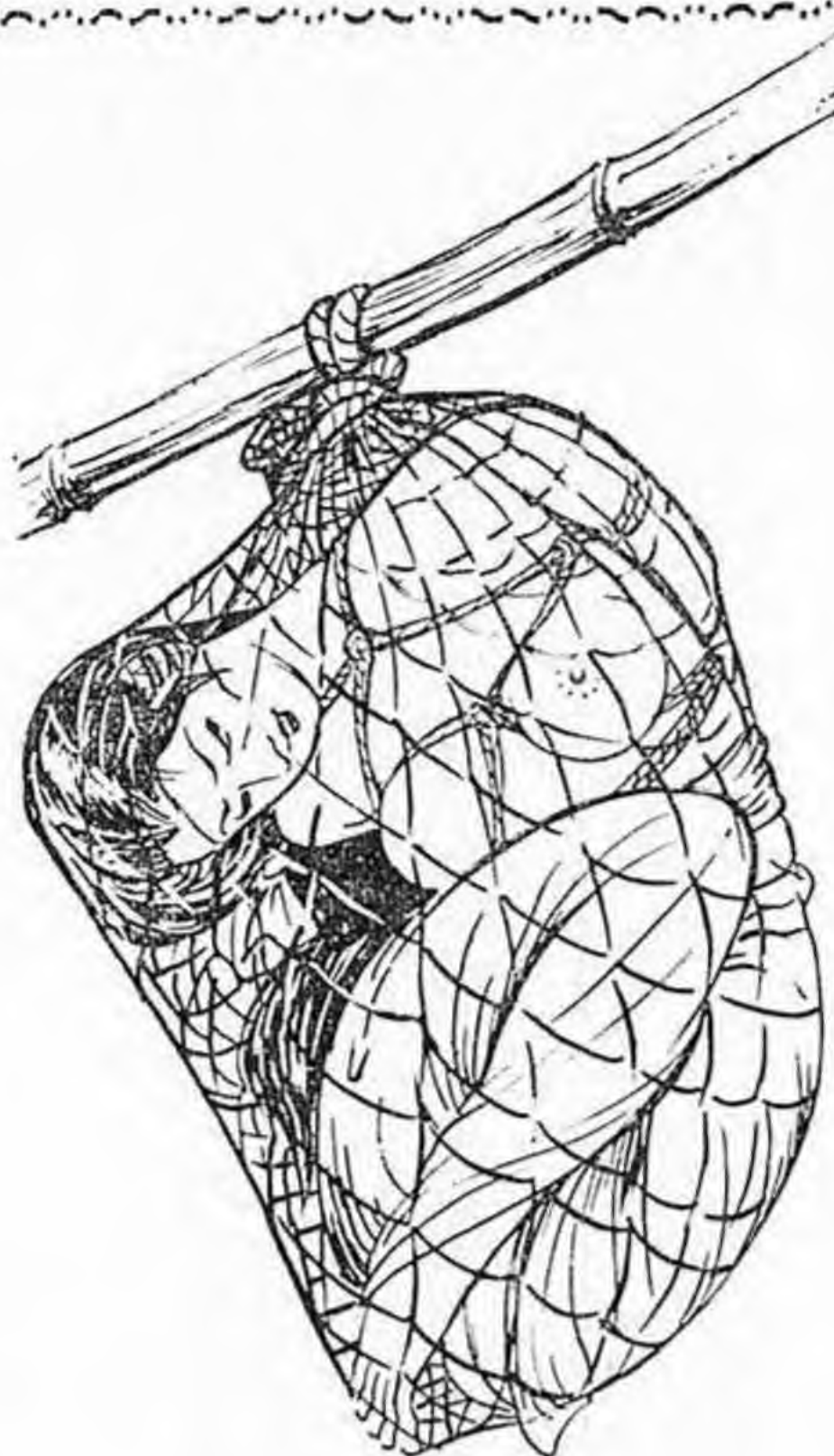
◎以上の写真集は一般の書店にては一切販売しておりませんから、直接、大阪市阿倍野郵便局私書函第十四号天星社に代金同封の上、お申込み下さるようお願いいたします。

懸賞入選作品

(五回分割連載第一回)

創
作

理 恵 女 献 身



「りえ女、藩の危急に際し

犠牲となることを承認し

自ら反逆重罪女囚として

厳しい縄目を受けること」

沢 潟 しの

おや、どうしたのでしょうか。髪搔きが折れてしまった。どうにもなっていないかったのに。仕方がない、この間、買ったのをおろしましょう。でもこの櫛は、あたしが江戸に上る時に、京都の名工の作だからといって、別に貰ったものだから、もうかれこれ十二、

三年も身仕舞いを助けてくれた大切なものだったのに……。どこか、ちゃんとした所に、葬ってやりましょう。

お小姓のさつきさんが、部屋に入って来て手を突く。

「御召しでしょうか」

「はい。何か大切な御用とかで、御人払いになって御待ちですから、御早くねがいます」

「承知致しました」

答えながら襟を直して、わたしは長い廊下を少し急ぎ足で行く。

どんな御用かしら、何んだか胸さわぎがす

る。この間中、御公儀の事とかで、いろいろむつかしい事が続いて、殿様も御心配のご様子だったけど、どうなったかしら。

皆川様が隠密の御用で、女に化けるのだと仰せられて、私の駕籠を使って行かれたけれど、おととい返していただいた。……まあ、行ってみればわかるでしょう。

さつきさんが御居間でなく縁の方へ廻って「御庭です」という。会釈して一人で行って見ると、泉水の向うにいらっしゃる。

「おそうになりました」

飛石に膝をつく。殿様はいつになく厳しい御様子なので、なるだけ、さりげない風に顔を上げると、何か余程お言いになりにくいことらしく、しばらく私の顔を見ていられる。

ややあって、

「済まぬが、国表へ行って礫になってくれぬか」

と言われた。思わず「はっ」と言っ頭を下げたけれども、目の前が暗くなって、頭がくらくらとした。とっさにお城に上る時、御祖母様から言われたことを思い出す。

「よくおぼえておきなされよ。殿様の御錠を伺う時には、よいことやうれしいことの時にゆはつくりと考えてから御返答申せばよいし

氣に入らなければ入らないで、そのように申し上げればよい。けれども、辛いことや嫌いな御申し付けの時には、いかにも待ちかねたという如くうれしそうに御受けするのでござ。それがおりえ殿の勤めですよ」

なるほど、こういう時のことだったのか。思い切って顔を上げた。

「はい。私で御間に合うのでしたら、如何様にもなされて下さりませ。たしかに勤めさせていただきまする」

何んとか平氣を装って御答え申し上げると、殿様もホッとされたらしく「参れ」と、御茶室の方に行かれる。

立ちながら懐を見ると、ちゃんと懐紙も入っているの、安心して御供する。

さげおび 提帯を締めて御茶室に出入するのは、まっ

たくめんどうくさい。どこにいらしたのか、浦上下記様も入ってこられた。殿様は

「下記。りえは承知してくれた。くわしい話をしてやってくれ」

と言われ、浦上様は私の方へ膝を乗り出すと、

「それでは何分たのむぞ。突然で愕いただろが、殿様始め、当家の主立った者、二、三名の身代りになってもらいたいのだ。先日、

そちの駕籠を皆川が借りて行ったのは、或る密議のためだったのだが、残念な事にその企てが、公儀の隠密に、洩れてしまったのだ。このままにいたして置くと、御公儀のお咎めが当藩全体にかかって、殿を始め領民一同の難儀にもなりかねない。この際、何んとかして公儀の目を外らして了わねばならんのだ。そこで、まことに氣の毒ではあるが、このところは、そなたが悪者になってもらいたいのだ」

なる程、それは大変。そんな訳けがあつて私の女乗物を使われたのか。

「はい、承知いたしました。それで、私はどういたせばよろしいのでしょうか」

「うむ。そなたには、まったく迷惑千万な事だろうが、話はわし等の方でこしらえる。そなたは、ただされる通りに神妙にしていければよいのだ。大切な点は、そなたが今度の企ての張本人で、それを我等が取り調べの上、反逆人として国元に送って厳しく処分する。それを公儀の隠し目付共に、よく見せつけてやればよいのだ。ただ何分にも、公儀の目付というのは、表向きの者は定ただけしかおらず、当方にもわかつているが、隠密の者が国表にも入り込んでいるし、恥ずかしい

ことだが、この屋敷内にもいると思わなければならぬのだ。それ故、普断の時ならば、このような場合でも、国表の仕置場に首を一つ晒せばすむのだが、今度ばかりは取り調べから仕置まで、すべて形通りに、きちんとして見せなければ納まらないのだ」

浦上様もお苦しうに話される。

「それ故、身代りの罪人と言っても、むやみな者にやらせるわけにも行かないので、我々も困って思案のあげくに、七重の膝を八重に折ってでも、そなたに勤めてもらわなければなるまいと言う事になったのだ。心よく承知してくれたこと、わしからもこの通り、頭を下げて礼を申します」

なる程、それでは私を名差しなされたのは、よくよくのことなのでしょう。

「どうが御心使いは御無用になされて下さりませ。十二の年に御国の御殿に上りました時から、私の命は殿様に差し上げたものと思っております。なにとぞ反逆罪人の御役を勤めさせて下さりませ。磔なり串刺しなり、御存分になさって下さいますよう。……お役、ありがたく御受け申します」

『とは答えたものの、腰が、がくがくしている。まったく何がびっくりすると言って、こ

んなにびっくりする話はあるものじゃないでしょう。しかも簡単に承知してしまったんだから世話はない。とにかく、もっとくわしい事を伺いましょう。

「それで、御国表へは何時参ればよろしゅうございましょうか」

私の問いに、殿様は始めてお笑いになって「相変らず、せっかちな。物には手順があるから、そう死に急ぐな。今後のくわしいことは森田から聞くがよい。……森田、参れ」と言われて、入ってきた御目付の森田様に、

「この度の仕置の手順を話してつかわせ。でない、りえは一人で国の仕置場へ行くつもりでいる。隠密共の知らぬ中に仕置が済んでしまつては何にもならぬ」

と、さも困ったというふうに仰せられる。こんな深刻な話なのに、私は思わず吹き出してしまふ。なるほど御もつともなことです。

「それでは順を追って申しましょう。先ず、りえ殿はこの場で悪事が発覚したと致し、私の手の者が目黒の御下屋敷に御送りし、当分の間は、押し込めということにいたします。

それ故、御長屋の囲い部屋でお過ごし下さるよう。多分、六月頃には御下屋敷で、口書き

に爪印をなされます。……ところで、りえ殿には、御仕置を御覧になったことがおありでしょうか」

そう言われれば子供の頃、見物に行ったことがあったつけ。もっとも家の者には内緒だったけど。

「はい、小さい頃、一度拝見したことがございます。額に四角い焼印を押された御しるしが並んでいたのを覚えております。あの焼印は死んでから押すのでございましょうか」

と思わずよいなことまで言ってしまう。

「ああ。それでは御話しが、しようございませ。あの御印は、当藩では囚人の罪状が、永牢以上であることに決まった時に押すことと定められております。それ故、今申した口書に爪印をなされると、そなたの罪状が決まりますによって、その場において、りえ殿にも御覧になった通りの物を御押しいたし、その後は罪人として扱います。故に御焼印を戴かれるのを境に御召物が変わりますし、その外の事も、すべて別個な扱いになります。

その後一月位いして、いよいよ唐丸送りで御国表へ、差し立てられるのでございます。

まあ、後程、御下屋敷に御送りいたした後は、当分そなたは御用なしじやによって、少

々きゅうくつながら、これまでの御奉公疲れを、ゆっくりといやされるがよからう」

「では、手配もござります故、私共はこれにて……」

と、御家老様も殿に一礼して腰を上げながら私に云われます。

「りえ殿、間もなく迎えに参る故、ここで待たれい」

「はい」

と頭を下げると、殿様が、

「よし、番はわしがいたす故、心配はいらぬ。それまでにさせ置くことがあらば、申し聞かせておけ。わしが指図してとらそうぞ」

と仰せられる。森田様は一礼してから、

「それでは、髪を解き、帯と小袖を取っておきませい」

と私に向って言われ、お二人共退出された。殿様と二人っ切りになる。

「りえ、ふびんじゃが、何分たのむぞ」

又あらためて仰せられるので、却って何んとかなく頭に血が上ってしまい、仕方がないから俯向いたまま、一つこっくりをすると、やさしく仰せられた。

「さあ、こちらへ背中をお出し、髪を解いてやろう」

何んだか急に、殿様に甘えて見たくなり、手を突いて、後向きににじり寄ると、御手ずから笄こうがいを抜いて、小柄で元結を切って下さる。

懷中から櫛を出してお渡しすると、妙な手付きで静かに梳すいて下さる。このようなことは御始めてにちがない。何回梳き返しても直ぐに始めの方がほつれてしまって、きりがない。頃合いを見て櫛を返していただき、櫛巻きにして束ねておく。

「脱がせるぞ」

と、おっしゃりながら腰に手を掛けられたので、気をきかせて腰を少し浮かせて、帯を解いていただこうとするけれど、反対の方を引こうとなされて、まごまごしていらっしやるので、手を貸して解かせて差し上げる。

懷中物を出していると、殿様はあたしの回りを廻りながら帯を手繰って、たいそうなお骨折りで帯を取って下さるうとなさるので、小袖は自分で脱いで、腰を浮かしてすつと取り、袖だたみにして、その上に懷中物や頭の物を全部並べてお渡しする。

殿様は、それを無造作に丸め込んでお抱えになり、「動くでないぞ」と言われ、御庭に出て行かれた。見ていると泉水の方に行かれ

て抱えておられた私の物を、ぽいっと池の中にお捨てになり戻ってこられる。非道いなされ方と思うけれど、今となっては仕方がない。

お坐りになったので、おそばに、にじり寄ると、抱き寄せて下さった。しばらく御胸に顔をうずめていたが、ふと思い出して、「御仕置の焼印は私に似合いますでしょうか」

と言うと、

「うむ、あの印形は知っている。五年程前に作らせた時、紙に押して来おった。中の字は前の奉行の岩倉が書いたのだが、高さ二寸五分、巾一寸八分もある大きな角印の筈だ。焼印でも小さい物だと、薬で焼き消したりする不心得者がおる故、眉から前髪までとどくように出来てるとか申しておった。書も見事なものだ」

そう仰せられながら考えておられたが、「よし、印が押せたら見てつかわそう」「必ず見て下さいますか。不浄者になってからでは、御目通り出来ないでしょう」

と言うと、

「いや、目通りではない。わしが見るのだから、かまわぬのだ」

と仰せられながら、しっかり抱いて下さる。気がつくの外に人の気配がするので、急いで下座に坐り直す。

間もなく森田様が入ってこられ、後から目付組の人がきたのを見ると、手に細引縄の束を持ってゐる。殿に礼をしてから森田様が私の耳に口を寄せて、

「下襦袢一枚になりなされ」

と小声で言われる。なる程、囚人になるのだから永の暇と同じわけ。私は特別かと思つてはいたけれど、やっぱり普通の永の暇と同じ姿にされるのでしよう。だまって腰紐を解いて半襦袢と裾除けを取って渡すと、急に身体がうそ寒くなったので、短い肌襦袢の襟元を直して御腰の前を、きっちり合わせる。こんなことなら、幅の広いのをして置けば、よかったと思うけれど、まさか今日の今日、こんな身の上になるとは、思つても見なかったのだから仕方がない。第一、普断はこのくらい身巾のせまいのでないと裾さばきが悪くて、しようがない。それにしても、これでは一寸身体を動かすと、すぐに裾が割れてしまう。

目付の人が後へ廻つたので、気をきかせて両手を背へ回すと、すぐ右の手首に細引が巻

かれ、たちまち首筋やら両腕にも御縄が廻つて上半身を縛り上げられ、両腕はきっちり背中に結えつけられて、動かなくなつたけれど、思ったほど苦しくもない。森田様が、「痛くないか」と御訊きになるけれど、あんまり楽でもないし、嘘をいうのもこの際、気が引けるので、

「よい御加減でございます」と言うと、殿様が、「よい加減とは面白いことを申すな」と御笑いになるので、「でも御縄を戴いて、きゆうくつでございますと、申すわけにも参りませんでしよう」と言うと、森田様までつり込まれなされた。

どうやらこれからは、死ぬまで不自由な姿でいなければならぬらしいと思ひながら唇を舐めると、殿様はすぐ御気づきになって、「そうだ、忘れていた。茶をのむか」と仰せられた。

「いただきます」

答えてから縛られているのを思い出したけれど、殿は平気な御顔で、点前の用意を始められる。さっきから炉の御加減はよさそうだし、殿様の御手前を拝見出来るのもこれが最後だからと思つてゐると、「席に着かれよ」と、言つて下さる。

立つて正客の座に行こうとすると、手が動かないのでよろけそうになった。殿様がすぐ手を貸して坐らせて下さる。お心遣いが身にしてみて嬉しい。

御手ずから菓子を食べさせて下さり、御薄も工合よく飲ませて下さる。

「ありがたき仕合わせ、一生忘れませぬ」

とお礼を申し上げると、

「わしの身代りに死んでもらうのだ、ことに女子には辛い事ばかりであろうが、何分たのむ。しかしこれは、そち一人かぎりの事で、そちの家には何のさわりもないこと故、その点は安心してくれい」

と仰せられる。実はさっきお受けした時から、その事が心配だったけど、聞くわけにも行かないので困つていたのに、さすがに殿様はよく御気が付かれる。

大体あたしは御城に上る時、実家とは縁を切つて、特別な身分の女になつて御奉公に上つたのだから、どんな事になつても実家にはかわり合いがない代りに、死んでも家のお墓へは入れず、お城のどこかに埋められるのだと聞いていたけれど、やはりその通りになるらしい。

「それをうかがつて安堵いたしました」

やさしく後れ毛を搔き上げてから立たせて下さり、元の座にもどる。膝が出てしまっているけれど、見ない事にする。

又、森田様がさっきのひと、今一人の役人をしたがえて入って来られる。さっきの人は何にか網の様な物を、たたんで持っている。

「駕籠で行くのか」

殿様が仰せられると、森田様は、

「いえ。駕籠は切腹か、または打首までございます。この度のことは箱か網が定めでござりまするが、女人のこと故、箱にも及ばまいと存じ、網を持参いたさせました」

「そうか。見える方がよからう。で、すぐ行くのか」

「はい。あたりも大分暗くなり、丁度よい刻限と存じまする」

「よし。行けい」

「はっ」

二人の役人は私の前に、網と云うものを括げる。太目の紐で荒目に編んだ大きな袋で、その口を開けると、

「この中にどうぞ」

と小声でいう。あたしは膝行して袋の上に坐ろうとすると、役人が横から身体を支えて立膝にさせ、網袋を引き上げに掛かるけれ

ど、あたしを入れるにしては少し小さくて、仲々這入らない。それを三人掛かりで無理矢理に、揃えた両膝を胸に押し付け、あたしを折り畳むようにして袋を引き上げる。それでようやくずるずると無理と思えた網袋の中に這入ってしまった。お尻が袋の底にとどくと畳に下されるけど、まだ袋の口から顔だけ出ている。どうするのだろうと思っていると、森田様が櫛巻きにしてあった髪を解いて、櫛は先程脱いだばかりの下着の上にぽいと放り、中途から二つ折にした髪を肩の所の御縄に挟んで下さった。

縄付姿というのは、便利な時もあるものだと感心していると、いきなり非道い力で頭を膝頭の間に押し込まれ、痛いと思う間もなく素早く網の口が引き締められて、すっかり袋詰めになってしまった。横眼で見ると役人達は口紐を念入りに結んでいる。殿様が、少し悲しそうな顔でのぞき込まれ黙って肩の辺りを軽く押さえられた。

「では御免」と言って、役人達が私の袋を引ずって外に出る。

廊下に出ると、役人二人に抱え上げられた。袋といっても一寸位な目の荒い網だし、肌着一枚の身体だから羞しく顔が火照って来

る。何時の間にか、すっかり暗くなっている。何時の間にか、すっかり暗くなっている。から、見えもしないだろうけれど、きまりがわるい。

御庭を出ると、相当な人数がおるらしく、ざわざわしていたのが急に静かになって二、三人、近づいて来ると袋の紐に棒を通す。木の棒かと思ったら節があるらしいから、竹でしょう。「よいか」の声と共に、抱えていた二人が手を放すと、大きくゆれてぶら下る。押しつけられていた頭は少し楽になるが、代りに両足がぎゅっと余計に締めつけられる。「出立」と大きな声がして、人足が歩き出す。裏手へ廻って不浄口から出て行く。

足並みにつれて左右にゆれる。そつと頭を動かして見廻すと、荒い目の間からよく見える。まだ人通りが多く、皆、さりげない風をしながら私を見ている。ここからよく見えるのだから、向うからも丸見えに違いない。役目で御仕置を受けるのだから、どんな姿をさせられても、羞しい事はないわけだけれども肌着一枚で麻縄に結えられた身体を海老折りにしてこんな網に入れられ、青竹でぶら下げられて行く女はどんな風に見えるものか、だれかに聞いて見たい。

目黒の御下屋敷までだと、一刻近くかかる

はずだけど、向うに着くまでには一体、何人ぐらいの人に見られるものかしら。

かついで行くのは仲間衆だし、天秤棒は青竹だ。ええと、青竹でかつぐというは何んだったつけ、今の私の外には、ああ、そうそうお葬式の早桶がそうだった。なる程、あたしはまだ生きてはいるけれど、不浄者の囚人だから、死骸と同じ扱いにされる。もうすぐ、国の皮屋町の先の橋のたもとの御仕置場で死ぬのだから、この先、二度と世間の人と口を利く事もないし、それに御仕置に上る人は、だれでも皆こうされるんだから、別にあたしだけが羞しがる事もありゃしない。第一、罪人になって御仕置で死ぬ者は、皆、極楽にも地獄に行かず、畜生道に行くんだそうだから、死んだ後も御先祖様や知り人に出逢うこともないわけ。今となつては安心なもの。浮世の見納めにゆっくり御江戸見物をしながら行きましょう。

白金近くでどなた様かの行列に出逢つたので、横道に入る。川筋の近くへ来ると又、人通りが多くなる。うすら寒い晩なのに、まだけっこう人が出ていて、ひそひそ話しながら私達の行列を見物している。家名の知れるような物は何も持たせてないとみえて、「どこ

の御家中だろう」とか、「よっぽど悪い事をした女だよ」などと言ひ合っているのが聞こえる。こんな荷物のような姿で運ばれて行くのを見れば、だれでも、よほどの悪人だと思うことでしょう。

御駕籠と違って裸同然の身体だけだから、六尺たちは楽なものらしく、ずい分と足早に歩いて行くけれど、さすがに上り坂では息を切らしている。坂を上り切つて見晴らしのよい原に來た所で一休みということになったらしく、息杖を三本ずつ束ねて三脚を二つこしらえ、その間に竹竿を掛けて仲間たちは向うへ下る。

担がれている間中ぶらぶらとゆられて、気が持が悪かつたので私もほっと一息入れる。

両腕はとくにしびれて、わからなくなっているけれど、足もしびれて來たようだ。ずいぶん大女のあたしでも、たたみようによつては、けっこう小さくなるものだ。こんな網袋を一体だれが考え出したのだろうなど、ボンヤリと思つていると、森田様がそつと寄つて來られて、

「今しばらくの御辛抱です」

と小声で言われる。袋送りが辛いのは先様も御承知と見える。

咽が胸に押しつけられているから、ものも満足に言えやしないけれど、少ししゃくにさわる。

「皆様こそ、ごくろうでございます」

とだけ言つて置く。

いつの間にか月が昇つて、けっこう明るくなっている。この辺りは、たしか富士山がよく見える所だつたがと思つて、上目使いにあたりをながめていると、少し離れて立っている人が、筆を持って何か書いていゝらしい。頭を少し横に回してよく見ると、どうも画を書いていゝらしい。森田様は私の様子で気がつかれたと見えて、

「おりえ殿の御仕置の有様を画卷物にいたして、後日殿様の御目にかける事になっております」

と言われる。

殿様のお物好きは今に始まつた事じゃないし、そうかと言つて仕置場を御覧になるわけには行かないのだから、ま、よいでしょう。

それに、あたしの本役は殿様のお物好きの御相手で、たとえ如何なる仰せにも、いやとは申さず、この身をどのようになし置かれても、異存はございませんと誓詞を差し出して上つた御奉公なんだから、あたしからかれ

これ言う筋合いじゃない。

絵師が紙をたたむ音が聞こえる。すると、待っていたように

「さあ参るぞ」の聲がかかり、又かつぎ出される。こんな後、七、八町の所で休息するのは変だと思ったら、画に書かれるためだったのでしよう。

御屋敷の大門を通り過ぎて、裏へ回って木戸から入り、御長屋の方へ行き、玄関の前に止まると、四人ほどで袋を持ち上げ竿を外して運び込まれる。式台に横たおしに置かれると仲間共は出て行き、入れ替りに奥から女が四、五人、出て来た。

見たような人がいると思ったら、森田様の奥様だった。外の四人は御端女^{はしため}か、仲間達の女房だろうか、いやしいなりをしている。奥様も、たすきを掛けていらっしやる。

「たしかに相渡すぞ」

「たしかに御預りいたします」

折目高い挨拶をしてから、下女四人で提げられて奥へ通る。いちいち戸締りをしてから次の部屋に入るといふことをくり返して、二畳敷くらいの板の間に下ろされ、回りから支えて立ててくれる。後の戸締りが済むと、奥様は私の前に立膝して袋の紐を解き、網を下

げて行かれるけれども、身体中がすっかり固くなってしまっているで頭が上らない。

奥様は御承知と見えて、手をそえて静かに顔を上げさせて下さり、御縄も解いて板敷の上に横たえられる。

四人の端女が、それぞれ手足をもみほぐしてくれるので、段々としびれがとれ、自分の身体らしくなってくる。

「いかがです」

「はい、お蔭さまで人心持が戻りました」

ようやく起き直ってまだ少し痛む膝をきっちり合わせて坐る。奥様も私の前にお座りになる。

「お身体をあらためます」

「はい」

「御用事は」

「ございませぬ」

と答えると、肯かれてしずかに着ている物を取り上げられた。おあらためが始まるのでしよう。先ず髪を梳き直される。頭の地肌まで、一々指でさぐって改められ、次に燭台を持って、「お口を」と開かせて、咽の奥まで御覧になり、腕を持ち上げて腋の下を調べられると今度は仰向けに寝かされ、端女が両側から足を抱えると、奥様は座を移されて足の

指の間まで一々詳しく御覧になる。なんと入念なおあらためでしょう。奥様は私が本当の罪人でないことをご存じないのかしら。

ようやく「失礼いたしました」と言って起こして下さり、次の部屋の錠を外して導き入れられる。見ると大きな盥に湯が入って行水の用意が出来ており、すっかり洗って下さると、さらに別の小盥が出て来て髪も洗われる。

すっかり洗い終ってさっぱりすると、傍らに出ている御仕着せを着せられた。

生まれて始めて身にまとう、ひとやぎぬ。御腰は木綿の三巾半もある長いもので、身巾も普通の倍ぐらいありそうに見えたけれど、腰に巻いて見ると、三巻きになる。襦袢は普通のようだけれど、その上にやはり生木綿の袷を着せられる。対丈だから下着かと思っただけ、両衿についている細い付け紐を後で結んでおしまい。

肌着も袷も、何に使う布地か知らないけれど、とてもごわごわした生木綿なので、身体が妙にこわばったようで、とても変な感じがする。

木綿を着るのは何年ぶりかしら、一寸考えても思い出せない。たしか五つ六つの頃以来

だから、二十幾年ぶりという事になるはず。あの頃は、たしかに晒木綿の肌着を着ていた覚えがある。

それにしても、上から下まで全部、木綿づくめというのは始めてのことだし、こんなごわごわした生木綿を肌に着けるのも生れて始めてのこと。それでいて、紐も帯も締めていないから御腹のあたりは妙にたよりない。なるほどこれが、ひとやぎぬの着心持というものでしょうか。

珍しい着物に一人で感心していると、「こちらへ」と言われ、何気なく二、三步踏み出すと、裾がからんで転びそうになった。奥様が支えて下さって、

「御足元が御不自由なように、わざと広い御腰を御着せいたしましたのですから、気をつけて小さくお運び下さい」

と言われる。なるほど、こんな長くて大きいおだは始めて見たと思ったけれど、足枷の役をする物だとは思いつかなかった。でも、男の囚人はどうするのでしょうか。

「御居間です」と八畳くらいの座敷に通されると、端女一人を残して奥様は出て行かれ、襖の向うで、ビーンと錠が掛かる音が聞こえた。

とにかくホッとした思いで坐ると、下女が手を突いていった。

「次の間が片づきましたら御用所を用意いたします」

それを聞くと、急に小用を思い出す。あの殿様から戴いた御茶のせいなのでしょう。

この端女は、どういう役で、どんな身分の女か知らないけれども、あたしは、もはや重大な囚人だし、相手は端女であろうとも役の者だから、あたしの方から「おねがいたします」と頭を下げるべきなのでしょうね。

しばらくすると奥様が、たすきを取って入って来られる。

「この度は、いろいろと御手をわずらわして、おそれ入ります。何分共によりしくおねがいたします」

と御礼申し上げると、

「いずれ何分のご沙汰があるまでは、これにてお慎しみていただきます。又、この女は賤しき者ながら、たしかな者でございます故、御側に置きます。御身の回りの事は、一切この者に致させます故、何なりと御申し付け下さいませ。名は捨と申します」

と言われ、端女が改めて礼をする。

「では、おしずかに」

と奥様は出て行かれ、又向うで錠が鳴る。なんだか胸に迫る響き。

「おすて殿といわれますか。私は、りえと申します。このたび、重いお咎めをこうむり、御仕置に上ります。何かと御手をわずらわします」

とにかく、改めて挨拶をすると、

「もったいのうございます。すて、とお呼び捨てにさせていただきます。常には御目通りもかなわぬ、いやしき者にござります」

と口では言うが、物腰はしっかりして下賤の者には見えないけれども、髪は引っこいて変な結び方をしているし、着物も短い筒袖の布子で帯も締めず、四人いた端女の中でも一番粗末な、まるで非人のようななりをしている。このお屋敷へは何度も来たことがあるけれど、こんな女は始めて見る。先刻、奥様はたしかな者と言われたから、他所者でもないらしい。目見え以下の者には違いないけれども、端女にしても下人の女房にしても、森田様の奥様と同座で御役を勤める者なら、今少しましな身なりをしていなければ勤まらないはずだから、どうもあたしにはわからない。

「おすてさんは、どういう御役をなさってお

いでなのでしょうか。あたしは奥にばかりおりましたので」

と訊いてみると、少し下って平伏して答える。

「私は奴でございます。こちらの御屋敷の御不浄物の一切の洗濯などを、させていただいておりまする」

なるほど、それでは私など知らないはずだ。しかし、そういわれてみれば、六、七年前に奴という者の話を聞いた事があった。奴といえは女の罪人で、飼ひ殺しにするものだと、その時に聞いたけれども、まさかその奴の世話になるなどとは……

しかし、この人はどんな罪人だろう。奴は女だけの刑で、男の打首と同格だという話だから、よほどの重罪人のはずだけれども、そんな大それた事をした人にも見えない。

それはそうとして、あたし達は普断はこんな下賤の者と口を利いてはいけない事になって居たけど、先刻、奥様は何事もこの者に言つて用を足せと言われた。すると、今後の私は、この女の指図を受けなければならない身分に落とされたい。腰紐に細引の束を挿んでゐるから、あたしを縛るのもこの奴の役目らしい。

へりくだった物のいい方をしておるけれど、私こそむやみな事は言えない。

「さあ、おつむをお上げになって下さい。今のお話は昨日までのこと。今後の私は、重いお咎めを受けた罪人でございます。それに私は囚人の勤めも御仕置の事も、何も存じませぬ故、何分共によろしく御みちびき下さいませ」

あらためて、きちんと礼をすると、今度はお捨さんがしゃんと坐つて、

「おりえ様は大そうな御咎めで、重い御仕置とうかがいました。私は縁座でございますから、こうして長らえさせて戴いておりますがあなた様は、これからいろいろ御勤めがございますから、段々とお辛いこともおありと存じますが、多分御口書きまでは、ここでお慎しみでございましょう。それまでは、なんなりと御申し付け下さいませ。私に出来ます事だけは、致させていただきます。どうか私の名は呼び捨てになさっていただきます。おとがめの身とは申ししましても、おりえ様はまだ御吟味中ですから、お人でございます。わたくしめは奴の御申し渡しを受け、御焼印を押された畜生でございます」

と言う。

晒首の焼印は見たことがあるけれど、こんな奴などという罪人にも焼印を押すのかしら。第一、顔はきれいで印形の跡など見えない。とにかく、さつきからこらえている小用を足させていただかなくては、かなわない。

「あの、小用を」

と、言いかけると、「はい」と立つて、襖を開き、「これでございます」と言う。手を突いて、そつと立上り、転ばぬようにそろそろ歩いて行くと、春慶塗りの箱のような物が置いてある。大きさは二尺に一尺位で、深さは八寸程あり、端の方に引出しがついていて表の真中辺りに一尺五寸の巾四寸ばかりの蓋がある。

どうするものだろうと思つてみると、おすてさんは私の後へ回つて、「お手を」と言うので両手を後へ回すと、持っていた細引きを後から私の首に回してから手首を縛り合わせて背中へ結え、それから着物の付け紐を解いて前へ回ると三巻きの腰巻を取つて、箱の蓋を外す。

「この上に御坐り下さいませ」

と言いながら着物の裾を後へ引いて持つてくれる。

こんなふうに着物を着るのは、もちろん生れ

て始めてなので大層に工合が悪いけれど、仕方がない。

ほっとして立ち上ると、甲斐甲斐しく世話をしてくれたおすてさんが、腰巻をきっちり巻いて着物の付け紐を結んでから御縄を解いて、「御定法でございますので」と言っ手首の所を、なでてくれる。

なる程、御用心のよろしい事。手を縛ってから足枷代りの腰巻を取るとは、よく考へてある。紐を結ぶ間、自分の肩に掛けていたあたしの髪をまとめて、襟元の所で一つ結ぶ。

「今夜は馬の尾巻きにして置きます。明日になれば、おぐしの形も御指図がいただけると存じます」

部屋に戻り、「お寝になりますか」と聞くので、「よければ、そうさせていただきますしょう」と答える。次の間から蒲団を運んで敷いてから、

「私は次の間にて寝まさせて戴きます。御ゆるりとお寝み下さいませ」

と挨拶するので、

「まあ、この囲内にいて下さいますの」と、起き直って聞く。

「はい、この御屋敷内においでの間は、ずっとお側におります」

「そうですか。でも向うの板の間では、私の気が済みませんから、この部屋でお寝み下さいませ」

と言っってから思い出して、

「でも罪人と同座して戴くのは、失礼ですねえ」

と、口ごもると、

「いえ、御許し戴けるのでしたら、よろこんで寝まさせて戴きます」

と言っ蒲団を運んでくる。見ると私のと違つて薄い小さな蒲団で、あたしの足許の方に敷こうとする。

「ねえ、よろしければ私の横に敷いて下さいな。私、心細くて」

と無理に並べてもらう。

あたし同様、着たままで寝るのかと思つて見ていると、さつさと着物も襦袢も脱いで、腰巻一つで床に入ろうとするので驚いた。

「まあ、お寒いでしょうに」

「いえ、普断はとても粗末な所におりますから、今日からは極楽でございます」

と言っ笑う。

ふと背中を見ると赤黒い痣のような物が見えるので、「お背なに」と言いかけると、

「はい、御焼印でございます」と言う。

先刻、御焼印を戴いたと言つていたのに、どこにも見当らず変だと思つていたら、こんなところだったとは。丁度、着物の紋をつけるあたりに、男紋ぐらいな大きさの丸の中に畜生と、はっきり読める。

「まあ、そんなとこへでしたか。さきほどお話をうかがつて、どこかと思つておりました」

おすてさんは蒲団に入りながらこちらを向いて微笑し、「御印の御話をいたしましたしうか」と言う。

「お疲れでなかったら、ぜひ御聞かせ下さいましな。私も近々御印を戴くのですから、詳しくうかがつて置いた方が、その時になつてうるたえずにすみませう」と言う。

「それでは私の知つておりますだけ申しませう。私は奴でございましたから、その日まで遠慮つしきみという格で家におりました。

いよいよ御呼び出しという日には、これが最後というので、すっかり晴着に着替えて御役所に参りました。一人ずつ御吟味所に出て御縁側に坐つて、なにがしの妹なるにより、奴、申し付くる」と御読渡しを受けるのです。すると、その場で身に着けている物をすっかり取り上げられてから御白州に御引き

落しに降ろされました。御縄を戴いてから御役人衆の御覧になつてゐる前で、この丸輪に畜生の御焼印を押して戴いたのです。

その後、素肌に御縄だけのなりで、御城の御不浄門から出て御牢屋まで曳かれて行き、御印形が固まるまで御牢内で過ごすのです。

私は、しばらく御牢屋の御用をさせていただいたり、御役所で御焼印の時の御用をつとめたりしておりましたもので、御焼印の事だけは一通りおぼえました。

それから一年ばかりしてこの御屋敷に参りましたが、道中だけは、御女中方の供という格別のおはからいで、身分違いの楽な道中をさせていただきました」

「それでは、この御下屋敷で一生御奉公なさるのですか」

「はい。奴は永劫の勤めでござります。それに殿様の御情けで特に、この御屋敷に置いて戴いてるのでございますから、この上の事はございません。

御焼印は幾通りもござります。女で御印を戴かされるのは、先ず遊女衆でござります。それから新非人。

この人達は、遊女ならば遊女奉公の証文を書きますと、廓の者がついて御役所へ参り、

人別を確かめた上で直ぐに、生の一字印を背中に押して下さいます。証文にも御役印を押して下さい、それで娼妓なり芸妓なりのお許しを得たことになるのです。

新非人も、非人頭が五、六人ずつまとめて連れて参りますし、御仕置の新非人は御申渡しの日に生の御印と、非人札を戴いて帰ります。こういう御印は一字印ですし、字も小さうございますから、すぐにもどります。

この生、一字の人達は、十年の内に遊女ならば年期が明けるか、身受けと申して買い取って下さる方があればよし、非人ならば足洗いという事をして、普通の人、私共からは素人と申しますが、この素人にもどれれば、その時、御役所に参つて年明けや足洗いの印と前の証文を差し出しますと、あらためて普通の庶人の人別に加えて戴けます。そうすれば背中に生の字の印形があつても、なんのさわりにもならないので、町方には妓女上りの、焼印付きの女房がいくらもおります。ただ、男は侍にだけはもどれないと聞きました。

しかし十年たつても足の洗えない非人や、年期の明けない遊女たちは、十年目の翌月の御仕置日に呼び出しが掛かり、御役所に出ると、今までの生の字の上に、丸輪に畜の字の

入った御焼印を重ねて押されます。それで私と同じような、丸に畜生の印形になります。この丸に畜生の御印形者になりますと、もうどんな事があつても、たとえ御大赦の時にでも素人には返れないので、一生、非人なり妓女なりで過ごさねばなりません。

それから、罪という字の一字印もござります。これは盗みなどをした者の額に押されます。この御印付の者がもう一度罪を重ねるとやっぱり一生、非人に下げられるか、重ければ御仕置になります。

又、輪のつかない一字印の人が十年の内に死んだ時には、御墓は立てられません、寺の総墓へ葬つて、ケモノ偏のついた法名をつけていただけます。けれども、丸に畜生の罪人になりますと、身分が畜生同様になりますから、死ぬと死骸は掛かりの穢多が御仕置場に持つて行って御ためしに使い、その後は御取り捨になつて、葬式だの供養などは一切、御禁制です。御ためしの御用のない時には海へ捨てるか、川原などに埋めるか、馬捨て穢多が自分の心次第で、どこかに捨ててきます。

もっとも、女の髪が黒いうちならば、髪だけ切つて、かもじ屋に売るといふ話ですけれ

ど、どちらにしてもそれだけのことで、後は牛馬帖についている名前に墨を引くだけの、まことにさっぱりしたものでございますよ。

それから永牢とか、島流しになる囚人にはやはり額に畜の字に四角い枠のついた御印を押されます。これも破牢だの島ぬけなどをいまして、生の字を重ねられ、これは軽くても晒し首になります。

又、重罪の者で、おりえ様のように生き晒しや引渡しの上で御仕置になる時には、四角に磔などと、刑の名の焼印を額に押し、晒しに出されるんです。背中の丸印も首を斬られる時には、間違つて胴を寺へ入れたりしないように、ちゃんと押されますけれども、磔や火焙なんぞの時のことは存じません」

「どうもありがとうございました。おかげ様でよくわかりました。そうしますと、あたくしは額に四角な御焼印を押していただくことになるらしいでございますねえ。磔か串刺しになるように御意遊ばされましたもの」

「まあ、それは大変なお勤めで御座いますねえ。御国では何十年ぶりの御仕置でございます。私は御国のは存じませんが、御当地の磔は拝見したことがございます」

「さようでございますか、いずれにしても御上に飛んだ御物入りを御かけしますねえ」

「さようで。でも、立派にお勤め下さいませ」

「はい、出来ますだけは勤めさせていただきます。おすて様のお背なの御印形を、もう一度、見せて下さいませ」

「はい。明日、御目にかけてましょう。外の有明は番の者が回りますから、御心配なくお寝み下さいませ」

すっかり明るく、日がさしている。床が変つたというのに、すっかり寝過してしまつた。昨夜、床に入つた時には、着物も蒲団もすっかり木綿づくめで、寝苦しいように思つたけれども、こうして目がさめてみると、そんなに寝でもない。この分なら森田様のおっしゃるように、御奉公疲れもとれるでしょう。

おすてさんは、とつくに起きたとみえて、蒲団も見えない。朝になつたら背中を見せてもらおうと思つていたのに。そうそう、あたしは囚人だから、勝手に起きてはいけないうちも知れない。襖の向うに人の気配がするから、「おすて様」と声をかけると、「はい」と返事があるので、ほっとする。

静かに襖を開けて入って来て、「お目ざめですか」「はい。起きさしていただけますか」と聞くと、蒲団を取って起して下さるので、床から出て坐る。

後れ毛を手で搔き上げていると、「御用をお足し下さいませ」と言うので、手を後に回して縛られてから立つて次の間に行く。箱の中を見ると、昨夜は気がつかなかったけど、新しい杉の葉が敷きつめてある。おすてさんも使うだろうに、掛りの者は忙しい事でしょう。

手助けして腰を下させてくれると、「おすみになりましたら、お呼び下さいませ」と言つて座敷へ行き、片づけや、お掃除をしている。丁度よい、ゆるりとさせていただけますよう。

あたしの方もすんだし、向うもすんだらしいので、「おねがいいたします」と声をかけて、又世話してもらふ。着る物を直して御縄を解くと、「お手水を」と促して髪を洗わせて下さる。口をすすいで顔を洗うだけだから手軽なもの。もう二度と化粧をする事もないのでしよう。おすてさんも齒も染めず、眉の手入れなどしていないのだから、あたしもそうさせられるのでしよう。

おすてさんが、板張りの壁の下側にある小さな戸を引いて何か言うと、盆に乗った食事が入ってくる。なるほど、あたしについているのは、この人の外にも多勢いるらしい。

「どうぞお部屋へ」と言うので、先に部屋に入って坐る、お盆を二つ運んで来て、「お相伴いたします」と、わたしの給仕をしながら自分も食べる。料理は二人とも同じ一汁二菜で、楊枝のような短い箸がついている。

今日のおすてさんは浅葱っぽい着物を着ているけれど丈が短い袖も襦袢のような小さい筒袖だから、まるで子供の着物を着たように見える。しかし一卷きして前で結んだ腰紐には、ちゃんと御縄を挿んでいる。

どうも首筋やら背中が痛い。昨日の袋のせいに違いない。おすてさんも気がついてらしく、「後で揉んで差し上げます」と言ってくれる。まだ按摩をしてもらう年でもないけれど、あんなに非道くされたのだから仕方がないでしょう。

午の刻時分、背中を揉んでくれる。

「お気づきにならなくても、お疲れになっておりますから、二、三日お休みになっただけです。ようございましょう」

と言って床をのべてくれたが、横になろう

とすると、「そうそう忘れておりました。御焼印を御覧下さい」と言って背中を向け、肌を脱いで見せてくれる。

昨夜は暗かったので、そうも思わなかったけれども、こうして見るとひどい火傷だ。二寸以上もある丸い輪の中に畜生の二字が、あざやかに出ている。印のあとが赤黒い痣のように固まっただけで、そっと指先を触れて見ると、木に押した印形のように目をつむっていても字をたどれる。しかも正確に背中中央に、書体も真直ぐに押されていて、じっと見ていると、何んだかこの印がなかったら却って変に見えるのではないかと思えてくる。

「さぞお熱かったでしょう」

「いえ、いっときのことですから、あつという間もありませんが、ただ身体をしゃんとしていないと、御印がゆがんで押せてしまますので、じっとしているのがむづかしいです。いまして」

なるほど、そうでしょう。こんな大きな焼印を肌当てられたら、さぞ熱いことでしょうから、その間中じっとしているのは仲々大変でしょう。

けれども、おすてさんが、こうして御印つきでいるのに、それより重い科人のあたしが

のっぺらぼうの肌をしているのは気恥かしい。

「あたくしも早く御焼印を押していただきたくまりました」

「そうですね。御印の跡が固まるまでに、ふたつきぐらいはかかりますから、御印だけ先にいただいた方がようございましょう。背中のは、見えないからよいとしても、お顔のは大きゅうございますから、唐丸の道中では御手当をするわけにも参りませんでしょう。それまでにすっかり固まるように、お吟味より先にして戴くように申し上げておきましょう。おりえ様は並の囚人と違って、始めから御仕置附きは決まっていますから、お吟味口書は後からでかまいませんでしょう」

おすてさんが、まともにあたしの顔を見つめて言うので、内心どきりとする。

私のことは殿様と御役向き二、三人だけの内緒事だと思っていたのに、奴のおすてさんがちゃんと知っていた。しかもあたしの心の中を見ぬいているように、にっこり笑って、「明日にでも御顔と御背にも御焼印を押して戴きましょう」と言い切る。

どうも不思議な人だ。私は畜生でござい

すと言って、あたしを元の身分に立てて下さるかと思うと、御家老でも一存には出来ないようなことを、まるで自分が指図するように言つて澄ましている。もっとも殿様のお指図で、あたしにつけて下さった人らしいから、奴といつてもよほど曰くのある人に違いない。

「ぜひ、そのように御ねがい致します。御焼印をいただかないと、おすて様に御世話になるにも、何やら気がとがめます」

思い切つて言うと言自然に胸がときめいてくる。

「御印形の間、動かずにいる方法を教えて下さいませ。あたくしは熱いものは嫌いなので取り乱しそうで」

「いえ、そんなご心配は無用になされませ。

ちゃんと人足が大勢掛かつて動かぬようにして下さいますから、はりつけと同じでございますよ。たとえ気を失われても、ちゃんときれいに押していただけます。

でも、自分の肌に当てていただく大きな焼印が、ふいごであふられて、段々赤く灼けてくるのを拝見しているのは、それはうれしいものでございますよ。とにかく、この御印をいただくと世の中にこわいという事がなくなります。

背中だけの私でさえそうなのですから、背

中と御顔の両方に押しておいただきになる、おりえ様がお羨ましゅうございます。もっとも、私の御印も普通の一寸五分でなく、特別に拝領の御紋付の御紋と同じ大きさに作つていただいたのでございますから、この大きな御印は私とおりえ様だけにして、おりえ様に当てた後は、こわしていただきましょう」

まあ、なんという人でしょう。あたしにはそれほどの堪え性はなさそうだ。真赤に灼けた銅の印を肌に押しつけられるのがうれしいとは。大変な人に見込まれてしまった。殿様には御氣に入りそうだけど、どうも口は禍いの元とは、このことです。えらい人に、えらい事を言ってしまったもの。

でも、まあ仕方がない。懺なりと串刺しなりと御存分になさって下さいませ、と言つて御受けした御役目なのだから。

平気なつもりだったのに、床を取ってもらったきり、今日で三日も寝込んでしまった。

おかげで大分しっかりしてきたから、明日は床上げにしてもらいましょう。夕食は床から出て、ちゃんと坐っていた。大体は生れて始めて袋に詰め込まれたせいだけど、お

すてさんが、はなっからあんな事を言っておどかさずから、なおいけない。こっちから催促する氣にもならないから黙っていたけれど、あの話はどうなっているのかしら。やっぱり氣になるので思い切つて訊いて見ると、

「はい、申し上げていただきました。そうしましたら殿様は、やはり口書をすませてから押す定法だから、その通りにした方がよからうと仰せられて、口書の罪状はいずれその中にお掛かりに書いていただくことにして、いつでもおりえ様のお望みの日に白紙に爪印をしてから、押して下さいる手配をして下さりました。

ですから前の晩に申し上げて置けば翌日には、御印をすませていただけます。

殿様はいつでもよいと仰せられましたけれど、こういうことは御仕置日にする例でございますから、明後日はいかがでしょう。お月のもの時でない方がよろしゅうございますから、一兩日中にいたしましょう」

「それでは明後日にしていただきとうございます」

覚悟してきっぱり答える。

「はい、かしこまりました。そのように申し上げます。それと、御背中の御印の事

も伺って見ましたら、礎にはなくてもよいそうですね、御引き廻しの時など、お背なにも印のある方が見事だろうと仰せられましたので、御顔には角印、御背中には丸印と、両方押していただけることになりました。お望み通りに運びまして本当によろござりました」

まるで縁談でも整ったような言い方をする。まったくこの人には、かなわない。

しかし背中に印がある方が見事だと言うところをみると、御引き廻しの時には素肌で晒

されるらしい。今さら仕方はないけれど、心配になってきた。

「御国表で御引き廻しになる時には、素肌で勤めるのでございますか」

と、訊いてみるとおすてさんは澄まし顔。

「畜生が着物を着ていては却って変でございます。しょう。」

私は、今は御役でこうして着物を着させていただいておりますが、普断は短い腰巻一つの外は何も身に着けてはおりませぬ。着てはいけない定めで、ただ冬の間だけ着物を着さ

新発足 懸賞へ告白、手記、体験▽原稿募集

☆賞金☆

優作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	五千元
佳作	一篇につき	三千元

☆規定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文献味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもつて誌面を飾る考えであります。

一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

手記、教養的な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさとは求めませんが、実際に体験されたもの、事実の裏付のあるものが大切だと思います。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号に発表。

一、入選作には掲載誌発売後賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「告白懸賞」とお書き下さい。

せていただいております。そうですね、今からですと、だんだんよい時候に向かいますが、それにしても薄着になれていただけて置く方が、よろしゅうございます」

「はい、承知いたしました。よろしくおねがい申します」

「それでは本日より少しずつ薄着になっていただきます。長湯もじもやめましょう」

「これは逃げられないためなのでしょう」

「はい、代りに枷か御縄を使います。それに明後日に御口書がすみますと、御扱いがすっかり変わりますから丁度よい工合になります。御住いもここでなく、お牢屋になりますから土間に藁藁を敷いただけの所におやすみ戴くことになりまする」

「まあ、土間に」

「はい、御侍方は生胴でも御仕置の日まで、板の間の御牢屋で、夜具蒲団も許されませんが、身分のない罪人は打首以下、みな床のなにお牢に入ります。もっとも、このお屋敷にはそんな重い罪人を入れるお牢屋はありませんので、昨日からあちらの厩に格子を入れておりえ様の御牢屋に直しておりますから、明後日にはすぐお移りになれます。私も御供いたします」

(未完)



鬼六談義

狐

の

話

団

鬼六

独立映画

俳優協会と
いうものが

設立され、その発会式が新橋のSという場所で行われる由の案内状を受取った。充分、酒は飲ませると係りの者から電話もあったのでとにかく出かけてみる事にした。

独立映画俳優協会などという名前が馬鹿にいかめしいが、結局はピンク映画の俳優集団の事で、ピンク役者を抱えて、そのマネージメントをやっている五つばかりの事務所が集まって、一種の俳優貸出し協定みたいなものを結ぼうという試みであるらしい。

製作会社の社長連や配給会社の社長連まで

協会設立の祝辞をのべるため出席し、和気藹々

々の内に会は進行した様子であった。様子であったというのは、私は、協会設立の主旨やら抱負やらのむつかしい話を聞かされるのが苦手で、演説が一段落して乾杯という声のかかる時間を見計らい、わざと二時間あまり遅刻して出席したので、連中がどんな事をしゃべり、どんな風に会が進行したのか、さっぱりわからないのだ。うまい具合に、これから酒盛りが始まるという会場へ滑りこむ事が出来たが、その係りの者に書いてもらった地図を頼りにやっとたどりついた会場というのが恐ろしく粗末な殺風景な場所で、そこは、高架線走る電車の音がやかましい地下街のち

っぱけな居酒屋なのである。いわゆる一杯飲

み屋というやつで、表は赤提灯に縄のれん、その煤煙で曇ったようなガラス戸に何々会発足会会場という墨字が半紙に書かれて張りつけてあり、その店内の七八坪ぐらいの土間にそれこそ立錫の余地もない位、ピンク映画関係の人間がひしめき合っているのだ。俳優やマネージャーや製作者側の人間や三流週刊誌の記者やカメラマン、およそ三四十人位が、そんな狭く苦しい土間へ押しこまれているのだから、店のガラス戸が割れて表へあふれ出るのではないかと危ぶまれる位の殺人的な盛況で、店の表口には、これまた弥次馬が寄りたかり、それも余程ピンク映画にくわしい連

中らしく、店内を背のびしてのぞき込みながら、あれは谷直美だ、それは林美樹だとヤニ下がっている。

全くピンク映画スターの集会にふさわしい大衆的な光景であった。普段なら、ヤキトリを焼く煙と臓物を煮る匂いでごった返し、白木綿の前掛したおっさんやおばはんが酒を運んだり注文を聞いたりして転手古舞いしているような店であり、客種は近くの工事現場で働く労働者や安サラーマン達で一杯なのだろうけれど、その日は一風変わった人種達で店内は貸切満員となったわけだ。何しろ会費は一人頭四百円という庶民的な値段で——それを私は払わなかったから、こっちの飲んだり食ったりした分は彼等の会費で賄われた事だと思いが——そういう安い会費と気楽さを計算して係りの者が懇意にしていた大衆的な居酒屋を選んだものと思われる。

四、五百円の会費でも、ピンク映画のスター達にとって、決して安過ぎるという金額ではない。彼等の中には、月、十万、十五万と稼いでいる者もいれば、わずか三、四万の身入りしかない者だっている。月、十万以上も稼いでいるというのは、ほとんどが女優の方ばかりで、ヌードモデルのようなアルバイト

のない男優の方で、そんなに稼ぐのは見当らないようだ。何かのパーティで案内状に、女性には男性の会費の半額というような事が書かれてあったが、ピンクスター達の間でパーティなんかやる場合にはこの逆にしなければいけないようである。

それはさておき、とにかく、その協会の発足会は、そういう場所にかかわらず、彼等は続々とつめかけて大盛況であった。会場が、そうした赤提灯に縄のれんの大衆酒場である事は知らず、バラの造花を胸につけたタキシード姿でやって来る男優もいたし、あでやかな振袖姿で、どういうわけか手に大きな花束を抱えてやって来る女優もいたが、そうかと思うと逆に、すり切れたジャンパーにジーパンをはいたチンピラやくざみたいのやら、派手な縞のセーターに赤い半ズボン、頭に紙の帽子を乗つけたマンガのピノキオみたいのやら、そんな連中が混然一体となって、酒を飲み、キャッキャッと笑って肩をたたき合ったりしている光景は、まるで、アンダーグラウンド集団のお祭りみたいなものであった。

ピンク映画のスター達が、このような協会を作ったという事は、一つは不良製作会社に対する対抗策を講じる意味でもある

らしい。金払いの良すぎるような製作会社もあるがその逆に全く悪い所もあって、二カ月も三カ月もスターに対する支払いをおくらせている所がある。スター達も生活がかかっているのだから、こういう製作会社にかき廻され、わずかなギャラを受取るため、日参せられてはたまったもんじゃない。その他、スターに無茶なスケジュールを強行させる軍隊的な製作会社もあり、彼等はそうした実情をこの業界の有力者達に打明け、以後、自分達の仕事を擁護してもらいたいという相談も持ちかけたようであった。彼等が自分達のはっきりした権利を主張するため、こうした協会を設立させたという事は悦ばしい事で、一週間たらずで映画をアップさせるため、徹夜につぐ徹夜、よくも肉体が持ちこたえられるものだと思われるような仕事を強制され、しかも、そのギャラをなかなか受取れないというような悲惨な目によくぶつかっているのである。

こうして協会を作った彼等は、その余勢をかりた形で、以前から問題のあったK製作会社にストライキを決行し、今後、協会に所属する俳優はその製作会社に対し、出演交渉には応じない、と根性のある所を一発ぶちかま

したのである。現在、その製作会社と協会委員との間で話し合いが進められ、ほぼ、妥協の線が出てきたらしいが、こうしてピンク映画のスター連が立ち上ったところを見ると、何だかんだといわれながらも、ここ当分、この業界の安定ムードは持続されそうだ。

早速、この協会の発足記念という意味で、協会所属オールスター出演の脚本が私の所へ依頼されて来た。他社の仕事とかち合っとうしても出演出来ない者もいるが、それを引いて私の所へ送られて来たメンバー表は二十八人。何時もせいぜい七、八人どまりの脚本ばかり書かされて来ていたが、今度はかなり豪華メンバーである。脚本はこの号に掲載される事と思うが、例によって、あまり内容は変りばえしないけれど、私の親しい俳優ばかり総出演するので金と閑と物好きさを持合わせている読者はのぞいて見て頂きたい。

ピンク映画の製作過程は何時かこの鬼六談義でくわしく書いたと思うが、あの頃と今とはかなり様子が違ってきている。脚本の段階からいっても、以前は男と女が出くわせばすぐにベッドシーン展開という事でも別にどうって事はなかったが、最近では映倫もこうした点に神経質になり出し、配給会社の方で

も眼がこえてきたというのか、とにかく、もっともらしいストーリーを要求するようになって来た。それはたしかにいい事で私も賛成なのだが、また考えようによってピンク映画を面白くもないありきたりのものにしてしまふ原因にもなっている。或る満たされないサジストが親の遺産なんかを棚ボタ式に手に入れて、人里離れた山中に隠れ家を作り、一人の美しい女性を誘拐、監禁して、徹底的に飼育しようとして汗みどろの努力をする、その結果——こうしたコレクターまがいのものなんか私としても大いに興味をそえられるが、この種のもものは映倫や配給会社にあまり歓迎されないのである。ストーリーが面白くない、とか内容がとぼしい、とか、訴えるものがない、とか、映倫の先生方は顔をしかめるにきまっている。大体、ピンク映画なんぞに人心に訴えるようなものがどうして必要なのか、さっぱりわけがわからないが、一人の女を一人の男があの手この手で責めていく事だけでも描き方によれば芸術的なものになる。などとピンク作家の私が口をとがらせる筈はないけれど、とにかく鉛細工的なストーリーをつけておけば映倫も会社も満足するのだ。また鉛細工的なストーリーをつける事で

私はこれまで売って来たといえる。私のものなら確実にストーリーがあると会社の方でも安心してあるので、生原稿が出来ると内容は読まれもせず、すぐに印刷所へ廻されてプリントされ、監督や俳優に手渡されてしまう。幸か不幸か一度だって書き直した事がなく、プリントされて送られて来たものを読んで、シーンを一つ書き洩らした事に気づいて会社へ電話すると、もう連中はロケに出発して、事務所はも抜けの殻という事が多い。実にあっけらかんとしたもので、鼠がものを引っ張っていくような素早さだ。そうなるべくと時たま、自分の好みを出して映画の上で遊んでみようと思うものの、会社や映倫の神経をわずらわせるような、ややこしい脚本を作っては申し訳ないように思い、相も変らず辻褄を合わせただけの鉛細工。それが座付作者として私が所属するプロダクションのカラーになってしまっているのだから仕方がない。映倫何ものぞ、と鼻息の強い若松孝二あたりは大いにピンク映画でなければ出来ないピンク映画ってやつを冒険してもらいたくないんだが、彼は、いわゆるマニヤでないんだから、私好みのものはあんまり期待出来そうじゃない。

もう五十本あまりこの種の脚本を書かされたが、会社が脚本屋に要求する事で以前より少しも変っていないのは、ベッドシーンの回数を少くとも七回以上というように、ベッドシーン即エロチズムと解釈している所で脚本の内容にストーリーを求めるようになって、この点は一向に改革されていない。ベッドシーンなど一つもなくなつてエロチズムを盛上げる事は可能であり、観客の官能をくすぐる事が出来る、というような理屈は通らないのだ。脚本を読んでベッドシーンが少ないと判断したこの道のベテラン監督は適当に二個所なり三個所なりのベッドシーンを勝手につけ足しているようだし、こんな変りばえのしない執拗なベッドシーンが何回もどうして必要なのか、あきらかに観客の方でも食傷気味で、うんざりした顔をするだろうと思われるのに、配給会社の方では、そのシーンが多ければ多い程、上機嫌なのだ。買い手が上機嫌だという事は製作会社の商売の成功であり、こっちにしても悪い気はせず、持前のサービス精神を発揮して、そんならこの次はもっとふやしてやろうか、というようにさえ最近では妥協するようになってきている。どっちにしたって所詮ピンク映画はピンク映画、

薄っぺらな材料を使った夜店の鉄板焼みたいなものだから、知ったかぶりして、えらそうな事はいうまいと心掛けている。

閨房の行為を描くにも色々理屈はつけられるもので、それは社会の諷刺であるとか、人間性の窮極の問題とか、罪の意識を免れるためか、何かしらの口実をつけてエロ映画を製作している人がいる。武智鉄二なんかがそうで、自分だってその道が好きで作つとるんだから、自分の作品を芸術だ芸術だといって、何も自分の助平根性をごまかす事はないのである。松竹で配給された彼の一連のエロ映画はかなりのヒットであつたらしいが、彼の芸術を支持する人がそれだけあつたというのではなく、女優の裸を見たい人がそれだけあつたという事なのだ。私もそのつもりでのぞきに行ったのだが、下手な説法めいたものが画面にチョロチョロ顔をのぞかせると、テレビのコマーシャルよりむしろわしく感じられてならなかった。それと同じようなわずらわしさがストーリー重点主義におかれ出すとピンク映画の方にも現れる事になるかも知れないが、武智鉄二が駄々っ子が横車を押すように芸術だ芸術だ、なんていう言葉をこちらは口に出す必要はないのだから、それだけにピン

ク映画の方は気が楽だ。ただ彼があのか裁判で検事連を煙に巻くため、自分の作品をあくまでも芸術だとごまかして押し通したとしたのなら、これは、ただもう敬服の外はなく、あの判決のおかげで、ピンク映画界もかなりの恩恵を受けたのだから、大いに感謝しなくてはならないであろう。

たしかに、あの判決以後、ピンク映画のベッドシーンは水を得た魚の如く、調子づき、大胆になり始めた。試写室で、愛欲場面を演ずる女優の乳房が飛び出したというので、思わず「カット」と叫んだ映倫のおっさんも、最近ではそう神経質にいちゃもんをつけなくなり、『黒い雪』がひっかかった当時とそれが裁判で無罪になった現在とでは、大きな差が生じている。たとえば、今まで、女優の乳頭をのぞかせては困るというので、縛り場面なんかでは、女優の乳首に縄をからませたりしてそれを隠し、苦しいごまかし方をしたものだが、最近では、そんな制約などに大してこだわらなくなり、中には逆に乳首を強調して平気でいる製作者もある。私の脚本で武田有生が監督した『多情な乳液』なんかでは胸に縄を巻きつかせず、両手首だけを背中縛りつけられた辰巳のり子が、やくざに扮し

た山本昌平に折檻される場面があったが、胸は完全に露出したまま、ブルブル乳房を慄わせて、辰巳のり子はその折檻場面を熱演していた。乳房を完全に露出するなど今までには見られなかった光景だ。恥毛さえ見えなければいいと思っているのかどうか知らないが、とにかく映倫はベッドシーンに関してこの所弱気になってきたようで、あきらめムードがただよい始め、以前のような元気がない。

元氣を取戻してきたのは製作者達で、何か解禁にあったように調子づいて来たが、如何にせん飴細工にせよ、その材料はますます低下するばかり、売り物になる女優の数は急速に減少しつつある。新高恵子、可能かず子、城山路子、等、一応、容貌もとのい、演技力もあったピンク女優達は申し合わせでもしたかのように続々と足を洗いピンクがオレンジ色に塗りかわったよう今では、これというような売り物になるピンク女優は見当らない。いずれもドングリの背くらべで、先月主役をやったものは今月端役をやったりし、彼女達は、女学生のようにキャッキャッと無邪気だが、女優などというには、あまりにも貫禄がとばし過ぎるようだ。

昔は、五社の大部屋でチャンスを長い間待

ったが遂に実らず、生活のために思切り、ピンク映画の島へくずれて来た女優が多かったようだが、それだけに彼女達の横顔には転落した女の哀感といったものがにじんでいて、妙に人間的な親しみを感じる時があった。現在のピンク女優には、そうした憂愁の色など微塵も感じられない。皆、明るく健康的で、よく食べ、よくしゃべり、よく仕事をする。元、ヌードモデルをやっていて、この種の女優になったのが多いが、キャバレーや酒場のホステスから、この社会にもぐりこんで来たものもある。変ったのでは、元トルコ風呂の女というのもある。

新高や可能が活躍していた頃、一時、ピンク映画界は下火になり出した事があったが、第一線のピンク女優が続々と転向し始めるとまた皮肉な事にこの業界は息を吹き返して盛況となり、観客もかなり動員出来るようになって来たようだが、そうした需要に対して、現在のピンク女優の数と質の貧困さは、真に残念な事に思われる。以前は月一本平均の割で私は内職にピンク脚本を書いていたのだが現在では月三本という忙がしさで、何が本職だかわからなくなってしまったが、その都度会社側より示されてくるキャスティング表を見

て、何時も同じような女優ばかりを手をかえ品をかえ、交代制にして使っているような気分になって来て、いささかうんざりしているのだ。使いたい女優はほとんど姿を消してしまったが、元々、彼女達にしてみれば、生活の手段として、ピンク映画界に飯の宿を求めたのかも知れない。といっても中にも、ピンク映画の草分け時代から現在まで真面目にピンク女優として働きつづけ、一時は妾ものなどでヒットした事があったが、今や、アフリカの河馬みたいにゴツゴツ太ってしまったピンク女優としては、もうどうしようもない所まで来てしまっているのに、相変らずがんばっているのがある。ストリッパーとかピンク女優とかいうのは、やはり惜しまれているうちに身を引くのが賢明なのだろう。老醜無残の姿を観客にさらすのは見っともい事ではない。

昔のピンク女優と現在のピンク女優とは人間的レベルに差があったといつては、何か今のピンク女優を阿呆扱いにしているようで、私はまたとちめられるかも知れないから、そんないい方はしないけれど、容貌スタイルはさておき、性格的な相異点はかなりあったようで、以前のピンク女優達にも人間的な欠

陥はかなりあったようだ。

それは、エロ映画を製作している人間が、俺が製作しているものは芸術作品だといって世の失笑を買うのと同じで、自分はもともとこういう映画の裸女優をやる女ではなく、有象無象のピンク女優と一緒にしてもらっては困る、というような哀れな気位を持っている女優も多かったようである。勿論、そうした自惚れはピンク女優に限らず、この社会に韓めいている三文監督や三文ライターの中にもあって、別におかしな事ではないけれど、現在のピンク女優の中にはそうした自惚れ屋はいないようだ。というより、もうこうなったら叱られるのを承知でいうけれど、ピンク女優しか出来ない女達である。局の友人に紹介してやるからテレビに出てみないか、といったりすると、とんでもないと尻ごみをする。欲がないというより自分の能力をよくわきまえているのだ。たまに一晚付き合くと、十円ズシを鱈腹喰べて、トリス酒場で水前寺清子のレコードに痺れ、それから、ゴーゴー喫茶でフーテン族顔負けのエネルギーなダンスを披露してくれる。いい年して尻振りダンスの相手をさせられる方は、冷汗ビッシヨリだが、昔のピンク女優の場合は、よく私を新

劇の公演とか美術品の展覧会などに誘ってくれたものであった。ある外国の著名な画家の展覧会を彼女に連れられ、長い行列を作って拝見させられた事があり、如何にももったもらしくうなずきながら、むつかしい絵を見て廻る彼女の横顔を見て、実際、彼女にそういう芸術画を観賞する眼があるのかと不思議に思ったものである。

ピンク女優とピンク作家がピカソとかマチスを観賞したからといって、別におかしくも何ともないが、私にはまるきし観賞眼がなく知ったかぶりして見て廻るのが何か面映ゆくて、ずらりと列をなして、こういう芸術作品をうなずきながら見て廻る人々をひがみっぽく見つめて、このピカソに有難がって群がる人々は武智映画に押しかける人々と大した差はないんじゃないかと皮肉な事をぼんやり考えたものだ。一種の群衆心理というやつなんだろう。ピカソを見た帰りに強姦シーン十五分という話題のスエーデン映画を見に行ったのが混乱した最近の知識層の日常ではないかと考えたりする。人の頭でものを考えるようになってきた故かエロ映画だって、あれは芸術である、と製作者に一杯御馳走になった批評家が何かに書いたとするなれば、そ

れ行け、と何の抵抗もなしに列を作り、知識人にあるまじき行動を平気でとるというのも、結局は群衆心理に他愛もなかく廻されているだけの話だ。だから、ピンク女優とピンク作家がピカソを見たとして何もおかしな事ではないのである。

早い話、引退したピンク女優の中の一人、NK子は、前衛芸術がわかるのかわからぬのかわからないが、一種の群衆心理から、今、流行の前衛劇団へ加入したようである。寺山修二の率いるそのアンダーグラウンド劇団が新宿の末広亭で興行を打つ事になり、私は義理で切符を(八百円というのでびっくりしたが)何枚か買わされ、丁度、仕事場へ遊びに来ていた現役のピンク女優と一緒にいかないかと誘った所、そんなわけのわからぬもの見る位なら、一人でゴーゴードダンスを踊っている方がいい、と吐かし、芸術だぞ、といっても、頭があまり良くないから、ひっかからないのである。切符を全部無駄にするのが惜しまれて、新宿の馴染の酒場で飲んでから、夜十時開演という事になっている末広亭へふらふら一人で出かけて見たが、びっくりした。交通整理の巡査まで出動し、ピーピーと笛を吹きながら、末広亭の前を二巻き三巻きし、更に

ぐつと表通りの方までのびている長蛇の列を大童で整理に当たっているのである。まるで火事場騒ぎのような大混雑だ。アンダーグラウンドというのが、こんなまでに人気があるとは想像もしていなかったが、とにかく、その大群衆に胆を潰し、しばらく呆然として突っ立っていると、その長蛇の列の前方に、やはり、この群衆心理に巻きこまれたらしい知人の一人が眼をしょぼつかせて突っ立っている。その間へ身をすりこませてもらい、押し合い、へし合いしながら劇場の入口へ向かって歩み始めると、丁度、私の五六人前あたりで入口は牢獄の扉みたいにかチャンと閉められてしまった。係員に混って寺山修二が横手の方から姿を現わし、門を閉ざされて、びっくりした顔つきになっている人々を、お前ら阿呆か、というような眼差しで悠々と見廻し、もう小屋は満員で、これ以上入れませんから、ここから先は明日にでも来て下さいというのであった。その日の指定席切符を売っておきながら、明日にでも来いとは何たる事か。これすなわちアンダーグラウンドなのかと私は眼をパチパチさせた。明日にでも、のでもは、明日来たってどうせ満員で入れやしないんだからあまり無理するな、というような

な意味が含まれていて、何かペテンにかけられたような不快な気分であった。ところがひしめき合っている群衆は、入場料返せ、などとはしたくない事いうのはなく、舌打ちする程度でぞろぞろ引揚げ出したのだから、そのあきらめの良さに再び驚いた。何だか意気地がないみたいだが、これもアングラファンの特徴なのかも知れない。

私は、NK子に急用がある、とその時初対面であった寺山氏に告げ、横手から楽屋の通路へ押しこんでもらい、人混みの中をキリキリ舞いしながら楽屋へたどりついて、ガスタンクみたいに太ったのやら、ミイラみたいに痩せこけたのやら、何となく気味の悪い連中と出番を待っているNK子に、ひどい目に合わされた愚痴をこぼして、買って来たバナナを手渡し、とにかく苦勞して入場したんだから話の種にと、も一度、もみくちゃにされながら客席の方に出た。

何やら舞台の方では、アラビヤの化物みたいのがうようよ登場して、さっぱりわけのわからぬ芝居をカチャカチャやっていたようだが、ぎっしり狭い小屋に押しこめられている群衆は、まるで押しくらマンジュで遊んでいるように横から突き上げたり、うしろから

押し上げたり、何しに小屋へ入っとるのかわけがわからず、何時の間にか私の体は怒濤に押し上げられた形で、浮き上ってしまい、気がついた時には舞台と反対側の方向に体が向いてしまっているのだった。鼻毛を出して口をポカンと開けて舞台の方を見ている頭の悪そうな学生の顔を正面から眺めながら、何の因果でこんな芝居を見させられる事になったのかと、つくづく情なくなり、出してくれ、出してくれ、と悲鳴をあげて、喧嘩ごしで身を揺すりながら、やっと表へ転がるように出た。客席にいたのはものの十分あまりで、まるで、学生の間抜け面だけを見て出て来たようなものだか、考えれば、それもアングラ的な芝居見物といえるのかも知れない。たしかに腹は立ったけれど、或る意味では大いに参考になった。寺山修二という人に感心したのである。彼は群衆心理を利用して金儲けを思いついたわけなのだ。彼は自分の率いる劇団に自己の芸術を押しつけ、発表させているのではないのだろう。日本人の物見高い群衆心理は、知識階級だと自分では思っている若人達の間に生じがちだと判断して、アングラというものに着眼し、金儲けを思いついたのに違いない。詩を書いていたらあまり派手に

は儲からないから一発興業を打ってみる。これも当世の詩人氣質として面白い。詩的発想がマンネリ化して来て、こうした事から脱皮するために詩人は一時反吐をはくべきだとし、ああいう見世物興業を打っているのかも知れない。

貴方の一番なってみたいものは何ですか、と週刊誌の記者に聞かれて、彼は、アフリカの土人の王様になつてみたい、といったが、無智な人間達を相手にして商売する程、面白い事はないという意味だ。彼の眼には、あの陳腐な三文芝居に芸術の匂いでも嗅ぎつける気で、わんさと押しかけて来た若い男女達がアフリカの土人として映じた事だろう。鶏を裂くのに牛刀を用いる必要なしで、土人の眼を楽しませるのだから土人に踊りをおどらせておけばいいのだと、芸術という言葉に有難がる劇団員にハッパをかけているように思える。だから賢明な彼は、なるだけ頭の良くない人間ばかり集めて芝居させ、いいか、君達のやっているのは前衛芸術なんだぜ、むつかしい芝居だがしっかりやり給え、などと土人の酋長が時々お抱えの祈禱師なんかに出鱈目を云わせて、部下の者達に酋長に対する忠誠を誓わせた如く、ああした要領で劇団員

達を自分の完全な信者にしてしまっているのかも知れない。こうした所が、武智鉄二なんかと違って彼の頭のいい所だと思うのだ。八百円もする当日の指定券を持って遠路はるばるやって来た客に対し、満員だから明日にでも来いとは、やはり、詩人でなければ云えない科白だ。哀れ、NK子も寺山教の信者になって、遂にアフリカ土人にされてしまったか、とは歎くまい。鰯の頭も信心からという言葉がある。

アングラなんかわからない、ゴーゴードンスやってた方がまだ、と、さそつても応じなかった谷ナオミや辰巳典子達には、鰯の頭を信用しない、これまた当世流なたくましさを持っているように思える。

末広亭で、もみくちゃんにされた日の事をふと思い起し、それが急に癪にさわつて来て、筆は例によって途中より脱線、アンダーグラウンドの悪口を心ならずもしゃべってしまったが、実際、私は、ああいうものは苦手だ。苦手というより、お恥ずかしい話だがわからないのである。わかつたつもりでいても作者の意図する所は全然別のところにあるような気がして不安な時がある。ピンク映画のスタッフの中で、アングラファンと自称している助

監督がいるので、この間見たアングラ劇団の公演は、さっぱり面白くなかったが、君はどう思ふかね、と聞いた所、ああいうのは面白くないという所が面白いのだと、面白い事をいい出した。

私の家に、サラリーマン画家のT君から貰った、前衛画というのか抽象画というのか、不思議な絵があつて、どっちを上にして壁にかけていいのかもわからず、書いた本人に、一体、これは何の絵かと聞いたところ、書いた俺にもわからないんだから見るあんたにわかる筈はない、と、すまし顔で云つて、私に眼をパチパチさせるのであつた。わからなくてもいいから、わかつたつもりで見えておれ、と彼は云うのである。ピカソにしろマチスにしろ、わかる人だけが見ていれば、展覧会があれば繁昌する筈はない。わからないものをわかつたつもりで見ると日本人の偉さがあるのだから、意味不明のお経を有難がつて読む精神を、あんた、失っちゃ駄目よ、とT君に奇妙な説教をされ、その後、床の間に飾ったT君の絵をわかつたつもりで私は日夜眺めている。

こんな前衛画などやってる人は、普通人とは違って、どこか型破りのところがあるのか

と思っていたが、T君などは勿論、こんなつまらない絵ではどう転んでも絶体に食えるようにならないという自信があつて、同じ会社にもう十年も勤め、普段は阿呆らしい程、真面目な男で、何時に起床して何時に就寝するという事も規則正しく、人に金を借りたのは忘れるが貸したのは執念深く覚えていてといううがめつい所があり、俗悪な社会人と何のかわりもないけれど、月に一度か二月に一度、この前衛画の制作にとりかかる時は、その日は一切面会謝絶、女房が仕事場に茶を運んで来るとうるさいとどなって追い出し、狐つきみたいな顔になっているのだ。熱病に冒されたような状態になり真剣そのものである。人の話ではT君の作品は、お世辞にも芸術とはいえないが仕事ぶりは芸術家のそれだという。

そういえば私だってT君のように月に一度ぐらい狐つきの眼になる時がある。芸術のゲの字もなく、ゲといえれば下痢を起すかも知れない珍小説を書く時だ。何時かも書いた事と思うが、シナリオとか翻訳とかをやる時は、傍でジャズががなり立てようと人が話しかけて来ようと私は平気でペンを走らせる事が出来るが、花と蛇に関しては自宅の一室に閉じ

こもり、襖をびったり閉め切つて、ジギル博士が薬を飲んでハイド氏に変貌する時のような心意気で原稿紙を前にする。読者の中には花と蛇と鬼六談義の作者が果して同一人物かと文体から見て疑問を持たれている人があるようだ。実際のところ、その二つは、それぞれ人間が変つているといえる。花と蛇のような、ああいうネチネチした書き方というのは性に合わず、性愛描写でもシナリオのト書きみたいに簡潔に書き流す方が好きというより得意だと自分では思っている。セックスにしても、相手の女性に対して、ロープなんか使つて、ネチネチ楽しむというのは、辻村氏にも云つた事だが、相手がかなりの美人であっても、こっちのチャンネルがびつたりと合わない限り、滅多にやらかさない。実にあっけらかんとしたもので、商売女からは、いいお客だと喜ばれる一人だが、かといって、性的に欠陥があるのではなく、うまい具合にハイド氏になった場合には、商売女をキリキリ舞いさせる位の自信はあるのである。などと、阿呆な事をいって自慢しているが、とにかくT君と違って私は三文マニヤ作家だが、こうして、月に一度ずつ狐つきになって、花と蛇に没頭する姿は、T君やその他の芸術にしび

れて、芸術作品を製作したつもりでいる無能芸術家と大して差はないんじゃないかとふと考える。私も物好きだから、色々な仕事に手を出し、何とか稼がせてもらっているが、狐つきみたいになって没頭しなければならぬのは現在、花と蛇しかない。テレビ脚本にせよ、ピンク脚本にせよ、狐つきみたいになって仕事したのは一度もなく、むしろ狐が人をたぶらかしているような所があったりする。となると、作品はY本であっても、製作する態度は芸術家のそれであり、私の色々噛っている仕事の中では一番値打ちがあるものではない——いや、三文エロ作家のたわ言と聞き流して下さって結構だが、実際、私には私なりの苦勞があつて、自分の身心が神がかり、ではない悪魔がかりになり切れそうじゃない状態の時は、編集長より電話の催促を受けても、おろおろするばかり、とうとう先日、所用で大阪へ出たついでに狐つきになりたいと編集長に申出て、辻村氏にお越し願ひ、彼の自宅へ一泊させて頂き、その尨大な秘蔵コレクションを拝見させて頂いて、エネルギーを補給した。

アングラ劇とかエロ芸術とか、いろいろまやかしの物が流行する中であつて、何か本物を

見せられたような気がした。ピンク映画、ピンク芝居、そして巷に氾濫するブルー映画にせよ、彼の所持するビデオテープの前では寝言に等しい。そうしたコレクションは、辻村氏にとっては彼一人の芸術品なのであろう。

長い間かかって蒐集し、自宅の袋戸棚の奥へ隠しておいた緊縛写真を大掃除の日に女房が見つけ出して、キヤツと声を上げ、鼻でもつまむようにして竈の火で燃やしてしまったところ、帰って来た亭主が、それを聞いて、キヤツと叫び、あわてて竈の灰をかき廻しながら、ない、とうめき、天を仰いで涙ぐむ。マニヤの中では、こうした事だって想像出来る。緊縛写真を燃やしてしまった亭主は、秘蔵する芸術品を女房にたたき割られてしまった心境と大差はないのだろう。

芸術品といえば、辻村氏の所へ一泊した翌日、二人で奈良へ遊びに出、こうした所の芸術品、美術品にくわしい辻村氏の案内で、幾つかの寺院に安置されている仏像を見て廻った。優艶高雅な寺院の境内の玉砂利をサクサク音を立てて歩み、優美を極め、巧緻をつくした仏像美術品をポカンとした顔して眺め、造詣の深い辻村氏の説明をフンフンと私は、もっともらしい顔して聞くのだったが、昨夜

は二人で、つるし責めや立縛りなどのビデオテープを明け方近くまで眼をこすりこすりして觀賞し、その翌日はすまし顔でこうして奈良時代の仏像を觀賞するなど、二人とも罰当りみたいな気がして、この狐と狸、極楽へは行けそうじゃない。そんな事を思いながら、帰りは、奈良のストリップ小屋へ入った。人間、長生きしなくちゃいかんと思った。

その小屋の入場料は八百円という土地柄にしては、べらぼうな高値だったが、アングラ劇団の八百円と違って、こっちの方はインチキじゃない。舞台上踊るストリップパー達は、臍物をむき出し、客席へ突き出したりして、まるで観客を産婦人科の医者にしてしまい、いともにこやかに淫臭をふりまき始める。彼女達は芸術という名で映画や舞台や小説なんかに流行している糞リアリズムをまるで嘲笑しているかのようであった。以前、芳野眉美がこの小屋をのぞき、感激して、舞台のストリップパーに千円札を渡したと辻村氏が説明したが、それだけの値打はあるようだ。だが、奈良のストリップパーだから、センベイをもらった鹿のあとにぞろぞろ仲間が押し寄せてくるみたいに、彼女達が次から次と芳野眉美に手を出して来たのではないか、と私は変な心

配をする。とにかく、彼女達は観客をたぶらかす狐ではなかった。

狐の中にも、人をたぶらかすのと、人に尽すのがあるというから、ずるい狐はアングラ劇団と称して人をたぶらかし、エロ映画を作って芸術だとはざきやがる。いや、あの映画の制作者はどこか横顔が狸に似ていたようだ。そこへいくと、芸術なんかとは何の関係もないけれど、KK誌はその読者をその道のマニヤで限定させて来た感があるから、編集者が狐や狸になって、読者をたぶらかそうとしたって、そうは問屋がおろさない。私は、おこがましいが、マニヤを悦ばそうとする白狐になっ

ているつもりである。関西へ行って辻村氏達に逢い、いささかエネルギーを補給した故、ここ当分狐ツキになれそうだ。アングラマニヤさえたぶらかしているような昨今のアングラ劇団はそのうち、崩潰する時があるだろう。末広亭の客席で、学生に踏んづけられた足がまだ痛み、全く癪にさわるのである。

KK誌が、苦難時代をかくぐり、二十年も発刊を続けて来たというのは、悪狐のようにマニヤをたぶらかしたりしなかったからだろう。また悪狐にたぶらかされるような読者ではないだろうけれど――。(おわり)

漫談 千一夜物語

薔薇と蜜蜂

(5)

第三章 ベにさそり

田代俊夫

18

それからまた半年ほど過ぎました。異郷での生活を続けるうちに、メロンは生れ故郷が恋しくなってきました。元姫君の姉さん女房サファイヤと愛の巣を構えてから、早や二年近くの歳月が経過しています。ある日メロンは、望郷の念切なることをサファイヤに訴えました。

「ではメロンさま、あなたのお国へお連れ下さい。わたしには故郷ありませんから」

そこで二人は早速、家財を処分し旅仕度を整え、大層世話になった世話焼きのセツカイ

老にお礼の贈物をしてから、一頭の馬に相乗りして、思い出多いカルピスの町に別れを告げました。相乗りの理由は、メロンが一人で本物の馬に乗れないからです。結局二人は目的地に到達できず、別の国に風変わりなやり方で安住の地を得ることとなりました。その次第は第五章に述べましょう。

野を過ぎ山を越え河を渡って、十日ばかりも旅を続けていくと、とある美しい城下町に到着しました。そこでひとまず長旅の疲れを癒すべく、ホテルに一泊することになりました。

あくる日の夕方、再び出発する頃になると

メロンは急にその町中を散歩したくなって、しばらく自由時間を与えてほしいとサファイヤに頼みました。

サファイヤは美しい眉をひそめて難色を示したものの、メロンがしきりとせがむので、とうとう根負けして承諾したのでした。

「ほんのしばらくだけです。あなたを一人にしておくことがないんだから」

「分ってるさ。すぐ帰ってくるよ」

やっとお許しがでたのでメロンは大喜び、いそいそと旅館を飛び出しました。にぎやかな通りをぶらついて、町のお土産店を冷かしたり、「外人ヌード来演」と看板の出た芝居

小屋を見学したりするうちに、予定の時間はとつくに過ぎて月光が、あたりを照らすようになりました。

早く帰らないとサファイヤに叱られるぞ、と思いながらもメロンは尚もぐずぐずして解放感を楽しんでいたのですが、気がつけば町はずれの寂しいところまで来ています。

そのときでした。町の周囲をかこむ高い城壁の垂直面に、何やら黒いものが、やもりのように張りついているのを認めました。不審に思つて目を凝らすと、それは全身黒づくめの人間で、塀越しに綱を伝つてこちら側へ降りようとしているのでした。メロンとの距離は十メートルありません。

盗賊だな、そう直観して物陰に隠れ息を殺すうちに、地面に降りたった件の人物は視線を走らせ、あたりを窺う気配。幸いにもメロンに気づいたようすはありません。ほっとしたのも束の間、別の頭が、ひょいと塀の上に出ます。覆面をしているので人相は定かではないが、盗賊はどうやら二人組らしい。

尚も観察を続けるうちに、梁上ならぬ塀上の君子は、するすると敏捷な動きで地面に到達しました。そして先着の仲間となにやら声を殺してのひそひそ話。みるからに屈強そう

な大男です。

大変だ、一刻も早く町の人に知らせなきゃ。メロンは身を翻えし脱兎のごとく駆け出しました。いや、駆け出そうとしました。ドサリ、バタン。慌てた拍子に足許の石につまづき物の見事に横転です。兎耳の泥棒氏、これを聞き逃すはずはなく、寸秒にして駆けよ

り、起き上ろうとするメロンの弱腰をしたたか蹴りつけたので二度目のバツタリ。南無三もう助からない。盗賊の一人はたちまちメロンの上にのしかかつてその利腕をねじ上げ、組伏せてしまいました。

「少しでも声を出してみろ。すぐおだぶつにしてくれるぞ」
ギラリと光る短刀を首筋に押しあてられ、メロンはいとも簡単に腰を抜かしてしまいます。その間を利用して盗賊は、メロンを後手に縛り上げ猿ぐつわをかませると、すぐ暗がりへ引きずりこむ。

「しばらくここへ転がしとくか」

「いや、だれかに見つかるかもしれん」

「となると、生かしておけんな、この小僧」
ぶっそんな相談にメロンは生きた心地もありません。

第一の男がメロンの襟もとを掴んでその場

に坐らせると、第二の男が引き抜いた腰刀を振りかざしました。絶体絶命、思わず観念の眼を閉じたとき、

「おい、ちょっと待て、ストライク」

「何だ、ボンヘッド」

「この小僧、殺すにゃ、ちっとばかり惜しい器量だぜ」

ストライクと呼ばれた男は、メロンの頭髪を掴んで顔を月光に晒します。恐怖のあまり顔面蒼白に引きつっていても、あくまで色白くばら色の頬した美少年です。

「なるほど、こりゃあイカスじゃねえか。使えそうだな」

「そうさ。連れて帰って一緒に遊んでやろうじゃないか」

奇妙な名前の二人組、何となく薄気味の悪いことを言う。

「だが、今夜の仕事はどうする？」

「適当に報告しとくさ。どうせ偵察だけなんだし、第一わしら、先月分の給料、まだ貰ってないんだからな」

この時代から、サラリーマンはサボルことに長じていたようですし、給料遅配もあったようです。おかげでメロンは、ひとまず一命を取止めました。

ずるい口実をみつけた二人組は同盟罷業に意見の一致をみるや、早速引揚げにかかります。しかもストライクなる御仁、メロンの指に高価な青玉の指輪を発見して、黙って自分のポケットにしまう抜け目のなさ。これが、のちに災厄の種とはなりました。

先端におもしをつけた綱を塀越しにほうり投げ、するするとよじ登って塀の上に跨がる。後手に縛ったメロンの身体に別の縄を結びつけ、たぐりよせて引張り上げると、同じ要領で塀の外側へ吊り降ろす。そのあと二人が、順々に塀を乗り越える。いつもやっているともえ、手なれた身のさばきです。

近くの木立に馬が二頭つないであり、その一頭の鞍にメロンをくくりつける。よく訓練の足りた身のこなしで、ストライク、ボンヘッドの兩人は馬に答をあて、夜の闇に紛れてこの町から離れていきました。

実はこの両氏、ゴールデン・バットKKなる盗賊団の一味でして、その勤務先たる本部は、ここから馬で半日ほど行った山中の洞窟にあるのでした。

GB・KKの業務方針によれば、全員で略奪行為に出かけるまえに、まず先発隊を若干名派遣して目ざす町のようにすを探らせる慣行

だったのです。ところが今夜は偵察前に邪魔者にみづかり、首尾を果せなかったというわけで、心ならずも事件に巻きこまれたメロンとしては、相当きわどい事態になりました。さて、荒野をつつきり沙漠を越えて休みなく馬を走らせていくと、やがて大木のうっそうと繁茂した森林地帯へ分け入りました。そこから岩肌を上りつめたところに、彼等の本部の洞窟へ通ずる秘密の抜け道があるのです。

「どうしたんだ、ストライク。馬のやつエンコか？」

突然、仲間の馬が停止したので、ボンヘッドが声をかけました。そこは、木立の間にわずかの空地があり、夜の露を含んだ緑草が一面に生えているのです。

「ちがうね。わざと停めたのさ」

「何だと。もうすぐじゃないか、本部まで」

「相変らず冴えんぞ、貴公は。……この小僧をこのまま洞窟に連れていけばどういうことになると思う？」

ストライクの意見は、しごくごもったものなものです。

本部には他の仲間もいるし、兄貴分のナツクルやブルペンのやつにきつと横取りされる

ことは火をみるより明らかなこと。それに、おかしらがこの若造に目をつけ自分専用にするかも知れない。そうなのは、全く骨折り損のくたびれもうけではないか。

「後顧の憂いなきよう、まずここで頂いちまおって算段さ」

「なある。やはり、お主は頭がいいや」

ストライクは鞍にくくりつけてあるメロンを地面へ降ろし、縛めはそのままで猿ぐつわだけを外しました。

あわれなお荷物メロンは、ほとんど意識を失っています。窮屈な拘束状態で長時間輸送されたのですから、無理ありません。

「ここじゃ、いくら泣き喚いても正義の味方は来ないからな。……ウヒヒ、いやというほど泣かせてやるぞ」

「全く掘り出し物だぜ、こいつは。たまらねえいい身体してやがる」

メロンの縄目を解きながら舌なめずりするストライクに、よだれを流して調子を合わせるボンヘッドです。

メロンの貞操(?)は、あわや風前の灯。

若者をしてこの危機を脱せしむるには、次の方法しかありません。

「ではまず、わしから頂戴するといったそう」
「冗談じゃない。おれが先さ」

二人はメロンの先取権をめぐって、つまらない争いを始めたのです。

「わがはいが、掴まえたのであるぞよ」

「馬鹿いえ。おれが止めないと殺してたじゃないか」

抽センにでもすればいいのに、兩人とも互譲の精神を忘れて口角泡を飛ばす大論争とはなりました。この騒動でメロンは意識を回復し、のっぴきならぬ危機的現況にあることを認識しました。

まず逃げられそうもない。しかも二人の論点に聞くとともに耳を傾けると、決して愉快な内容ではありません。そのうちに言い争う声は猛烈な大きさとなり、果ては刀を抜いての大立回りへと発展しました。

しめた、この隙に逃げてやろう。メロンは二人のようすを窺いながら、そっと木立の茂みに紛れこみ、ごそごそ這い抜けてドロンを決めこみました。

とも知らず兩名、先取権をめぐって尚しばらく派手な活劇を演じていましたが、ふと気

づくどと肝心の獲物がいない。影も形もありません。

しまった、トンヅラしおったぞ。かくて暫時、休戦協定を締結し、二人で手分けして必死にその行方を探しましたが、砂漠とちがって森の中、木立は繁茂し下草ははびこる。容易に発見できません。

「せっかくのごちそうを。……きさまのせいだぞ、このボケナス！」

「うるせえ、鬼力ボチャ。先月貸した二千元今すぐ返せ」

取り逃した魚は大きい。兩名互いに罪責を相手になすりつけて、ののしり合っています。だが、今さらどうしようもない。ぶつくさ悪口を応酬しつつも、仕方なく悄然と引き返していきました。

危うく後門の狼の危機を脱したメロンですが、ここがどこなのか皆目見当もつかない。夢中になって、茂みを駆け抜け木立をすり抜け、転びつまろびつ走りしました。どうやらもう追ってくる気配はなさそうです。

何回も蔓草に足をとられ茨の棘に刺されて膝はすりむく血は滲む、それでもやっと逃げきれた思いでホッとしました。とたんにやけつくような喉の渇きを覚え、激しい疲労感が

どっと襲ってきます。もう立って歩くこともできない。ようよう岩肌からしたたる清水をみつけ、這いずり寄ってごくごく飲み干すと、いつしか前後不覚に眠りこんでしまいました。

ふと目が醒めると、はや明け方、木の葉ごとに透ける夜空の星が雲間に消えかかっています。薨蚊に刺された跡がむず痒い。心細いかぎりです。ここまで運ばれてくる途中、ずっと目隠しされていたので、帰る道順も分らないのです。今頃サファイヤはどんなに心配してるだろうと思うと、胸が熱くなってきました。

仕方なしに重い足どりで森の中をさまよい歩き始めます。右も左もありません。足先の向いていた方向が行き先です。が、そこはうまくゆくのが創作の有難いところ。その根元がぽっかり空洞になっている一本の大樹を発見しました。中へ入るとかなりの広さです。雨露だけは凌げそうだ、とりあえず昼頃までここで寝るとするか、そう考えたメロンはごろりと横になりました。

コッソ。頭の受ける感触が何だか変な具合です。よく見ると、空洞になった木の内部の地面に石蓋のようなものが嵌めこんであり、

錆びた青銅の把手がついています。不審に思
ってそれを引き上げると、ぷーんとかび臭い
においがして、人間がやっと通れる程度の縦
穴が地下に続いているのが分りました。

一体何だろう、この穴は。急に興味を覚え
たメロンはその中へもぐりこむ。縄梯子でし
ばらく降りると縦穴は水平方向へと変りまし
た。真暗で何も見えないが、どうやら地下の
トンネルらしく、どこかへ通じているようで
す。辛うじて身をかがめて通れるくらいの広
さです。メロンは壁面を手さぐりにそろそろ
這っていききましたが、二十分ほど進むと行き
どまりです。

途中に横穴はない。何だ、ここでおしま
い。だがどうもおかしいぞ。

突然、前面の岩肌がぼかりと割れ、光が闇
を切り裂きました。ぼうと目が眩む。手で壁
面を撫でまわすうちに、何かの調子でそうな
ったのです。自動開閉装置に触れたのかもしれ
ません。きっと何か秘密の通路に違いあり
ません。

その内部へ踏みこむと、そこは岩肌をくり
抜いたかなり大きい部屋になっています。一
瞬、後をふり向いたとき、今そこから入りこ
んだトンネルとの境界面は跡かたもなく消え

うせ、知らぬ間にメロンは地底の怪室に佇ん
でいるのでした。どんでん返し式自動ドアに
なっているものと推察されます。

さて、その地下室内部の有様ですが、これ
がなかなか豪勢な造りなのです。

凝った様式の燭台が岩肌の天井から吊下げ
られ、まばゆい光を室内に投げかけ無限の色
彩を与えています。大理石と覚しき床には深
紅色の豪華な絨氈が敷きつめられ、ふかふか
と厚く柔らかい。目もあやな絢爛たる調度品
の数々が室内を飾り立てており、深緑の地に
金色の蝙蝠を染めぬいた旗が一隅にいくあ
りげに立てかけてあります。スポーツの優勝
旗でないことは確かだが、そのいわれは目下
のところ不明です。また、太刀がある。鞘は
金メッキ、柄をさまざまの宝石でちりばめた
細身の華麗な業物です。これにも金色の蝙蝠
が浮かし彫りにしてあり、工芸学的にも価値
のある刀剣といわねばなりません。その他、
黒檀の机や桜製・桐製の衣装ダンスなどもあ
るが、調度品の観察はこれくらいにして部屋
の奥に目を転ずると、紫の帷とばりで仕切られた
一劃にだれか寝ている気配がする。
おそろおそろ近づいて、そのカーテンをソ
ーッと開いたメロンは、あっとばかりに息を

呑みました。

黄金製の寝台です。純毛の毛布と絹の布団
です。しかし、それらの物より、メロンを驚
かしたのはその上のことです。人間が一人寝
ています。男ではない。年若い女性です。物
すごい美人です。

寝相はあまりいいとはいえないが、それが
またしどけなく悩ましい。ピンクのパジャマ
を着用に及んで、すやすやと安らかな寝息を
立てているのです。それは年の頃二十六か
七、ぞくっと身震いするほどの妖艶な美女で
した。色白く大柄で精悍な顔つき、豊かに盛
り上った乳房と広く逞ましい肩をした女豹の
ごときグラマー美人です。メロンは度胆を抜
かれてしまいました。

何が何だか分らない。そもそもこの女性は
何者であるか、またいかなる理由によりここ
に存在するのか。処女か非処女か。亭主はい
るのかいないのか。誘惑によろめく可能性は
ありやなしや。

つらつらその掛布団なきグラマーぶりを無
断拝謁するに、サファイヤそっくりの体つき
です。では花の顔ばせいかんと窺えば、気品
においてやや劣るも、凄味では少しく優ると
いうべきか。いずれあやめかかきつばた、要

するに甲乙つけがたい美人です。

とはいえ、いつまでも鼻の下を長くしているわけにもいきません。この場は何となく剣呑であるから、早々に退散するのが得策であろう。メロンはそう判断して、逃げ道の発見に努めましたが、押せど叩けど無情の岩肌はびくともしません。

メロンは急に心細くなりました。閉じこめられてしまったのです。ああ、どうしよう。思い切ってこの女を起してみようかな。いや、それも危険だ。

とつおいつ思案のさなか、美女はむにゃむにゃ寝言をいう気配、あわてて身を引こうとした拍子に卓子にぶつかる。置かれていた水差しが、その頃も変りなかった引力の法則にしたがって床に落下し、ガチャンと音をたてて壊れました。

さあ大変。たちまち、グラマー女は跳ね起きました。

見ると一人のひ弱そうな若者が、呆然と立ちすくんでいるではありませんか。無礼者が弱そうであろうがなからうが、寝姿を見られたとあっては容赦できない。すぐメロンの前に立ちはだかり両手を拡げて通せんぼです。

長身栗色の髪的美女は眼光鋭く憤怒に燃え

立ちました。

「おお、お前はだれだ！ どうしてここへ入りこんだのだ！」

「は、はい。……実はその、というっかりと……しどろもどろ……」

「サツの回し者だね、お前」

壁に立てかけた刀剣を素早く手にし、すりと抜きはなつてメロンに突きつける。

こうなるともういけない。臆病なメロン君ペタンと尻餅をついて腰を抜かしてしまいました。おそろしい刀身が頼みもしないのに首筋をひたひた愛撫してくれます。美女は、すごい形相で、齒も合わず震えるメロンを睨みつけました。

「正直に白状おし！ だれに頼まれてここへ忍びこんだかを」

侵入者は恐怖のあまり口がきけません。臨時警備者になって、金魚よろしくパクパクやっています。抜身を引っさげた美女は、メロンがわざと口を噤んでいるものと勘違いしました。

「ふん、全くだいい度胸してるよ、子供のくせに。だが、どうあつても口を割らせるからね」
そして天井から垂れ下った紐を引っ張ります。しばらくして部屋の外側、つまりメロン

が侵入した反対側のところから足音が近づいてきました。女は、その間に刀身を鞘に収め、ガウンをパジャマの上から引掛けて身なりを整えます。敵はすでに戦意を放棄しているので殊更監視する必要ありません。ノックの音がしました。

「だれだい、お前は？」

「リリーフです。おかしら」

「入っといで」

一人の男が姿を現わしました。油断のならない面相で、勢いなく生やしたドジョウひげが八時二十分を指しています。ドジョウにかみなりが落ちました。

「トンマ！ いつからめくらつんぽになったんだ、お前は！」

「へえ？……視力、聴力とも健全でありんするが……」

女はメロンの方へ顎をしゃくりました。

「この小僧はどうしたんだい、図々しくも寝室まで入りこませて！ そんな不始末で副首領の職務が動まると思ってるのか！」

メロンに視線をやったリリーフはポカンとした表情。鳩が豆鉄砲を食ったような顔つきです。

おかしらと呼ばれた女は、その豆鉄砲に更

に追い打ちを加えます。

「いつもあれほど戸締りを嚴重にするよう言
ってあるじゃないか。大方、ドアの故障を修
理もせずにおいたんだろ。職務手当減俸三カ
月！」

現実に侵入者を目撃しても、副首領リリー
フは、尚納得しかねる風です。

「いえ、別に故障など。それにあの呪文を知
らなきゃ岩戸が開くはずないんですがねえ……」

と、不審顔で言訳けを始めます。美貌の女
首領はハッと悟ったような気配です。メロン
の侵入経路に思い至ったものとみえる。

「ときにリリーフ、この小倅に見覚えはないか
い」

「はて、一向見かけねえ野郎ですがね。……
一体どこから入ってきやがったんだろ？」

女首領も腕組みして考えています。

「多分サツのスパイだと思っただけだね、わ
たしは」

「もしかするとハイライトの一味かも知れま
せん、おかしら。やつら、わが光輝あるゴ
ールデン・バット団の財宝に目をつけて……」
「ふん。最近売出したノッポぞろいのあの二
十人組かい。気の抜けたような連中ばかりじ

やないか」

どうやら御同業の悪口らしい。

「……で、その青二才、口を割らねえんです
かい」

「顔に似合わず強情なジャリさ。……ま、し
ばらく地下の土牢にたたきこんでお置き。あ
とでじっくり泥を吐かせるから」

「何なら今すぐ白状させますぜ」

鼻の下に気取った仕草で手をやり、ドジョ
ウひげを撫でつけるリリーフです。

「いいよ。わたしがやるから」

副首領リリーフは虚脱状態のメロンに近づ
き、利腕をねじ上げると苦もなく後手に縛り
上げました。そして縄尻をとって手荒く引き
立てます。

「太え餓鬼だ。やいこら、とっとと歩け！」

20

盗賊団ゴールデン・バットの首領は、妙齡
の女性だったのです。本章の章名「べにさそ
り」はその女首領の名前です。前節の美人が
すなわち紅さそりであることは、いうまでも
ありません。

GB団の本拠はここ山腹の洞窟にあるので
した。自然に出来た洞穴に手を加え、岩肌を

広く深くくり抜いた天然の要塞なのです。要
点のみ、かいつまんで説明すると、団員総計
二十名、だがこの山荘に起居するのは女首領
紅さそり以下九名の第一軍だけで、残り十名
の二軍が各地の支店に駐在しています。

洞窟の中は一番奥まった一劃に3DKの首
領室があり、団員個室（バス・トイレつき）
会議室、娯楽室、財宝及び贓物倉庫、拷問室、
地下牢、厩舎、台所ETCというように、数
多くの部屋や施設が完備してあって、なか
な豪壮な構えを誇っているのです。

プールやガレージこそないが、夏は冷房、
冬は暖房（いずれも天然）が効きます。日光
と空気は岩肌の天井をくり抜いた窓及び空気
孔からとり、湯は地下に湧出する温泉から引
く。但し配管その他の明細までは審にしま
い。団員の他に老婆が一人いて、これは掃除
・調理・洗濯その他の雑用専門です。GB団
は法人組織になっている関係上、全員月給制
で各本俸の他職務給などの諸手当がつくが、
ここではその就業規則や賃金協定の説明を割
愛したい。ともかく、女首領紅さそりが、全
収益の $\frac{1}{3}$ をガバチョと頂戴する分配体系にな
っているのです。

前節で副首領リリーフが口を滑らせたよう

に、この洞窟の入口には外部からは絶対分らない迷彩を施してあり、しかも或る呪文を唱えないと開閉しない仕組になっています。呪文というのは一種の符牒ですが、先年同業某団体がひどい目にあった失敗に懲りて、一週間毎に変更する慣例です。その上、紅さそりは女性特有のきわめて用心深い性質だったので、万一の場合に備えて自分専用の逃亡路をこしらえておきました。つまりメロンが迷いこんだのは他ならぬこの抜け道だったわけです。最初、紅さそりとしては、まさか自分しか知らないその通路から侵入してきたのだとはつゆ思わず、副首領リリーフを呼びつけて叱責したという次第でした。一難去ってまた一難、メロンは盗賊の本拠に捕われの身になってしまったのです。

その日の朝、いつになく早起した女首領紅さそりは、メロンを監禁した地下牢へ単身急行しました。普段ここは滅多に使用しませんが、時に身代金目当てに誘拐した人質などを入れておくのです。哀れメロンは上半身を裸にされ、荒縄でぐるぐる巻きに縛られています。そして冷い土の上にみじめな恰好でころがっております。

「寝心地がいいだろ、ここは」

睡眠不足の目を開けたメロンの前に、鞭を手にした妖艶の美女が、ずいとおどりました。

「あ……ば、ぼくは何も、何も知ら……」

否定の助動詞は苦痛を表示する間投詞に置換しました。肉に鞭が食いこんだからです。

ひゅーっ、ぴしり！ 土足で首筋を踏んづけられているので、早朝鞭打サービスを避けることができない。白く柔らかいメロンの肌に赤い血が滲みましました。

「ひいーっ！ 助けて、許して、かんにんしてえー……」

「まだシラを切るつもりかい、坊や」

「い、いいいます。申します。なんでも、は、白状しますうっ……」

一旦拷問を停止したので、メロンは機関銃的速度でまくしたてました。息もつかず必死です。早く話してしまわないと華奢な身体が保ちそうにない。この間の所要時間、わずか六十秒。

「……で、ですからイヌやスパイやハイライトなどは全然、無関係なので……」

「万更うそでもなさそうだね。で、その二人組の名前は？」

「はい。……たしか、ボーイフレンドと……スト、ストリップとか……」

女賊は紅唇を歪めて苦笑しました。とにかく一応確認する必要があるそうだ。裏づけ捜査は常識です。そこで一旦メロンをその場に残して土牢から出ていきました。

早朝おかしらの緊急命令で呼びつけられた例のS・Bコンビ。寝呆け眼をこすりつつ会議室に参集いたしました。女首領いささか低気圧とみえる。

「整列。番号はじめっ！」

「ひとーっ」

「ふたーっ。以上二名、異状ありません！」

「よし休め。……お前達、昨夜の報告はまだじゃないか。帰ったらその足で報告する義務を忘れたのかい」

「はっ。昨夜は何分、深夜でありましたので玉眠を妨げるは畏れ多いことと……」

何だって今頃呼びやがんだろ？ 番号をかけなくても二人くらい見れば分ることだ。ふあーっ、眠い眠い……

「そうかい。では今ここで報告するがよい」

「申し上げます。私とボンヘッドの二名は昨日……」

適当に出鱈目を並べたて、むろんメロンのことなど一言もしゃべりません。

「他には？」

「いえ別に。以上のとおりであります」

「御苦労。じゃ、見せるものがあるからついで」

両名思わず顔を見合わせました。まだ何も知らないのです。二人を連行した地下牢では、メロンがひいひい呻いていました。ほんの数発の鞭でも相当こたえたようすです。

「見覚えがないというんだね、この子供に」

果然、両名は仰天です。うわ、エライことになった。

「あわわ……申、申し忘れました。実は昨夜無事、偵察を終えて帰還せんとしたとき……」

ストライクが汗だくで弁解を始めると、ボンヘッドまた僚友の援護射撃に加担します。

昨日の敵は今日の友。

「というわけでして……何分私事に亘ることでもありますれば、おかしらのお耳に入れるまでもないことと愚考し……」

「オカシイね、偵察前に捕まったといってるよ、この小僧は」

「と、とんでもない。……やい、こら。貴様何の恨みで無実のわし達を陥しいれようとするのかっ！」

狼狽したボンヘッド、図々しく憤怒に燃えた風を装い、無抵抗のメロンを足蹴にしま

す。メロンは、きやっとうめいて身体を海老のようにくねらせる。負けじとストライク同盟罷業を隠蔽し、併せて試食(?)未遂の恨みを晴らさんとしたとき、

「てれかくしするんじゃないっ！ お前達、職務不履行及び不実申告の罰として、減俸各¹⁰/₁₀三カ月！ 分ったね」

「へ、へい……しゅん」

おかしらの命令は絶対です。不運にも発覚した両名は青菜に塩、塩になめくじといったしよげかたを呈しました。

昼になると紅さそりは全団員を会議室に集合させました。議題はメロンの処置です。室内の正面、女首領紅さそりが黄金製椅子にどっかと腰を下ろし、その前にメロンが床に正座して引据えられています。左右には副首領リリース以下九名の団員があぐらを組み威儀を正して整列する。いずれ劣らぬ兇暴な面がまえの大男ばかり、ひげもじゃ、わし鼻、金縁眼鏡といろいろバラエティに富む。そういう紳士方が、自分をなめるような視線でねまわすので、メロンは疎み上っています。顔を上げることできません。ただ減俸組の三人だけは、いささか顔色が冴えないよう

す。

紅さそりは事情を簡単に説明しました。もちろん、秘密の抜け穴から侵入した事実だけはごまかす。ストライク及びボンヘッドの過失によるものと認定する。帰路開門の呪文を二人で話し合っていたのをメロンが聞いてしまったことにする。人を呪わば穴二つ、両君ともいい面の皮です。

「……とこういう次第だけど、さてどうしたもんかね、みんな」

すると静かな、ざわめきが起ります。あっちでヒソヒソ、こっちでコソコソ。

「なるほど。しかし、こいつあ、上玉だぜ。どうだい、あの色の白いこと」

「全くだ。それにあの柔らかそうな身体つき、ウヒヒ……」

右はAグループ、左はBグループです。「ストライクは馬鹿だ。順番など、どうだっ

ていいじゃねえか」

「そうとも。ボンヘッドの阿呆も救いようがないね。あいつの乗り遅れるのはバスだけではないぜ」

減俸組は元気がありません。

「みろよ、ボンヘッド。おかしらのやつ、もうあの小僧をマークしてるぜ」

「いやらしく潤んだ女の目つきてえのは、ああいうのだぜ」

「きっと自分専用さ。ああ、ツイてないなあ、わしら」

一人、起立しました。スライダーです。

「おかしら、とにかくこの小僧は生かしておけませんや。おかしらの面子にかけてもすぐ叩き斬ってしましましょう」

メロンは、またがたがた震え出しました。

だがスライダーの状況判断は甘かった。人の心を見抜けなかったからです。その発言は果して大方の不評を買いました。ひそひそ話の悪口が交換されます。

「いやな男だね、あのごますり。自分だけ、

いい子になろうって算段だぜ」

「今年の昇給が悪かったからな、あいつは」

ごまをすってもらった紅さそりも、今一つ

浮かぬ表情です。

「スライダーの提案の他に、だれか意見はないのかい」

直ちにひげもじやの大男が立上りました。

槍を取っては天下敵なし、豪力無双のナックルです。

「わしは反対だ。もとはといえばスト公たちの怠慢のせいだ。敵の回し者でもない子供を

殺すのは児童憲章違反だ。それに……」

とナックルは、もっともらしい見解を追加しました。

「婆さん一人じゃ大変なんだ。こいつを雑用にコキ使ったら何かと便利にちがいない」

なに、本心は別のところにあるのです。そうだ、そうだと他の相棒たちも一斉に賛同の意を表します。うまい口実さえつけば、うしろめたい欲望も顕在化しやすいという一例でしょう。ごまをすり損ねたスライダーだけが渋い顔。実は、この先生も真意はナックルと同じなのです。すると、この時まで末席に控えて居眠りをしていた一人の老婆が、やおらメゾ・ソプラノのキイキイ声を張り挙げました。

「のう、おかしら、わしゃ寄る年なみで身体がいうことをきかん。じゃけん、この子を補助役に使えたら大層、好都合と思うとる。見れば機敏そうなようすじゃし、ふあいひひ、ふあふ……」

入れ歯が外れたようです。

「ハラマ婆さんの意見は妥当だと思うけど、みんなどうだい」

「わしの名はハラマじゃない。コシマですぞい」

素早く入れ歯を嵌め直したコシマ婆さん、嚴重な抗議を女首領に申し入れましたが、

「どっちだって同じじゃないか。……では、そういうことにしようかね」

衆議一決、全員異論なし。スライダーのごときは真先に賛成します。節操のない男です。尚、減俸組の二人だけは、かなり複雑な心境とみえる。紅さそりはメロンに声をかけました。

「これ、メロンとやら、顔をお上げ。こんなわけで命だけは助けてやるが、お前、料理や洗濯はできるんかい」

「は、はい。洗濯も料理も大得意です。それに、ぞうきんがけや皿洗いなど家事万般何でもいたします……」

メロンは命惜しさに、ますらお派出夫会公認のようなことを言っただけで必死に売り込みます。全員大笑い、室内はしばし爆笑の渦につつまれました。姉さん女房にきびしく仕込まれた技術が、こんな時に役に立つとは、メロン君夢にも思わなかったでしょう。紅さそりは峻厳な面持ちに戻ってメロンに駄目を押ししました。

「分つただろうね。お前の命は一時預りなんだから。真面目に働けばよし、もし不心得な

料簡を起して逃げようなどとしたら……」

こんなときの脅し文句は決ったようなものです。メロンは床に頭をすりつけました。

「はい。決してそんな……」

「よし。じゃ決った。コシマ婆さん、この子連れをおいき」

自分の意見は通ったし、今度は正しい名前を呼んでくれたので機嫌も直る。婆さんは早速メロンを引率して部屋から出ていきました。捕虜を自由にしても洞窟内にいるかぎり逃亡の可能性はありません。入口の岩戸は常に閉っているからです。

「他に用もないからこれで解散するよ」

「ちょっと待ってくれ、おかしら」

紅さそりが閉会の辞に次いで全員を退散させようとしたとき、ブルドッグのような顔つきの男が発言を求めました。奇妙な武器を常用するスクイズなる団員です。

「飯たきに使うのはいいとして、もう一つの使い方はどうなるんです？」

と、やや心配そうな表情で尋ねます。狼連中の関心事はこの一点だけです。それをはっきりさせてくれという要求です。いかにも当然のことではあります。

「どういことさ、スクイズ」

紅さそりは知らん顔をしてとぼけます。

「分ってるじゃねえか、姐御。……どうもわしは教養が邪魔して、こういう話をはっきり言いにくいんだが……」

自意識過剰のインテリぶった人間ブルドッグ、片目をつぶっていやらしく笑い、黄色い歯をむき出しました。その鋭い犬歯を見れば、あまり邪魔になるほどの教養ありとも思えません。

「つまり、ボン助達が連れてきたのも要するにだ、その、いわゆる、あのう……」

「分ったよ。で、お前達、全部その気かい」
賛成のざわめきしきり。さっき失敗したスライダーは失地回復今ぞとばかり率先して賛同します。女首領は露骨にいやな顔をしました。また減点、スライダーは不運な男です。

「それでだれの持物にするのさ」

「それはですね、だれからも不平の出ないようにしてですよ、公平にということにしてですね、つまり、皆が文句ないように……」

全員の声なき声を代弁したこのくどい先生が出っ歯で有名なブルペンです。以前アンポン町でヘマをやって、目下はもっぱらベンチを暖めています。最近また登板の機会を窺っているようです。他の団員も口々に、

「くじ引きがいいな」

「じゃんけんはどうだろう」

「あみだも面白いぜ」

お三時なみにわいわいと好き放題のことを言い合います。腹に一物ある紅さそり、早速調停役を買って出ました。

「まあ、お待ち。じゃ、公平にチャンスやろうよ。来週の仕事で一番手柄の者にやるとして、それまで私が預かる」

飢えた狼は一樣に不服そうな表情を示しましたが、絶対権力者たるおかしらの裁定だから文句はいえない。一番手柄の者にやるといっても一時逃れの策にすぎず、団員の戦闘士気鼓舞策でないことは明らかです。GB団は法人組織であり、その首領はすなわち代表取締役たる資格を兼任する。要するに資本の代弁者である。資本家の甘言の真意がどこにあるかはいうまでもないでしょう。

果してメロンの運命やいかに。後門の狼、前門の蠍。この窮地にいかに対処するかというところですよ。

コシマ婆さんの手許に引取られたメロンは早速その日から酷使されることとなりました

た。助手を確保した婆さんは大威張り、次々に雑用を言いつけます。掃除、洗濯から始まって調理・配膳・後始末と息つく間もない忙しさです。でも命あつての物種だから不平は洩らせない。メロンはコマねずみよろしく走り回り、ますらお派出所公会公認の名を恥かしめませんでした。

狼どもの眼が常に光っていて、わずかの隙でも連中の私室へ引きずりこまれる危険がある。そうなつては助からない。だから一日中びくびくして、金魚のフンのように婆さんの尻に付着していました。それをいいことにして、コシマはアンマや肩叩きをやらせるのです。婆さんの私用にまでコシマ使われるのは実際腹の立つ話ですが、そう贅沢ばかりいえない。御機嫌を損じては大変だと思つて、四六時中懸命の奉仕作業に従事しておりました。

五日めの朝、団員は全部出払いました。偵察に行つたのです。本仕事以外のときはいつも何人かこの山荘に居残っているのですが、今回はその特例です。総参謀を兼ねる副首領リリーフは常時洞窟内で作戦を練るのが職務なのですが、紅さそりはこれも適当な口実を作つて追出しにかかります。

「ボンヘッドは相変らずチョロイし、ストラ

イクのやつはいつもああだろ？　ひとつ御苦労だけど、一緒に行つて監督してやってほしいのさ」

リリーフはドジョウひげをひねりながら、ニヤニヤ笑いました。

「あいつら、昔からそうですぜ。おかしら」「だけど今度の仕事は大きいし、ドジを踏んだらひどい目に合うからね。……第19節のお前の減俸は取消すよ」

「となると、今日からはしばらく、おかしらとあの若僧だけになりますな」

「ハラマ婆さんがいるよ」

「留守中は骨休みと称して一日中寝てまさああの御老体」

紅さそりは片目をつぶり、ペロリと赤い舌を出しました。これはいよいよ面白くなってきました。

午後二時、メロンが老婦人の部屋でエプロンの綻びを繕っていると、コシマ婆さんがやってきて言いました。

「おかしらが部屋へ来いってさ」

「何の用か知らない？　おばあさん」

「行けば分るよ。……お前スーパの塩加減でも間違えたんじゃないかね。何せおかしらは味にはひどくうるさいんだから」

メロンはびくびくして女首領の部屋へ出頭しました。ドアを開けた所が応接室兼執務室、その向う側に厚いカーテンで仕切られた一劃が居間になっています。五日前メロンが侵入した寝室は更にその奥にあり、バス・トイレは寝室の横手に位置する。直線配列うなぎの寝床式3DKというわけです。

「あの、スープの味つけはいつも通り塩大さじ二杯とこしょう少々……」

「いいから戸を閉めて鍵をかけておしまい」居間のカーテンを開けたとき、メロンは仰天しました。眼前に麗わしい光景が現出したのです。

豪華な寝椅子に何の遮蔽物もない妖艶な女首領紅さそりが、うつぶせになって長々とねそべっています。最高の目の保養。なだらかな曲線が悩ましい起伏を伴つて走り、壮麗な二つの砂丘の高まりが圧倒的量感をもって迫ります。肩と臀、そしてふくらはぎの白さが痛いほど目に染みる。脚は長く腿はちきれそう、曲線美を誇るグラマーです。メロンは果然として立ちすくみました。

「ぼさつとしないでそこへお坐り」

寝椅子の横に普通の椅子が置いてあり、腰を下ろすと眼下に白い山脈が走るといふ仕組

です。

「少しはこの暮しに慣れたかい」

「はい、おかしら……」

「今日は男どもが皆いないし、お前も安心だろう？」

「はあ……。でも皆さんいい方ばかりですし、それに……」

狼どもに親切にされると困るのだが、ここは身の安全第一と、心にもない外交辞令を述べたてる。紅さそりは顔を斜め上方へねじ向け含み笑い、昼間から小原庄助を決めこんだとみえ、目のふちがほんのりと赤い。メロンは慌ててその視線を外しました。

「みんなお前に目をつけているよ」

自分は局外者のような顔をして、メロンの危機感を煽ります。もっとも、目のつけようが違うという言い分でしょう。メロンは赤くなって困惑した表情を浮かべました。表情は困惑しても視線は白い肉塊からそらさない。損なことは絶対にしない。

「あのう、……御用事は何でしょうか、おかしら」

「わたしの口から言わせるつもりかい」

「……………」

むろん分っているが、問題はタイミングで

ある。下手に手を出して張飛ばされてはたまらない。それにしてもいい女だなあ、背中の反対側はどうなってんだろ？ 想像の翼に乗ってメロンはあらぬ妄想にふける。普段弱虫でもこういうときは図々しい。

膝を折り曲げたり伸ばしたり、紅さそりは少々じれてきました。

「少しあんましておくれ。馬に乗りつけると脚にしこりが残るし、肩もこるんだよ」

メロンは紅さそりの肩を揉みはじめました。いつもサファイヤにやられていたのでお手のものです。女首領は気持ちよさそうに目を閉じています。機をみて掌を胸に滑らせてやろう、メロンはそんな悪徳マッサージ師の常套手段を企画していたのですが、そうは問屋がとおさない。そううまく事が運んでは本節は意味をなさなくなる。

何となく間がもてない紅さそりは、メロンの身上話を要求しました。こうなると折角のムードが丸潰れです。弱虫に加えて泣虫という欠点が露呈する。サファイヤとの出会いからの一部始終を話すうち、メロンは捕われのわが身に思いを致して胸が詰り、その本領を發揮してしくしく泣き始めたのです。

「ふん。で、そのサファイヤとかいうはねっ

かえりの小娘は美人なんだね」

「は、はい。それはもう世界一の……」

万感胸に迫ったメロンは、ぽろぽろ涙を流し、場所柄もわきまえずありとあらゆる形容詞を使って、姉さん女房の美貌その他を修飾します。とたん、紅さそりの態度が豹変しました。

「いつまで肩を揉んでるの！ 脚だよ、脚！」
しまったと悟ったが後の祭りです。万全の受入体勢を整えて待っているのに、一向誘いに乗ってこず、女房ののろけ話などやるとはもっての外である。女首領の怒るのも無理はない。

「足首なんかどうするんだよ、馬鹿。もっと上だろ、凝ってるのは！」

メロンは狼狽してふくらはぎを揉みはじめました。紅さそりの機嫌は簡単には直りませんでした。すぐ正面攻撃でたたみこんできます。

「その小娘、わたしより美人だってんだね」

「いえ、別にそんな意味でなく……」

「はっきりと優劣を決めてもらおうじゃないの、この場で」

と、無理なことを言う。

「そ、それは大体同じくらいで……」

これが致命的エラーとなりました。両方に

花を持たせるなんてことはできない。

「世界一が二人とはどういうことさ」

論理学を不得手とする女性もかような場合

はきわめて論理的になる。つまり言葉尻を捕えてからみます。

「でも……ミス・ユニバースの他にミス・ワ

〔実話〕と〔体験〕懸賞原稿募集

▽ 題名と内容 ▽

- 一、私はこのような変わった体験をした。
- 一、私はこのような珍奇な研究をしている。
- 一、私はこのような怪奇な経験をした。
- 一、私は人間の靈魂の存在を信じている。
- 一、妖怪変化が私を苦しめている。
- 一、私の見聞した怪奇談或は珍妙な実話。
- 一、私はこんな犯罪を犯した。
- 一、私はこのような変わった蒐集をしている。
- 一、私の趣向は、こんなに変わっている。

▽ 規定と賞金 △

- 一、右に掲げたような△題名と内容▽の原稿を書いてみようと思われる方は、原稿用紙三十枚乃至百枚ぐらいの範囲内でまとめて投稿下されるようお願いいたします。

- 一、写真或は絵画などの資料がありましたら原稿に添付下されれば幸いです。若し原稿を書くことが不得手の際は、素材、資料の提供にても結構ですから、その旨御連絡下さい。
- 一、本規定により応募下さった投稿者の方々全部の方に対して、採否に拘らず編集部作成の女体緊縛フォト（或はMフォト）を折返えし贈呈いたします。贈呈枚数は原稿の枚数に応じて加減いたします。
- 一、誌上に掲載しました原稿につきましては一篇につき五千円以上三万円までの賞金を掲載と同時に贈呈いたします。資料のみ提供の場合も以上に準じて賞金を呈します。
- 一、締切りは毎月十五日。応募作品には、必ず△実話と体験▽懸賞応募と附記又は添記して下さい。原則として『応募原稿』の返却の求めには応じかねます。景品或は賞金を贈呈する関係上、連絡先は必ず明記下さるようお願いいたします。

ールドとかミス・インターナショナル……」
「たわけ！ 今、何世紀だと思ってるんだいお前は！」

未来社会に対する鋭い洞察力も空しかった。くると身を反転させた紅さそりはいきなり脚を跳ね上げ、メロンを椅子ごと蹴り倒しました。部屋の隅まで飛ばされたメロンはどすんと尻もちをついておおむけに横転します。その眼前に、均勢のとれた大柄な女首領の体躯が寸時にして迫りました。真白い内腿に金色の蝙蝠が二匹燦然と輝く。これぞ紅さそりの第二のトレードマークです。

「あ、失、失言でした。……ご、ごめんなさい、おかしら」

メロンは床の絨毯に頭をすりつけて謝ります。とびきり上等のヌードだが、今鑑賞する余裕などありません。

「人の好意を踏みにじった上、自尊心を傷つけられては許せないね。お前は逆吊りさ。一晩ぶら下ればもう少し血のめぐりがよくなるだろうよ」

冗談じゃない。一時間であの世行きです。メロンは紅さそりの脚にとりすがって哀願しました。

「なら、逆吊りだけは勘弁してやるよ。その

代り鞭で百回引っぱたくからね。さ、早く裸におなり」

鞭打ちも百回になれば楽観は許されない。先日その痛さは思い知らされている。その時は十発ほどだったのに一挙に十倍にアップされては人命にかかります。メロンは、またくどくどと、紅さそりの慈悲を求めました。「うるさい！ どっちも避けようなんて虫がよすぎるよ」

脚をじゃけんに振りほどき、ぐいと腕を伸ばして搦めとろうとしました。ぴよこん、瞬間メロンはほとんど無意識に身を反転させてとびすります。

「おや、わたしに刃向かおうってのかい」
「い、いえ、決してそんな……」

そこでまた手を伸ばすと、今度は身体の横をすり抜けて反対側へ移転する。所詮逃げられないと覚悟していても、身体が自然にそうなってしまうのです。

珍妙な鬼ごっこの開始です。怯えきった表情のメロンはカーテンで仕切られた3DKの女首領室を逃げまわります。外部へ通ずる唯一のドアにはさっき鍵をかけた。そこからは出られない。袋の中のねずみをハダカの女鬼が面白半分に追う。ところが各室とも調度品

が置き並べてあるので、意外と逮捕に手間どります。敏捷なメロンが巧みに机の下をくぐり抜けたり寝台の下にもぐりこんだりするのに、紅さそりはそういうことが苦手だからです。

始めは遊び半分でも搦まらなと次第に真剣味を増す。ついに腹を立てた紅さそりは血相を変え、本気になって追いまわしました。いかにメロンが機敏でも、息の方が続きません。とうとう寝室の片隅に追いつめられてしまいました。はあはあ息を切らせてベソをかいています。

「とても楽しい運動になったよ……」

むんずと襟元を掴んで手許に引きつけた紅さそりは、抱きすくめたまま足をからんでその場にメロンを押し倒しました。万事休す。

「罰としてもう百回、追加だね」

「ゆ、ゆるして、……も、もう決して逃げたりなんかしません」

「捕まってから何をふざけたこというのさ」

優位な体勢を確保した紅さそりは、メロンの片脚の上腿部を自分の股間にかっちり挟みこむと、直ちにその上衣をはぎとりにかかりました。メロンは往生際が悪い。自由な方の脚をばたばたやっています。

「まだそんなことやってんの。こうなったら観念したらどうなのサ」

さすがに紅さそりもはぎとりにくいとみえて、挟みこんだ肢に力を入れてメロンに脱出不可能を悟らしめようとします。

「でも……」

「何が、でもよ」

「そんなこと云ったって……」

業をにやした女鬼は、難行を承知で攻撃再開に踏みきります。

「助けて、だれか来てえ！……サ、サファイヤ、助けておくれえっ！」

不愉快な人物の名を耳にした紅さそりは、かっとなりました。いきなり両手で喉を絞める。くうっ、とわななきメロンの顔色が変わる。絞殺の意図はないから、落ちる寸前に手を放す。争いはこれまでです。上衣を剥がれた紅顔のハンサム少年が、小鹿のように震えています。その情景が女首領の征服欲に火を点じました。やにわにとびかかってメロンの唇を奪う。その甘味を貪婪に賞味されたメロンは、やがてぐんなりとなって、全身の力が抜けていくのでした。

(つづく)



かずひこのノートから・・・

私はこの味覚を

こよなく愛する

とやまかずひこ

マイ・コレクション

ここ十年来、私はヒソカナスクラップをつづけている。

テーマは、コプロ関係の記事。

ために、項目をかぞえたら、三〇〇。

小説あり、詩あり、シャシンあり、マンガあり、画ありと、多彩である。

じつは、知り合いの古本屋は、これに、五万円の値をつけている。

ある作家が、その古本店主から、私のコレクションの存在を伝えきいて小説の素材にみたいという。

いちど、貸してあげたら、スツカリ、ホレ

こんで、譲ってほしいという。つけた値が五万円。

しかし、いまのところ、五万が十万でも、これを手ばなす気はない。

じまんではないが、三〇〇項目のどれをとってもらっても、三十枚、五十枚の小説は、たちどころにできるほどの、内容なんだ。

その大部分が新聞、雑誌、本から採録したコプロ記事とくれば、これは稀少価値を誇ってもよろしかろう。

そこで、読者諸君にも、すすめたい、いまからでもおそくないから、ひとつ、これから先の十年を期して、このような専門的なスクラップを作ってはいかが。

金にする、しないは、別にしても、集めだしたら、おもしろくて、止められなくなる。ヨキ趣味だ、とタイコ判をおしておく。

世界残酷物語

タイトルにつられて、このゲテモノファイルを読みゆく。

内容は、残酷でもなんでもなく、期待外れの一種の観光映画だったが、なかに、よいシーンが一つだけあった。

ハンブルグのビヤホールで、徹夜でビールをたのしむ人々の姿をとらえた場面。やがて夜があける。酔っぱらいが三人、ペーブメントにすてたタバコを、立小便で消そうという

ユーモラスな風景だが、ここで、おもしろいことになる。

放尿風景を目にした、おんなの酔っぱらいが、サツと立上って、じぶんも、男たちのマネをはじめ。といっても、カメラは、放水まではえんりょしているが女のポーズが画面いっぱいにつされるその表情が、じつにリアルに、うつされるのだ。

あくびをし、肩をおとし、水が流れるようすを描きだしてみごとだ。

放水するときの、女性の表情は、なんともいえない美しさのあるものだが、この中年の太ったドイツおんな、相手かまわず、カネでからだを売るような、グロテスクなモデルだったのが残念だったが、公衆の面前、堂々と放尿の表情をとらえ、ことこまかくみせてくれるのはうれしい。

前後の情景をつなぎ合わせれば、彼女がおとこのように立って、平然と放水していることは、ハッキリわかる。

場内におこったどよめきと、笑声。私の隣席の高校生が、『スゲエな』といった。

一般の人々にとっても、女性の放水スタイルは、やはりめずらしいものなかもしれない。この放水シーン、時間にしてせいぜい10秒でいどだが、きわめて印象的だった。

名作、『花と蛇』をおもわせる、みごとな

一しゅんだった。

に お う 風

しごとで、小田原までいった。

スポンサーのA食品が、国鉄の線路ぞいにネオン塔をたてることになり、私のオフィスに、デザインから立上りまでのいっさいの監理を、依頼してきたのだ。

かなりの大しごとなので、作業班のあとを追って、現場へ飛ぶ。同行は、A食品の宣伝部長と、専属モデルのN子。

工事監督を名目にして、宣伝部長を引っぱりだし、かえりに箱根へまわって、ホテルに一泊というコースを組んである。

現場は、駅からはなれた田んぼのまん中。あたりには、人家はない。先着の作業マンは汗をながして、工事のまっさい中。

と、N子が、そっと私の耳にささやく。

「こまったわ、あたし」

なにが困ったのかは、きくだけヤボというもの。トイレのご用である。

こっちは、チートモ困らない。

「ヨシヨシ、なんとかしてやる」
けっきよく、こっそり車にのせ、五分間ほど東京寄りにもどる。

私は先頭に立つ。手にした、小型スコープは、土を掘り、穴をつくるため。

「ヨシ、オマチドー」

わざとふざけて、彼女のきぶんをやわらげてやるが、山のなかとはいえ、いつ、なんどき人がこないともかぎらない。

ちいさいほうだけなら、まだしも、大きいほうとあれば、時間は、かなりかかる。

一計を案じ、モウいちど、クルマをうごかして、そのかげにN子をかくしてやる。

目立たないように、運転台のマドを全開しておく。ウマイことに、風下に車をおいておいたので、やがて、におう芳香。

あんなキタナイモノを、というなかれ、やはりかわいい子のは、それなりに、よいニオイがするような気がする。しばらくは、運転台で、無念無想、ニオイに酔いしれた。

容 器

「ネエ、とやまさん。牛乳のアキビン、ないかしら」

ボクの、しごと部屋へ、やってきたのは、ある保険会社につとめるBGの令子。

会社の定期診断に、「朝一番の小水」を持参するよう命ぜられたが牛乳ギライの彼女には、適当な容器がない。

それにしても、牛乳ビンにとるとはネエ、と、あきれたら、

アラ、会社ではみなそうよ。それだけじゃ

ないわ。

検便のいれモノには、あんなべんりないれものはないという。

問題は、用済み後のいれものの処理。

「フフフ、ちょっと、水で洗って、牛乳屋に返すのよ。工場では、熱湯消毒するそうだから、きたなくないでしょ」

ときた。

それは、そうだけれど、配達されてきた、牛乳ビンが、ボクたちのしらないところで、そんな使いかたをされていたとはオドロキ。しかし、美人が用いたそれだったら、どんなにいいきもちだろう。なんてモウ想をたくましくするのである。

ひろいモノ

このごろ、東京では地下鉄工事がドシドシ進み、駅がふえる一方。

新駅には、きれいなトイレがあり、べんりだ。

飯田橋駅のトイレは、目下女子用が工事中のため、公然と、男女共用なのはうれしい。はいれば、用もないのに、目のまえの容器のフタをとるのがボクの趣味。

過日も、フタをとったら、うつくしいハンカチ包みがすてられてあった。開いたら、そのカタマリといっしょに、ハイヒールの折れ

たカカトが包みこまれている。

これなら、顔はしらないが、女性がすてていったものであることはマチガイない。

ボクは、ハイヒールによわい。

そのカカトを大切にもちかえり、まいにちながめている。それに踏みつけられることを空想しながら――

妙薬

「アチアチ……」

思わず右手を、左手で抱く。

クマンバチとかいう、ドーモーな蜂が部屋へとびこんできてチクリ！ と、手のひらを刺した。

灼けつくような痛み。

熱海一流のホテルと、自他ともにゆるすHホテルへ泊まったときのさわぎ。

「オイ、アンモニアくれ」

あまりの痛さに、思わず、腹が立ち、イラだって、どなる。

「相すみません、あいにく切らせまして」

夜の十一時すぎでは、薬局はねしずまり、買うすべもない。

係りの若い女中は、オロオロと、じぶんの手落ちのように、立ったり、すわったり。

「仕方がない、非常手段だ」

ボクは、あわてる女中をそのままに、トイレ

レのドアを押した。

「オイ、非常手段だ。じぶんのをひっかけたが、まだ治らない。オマエのもかけてくれ」

虫ササレに、アンモニアがきくのは常識。

だから、自家製のを、トイレにいつてかけたが、量がすくなくてまだたりない。だから、オマエのもだしてくれ。

じぶんながら、なんというウマイ理由を考えたものだろう。

ボクの気魄におされ、純情一途な女中さんが、じぶんのをかけてくれた。

さぞ、はずかしかったことだろう。

かけられながら、かえってボクはそのコをイジめているような気分を味わった。

痛みは、とうに治っているのだが、その気分をもういちど味わうために、あすのあさ、

「マダ痛みが治らない」

と、ウソをいい、そのアムモニア療法を、させてやろう。

彼女、どんな顔をするだろう。今日はとっさのことだから、うまくひっかかってくれたけど、柳の下のドジョウは明日までいてくれるかな。

アレコレ、そんなことを考えた。

夏的一天。商用で泊まった、会社指定の定宿、アタミ、ホテルHにて。

(おわり)

層大胆になってきた二人の悪女、葉子と和枝は、マットの上に仰向けに寝かされた静子夫人の傍へ腰をかがめて、楽しそうに云うのだった。

「——殿方が一番お気に召す方法ですわ。今からそれを静子が主人の捨太郎、と、この場で演じさせて頂きます」

静子夫人は、叙情的にまでしつとりと潤んだ二つの瞳を物悲しげに葉子と和枝に向けてそう云った。

「殿方が一番悦ぶ方法って一体何なのよ。そうもったいぶらず、はっきりおっしゃいな」
和枝が夫人の白い顎に指をかけ、楽しそうに云った。

静子夫人は、顔を赤らめて、モジモジし始めたが、羞しげに眼を閉ざし、小さな声で、

「——フレンチキス——」

と云い、さっと顔を横に伏せる。

「一体何の事、意味がわかんないわ」

和枝と葉子が面白そうに顔を見合わせると鬼源がニヤニヤしながら近づいて来て、彼女達にその意味を説明する。

「まあ、嫌だ。ホホホ」

和枝と葉子は同時に呆れたような顔をして笑いこけた時、千代と川田が、それぞれの手

に小さな香水瓶を持って、ぴったりと閉じ合わせている静子夫人の肢の方へ腰をかがめるのだった。

「さ、奥様、寢室のエチケットについて皆様に御説明して下さいな」

千代は、香水瓶の蓋をとりながら、静子夫人に次の解説を要求する。

静子夫人は、閉じ合わせていた眼を再び静かに見開いて、情感のこもったねっとりした美しい瞳をのぞきこんでいる和枝と葉子に向けた。

「——こうした愛情表現を行なう前には、寢室の身だしなみとして、妻は、その部分の周囲に香水を振りかけます。——千代さん、川田さん、お願いしますわ」

静子夫人は、そういうと、固く閉ざしていた官能味たっぷりの太腿をゆっくりと左右に開き始めた。

「お二人にこんな事までお願いして御免なさいね。でも、静子、両手の自由がきかないんですもの」

静子夫人は、甘えかかるようにそう云いながら、左右に陣どっている川田と千代の膝の上に両肢をあずけてしまった恰好になる。

川田と千代が見物している男達の眼にうつ

る効果を計算しながら、手をからませて更に大きく割り開け、臍のあたりから、内腿の付け根のあたりにまで、万遍なく香水をぬりこめていく。

静子夫人は、薄絹を撫でるような甘美な鳴咽を洩らしながら、川田と千代の行為を甘受していたが、急に、「あっ」と狼狽の声をあげブルツと身悶えをして、熱い吐息と共に身をくねらし始めた。最も敏感な部分にそれは塗りこめられたのだ。

静子夫人の悩ましいばかりの身悶えは見物する男達の官能の芯を痺れさせる。

「さ、充分に香水をふりかけてあげたわ。他に香水が必要なところがあつたら、おっしゃって頂戴、奥様」

千代は、金齒をのぞかせて癪高い笑い声を立てながら静子夫人の臍を指ではじいた。

泣いてもわめいても、いよいよ今夜、遂に

この美貌の令夫人は醜惡な捨太郎と夫婦の契りを結ぶのだ。しかも、万座の中で珍妙な愛欲図絵を展開させ、明け方まで野卑な男達の注文に応じ様々なぶりものとなるのだと思うと、千代はようやく恨みを晴らしたような何ともいえず爽快な気分になって来たのである。それだけに、これから行なわれる静子夫

人と捨太郎の実演をより効果的な、すさまじいものにしようと千代は腕によりをかける気で張り切り出しているのであった。

千代と同じよう川田も、元の主人である美しい静子夫人の崩潰に力を注いでいるようであった。

「さ、次はどこへ香水を塗りこむんだ。鬼村先生と打合せした筈だろ」

川田はせせら笑いながら、両手で抱きこんだ夫人の太腿を揺すり出した。

「次にねえ、川田さん」

静子夫人は、ねっとりとした美しい黒眼をぼんやり上に向けながら口を開いた。

「——静子の、静子の、お尻の——にも、ねえ、お願い」

静子夫人は、わなわな唇を慄かせながら、すすり上げるように云い、

「夫は、きつとそこにもキッスして下さると思いますね。ですから、ね、お願い」

と、切れ切れに続けると、火のように熱く頬を染めながら、のけぞらせるように顔をそむけるのだった。

川田と千代は、待ち受けていたように静子夫人の両肢を今度は上へたぐり上げ、極端なポーズを取らせようとしたが、夫人は、二人

に協力を示し、何の抵抗もなしに垂直に高々と肢を上げる。

高貴な細工物のようにすんなりと伸びた美しい二本の肢が直角から更に折り曲げられていき、足の脛はほとんど乳房に触れるばかりぐっと削いだようにヒップラインとウエストラインが優美で大胆な曲線を悩ましいばかりに描いて、見物人達は、ただ呆然とした顔つきで見入っている。

そのような大胆な姿態を強要され、はつきりとその秘められた可愛い……させてしまった静子夫人は、極端にまで折り曲げられた優美な二肢を慄かせ、消え入るように甘美なすすり泣きを続けている。

川田と千代が、指先を使って香水を塗りこみ始めると、夫人は、あーと上ずった声を張り上げ、見物人達の魂を揺さぶるような優雅な涕泣を洩らして、ブルブルと量感のある見事な尻を左右へ揺さぶるのだった。

「——愛する夫のため、妻は、妻はこのようにして——」

静子夫人は、見物人達の心に沁み入るような涕泣と一緒に、こうして寢室のエチケツトなるものをハスキーな声で語り続けるのだ。

川田と千代が仕事を終えて立上ると、先程

から近くに来て、鳥の腿肉を嚙りながら待機していた捨太郎が鬼源の眼くばせを受けて立ち上った。

すっかりやれ、などと見物人達は胸毛を生やしたレスラーのような体つきの捨太郎を見上げて拍手し始める。

捨太郎は、エヘラエヘラとだらしなく口を歪めて、周囲をぎっしり埋め尽した男達を見廻し、肩にかけていた半纏を投げ捨てると、腰の赤褌をくるくる外し始めた。

わあーと見物人達の間で喚声と哄笑が渦巻く。

「見ろ、こりゃ凄えや」

男達は顔を見合わせて、捨太郎の人間ばなれの巨大さに舌を巻くのである。

捨太郎はマットの上にあがると、夫人のふくよかな肩に手をかけて一旦、夫人の上体を抱き起す。マットの上にべったり尻モチをついたまま、夫人はあやつり人形のように捨太郎のするがままになっていた。

行為に入る前に記念写真をとっておきたいという千代の希望を聞き入れて、捨太郎はマットの上に足を投げ出して坐った夫人の背後から乳房のあたりを両手で抱きしめるようにして腰を落し夫人の美しい頬にぴったりと自

分の頬を当てがったのだ。

そんな二人の前に千代がカメラを構えて腰をかがめると、それを合図にしたように先程から待機していた森田組のチンピラ達が四囲に配置されている撮影用のライトの灯をともし、別の角度から川田が八ミリの撮影カメラを構え出した。

これから始まる美女と野獣の実演を克明に撮影し、あわよくばそれを商品にする胆で、田代はあらかじめ、こうした撮影器具をチンピラ達に準備させていたものと思われる。

ぴったりと捨太郎の頬を頬に押し当てられ、繊細な美しい象牙色の顔をしーんと凍りつかせたようにして静子夫人は固く眼を閉ざしている。

「ちよっと、駄目じゃないの。眼をつぶったりしちゃ。夫婦の契りを結ぶ前に記念写真を撮っておいてあげようというのよ。さ、奥様眼を開けて、幸せそうに笑ってごらん」

千代が云うと、静子夫人は、そっと眼を開き、翳の深い、暗い哀しげな色を瞳に浮かべて、千代の構えるカメラへじっと視線を注ぐのだった。

マツトの上に向けて、一せいにともされたライトの光に静子夫人のその憂愁を帯びた、

優雅な容貌は、一きわ美しく照りはえる。

千代は、満足そうにうなずいて、シャッターを押すと、今度は角度を変え横の方から、またうしろの方からカメラを構えて、何かにとり憑かれたようにシャッターを押しまくった。

捨太郎の胸毛を生やした赤銅色のゴツゴツした裸身と静子夫人の艶々として輝くばかりに白い裸身、そして捨太郎の獣のような醜惡な容貌と静子夫人の天女のような輝く美貌、そうしたアンバランスな組合せが見ている者に滑稽な皮肉感を与え、美女と野獣のショーと鬼源の名づけたショーのタイトルが実に適切なものに感じられるのであった。

「さて、新郎新婦は、甘い愛の言葉を交わし合い、熱い接吻をしてから、皆様、お待ち兼ねのフランス式ベッドショーに入る事に致します」

鬼源が酒気を帯びて赤くなった額をさすりながら上機嫌で立ち上り、周囲を埋める男達に声をかけた。

待ってました、と見物人達は中腰になって一せいに拍手し始める。

楽屋の中で、鬼源や捨太郎と打合せした通り演じつつ、いよいよ静子夫人は、奈落への

コースをたどる事になったわけだ。

——何をためらっているの、貴女はもう人間じゃないのよ、悪魔達に気に入られるよう振舞う事が貴女に与えられた天命なのよ——と静子夫人は自分の心に云い聞かせると、未練を断ち切ったよう、今までうなだれるようにしていた顔をさっと上にあげ、背中から乳房のあたりに手を回して自分を抱きしめていた捨太郎の方へねじるように首を廻し、甘えかかるように一層肩や背を捨太郎の胸へ押しつけていったのだ。

「ねえ、あなた、もっとしっかり、静子を抱いて——」

静子夫人が思いがけなくも急に自分の方から甘えるように身をすり寄せて来たので捨太郎は一瞬、面喰ったような顔つきになった。「ねえ、静子は今夜、あなたのものになるのよ。うんと可愛がって下さらなきゃ嫌」

静子夫人は、眼を閉ざし形のいい紅唇を捨太郎の唇へそっと近づけていく。

「ねえ、あなた、ベーズを——」

押しつけて来た静子夫人の柔かい唇に捨太郎はぴったりと口を当てた。

田代、鬼源、川田、千代達は、互に眼を向け合い、北叟笑む。

静子夫人がようやく捨太郎と呼吸を合わせ出した事に四人とも上機嫌なのだ。

田代は千代を手招きして、自分の横に坐らせると、盃を渡して酒を注ぎ

「この調子だと静子夫人、捨太郎と円滑に夫婦の関係を結んでくれそうですよ。ハハハ、どうです。肩の荷が降りた気分でしょう」

田代にそういわれて、千代はいやしげに顔をほころばせ、

「これというのも社長や鬼源さんのおかげですね。これで静子が妊娠でもしてくれりゃ申し分がないって所なんですけどね」

などといって笑い出すと、そこへ鬼源も上機嫌でやって来て、

「へへへ、仲々ムードが出て来たじゃありませんか。捨太郎の奴も、今日は久しぶりに女を抱くというんで大張切でさあ。しかも、相手は絶世の美女ときてるんで、口で一回、体で五回、計六回はお客を喜ばせてみせると意気込んでやがるんですよ」

まあ、そんなに、と千代は口を手で押さええてクスクス笑った。

鬼源の説明によると捨太郎の一回の所要時間は約一時間、だから、その回数をこなすには、どうしても明日の朝までかかるという。

「だが、鬼源。静子は生まれ育ちのいい貴婦人であるだけに、そういう絶倫男に振りまわされているとガタガタになっちまうんじゃないか。大事な商品をそう無茶に扱うというのは、どうかと思うんだが——」

と田代が気づかうと鬼源は笑いながら、
「そりゃ途中で二度や三度気を失う事になると思いますが、水でもひっかけて正気づかせ泣いてもわめいても続けさせるんです。そういう風にして捨太郎の体に馴れさせてしまえばこっちのもの。体も心もいよいよショーのスターとして生まれ変わり、めっきり貫禄もついてきますからね。昔、一日に何人もの客の相手をしなきゃならねえ娼婦を仕込む時、捨太郎のような絶倫男の相手をさして体を作ったもんですよ」

鬼源は、静子夫人の肉体を娼婦のそれのように抵抗のあるものに磨きあげる必要があるとしているのだ。

「ま、スターの教育は俺に任せておいて下せえ。薄馬鹿野郎だが、いちど捨太郎を知った女は、捨太郎の味が忘れられなくなっちまうもんです。静子夫人だって、そのうちには、へへへ」

鬼源は、楽しそうに笑って田代の肩をたた

き、眼をマットレスの舞台に向けた。

捨太郎と静子夫人は、息をはずませ、濃厚な接吻シーンを展開している。

練絹のように柔かい甘美な夫人の舌が捨太郎の舌とからみ合い、吸いつき合い、何時の間にか捨太郎は両手で夫人の柔軟な肩を前から抱きすくめるようにして、火のように熱い抱擁と接吻を客に披露しているのだ。

ようやく、唇を離れた静子夫人は鬼源の演出どおり、びったりと捨太郎の頬に上気した自分の頬を当てがって、香ぐわしい鼻息を混ぜた頬ずりをしながら「ねえ、ねえ」と甘えかかるように身を揉んでいる。

「お客様がお待ち兼ねですわ。静子にフレンチキッスをさせて。ね、いいでしょう」

「へへへ、おらもしてやるぜ」

「嬉しいわ。あなたのお好きな香水をつけて静子、支度しておいたのよ」

そんな二人のやりとりを見物人達はポカンと口を開け、阿呆のような顔つきをして見入っている。

やがて、静子夫人は捨太郎の手で、マットの上に静かに横たえられた。

紫のしごきで相変らず後手に縛られたままの静子夫人は、さももどかしげに捨太郎の手

の中で身を悶えさせながら、
「あなたを、あなたを抱けないのが口惜しいの。ああ、解いて欲しいわ。このしごき」
「いいから、いいから、両手は使えなくなつて口は使えるだろ」

見物人達は、どっと哄笑する。

捨太郎は静子夫人の、ライトに映えて、まぶしいばかりにきらめく象牙色の緊縛裸身をマットの上で仰向けにさせると、夫人の肉体の隅から隅まで接吻する事から……為を開始した。

こういう事を商売にしている男だけに、ニヤニヤしたり、そわそわしたりという事はなく、妙に生まじめな顔つきで耳たぶから、頸、肩、乳房と唇……、指をからませる。

静子夫人は、鬼源に楽屋で教示されたように演じてきたわけだが、どういうわけか捨太郎の唇を受けると、ものの二三分もたたないうち体中が上気し始め、汗ばみ出し、自分でも意外に思う程の状態に陥り出した。

長年、様々な女体を扱って体得した技巧というもののなか、乳房を………するにしても、女の………秘密を完全に嗅ぎつけた、いわゆるプロの扱いであった。………を揉み上げたり、薄桃色の………軽く歯型を入れるよ

うに嚙んだり、吸ったり——そんな事をくり返されている内、静子夫人は、桜色に染まった頬を火のように上気させていき、捨太郎のペースに早くも巻き込まれてしまった自分を感出したのである。

捨太郎の唇と………半身の方に移向し始めると、静子夫人は、あっ、と激しい声をあげ思わず………縮めたが、それも束の間で、臍の周辺を………内腿、太腿あたりに唇を押し当てられている内、夫人は、慄える頬にポタポタ大粒の涙をこぼしつつ、ゆっくりと官能味を盛り上げた優美な太腿を誘発された自分の意志で委ね始めたのである。

——こんな男に、ああ、こんな男に——静子夫人は、野獣に等しい男の手管に敗北し始めた自分を呪うかのようにキリキリ歯を噛み鳴らした。

それを待ちかまえていたように捨太郎は、………分へ唇をびったりと当てがったのであった。

「あっ」と絹を裂くような声を夫人は思わず張り上げる。

「嫌、嫌よ、ああ、あなた、お願い！」

夫人は上ずった声を出して、身を揺すったが、次第にそれは、優雅な涕泣にかわり、

「そ、そんな、ああ、嫌、嫌、ひどいわ、ねえ、あなた——」

と、甘美なすすり泣きをくり返しつつ、なよなよと優雅な身悶えをつづけるのだった。

激しい波に揺さぶられ、切れ切れの声を上げてのたうつ静子夫人の火のように熱い頬へ捨太郎の………触れたのだ。火のように熱く鉄のように硬………れにふと気づいた静子夫人は、あまりの恐しさに、はっと眼をそらせたが、

「どうしたんだよ。モタモタするねえ」

と鬼源の叱咤が飛び、

「ホホホ、さ、奥様、お始めになって、カメラにしっかりおさめさせて頂きますわ」

千代は静子夫人の上気している横顔にそつとカメラを近づけていく。

感覚的には、ぞっとする嫌悪の戦慄が身内を走ったが、捨太郎の扱いに、これまでになかった思いも寄らぬ程の激しい波に揺さぶられ、肉も心もやがてすっかり順応させられてしまった静子夫人は、もう何もかも忘れ、艶々とした感触の美しい黒髪をさつと振ったかと思うと、捨鉢になったように、びったりと唇を合わせたのであった。

見物人の間から、どよめきと興奮が渦巻き

上る。

千代は、異様に眼をギラつかせ、矢つぎ早やにカメラのシャッターを押しつづけた。

田代が如何がです、と口元にいやらしい笑みを浮かべて岩崎の顔を見ると、岩崎も満足そうにうなずいて、さもうまそうに盃の酒を飲み乾すのだった。

撮影カメラがあちこち移動しながら、完全にフランス式の体位を組み合った美女と野獣の熱演を写し始めた。

和枝と葉子は、時々、溜息をつくようにして、顔を見合せたり、再び明るいうライトの光波にねばりつくように、くつきりと写し出されていく幻想的なまでに白い夫人の裸身に眼を注いだりをくり返している。

静子夫人は、捨太郎の両腕に、がっしりと抱えこまれている優美な二肢を戦慄するようにはふるわせながら、翳の深い眼をうっとりとして閉じ合わせ、気品のある鼻の線を摺りつけたり、唇を押しつけて、ゆるやかに摺り合っていたが、

「さ、そろそろ情熱を出して、本格的にやってみな」

と鬼源の声が再びかかると、遂に夫人は、舌をのぞかせて熱くて柔媚な口吻を……………

…に注ぎ始めた。

「——ねえ、こんなに、こんなに静子は、あなたを——愛しているのよ」

そういうと同時に、静子夫人は、美しい黒髪をゆさゆさと揺さぶりながら、思い切った深く——。

場内はシーンと水を打ったように静まり返り、見物人達は固唾を呑むようにして、濡のよう^{もち}にねっとり吸いつき合った美女と野獣のショーに眼をこらしているのだ。

遠くの方から、この光景を見るともなしに見ていた悦子は両手で眼を覆いたくなるような衝動にかられて、顔をそむけてしまった。

美しい宝石は、遂に千代や鬼源の卑劣な計略で、泥水の中へたたきこまれてしまったのだ。

「どう、奥様、おいしい？ ホホホ、随分と幸せそうな顔をなさっているわね」

千代は勝誇ったように声を立てて笑いながら、汚辱にまみれて、呻きつづけている静子夫人の顔を頼もしそうに眺めている。今夜という今夜は、この女にとどめを刺し、奴隷としての極印を骨の髄にまで焼きつかせてやるのだと、千代は闘魂のようなものを漲らせているのだ。

静子夫人は、魂を宙に浮かせ、忘我状態に陥ったよう、うっとりとして眼を閉じ合わせたまま、口……………それを甘美な舌を使って幾度も……………しているのだ。

「どうでい、捨太郎。絶世の美女にこんなサ—ビスしてもらって、手前、心がとろける思いだろ」

鬼源は捨太郎の方に腰を下ろして、からかっている。

捨太郎は、遮二無二、口吻をつづけ、見物人達が好奇の眼を近づけて来ると、崩潰直前にまで追いつめられて、羞しい甘美な花の香りを匂わせている……………面白そうに示してやるのであった。

夫人の繊細なすすり泣きの声は接吻のために途だえ、それは、物哀しい傷ついた獣のうめきに変わった。

鬼源は、這うようにして、今度は、静子夫人の顔へ廻り、声にならぬ悲鳴をあげ、なよなよと全身をのたうたせている夫人の耳もとに口を当てる。

「捨太郎の奴を一度、すっきりさせなきゃ何時までたっても、この実演は続くんだぜ。だからよ、少し、ピッチをあげて、な、しっかりやるんだぜ」

直っ赤に上氣した横顔を鬼源につつかれた静子夫人は、わなわなと口一杯に頬ばった頬を震わせ、真珠のような大粒の涙をばたばた落しながら、うなずいて見せる。

それを眺めた悦子は、遂に耐えられなくなつて部屋の外へ飛び出して行つた。

△あの日の回想▽

廊下へ飛び出た悦子は、そのまま壁に背をもたれさせて深い溜息を吐いた。

美貌と教養に満ちあふれ、上流社交界の花形でもあった遠山財閥の令夫人——教養のない自分に色々な知識を与え、フランス語の手ほどきまでする事を約束してくれた優しい静子夫人——それは遂に、醜悪なゴリラ男の捨て太郎と満座の中で夫婦プレイの実演というあまりにもむごい仕打ちを受ける事になったのだ。鬼畜に等しい鬼源や田代達に対し、激しい憤りが悦子の胸にこみ上ってくる。

ああ、と悦子は頭をかかえた。自分だつてついこの間までは、彼等に負けずおとらずの悪魔だつたではないか。上流社会で栄耀贅沢して遊び暮している貴婦人めいた人種が癪にさわって、葉桜団団長の銀子や副団長の朱美

達より以上に静子夫人や小夜子達に対し、淫虐ないたづりを思いついた事だつてある。今となつて罪もない静子夫人をここまで落としたんだ事に後悔したとて、もう手おくれではないか。と悦子は自分をいまいましく思ひ、やり切れなくなつて、ジーパンのポケットから煙草を取り出し、口にした。

もう静子夫人は、その心と肉体に口に出しては云えない位のおぞましい数々のいたづらを受け、人前には出られぬ身となつてゐるのだ。もう取り返しのない体なのだ。

そう思うと悦子は、急に胸が熱っぽく痛み出し、可哀そうな人、と溜息をつくように口に出して云つた。ひょっとして、捨て太郎と強制的にコンビを組まされる事になった静子夫人は、千代というかつての静子夫人の女中であつた女の陰湿な計画通り、捨て太郎の子供をお腹に——そう思うと悦子は、ぞっとした思いになり、あわてて、口の煙草を捨てた。そして、始めて、静子夫人が葉桜団の毘に落ちて、田舎の百姓家に監禁された日の事を懐かしむようにぼんやり思い出したのである。

——濃淡を縞にした、しぶい和服姿の静子夫人であつたが、その地味な和服が象牙色に冴える静子夫人の高貴な美貌を何とよく引き

立てていた事か。廢屋に等しい百姓家の大黒柱に、最初、静子夫人は濃い鉄色の地に縦縞柄のしぶい羽織だけを脱がされた姿で、太いロープを使って立縛りにされたのだ。大黒柱の周囲をずらりと取囲んだズベ公達を静子夫人は、美しい眉毛を震わせ、その抒情的な瞳に精一杯の反抗と怒を含めて、負けるものかとばかりきつと見廻した、あのぞっとするばかりに美しい容貌を悦子は今でも忘れない。

その艶麗な首筋をくつきりと色っぽく浮き立たせている渋い和服に静子夫人の上背のあつたスラリとした肉体は覆われていて、あとでズベ公達が驚嘆の眼を見張った幻想的なまでに官能味を持った豊満な乳房や優美でムチムチとひきしまった乳白色の太腿などは隠されていたわけだが、静子夫人の逃走を阻止するために彼女の衣類を剥ぎ取ろうと銀子が提案した時の夫人の狼狽した顔も、悦子はまるで昨日の事のように、はっきりと覚えてゐる。

「馬鹿な真似はやめて！」

と、取り乱して絶叫する静子夫人を見た悦子は、あの時、美しい花園の中で何の苦勞もなしに遊び暮しているこの上流社会の貴婦人を徹底的にいじめ抜き、自分達の足で泥をひっかけてやりたい敵意がムラムラと湧いて来

たのだ。それで、最初に静子夫人の帯に手をかけたのも悦子であった。

悦子のする事に呼応したようマリや義子も狂乱して身を揺する静子夫人にまといつき、帯じめを解き、キューキューと音をさせて、幾本もの腰紐を抜き取り、渋い茶がかかった佐賀錦の帯をくるくる廻しながら解き始めると、夫人は戦慄して、絹を裂くような悲鳴をあげた。

素っ裸にするには一度縄を解いた方がやりいいわよ、と朱実が楽しそうに笑って云うので、帯を解かれて着物の支えを失った静子夫人の縄を一旦、ズベ公達は解いたが、やっと両手の自由を得たその時の夫人の抵抗はまたすさまじかった。

柱の根につまずいて、土間に両手をついてしまった静子夫人にズベ公達は躍りかかり、支えのなくなった着物は寄ってたかったスッポリと引剥がしてしまつたが、眼もさめるような、あでやかな緋の長襦袢姿にされた静子夫人は、ズベ子達の手の中をかいくぐるようにして逃れ、百姓家の剥げ落ちた土壁を背にして、迫って来るズベ公達の手をさけ、眼に泌みるような白い足袋で土間をけって、右へ走ったり、左へ走ったり、その度、燃えるよ

うな緋の長襦袢の裾前がひるがえり、その中からのぞいたうずら縮緬の湯文字が動きにつれて風を呼び、まるで歌舞伎にでも出て来るような美しい一幅の絵であつた。

今では、鬼源や川田達のおく事を知らぬ残忍な調教を肉と心の両面に受けて、実演スタ―として開眼させられる所まで追い込まれた静子夫人であるが、こうした地獄へ落ちこむ前の静子夫人の、まるで処女のような激しい抵抗が悦子にとっては、茜色の雲のよう、ふと懐しい。

——長襦袢姿にされて逃げまどう静子夫人に対し、

「強情をはると、桂子を痛い目に合わすよ」

と、叫んだのも悦子であつた。

壁にそって垂れ下がっている二本の鎖に茎のように細い、しなやかな両手をつなぎ止められ、爪先立ちをしている桂子に、朱実が青竹を情用捨なく振りおろす。ピシッピシッツと桂子の尻に青竹は炸裂し、絹を裂くような桂子の悲鳴。忽ち、桂子の尻に幾条かの蚯蚓腫れが生じたのだ。

「待って！」

静子夫人は動きを止め、悲痛な表情になつて声をはり上げたのだ。恐怖にわなわたと全

身が慄えている。

「奥さんが、素直に脱ぐ気になりゃいいんだよ。素っ裸になつた所で別にあたいた達は変な事はしやしないさ。男じゃないんだからね」
銀子がそう云つたので、悦子は他のズベ公達と一緒に哄笑した。

全裸にするというズベ公達の言葉に、静子夫人は、眼もくらむばかりの屈辱と恐怖を覚え、一瞬、気が遠くなりかけたようだが、その後森田組へ身柄が譲り渡され、元、女中であつた千代達が登場して、口では云い表されぬ淫虐な責めが待ち受けているという自分の運命を、この時の静子夫人は夢想だにしなかつたであらう。

その時は、ただもう桂子の危急を救いたい一心で、静子夫人は、血の出る程かたく唇を噛みしめ、眼を閉じ、フラフラとその場に跪いてしまつたのだ。

静子夫人が観念したと見た銀子は悦子に眼くばせし、うなずいた悦子は、口笛を吹きながら、マリや義子達と一緒に、がっくりと首を落して、両手で顔を覆い、シクシク泣き始めている静子夫人に近づいたのだ。

「フッフ、泣くのは素っ裸になつてからにして頂きたいわ、奥様」

悦子は、邪怪にそう云うと、艶やかな緋の長襦袢に覆われた、ふくよかな肩に手をかけて夫人を立ち上らせる。

「自分で脱ぐのは羞しいんですよ。だから手伝ってあげるのよ」

マリはガムを噛みながら、腰をかがめ、夫人の白足袋のコハゼを外し始める。二つの白足袋が取られて、品位のある細工物のような綺麗な足首を夫人が見せると、悦子は得体の知れぬ何かにまきこまれ出したような心ときめかして、長襦袢の伊達巻を解き始めた。

「うわ、いい匂いね。女の私だって、何だか変な気分になってくるわ」

義子が夫人の伊達巻をくるくる解かしていきながら夫人の身についた心も溶けるような高貴な甘い香料の匂いに酔いしびれている。

遂に伊達巻が解かれ、悦子が残忍な心を自分に向けかけるようにして、ぐいと長襦袢の襟にうしろから両手をかけて引っ剥がし始めた。

かたく眼を閉ざし、唇を噛んで、この屈辱をキリキリ耐えていた静子夫人の象牙色の頬にさっと羞恥の紅が走る。

「お、お願い、もうこれで許して——」

静子夫人は、更に悦子と義子の手が薄い肌

襦袢にかかると反射的に両手を胸のあたりで交錯させ、

「嫌っ、嫌です。こ、これ以上は、許して」

真っ赤に頬を染めながら、もじもじと身を揉み始めたが、

「約束が違うわよ。全部脱がなきゃまた桂子に蚯蚓腫れが出来る事になるんだからね」

近くに腕組みして立ち、着衣を略奪されていく美貌の人妻を面白そうに眺めていた銀子が吐き出すように云った。

「ああ——お願い」

静子夫人は、身をちぢめたが、笠にかかって悦子と義子は夫人にまといつき、肌襦袢の襟を大きくはだけさせてしまう。

骨の髄まで柔かそうな、乳白色の夫人の肩先が大きく露出し始めると、銀子と朱美も、衝動的に、悶え抜き鳴咽し続ける静子夫人の傍へつめ寄って、悦子達に手を貸し、遂に静子夫人の上半身を裸にむき上げてしまったのだ。

何と美しい見事な夫人の肉体であったか。

始めて、肌を見せた日の夫人の狼狽ぶりと、その成熟し切った、ミルク色に霞んだような夫人の優雅な裸身が、今の悦子の眼底にはっきりと焼きついている。

眼瞼にしみ入るばかりに白い艶のある胸元をぐっと削いだような深い谷間を作って、悩ましいばかりに盛上った二つの形のいい乳房を夫人は思わず両手で覆いながら、最後の肌身を隠すたった一枚の湯文字を守るようにして、その場へ身をちぢませたのだ。

「さ、勇気を出して、あと一枚じゃないの奥様」

銀子は、乳房を抱いて、身も世もあらず、上体を伏せて鳴咽している静子夫人のスペースに背中を指で突いて笑い、そのあたりに散乱している花のように色とりどりの衣類をかき集め出して、風呂敷に包み始めた。静子夫人を監禁した事を知らせるため、遠山家へ送りどけるわけだ。

「さ、奥様、ぐずぐずせず早く脱いで頂戴。それも一緒にして貴女の御主人の所へ送りとどけるのよ。フッフ、効果は百パーセント。御主人はびっくりして、私達の要求するあとの金額も吐き出して下さる事と思うわ」

銀子は、せせら笑って煙草を口に咥える。

悦子はマリと一緒に、心をそり立てるような優雅な曲線を描いて、その場に俯伏せるように体を曲げている静子夫人の左右へ身をかがめ、「早くお脱ぎしたら」「往生際が悪

いわよ、奥さん」とか云いながら、夫人の艶々した背を指で突き、催促するのであった。
「——あ、あんまりです。こ、これだけは絶対に嫌っ」

静子夫人は、美しい瞳にキラキラ涙を浮べ狂ったように首を振って哀泣するのだ。

舌打ちした悦子がマリと眼で合図し合い。一気に引き剥がそうとして、左右から同時に手をのばした。

「な、なにをするんですっ」

二人のスベ公の手が、いきなり、その紐にかかったので、かっと頭に血が上った静子夫人は、前後の見境もなく、マリの指先に歯を当てたのだ。

あっと指を押さえて、飛びはねるように体を離れたマリを見た悦子は、これも頭に血がのぼり、

「何をするんだよっ」

と、夫人の頬をピシヤリと平手打ちする。

美しい顔をひきつらせ、夫人は、齒を喰いしばったような表情で、悦子の顔を見た。眉毛を慄わせ、その切長の濡れた美しい瞳に憎悪をこめて、はつきりと敵意を示したものの夫人は今にも全身を大きく慄わせて号泣する一歩手前にあったのだ。

「おとなしく出りやつけ上りやがって」

朱美が吐き出すように云って、土間に落ちていた麻縄を拾い上げ、ずかずかと近づいて来る。

朱美の手にある麻縄を見て、再び、慄然とする静子夫人を銀子は小気味良さそうに眺めながら、再び、青竹を持つと、両手を吊られている桂子に近づいた。

「まだ、桂子の悲鳴が、聞き足りないようだね。いいわ、いくらでも聞かせてあげる」

よく見ていな、と銀子が舌なめずりするように桂子の白桃のような柔かい双臀めがけて青竹を振り上げると、夫人は、遂に、
「待って、——云う事を聞きます。」

と叫び、屈服したようがっくり首を落して号泣し始めたのである。

「よし。それじゃ、奥さんに縄をかけな」

夫人の抵抗を完全に封じるため、両手の自由を奪うよう銀子に命じられると、朱美は、手にした麻縄を肩にかけ、夫人の横へ膝を寄せた。

「さ、お手々を、しっかりと背中へ廻してごらん、奥様」

と、朱美は、両手を胸の上でX字型に交錯させるようにして、しっかりと乳房を抱いて

いる静子夫人の涙に濡れた綺麗な頬を指ではじく。

静子夫人は、涙に潤んだ瞳を哀願的にしばたきながら朱美を見て、唇を慄わせた。

「おっしゃる通りに、お腰も取ります。ですからお願い、もう縄をかけるような事はなさらないで——」

「駄目だよ。あんたの云う事は当てにならないからね。さ、早く手をうしろへ廻しな」

朱美は、いらいらした調子で云った。

「桂子の縛しめを解いてやって下さい。お願いです。そうすれば、私、私——」

静子夫人は、むせび泣きながら、ズベ公達に哀願をくり返すのだ。桂子は、夫の遠山隆義と先妻との間に出来た娘だが、身に代えても守らねばと夫人はすでにこの時、悲痛な決心をしたと思われる。

銀子は、それをあっさりと承諾して、桂子の両手首をつないでいる鎖を解き始めた。

やっと両手の自由を得た桂子は、そのままフラフラとよろめき、ぼったりと土間に両手をついてしまう。桂子の肉体は、肉感的で優美な曲線を持つ静子夫人とは対照的で、ガラス陶器のような繊細な肌をし、全体に細い線で取囲まれた華奢な体つきであったが、それ

だけに銀子達に加えられた青竹の折檻が、文字通り骨身にこたえるばかりの痛々しさとなつて、雪白の肌のあちこちに蚯蚓腫れを作っているのであった。

精も魂も尽き果てたようがつくり土間に体をくずした桂子を見た静子夫人は、思わず、

「桂子さんっ」

と、口走り、乳房を押さえたままの姿を立ち上らせようとする。

「おっと、待って頂戴。おっしゃる通り、桂子は鎖から解いてやったのだから、今度は奥様に約束を守って頂くわ」

朱美がうしろから、夫人のふくよかな肩に手をからませて、引き戻し、悦子やマリに眼くばせをして、麻縄をつかむと、乳房を必死に押さええている夫人の白い滑らかな両腕を背後へねじ曲げようとして懸命になり始める。

「ちよいと、何してんのよ。手に力を入れちゃ駄目じゃないか」

朱美が、頑かたくなになつて、乳房を押さえる手を離そうとしない夫人を叱咤し、三人がかりでようやく夫人の両腕を背後へねじ曲げると、艶々した大理石のように光沢のある背中の中程へ夫人の手首をX字に交錯させ、素早く麻縄をキリキリ巻きつかせ始めた。

「桂子さんっ、しっかりするのよ。きっと、パパが、貴女を救い出してくれるわ。ほんの少しの辛抱よ。わ、わかるわね、桂子さん」

静子夫人は、その美しい、成熟し切った乳房の上下へ、ヒシヒシと麻縄をかけられながら、半分は自分の碎け散りそうな心を励ませる気で、桂子に向かい声を張り上げたのである。

——今、廊下の壁に背を当てて、悦子は、その日の回想に胸を痛めているのだ。あの時夫人が、自分達不良少女の手で、キリキリ縄をかけられながら、血を吐くような思いで、桂子を叱咤するように励したあの言葉が今でも耳に聞こえてくる。母娘の関係とはいえ、二十一才の桂子と二十六才の静子夫人とは、まるで姉妹同然だ。それがあの場合には、実の母親のよう我身を犠牲にし、桂子を庇おうとして必死であった。いや、あの時だけではない。森田組へ身柄を移されてからでも、夫人は、桂子の危急を救おうとして、我が身をズタズタに引裂かれていったといえる。桂子を庇おうとする静子夫人の母性愛的な愛情を利用し、自分達は、静子夫人をズルズルと汚辱の世界へ引きずりこんで行ったのだ。しかも、最後には、静子夫人と桂子を女同士の

醜い関係にまで追いこんでしまった。あの百姓家の中で、着衣一切を剥ぎ取られた静子夫人は、今日に至るまで、身を隠す一切の布も遂に与えられぬまま、森田組の奴隷となり果て、人間性を喪失せんばかりの淫虐な調教をあゝの優雅な美しい肉体と世の汚れを知らぬ清純な心に日夜受ける事となつたのである。あの百姓家の中で魂も凍るような恐怖に直面した。とはいえ、夫人は、そのあと、自分の身にこのような修羅図が待ち受けているとは、神ならぬ身、想像もし得ない事であつたろう。悦子の脳裡には、遂に最後の楯を剥ぎ取られ、淫虐地獄への出発点に立たされた、未だ身も心も乙女のように清純そのものであつた静子夫人の最後の姿が、遠い絵物語のように再び浮かび上つて来るのであった——

——心をそそり立てるような見事な胸の隆起の上下へ数本の麻縄を巻きつかせ、ようやく夫人をきびしい後手に縛り上げた三人のズベ公達は、「さ、お立ち」と、夫人の肩や背に手を廻して、立ち上らせると、先程まで夫人をつないでいた大黒柱までもう一度夫人を押し立てて行くのだった。

邪怪に朱美の手で肩先を突かれた静子夫人が、ふらふらとよろめくと、折鶴を散らした

湯文字の裾が割れ、ミルク色の下肢があぶな絵のようにちりりとぞく。

「おっと、すばらしい指環をはめてるじやない。そいつはこっちへ頂いておくわ」

背中の中程で固く縛しめられている夫人の手首に眼をやった銀子は、その白魚のように華奢で繊細な夫人の指に小さなエメラルドの指環が光ってるのを見つけて、あわててかけ寄り、素早く抜き受った。

「あたいが最初から狙っていたんだけどね。姐さんに見つかったとあっちゃ、仕方がないわね」

夫人の縄尻を取っている朱美が舌を出して笑った。

「さ、その柱を背にして立つのよ」

悦子とマリは、静子夫人を大黒柱に押しつけてると、長い縄尻をたぐり合いながら、上背のある優美な夫人の肉体を、キリキリ柱へゆわえつけていく。がっくり首を落とし、小さく嗚咽しつづけている夫人の、若奥様風といった髪型に水々しく結い上げられている黒髪のやるせないばかりに、甘いすっぱい香料の匂いが、夫人をかつちりと柱へつないだ悦子達の鼻をくすぐるのだ。

「ヤレヤレ、随分と、骨を折らしてくれたわ

ね。美しい若奥様」

朱美は、からかうように、幾筋もの涙を線の美しい端正な頬へ流しつづけている静子夫人の顔を横からのぞきこむようにして云い、「煙草を一服つけるまで待ってね。それからゆっくり脱がせてあげるわ」

すると、マリも、朱美と同じように含み笑いしながら、シクシク泣いている夫人の耳もとに口を近づけ

「それから、皆んなでくわしく拝見させて頂くわ。フフフ、あたい達、一度、上流階級、貴婦人のそれをゆっくり観賞してみたかったのよ」

マリも悦子も朱美も銀子も声を合わせて哄笑した。

「ね、ね、みんな」

と、銀子はクスクス笑いながら、女愚連隊を自分の周りに集め、

「一度に引つ剝がすのは面白味がないわ。大家の若奥様が少々頭に来るように、皆んなで一つからかってやろうじゃないの」

銀子は、不良少女達とヒソヒソ相談し、ニヤニヤしながら、彼女達と一緒に、慄える頬に大粒の涙をこぼしている静子夫人の周囲を取巻くのだった。

「じゃ奥様、いいわね。観念して頂戴」

マリが夫人の前にかがみこんで、ゆっくりと紐を解き始めた。

ああーと、静子夫人は、頸も顔も火のように真っ赤に染め、ねじるように泣き濡れた美しい顔をそむけ世にも哀しげな表情をする。

マリは、解いたのではなく、紐をゆるめただけで、それを待ち受けていた銀子と朱美が両方から手を持ちそえるようにして、ズルズルと、引き下げ、夫人の可愛い臍の凹みをはっきりと露出させる。

「まあ、可愛いお臍なこと」

ズベ公達は、顔を見合せて、どっと笑い、

次に正面に身を沈めているマリが、両手で湯文字の裾を引き裂くようにさっと左右へ割ると、その一方の裾をつかんだ悦子が力一杯上へ引き上げた。官能味たっぷりに大きく盛り上った尻の中程に辛じて支えられ、落下するのを防いでいる紐に悦子は、つかみ上げた裾をはさんだのである。白雪を溶かしたよう妖しいばかりに艶やかな、ムッチリした夫人の一方の太腿が、ほとんど付根のあたりまで露出したのだ。

「ひゃー、お色気満点。すばらしいスタイルよ。若奥様」

マリが頓狂な声を出して、笑いこける。毛穴から血を吐くような屈辱感に、静子夫人は、ブルブル頬を震わせて、哀泣し始めたが、

「さすがは育ちのいい大家の令夫人ね。下には何もおはきになっていらっしやらないようだね。正に大和撫子！」

と銀子が笑い、つづいて朱美が横手から夫人の腰を眺めて、「でもさ、お尻の方を半分丸出し、随分とだらしない大和撫子ね」と嘲笑する。

夫人が露出するのを最も辛く感じる部分はわざと紙一重のところ、ギリギリに覆い隠させ、ズベ公達は、こうして一寸試し五分試しに夫人を羞恥にのたうたせ、楽しんでゐるのだ。

「もう少し、肌を出して頂こうじゃないの」女愚連隊は、落下寸前の姿にされ、羞恥に全身を火柱のようにさせて悶え泣く静子夫人を充分に賞味してから、再び、夫人に寄りかかり、ゆっくりとずり下げて行く。

「あっああ——」

静子夫人は、全身にズベ公達の手がからみつき、銀子と朱美の手で、それが再び、ジワジワと引きおろされて行くと、全身を総毛立

てたようにひきつらせ、切れ切れの悲鳴を上げるのだ。こんな辛い思いを味あわされる位なら、さっぱりと剥ぎとられ、悪女達の嘲笑と揶揄をたたきつけられた方が、どれ程ましかと夫人は痛切に感じた事だろう。

「フフフ、じれったいでしょうけれど、今日から奥さんは、当分、素っ裸で暮さなきゃならない。だから充分、お名残りを惜しませてあげているのよ」

少しでも、身を揺すれば、それは落花微塵に足元へ落下するギリギリの所までずらし、一呼吸を入れるズベ公達。

「くしゃみでもすりゃ、すぐにおっこちちゃうよ。気をつけな」

などと云って、ズベ公達は、キャッキョウ笑い合いながら、右や左から、夫人の胸の豊かな隆起を揺さぶったり、その上のつつましかな薄紅色の乳頭をつまみ上げたりして、夫人の身悶えを無理じいしようとする。

「な、なにをなさるんですっ」

静子夫人は、そうした、いたぶりに耐え切れず、思わず激しい怒りの声を発したが、瞬間、アッと小さく声を上げ、下半身をくねらせ、その落下を辛じて支えたのであった。悲痛と口惜しさに歯がみして、乳白色の美し

い肩を慄わせる静子夫人の世にも哀しげな表情を頼もしげに眺めていた銀子は、

「フフフ、どうやら充分に、この湯文字とお名残りを惜しんだようね。じゃ、さっぱりと脱がせてあげるわ」

折鶴散らしの品のいい湯文字は、しどろに乱れてゆるみ切り、夫人の豊かな尻のまろみにようやく支えられて落下を免れていたが、銀子とマリが、その紐に再び手をかけて今度は完全に、そして、ゆっくりと解き出した。

静子夫人は、火のように上気した美しい顔を嫌々をするように打ち振りながら、身を守る最後の楯を略奪される戦慄に、ブルブルと全身を痙攣させる。

そんな静子夫人の熱い耳たぶに朱美は、わざと甘えかかるように鼻をすり寄せたりして「駄目、駄目、そんなに羞しがっちゃ。××××を見られる事ぐらい、どうって事はないじゃないの」

と云い、クスクス笑うのだった。

遂に、それが夫人の腰より取除かれると、全身を火柱と燃え立たせた静子夫人は、まるで魂まで充血させたよう、息苦しいばかりにムッチリと引き緊まった優美な太腿を反射的にぴったりと閉じ合わせる。そして美しくセ

ツトされた黒髪を慄わせた夫人は顔をそらせ、薄絹を揺するような繊細なすすり泣きを唇から洩らすのだった。

「畜生、何て、綺麗な体してやがるんだろ。こっちの方が少し頭に来ちゃったよ」

マリがペツと口からガムを吐き出して、何一つ覆うものもなくなった夫人のたくましいばかりに均整のとれた美しい肉体を凝視して云った。

麻縄をきびしく上下へ巻きつかせ、こと更に豊満に見せている乳房といい、滑かな鳩尾といい、絹餅のようにふくらとした柔らかそうな腹部といい、全体に艶々とした脂肪を乗り切らせ、はち切れるように柔い肉を盛り上げた太腿から下肢に至るまでは、白磁の美術品のような乳白色にきらめいている。とりわけズベ公達が一せいに凝視し始めたそれは、柔らかそうな纖毛でふくらと盛り上り、気も遠くなる程の幽玄的な淡い美しい翳をつくっているのだ。

「これが貴婦人、遠山静子の女性自身というわけね。さすがは大家の若奥様らしく、いい艶を出しているわ」

銀子は、朱美達と夫人の足元へ忍び寄るようにして進み、フンフンと面白そうにうなず

きながら、眼を近づけ合って行く。

静子夫人は二十六才のいわば女盛り、そして人妻であるとはいえ、その夫婦生活はまだ三月のつまり新妻なのだ。性のうずきや悦びを感知する所まで到達しているとは考えられず、それを訴えるような微妙なつましさに覆われた淡い翳を持つふくらみであった。が、それを凝視する銀子達も、やがて、それが、鬼源達の調教のもと、果物を寸断し、生卵を呑み、筆を咥え、様々な珍芸を披露し得るものになるまで変貌するとは、夢にも想像しなかったのである。まして、この処女のように身も世もあらず、羞恥にむせび泣く深窓に育った美貌の令夫人が――。

静子夫人は、その優雅な頬の線を一層上気させ、固く眼を閉ざしたまま、不良少女達の喰い入るような視線に耐えていたが、朱美がクスクス笑いながら、

「ね、若奥様、まるで美術品みたいにお美しいのをお持ちなんです、私、妬けて来ちゃったのよ。ね、いいでしょ。一寸、いじめさせて下さない」

と云い、そっと指をのばして来たのでアツと火にでも触れたように身を揺すり、突風のような怒りと口惜しさに柳眉を上げたのだ。

「な、なにをなさるんです。貴女達は、そ、それでも女なのですかっ」

興奮して、わなわな唇を震わせ、憤怒と悲痛の折り混った凄惨なばかりの美しい瞳で、夫人は朱実を見据えたのだ。

出鼻をくじかれた朱美は、「フン、学校の先生みたいな口をきくねえ」とふてくされ、夫人の足下に落ちてゐる湯文字を手にし、怒ったようにうしろへ投げ捨てる。

銀子が口をとがらして、
「ちよいと、若奥様。あんた、そんなものまで丸出しにして、随分、えらそうな口がきけるわね」

と云い、邪怪に夫人の頬をぐいと指で突いたが、夫人は、眼に一杯の涙を浮かべながらも、齒を喰いしばった表情になって、はじき返すように云うのだった。

「貴女達のおっしゃる通り、静子は、こ、このような羞しい姿になったのです。これ以上静子に淫らな真似をなさると、ゆ、ゆるしませんっ」

ゆるしませんだと言、ズベ公達は、顔を見合わせて、どっと笑った。

「こっちも許せないよ。お前さんの貴族ぶった生意気なものの云い草がね」

銀子が青竹を取った。自分を殴打するのかと静子夫人は、唇を噛み、全身を針のように緊張させたが、身心共に疲労して土間に俯伏している桂子の傍へ、銀子は再び向かおうとする。

「待って。私が悪かったわ。もう生意気な事は申しません。ですから、お願いっ、もう桂子をおつただけはやめて下さいっ」

静子夫人は、我を忘れて、悲鳴に似た声をはり上げた。

何かといえば、すぐに桂子をムチ打とうとする銀子に対して、静子夫人は、遂に心底から血を吐く思いで哀願したのである。

「よし、じゃ、二度と私達を見下したようなものの云い方はしないと誓うんだね」

「ハイ」

「あんたが人質でいる限り、私達はあんたの御主人様なのよ。少し位、朱美にいたずらされたって、ガタガタ云うんじゃないさ」

と、静子夫人に浴びせる銀子であったが、夫人を人質にして、この百姓屋に監禁しておくのは、二三日ぐらい。あとは、遠山家に住みこんでいる運転手の川田と共謀して、夫人の身柄を森田組に引渡す魂胆であったのだ。「天下の葉桜団員に対して生意気な口をきい

た詫びを、この奥様に入れさせなよ、銀子姐さん」

朱美は、先程、静子夫人に突風のような勢で口返答された事が口惜しくてならず、銀子の肩をたたいて云う。すると、先程、腰のものを剥ぎ取ろうとして、静子夫人に小指を噛まれたマリも、

「ね、銀子姐さん、朱実姐さんの云う通り、この糞生意気な女に、一つヤキ入れるべきだわ。美人だと思って、やにお高く止ってやる。ね、こいつがあるから、葉桜団万才をやらせちゃどう」

マリは、ポケットから、木製の洗濯バサミを出し、ニーと歯を見せた。

それを見ると、銀子も朱美も、プーと吹き出す。

「面白いわ。やらせよう」

銀子は、何か身に危険が迫って来たのを察知して、おろおろし始めた静子夫人の表情を口元を歪め、悪魔のような微笑をして、しげしげと見つめるのだった。

「フフフ、美しい若奥様。皆んなもああ云うから、一応、私達に詫びを入れて頂くわ」
「な、なにを、なさろうというのです」

静子夫人は、銀子や朱美やマリ達の、何か

企みが隠されているような陰惨な微笑を見ると、ぞっと総気立つ思いになり、ぶるぶる肩先を震わせるのであった。

「さ、どう云ったらいいんだらうね。フフフあたいは羞しくて云えないわ。一寸、マリあんた、この奥様に教えてあげなよ」

朱美に肩をたたかれたマリは、あいよ、と硬化した表情をつづけている静子夫人の肩に片手をかけ、木製のハサミを夫人の高貴な線を持つ夫人の鼻先へ近づけていく。

それで鼻の頭を挟む気だと直感した静子夫人は、反射的にさっと顔を横へそらせた。

「これでつまみ上げられた所をピクピク動かして、あたい達がよしと云うまで、奥さんは葉桜団万才と大きな声を出しつづけるのよ。フフフ、でも感違いないで。そんな美しいお鼻をつまんで、傷跡なんかつけたりはしないから」

マリは、含み笑いしながら、洗濯バサミを夫人のふるいつきたい程、甘美な匂いに包まれている薄紅色の乳頭へ近づける。

静子夫人は、優雅で繊細な頬をバラ色に染めて、苦しげに眉を八の字に寄せた。花のような唇をわなわなさせて、思わず、ブルッと優美な肉体を震わせる夫人の横顔をマリはク

スクス笑って見つめながら、
「早合点しないでね。あたい達が狙っているのは、もっと愉快な所よ。そう云えば、もうおわかりでしょ。さあ、あと女がこれでつまみ上げられるのは、どこと思う。ねえ、美しい若奥様」

マリは夫人の柔軟なミルク色の肌にまといつくようにして陰温な微笑を口元に浮かべ、腕組みしてそれを眺めている銀子や朱美も、顔を見合わして、自分達の間にしか通じない秘密を楽しみ合うかのようニヤリとするのであった。

静子夫人は、ぞっとするような淫靡な空気が周囲に垂れこめて来たのを感知し、嫌悪の戦慄を身内に走らせ、本能的にぴったりと腿を閉じ合わせるのだった。

「ねえ、わからないの、奥様、フッフ」

「わ、わかりませんわ。一体、何をなさろうというのです」

「まあ、奥様って、おとぼけがうまいのね。カマトトぶりも、いい加減におよしよ」

土間に落ちている別の麻縄を取上げ、マリは、静子夫人の下肢を柱に縛りつけようとする。銀子も朱美も悦子も、揃ってそれを手伝い始める。

「ね、ね、一体、何を、何をなさろうというのっ」

ズベ公達は、狼狽して必死に身をうねらせる夫人の陶器のように白い脛にどす黒い麻縄をキリキリ巻きつかせて、柱に固定すると、更に、その官能味を湛えて豊かに引き緊まった太腿へも、二巻三巻きと縄を巻きつけさせている。

「自分の男を寝取られた場合、あたい達が仲間に加える私刑なのよ。参考のため、奥さんにも教えておいてあげるわ」

と、銀子が云うと、朱美が、両肢をぴたり、柱に縛りつけられた静子夫人を満足げにしげしげと見つめて、

「さ、もうそれで暴れようにも暴れられないわね。フッフ、一寸、羞しいだろうけど辛抱するのよ。——悦子、あんた、器用だから、つまみ出して、ハサミをはさんでやんな」

「OK。任しておおき」

悦子は、残忍な心を自分に煽り立て、マリから洗濯バサミを受取った。

「あっ」と、悦子が夫人の肢元に身をかがめると、夫人は、全身の血を逆流させて、つんざくような悲鳴をあげた。

「な、なんて事をっ。あっ、後生です、やめ

って、そんな事はやめてっ」

——捕われの身となった静子夫人が始めて葉桜団に受けた汚辱の試練——それを、今、悦子は、廊下の壁に背を当てながら、悪夢にうなされたように思い起しているのだ。

——あんなひどい事を私は静子夫人にしてしまったのだ。夫人の肉と心に、拭い去る事の出来ない息の根も止まるような汚辱を最初の日、私は与えてしまったのだ——。

急に頭へかっと血がのぼった悦子は、耐え切れない思いになって、両手で頭をかかえ、壁に、額を押しつけて嗚咽し始めた。

柱に、優美な肉体をがんじがらめに縛りつけられ、私の手で、それをまさぐり始められた時の夫人の魂を打砕かれるような恐怖と戦慄のうめき、上ずった声で、切れ切れにくり返す哀願。しかし、遂に、とりつけられて、美しい曲線を描く量感のある腰をモジモジ揺り動かし、火のような涕泣を発しながら、葉桜団万才を口にしないでなくてはならなくなった、美貌の令夫人——。

しかし、悦子は、そんな時の静子夫人が、ふと懐しくもあった。あれから夫人は、鬼源の地獄の調教を受け、肉も心も、悪魔に順応させられて、現在、大広間の中で、卑劣な男

や女達に取囲まれ、この世のものではないような、まるで畜生に等しい実演を行なっているのだ。

急に会場の方に大きなどよめきがまき起り悦子は、はっとした。

男達の嘲笑、女達の嬌声が相ついで起り、そうした中に静子夫人の今までに幾度となく聞き馴れている薄絹を震わせるようなすすり泣きが聞こえるようであった。

やがて、ドアが開き、千代が川田や田代達と何か楽しげに語らいながら、晴れ晴れした表情で出て来たのだ。ペソをかいたような顔をして突っ立っている悦子を見た川田は、「何でえ悦子、こんな所で何してるんだ」

「静子、静子夫人は？」

悦子は、怒ったような顔をして川田達を見る。

「ようやく今、終わったところさ。あの可愛い唇と舌で捨太郎を丸一時間しゃぶり抜いたんだからな。ありゃいい夫婦になるぜ」

川田がそう云って笑うと、田代も、大鼓腹を揺すりながら、

「これから十五分間休憩。今度はお客人の好む体位を取りながら、捨太郎の愛情を体で受けるというわけだ。捨太郎がうまく種を植え

☆奇クサロン ☆原稿募集

一、大好評の『奇クサロン』の掲載に適した短文、写真、絵画を求めます。

一、内容は本誌の編集方針にふさわしいもので、寄稿家編集者執筆者に対する呼びかけ、読後感、感想、批評、映画鑑賞、短信往来、SM時評、図書雑誌紹介、見聞記、詩、歌、川柳、漫画、諷刺、などなど。

一、投稿には必ず「奇クサロン原稿」と明記して下さい。誌上の匿名は御自由ですからペンネーム(筆名)を添記して下さい。

一、採用の可否に拘らず応募下さった方全員に対して編集部作成のフォトを贈呈いたします。贈呈フォトの枚数は作品の出来に従って増減いたします故御承知下さい。

一、誌上に掲載しました作品に対しては

つけてくれりゃいいがな。な、千代夫人」

千代の気嫌をうかがうようにして云う。

千代は世にも嬉しそうな顔をしたり、何か思い出し笑いをしたりしながら、

「この屋敷へ来て、今夜は一番、私にとっては楽しい夜でしたわ。捨太郎にいきなり御馳走された時の静子の顔ったらなかったわ。ホホ」

枚数に応じて稿料又は謝礼を呈します。

一、安井喜久子夫人が夫婦プレイの緊縛アイデアを募っておられますから、同好の方は御遠慮なく編集部気付にて御投稿下さい。投稿者全員に対して喜久子夫人のプレイフォトを贈呈いたします。アイデアの参考には、四月号の「安井喜久子夫人を訪ねて」(ASM-10)問Vをお読み下さい。

一、奇クサロンに掲載可能な絵画、写真、映画スチール、イラスト、漫画などに対しても応募者全員に編集部作成のフォトを贈呈いたします。優秀な作品は誌上に発表の上、画料をお支払い致します。

一、編集参考資料の提供に対しましては、出来るだけ高価に購入したいと思しますので、お手放し可能の方は内容の詳細に希望価格を附してお申込み下されば、折返しお返事差し上げます。

悦子は、それを聞くと、ぐっと怒りを飲みこみ、突風のように台所へ走った。

コップに水をくみ、洗面器を小脇に抱えと、一目散に大広間の会場へと走ったのである。一刻も早く静子夫人に、うがいさせてやり嘔吐を洗面器へ吐き出させてやりたかったのだ。

(未完)

稿談性風俗資料入門

(補遺)

犯罪科学の頃 (続き)

斎藤夜居

この時代は一口に「エロ・グロ・ナンセンス」とよばれている。昭和五年末には時の内閣の浜口首相が狙撃されたり、翌昭和六年になると、三月に軍部のクーデター未遂があり六月には満州で中村大尉が殺され、柳条溝事件が続き、とうとう満州事変が始り、それから先の日本は只戦争一途に突っぱしってしまふのだが、庶民生活の上にも暗雲がかぶさり、こんにち謂うような自由な明るい「エロ」を意味するものではなく、エロ・グロ・ナンセンスとは云っては見たものの、当年のインテリ・ゲンチァの実生活の逃避の場を求めていたに過ぎなかった、というのが昭和史に於ける人文科学研究の結果的解釈だとされている。

風俗出版の面から見ても、堅実なことでは定評のある新潮社ですら『現代猟奇尖端図鑑』(昭和6・4)というキワ物を刊行している。この書はエロチック、グロテスク、ナ

ンセンス、レビュー、奇観、スポーツ、尖端ポーズ、珍奇、の項に分けた写真集で、やたらと裸体写真(外国種)を入れたりして、我國の代表的出版社すらこういう物を出さざるを得なかった時代でもあった。

従ってエロ・グロの軟派がかった出版と云っても、もう以前のように趣味家くずれの珍書屋の道楽出版では読者がついて来なくなってしまう。いちいち案内状を送って古臭い殺し文句ばかり並べ立て、読者を探し廻るようなことでは追いつかない時代で、八企業として資力のある出版社が大量生産に乗り出してきては、発禁承知の上での珍文献の頒布などという児戯に類する行為が容れられるものではなかった。また出版界は円本が流行して、千頁もある全集本が一冊一円というのに、百頁そこそこの猟奇雑誌を作ったとしても、一般の風潮からしてとても売物にはならなくなってしまう。雑誌『犯罪科学』が十

刷までも売れたことは、この頃の空気とマニヤのみならず一般読者の好みと合致するものがあつたからだ。そして、大衆相手の企業である以上はげしい競争と模倣されることは絶対に避けられない。

『犯罪公論』(創刊昭和6・9)や『犯罪実話』、『実話時代』、『犯罪科学研究』などというのも出てまったく混戦状態になり、本家の犯罪科学そのものの質からしてしだいに低下して、編輯者自体が類似雑誌社を転々と移動したりして、いつのまにやらジャーナリズムの中の一分野としての立場を樹立して行く……。原稿執筆者もだんだん道楽半分の旦那衆は姿を消して、学者や専門家が本気になる研究を発表するから実の入った記事が多くなり、読者側の眼もしだいに肥えてくるのである。

以上が犯罪科学の頃の特徴で、やがて帝国主義の軍事色が濃くなる頃、いつどうしてと

いうこともなく風俗臭のつよい雑誌は姿を消して行った。

犯罪科学の武俠社では『性科学全集』全十

総天然色美女緊縛極鮮明写真

柱縛り強烈ムチ打ち	三枚一組	略号△みあ▽	関谷富佐子
臀部に炸裂するムチ	三枚一組	略号△みこ▽	関谷富佐子
ムチにのける女体	三枚一組	略号△みけ▽	関谷富佐子
苦悶する女の表情	三枚一組	略号△みて▽	関谷富佐子
鞭に泣く美貌の女	三枚一組	略号△みも▽	関谷富佐子
転がり回って泣く女	三枚一組	略号△みひ▽	関谷富佐子
鞭に喘ぐ全身の表情	三枚一組	略号△みの▽	関谷富佐子
高小手の全裸身	三枚一組	略号△なゆ▽	中河恵子
豆絞りに輝く美貌	三枚一組	略号△なめ▽	中河恵子
赤い絨氈に悶える	三枚一組	略号△なさ▽	中河恵子
豊満な臀部を晒す	三枚一組	略号△なし▽	中河恵子
美しき緊縛の立像	三枚一組	略号△なひ▽	左近麻里子
転落寸前の緊縛女体	三枚一組	略号△なも▽	左近麻里子
椅子に羞らう美女	三枚一組	略号△なす▽	左近麻里子

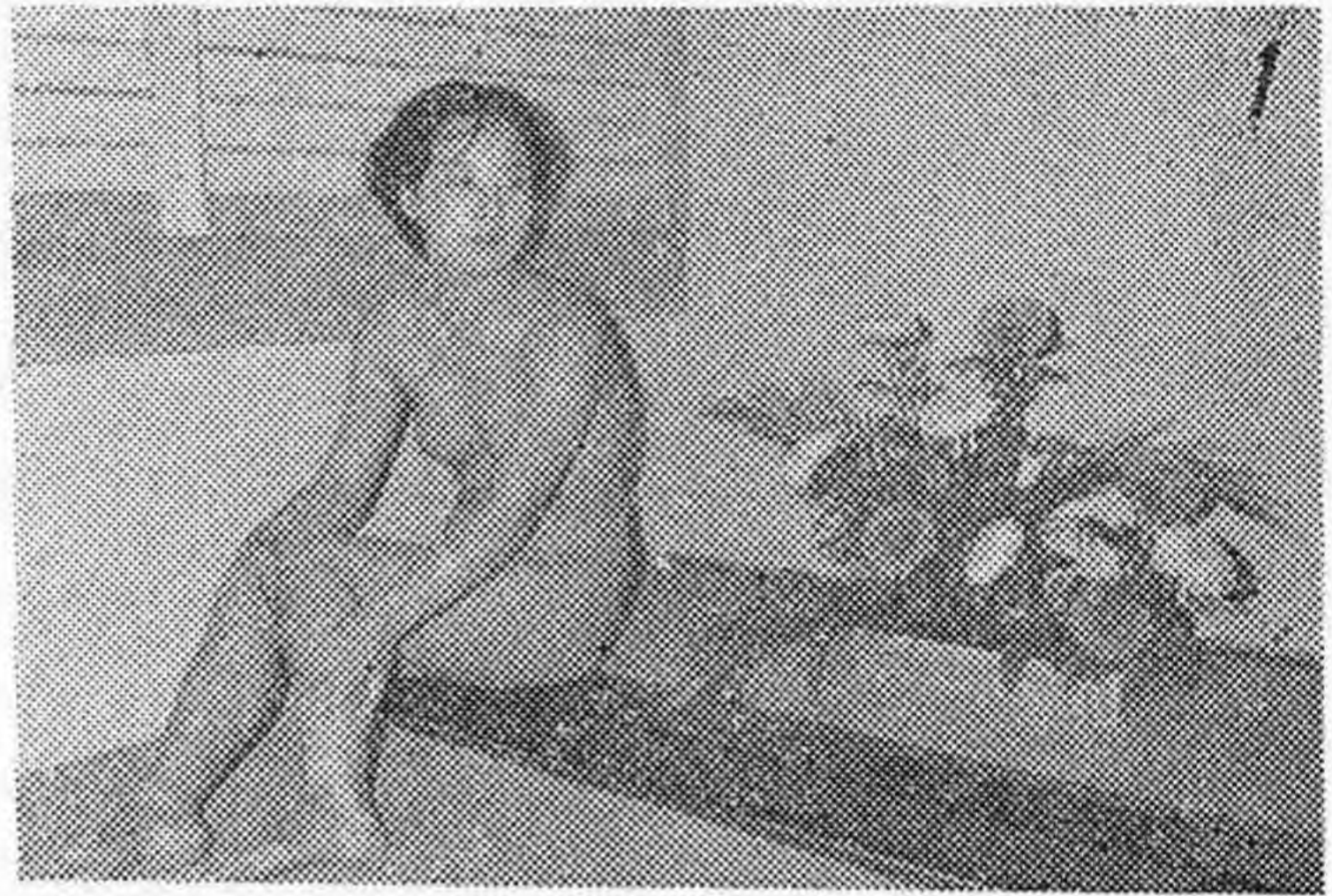
二巻を発行完結した。ただし当時のことであるから、名称と内容とそぐわぬもので、伏字ばかり多くて、宣伝文句にあった「性科学の

緊縛裸身を横たえる	三枚一組	略号△なえ▽	左近麻里子
湖畔砂上の四つ相撲	三枚一組	略号△うに▽	大塚・東浦
大自然の中で取組む	六枚一組	略号△うひ▽	大塚・東浦
吊りと投げの応酬	六枚一組	略号△うと▽	大塚・東浦
砂まみれの大相撲	六枚一組	略号△うち▽	大塚・東浦
極彩色の刺青女体	三枚一組	略号△ゆき▽	山原清子
華麗な刺青絵模様	三枚一組	略号△ゆこ▽	山原清子
全裸の刺青女体	三枚一組	略号△ゆし▽	山原清子
刺青女体の奔放姿態	三枚一組	略号△ゆた▽	山原清子
三面鏡に映す刺青肌	三枚一組	略号△ゆて▽	山原清子
化粧中の全裸刺青女	三枚一組	略号△ゆそ▽	山原清子
刺青の豊臂をさらす	三枚一組	略号△ゆち▽	山原清子
大鏡に写す刺青全裸	三枚一組	略号△ゆと▽	山原清子
刺青女性前面の魅力	三枚一組	略号△ゆせ▽	山原清子
刺青女性の全貌を曝く	三枚一組	略号△ゆさ▽	山原清子

宝典”には程遠いものだった。ご参考までに書名と著者名のみ次に掲げる。

- 1 世界艶笑芸術 丸木砂土。
 - 2 性と生命 石川千代松。
 - 3 世界性的風俗史 矢口達。
 - 4 近代文化と性生活 杉田直樹。
 - 5 生物界の両性生活 横山桐郎。
 - 6 産児調節の理論と実際 馬島個。
 - 7 人類性文化史 西村真次。
 - 8 人性医学 正木不如丘。
 - 9 変態性慾考 高田義一郎。
 - 10 性慾の科学 富士川游。
 - 11 恋愛の史的考察 石原純。
 - 12 吸血妖魅考 日夏耿之助。
- またほかに本誌別巻として大判の『異状風俗資料研究号』（昭和6・6）と、ハッカアド著巴陵宣祐訳の限定出版『古代医術と分娩考』があった。
- (完)

◇ ◇ ◇
 ながらくご愛読戴きました拙稿をこれで終ります。ご再読の場合には、昭和42年9月10月、4月、7月、8月、昭和43年2月、3月、4月、昭和42年5月、6月、11月、12月、という順にご覧くだされば一貫した流れが汲みとれるかと存じます。
 今後は一篇読切の珍書の紹介などさせて頂きたいと思つて居ります。貴重な誌面をご割愛くださった箕田編集長に心より厚く御礼申上げる次第です。又、個人的に書信をお寄せ下さった各位にも深謝いたします。



カメラルポ

「この女と」

△長井ハツコの巻▽

山本一章

ものではないと思う。

○

私が今年になって先ずルポの対象にと選んだのは、三月号の誌上に告白を載せられた金

原奈加子さんであった。自称十九才という若

さと快活そうなフオトに意欲をそそられた私

は、強引に箕田編集長から連絡方法を聞き出

し、新春第一号のルポをものすべく彼女に連

絡した。しかしその結果は完全な空振りに終

って、苦い自嘲だけが残ることとなった。私

は四回の待呆けを経験させられたのである。

彼女に止むを得ない支障が生じたのだと信じ

たいのだが……。勿論私は彼女を諦めてはい

ない。四月号に再び縄を纏った裸身を現わし

た金原奈加子さんに、いつか必ず私の縄も纏

って貰わねばならない。そんな時に箕田編集

長から声が掛った。

「長井さんに会ってみませんか？」

彼がこう切り出したのには、金原さんで空

振り続けた私への思いやりの気持があった

のであろう。勿論、大人の彼は感情を言葉に

せず淡々と続ける。

「今月号に載っている懸賞作品の長井葉津子

さんですよ。『白い肌のアザ』っていうのが

あったでしょう」

「あー、あの人のことですか……」

一身上の都合に加えてルポの女性にめぐり
合えず、不本意ながらこのルポをしばらく休
んでしまった。それにつけても、一回の休み
もなく毎月カメラハントを発表される辻村隆
氏の精力と努力には兜を脱ぐばかりである。
実際毎月毎月、異った女性をハントして行く
ということとは容易なことではなく、この道に
対する執念のようなものがなければ到底続く

正直云って発売間もない四月号を私は未だよく目を通していなかった。しかし、その題名と挿入された若い顔写真だけは記憶にあった。

「彼女は全くの未知数で縛りの経験もないよ。うだから、どうなるかわからないが一つ当たてみますか？ 実は明日初めて会うことになっているんで、代りに行って見たら？」

有難い先輩である。ここまでお膳立てされて辟易することはない。男一匹当って砕けるのである。私は彼女と会う場所と時間を聞いて編集室を辞した。正に勇躍といった足どりであつた。

○

翌日は寒波襲来とかで朝から雪がちらつく寒い日だった。二月下旬のことである。新聞は寸又峡温泉の人質籠城事件の記事を一面に掲げていた。

私は定刻の午後一時、梅田の喫茶店の扉を押した。時間が早いからかそれとも寒さのせいか客は少なかった。一階の奥に腰を降ろしてあたりを見廻す。女一人の客はいない。私は長井さんを雑誌に載った顔でしか知らないし、彼女も箕田編集長すら知らないのだからうまく会えるかどうか甚だ心もとないことである。

ある。ドアが開く度に初めてのデートをする若者のように胸がドキドキと躍る。心臓に良くないだろうなと考えると、我ながらおかしくなってくる。三回目にドアが開いた時、私は来たなと直感した。二人連れの若い女性である。その一人がまぎれもなく長井葉津子さんの顔である。真赤な横縞の入った派手なセーターを着ている。二人はキョロキョロあたりを探しながら奥へ入って来た。私は思わず立ち上って声を掛ける。

「長井さんでしょうか？」

「ええ、箕田さん？」

「いや、僕、山本って云うんですが。まあどうぞ掛けて下さい」

我ながらぎこちないことである。二人は全く若い。私には女性の年令がよくわからないが、恐らく二十才そこそこ、いや十七、八才にすら見えてくる。二人は互いに顔を見合わしてぐすっと笑うと、私の前に腰を降ろした。

「箕田さん、都合が悪くて来れないんで、代りに来たんです。悪い？」

（編集長よ。この程度の嘘はお許しあれ）

「構わないけど……。山本さんって一章さんかしら？」

長井さんは、じっと私の顔を見つめる。私の名前まで知っているとはオドロキである。「ハツコ、もういいわネ？ わたし帰るわ」連れの可愛い娘が立ち上る。

「一緒に構いませんよ。まあそう急がなくてもいいでしょう。何か注文しますから」

「ケイコ、どうする？」

長井さんの言葉で、連れの彼女が『白い肌のアザ』に書かれていた長井さんの友達であることがわかった。

「いいわ。わたしもデートがあるから。おじさん、ハツコは温順しいから、あまりいじめちゃ駄目よ。じゃサヨナラ」

ケイコは、あっさり出て行ってしまった。

私の本心は、彼女とも少し話をしたかったのだが。

一対一になって少し気持ちに余裕ができた。

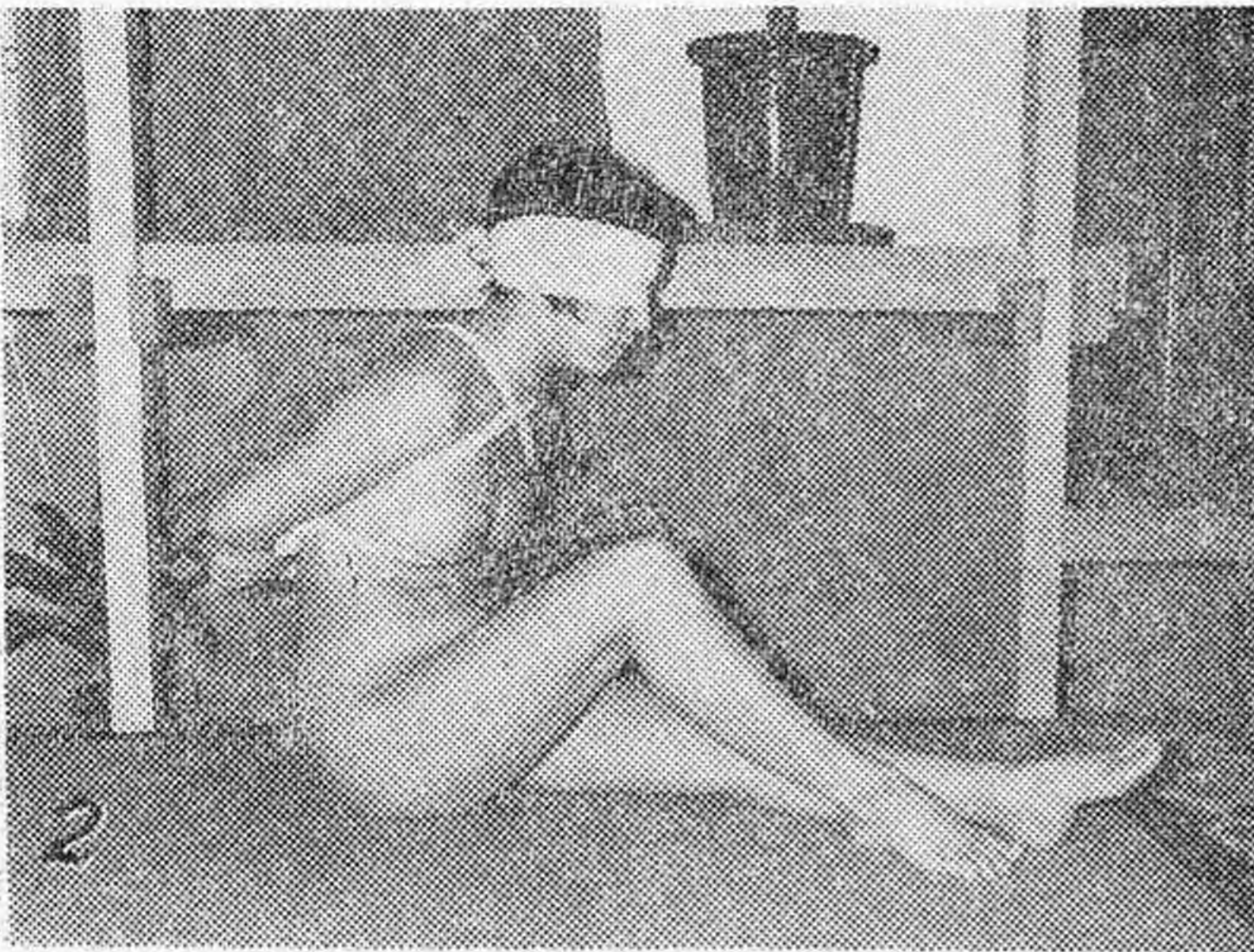
しかしコーヒーとケーキを注文した私は、何から話をしたらいいのか戸惑ってしまった。

「山本さんって思ってたより若いのね」

「ああ、そりゃ、どうも有難う。雑誌は読むの？」

「奇クのことでしょう。隅から隅までってことないけど、時たまね」

「四月号の告白じゃ、一度縛られてみたいよ



うなことが書いてあったけど、本気？」
 「男の人にいじめられるって、ちょっと怖い
 ような気持ちがするけど……。わたしって好奇
 心が強いよね。今日は決心して来たんだけ
 ど……」

「僕じゃいや？」
 「別にいやじゃないけど、困ったなあ」

大いに脈ありである。しかし余り若過ぎて
 どうも世代が違い過ぎている感じである。

「聞いちゃ悪いかな」

「なに？」

「何年生れ？」

「おじさん、レディに年を聞くのはどうかし
 らう？」

一本参ったというところである。どうも先
 手をとられてる感じで形なしである。

「勿論昭和の二桁よ。それでいいでしょう」

それから小一時間、とりとめのない話を続
 けたが、終始主導権は彼女にあったようであ
 る。

「山本さん、いいわ。思い切るわ。そうでな
 いと後悔するに決ってるから」

長井さんは私のプレイへの誘いに、こう結
 論した。どうやら外堀が埋められたわけであ
 る。

「でも変なことはいらないでね。それに余りき
 ついと泣いちゃうかもしれないわ」

善(?)は急げである。彼女がその気にな
 っているタイミングを外してはならない。私
 は伝票を手にして黙って席を立った。彼女が
 必ず随いて来ることを意識していた。

娘程も年の違う長井さんとのアベックは、

どうも面映ゆくて、行きつけの料亭へ車を横
 づけしてから女中への弁解も、我ながら不
 自然だったようである。昼間のことで空いて
 いたし、初めての女中であつたことも助かつ
 た。離れ座敷へ通され、夕食までこみ入った
 話をするからということの人払いをした。女
 中は表情を変えず、部屋の横手にある家族風
 呂に湯を入れて置きますから、どうぞと云っ
 ただけで出て行った。

「さあ、先にお風呂へ入ったら？」

「ええ、でも……」

「遠慮することないから行っておいでよ」

長井さんは、先程までの快活さが嘘のよう
 にもじもじした。矢張り若さであろう。

「早く入ってきなさいよ」

私は彼女を無視してバッグを引き寄せ、カ
 メラの用意にとり掛る。長井さんはしばらく
 私の準備を見ていたが、やっと決心したのか
 部屋を出て行った。私は思わず顔をほころば
 した。女中が置いて行ったタオルは、テーブ
 ルの上に載ったままである。しばらく待って
 みたが戻って来そうにないので、その一枚を
 手にして立った。家族風呂は最近増築したら
 しく新しくて広かった。戸を開けて脱衣室に

入ってみたがもう長井さんの姿はなく、箆の中に脱がれた衣類が妙になまめかしかった。浴室で湯の音が聞こえる。私は浴室のドアを開ける。

「長井さん、タオル持って来てあげたよ」

「ヒャーッ、見たらいや!」

湯気の中の裸身は、急にしゃがんで私に背を向ける。彼女どうやらタオルがないのでハンカチを持って入ったようである。私はタオルをその白い背中に向けて投げてやった。その一瞬私の目に映った長井さんの体は美しく、なんだかこれからのプレイに気遅れがしそうだった。

準備を終えて待っていると、やっとして長井さんが戻って来た。私は再び笑いがこみ上げそうになった。彼女ちゃんと洋服を着て、ストッキングまではいているのである。

「もういやになったの?」

「そうじゃないけど、他に着るものがなかったから」

どうやら長井さんは口程にもなく世間知らずのお嬢さんのようである。

「さあ早く脱いで。寒くはないだろう?」

「ええ、でも自分で脱ぐの?」

「勿論だよ。着せ替えごっこじゃないんだか

ら。それとも脱がして欲しい?」

「そうね。やっぱり自分で脱ぐわ。誰か来ないかしら?」

「大丈夫だよ。電話しないと来ないから」

長井さんが私の後で再び服を脱ぐのを、私はさり気なく煙草をふかして待った。内心早く見たくてウズウズしていたのだ

ったが。彼女は思い切りよく、全部脱いだ。しかし脱ぎ終っても彼女はじっとしているよ。うなので、私は彼女の気持を慣らせるために先ずヌードから撮ることにする。床の間の生け花が見事なのでその横に坐らせる。彼女固くなっているようなので、私は努めて平静を装い、ビジネスライクに彼女にポーズをつける。その時触れた彼女の肌はしっとり柔らかかった。カメラを構えてからレンズを通して彼女の体を凝視する。すると異性の目に裸身を晒すのは初めてらしく、その白い肌が忽ちピンクに染り出す。湯上りなのが余計血行を良くしていたかもしれない。若々しくて一



分のたるみもない裸身が羞らいに染って行く有様は形容のしようがない感動であった。私は彼女が完全な処女であることを確信した。「こわい顔やなあ」

私の一声で長井さんは笑ってしまった。そしてその笑いが彼女の緊張を解きほぐしたようであった。

「アザはないようだけど?」

「アザって?」

「書いてたじゃないの。友達に抓られてつけられるって」

「あーあのことね。少しオーバーに書いたかもしれないわ。でも直ぐアザになるの。消え

るのも早いけど。それに今日は箕田さんが写真撮るかもしれないと思って友達から逃げていたの」

話しながら写した一枚が写真1である。この写真でもわかると思うが、彼女全くの素颜である。入浴した時にさっさと顔を洗ったらしく、それが不自然さを感じさせないのは若さの有難さである。それに彼女の裸身は女として成熟し切ってはいないように思われる。乳房もふくらみの途上にあるようだし、体の曲線の所々に子供の名残りすら感じられた。裸身のどこを探してもアザの痕跡がなかったことも報告して置こう。寧ろしみ一つない裸身という形容は、そのまま彼女のものであった。

数発のストロボと会話が彼女の顔と体から羞恥の色を静めて行った。私は頃あいをみてバッグから縄の束を取り出す。彼女ははっとして私を見る。

「やっぱり括るの?」

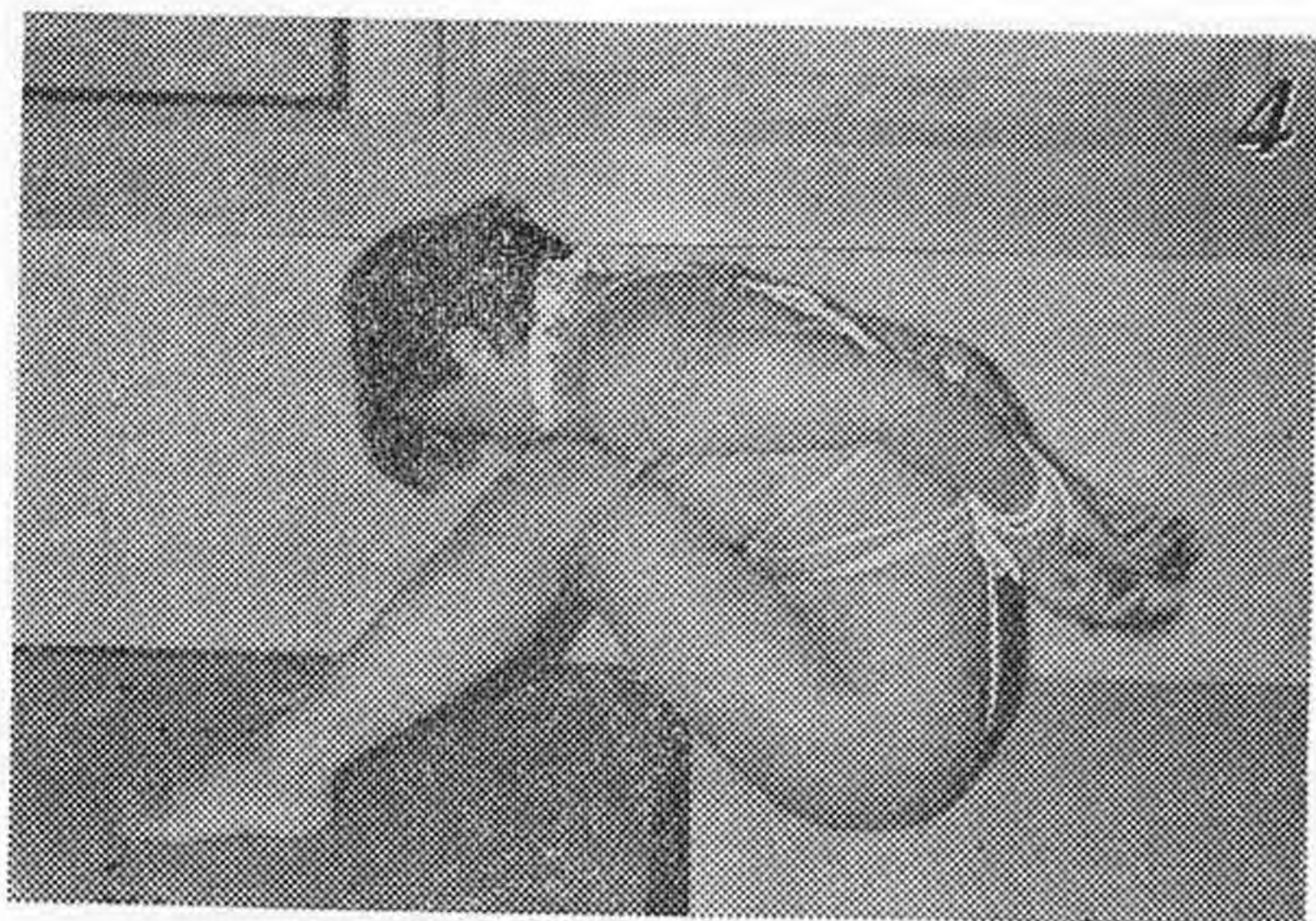
「そのつもりで来たんだろう?」

「そうだけど、ちょっと怖いわ」

「きつくしないから」

問答はこの際反って彼女の気持を逆戻りさせそうなので、私は縄を手にしてさっさと実

行に移る。長井さんを立たせ、背後から両手を掴んで尻の上で交叉させる。殆んど抵抗はない。その手首に縄を巻きつける。感動の瞬間である。縄尻は両肩から胸へ伸し、そこで一回ひねって左右に振り分けて乳房の下で巻く。縄は四本を一束にして使った。第一発なので少し手加減したつもりである。しかし弾



力のある肉が縄をびったりと吸いつけているようだった。接近して縛っている私の目の前の肌からほのかな香りがただよってくる。石鹸の匂いに花の甘さを加えたようなその香りは処女のものであろう。私は思わず唾をのみ込んだ。後手を軽く握ってみる。長井さんは小刻みに震えていた。

「痛い?」

「ううん」

私が正面に廻ると、長井さんは腰をかがめた。目は閉じたままである。その沈黙は私にはちょっと耐えられない感じがして、カメラを構えることにする。腕を掴んで少し歩かせ、窓際に腰を降ろさせる。手拭で目かくしをしてからストロボを発光させた。それが写真2である。彼女の若々しく均整のとれたプロポーションと滑らかで清潔な肌の感じが見ていただけるであろうか。その姿のまま四、五回シャッターを押しただけで、彼女の縄を一旦解いた。

「どんな気持?」

「うふふふ」

「きつかった?」

「そうでもないけど、少し恥しかった」

長井さんはちょっと照れかくしに笑った。

その笑顔が、あどけなくてとても可愛いかった。邪心のない子供の笑いである。私は彼女が全くうぶな娘であることを知って、なんだかいじらしくなってきた。恐らく彼女にとって男女のセックスがどんなものであるのかさえわからないのではないだろうか。私の意欲は、彼女の清純さの前で萎れて行くようだった。

「もう止そうか？」

「どうして？ わたしの体じゃ写真にならない？」

「そうじゃないけど、何だか可哀想になって来たんだよ」

「……………」

実際その時の私の本心は、物足りないことおびただしかった。縛りの経験はなくても少くともセックスの経験を持つ女性が相手であれば、相当思い切った縛りもできるし、またそれだけの反応もあるのだが、長井さんの場合無垢過ぎて手のつけようがないのである。今まで何人かの女性に縄を掛けて来た私ではあるが、こんな気持ちになったのは初めてである。長井さんは固くて青い蕾である。

「変だなあ。雑誌じゃいろんな縛りやってくるくせに。遠慮しなくていいのよ。わたし覚

悟してるんだから」

長井さんは私が意欲を失っているのを見て急に饒舌になった。一人前の女として扱ってもらえない口惜しさがあったのであろうか。女心は妙である。押せば逃げ、逃げれば追うといった心理であろう。

「じゃ、もう少し縛ってみようか？」

「うん、さっきの少し弛かったわ」

この一言が私の気持ちに火を点けた。彼女、体では知らないくせに、心だけは結構成熟している。よしそれじゃあと本格的に縛ったのが写真3である。後手の縄尻を背から首に廻わし、結び目を四つ作って縦縄にして後手へ結ぶ。その縦縄を左右から引き、両肘も絞った姿である。勿論立たせて縄を掛けたのだが、縦縄にはさすが彼女もちょっと体で抵抗を見せた。しかし口には出さなかったもので、私は一気に縛り上げた。

「どう？ きつい？」

「ううん」

彼女はちょっと恥しそうな表情をしたが、顔は左右に振った。縦縄は左右から引かれていたので、その食い込み方は相当強かった筈である。坐らせてから口に手拭を噛ませた。

この縛りで私のSに完全に火が点いた。彼女

の心が求めるのなら遠慮することはない。そのまま両膝を曲げさせ背中と一つにして縛ったのが写真4である。相当強烈な縛りなのだが、長井さんは呻き声を出さず、じっと畳を見つめていた。もう私は尋ねない。肩を押して壁に凭れかけさせる。左足が浮いて倒れそうな不安定な姿勢である。縦縄が双丘に深く埋もれているのがわかる。そのままごろっと横倒しにしたり、仰向けに転がすのが私の好きな責め方だが、それだけはこの処女に対して遠慮した。その姿は心までも傷つけることになるかもしれないからである。しかしさすがこの縛り方は苦しいのか、しばらく放置していると彼女の肌が汗ばみ始めた。

「苦しい？」

「……………」

彼女は返事をしない。と云って呻き声も出さない。相当な辛抱強さである。依然として目は畳を見つめている。そのまなざしは何か緊縛の味をじっと味わっているかのようであった。

「何だか体の中がじーんとしちゃった」

解放してから、ハツコさんが云った言葉である。

「それに縦縄って思ってたより恥しくなかつ

た。肘の方が痺れて痛かったわ」

彼女の淡々とした話し方は、このプレイが全くセックスと無関係なものとして体験されたことを物語っていた。美容体操と大差のない受け取り方である。

「山本さん、鞭打ちってしたことある？」

「あるよ」

「どんな感じかしら？ 痛いのはにが手だけど。それで喜ぶ人あるの？」

「あるね。でもハツコさんには、まだわからないだろうね」

もう慣れたのか、彼女は裸のまま私が冷蔵庫から出したコーラを飲んだ。正直云って、彼女に私は女の色気を感じなかった。しかしその固い蕾が、近い将来必ずふくらみほころびることを考えると、何だか惜しいような気持ちになった。彼女は飼育される素質を充分に持っている。しかもその女が花開いたとしたら素晴らしいに違いない。一年か二年、いや半年早過ぎたのかもしれない。時計はもう四時を過ぎていた。

「もう片づけようか？」

「うん、でも、わたしはまだ大丈夫よ」

「大丈夫って？」

「もう一度縛ってみて」



オヤオヤである。

「じゃ最後にギュッと云わせてやる」

「いいわよ」

どうも張合いのない返事ではある。どうやら奉仕しているのは私になってしまった。後の縦縄は先刻の縛り方と殆んど同じで、ただ胸の上から両腕と共に強く縄を巻いた。彼女は矢張り目を開いて畳を見つめている。その目の上を縄でぐるぐる巻きにし、残った縄尻を強く噛ました。今度は足を縛らずにごろっと横倒しにする。写真5がそれである。下になった腕に食い込む縄が痛かったのか、縦縄が強く締め過ぎたのか、一瞬彼女はかすか

に呻いて体を悶えさせたが直ぐ静かになった。私はそれを無視してカメラを片づけ始めた。いつまで辛抱できるか。カメラを片づけてから浴場へ行って顔と手を洗う。その時廊下に人の来る足音がした。私は慌てて浴場を飛び出す。女中である。

「もうばちばちお食事にしましようか？」

「そうだな。もう十分程してからでいい」

私の胸はドキドキと早鐘を打っていたのだが、できるだけ落着いて答えた。

「じゃ、お電話下さいね。準備はできていますから」

女中が廊下を戻って行くのを見送りながら私は胸をなでおろした。あのまま部屋に入って、素裸で縛られている長井さんを見たら彼女はどうするだろうと考えてみると、危い所だった。この世界を知らない人が見たら、恐らく残酷な強姦現場としてしか理解しないであろう。廊下は寒かった。

部屋へ戻った私は、畳に転がされたままの

長井さんの傍に腰を降ろす。

「少しお尻を叩いてみようか？」

そのしみ一つない豊かな臀部は、私に加虐の意欲を呼び起す。私はその滑らかな平面を軽く撫でながら彼女に尋ねた。しかし長井さんは顔を軽く横に振った。

○

一緒に食事を済ませた私は、再び派手なセーターを着た娘のような長井さんを車に乗せ

て、北大阪へ向った。外は灰色の寒々とした夕暮れであった。

「もうこりた？」

「そうでもないわ。最後のが少し痛かったけど、あれ位なら辛抱できるわ。わたし辛抱強い方でしょう？」

「そうね。最初にしては、少しきつ過ぎたかな」

長井さんは、もうすっかり心を許している

山原清子
妖艶緊縛

刺青の魅力を探ぐる

写真集

一部一〇〇〇円
略号 A美7V

全部最近撮影の力作

刺青の女王——山原清子の魅力の隅から隅までを抉ぐり出しその美しさを最高度に発揮した強烈な緊縛フォトの結集版（思わず息をのむ凄いポーズばかり満載）

未公開の秘蔵写真集

このグラビア写真集の写真を撮影するため、三カ月に亘って、山原清子嬢を連日のように煩して特写しました。ここに収録したものは、すべて未公開の傑作写真ばかりです。

山原清子嬢の若い女性としては前代未聞の素晴らしい刺青の魅力をぎりぎりの線まで徹底的に追究して、その肉体の隅から隅までを鮮鋭なピントのフォトに表現しました。殊に彼女好みの強烈な緊縛によって、単なる刺青フォトの域を脱して、より高度の芸術品を仕上げました。このような稀有の文献資料は他では二度と手には絶対に入らないという自負を持

ております。一般市販はいたしておらず、今度から直接発行所へお申込み願います。

△内容▽全裸の刺青を晒らす後手縛り。股間縛りの刺青の魅力。黒縄緊縛にも見える刺青女性。後手縛りの刺青媚態六態。絢爛たる逆エビポーズ。乳房責めにうろたえる清子。海老縛り。正面と背面の魅力を抉ぐる。台上にさらす緊縛妖姿。刺青が樹間に見える緊縛全裸姿態。日本髪全裸緊縛。光と影に映える妖しい刺青。刺青芸妓の裸身縛り。海老縛りにうめく清子。股間縛りでもだえる刺青女。清子の身体各部のアップ。

のか、ラジオから流れて来る『モナリザの微笑』に合合わせてハミングしていた。全く無邪気なお嬢さんである。

「感想は？」

「案外面白そうね。でも本当云って、変なはずらされないかとちょっと心配だったわ。裸で縛られてるんだから、男の人がその気になれば自由でしょう？」

「わかってるの？」

「わたし、子供じゃないわ」

しかし私は長井さんを大人だとも思わない。いわば大人寸前の体と知識を持った子供なのである。私は彼女がこのままの素直さで女として成熟して欲しいと思う。

「山本さん、また会ってくれる？」

「いいよ」

「じゃ近い内に箕田さんに連絡するわ。今度は箕田さんに縛って貰おうかな」

「それもいいね」

彼女は阪急裏で車を降りた。そして二、三歩走り出してから急に振り返り、微笑して手を挙げた。私もその姿を見てなぜかほっとしていた。

彼女は長井ハツコと書いた方が似合う若いお嬢さんだった。

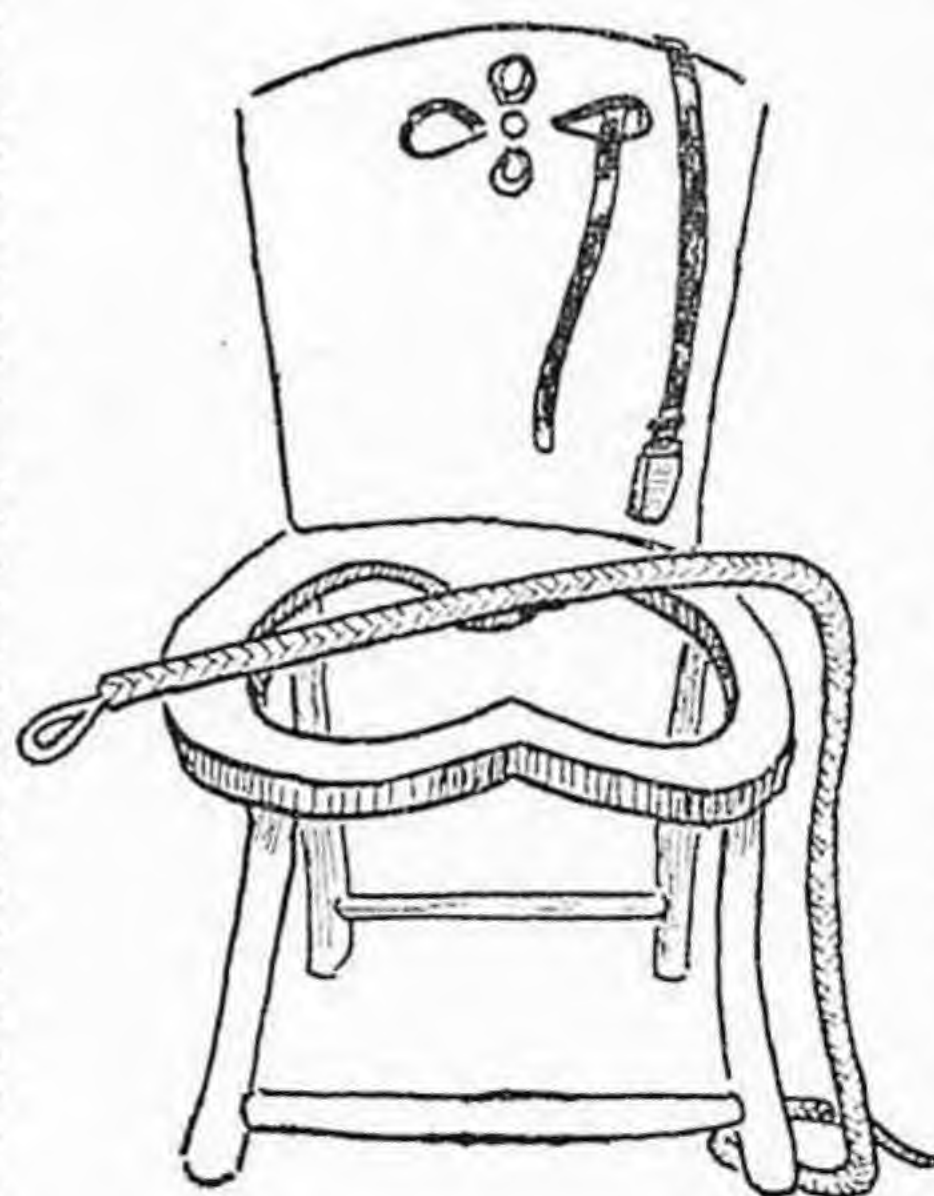
（おわり）

連載サディズム小説

心^{こころ}傷^いたむ遍^{へん}歴^{れき}

△最終回▽

西条操



夏ドレスが数名、冬のスーツが数名——九月末の季節にふさわしい姿のは三、四名しかない。美容術でも習得しようかと思ひ定めような女囚たちだから、手紙一本で衣裳が届くという芸当は無理だ。

錠前付き革バンドを腰に締められながら、女囚たちは申し合わせたように胸を抱いた。「もう、シュンとしちゃって——」

事務服の娘が肩をすくめ、書類一式をカウンターで押しやった。マーゴットが受取る。「近頃、幅のバカでかい革ベルトが流行ってるじゃないか。町でよく見掛けるよ。ま、デ

ザインが少々ごついから、そうだねえ、ナントカ式健康帯ってとこかね。マリィ、きつい目にしなきゃ駄目だよ。ロゼットもね」しかし、マリィは三五八号には、かなりゆるくしたようだった。

「まだかい？ 汽車におくれるぞ」

と、男の制服が二人、顔を覗かせた。

「手伝ってよ。マイクロバス、来たの？」

とマーゴットが笑顔を向ける。御自分はカウンターに頬杖——いい気なものだが、今日の移送の責任者は彼女だから仕方がない。「男子禁制のシーンは演技ずみ。残念ね」

男たちは苦笑いして手錠を掴み上げた。

「えーと、アレのはいなかったわね？」

「どこ見てたの？ マーゴット。全然ゼロ」

ロゼットが答えて、三人目の後ろ腰にロープを結びつけた。

「これだけ集めてゼロだなんて、奇蹟ね」

一服していたマリィがそう云い、やおらロゼットを手伝った。男たちも手を貸した。

「そりゃいい、面倒が省けて——。こら、手を動かすなっつのに。ストップかけてやるんだぞ。長の道中だからな。いやもう、あんときのを連れて歩くと往生するぜ。なあおい」

「まったくだ。そうだと云われりや、ちとらの身としては分らないもんなあ。さ、手錠だ。手を出すんだ、手を。いつまで髪をいじってる。しなしなするな」

「あんたたち、何のことだか分ってんの？でも、用意はしてるわね？」

マリーは黙ったまま、面倒げにショルダーバッグを顎で示した。

三五八号が頬を染め、泣き出しそんな顔をして、男に両手をさし出した。

「情けないか？でも仕方ないな。おや？」

と、腰枷バンドを無遠慮に腹で掴み、力強くゆすぶる。革がギシギシと音を立てた。

「ちよいとゆるいようだが、ま、いいだろ」

ストップをかけた鍵が抜き取られ、女囚は悲しげにその鍵を見詰め、そして肘から先をのろのろとおろした。ガチリと錠が鳴り、腰枷と手錠が連結され、女囚は啜りあげる。ロゼット婦人看守が背後に立ち、珠数繋ぎのロープが入念に結びつけられた。こんどは後ろ腰がゆすぶられ、ひとしきり金具が鳴り、分厚い革具がきしみ続ける。新しい腰バンドに当たったせいか、三五八号の革具は、ひととき高音高く鳴りきしんだ。

ロゼットも小首かしげて締め加減を点検し

たが、マリーの顔を立てて次へ移った。年は下だが、マリーの方が先輩なのだ。

「さ、いいな？手錠かけるぞ。痒いところあったら搔いとけよな。いいんだな？」

男に云われて、うら若い女囚が威勢よく両手を突き出した。

「あら、御遠慮は要らないわよ。どうせ恥さらしだもん。バシッとやって。さっきから待ってるのよ、お手々そろえて——。冬でなくて助かるわ」

「そうか、いい覚悟だ。云っとくが、こいつはチト窮屈だぞ。もがくと痛いぜ」

「もう聞いたわよ。知ってるったら」

大抵は声もなく鼻啜る中であって、先ずは明るい娘だったが、腰枷の錠金具がガツチリと手錠をくわえて鳴ると、空元氣も吹飛んだのか、一声だけ啜りあげたのだった。いくら強がって見せてはいても、シャバの街路を目に立つこんな姿で長道中かと思えば、馴れて哀しい身とはいえ、いま喰い入った鋼鉄の味は、ひとしおこたえて胸挟ったことだろう。

小粋な薄物ドレスの女盛りが男を迎え、両手突き出しながら鼻を鳴らした。

「こら、胸許が乱れとるぞ。ちゃんとしろ」

「だってえ——なら、ブラジャーさせてよ。」

ああ、いい匂い。あのひとの匂いとそっくりだわ。きつくしないでね、おねがい」

この女は情夫と共謀しての幼児誘拐犯で、殺さなかったので十二年の刑——かれこれ十年を女の館で暮らして三十も半ば過ぎとなれば、眼前に男を見て小鼻ふくらませるのは当然だ。とはいえ、十年昔の情夫の匂いをば今に憶えているとは——。もっとも、どの男であれ、嗅ぎ分ける前に血が頭に昇っているのだろうから、匂いのことは信用できない。

「あーあ、まるで猛獣扱いね」

女盛りは嘆息して、鋼鉄を両手首にまさぐった。回せない手首に、男を色っぽく睨む。

「だんだんとヒューマニズムがなくなっていくんだわ。あたしが送り込まれた頃はこんなじゃなかったわ。顔ぐらい隠せたのに」

「そりゃな、古き良き時代のことだ。いまは男女同権の御時世だもんな。こら——」

「だってえ——もう一穴だけゆるくしてえ。キスしてもいいわ。どこでも触らせたい。きつ過ぎるわよオ」

「離せたら、こら。お前は手首が太いからな。抜かれちゃ一大事だ」

「甘ったれンじゃないッ。バカモン」

マーゴットが床を蹴り頬杖の事務服娘が

「嚴重にしとかないと誘拐されるもんねえ」

と嘲笑った。大抵ならマーゴットの手があがる場所だが、今日の彼女は御機嫌だし、ほかの監舎のコをシゴクようなマリイではない。マリイは面倒臭がりだし、ロゼットは事なかれ主義——すれからし女囚なら分かる。

「こんなの、あたしたちだけじゃない？ ほかのムシヨでもこんなにする？ 新聞なんかで、可哀想だと云ってくれないかしら？ リヨンまで何時間かかるの？」

甘え声で男に流し目を使う年増は、去年の秋に入獄の短期刑女囚で、来春には満期だ。

「あん？ ミストラル特急なら四時間だけどなあ。貴様たちは二十時間ばかり旅行を楽しませて貰えることになつとる。途中御一泊付きさ。パリとビシーでお乗り換え。汽車の旅を堪能できるぜ」

「あら、そうお」

と、さっきの娘が再び空元気を出す。

「あたしたちの急行料金が、あんたたちの出張旅費に化けるって仕掛ね」

「黙んな」

マーゴットが堪まりかねて色をなし、娘の頬に二、三発を見舞った。

「——ああ——乗り換えさせられますの！」

二度も——ずっとバスで送って頂けたら」

「たまらないわ。行くんじゃなかった——」

既に珠数繋ぎ完了の列——その群のあちこちで悲哀の溜息が洩れた。

「こんなザマのは聞いたことないわ。ホラ、映画やテレビで出て来る護送なんか、片手ずつを繋がれてたように思うんだけど——」

と、短期刑の年増が手錠を鳴らせる。

「なんかの間違いじゃない？ シベリア送りかなんかのつもりかしら？」

「うるさいな。テレビや映画は絵空ごとなんだ。現実はその綺麗なごとじゃないんだぜ」

「不心得なことだけはするなよなあ。脚鎖だつて持つてるからな」

「片脚ずつなら四名さま分——それに、嵌口具も四人前あってよ」

「余計なことお云いでないよ、マリイ」

と、マーゴットが眼をむいた。三五八号が泣き声で泣く。

「——みんなが——みんなが見て、笑うでしょうね、ああ——」

「いい見せしめになるわ。一ダースの珠数繋ぎは効果絶大よね、大デモンストレーションだもん、ホホホ」

と、事務服娘が笑った。

「そうですとも。ついでに、首に正札ぶら下げさせたらどう？ ワルイ女たちが震えあがって慎しむかもね。非行少女の教育上もいいわよ。あたしたち、喜んで犠牲になるわ」

「そうよ。ちつとは世間さまのお役にも立たなきゃ。ね、ねッ、あんた、あたしの隣りに坐っておくれでないかしら、汽車中でサ」

「うるさいな、もう——。こんなあばずれが混っちゃってるのはどういふことかい？」

「なあに、そんなのが女囚の標準品なのよ。」

ことにあんたたち色男が魅力をふりまくもんだからね、つい、ネジがゆるんじまうの。あんまりそばへ寄らないでねッ。さあ、ボチボチ御出立とするか。もう、締めるよッ」

女囚たちはそれぞれに荷物を拾いあげようとし、ひとしきり革具がきしみ、手錠が音立てた。一米半ずつのロープが揺れ、ピンと張ってはゆるみ、きびしい監視を受けて珠数繋ぎが動き出す。

ミシュリーヌは胸を抱いて暗然と見送り、つと寄ってマリイに訊ねた。

「——マリイさま。イヴェットさまはお元気ですかしら？ おしえて下さいまし」

マリイ婦人看守は黙って睨みつけ、よろめいた冬ドレスの肩を小突いた。ミシュリーヌ

はこそそこそと逃げるように避け、マーゴットが列の後ろから呟鳴る。

「さあ、これからまる一日、着くまで無言の行だよ。なんだい？ 御希望の学校へ行けるんだろ。明るく元氣よく、打ちしおれて神妙に歩いたらどう？」

折角、更生の意気を示して技術習得の意欲十分の女囚たちなのだから、護送のやり方だって、もう少しなんとか考えてやればいいものを、マーゴットも無理なことを云うものだった。移送女囚たちは去り、ミシュリーヌたちは息せき切って床を磨いた。早く終えないと炊事に間に合わない。ミシュリーヌは今週から炊事室へ回されていたのだ。

ミシュリーヌは忙しく立ち働しながら、昼食を受け取りに来る監舎の連中を盗み見るのだった。しかし、求めるイヴェットは今日もやって来なかった。

そして、ミシュリーヌはその日の午後、クララに笑顔で言い渡された。

「ミシュリーヌ。明日、仮釈放して貰えるからね。ずい分と早かったわ、よかったねえ」

ミシュリーヌはその夜、禁を犯して、細目に開けた窓から、長いこと塀の向うを見詰めていたのだった。

翌朝、イヴェットは出勤するなりマジヨリから耳打ちされ、忽ちそわそわし始めた。

他人に何と云われようと、ミシュリーヌ奥さまをせめて駅までお送り申しあげるのが念願のイヴェットであった。

彼女は口実を設けて監舎を離れ、一度ならず二度までも本館を訪れて、あちこちと歩き回った。しかし、求める姿は見出せなかった。それも道理で、個室の清掃を済ませたミシュリーヌは、そのまま独り静座して、最後の反省に没頭していたのだった。

シヨげ切って帰ったイヴェットに、マジヨリが囁いた。

「逢えないのね。でも、あわてることなくつてよ。二時十二分コンピエーヌ駅発下り」

と、片眼をつぶる。

「あら、その靴、どうしたの？」

「さっき、本館で出逢いがしらに踏まれたのよ。全然知らないひと。とっても生意氣そうな若い娘だったわ。二時十二分ね？ ありがたい、マジヨリ。早引けさせて貰わなきゃ」

申し出を聞いてジョアンヌ女史が云った。

「精励格勤だったあんたが、ここ二週間ばかり、いったいどうなっちゃったの？ 欠勤が二日、遅刻が三回。どこか悪いのかい？」

「すみません。でも、今日だけは——お願いします。午後からでいいんですから」

「ま、いいだろ。ほかならぬお前さんのことだものね。じゃ、検事調べの連行を頼むわ。三〇八号。なあに、おひるまでには済むよ」

「はい。あの——検事さんの前ではどうしますの？ 戒具なんかは——」

「あ？ ああ、初めてかい、お前さんは。被疑者や被告人じゃないんだよ。事故防止と身分の明確化が第一さ。分った？」

かくて、イヴェットは三〇八号のダイアナを本館へ連行した。

「ねえ、担当さま。何のお調べかしら？ あたし、怖いわ」

「行けば分かるでしょ？」

「そうね。ね、ね、検事さん、年はいくつぐらい？ 四十がらみのガッチリしたひとだったらいいのになあ。撲ってくれないかしら」

「うるさいわね。バカなこと云わないで黙って来なさいッ」

「ハイ。すみません。だけど、うちの監舎じゃ、担当さまが一番キリッとしてらっしゃるわ。どうかすると男顔に見えちゃう。ねえ、お家でコキ使って下さらない？ どんなに撲られたっていいんですの——おねがい」

「バカなこと云わないで、さ、バンドよ」

本館との仕切り鉄格子の前で、これまた男勝りの保安課若手スカートにバンドを締めあげられ、三〇八号は眸をうるませた。肌に直接当たる「ベルト」は苦手だが、モンペの上からの革バンドなら結構というわけか。

「——こわいわ、担当さま」

と、廊下でハダシを踏張った。イヴェットは舌打ちして捕縄を引張り、ダイアナは身悶えしながらついて来る。手荒らに扱って欲しいらしいし、精悍な検事の糺明を想ってウォーミングアップのつもりもあるのだろうか、まったく困った女囚だった。

イヴェットは扉を開き、敬礼しながら、あっと驚いた。デスクに納まって待ち構えていたのは、さっき、靴を踏んだ娘であった。ミシュリーヌを求めて気もそぞろだったので全然気付かなかったが、いま見れば渋いスーツの襟には検事のバッジが光っていた。

「三〇八号、ダイアナ・ジレーを……」

「おそいじゃないのッ。何してたの？」

「申しわけございません。さ、入ってッ」

ダイアナは期待に満ちた眸を投げ、忽ちにして失望の色を浮かべる。まさか婦人検事とは思っても寄らなかったこととて溜息さえ洩ら

して落胆の様子だった。イヴェットとても思っても寄らぬこと、同じ年頃の婦人検事に頭から叱り飛ばされて、口惜しいとさえ思った。

婦人検事は、これまた意外にも、ことのほかのやさしさを示してダイアナを迎えた。

「坐ってッ。お行儀よくするのよ、いい？」

「あ、楽にさせてやって頂戴」

と、婦人検事はシガレットを灰皿に揉む。

「いいんですか？」

イヴェットはためらった。書記官も連れていないし、ジョアンヌ女史の注意もある。しかし、取調べ室においては、法務事務官は検事の指揮に従わねばならない。

イヴェットは鍵を取り出し、女囚はふくれ面で両手首を僅かに持ちあげた。

「バンドも解いてやって」

「あら、バンドの鍵は持ってません」

「へえ？ 戒護規程違反じゃないの？」

「だって、保安課の管轄になってます」

「内規なのね」と、電話器を取りあげる。

「女検事さま。あたしはいいのよ」

ダイアナは、男性が居なきやどっちでもいい、という態度——しかし、保安課の二枚目がやって来て、イヴェットに鍵を渡した。

「——あ」と、ダイアナが眸を輝やかせる。

「ね、ねえ、きつく捕縄かけてくれない？」

暴れるかも知れないもん、あたし、ねえン」

男は無表情に相手とせず、はるか年下の婦人検事に敬礼を残して去った。

革がきしんでバンドが解かれる。

「さ、掛けて。楽にして頂いたんでしょ？」

ありのまま申しあげてお手間取らせないで」

この女囚が手を焼かせて長引くと、第一にイヴェットが困る。革具や手錠や捕縄なんかを膝に、イヴェットは腰をおろした。

「ねええ。お帳面つける男のひとは？」

ダイアナは縦バンドのあとを撫でまさぐりながら、のろのろと小椅子に腰をおろす。

「ダイアナ・ジレーね？ 私、グレイス・リンレイ。アミアン検事局の検事よ。どう？」

刑務所の暮らしは」

グレイス検事はにこやかに口を切り、ときどきは適当にきつい顔をした。

つまり、ダイアナを検察側の証人として公

判廷で証言させようというのだった。

「——お前に損なことは全然ないのよ。イルマが逢ってた男、おぼえてるわね？ 見れば分かるでしょ——」

婦人検事は脅したりすかしたりし、聞くともなしに待つイヴェットはイライラした。な

んでもいいから早いとこケリをつけてくれな
いと、ミシュリーヌ奥さまに御挨拶できなく
なって仕舞う。できることなら一度帰宅して
着更えをし、正門を離れた物陰で声をかけて
差しあげたい。

イヴェットの想いは殺風景な取調べ室を離
れ、ミシュリーヌ奥さまと二人きりで歩む森
の小径に馳せるのだった。

お金、受け取って下さるかしら？ 泣いて
お願いしなくちゃ。ママのスローモーったら
ほんとに——とうとう間に合わないじゃない
の。あんまり念入りに縫うからだわ——

母マリアが心をこめて手縫いの数々——ミ
シュリーヌの仮釈放が予想外に早かったため
に、その丹精はすべてが未完成だ。

「——どうしてもイヤだと云うのねッ」

グレイスがバシッと机を叩き、イヴェット
は我れに返った。婦人検事は怒りを抑え、再
び言葉も和らげて、なんとかして検察側有利
の証言をさせようと懸命だ。

イヴェットは再び瞼を閉じ、喜びに満ちた
かんばせを描いた。行き違って一度も逢えな
かった二週間——イヴェットにとっては、ま
る一年もお逢いしないような心地であった。

「——イヤよ。イヤだったら！」

ダイアナが喚いて身もだえ、両腕をデメク
に乗せて顔を埋めた。

「どうしても、そんなに聞き分けがないのかし
ら？ 悪いようにはしないって、これだけ云
っても分からないのね」

婦人検事は歎息し、怒りと失望にふるえる
指でライターを鳴らした。

「いいこと？ お前だって、念入りに洗えば
あちこちにまだあるんじゃない？ サビが」

「ふん——」女囚は腕に顎を乗せた。

「なら、洗ってよ。それとも拷問して見る？
あたしはね、あんたなんか手柄立てさせる

のはマッピラよ。学校出たての、しかも女じ
やないの！ 女だてらに検事なんかしてサ。

男たちをキューキュー云わせて恐れ入らせる
のがそんなに面白い？ もう、顔見るのもイ
ヤ。男の検事さまに代ったらどう？ どんな
荒っぽいひとでもいいわ。そしたら——」

「お黙リッ。侮辱する気？」

と、婦人検事グレイスは堪まりかねる。そ
して、まだ何の処置をも取らない婦人看守を
きつい眼で見やって舌打ちした。

イヴェットは、我れに返ってからもしばし
女囚の喚くままに任せていた。

この婦人検事は虫が好かないし、怒らせれ

ば早く打ち切るだろうと考えないでもなかつ
たからだ。

「侮辱？ へん、もっともらしいこと云わな
いで。あんたたちはなによ？ 二言目には検
察の威信、社会正義——そして、当人をほつ
たらかしといて、勝っただけの負けただの目
の色変えてサ。あたしたちに対しちゃ、自分
より正しい者はいない、なんてツラ……」

イヴェットに後ろ襟引き起されて、ダイア
ナは咽喉を詰まらせた。こんなセリフを口走
るのは元女弁護士ヴィヴィアンヌが同房のせ
いだろう。

「戒具拘束しなさいッ」

「はい。立ってッ」

イヴェットは引き摺り出して利腕をねじあ
げ、そして、いささかあわてた。手錠がバン
ドに結合されたままだった。

「——い、いたいわよオ、担当さま。あなた
には、絶対に服従してよ。だ、だから、放し
てったら——ウッ——かんにんしてえ」

「おとなしくするわねッ？」

イヴェットは手を放し、女囚は神妙に両手
を背に回した。手錠をカチャカチャぶら下げ
たままで腰バンドを締め、股バンドを潜らせ
る。ダイアナは、いともしおらしく戒具をう

けた。そして、眸をうるませる。

「ゆるいわよ、イヴェットさま、御遠慮なさらないでね。あたし、担当さまに懲らしめて頂くのは当り前ですもの。あら、後手錠じゃありませんの？」

女囚は下腹部で自ら鋼鉄環を求め、イヴェットは常に似ず、音高く叩き込んでやった。

「——ああ、担当さまも、やっぱりお怒りになったのね？ 当り前ですわね——」

と、ダイアナは恍惚と立ちつくす。

「——でも、ほんのちょっと口答えしただけなのに、すぐこんな手錠入れられて——女囚って、ほんとにみじめだったらしいのねえ」

「お黙りっ。お詫びしなさい。さ——」

「土下座してお詫び？ イヤだと云ったらどうなさる？ せめて——」

ダイアナは、主のいない書記官デスクを恨めしげに見やった。

「曳かれ者の小唄はよしなさい。報告して懲罰に付します。さ、来るのっ」

イヴェットは気合よく曳き去ろうとしたのだったが、グレイスがさっと起って引き留めた。デスクを回って女囚の前に立つ。

「床に坐ってッ」

ダイアナは、さも忌々しげにふくれ面だ。

「おや？ 飽くまで逆らう気なのね」

婦人検事は若々しい眉を吊りあげ、ドンと床を蹴ったが、流石に手は触れない。

「坐りなさいッ。『ベルト』二週間よッ」

イヴェットに叱られて、ダイアナは脚を折った。やっぱり「ベルト」は廃止できない。

グレイスは腕組みなどして立ち、見下ろして、またも責め始めた。

「お前、仮釈放して欲しくない？ え？」

捕縄を握るイヴェットは苦笑いした。

「あら、あなた、なにがおかしいの？」

「い、いえ——失礼しました。別に——」

このダイアナという女囚は、冬さえもう少し暖かくしてくれれば、いつまでもここに住みつきたい、という奇天烈な女だ。仮釈放なんかで釣れる筈がない。それより、荒っぽい男の二、三人で裁判所へシヨッ引いて行ってやる、とでも云った方がいい。

イヴェットは腕時計を眺め、イライラして足踏みした。

「——どう？ 脚が痛いでしょ？ もう一度考え直したら？」

任官して間もない新米検事グレイスは、これで精一杯痛めつけているつもりなのだ。しかし、この女囚が、半時間やそこの正座

で降参するわけがなく、ことに、この三〇八号は名だたるマゾ女性だ。

イヴェットはハッと我れに返った。グレイスがきびしい眼で睨みつけていた。

「——ボンヤリしてちゃ駄目じゃないの」

「すみません」イヴェットは椅子から立つ。

「タルんでるわ。万一のことがあったらどうするの？ もういいから連れて行って」

「はい。さ、おいで」

「ちよっと、あなた。名は？」

「イヴェット・ヴラディです」

「そう。時計ばかり気にしてたわね？ 正確な時刻は、現在、十一時五十二分よ」

イヴェットは敬礼を忘れて捕縄を曳いた。監舎で、そわそわと帰り支度のイヴェットに

ジョアンヌ女史が云った。

「ちよっとお前さん。午後、本館へ来いってさ。検事さんが呼んでるらしいね」

「まあ！ だって——いますぐじゃいけませんの？」イヴェットは泣きべそをかいた。

「いまはお食事中だね。十三時、所長応接室よ。女の検事だってね。お前さん、御機嫌を損ねたんじゃないのかい？ 泣く子と地頭には勝てないね。服装をちゃんとして、キビキビするんだよ。あ？ ああ、早引けしたいの

は分ってるけど、これは命令なんだから」

イヴェットは打ちしおれて涙さえ浮かべ、マジョーリがやさしく肩を叩いてくれた。

「マジョーリ。私、もう——辞めたい」

「気持は分かるわ。だけど、辛抱してね。せめて、あのひとの籍がここから消えるまではね。そうでしょ？ 頼むわ、イヴェット」

イヴェットは口惜し涙を拭い、せめてもの腹癒せに、念入りに化粧をした。地位では到底敵わないが、容姿では、あの婦人検事ごときにはひけ目をとらない自信があった。

イヴェットは十五分前に本館へ行った。一分でも早く、という気持——できることなら所長応接室で待ち構えるつもりだったが、案の定、所長付きの娘職員に見咎められて追いつかれ、総務課の片隅で待つ破目となった。たかがお茶汲み娘の癖に、虎の威を笠に着ての秘書官ヅラ——イヴェットはムシヤクシヤしながらも悲しい思いだった。

役人になるんだったら学校を出てなきゃ駄目よね。下っ端じゃみじめだわ——

小綺麗な総務課では制服姿はイヴェット独りだけ——物思いに沈んで哀しい彼女だったので、若い男性課員がウインクしたのにも気付かなかった。そして、一時と指定しておき

ながら、お茶汲み娘が呼びに来たのは十五分過ぎであった——。

一時ちようど、ミシュリーヌは個室に別れを告げ、準備室で裸かになっていた。

クララの許可が出て、ミシュリーヌは下着をまとい始めた。昨日、洗うべきは洗って手入れた下着の数々——あれは駄目、これはいけないとの制限もなく、いまはもう、ブラジャーもガードルも、靴下すらも、身にまとえるのだ。ミシュリーヌは涙を浮かべて撫でまさぐり、そして下着の一部分を見詰めた。

パンティにもブラジャーにも、下着という下着にはすべて、赤い“P”の文字が付けられている。昨日の夕方、Pの文字を刺繍した白布を何枚も与えられ、場所を指定されて縫いつけさせられたのだった。しかも、そのP文字刺繍は、ずっと以前に労役として課せられた憶えがあった。

「情けないかも知れないけど、規則だからねえ。さ、これを着なさい。新しいドレスよ」

クララは顔を覗き込んで云った。与えられたドレスは監舎の製品——安っぽい既製服ながら、それでも初秋にふさわしい物だった。

「ウン、ぴったりだよ。もっとも、サイズは詳しく計ってあるからねえ、ホホホ」

ミシュリーヌは、二年と九カ月ぶりのブラジャーと靴下を何度となくいじるのだった。

「さあ、課長さまのお言葉を聞かなきゃ。汽車におくれるからね」

クララは静かに促がし、ポケットに手を入れた。

「——あッ、それを——また！」

ミシュリーヌは色を失って立ちすくむ。

「シキタリなのよ。心配要らないの。さ」

ミシュリーヌは泣き顔で両手をそろえた。

「クララさまも——やっぱりお待ちなのね」

「そりゃ、私だってバツジつけてるのよ。お互いにイヤだねえ、こんなの。でも、これが最後よ。ゆるいと課長さまが文句いうからねえ。さ、荷物持って——」

鉄格子や鉄鎖、何かと云えば音立てて喰い込む手錠——そう云ったものから一応は解放されて二週間、ミシュリーヌとしては既に縁を切ったつもりだった。それなのに、最後に及んでこんな——。

ミシュリーヌはそっと唇を噛み、両手首に冷たく光る手錠を見詰め、そして、スーツケースを前に提げて金髪を立てた。

コリンヌ刑務課長は電話器を耳に、顔つきは忌々しげだが声は愛想よかった。三監の平

看守娘にグレイス検事がじきじきに注意を与えるから同席する様に、との催促の電話だ。

「すみません、もう少しお待ち下さいませんか？」
「仮釈」が一名ありますので、それを送り出してから——はい。本人はもう出頭してるんですね？ 早々に処理して、すぐに参ります。あ、来ましたわ——じゃ」

コリンヌは電話を切り、デスクの前に立つたミシュリーヌを観察した。被支配者を観察するのに慣れた眼であった。

この女は信用していいわね。ウダウダお説教しなくてもいいでしょ——

コリンヌはさっさとデスクに並べた。仮釈放囚手帳、お金、切符、P文字布の予備を数枚——。クララは肩を叩いてトイレに去る。

「——いいわね？ 眼に見える鎖はお前の体から解かれるわけだけど、お前の心には、眼に見えない鎖がかかっているのよ。籍は、まだここにあるの。この手帳は証明書でもあるんだから、常に肌身離さず持ってなさい。それに書いてある心得を固く守るのよ。誓いなさい」

「はい。誓います——」

どんなことが書いてあるのかは知らね、ミシュリーヌは素直に誓いを立てた。

「一言で云えば、お前は一人前のことなんか出来ないのよ。公民権のないことをくれぐれも忘れないようにね。謙虚に、へり下った上にもへり下って、つましく暮らさない。乗物が混んで来たら席を立つくらいの気持でね。分った？ 仮釈放継続が不適当と判断したら、直ちに再収監します。お前を逮捕するには逮捕状は要らないのよ。いいこと？」

「——は、はい、よく分りました」

コリンヌは起って、デスクを回った。

「では、手錠をはずしてあげます」

コリンヌは鍵を手にも、顎をしゃくった。鋼鉄を光らせる両手首がいそいそと動いて、鍵を求め迎えた。

「もう、二度とこんな物の御厄介にならないようにしてね。いいわね？」

と、ミシュリーヌの眼前でカチャカチャ打ち振る。

「はい。もう、決して——ありがとうございます。ました。ほんとに、もう懲り懲りですわ」

ミシュリーヌはまつげをしばたたき、ニッコリ微笑んで手首を撫でた。

そこへ、スジイが引き立てられて来た。手

錠も捕縄もないが、温厚そうな中年看守が小突かんばかりにしている。

「課長さん。また盗み喰いなんですの。ほんとにもう、何度叱ったことやら——」

「仕様が無いのねえ。炊事室へ回したのが間違いだっただわ。といっても、給仕させたってねえ」コリンヌは嘆息した。

「ねえ、担当さま。ぶってよ。思い切り撲つていいわ。だから、ずっと炊事させて——」
「ともかく、そこへ立たせときなさい。シャチホコ張らせてね」

スジイは壁際へ追われ、壁を背に、膝角立ちの姿勢を取らされた。「膝角立ち」というのは一種の不動の姿勢で、ビンタや戒具を手控えるのが原則の個室女囚に対して、しばしば用いられている体罰の一つだ。

両手を後頭部に当てて両肘を左右に張り、大きく脚をひろげて両膝を直角に曲げる。両膝も精一杯に左右へ張り、腰や背を真直ぐに伸ばし、身動き一つ許されない。痩せるための美容体操にも見受けるスタイルだが、二十分、三十分となれば脂汗が流れる。

スジイはワンピース囚衣の裾を引きあげて膝小僧を出し、思い切り張り出して曲げながら、ミシュリーヌを見て片眼をつぶった。

コリンヌは音立てて手錠をデスクにおき、紙幣を取りあげた。

「これだけはお前のものです。労役の賞与金よ。お前はたった二年ほどだから少ないわ」

いかにも、それは少な過ぎた。いくら刑期が短かいとはいえ、衣食住は先方持ちとはいえ、二年の日々の油汗への報酬としては、余りにも少な過ぎる。しかし、それは報酬ではないのだ。ミシュリーヌは涙を滲ませた。

「これだけでは更生のスタートに差し支えるとも思われるので、別に、これだけを貸してあげます。いい？ あげるんじゃないかって貸すのよ。利子は要らないけど、できるだけ早く返さなきゃ駄目。借用書にサインして」

クララがやって来て、スジィを眺めて眉をしかめた。

「あら。もう手錠をはずして頂いたのね、課長さまお手ずから——。よかったねえ」

「どこへ行ってたの？ クララ。えーと、それから、これが切符。コンピエーヌ駅からミアンまで。二時十二分の汽車に乗ること。お前は身寄りがないから、ミアンの保護観察官のもとで暮らさない。連絡してあるから、ミアン駅で迎えて下さる筈よ。その方の御指示に服しなさい。いいわね？」

「——はい。あの——どんなお方ですの？ お名前は？ あの——パリに住まわせては頂

けませんかしら——」

「お前の写真を送ってあります。女子担当の保護観察官は三人いらっしゃって、どなたがお見えになるか分かりません。ホームに降りて、そこで待ってることね。パリは駄目。ミアンです」

ミシュリーヌは悲しくうなだれた。身寄りとしてない孤独の我が身が、いまさらのように哀れに思えた。ミシュリーヌはハツとうろたえる。ああ、写真!! どんな写真を送られたものやら——。身に覚えある写真は、すべて生まれたままの姿で撮られた筈だった。ミシュリーヌは頬を染めて、深々と首を垂れた。

「じゃ、もう戻って来ないでね」

「はい。お世話になりました——」

コリンヌはスジィを横眼で睨んで去り、先ずは化粧室へ飛び込んだのだった。

ミシュリーヌは胸ふくらませて獄門へと歩んだ。かりそめの自由ながら、縛しめなしにあの門を出て行けるのだ。

「ゆっくり歩いても四十分で着くわ。お天気もいいし——ほんとによかったこと」

クララが出門手続きをしてくれながら、そう云って微笑んだ。

「それとも、タクシーを呼ぶ？ そんなこと

はしない方がいいと思うけど——」

ミシュリーヌは乏しい懷中を思い浮かべて肩をすくめ、そして、ハツと思い出した。

「すみません。やっぱり、タクシーにしますわ。駅前のタクシー。たしか——そう、エドアル・モナースさん——その運転手のひとがいらっしゃれば——お願いします。電話して下さいます？ すみません、ほんとに」

「いいとも」

男の保安課員は、ミシュリーヌをじっと見詰めて引き受けてくれた。

「もう、おどおどと遠慮することないんだ。あんたみたいなのは、仮釈も満期も同じことだよなあ。あ、駅前タクシーかい？」

「知ってるの？ そのエドアルとかいう……」

「はい。ちょっと——。いけませんかしら？ クララさま」

「いいとも悪いとも云えないね。でもともかく、ぜいたくはいけないよ」

しかし、ミシュリーヌは眉をあげて、窓外の空を、森の梢を、想いをこめて見詰めた。

運転手エドアルは折よく居た。

「じゃ、門のそとで待ちなさい。私はこれでお別れするわ。元気だね」

ミシュリーヌは深々と頭を下げ、潜り出た

鉄門を振り返り、それを背にして胸一杯に自由を吸い込んだ。

エドアルの車を待つ間、ミシュリーヌは初秋の陽に金髪をきらめかせつつ、スーツケースをそっと開いた。ふるえる指先に取り出して眺め入るは、玲瓏と清らかなそのかみを秘めた舞踏会の手帖と、想い出もほの暖かきシャルルの遺影であった――。

その頃、婦人看守イヴェット・ヴラディは所長応接室の片隅に立たされ、泣きそうな顔で油を絞られていた。

「――すみませんでした。今後、注意いたします――」

「ともかく、全然タルンでるじゃない？」

婦人検事グレイスは威丈高――革張り椅子にふんぞり返って脚を組む。女囚ダイアナが証言を拒否するとは思ひも寄らないショックだったし、この婦人看守は廊下でぶっかかり合いそうになっても検事バッジに敬意を示そうともしなかったし――あれやこれやで、自尊心を大いに傷つけられたグレイスだった。

「被拘禁者が席につく前に腰をおろしたじゃないの、あんたは。え？ 全然、姿勢がなっていないわ。時計ばかり気にして、女囚が喚き出したって処置を取ろうともしやしない。そ

のバッジはアクセサリイなのね」
「申しわけございません――」

詫びながら、イヴェットは唇を噛んだ。階級と身分の差がひしひしと口惜しかった。

――ミシュリーヌは車を迎えて、運転席のエドアルに手を振った。

「ああ、あなたでしたかい。いや、よく憶えてますよ。新聞にも出ましたしね。いや、おめでとう。あのときは失礼しましたわい、知らなかったもんで。よくぞ、わしをおぼえていて下さった」

エドアルはミシュリーヌをまぶしげに眺めながら、一昨年の晩秋の夕べのときとは打って変って、初老の男にふさわしい口調であった。

「あのとき、ホラ、私がシュザンさんに連れられてここで降りたとき、あなた、そうおっしゃって下さったわね？ 迎えに来てやるって――。だから、私――。でも――いけなかったかしら？ 御迷惑でしょ。嬉しかったもんだから、思い出して、つい――。やっぱり歩きますわ。私、まだそんな身分じゃなかったんです。すみません――」

エドアルは車を降りて来て、客席のドアを静かに開けた。

「なにを詰まらんことを――。わしのことをおぼえていて下さっただけで涙が出ますよ。

失礼だが料金は要りません。なんの御心配も御無用――なんの心配もね。あなたが言い寄って来たら声を立てますからな、ハハハ」

そして、エドアルは態度を改め、スーツケースをつと奪い、いんぎんな物腰で続けた。

「御苦労さまでした。さ、どうぞお乗り下さいます。伯爵夫人――」

ミシュリーヌはしばし立ちつくし、ややあって、優雅な身のこなしで車中のひととなった。

「どちらへ参りましょう？ 伯爵夫人――」

「コンピエーヌ駅――」

「はい。承知いたしました」

ミシュリーヌは深々とシートに埋もれ、さしぐむ涙が頬を濡らすにまかせたのだった。

――イヴェットは姿勢を正して、何度目かの詫びを入れた。コリンヌや総務課長も取りなしてくれ、漸くにしてグレイスが云った。

「――では、今後気をつけなさい。自分の職務に誇りを持って、厳正に行動してね。なんといったって、あなたたちが正義の最後の防壁なのよ。いくら私たちが頑張ったって、あなたたちがしっかりしてなきゃね。そうでし

よ？ じゃ、退っていいわ」

右手でひっぱたいて左手で撫でる。正統派官僚の常用テクニクだ。

イヴェットは時計を盗み見た。なんとか間に合いそうだ。早々に飛び出そうとした彼女は忽ち呼び止められた。

「敬礼は？ ダメじゃないのッ」

「そうなのよ、コリンヌ。欠礼はこれで三回目。ほんとに、もう——」

イヴェットは胸を熱くし、踵を鳴らせて敬礼した。しかし、こんどはコリンヌ課長の訓戒が始まってしまった。コリンヌにして見れば、ここらで折目をつけて見せねば具合が悪い。

イヴェットは貴重な数分間を失い、眼に涙を浮かべて廊下を急いだ。

「お前さん、油絞られたんだね。お気の毒」地下通路への鉄格子扉の前でレダが云う。

「相手はクソ生意気な娘検事だろ？ 気持は分かるよ。なんてったって偉くならなきゃ駄目さ。下積みじゃねえ。まだ若いんだから、これから勉強して学校へお行きよ、あんた」——そうだわ、こんな悲しい思いするのも下っ端だからだわ。ミシュリーヌさまさえ落ち着かれたら、辞めてお勉強しなくちゃ。そし

て、あの小憎らしいグレイスを見返してやらなきゃ。そう、弁護士がいいわ。一生懸命にやれば資格試験に通るわよ——

イヴェットは地下通路を走りながら、齒がみする心地で考えるのだった。

あのグレイスを法廷でギューギュー云わせてやるわ。そして、可哀想な女たちの味方になってやるのよ——

監舎の詰所へ飛び込むと、看守長室から嘸鳴り声が響き渡っていた。三〇八号ダイアナがジョアンヌ女史の叱責を浴びているのだ。

覗いて見ると、ダイアナは「ベルト」股手錠で「膝角立ち」——既に責苦も永いと思えて、思いきり張った両腿がびくびくふるえ、

赤裸かの全身に油汗が滲み出ている。「いま顔出しちゃダメ。物凄く低気圧の真最中なんだから。あなた、早引けなんですよ」

片眼つぶってフィリスが袖を引く。「「ベルト」だって、女史が自分でかけちゃったわ。どこかがミリミリ裂けるんじゃないか——と。ま、あの声が五十フォーンぐらいに静まるまで待つ方がお徳用よ」

イヴェットはイライラと足踏みした。「あなた、今日はいったい何の御用？ スゴク急いでるけど——。デイト？ 男ってもの

は、一時間くらい待たせてやるものよ。でもねえ、そうはいうものの——あーあ、これと思う殿方を逮捕しちゃうわけに行かないかしらねえ——」

一年足らずで破鏡の憂き目——そして、それから十年間を売れ残りのフィリスだった。「ね、ねえ、イヴェット。ここいらの森からアミアンあたりの丘でロケがあるんだって!! 知ってる？ ホラ。興味ない？」

フィリスは芸能雑誌を突きつけた。「シネモンド社のメロドラマよ。『伯爵夫人の秘密』——。主演はマリナ・リシャル。素敵ねえ、彼女。私と同年だけど、あの容姿はどうお？ ホラ、見て御覧よ」

イヴェットはカラー写真を横眼で見やり、ふん、と鼻を寄せた。マリナ・リシャルとは、イヴェットが嘗ての女仲間、あのクローディアの化け終うせた芸名であった。

あのクローディアが伯爵夫人を演じるんですって！ 世も末だわ、おかしくって——

「あら、イヴェット。まだ居たの？」

マジョーリが労役場から降りて来た。

「ハ、ハーン、なるほど。だいぶ風雲急ね。検事さまともなれば、青二才娘でも大した御威光なこと。女史、一生懸命なのね。だけど

教えてやりやいいのにねえ、三〇八号を云うこと聞かせちゃう奥の手をさア。フフ。構うことないわ、帰んなさいよ、イヴェット、私に任せといて。うまくやっつくから」

イヴェットは、あとをも見ずに飛び出したのだった。

「ありゃ、またタクシーかい？」

と、門衛の男が肩をすくめた。

「またっていうと——？」

「そうさ。さっき、名花一輪もお呼びになったね。あ——車あるかい？ え？ ない？」

イヴェットは物も云わずに走り出し、男は呆れて見送った。

彼女は二軒の道をひた走り、胸も破れる思いでコンピエーヌ駅に駆け込んだ。時計を見るまでもなく列車は既に去り、改札口の表示器が音を立てて、次の列車に切り替わる最中だった。

イヴェットは恨みをこめてホームに立ち、鉄路の彼方を眺めやった。木柵に咲き乱れるコスモスの花——イヴェットは古びた木柵にもたれ、コスモスの中に立った。必ずや、ミシュリーヌさまもこの花の中にこうして立って、列車をお待ちになったに違いない。

イヴェットは凝然と佇み、風雪を刻んだ木

柵を撫でた。静かなホームのたたずまいに彼女の想いは、いにしえを馳せる——。

幼き日、イヴェットは独り田舎の駅に来て遊んだものだった。コモ湖畔のひなびた小駅は終日のどかにひっそりと、日に何本かの列車が去ったあとは人影もなく、秋の日にコスモスが木柵に乱れていた。そして——おみずからお出向きになったミシュリーヌ奥様に伴なわれ、十五才のイヴェットがお邸へ旅立った。秋の午后、そのホームには、やはりコスモスが咲き乱れていた——。

イヴェットは、去りしひとを想い慕って、長いことホームに立っていた。

次の列車であとを追って見たとて、ミシュリーヌさまは既に保護観察官とやらの掌握下にあることだろう。追ってお逢いするのは、かえって奥さまのためにならない。

イヴェットはもう一度鉄路の彼方を眺めやり、悄然とコンピエーヌ駅を立ち去った。

——ミシュリーヌは三等車の席に行儀よく腰掛けて、窓外を飽かず眺め入っていた。飛んで行きたいパリの空は、さらに遠去かりつつあった。

ときどき腕をあげて窓にさわり、子供のよう

に窓外へ突き出す。手錠のない喜びを自ら確かめ、ひとびとも見て欲しい心地であった。ミシュリーヌはホッと吐息を洩らし、深々と安らいだ。固い三等車のシートも、彼女にとっては雲に坐る心地だった。

人は旅に出て汽車の一隅に身を寄せる時、安らぎと解放感を味わう。そうして坐っている限り、自分の行先はあなた任せ、自ら思い患らうことは一切ないからだ。

ミシュリーヌは、過ぎし二とせ余の日々を想い返した。哀しくもみじめな明け暮れではあったが、いまにして想えば、一切をあなた任せの気安さがあった。どうしようもない境涯に諦め切って、そこには安心立命の境地さえあった。

しかし、ミシュリーヌはいま、あなた任せのその「汽車」から降りて、自分の脚で歩かねばならないのだ。

保護観察官さまとやらに手を曳いて戴いて——そして、ああ、神さま。どうか、お力をお貸し下さいまし。私は独りぼっち——なのに、あの子に——おお、あの子に、してやらねばならぬことが山ほどもございますの——ミシュリーヌはひたすらに祈り、鋼鉄の痕微かに残る両手首を見詰め、そして、決然と眉をあげた。

奇クジャーナル

発行・奇ク愛好家クラブ
編集・マニアテング

「ことば」——奇ク四月号を展望——

新しい風俗文献誌「奇譚クラブ」四月号が新刊された。総体的に見て「編集だより」の「本年は更に『読みごたえのある』『後世に残して価値のある文献性を持つ』雑誌」という裏付けを今号の全誌面により取れた。具体的に、まず「奇クサロン」がようやくここに決定版が生み出されたこと。新たに「実話と体験」懸賞原稿募集が発表されたこと。団鬼六提供による映画シナリオ「燃ゆる美女」や斎藤夜居「稿談性風俗資料入門」などなど。読みごたえのある雑誌とは、読む雑誌より一歩前進を意味した言葉のアヤがあり読むより「読みごたえ」という編集部の前向きな姿勢は誠に快よいひびきを持っている。たしかに、昨年より今年にかけて読む雑誌の成果を

|| 魔 仁 阿 天 狗 ||

漸次高めつつあることは間違いないことだがこの四月号をケイキとしてさらに期待できるのは慶賀にたえないことだ。

編集部への公開状！

——奇クサロンなど——

四月号より奇譚クラブ独自の頁でもある「奇クサロン」が本文終りの方に移り、また「目次」もサロンの案内を上段にした。この目次の編集構成は内容の充実と、その発展を暗示させたばかりでなく、本文の作品案内もスッキリとして、まずは成功と見る。これから益々、バラエティーにとんだ編集をするためにも、まだ題名が並べられる余地があるぞ——という期待を持たせた。ここで一寸、手前味噌になるが、筆者が新刊を手にした時、ろくに目次もみず、すぐパラパラと頁をめく

って実におどろいた。あれ？ サロンよ、どこに行ったかということだ。改めて目次をじっくりと見て、本文の終りに鎮座していることを知ったわけだが、まったく習慣というものはおそろしいものだ。まさか、予告もなくとつぜん本陣替えしたとは思わなかったからだ。四月号の現状ではサロンの移動だけではホメられない。サロン・ムードから本文に入った方が自然だし楽しい。サロン移動絶対反対！のプラカード代りに編集長宛に私信（速達便）を出そうとして、いや、待てよと腕を組んだ。これは、何か編集部に神算あつてのことではないかということだ。そこで（筆者の推察だが）本文の中にカコミで唄ってある「実話と体験」募集、これと結び付けてみた。いずれこの分野は、本誌の異色カラー頁となるだろう。それは投書山積の結果、増頁？ して独立した場所を与えられる。このニューフェイス（実話と体験手記）、先輩（サロン）が開拓した場所をゆずられる？ これで奇譚クラブも前に「実話と体験の頁」、後に「サロン」と、本文をはさんで一層、百花燎乱ともならんか。

さて、この「実話と体験」募集については相当に編集部も力を入れて、永続的に発展さ

せたい意欲は、その裏付けとして「編集だより」にある「東京駐在編集員、地方都市駐在編集員、探訪記者」を募集という側面的な要望がもたらされて、うなずける物がある。

ただ、直言したいのは、単なる実話雑誌的な内容になってしまつては困るということ。

世にかつては、日本文芸社で発行の『現代読本』これなどは盛り沢山のオール実話とかで五百頁の厚さの特大号を出した程。などなど実話誌の数は多い。いま発行されてる三流週刊誌も時流に乗って異常な実話？（ウソかホントか判らない）が、けっこう巾をきかしている。どうせ本誌でやるなら、あくまでもK K的にして他誌にはマネのできない、新しい見方による作品の取り上げ方をすると共に、そのような応募指導を切望したい。そうでないと、このせつかくの好企図も、レンアイ小説あり、実話あり、SMありの中途ハンパなカストリ雑誌的な昔に戻す危険もあるうか。オバケが、犯罪が、本誌にどのような形で掲載されるか、興味はある。SMショー、仮設興行（見世物奇譚）女相撲、トルコ風呂（特にSM的なサービスする？）などの現地ルポは、生きた風俗文献誌としてのためにも、その成功を祈りたい。

「サロン」寸感

本稿、はじめの方にも述べたが、今回の奇クサロンの充実ぶりは、実に決定版とも云える。楽我記あり、詩あり、告白あり、時評あり、映画紹介あり、イメージ画集あり、フォト通信ありで「あり」の接読詞をいくつも使う始末だ。サロンの頁だけでも儼に小型の奇譚クラブの内容を持ち、立派に一本立ちできる。その世界で楽しみ、また、本文の世界でこれ又、一層、楽しむ。まさにダブル・サードビスとはこのことだ。本文とサロンとを一緒にした奇譚クラブはデラックスな親子丼！

最近のイメージ画集の元祖である室井亜砂路氏のこの頁に於ける活躍は「イメージ画集」という新しい画風をもたらし、口絵及び挿絵の制約下に、本当に注目すべき貢献を成した。今号の「恋人募集」デザインはアイデアの点で出色。また氏は目次のカットでも新鮮な画筆をふっている。サロンが生んだSMロマンティックな画風を支持したい。

注目したい手記／スカタロジーに憑かれてV・マニア、巷を行く

正月号の団・辻村両氏の対談で、大いに外

部の空気を注入したいという意味の話があったが「私の異常体験告白」津川博「スカタロジーに憑かれて」によって一つの世界を実現させた。この方向は読む雑誌としての本誌にプラスとなろう。読者中心という特色ある奇譚クラブに横の繋りが、このような形で具体化されたことは幸だ。この手記を取り上げた編集部の見識に感心する。そしてこの作者によって、司会者津川博、出席者立川談志、梶川季之、芳野眉美の各氏という夢の座談会も望みたい。

奇クジャーナル「編集後記」

単に編集後記をするだけでは面白くないので、いま流行？の贋作を持って御座興としたい（本誌の四月号編集後記に挑戦？か）

☆編集後記☆

○久方ぶりに誠にひねくったジャパンもアチャラも忍法までも飛び出す明治百年にふさわしい黒瀬一氏の登場は「贋作イーリアス」という実験作。頭のレクリエーションにどうぞ。新人、津川博氏のどこかとぼけた告白／スカタロジーに憑かれてVは、数少しいこの分野にあって今後が期待される。

○中年男の良さもいやらしさもサラケだす体当り派、辻村隆氏のカメラ・ハントは、緊縛映画の人気スター、辰巳典子の巻で舞台は東京。今月随一の呼物。M派健在なり！ みはら・ひろし氏の筆は快調にして今回は△中立地帯▽。Mファンへの最大のプレゼント。

○重量級、斎藤夜居氏の「稿談性風俗資料入門」は、その風俗文献コレクションの龐大さに驚倒せよ！ コントの名手、水沢登氏の△あぶ・らぶす・こんと▽は

毎月確実に入手されるために

本誌予約購読者を募る

毎月二十五日確実発売！

一月分	1冊	三五〇円 (送20円)
三月分	3冊	一〇五〇円 (送共)
半年分	6冊	二一〇〇円 (送共)
一年分	12冊	四二〇〇円 (送共)

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、或は地方のため、入手することが出来ないとかいう声を聞きます。又、毎月確実に、早い目に、手に入れたらという御希望をよく承ります。そういった方々は、どうぞ是非月極御予約下さるようお願い致します。毎月製本完成と同時に、お手元までお届け致します。○直接予約購読のお申込みを下さるのには

軽快なタッチ、落語家・立川談志もきつとodorokく一篇。

○「花と蛇」「鬼六談義、男と女の話」と読者よ両手に花の幸せに陶醉されよ！

○写されてもよし、書くもよし、ミス・長井葉津子の「白い肌のアザ」は、ドキ・ドキして読みましょう。

○本誌が特選『SM一〇〇問』は、往年の名カメラマン、塚本鉄三氏がビデオ・ダンスケかついで再登場！ 立体構成によるインタビューに注目されたい。

大阪市住吉局私書箱第四十一号暁出版株式会社宛表記予約購読料をお払込みの上、何年何月号より何カ月分と御指定下さい。

○三月分以上お申込みの節は、送料、包装代などは、総べて当社にて負担致します。但し一冊毎お申込みの方は、送料として一冊分二十円(切手可)の御負担を願います。

○本誌は十月号から定価三五〇円に値上げになりましたので、予約購読料は三月分三冊一〇五〇円、半年分六冊二一〇〇円、一年分十二冊四二〇〇円になります。今後当分の間誌代の改訂はしない予定です。

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊宛お申込み下さる方は、誌代送料三七〇円をなるべく毎月十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読者の方の分と一緒に発送致します。

○芳野眉美氏の素顔をチラツカせる「濡れにぞ濡れし」はさわやかな佳品。なつかしい風俗絵巻をくり展げる牧高志氏は風俗誌の伝統を身につけた貴重な存在。「振袖残華」は、この人ならではの持味が充分に発揮された。読む雑誌としての内容充実のため、新企画のこともあり、いよいよ次号あたりは定価据置、増頁の予定(予定は未定にして予定にあらずの予定)である。乞う！ 御期待！

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何カ月分送れとお書き願います。第一回分発送の際、明細表を雑誌に添布致します。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたしますので御留意願います。○予約金が切れまじるときは、封筒の上に△本号にて前金切△の判を捺印致しますから継続お払込み願います。継続のお払込みでも何月号からと御明記願います。○局留にて雑誌をお受けとりにならない方は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りに行きたい郵便局(特定郵便局でも結構です)と受取人のお名前とをお知らせ下さい。ば、当方では御指定の局留としてお送りいたします。数日後その局で御受領願います。局での留置期間は十日間です。その間にお受取りにならないときは、発送人に返戻されます。



ピンク映画シナリオ(団 鬼六・提供)

製作・ヤマベ・プロダクション

残酷・性の贄

脚本・

団 鬼六

監督・

三 樹 英 樹

1 賭 場

壺振りの雄吉、賽と壺を両手に持って埋め
尽す客人達を見廻す。

温泉旅館、辰見屋の二階をぶっ通して開張
されている花村組の賭場だ。

雄 吉 よござんすね。皆さん方。

登 場 人 物

清太郎	八郎	武雄	花村	銀次	京二	大崎	伊沢	松吉	雄吉	健次	三吉	和助	町子	マカリ	ユカ	百合子	朱美	光子	愛子	浜子	菊子
野上	山本	里見	鶴岡	長岡	港岡	木村	市村	二階堂	杉山	北村	司分	国水	清分	桂水	谷水	林水	白川	祝川	乱川	辰己	山吹
正義	昌平	孝二	八郎	丈二	雄一	讓二	讓二	相一	相一	相一	二健	世津	奈美	ナオミ	美樹	和美	和子	マ寿	孝子	典子	ゆかり

賽を壺にポンポンと投げこみ、それが盆莫
座の上に落ちると、客人達の間から一せいに
丁だ半だの声がかかり、乱れ飛ぶ札束。
丁方、半方、揃いやした。

畳の中央を縦に走っている白布の左右に手の切れそうな札束が賭金としてずらりと並び、手提金庫（寺銭箱）の横に坐って観戦している花村組会長、花村の眼が満足そうに微笑している。煙草を口にして火をつける。

盆莫座に伏せられた賽の方へ客達のギラギラした眼が一せいに向けられている。

「勝負！」と、壺が上げられた。

雄吉 丁！

盆莫座の上の賽は三々の丁。

その二つの賽の上に、たぶって、「タイトル」以下、「キャスト」等――。

2 ネ オン 街

3 連れ込みホテルの一室

ベッドの上で濃厚な抱擁をつづけている伊沢と百合。窓から街のネオンが物悲しげに明滅している。

伊沢、ふーと深い息をつき、上体を起す。

百合 どうしたの。嫌に元気がないじゃない。

伊沢 ああ。（気だるそうに首を動かす）

百合 ね。何か心配事があるなら、隠さずおっしゃって。近頃の貴方、何だか変だわ。

伊沢 とうとう穴をあけちゃったんだよ。会社の經理に。

百合 えっ。

伊沢 競輪なんだ。最初は馬鹿に調子よく

いったんだが、十万ばかりの穴が二十万、三十万とふえちまって――。

百合 で、一体、いくら程――。

伊沢 三百万くらいになるかな。

百合 そ、そんな大金を――。

伊沢 ああ――俺はもう駄目だ。頼む、百合、もう何も云わないでくれ。

伊沢、頭をかかえるようにしてベッドに転がる。

伊沢 君との結婚ももうあきらめたよ。お

そかれ早かれ、刑事問題になるんだ。もう駄目なんだよ。（すすり上げる）

百合、恐怖に顔をひきつらせる。

4 アパートの階段

百合、力のない足どりで上って行く。

5 同、部屋

百合、部屋の中に入って来ると水道の水を飲み、茶ぶ台の前にがっくり腰を落す。

深い溜息をつく。

ドアが開いて、姉の町子が帰って来る。水商売をしているらしく小粋な和服姿。

町子 只今――（しょんぼり坐っている百合子を見て）あら百合ちゃん。まだ起きてるの。

百合 お帰りなさい。お姉さん。

町子 あんた、今、帰って来たのね。

百合 ええ映画を見ていたものですから。

町子 映画にしちゃおそすぎるじゃないの。もう十二時過ぎてんのよ。

町子、茶ぶ台の前に坐って、スシの折を置く。

町子 お店のお客におスシを御馳走になったの。これおみやげ。食べない？

百合 ええ。（元気がない）

町子 （憂うつそうな百合の横顔を見て）百合ちゃん。あんた、会社の伊沢さん

と付き合うのはいいけれど、こんなに夜のおそいのは感心出来ないわね。

百合 姉さん。私達、もう駄目なのよ。

百合、両手で顔を覆いシクシク泣き出す。

町子 どうしたのよ。百合ちゃん。

百合 伊沢さんが賭事に手を出して会社の会計に三百万もの穴をあけてしまったのよ。

町子 ええ？ 三、三百万円だって。

町子、啞然として百合を見る。

すすり泣く百合。

町子 だから貴女は男を見る眼がないっていうのよ。伊沢っていう人、私は前から虫が好かなかったわ。

百合 （嗚咽する）

町子 ねえ、百合ちゃん。今からでもおそくないわ。巻添えを食わない内にそ



んな人との交際は断ち切って頂戴。貴女を幸せにする人は他に在るわ。その人は貴女を今でも真剣に愛しつづけているのよ。

百合 (泣き濡れた顔を上げ) それは清太郎さんの事なの。

町子 (うなずいて) そりゃ昔は、やくざだったお父さんの乾分で、随分と暴れ廻った事もある人だけど、今じゃすっかり更生して自動車工場で働いているのよ。やくざの垢をすっかり洗い落すまで貴女の前に現われないとまで決心しているの。あんないい人はめったに――。

百合 (キッとした顔で) お姉さん。

町子

百合 清太郎さんを愛しているのはお姉さんじゃないの。私、知ってるわ。

町子 (ハッと狼狽して) な、なにを云うのよ。百合ちゃん。

百合 姉さんは意気地なしよ。好きなら好きでどうして清太郎さんにつつかっていかないの。私、はっきり云ってきますけれど、やくざなんてやってた人は大嫌い。

町子 百合ちゃん。

百合 私は伊沢さんを愛してしまっているのよ。もうどうしようもない位に。

町子 そ、それじゃ、貴女は伊沢さんにもう体まで――。

百合 (うなずく)

町子 馬鹿!

町子、カッとして百合の頬をぶつ。畳に俯伏して泣きじゃくる百合。

そんな妹の姿を見ているうち、町子の胸は痛み出す。

町子 ぶったりしてごめんね、百合ちゃん。

百合――。

町子 貴女、そんなに伊沢さんが好きなの。

百合 (すすり上げながら、うなずく)

町子、酸っぱい表情になって、考えこむ。

6 自動車修理工場

白い作業服を着た清太郎、ポンコツ車の下にもぐりこんで仕事をしている。

八郎と武雄、気弱に眼をしょぼつかせながらポンコツ車の周囲をうろろしている。

八郎 (車の下に向かって) な、清太、もう二度とさばらねえよ。いい加減に勘弁してくれよ。

武雄 (反対側から車の下をのぞき) な、いいだろ、清太。二人ともこうして反省しているんだから。

清太郎 (車の下から) 駄目だね。手前達とはもう縁を切るさ。好きな所へ行きなよ。

八郎 そ、そんな水くさい。なあ、清太ったら。

清太郎 うるせえな全く。仕事が出来ねえじやねえか。

清太郎、むっとした顔で車の下から出て来る。

八郎 堅気になりたての時は時々間違いを起すもんだよ。大目に見てくれよ。な。

武雄 これからは心を入れかえて働くよ。そんなむつかしい顔せず、ニコニコと笑ってくれよ。ニコニコと。

清太郎 馬鹿野郎。この忙がしいのに一週間

も姿をくらましやがって、手前達、

一体どこをほつつき歩いてたんだ。

八郎 それがよ、昔の女に街の中でひょっ
くり出喰わしちゃってよ。

武雄 まあ、逢いたかったわってんで、奴
等つかんで離さねえんだ。うんと榮

養をとらせてあげるといふから女達
の御招待で熱海から箱根——。

清太郎 へえーおめえ達の女は随分と景気が
いいんだな。何の商売やってるん

だ。

八郎 つまり、恋人のいねえ淋しい男に楽
しい時間を与えてやるっという商売

らしいんだがね。

清太郎 廻りくどい事を云いやがって。結局
パン助じゃねえか。

八郎 そ、そんな人間きの悪い——。

清太郎 何を云いやがる。女から絞りとるく
せがまだおめえ達抜けねえんだな。

武雄 冗、冗談じゃねえ。俺達は愛し合っ
てるんだぜ。

清太郎 愛し合ってるだと——。

八郎 その証拠に女達は今朝、俺達のアパ
ートに押しかけて来たんだ。もう別

れて暮すのは嫌だってんで。

武雄 当分、あのアパートに二人とも腰を
すえる肚らしいんだよ。

清太郎 フン、勝手なもんだな。

武雄 全くだ。

清太郎、水道の水で手を洗い始めたが、ふ
と、驚いたように顔を上げ、

清太郎 冗談じゃないぜ。あの部屋は俺のも
んだ。手前達の女まで引きずりこま

れてたまるか。

八郎 そ、そうなんだが、何しろ、奴等、
強引なんで——。

八郎と武雄、情なそうに顔を見合わす。

7 清太郎のアパート

マリとユカ、二人で部屋の中を掃除し、人
形の飾箱などを棚の上に配置している。

マリ 夫婦で同居するってのも、面白いわ
ね。親友同志なんだから、何て事は

ないじゃない。

ユカ うん。かえって、その方が経済的だ
し、監視もよく行きとどくわ。

マリ (棚の上を整理して) さてっと。こ
れでさっぱりしたわ。

ユカ 少しは部屋らしくなったようね。
アパートのドアが少し開いて、その間から

清太郎、八郎、武雄の三人、中をのぞいて
いる。啞然としている清太郎。

八郎と武雄、面目なさそうな表情して、清
太郎に手を合わす。

8 酒場ドミノ

スタンドに坐って賑やかに酒を飲む八郎、
武雄、マリ、ユカ、その真中に坐っている

清太郎、何となく不快な顔つきでピーナツ
を口へほりこんでいる。

八郎 全く清太郎にや何から何までお世話
になっちゃまって。へへへ、おい、マ

リ、清太郎にお酌しねえか。

マリ はい。(とビールを手にし) 私、マ
リ、よろしくお願い致します。

武雄 (ユカに) よ、おめえもお酌して、
御挨拶申上げろ。

ユカ (ビールを取って) 私、ユカ、どう
ぞ御最良に——じゃなかった。色々
と御迷惑をかけて申し訳ありません。

清太郎、酸っぱい顔つきで二人の女の酌を
受け、

清太郎 ま、俺も、色々厚釜しい奴とは付き
合ったが、こんな目に合ったのは始

めてだよ。

武雄 (いい気嫌に酔っ払って) ま、清太
郎、そんな事にすんなよ。俺達が

ついてるじゃねえかよ。

清太郎 全く話にならねえや。
五人笑い出す。

ボックスの方の客の接待をしているホステ
スは町子だ。スタンドの方の笑声に振返り

微笑してやって来ると、スタンドの内側に
入る。

町子 随分と楽しそうね。

八郎 あ、お嬢さん、さ、さ、一杯いきま

町子 しょう。(コップを町子に手渡す)
お嬢さんはやめてよ。私じゃ夜の蝶々よ。さ、武雄さん、どうぞ。(ビールを武雄に向ける)

八郎 そうおっしゃっても、やっぱり、お嬢さんは俺達にとっちゃお嬢さんですよ。お嬢さんのお酌じゃ何だか、勿体なくて。

町子 嫌ねえ。そんな事いってりゃ私、失業しちゃうじゃないの。お願いだからお嬢さんは

武雄 よして。店の通り名の通りお町と呼んでよ。

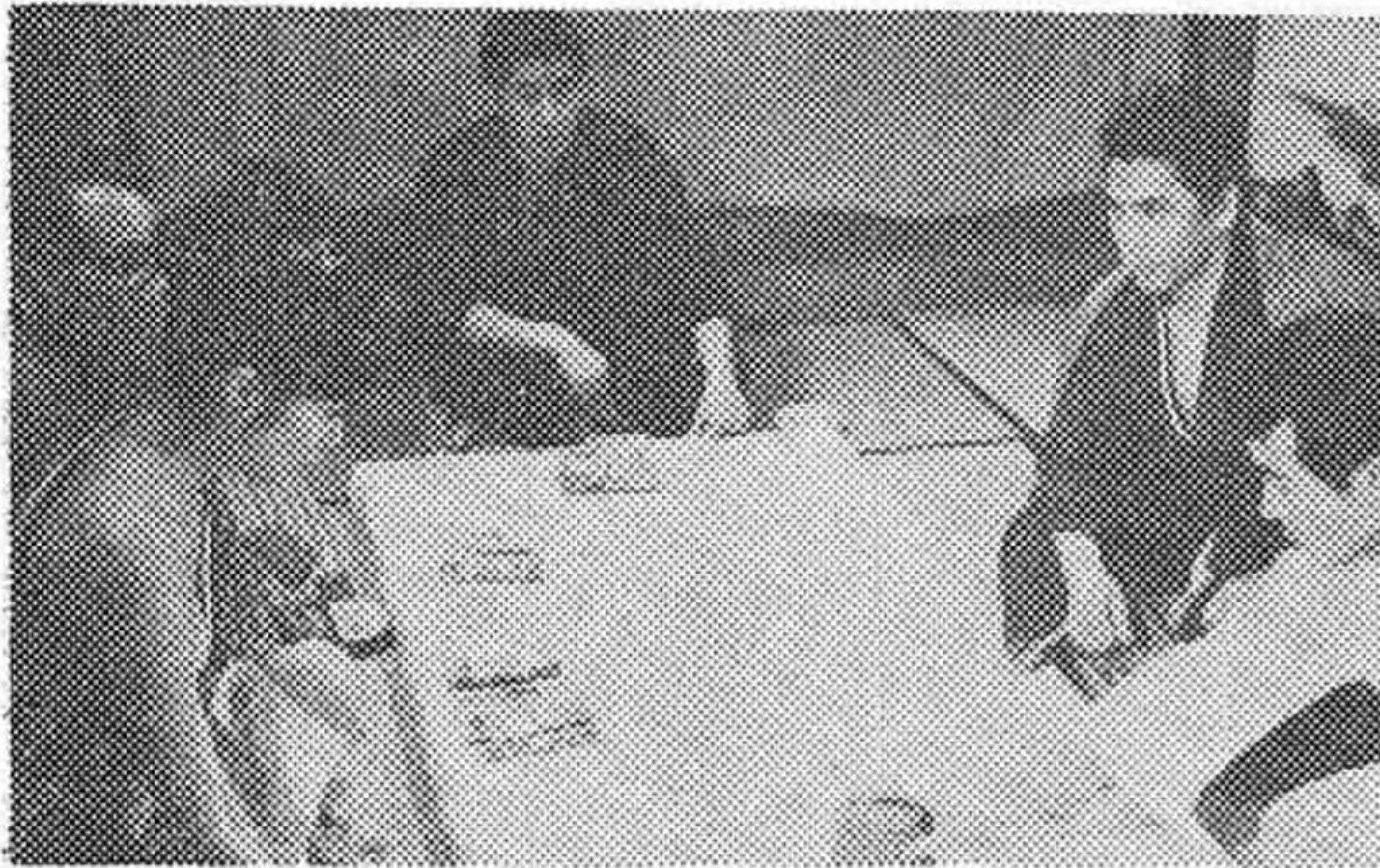
武雄 はいはい、わかりました。それじゃ、お町姐さんに乾杯だ。

突然、八郎がヒールと声を上げて泣き出したので、一同、びっくりする。

町子 ど、どうしたのよ。八郎さん。

八郎 (泣きながら)

八郎 (泣きながら)



親分が、親分が生きてなすったら、こんな苦勞をお嬢さんがする事はなかったんだ。

武雄 すみません、お嬢さん。この野郎、泣き上戸なもんですから。

八郎 (齒を喰いしばった顔つきで) 俺達に力がねえばかりに、

武雄 うるせえな、この野郎。黙れ!

武雄 八郎の頭にビールをぶっかける。それでピタリと黙り、立上ると、

八郎 あの、お便所はどこですか。

町子 ここを真直に行った右側よ。

八郎 ひよろひよろ歩き出す。清太郎 危ねえな、おい、大丈夫か。

マリ あんた、そっちじゃないわよ。

清太郎とマリ、立ち上り、八郎の肩を支えるようにしてついて行く。

町子 武雄さん。一寸、貴方に聞きたい事があるんだけど――。

武雄 へい。

町子 清太郎さんは、やっぱり今でも百合子の事を

武雄 ー。
そりゃお町姐さん聞くだけ野暮ですよ。見ていて涙ぐましい位ですぜ。年柄年中、百合さんの写真を体につけているし、恐れ入った事にゃ願かけのつもりか女を全く寄せつけねえんですよ。あれじゃ体にいいわけがねえ。

町子 ー。

武雄 これは内緒なんですがね。清太郎の奴、百合さんの名前で郵便貯金までしているんですぜ。いじらしいったらありゃしない。

町子 まあ。

武雄 それで肝心の百合さんの気持はどうなんでしょうかね。俺達も一日も早く清太郎が百合さんと――。

清太郎が泥酔状態の八郎を支えて戻って来たので武雄、口をつぐむ。

町子 ね清太郎さん。もうじきここは看板だから、どこかへ飲みに行こうよ。

私がおごるわ。

9 夜の 道

八郎はマリと、武雄はユミと肩を組み合い大声で唄をうたいながら、フラフラ歩いて行く。少し、離れたうしろを並んで歩く町子と清太郎。

清太郎 やくざの垢をすっかり洗い落すにゃ

清太郎 やくざの垢をすっかり洗い落すにゃ

清太郎 やくざの垢をすっかり洗い落すにゃ

あと一、二年はかかると思うんですよ。それから、俺は百合さんの前へ出て男らしく――。

町子 でもね、清太郎さん。

清太郎 はあ？

町子 俗に云うじゃない、女心と秋の空ってね。

清太郎 (ふと足を止める) それじゃ、百合さんは誰か好きな男が――！

町子 (清太郎の硬化した表情に驚いて) いえ、何も、そうきまったわけじゃないけど、あんたのように、半年、一年と好きな女から遠ざかるのはよくないといってるんだよ。どうした風の吹き廻しで女ってものは、他の男になびかないとは限らない。

清太郎 (笑って) 百合さんに限って、そんな事はありませんよ。世間知らずのお嬢さんだったじゃありませんか。

町子 世間知らずねえ。

前方の街路樹の下で、息をはずませて男女が抱擁し合っている。

それを見ると、八郎と武雄、ニヤニヤして冷やかし始める。

八郎 よ、よ、御兩人。お安くねえな。

武雄 安いホテルがあるぜ。教えてやろうか。

清太郎 (八郎達を叱って) 人様の事はほっ

ときなよ。だから俺達は何時までたっても世間から白い眼で見られるんだぜ。

物陰にいた男女、逃げるように歩き出し清太郎の前を通り過ぎようとしたが、途端、清太郎、「あっ」と声を出す。町子もギョツとする。その二人は百合と伊沢なのだ。百合も清太郎と町子を見て棒立ちになる。

清太郎 百、百合さん。

百合、おろおろするが、すぐに冷淡な表情になり、

百合 清太郎さん。紹介致しますわ。こちら私のフィアンセの伊沢さんです。

清太郎 えっ、じゃ、この方が百合さんの―― (啞然とした顔)

少し離れた所から眺めている八郎と武雄。

八郎 何でえ、フィアンセって。

武雄 婚約者って事だよ。

八郎 フーン。

一方、睨合ったような形の清太郎と百合。

町子、おろおろして清太郎の横顔を見ている。

百合 じゃ、伊沢さん、行きましょう。

清太郎 百合さん。

百合 私達、今、事情があつてとても忙がしい体なの。悪いけど今夜は失礼するわ。

清太郎――！

百合 (清太郎と町子の顔を見くらべるようにして) お幸せにね、左様なら。

百合、伊沢に手をからませて歩き出す。そのあとを呆然と見送る清太郎、町子、そして、八郎、武雄達――。

八郎 (慰める気で清太郎の肩をたたく) 女は星の数ほどいるんだぜ清太郎。

武雄 さ、一丁、パツと騒ぎに行こうじゃねえか。

清太郎 ほっといてくれ！

その声が大きかったので、八郎達びっくりする。

清太郎 俺を一人にしろといてくれ。

武雄 でも、清太郎。

町子 (武雄に) ね、私からもお願い、あんた達はこれから帰って頂戴。清太郎さんは私が――。

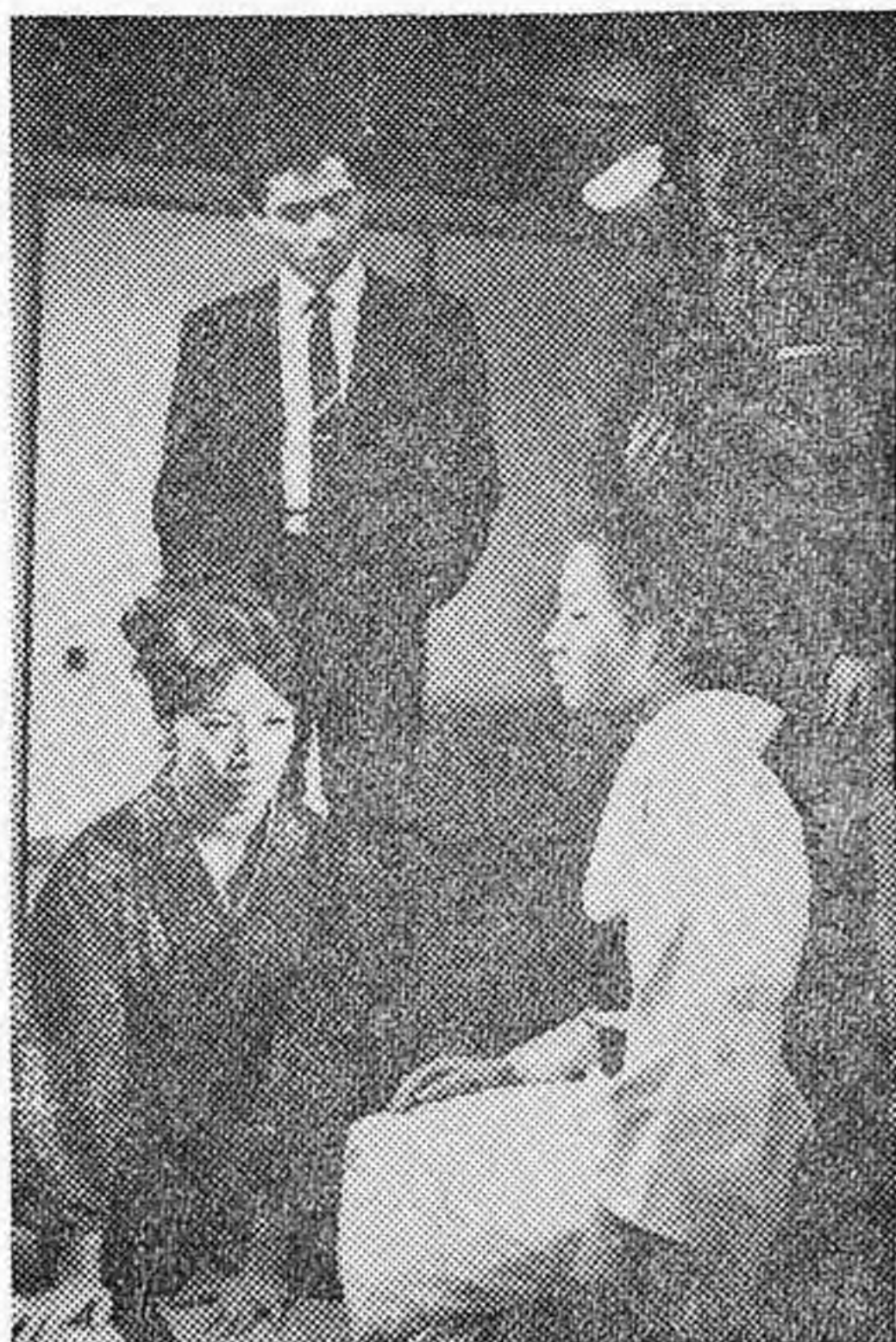
八郎と武雄、うなずき、マリとユカの肩に手をかけ力の無い鼻唄を唄って歩き出す。

町子 何時までもそんな所に突っ立っていつたって仕方がないじゃないの、清太郎さん。さ、飲みに行こう。元氣をお出したら。

10 清太郎のアパート

ドアが開いて、八郎、武雄、マリ、ユカの四人、フラフラと入って来る。部屋へ上つて、ハンドバッグを投げ服を脱ぎながら、

マリ あーあ、何だかおかしい事になっち



やったわね。

ユカ 可哀そうで見ちゃいられなかったわ。それにしても百合さんっていう女、どうかと思うわね。清太郎さんは昔の恋人なんだろう。

八郎 女ってのは一皮むきゃああいうもんさ。畜生。

武雄 全く、頭にきちゃったぜ、俺は。

八郎と武雄、憤懣をぶつけ合うように脱ぐ服やズボンを畳の上にたたきつける。

マリとユカ、スリッパ姿になって、二つ敷かれてある夜具に、それぞれ体を滑りこませて行く。

マリ あーあ、疲れたわ。クタクタよ。

八郎 (酔い泣きして) 俺は、清太郎が可

哀そうで、可哀そうで——。

武雄 又泣きやがる。いいから早く寝ろ。

八郎、すすり上げながら、ユカの方の寝床に入って行き、武雄、大きくあくびしながら、マリの方の寝床に入って行く。

並んだ二つの夜具の中で、抱擁し合い、愛の行為が始まりかけたが、マリ、ふと気がついて、武雄の胸を押す。

マリ 一寸、自分の女房、間違えないでよ。あんたのは隣じゃないか。

武雄 ええ？ 道理でおっぱいの恰好が違うと思ったよ。

ユカ (びっくりして半身起し) あら、いやだあ、この人。一寸、一寸、八郎さん、あんた、お隣りよ。

八郎 (眠そうに眼をこすり) めんどくせえなあ。たまにや浮気しろ。

ユカ 冗談じゃないわよ。八郎と武雄、女達に追い出された形で枕をかかえ、フラフラ場所を交代し、再び愛の行為を続行し始める。

八郎 やっぱりうちの母ちゃんの方がいいや。

武雄 全くだ、全くだ。

11 赤提灯をぶら下げた

居酒屋

12 同、居酒屋の中

清太郎、白木の卓にがつくり首を落すようにして、コップ酒を握っている。

女将の菊子、酒の燗をしながら不安そうに清太郎と町子を見つめている。

町子 ね、清太郎さん。もうお酒はよした方がいいわ。何よ、たかが女一匹。

清太郎 (菊子に) 姐さん、すまないがもう一本頼む。

菊子 もうおよしよ。清さん、体に毒よ。縄のれんをかき分けて、けばけばしい化粧をしたコールガールの愛子が入って来る。

愛子 おう寒い寒い、おねえさん、熱い的一本つけてよ。

菊子 あいよ——だけど愛ちゃん、あんたうちで商売するのはやめとくれよ。

愛子 ええ？

菊子 この間だって、あんた、うちのお客を安旅館に啜えこんで行ったじゃないか。近頃、取締りがうるさいんだよ。

愛子 わかったわよ。(ちらと清太郎の方を見て) 今夜はひもつきか。ついちゃいないね。

町子、苦しげに頭を卓に押しつける清太郎の肩をさすったりして、

町子 さ、清太郎さん、帰りましょ。

清太郎 ほっといて下さいよ、お町さん。別に俺はどうって事は、ねえんですから。

町子 あのね、清太郎さん。私、以前から百合に男がいるって事は知っていたのよ。

清太郎 ——。

町子 でもね。あんたが一途に百合を思い詰めている姿を見ているとどうしても口にする事が出来なかったのよ。

清太郎 お町さん——。

清太郎、ふと悲しげな眼差しをするが、急に笑い出して、

清太郎 俺はおめでたい男ですよ。百合さんと一緒にになれる事ばかり夢みて、まる三年間、女気を断ち切ったのですからね。

町子 ——。

清太郎 だが、今日限り解禁だ。何だか、すーとした気分ですよ。お町さん、軽蔑なさるかも知れねえが、今夜は大胆に見てやっておくんない。

清太郎、ポケットから一万円札を出して隅に坐っているコールガールの愛子に投げつける。

清太郎 おい、今夜、手前を買ってやる。寝ぐらへ案内しな。

愛子 まあ、ほんと、嬉しいわあ。

愛子、清太郎の傍へびったり寄り添って来て、酌などし始め、清太郎、愛子の肩に手をかけて、無理にはしゃぎながら、

清太郎 お町さんは、もう帰って下せえ。死んだ親分のお嬢さんがいると、どうも気分が出ねえんですよ。そして百合さんに、清太郎て奴は、こういう下らねえ男だとおっしゃって下さい。

町子 (硬化した表情)

のれんをかきわけて、ギター流しの銀次が入って来る。

銀次 よう、これは兄貴、今夜はまた、随分と御機嫌で——。

清太郎 よ、玉ころがしの銀次か——。

銀次 玉ころがしはねえでしょう、兄貴。

俺はこれでも立派に出直したつもりなんですがね。

清太郎 手前のやっている事は、お見通しだよ。花村組なんか時々女を世話しているそうじゃねえか。

銀次 ご、ご存知だったんで。

清太郎 それで堅気になったといえるかよ。

愛子 ねえ。そんなうるさい事いわなくたっていいじゃない。

清太郎 (笑って) そうだな、俺も人に意見する柄じゃねえよ。すまなかったな。

銀次、何か一曲やってくれ。

銀次 へい、有難うございます。

銀次、ギターを抱えて唄い出す。

銀次の奏でる艶歌——。

キヤッキヤツと笑い合い、酒を飲み始める清太郎と愛子。

町子、悄然と立ち上り、店の外へ出て行く。

13 同、居酒屋の表

艶歌流れて——店の外へ出た町子、そのまゝ、しばらく立ちすくむ。流れる涙、視線を窓越しに店の中へ向けると、思いつめた表情になって一点を見つめている清太郎。その隣では、愛子が何か大口を開けて笑いコップ酒を吸いこんでいる。

14 暗い道

艶歌流れて——。

清太郎と愛子、肩を抱き合い、よろよろと歩いて行く。

そのうしろから、そつとあとをつけて歩く町子。ハンカチを握りしめ、号泣を必死にこらえている。

清太郎と愛子、近くの安旅館に吸いこまれるようにして入って行く。

町子、たまらなくなったよう反対側の方向へ走り出す。

15 安旅館の一室

艶歌流れて——。

能動的に挑んでくる愛子が無気力に抱擁している清太郎。

16 ネオン街

艶歌流れて――。

ねばりつくようなネオンを背に受けて、悄然と歩いている町子。

17 辰見荘、二階の賭場

(ファーストシーンの設定と同じ)

壺振りの雄吉、賽と壺を振りあげている。

雄 吉 さ、皆さん、よござんすね。

盆莫莖の上にポンと振り下された壺。

丁だ、半だ、と乱れ飛ぶ札束。

雄 吉 勝負っ――丁。

白布の上に置かれた負者の賭金が合力達の手でかき集められ勝者へ配分されていく。

手提金庫の傍で煙草をくゆらせていた花村灰皿に煙草をねじこむと、隣にいる乾分の松吉に、

松吉に、

花 村 ここは頼むぜ。一息入れて来る。

松 吉 へい。

花村、立上り襖を開けて出て行く。

18 一階、梅の間

姫鏡台の前で長襦袢姿の浜子(花村の妾)が化粧している。

襖が開いて花村が入って来る。

それを鏡の中にみて、

浜 子 うん、おそいのねえ。相変らず薄情な人だわ、親分は。

花 村 賭場が活気づいてきたんだよ。そう

おめえの御機嫌ばっかりはとっちゃ

いらねえ。

花村、笑いながら服を脱ぎ、宿着に着換え

る。

浜 子 場銭のあがりなんて乾分達に任せと

きゃいいじゃありませんか。

花 村 俺は商売熱心な男なんだよ。浜子、

お前、賭場のあがりつてのは一晩ど

れ位になるか考えた事があるのか。

浜 子 三十万? いや、五十万ぐらいにも

なるのかな。

花村、笑いながら、布団の中へ体を入れる

と、浜子も花村の横に体を滑り込ませる。

花 村 ケタが違うよ、浜子。ま、三百万か

ら五百万ってとこかな。

浜 子 まあ、そんなに――。

花 村 だから少々、危い橋を渡ってもこい

つばかりはやめられねえ。明日にな

りゃおめえ、関西の大物達がずらり

とここへ顔を並べる事になっている

んだぜ。そいつがすめばおめえにで

つかい家の一軒位建ててやるよ。

浜 子 ほんと親分、わあ、嬉しいわ。

浜子、花村にしがみついていく。

激しく浜子を抱きしめる花村。

床の間の電話がなる。花村、舌打ちして受

話器をとる。

花 村 どうしたんだ、ここへは電話するな

と云ったろう。

花 村 南原の娘だと――。

電話の声 へい。親分にどうしてもお眼にか

かりたいとおっしゃるんで――。

花 村 よし、待たせておけ。

花村、電話を切る。

浜 子 何よ、親分、南原の娘って。

花 村 ああ、南原ってのは昔、この一帯で

縄張りを張っていた南原一家の親分

さ。五年前に組を解散して、間もな

く死んだのだが、たしか娘が二人い

た。

浜 子 それがまた、どうしてここへ。

花 村 わからねえ。ここに賭場が立ったの

を知って小遣錢でもたかりに来たん

じゃねえかな。

浜 子 変な氣を起したら承知しないから、

その娘に。

花 村 冗談いうな、浜子。

浜子、鼻を鳴らして花村にしがみつく。

19 同、応接間

和服姿の町子、椅子に坐って待っている。

長時間待たされてるらしく、いらいらし

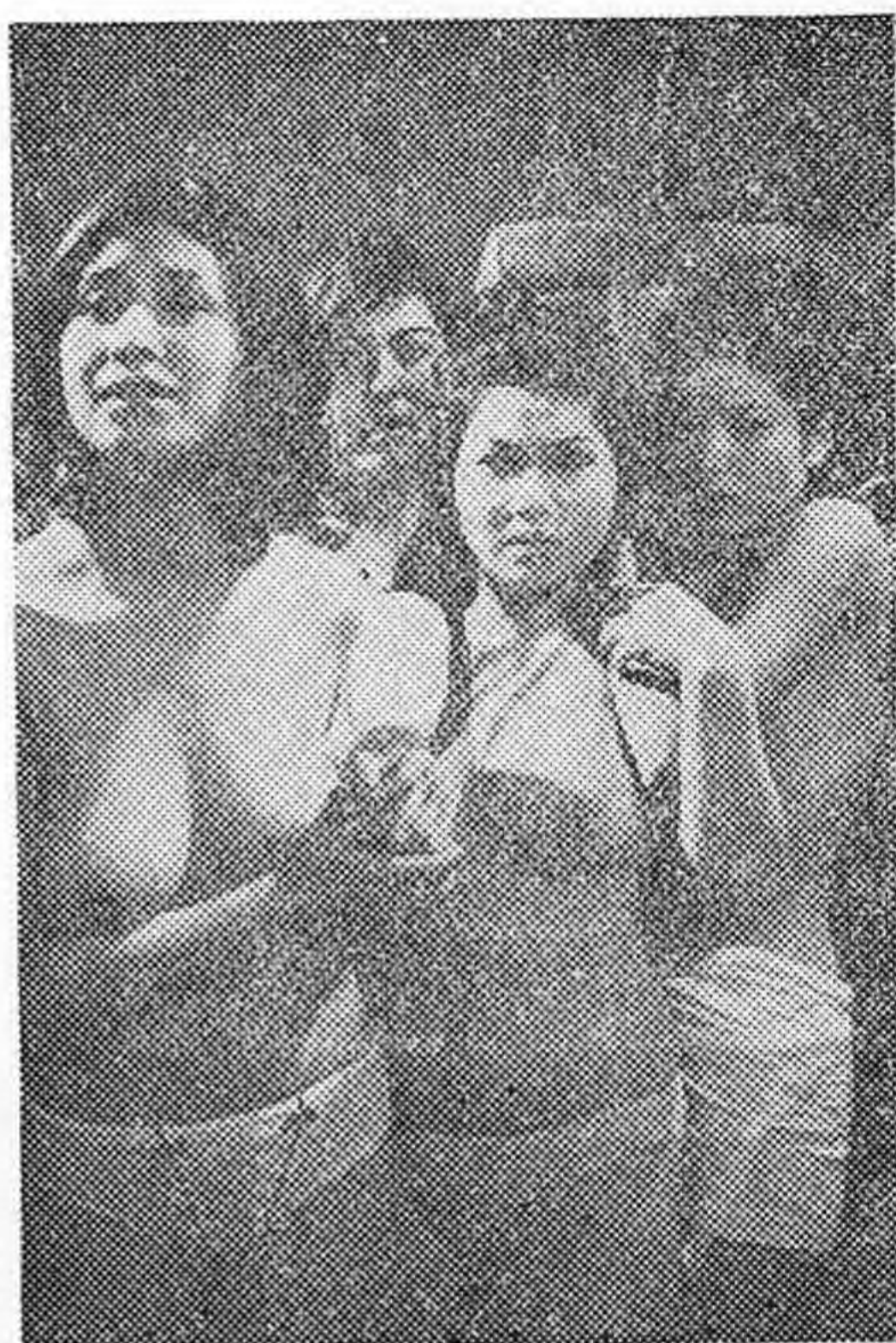
た表情で腕時計に眼をやる。

ドアが開いて、びっこをひいた花村組のチ

ンピラ、京二が茶を乗せた盆を持って入っ

て来る。

卓の上へ茶を置いた京二の横顔を見た町子



ふと不審そうな顔。

町子 あんたは、もしや——。

京二 へえ、南原の親分にお世話になった

京二ですよ、お嬢さん。

町子 ああ、やっぱり——。

京二 南原一家が解散になってから、何とか堅気になろうと俺も努力してみた

んですが、ゴロツキの血が骨の髄にまで込みこんでいるんですね。お羞しい話ですよ。

町子

それで、あんたは、今、この花村組に——。

京二 へい、拾われた野良犬ですよ。チン

ピラに格下げされて、何とか飯にありついてる情ねえ有様です。

京二、自嘲的に口元を歪める。

その時、花村が入って来る

花村 いや、お待たせしました。

京二、あわてて頭を下げ、

外へ出て行く。花村、ソファへ坐って、卓の上の煙草

をとり、口にする。

町子 相交らずお盛んなよ

うで、結構ですわね

花村さん。

花村 ああ、花村組もこの

所、一寸、有封^{うけ}に入^いって来た感じな

んですよ。ところで、何か御用件で

も——。

ええ。実は折入^{うけ}って、花村さんにお

願^{ねが}いしたい事がありました。

何ですか、一体。

実は——いえ、はっきり申し上げます

わ。私に三百万円ばかり用立てちゃ

頂けないでしょうか。

三百万円？

ええ。実は、妹の百合子に結婚の相

手が見つかったんです。ところが、

つまらない事にその相手が手を出し

て、会社の経理に穴をあけちまっ

た。至急三百万円の穴うめをしなき

20 同、応接間の外

京二が眼をしょぼつかせ、ドアに聞き耳を立てている。

21 同、応接間の中

町子 昔の話を今更切り出したくはないん

ですが、父が以前、この土地の縄張

りを花村さんに譲る時、花村さんは

父に一千万円のお金を渡す約束だっ

たと思います。

町子 (苦しそうな表情)

父が死んでしまった今、そんなもの

を私が請求出来る筋合じゃありません

が、妹は今、好きな男を助けよう

として必死なんです。ね、花村さ

ん。私達姉妹を助けると思っ^て、三

百万円だけ出して下さるわけにやい

かないでしょうか。

花村 (冷笑を浮かべて煙草を灰皿にねじ

こみ)だが、三百万といや大金だ。

お嬢さん、あんた何か担保を持っ

てるんですかい。

町子 (硬化した表情)た、担保ですって。

お嬢さん、時代が違いますよ。義理

がどうか人情がどうか、そうい

う芝居もどきの看板をぶら下げてい

るやくざは今時、はやりませんから

ね。あんたのお父さんとの口約束の

責任を追求されるなんて、はなはだ迷惑だ。俺達は合理主義ですべて割り切っているんですよ。

（怒りで体が慄える）

（ニヤリとして）それともどうです。今、二階で賭場が立っている。

あんたも南原親分の娘さんだ。一か八か、三百万の勝負を張ってみちゃどうです。

町子 勝負？ 私にバクチをやれと云うんですか。

花村 そう。あんたが俺とさしの勝負して勝ちゃ三百万、現ナマでお渡し致しやしよう。

町子 もし負ければ――。

花村 あんたの体をこっちの好きなようにさせて頂く。如何です。

町子、花村に挑みかかるような視線を向ける。

町子 いいわ。勝負させて下さい。

22 同、二階の賭場

畳に敷かれた白布をはさんで、花村と町子対峙する。

賭場の勝負は一時中断し、場内の客は、花村と町子のさしの勝負を見物しようとしている。

松吉 お客人方、恐れ入りますが、寸時の間、この賭場、拝借させて頂きとう

でございます。三百万、一勝負！

町子、片肌を脱ぎ、立膝して、盆莫莖を見つめる。声を殺し成行きを見つめる客達。

部屋の隅に突っ立っている京二、不安に眉を曇らせている。

花村の眼くばせを受け、壺振りの雄吉、壺と賽をさし上げる。

雄吉 それじゃ勝負致します。よろしゅうござんすね。

雄吉、壺に賽をはじきこんでポンと盆莫莖の上へ。



花村 さ、お嬢さんからどうぞ。

町子 （射るような眼差しで莫莖を見つめていたが）――丁っ。

花村 よし、半っ。

雄吉 勝負！
さっと振上げた壺の下には、三四の半。

町子、慄然とする。

花村 （北叟笑んで）勝負は俺の勝だ。約東通り、お前さんの身柄は、この花村組が預るからな。

町子 （青ざめている）
（乾分達に）このお嬢さんを浜子の部屋へ連れて行きな。

へい、と乾分の健次、和助の二人がうしろから町子の肩に手をかける。

健次 さ、立ちな、お嬢さん。

23 同、梅の間
襖が開いて、町子、健次と和助の二人に中へ突き入れられる。

つまりいて畳に手をついた町子、柳眉をさか立てて二人のやくざを睨む。

町子 な、なにをするのさ。

健次 何をするのだと。今日から手前はそういう生意気な口のきけねえ身分だぜ。

和助 花村組専用のコールガールだからな。

町子 な、なんだって。

花村が妾の浜子の肩に手をかけるようにして部屋の中へ入って来る。

町子、憤怒の色を眼に浮かべる。

浜子 (面白そうに町子を見て) へえ、これが元、南原組のお嬢さんなの。

花村 そうさ。親に似て、仲々気性の強い娘さんだ。よしいのに三百万も

の大勝負を挑んでこのざまさ。倉庫にいる女達と一緒にして、穴うめのために客を取らそうと思うんだが、お前の考えはどうだ。

浜子 (憎々しげに町子を見て) そうね。

元親分の娘だからといって特別に情をかける事はないわ。三百万せしめようとした大した女なんだからね。

町子 (口惜しげに唇を噛んで浜子を見上げる)

浜子 (男達に向かって) 倉庫の連中と同じように、その女も素っ裸にしちやいなよ。

健次 おっと、待ってました。

健次と和助、町子の襟首を取って引起す。

町子、必死に暴れる。

町子 け、けだものっ、お前達はそれでも人間のつもりかい。

花村 (むっとした顔で) うるせえ。いい

か。おめえは三百万で俺に買われたんだぜ。煮て喰おうと焼いて喰おう

とこっちの勝手だ。

浜子 そうよ、南原組の娘なら娘らしく、

往生際はきれいにしな。

健次と和助の手で解かれた町子の帯がとぐろを巻くように畳に落下し、小粋な着物がすっぽり肩から剥ぎ取られ、長襦袢姿になって狂ったように首を振る町子。

健次 さ、そいつも脱いだり、脱いだり。

町子 な、なにするのさっ、ああ――。

花村 往生際の悪い娘だ。健次、娘を丸裸にしたら縛りあげろ。少し、ヤキを入れてやる。

24 同、廊下

梅の間の襖の間から、京二、おろおろして中をのぞいている。

25 同、梅の間

湯文字一枚を残すだけの裸身を後手に縛られた町子、床の間の柱を背にして立たされ健次と和助にキリキリ縄止めをされている。

精も根も尽き果てたようがっくり首を落している町子。

畳に散乱している町子の着物を拾い集め手に抱えた浜子、次に町子の傍へ近寄って、耳飾りをひったくるようにして取り上げる。

浜子 あんたは今日から花村組の奴隷よ。

身分不相応なものは皆んな私が頂戴

しておくわ。悪く思わないでね。

町子 (唇をかたく噛む)

健次 へへへ、じゃ、こいつも。

健次、身をかがめて、湯文字の紐を解き始める。

カッと血がのぼった町子、片肢を上げて健次を蹴り上げる。ひっくり返る健次。

花村と浜子の洪笑を聞き、健次、眼をつり上げて立ち上がる。

健次 畜生。この阿女。

浜子 馬、馬鹿な事すると承知しないよ。

花村 そう何時までも強情をはると、おめえの不始末の穴埋めは妹にさせるぜ。

町子 な、なんだって。

花村 花村組の怖しさが、そろそろわかっててもよさそうなもんだがな。お嬢さん。

町子、屈服したよう首を垂れ、すすり泣く。

花村、ニヤリとして健次達に眼くばせする。

健次と和助、舌なめずりするよう町子の足元へ腰を落して、紐を解き始める。

羞恥に顔を歪める町子。ハラリと足元に落下する最後の一枚。

26 地下の倉庫に至る階段

健次と和助、後手に縛り上げた町子を引立てて来る。町子、腰の周囲を手拭で覆われ

ているだけのみじめな姿。
健次、ポケットから鍵を出して、倉庫の鍵穴に突っこむ。

町子の縄尻をとっている和助、ニヤリと口を歪めて、町子の背を突く。

和助 この中にはおめえの仲間がいるぜ。退屈はしねえよ。

27 同、倉庫の中

捕われの女二人。朱美と光子、扉の鍵音にハッとして隅へ身を寄せ、乳房を両手で押さえる。

二人とも腰に布切一枚許されただけの全裸なのだ。

扉が開き、健次と和助、町子を縄つきのまま倉庫の中へ突き入れる。よろけて土間に片膝つく町子。

健次 新入りだ。仲良くしてやんな。ボタンと扉が閉ざされる。

朱美と光子、やくざ達の姿が消えると町子の傍にかけ寄り、縛めを解き始める。

朱美 ねえ、大丈夫。怪我はない？

町子 すみません。貴女達は？

光子 借金のカタを体でつけろと、ここへ監禁されてしまったのよ。



朱美 逃げられないようにという理由で私達をこんな姿にして、まるで鬼よ、花村組は——。

光子 バクチで勝った客から高い金をとって私達を抱かせようという肚なのよ

町子、硬化した表情になる。

28 自動車修理工場

清太郎、八郎、武雄、ボンコツ車の修理にかかっている。

清太郎、汚れた手を布で拭きながら、

清太郎 今日はこれ位にしておこうか。

八郎 そうだな。おい、武雄、そろそろ引揚げるぜ。

武雄 OK（車の下から出て来る）

ジャンパー服を着た京二、ながしの銀次と一緒に工場の中へ入って来る。

清太郎 ——おや、京二じゃないか。

銀次 兄貴達にぜひ逢いたいというんで案内して来たんです。

京二 兄貴達、お久しぶりでございます。

八郎 何がお久しぶりだ。この野郎！

武雄 京二、手前、まだヤー公の仲間入りをしてるそうじゃねえか。親分の遺言を忘れたのかい。

八郎 銀次、手前も手前だ。玉ころがしなんかで結構、稼いでいるそうだな。それも、よりにもよって、花村組なんぞに（ぺっと唾を吐いて）よく俺達の前へ面が出せたもんだ。

銀次 へい、何と云われたって仕方がありませんが、それよりもまず、京二の話を聞いてみておくんない。

八郎 （酸っぱい表情で）何だよ。京二、話ってのは。

29 清太郎のアパート

丸い食卓を囲んだ清太郎、八郎、武雄、そして、マリーユカ、揃って眉を曇らせている。

少し離れた所に小さく坐っている京二と銀次。

京二 それで——その三百万という金は、どうしても百合さんに必要な金らしいんで、いえ、百合さんというより百合さんと結婚する相手に——。

清太郎 （けわしい顔して）何だと。

銀次 何でもその男、会社の経理に大きな穴をあけちまったそうですぜ。

八郎 何て野郎だ。あの伊沢っていう男。清太郎 （苦々しい表情）



武雄

だが、お町姐さんも花村組相手にバクチを打つとは馬鹿な事をしたもんじゃねえか。まるでヤケクソになってるみたいだ。

八郎

花村組の事だ。どうせイカサマだろ。そうなんです。

京二

(ええ? といい顔をして) 手前それを知っていて黙って見ていたのかい。

京二

何と云ったって俺は今、花村組のチンピラだ。知っていたって手出しは出来ねえじゃありませんか。

武八雄郎

この野郎——。(京二の襟首をつかもうとする)

清太郎

やめろよ、八郎。(京二に) よし、

八郎

わかった。京二、よく知らせてくれたな。

清太郎

ところで清太郎、おめえの考えは。死んだ親分がいつてたじゃないか。根性のある奴ってのは生涯に一度、でけえ悪い事するか、でけえいい事するか、どっちかだ。俺はその両方をチャンポンにして一勝負はるぜ。

武雄

じゃ、花村組へ乗りこむってのか。お町姐さんを救い出すだけじゃねえ。花村組の賭場を荒してごっそり銭を作り、百合さん達が結婚出来るようにしてやろうと思うんだ。

武雄

(あきれたような顔をして) お町姐さんを救い出すって事はわかるが、何も清太郎。恋仇のために銭を作る事はねえと思うな。

マリ

そうよ。せっかくこうして三人共堅気になつたというのに何も今更、そんな危い橋を渡る事はないじゃないの。

ユカ

花村組の賭場を荒したりなんかして、絶

清太郎

対、生きて帰れっこないわ。お前達のいう通りさ。だからこの勝負は俺一人でやる。

八郎

馬、馬鹿な事云うんじゃねえよ。清太郎。自分だけいい子になろうたってそうはいかねえぜ。

武雄

昔は南原組で、少しは名を売った三人コンビじゃねえか。堅気になる時も、やくざに戻る時も俺達は一緒だぜ。

清太郎、潤んだ瞳で、八郎と武雄の顔を見る。

京二

清太郎兄貴、すまねえが俺も仲間に加えちゃくれねえか。

銀次

俺も頼むぜ。兄貴。今までやらかして来た事の罪亡しだ。頼む、手伝わしてくれ。

京二

こんな体だが、何かの役にはたつと思うんだ。な、兄貴。

清太郎

(感激して) おめえ達までが助っ人してくれりゃ鬼に金棒だ。

マリ

一寸、私達にも仕事させてよ。

八郎

ええ?

マリ

一口乗せてといってるのよ。

ユカ

賭場荒しなんて素敵じゃない。私、大好き。

男達、眼をパチクリさせる。

30 辰見荘の一室

花村、寝はらばって、乾分の三吉にあんまをさせている。
その前にかしこまって坐っているのは銀次である。

花村 今夜に間に合わせて女を二人集めてくれたのは嬉しいが、女なら何でもいいというわけにゃいかねえぞ。今夜は関西の大物連がお遊びになつて

るんだ。そうした方々の眼鏡にかなうような上玉でなきやあな。

銀次 その点は保証致しますよ。ま、一度

実物をごらんになつて下さいまし。

銀次、立ち上って襖を開ける。
マリとユカがガムを噛み、ハンドバッグをゆらゆらさせながら入つて来る。

花村 へえ、こりゃ仲々の上玉だ。そこへ並んでみな。

銀次 マリとユカ、ふてくされた顔つきで花村の前に並ぶ。

花村 服を脱いでみな。

ユカ (不快な表情)

三吉 (花村の肩を揉みながら) 裸になれて

っていつてるんだよ。売りに来た商品を見せねえ馬鹿がいるもんか。

銀次、マリとユカの方へ手を合わすようにする。マリとユカ、ふくれ面をして、ブラウスを脱ぎ、スカートを脱ぐ。

三吉 (花村の肩を力一杯揉みながら) そう。スリッパもブラジャーもと

って——、そら、そ

花村 (肩の痛さに顔を歪め) 痛えな三吉、手

前はしっかり肩を揉んでりゃいいんだ。

三吉 へい、どうもすみません。ついカッ

ときちゃったもんで。へへへ。

腰のもの一つになつて立っている二人の女を花村、満

花村 よし、気に入った。買おう。銀次、

値段は一人頭十万だ。いいな。

銀次 へい、特別に、大サービスという事で。

花村 早速だが、今夜は忙がしいぜ。二、

三人、廻り持ちになるかも知れねえからな。

ユカ (啞然とした顔つき)

花村 三吉、それじゃ、この二人、女達のいる所へ連れて行け。

三吉 へい。

畳の上の衣類に手を出そうとするマリとユカを、三吉さえぎる。

三吉 おっと、着るものは用事がすむまでこっちで預つておくんだ。

ユカ 冗、冗談じゃないわよ。私達を裸のままにしておく気なの。

花村 ハハハ、とんづらされねえための用心さ。賭場がたっているだけにこっちも神経質になつてるんだ。

銀次、顔をしかめて、女達に手を合わす。

マリとユカ、腹立たしい表情で乳房を抱きながら、三吉に追い立てられて行く。

花村 ハハハ、見ろ、銀次、まるでアヒルの行進だぜ。

31 倉庫の中

三吉に背中を突かれて入つて来たマリとユ



カ。

三吉 そら、また新入りだよ。ハハハ。仲間がふえて段々と賑やかになってきたじゃないか。

ボタンと扉がしまる。

乳房を隠しながら、小さくなっている町子、朱美、光子。

町子 (マリとユカを見て、大きく眼を開き) あっ。

マリ お町姐さん。心配したわ。

ユカ でも、もう大丈夫。清太郎さん達三人がここへ乗りこんだから。

町子 えっ、ここへ。

マリ 充分に作戦を練ったから心配ないわよ。

ユカ (朱美と光子に) あんた達も今夜、救い出したげるわ。負けちゃ駄目よ。

マリ それにしてもいやーね。これじゃまるでストリップ小屋の楽屋じゃないの。

マリとユカ、顔を見合せて笑い出す。

32 辰見荘・二階の賭場

松吉 さ、半方は揃いやした。丁方、丁方はおいでになりませんか。

大崎 よし、丁方は全部、俺が受けようじゃないか。

関西から来た五十年配の賭博師、大崎が手をあげて合力に合図する。

ぎっしり埋め尽している客の中に、清太郎八郎、武雄の三人、混っている。

武雄 (小声で清太郎に) あいつが関西から来た大崎っていう勝負師だぜ。賽ころ一つで何億っていう財産を作ったそうだ。

清太郎 フーン。

松吉 はい、丁方、揃いやした。皆さん、よろしゅうございますね。

雄吉 ——勝負。

壺振りの雄吉が手をあげると、賽は、六ぞろの丁。白布の上へ積まれた半方の賭金が合力達の手で回収されていく。

ニヤリと片頬を歪める大崎。

賭金を持って行かれて口をとがらす八郎。

八郎 ちえっ、ついちゃいねえや。

うしろから銀次がそつとやって来て、八郎達三人の耳もとに何かささやき、二十万の現金を渡すと、引下がって行く。

八郎 へへへ、おい武雄。現ナマで二十万両だ。これだけの弾丸がありゃツキが廻るぜ。

武雄 女達を売った金だと思ふと俺は胸が痛むよ。

八郎 何いってやがる。ありゃお町姐さんを救うための作戦じゃねえか。

清太郎 シー、声が高いぜ。あんまり派手に銭をはるんじゃないぞ。夜中までの

時間稼ぎなんだからな。

襖が開いて、花村が機嫌のいい顔つきで入って来る。客人達に愛想をふりまきながらふと清太郎たち三人に気づいて、

花村 よ、元南原組の三勇士か。ハハハ、よく来てくれたね。

清太郎 へい、どうも、お久しぶりで。

花村 お前たち堅気になったと聞いたが、どうでい景気は?

武雄 あんまりパツとはしませんね。だから、つい、こういう場所が懐かしくなりまして。

花村 ハハハ、そうかい。懐かしくなったら何時でも来てくんな。も一度、渡世に入りたくなりや何時だって面倒見てやるぜ。

清太郎 へい、どうも、有難うございます。

花村、上機嫌で歩き出し、大崎の所へ行く。と、何か彼に耳打ちする。大崎、ニヤリとしてうなずき、花村と一緒に部屋を出て行く。

そんな花村の方を見て、八郎、舌打ちし、

八郎 (小さく) 何いってやがんでい。馬鹿野郎。

武雄 (小さく) 今に驚いて、腰を抜かすな。スカタン野郎め。

33 倉庫の中

町子、マリ、ユカ、朱美、光子等五人、揃

って両乳房を手で覆いながら、ジリジリ後退する。

健次と和助が、ニヤニヤしながら五人の女に迫って行くのだ。

健次 へへへ、よ、南原一家のお嬢さん。

関西の親分さんが特別にお名指しだ。出て来な。

それを聞くと、マリとユカ、町子をかばうように背で隠す。

和助 何でえ、何でえ、手前達。俺達に盾

をつこうってのか。

健次、ポケットから拳銃を取り出す。

ギョツとする五人の女。

健次 手前達、花村組の商品なんだぜ。一

体、何だと思ってやがるんだ。

町子 わかったわ。私が、行きゃいいんだ

ろ。

マリ いけないわ。お町さん。

ユカ もう少し、時間を稼ぐのよ。

町子 いいのよ。私の事は気にしないで

(健次たちに冷淡な顔を向け)さ、

好きな所へ連れて行くがいいわ。

34 梅の 間

置、たつの中で、熱心に札束を勘定している浜子。襖が開いて、花村が上機嫌で入って来る。

花村 (こたつの中へ入って)どれ位にな
ってる? 浜子。

浜子 驚いたわ、親分、昨日から今までで
ざっと七百万。

花村 ハハハ、賭場の金庫の方にゃ、まだ
三百万ばかりうなってるぜ。すると
合計一千万。な、浜子、俺の云った
通りだろ。金はその鞆の中にしまい
な。

浜子 はいよ(と、黒鞆の中へ札束をつめ

始める)ところで関西の親分は。

花村 今、御休憩中だ。町子を相方にして

な。

浜子 ええ? 町子と。

花村 大崎親分は、ああいふハネツ返りが

趣味に合うらしい。南原一家の娘と
聞いて大乗気なんだよ。

浜子 フフフ、じゃ、今頃、大崎親分は町

子と――。

花村 しっぽり濡れてる事だろうぜ。

浜子 ねえ、親分(妖艶な眼つきになって

花村に身をすり寄せる)私も、何だ

か変な気分になってきたわ。

花村 よせよ。こっちは仕事だ。

浜子 いいじゃないの。ねえ、親分ったら。

花村、花村にしなだれかかる。

花村、まきこまれて浜子を抱き、その場に

体を倒す。

35 同・二階の賭場

武雄、腕時計を見る。十二時五分前。

武雄、清太郎の耳に口を当てる。

武雄 あと五分だぜ。

八郎 (周囲に気を配りながら)そろそろ
配置につこうか。

清太郎 よし、それじゃ、武雄、この場はお
前に任すぜ。

武雄 任しとけ。

武雄一人をその場に残し、清太郎と八郎、
立ち上る。

36 同・廊下 A

清太郎と八郎、周囲に気を配りながら歩い
て来る。

清太郎 じゃ八郎、俺は梅の間へ行く。お町

姐さんの方は頼んだぜ。

八郎 任しとけ。

二人、左右へ散って行く。

37 同・廊下 B

小走りやって来た八郎ふと足を止める。

近くの菊の間で、女の悲鳴がしたのだ。

八郎、菊の間の襖をそっと小さく開いて中
をのぞき、息を呑む。

38 同・菊の間

腰を布で覆われただけの町子、後手に緊縛
された姿で、部屋の中を逃げ回っている。

町子に迫っているのは、大崎だ。

大崎、羽織を脱ぎながら、口元を歪め、

大崎 何時まで鬼ごっこさせる気だ。さ、
こっちへおいで。



る。

41 同・賭 場

異様な熱気を充満させ、合力たちが金をかき集めている時、急に電灯が消える。周章狼狽する場内。

松 吉 お静かになさって下さい。どうか、そのまま、お静かになさって下さい。

松 吉 ライターの火をつける。

松 吉 あっ、き、金庫がねる。

松 吉 あっ、き、金庫がねる。

42 同・菊 の 間

停電でうろたえる大崎。

大 崎 おい、どうしたんだ。誰か、早く灯りを持って来い。誰かおらんのか。

襖を開けて入って来たのは八郎だ。

八 郎 親分、さ、どうぞ、こちらへ、足元

が危ねえから気をつけて下せえ。

八 郎、大崎の手を取って廊下へ連れ出す。

43 同・廊 下

階段の近くまで大崎の手をとって案内して来た八郎。

八 郎 一まず賭場の方で休んでいて下せえ

すぐに電気はつくと思います。

大 崎 こんな時に停電とは怪しからんじゃ

ないか。

大崎、一歩、足を踏み出し、階段から真逆様に落下する。

八 郎 へっ、ざまあみやがれ。

44 同・梅 の 間

抱擁し合っている花村と浜子、二階の物音に気づいて、はっと上体を起こす。

浜 子 どうしたんだろ、二階は。

花 村 どうやら停電らしいな。

部屋の電気が急に消える。

浜 子 あら、嫌だ。これも停電だわ。

花村 変だぞ、こりゃ。

襖の間から懐中電灯を持ち、布で顔を隠した清太郎が現われる。

清太郎 動くんじゃねえ！

拳銃を突きつけられて、花村と浜子、ギョツとする。

清太郎 今まで通り、抱き合っている。いちゃついていってるといってるとんだ！

花村と浜子、おろおろしながら、抱擁し合う。

清太郎、部屋の中のアちこちを懐中電灯で照らしていたが、こたつの傍の黒靴を見つけて、中身を調べる。

清太郎 気をきかして靴の用意までしてくれ

たんだな。こいつは有難え。

清太郎、靴を抱えて出ようとすると、花村飛び起きて襲いかかる。

町 子 (激しく息づきながら) ち、近寄ると承知しないぞ。

大 崎 何を云うんだ。わしはあんたを買ったんだぞ。元、南原一家の娘というのが気に入って、花村のべらぼうな云い値を承知したんだ。

39 同・廊 下

襖から菊の間をのぞいている八郎、くそっ

40 配 電 室

京二、配電室の中をキョロキョロ動き回っている。

配電盤の一つに視線を向けた京二、うなずいて、腕時計に眼をやる。十二時だ。

京二、飛びつくように配電盤に両手をかけ

清太郎、懐中電灯で花村の眉間をたたき割る。転倒する花村。

清太郎 電気がつくまでおとなしくしていな。あばよ。

45 倉庫の表

銀次、倉庫の鍵穴を針金で細工している。手応えがあつて、扉が開く。

46 倉庫の中

銀次、小脇に女たちの衣類を持って入ってくる。

銀次の顔を見て、ほっとした表情になるマリ、ユカ。

銀次 さ、皆んな早くこれを着て逃げるんだ。裏道に車の用意がしてある。

マリ お町姐さんは？

銀次 三人がうまく救い出したよ。たった今、車で逃げた所だ。

ユカ ああ、よかった。

銀次 さ、早くしろ。旅館の方の電気がつきゃ奴等ここへやって来るぜ。

女達あわてて服を着始める。

47 海岸線(夜明け)

疾走するトヨペット。

48 同・車の中

清太郎、八郎、武雄、町子の四人が乗っている。

八郎 (運転しながら) マリとユカは銀次の奴がうまく運び出してくれたぜ。

武雄 花村組の野郎たち泣き面に蜂だな。八郎 金くだ。ハハハ。

武雄、手提金庫の金を鞆につめ、空になった金庫を窓から投げ出す。

清太郎、ポケットから拳銃を出し、外へほうり出そうとする。

武雄 お、清太郎、おめえ、拳銃を持ってたのかい。

清太郎 水鉄砲さ。

引金をひくと水が飛び出す。三人、笑い合う。

49 町子のアパート、近く

トヨペット、止まる。

清太郎、助手席から飛び降りるとうしろのドアを開け、町子を外へ出す。

手にした鞆を町子に突き出す。

清太郎 一千万はあると思いますよ。これは

お町さんと百合さんのものだ。

町子

清太郎 これだけありや伊沢って男の穴も埋められるだろ。幸せに暮すよう百合

さんに云っておくんない。

町子 清太郎さん。あんた達はこれから。

清太郎 高飛びしますよ。北海道へでも行ってまた修理屋を始める気なんです。

町子 お願ひ、清太郎さん。一度、一度、

百合に逢って行って。

清太郎 馬鹿な。何を今更。



町子 ね。もうこれで百合とは二度と逢えないんでしょ。だからお願い、最後に一目だけでも。

八郎と武雄、車の窓から首を出す。

八郎 逢ってこいよ。清太郎。

武雄 左様ならの一言ぐらいかけていくのが礼儀というもんだ。

八郎 俺達は、工場の方で待っているからな。

八郎、車を走らせる。

清太郎 (あわてて) おい、おい、待てよ。待ってくれ。



50 町子のアパート

ベッドの上で、伊沢と百合、狂ったような愛撫をつづけている。

部屋のドアが開き、清太郎と町子、入ってくる。百合の愛欲図を見て、ハッとすると町子と清太郎。

そんな二人に気づかず、百合と伊沢、抱擁し合いながら、

伊沢 百合、お願いだ。俺と一緒に死んでくれ。

百合 いいわ、伊沢さん。私たち、もう死ぬより方法がないんだもの。ねえ、お願い、抱いて、もっと、もっとと激しく。

清太郎、たまらなくなったように顔をそらす。

百合と伊沢、二人に気づいて、ハッと上体を起す。

百合 お、お姉さん。

町子 (怒りに体を慄わして) 百合子、あんたって人は、な、なんという——

清太郎、カッとして歩み寄ると、伊沢をベッドから突き落す。

伊沢 な、なんだ、君は。

清太郎 手前、それでも男か。女を道連れに死のうなんて、何て情ねえ——。

清太郎、鞆から札束をつかみ出すと、伊沢の頭にたたきつける。

清太郎 金がありゃいいんだろ、金が。さ、くれてやる。手前のために、命をはって作ってやった金だ。

清太郎、やけになって、金を伊沢にたたきつけようとすると、百合が清太郎の肩にしがみつく。

百合 清太郎さん、待って。乱暴はしないで頂戴。(泣きじゃくる)

清太郎 (ぐっと呑み込んで) 百合さん、すまねえ。許してくんな。じゃ、達者でな。

清太郎、涙を振り切ったよう部屋を飛び出して行く。

町子 待って、待って、清太郎さん！

51 修理工場近くの空地
八郎の運転するトヨペット、止まる。

八郎と武雄、車から出ると、口笛を吹きながら工場の方へ向かう。ふと足を止める。近くの材木置場の陰から、花村組の乾分たちがわらわら飛び出して来て、二人を取り囲む。

八郎 な、何でえ、手前達。

松吉 南原組の死損いめ。よくも俺達をコケにしやがったな。

雄吉 賭場荒らしをしやがった上、女達までかっさらうとは、いい度胸だぜ。

花村 まず、盗んだ金を出しな。話をつけるのはそれからだ。

八郎と武雄、フンとした顔つき。

八郎 金は返してやるよ。こっちへ来な。八郎と武雄、車のところへ戻って荷台を持ち上げようとする。

三吉と和助、二人のあとについて来て荷台の中をのぞこうとする。

荷台をあげて、ハンマーとペンチを取上げた八郎と武雄、「間抜け野郎」と、三吉と和助の頭を一撃する。乱斗。花村、暴れ回る八郎に向かって拳銃を乱射する。転倒する八郎。

武雄 あ、八郎。

武雄、八郎を抱き起そうとする時、松吉がうしろから日本刀を振り下ろす。

52 近くの道
清太郎、疲れ切ったような表情で歩いて来る。



トを調べるようにしながら隠していた自分の拳銃を清太郎のポケットへ入れる。清太郎の眼が一瞬光る。

京二 この野郎、丸腰ですよ、兄貴。

健次 そうか、よし。——さ、清太郎、行くんだ。

53 修理工場、近くの空地
健次に拳銃を突きつけられ歩いて来た清太郎、ハッと
する。

空地の中央あたりに八部と武雄、倒れている。清太郎、走り寄る。

清太郎 八郎、武っ。

八郎 清太郎か、へへ、悪い札をひいちゃったよ。

武雄 逃げるんだ清太郎。

八郎と武雄、がっくり首を落す。

清太郎、涙を浮かべた鋭い眼で、近づいて来た花村を睨みつける。

花村 おい、清太郎、金はどうした。

清太郎 ——。

花村 おい、どうした、返事しねえか。

花村、清太郎を足で蹴とばす。

清太郎、地面に転倒すると体を一回転させて拳銃を射つ。

あつとのけぞる花村。つづいて松吉が——びっくりした健次と雑吉が拳銃を乱射する。血だるまになって横転する清太郎。

雄吉 健次、逃げる。

雄吉と健次、走り出す。清太郎、そのうしろめがけて拳銃を向ける。轟音二発、はじけ飛ぶ雄吉と健次。材木の陰に隠れていた京二、おろおろしながら清太郎の傍へ——

京二 兄貴、しっかりしてくれ、兄貴。

清太郎 ——京二、すまねえが俺を八郎と武の所へやってくれ。

京二、泣きながら清太郎の肩に両手をかけ八郎と武雄の死体の傍へ引っ張っていく。

清太郎 こいつらと手を握らしてくれ。

京二、三人の手を組み合わせる。

清太郎 すまねえ、色々世話かけたな。

京二 兄貴、死なねえでくれ、な、兄貴。

京二、号泣する。

艶歌、流れて——

銀次がマリとユカを連れ息せき切って走ってくる。別の方向から町子がかけて来る。

マリ、ユカ、八郎と武雄に取りすがって泣きじゃくる。

町子も遂に号泣し、清太郎に取りすがる。

抱き合って男泣きする京二と銀次。

ニコリと笑ってるような清太郎、八郎、武雄の死顔——。(エンド・マーク)

る。

ふと、立ち止り、ポケットから百合の写真を出して、懐かしそうに見入る。思いを断ち切ったよう写真を破り捨てる。

健次 清太郎、待ってたぜ。

清太郎、ギョツとして振向く。

うしろから、健次と雄吉がやって来る。

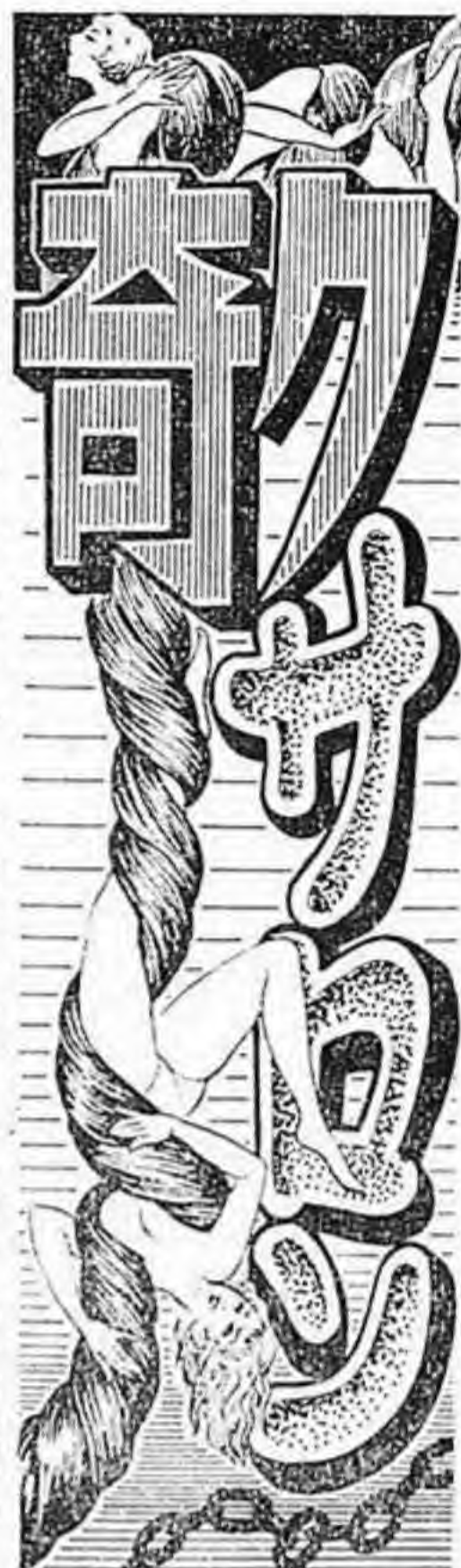
健次の手に拳銃が光っている。健次と雄吉のうしろに、京二がおろおろしながら立っている。

雄吉 向こうの空地で親分がお待ちだ。来な。

健次 京二、この野郎の懐を調べてみる。

京二 へい。

京二、慄えながら清太郎に近づき、ポケット



誌上にその麗姿を出しておられる関谷富佐子夫人、安井喜久子夫人、そして妊娠した緊縛姿態でマ

ニアの目を楽しませてくれている中河恵子夫人と、こういったM女性を配偶者に持つておられる方はさぞかし幸福な日々を送っておられることだろうと羨ましく思わざるを得ない。嘗て本誌上を賑わした数多くのモデル嬢たちも性生活の面では、きっと豊富で濃厚な日々を送っていることと思う。

私の経験によると概してMの女性には感度が鋭敏であるように思われる。ムチ打ちにのけぞる関谷夫人の密度のある感情の起伏、安井夫人の並々ならぬSMに対する理解と協力ぶり。そしてMを自称し進んで緊縛を望むうら若き女性たちの告白を読むとき、そこに感度一〇〇%の女性の如何に多いかということを痛感する。本誌に登場するモデル嬢たちは、結婚して幸福な家庭を営むに足る十分な素質

を持つておられるが、更に緊縛の洗礼によって益々その感度に磨きがかけられることと思う。

中河恵子嬢を見事射とめられた幸運な男性は、どなたか存じないが、まことに貴重な金脈を掘り当てたと御祝福申し上げたい。このような感度一〇〇%の女性を妻にした上は、掘って掘って掘りつくして、金の燦然とした輝きを發揮されたいと思う。恵子嬢の感度をもってすれば、必ずや見事に開花してくれるものと思う。

小生はすでに四十の坂を越して今まで縛ってきた女性の数も十数人に達しているが、その間、感度一〇〇%と称するに足る女性は三人あった。いずれも縛りに対して強い関心を示した者ばかりで、緊縛を嫌がる者は一名もなかった。A

は操り責めに異常な執着を持ち、Bは本格的な猿ぐつわを好んだ。Cは流腸を主軸とした内臓責めを楽しんでいたようだった。

勿論、最初から彼女たちがそのような趣向をあらわに示したのではなく、縛りプレイを実施している過程で、感度一〇〇%の反応を露呈したのが、右に挙げたテクニクの時であったのだ。

Aを責めるときは、自由にもがきまわられるように大型のハンカチで単に両手首を背後で括るだけであつた。これにはコツがあつて、両手首を交叉させてハンカチを軽く回わし、ひとひねりして十文字に括るのである。こうすると手が痺れないで、それでいて手首が抜けることもないのである。

操り責めの焦点は、両脇腹からお臍のまわり、お尻、太腿、胫から足の裏に至って最高となる。泣き喚き、もがき呻めきまわる白い肢体は、まことに見事なもので、経験した者でないと、この快味は体得しえないだろう。波に揺れる藻のように、くねくねと蠕動する

女体は、この世で最高の美しい見物であると信ずる。足の指の股とか羽箆による操りなど、そのテクニクには尽きることはない。

B女の猿ぐつわは偶然のことで発見したものであるが、ベニヤ板一枚で仕切った彼女の部屋で隣室を気兼ねして、口中に小生の靴下を押し込んで、その上を手拭でぎゅうぎゅう縛ったのが思わぬ怪我の功名となったのである。そのときの彼女の感度は最高となり、事後の感想では今まで経験したことのない感泣物だったそうである。

C女との体験では、女体の表面に分布している性感帯よりも内部に巢喰っている内臓の感度の方がより濃厚で深奥であるということを知った。流腸器具を用いての通常の流腸から始まって、彼女の感度を最高に發揮させるべく、あらゆる小道具と、あらゆるテクニクを駆使した。

最も醜なるものを最も美なるものにするに足る充分な条件を彼女は心身共に備えていた。単に縛りにのみ興味を抱いていると思っていた小生は、彼女たちの類稀な高度の感受性によって自己の感度もまた高められたのであった。

感度一〇〇の女

森 不惑



(第四十七回)

辻 村 隆

長田実氏の紹介で、ミナミの可愛いホステス、佐々木真弓ちゃんをハントする機会に恵まれた。まるで青麦のような新鮮な感じの娘で、編集長にフォトを見せたら俄然気に入ってしまった。長田氏に諒解を得て、分譲フォト用に交渉するように依頼された。早速ハントの三日後、彼女の勤めるクラブに行つてそのことを伝えると、いとも手軽にO・K。まるで張りあいのないくらいである。近頃の若い娘は、割り切った考えをもっているのか、いとも淡々として、

そつと体を寄せてくる。ポーズによつては、女優の加賀まりこに似た容貌の、可憐さの奥に、小妖精めいた悪戯らっぽい眸がキラキラと光る。いずれ次回回りから、分譲フォトのニューフェイスとして登場し、ファンも出来ることと思うが都合よいことに、彼女を発掘した長田実氏が、数回に亘つてプレイガールとして飼育しておいてくれたので、大いに手間が省け、しかもプレイに対してはなかなか協力的である。大切にしておきたい。稀少価値のある可愛い娘ちゃんの人である。

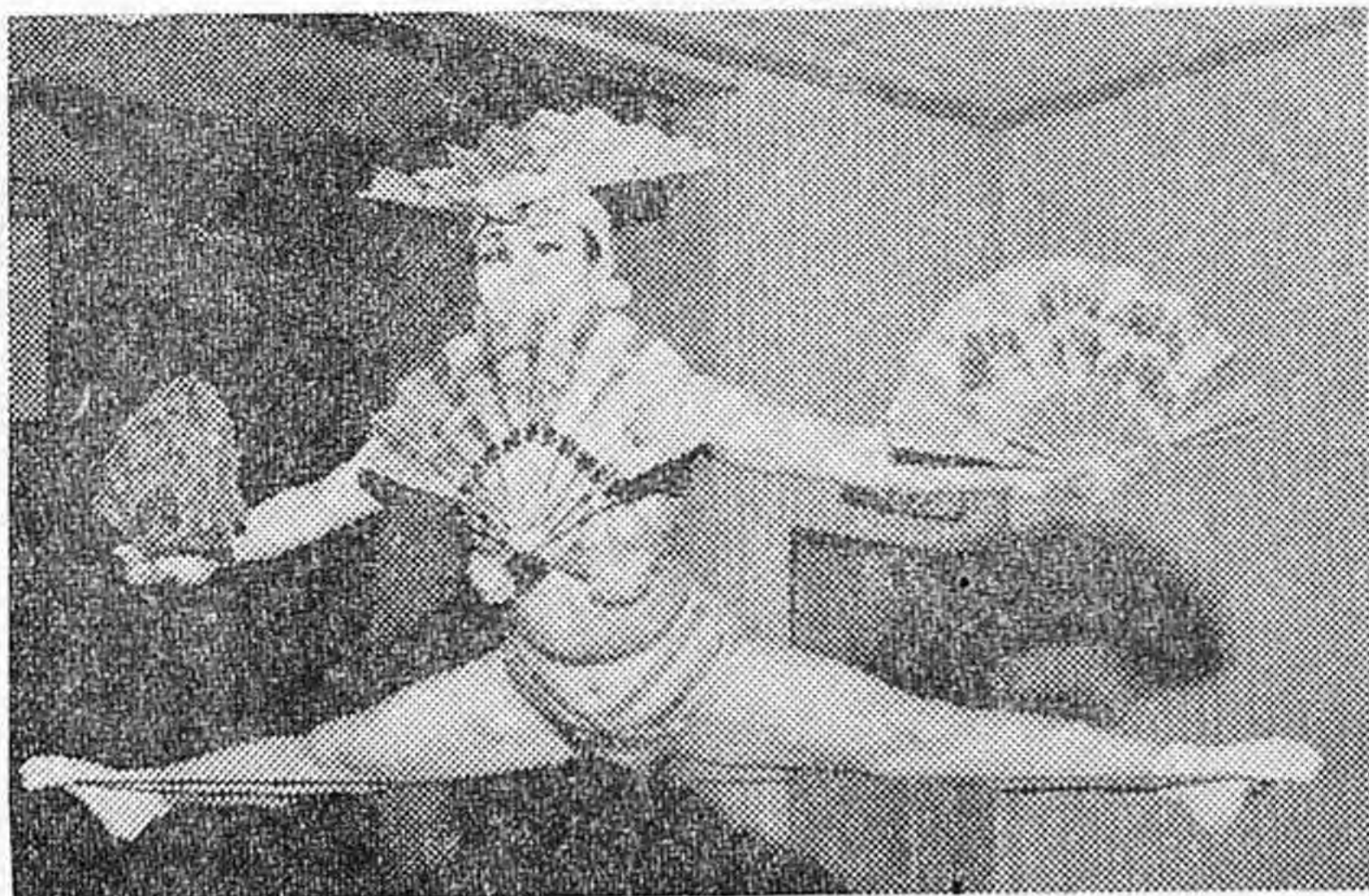
一月号に発表した「オニ六先生大いにシバル」の、対談での内容について、私が上京した時、大分彼に油を絞られた。オープンな団鬼六氏のことだから、大丈夫だろうとタカをくくって、或る程度は心得ているつもりでも、少し突っ込んで書き過ぎたらしい。それだけに、谷ナオミの巻のハントも、鬼六氏と一緒に、充分注意しながらも、大体在りの俚に書いたのであるが、正直すぎて、又ぞろ鬼六氏から、お叱言を頂戴しないかとハラハラしている。と共に、前月号の辰巳典子さんといい、谷

ナオミさんといい、いずれも現役活躍中のパリパリの人気スターなので失礼な個所はなかったかとヒヤヒヤしている。お二人のハントについても、私なりにかなり神経をつかつて、取捨撰択したつもりであるが、何分にも描写が生命のカメラ・ハントである。万一彼女達にとって、不利になるような言辭や、プライバシーで行き過ぎの点あれば、これすべて私の筆の至らざる処である。彼女始め、所属プロの方々には平に御寛容賜わりたい。彼女達のよさを強調し、同好の人々にもっと広くお二人を知って戴きたい余り、ついペンが走り過ぎたかも知れぬが、決して他意はありません。

芳野眉美さんと鬼六氏の三人で夜つびいて語り明かした内容も本当はもっと精しく書きたかったが、谷ナオミの巻にそれを書き足すと、プレイ後の蛇足のようにも思え、又三人での話も、優にそれだけで一篇になるので、あえてハントでは割愛させてもらった。

近々眉美さんと三人で上阪するかも知れぬという。忘却の幻の佳人、森山美歌夫人に対面出来るかも知れないとなると、私の胸は急に疼き始めた。美歌夫人がSの女王であるのは古い同好の方なら衆知のことである。さすれば、私は美歌夫人の膝下にひれ伏す、奴隷にならされるかも知れないが、噂に高き抜群の美人の命令なれば、あえて厭わぬ氣でいるのだから、私のSも怪しいもの。やはり私も内攻性のMをどこかに持ち合せているのかも知れない。

かつては奇クのM人士垂涎的の美歌夫人が、突然前触れもなく登場しようとは予想もしていなかった。絶えて久しくなりぬれどであるが、噂にきく彼女は、いよいよ磨きがかかって、Sの性向もいやまさり、この世の人とも思えぬ妖艶さに、三平氏は勿論、芳野眉美もすっかりイカレてしまっているというのだ。私もまた、美歌夫人の艶姿を一眼みたら、魂を奪われて、忽ちイカレてしまうかも知れないが、もう少し長くハント出来たら、これぞSM冥利につきて、今からぞくぞくするような期待で、胸の炎を燃え立たせている。



軽業（かるわざ） 提供・阿部能丸

『綱渡り・松づくし』

綱上に美技をくりひろげる演技者。アクロ
バティックな身のこなしに喰い入るバンド。

ジンタよ 消える勿れ 夜乃探郎

色あせたノボリが、冷たい北風に
いじめられるが如く
パタパタと悲鳴をあげ、テントの
隙間から吹きこんだ風は、ガランとした掛小屋の中を
駆けめぐる。寒む
そうに衿を立て、背を丸めて舞台を見上げるホンの一握り程の観客の視線の中に、白い肌を晒して懸命に演技し、物悲しさを隠して、微笑してみせる少女。絶えず流れるジンタの

音。懐しい風景だ。

サーカスをふくめて見世物の世界は、それが「亡びゆく詩^{うた}」かなでていると思えるが故に、私は私なりの郷愁を覚え、讃歌を感じとるのだが、私の思いとどれほどの共通心理が働いているのかは別として、最近眼に触れ、よろこばせてくれたものがある。

「小説現代」誌では、昨年あたりからか、野坂昭如氏のグラビヤ入りの「黒メガネ道中記」が好評を拍しているが、本年三月号では「のどかなジンタ」の唄い文句で△新宮のサーカス▽がとり上げられている。

「いったいサーカスなどこの日本にまだ存在するのか」もはや死語みたいなものでと黒メガネ氏はつぶやきながらも新宮で元旦から八日まで興行されたという「キグレサーカス」を現地ルポしている。

詩人の寺山修司氏が「怪優奇優侏儒巨人美少女募集」とPRした前衛怪奇劇を東京で旗上げ、その劇団——「天井桟敷」この劇団の第二回公演「大山デブ子の犯罪」では、あの懐しい「天然の美」のジンタの音で幕があく。見世物精神の復活が題目だそう。本誌三月号でも極馬談好氏が

「サーカスの仕込み」を写真と共にごひろうされているが、なぜかジンタの持つ哀愁に強く魅かれる私としては、砂漠での泉の想いをするのである。

というのも、勿論、昔なつかしい見世物がとんと姿を消してしまっただけであるが、同時に、現在公演している大掛りなサーカス団からは、往時のドサ廻りのそれが撒き散らしていた物悲しさなど、殆んど感じとれないからである。

それだけ、現在のサーカス団は近代化されているのだろう。

演技する娘たちの客席に投げる微笑のうらに隠されている悲しみと苦しみ。真白な化粧に塗り潰された下の、答痕や縄跡、開幕直前までの涙の跡。それらを想い、懐しむのは背徳であろうか。

すべてのものが合理化という怪物みたいな巨大な口にのみ込まれているいまの時代に、ジンタの郷愁などは一蹴されてしまいそうな気がするだけに、よけい強く魅かれるのかも知れない。

どのような形ででもよい。誌上に舞台に、はたまたこの地上に、いらはい、いらはい！ のともしびを、なんとか消すことなく点じ続けてほしいものだ。

川柳『虻樽』

仲々水洗

○ 猿轡もだえる彼女は四十過ぎ

○ 這えば立て立てば歩めの股縛り

○ 口惜しや肉饅頭の猿ぐつわ

○ 逆吊り体力つきて泡をふく

○ 菱縄に網目の如きヒップかな

○ 転りを思い出させるマスクの娘

○ 海老縛り乳房が邪魔で屁古垂る

○ 猫までも縛り上げちゃうS旦那

○ あの人へエこの人もSマニア

○ 尼君のうなじに固き猿轡

○ 妻の留守たっぷり頼むとお手伝い

○ 猿轡流し目送る割ぱう着

○ 睦まじき夫婦に縄のアクセサリ

とりなわの使い方が
ひと目でわかる――

捕縄秘伝藁人形公開

△東京人形学院会誌

「人形の友」No. 91より▽

青森県三戸郡三戸町に、郷土資料館「三戸城温故館」が、このほど完成した。

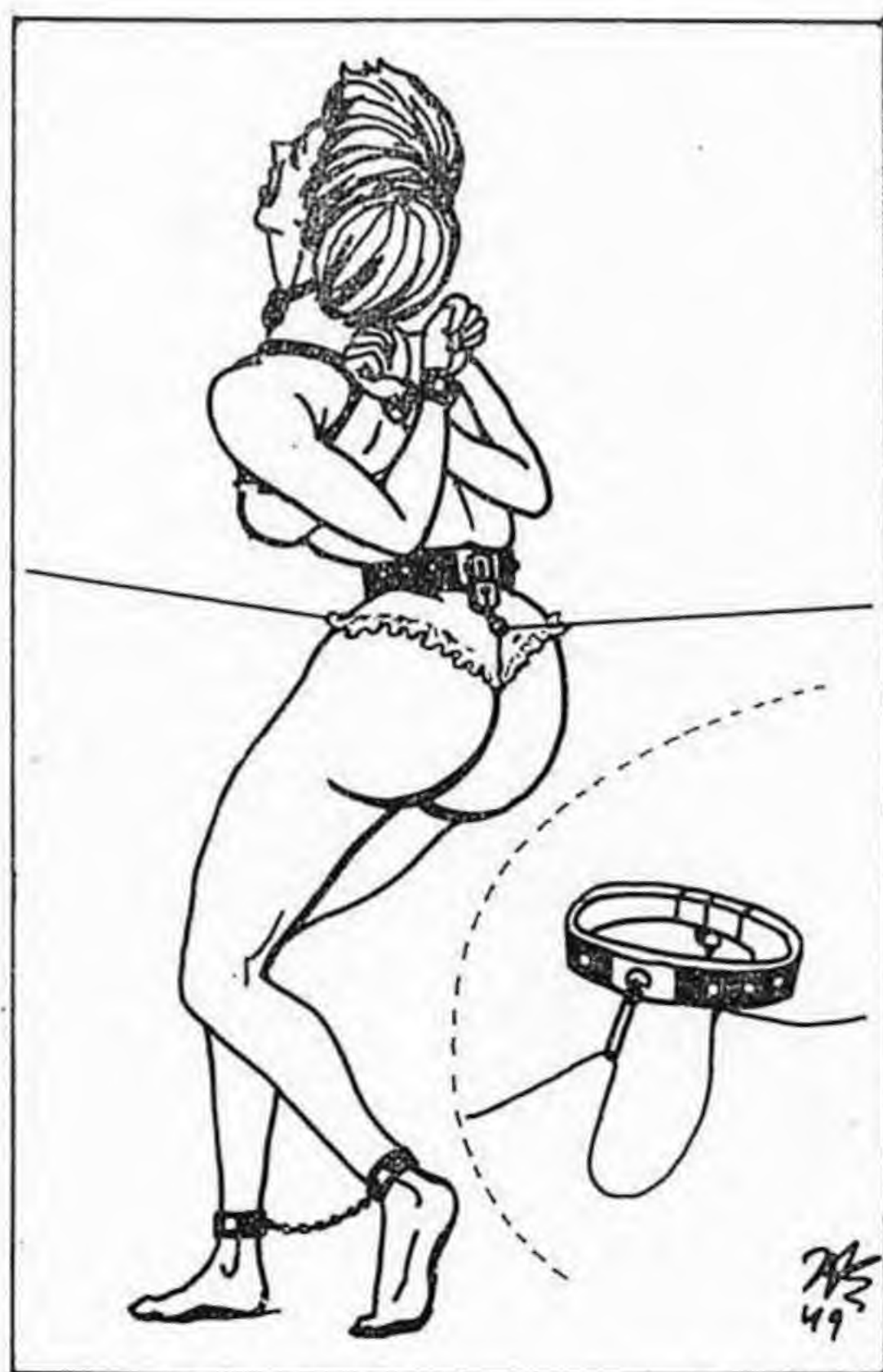
そこに陳列された、捕縄秘伝のワラ人形十体が、開館早々話題をさらっている。

昔、悪人や罪人を捕えるときのナワの使い方を示した人形で、同町梅内留ヶ崎三四の一、農業本木金太郎さん方に代々伝えられてきたものを、同館に寄贈したものである。

技術やしきたりを伝えるための文献、絵などはあるが、人形を使ったものは珍しい。

本木さんの祖先は代々、三戸城、大手御門番の筆頭同心で、本木さんは自宅の神だなにまつてある古ぼけたワラ人形がなにを意味するのか知らないままにすごしてきた。

……アイデア 「貫通？」 ……千葉青鬼



ことし南部落初代藩主光行公をまつてある糖部神社が、明治百年を機会に三戸城を形どった郷土資料館「三戸城温故館」を完成。町民に資料の提供をよびかけたとき、初めて捕縄のかけ方を教えた秘伝の人形であることがわかったという。

ワラ人形は、高さ二十センチから三十センチのものまでいろいろある。

ススでまっくろによごれているが、武士・僧職や町人、百姓、さ

らに打ち首になる重罪人など、階級、罪の軽重などによるナワのかけ方、結び方のちがいが、ナワをかけたワラ人形によって、ひと目でわかる。しほり方は、十文字縄返し縄、注練、二重菱、切縄、揚縄その他に分けられているが、十文字縄は、町人・百姓。返し縄は僧職。注練は神職。二重菱は武士。切縄は死刑執行者、揚縄は両手をゆるくしほるもの。そのほかは、留縄、腰縄、片手縄となっている。

縄 日 記

早 木 夢 二

某月某日 東京は風こそ冷たいが、天気の良い日が続いている。

北陸の方は大雪だという。私は一昔前、北陸の温泉宿で逢った女を急に思い出した。巨大な乳房が胸に溢れていた。

いまなら、すぐ縄をしごいて、そのオッパイを縛らせてくれ、と平気でいえるのだが、当時の私はダメだったんだな。

慶子は親しい友人の家へ、とまりがけで出かけていった。

一週間ほど前、彼女の眼をぬすんで、自縛を楽しんでいたのがバレて、きついお処刑を受けた。疲れが癒えるのに三日位かった。

縄をおいとくとロクなことはないといつて、彼女は二、三本あった縄を持っていて仕舞った。

コン畜生！ とむらむらと斗志が湧く。

ぶらっと近くの盛り場に行った。文房具店で、私の好きな細紐を売っている。一本百十円。ポケットに入れて駅にいくと、この駅にも、近ごろ白いポストが出来

た。悪書追放というヤツ。所がこのポスト、改札口の真正面においてある。悪書(?)を投げ込むようにすると、いやでも駅員の眼にくくようになっていく。

悪書は家に持って帰れないし、白いポストに投げ込むにも監視付きとは……。

起きていても寒いので、コタツを入れてふとんの中に潜り込む。

仰向けになって、ゴソゴソとシヤツを脱ぐと、買ってきた細紐をへその辺りにぎっちり廻す。独りでニヤニヤしながら、思うぞんぶんに半身の自縛を楽しんだ。

ぎゅうときつく細紐を締めつけてから、私は腹ばいになって、呼吸の度に喰いこんでくる縄の感触を味わいながら、原稿用紙にペンを走らせ始めた。

暇ある毎に、慶子に内緒で書きついでいる。題して「慶子の拷問」奇くに発表した慶子の拷問ではない。いわば早木夢二の私蔵版ともいうべきものだ。

いつか慶子は、これを私の机の

中に発見するだろう。そしてその中で、虚実とり交ぜて、あられもない拷問にのた打っている自分を発見するだろう。

ザマ見ろ！

今ごろ慶子は、又悪友とペチャクチャ、夫夢二の変態性慾について、シャベリまくっていることだろう。

だから、私は原稿の中で、慶子のマゾヒズムを、大いに書き立て

ウサを晴らしてやるのだ。それにしても、一日中思うは、縄と拷問のことばかり。

思いきり縛ってみたい。

思いきり縛られてみたい。

「秘録おんな牢」着物を着た女が首から縦に縄を打たれ、二カ所で横に廻されている。菱縄縛りに慣れ切った役人、ちよっといまいましい。

クロッキー 「縛 女」 獅子内 謙



詩

「ある訓育」

菊地淳子

△浣腸に魅せられた

女のうたえるうた▽

一、姉と慕いし 君ならば
抱かれてうれし 浣腸は
よき子の誓い 身をくねり
赤き扱帯に 目をとめる

二、括られし身を 羞じらいて
手馴れし襦袢 くぐる股
心おきなく 浣腸を
いま施され 蠕動する

三、いと悩ましき 新妻は
はばかりするも 頬染めて
はやいとわじと イチジクの
甘き熱さに 想いはせ

四、気高くやさし 訓育は
母の瞳よ そのアヌ
お熱の憂い 幼子に
浣腸の備え 忘れじと

五、隔離の友の ありと聞く
女子寮あわれ 検便は
四つ這いにして 乙女らを

いじわる
時評

月刊誌と週刊誌と異常小説

太田三郎

「週刊読書人」43・2月26日号△
読書コーナー▽によると、マンガ
の全盛の今日、テレビの週間単位
の番組編成が雑誌界にも週刊誌時
代が現出し児童の娯楽の単位が週
刊に変わり、そのことから21年11月
号創刊以来の児童雑誌『少年』が
この本年三月号で休刊と報じられ
ているが、大人の読物出版界の中
にも、週刊誌のデラックス化によ
り、急激に月刊誌を喰いつぶさん
とする勢いが推測される時勢にな
った。ただ、マンガ中心でない大
人向の月刊大衆誌は、ここに時間
により追われるという（特色がニ
ュース中心）といった週刊誌の編
集を逆手に取って、増頁、読みご
たえのある小説特集を旗印に受け
て立つという体制をろこつに見せ
はじめてきた（小説ならば、いく
ら週刊誌が力こぶを入れようとし
ても作家の執筆時間と発表枚数か
らいっても未だ月刊誌に強味があ
ろうか）。

ここで興味があるのは新聞のニ

ュースを解説という利点から週刊
誌がおおむね発足したが、こんど
は月刊誌が、週刊の解説を追って
創作でという編集がクローズ・ア
ップされてきたことだ。こころみ
に少し発行が古い『週刊大衆』
双葉社の42・12月21日号を見よ
う。『日本のフリー・セックス地
帯⑤』として△おんなが女を恋す
る愛のかたち▽特集が掲載されて
いる。レスビアン・バーが、かつ
てのゲイ・バーをしのぐ勢いで、
ハンランしている、そんなテー
マ。新刊された講談社刊の『小説
現代』誌、4月特大号には異色特
集△倒錯の愛の世界▽、生島治郎
「女ごころ」——この少年をあらし
は放さない、性の確証を求める執
拗な願望の果て——「腹を裂く話」
——主のために妻の腹中から胎児を
奪う男。怪異譚の裏に潜む愛の異
常——。梶山季之「良妻賢母」——虚
栄に駆られた倒錯の愛。一通の手
紙が作者に告げる女の官能世界。

（文春）別冊の新春特大号に梶山

氏の「ミスター・エロチスト」が
発表されて本誌上でも話題になっ
たが、——これらの動きは、魔仁
阿天狗氏の評される（異常風俗小
説とK誌の立場）ように、たしか
に「マスコミはますます作家のジ
ャーナリスト化を要求する」とい
う時代の風潮が生んだ現象でもあ
ろうが、もっと本質的には出版社
の営業政策とからんだ、ぬきさし
ならない方針がうかがわれるので
ある。ここに「三十年前後の全盛
期直前には類似誌の続出をみた」
とは違った一般家庭雑誌という既
成の実績を持つ大衆誌の異常風俗
小説流行という新しい出版界の傾
向を見るのである。その編集の早
足が黒井珍平氏の「SMきれぎれ
帖」の中にある「梶山先生の「ミ
スター・エロチスト」（文春新春
特大号）について、一月九日読売
夕刊の大衆文学時評で遠山欽五郎
氏が、サマセット・モームの言を
引いて、いかにももつともである
と思わせるものがないという評。
同感。——中略——この種の実験小説
は純文学という研究室で発表して
ほしい」という皮肉な一矢もむけ
られるわけだ。

「梶山先生少しく暴走」は、又
（文春）の暴走でもある。ここか

並べしままに かりたてる

六、寝ぐるしき夜は 乳房燃え

白肌妖し 若き寡婦

悲しきさがに もだえつつ
受けし浣腸 恋しとか

七、瓜先からむ 白足袋や

無念と噛みし おくれ毛に
不義なす女 お仕置と
有無を言わさぬ 浣腸よ

八、お鼻をならし 足をすり

紙撚り浣腸 病むしとね
恥らう肌に 紅をさし
苦しむさまを 見とらるる

九、ナースの掟 きびしくも

四ツ肢吊し 裸か身を
イルリガートル 高々と
体内深く 注ぐ液

十、妊る日の 改めは

隈なきものと 思えども
ガラスの器具の 音高く
浣腸の指示 いとかなし

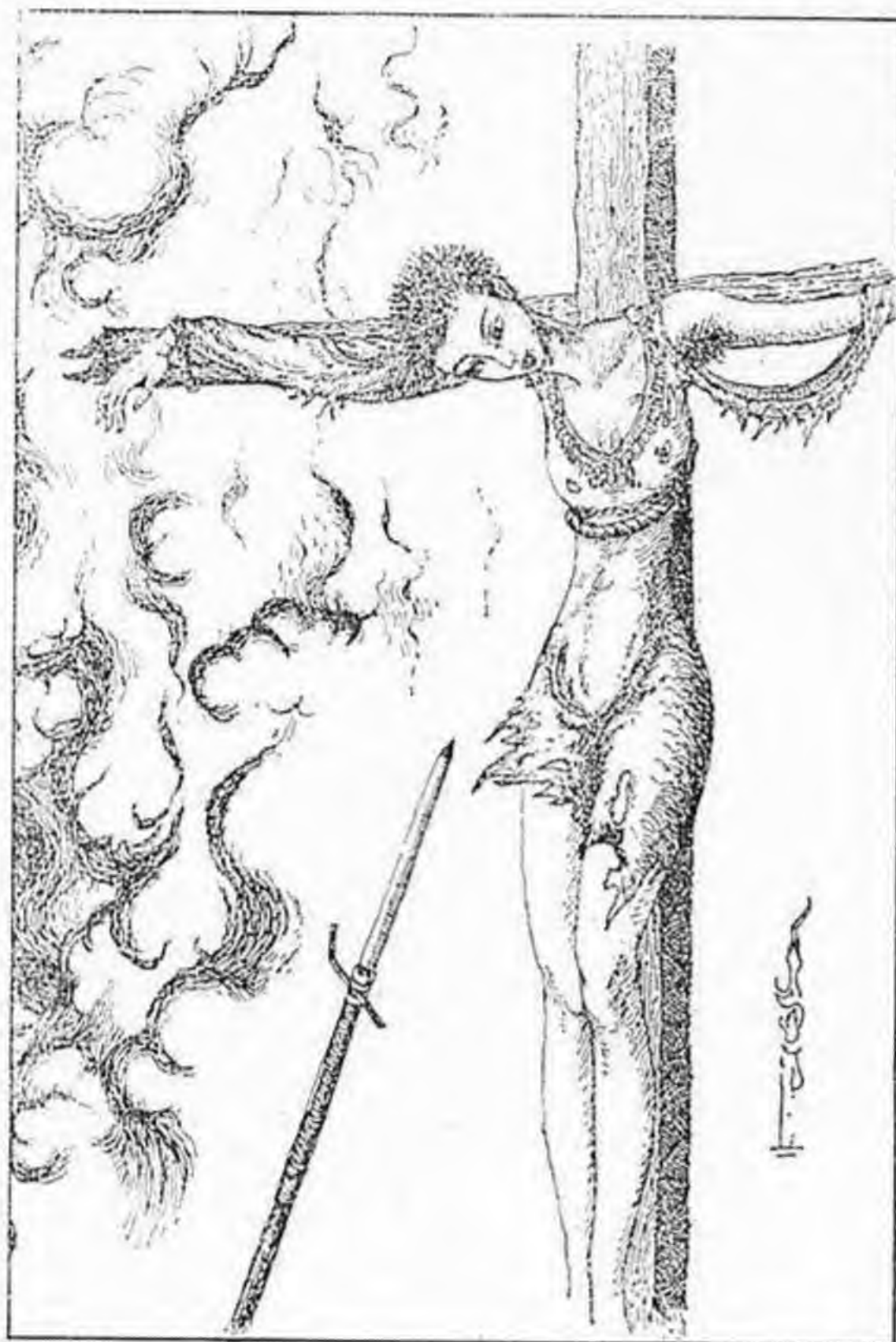
十一、堪えられませぬ このままで

おマルを乞うと 願えども
早や襲いくる 汐騒に
身も世もあらず 呻めくのみ

らマニア誌でもあるK誌の独自の存在が提出されるのであり、大衆文学評論家、遠山欽五郎氏が「この種の実験小説」は、つまりはSM的な物は純文学の中にと明言していることは、すでにKK的なテーマは、純文学の世界にあってより重要な課題ともなったことを意味し、正しい姿勢で、「それ一筋に」追求してきた新しい風俗文芸誌「奇譚クラブ」のあり方が、今こそ一般的にも再評価される気運ともなったのである。一般誌の異

常風俗小説流行とは、また別な次元の世界にあるK誌は、このことをプライドを持って改めて考えるべき時ではないか。

近年来、沢田竜彦氏のサド文学紹介により、それがサド裁判という社会的というより文学的な事件をはらんで、改めて文学の毒の問題が論議され、そこから「必要悪」というテーマが打出された。ここには必然的に表現の自由と、それを受け取る読者の自由が附随されてくる。K誌が悪書である



僕のイメージ画集 「極刑」 室井亜砂路

——という声より、部数が限定されたマニア誌であるという地点でK誌の存在が「必要悪」であるという、もっと前進した論評が出るべきであり、むしろそのことは暴走せる一般誌のブレイキ的な役割ともなろうと信じたい。

いまここに野坂昭如氏が新直木賞作家として誕生した。すでに彼が梅原北明をモデルとした野心的な長篇を発表したことは、読者周知のことだろうが、私の見る所、野坂氏の風俗的な異常小説は本物である。願わくばマスコミに毒されることなくSMの分野も持味を自由に発揮され、マニアも喜ぶ作品を発表され続けるよう。あまり本誌では名が見られない宇能鴻一郎氏も異常小説には一本筋金が入っている。どうしてこの作家が話題にならぬのか不思議な位だ。彼の小説は倒錯の世界を直視する独自の思想が入っていると思う。

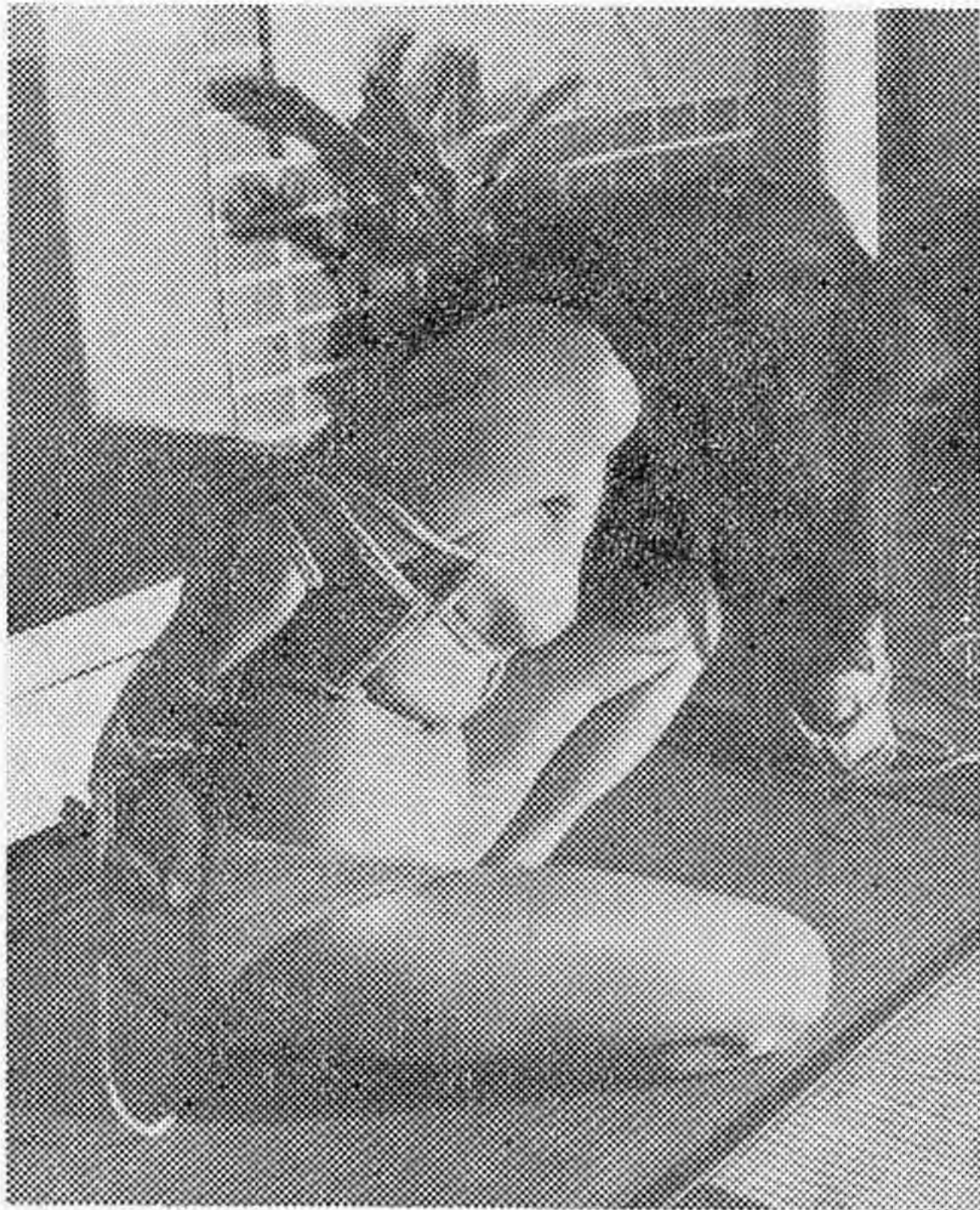
終りに本誌でも評判の声を聞く作家、梶山季之氏がルポ・ライター上りであることを、むしろプラスさせ、一夜漬けでないフェチ小説をどしどし発表されテーマ(SM)の必然性から二度と「暴走」などという声が、外部からも本誌上にも現れない事を期待したい。

安井夫人のリードを期待して

早川 宏

僕は結婚一年目の若夫婦で、僕は27才、妻は24才です。僕は前々から奇クを愛読していますが妻は僕と結婚して始めて目

にしたという状態です。しかし妻はSMプレイについて理解していただけますので、スムーズに僕の話題にのってくれて、今やっと縛



陶醉のひととき 安井喜久子

りの味を覚えたという程度ですが何とかついてきてくれています。奇ク3月号で安井夫妻の夫婦プレイ／私達夫婦の甘い秘密／を読みまして先輩の体験告白は大変参考になりました。早速妻にこの記事を見せました。

妻は「私だって、もう少し年令が経てば出来るわ」と申しましたので、その場で縛り上げ猿グツワをして単にプレイではなく真剣になつてムチ打ちしました。しかし始めての経験なので、妻は痛がって泣き叫び、あとで調べてみると、お尻から太腿にかけて真赤にはれ上っていました。

何とか安井夫人のようなMに育て上げたいと思っています。僕の妻のような若い女性を飼育するには、恥しさを取り去る事が先決だと考えます。それには誌上で安井夫人をはじめとした、その他の夫人が登場することによって一層効果が出るのではないのでしょうか。

先輩である安井夫人、僕達入門したての夫婦をどうかリードして下さい。そのためには夫婦プレイの告白やらフォトをどしどし出して下さい。今の僕達にとって、安井夫人のフォトは羅針盤のようなもので大いに参考になります。

編集部だより

○四月号の本欄にて安井喜久子夫人よりの／夫婦プレイの緊縛のアイデア／募集について載せたところ早速多数の応募に接した。お約束通り折返し安井夫人の緊縛フォトを投稿者全員にお送りした。その一部は奇クサロンにも掲載したので御覧頂きたい。

○昨年の本誌上を、その流暢な文章と大胆な緊縛ポーズで賑わしてくれた中河恵子氏は、可愛い女兒の母親として幸福な日々を送っておられる由、便りを貰った。

○懸賞の応募作品は次第に投稿数も増えてきて嬉しき限りであるが中には全然原稿の書き方もわきまえていない方もある。苟くも懸賞に応募するのだから、書き出しを一字下げるとか、句読点を一字分とるとかいうこと位は守っていたきたい。時には全然改行してないというのや、原稿用紙のマス目は全く無視して書きなぐっているのなんかには恐れ入る。

○四月号の懸賞入選作品で／白い肌のアザ／を書かれた長井葉津子さんを山本章氏に紹介したところ

歌「大鏡」

高村初子

ぶざまなる開股の前の大鏡あられ
なき身に顔をそむけぬ

正面の鏡の中にさらされし羞らい
の身に縛しめかたし

鏡にはおマルは見えずまろやかな
お臍のまるみ息ごむが見ゆ

両手吊りひきつりし個処かくれい
てうなだれし顔鏡に映える

ゆらゆらと縛しめの身の揺らぐた
び鏡のそれも揺らいで見える

幾重にもかさなりて見ゆ白き肌縄
を解きても尚痕しるく見ゆ

婦人用便器置かれてその前に肌
ひしひしと縛られている

いにしえの女の魂の鏡にも縛しめ
られし我が肌うつる

真向いに置かれし鏡わが肌の微細
なところを余さずうつす

カメラ・ハント特集を待つ 瀬芽富音



小生、奇クを読みはじめたのは
昨年の七月からです。その時、カ
メラ・ハントに登場した河森真理
子さんの豊満な乳房が悩裏に焼き
ついて離れません。以後、本誌に
顔を見せてくれませんが、どうし
ましたか？ 恐らく素敵なパート
ナーをみつめてプレーを続けてい
るのでは……。

箕田さん、お願いがあります。
辻村氏のカメラ・ハントの特集版
を発行して下さい。価格は二千元
以内でグラフィック・タイプ、掲載され
なかったフォトなども、さしつか
えない程度に載せて下されば、な

お結構です。フィクションの代表
が「花と蛇」であれば、ノンフィ
クションの代表としてカメラ・ハ
ントの特集を待ち望んでいるのは
小生ばかりではないと思います。
ぜひ実現して下さい。それから、
プレイのフォトを撮影してもD・
P・Eが出来なくて困っている人
が大勢いると思います。小生はこ
のたび新しく引伸機を購入、今ま
での引伸機が不用になりました。
御希望の方がおられましたら無料
で差し上げます。読者通信を通じ
てお知らせ下さい。最後に河森真
理子さん、お手紙下さい。

ろ、早速得意の早業でカメラ・ル
ポを物して呉れた。彼女は自分で
も告白文章を書きたいそうなのだ
が、誰か我れと思わん者は小柄な
牝豹をペンとカメラでハントして
みませんか。

○先月号のこの欄で、東京並に地
方都市駐在の編集員、探訪記者募
集について言及したところ、折返
えしの反響を頂いた。最近の作品
とか特技の添記という個所に二の
足を踏んだのか、今の所応募者の
数は多くはない。しかし、いずれ
誌上に活躍してくれる日も遠くな
いことと思う。

○本誌上に数年間に亘って連載し
た八心傷たむ遍歴は、今月号を
以て一応完結することにした。筆
者に対して永い年月の御寄稿を感
謝すると共に、愛読して下さい
方々にも感謝の意を捧げたい。
○編集部へお送り下さる原稿に対
してペンネーム(筆名)は自由に
つけて下さって結構なのだが、連
絡或は稿料送金の関係上、住所本
名を添記頂ければ幸いである。尚
支障ある場合は局留にても可。
○長い間愛読頂いた八稿談性風俗
資料入門は今月で完結した。い
ずれ斎藤氏には読切の秘本紹介を
して頂く予定である。

苦言と要望

——「花と蛇」にふれて——

北山読人

最近の本誌の傾向は、緊縛、鞭打ち、妊婦が大半を占めているようだが、もっと違った読物や写真を採り上げることは出来ないものかと思うものです。

十二、三年前の面白倶楽部に大久保氏の訳で載ったものや、古典の千一夜・金瓶梅。フックスの風俗の歴史等、同系のものがあるがこれらのものは、未成年者に対する遠慮？ をしているようではないかと思う。

毎月の読者通信欄にも、写真、挿絵の少いことが指摘（2月号の中氏、3月号の岸田氏等）され、小生も同感だが、編集部では一向に増してくれない。観たかったら分譲品を、というわけですか。縛ったものばかりでなくとも、デザインの変わった水着、下着などだけでもいいのではありませんか……といったのです。各種の週刊誌（漫画・映画・スポーツ）や月刊誌、若者向けの雑誌、女性誌

すら、本誌よりも大胆なポーズの写真、挿絵や、メーカーのPR写真が掲載されているではありませんか。PR写真などカラーで眼をみはらせ、絵はパンティの縫目まで入念に描き込んである。編集部は最近の各誌を見ているかどうかは知らないが、本誌は遠慮しすぎといえるのではないかと思うのです。挿絵にしても、河出版の「O嬢物語」の方が大胆。尚、1月号、辻村氏の「O嬢物語」の課題について、の文章は、この本の序文にあるものと違った紹介ではないのでしょうか。

風俗文献誌なら、下着や貞操帯その他の変種デザインの紹介写真や画があってもよいではありませんか。

「花と蛇」は大変好評なようだが小生は生体を見視した作法ではないかと思っています。

数々のプレイで、肌に発疹やカブレ、又はアレルギー等が出ない

呼びかけに応じて 安井夫人の 夫婦プレイ の アイデア

浅井甲斐三

安井喜久子様。四月号の「SM一〇〇問」楽しく拝見しました。SMで楽しい毎日を過ごしておられることは羨しい限りです。

私は妻の協力があまり得られないので、同好者の出現を鶴首して待ったのですが、仲々私の目の前に現われてくれません。毎月の奇クを慰めに、只、空想を楽しみむだけですが。

アイデアを募集されるとの事。貴女方にとってはすでに経験済みとは思いますが、私が相手次第でやってみたいなあと思っています。とがありますのでお知らせします。よう。もし参考になれば幸甚。

「ラビア責め」という言葉と、二行の会話が載っていました。

あれだけでは、何のことだか推察も出来ません。私流に解釈して、文章は苦手ですので図にしてみました。のが添付のものです。縄のかけかたは専門家でないのでこのくらいで勘弁願いますが、図のように家庭で十分用意出来る小道具で事がたります。

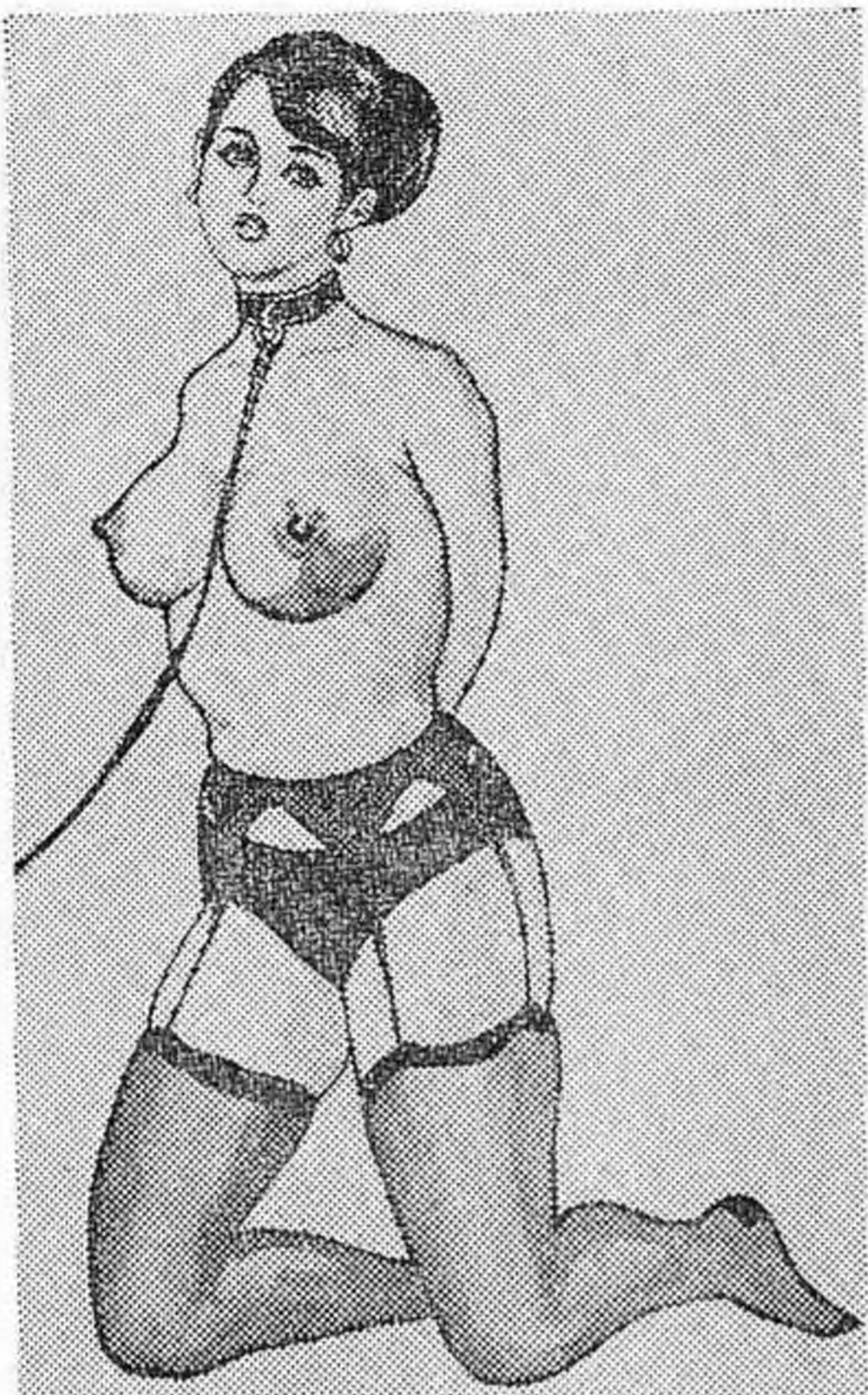
拷問台は別になくともかまいませんが、もし予算がありましたら歯科医用の治療台でも購入され、改造すればよいと思います。

歯医者に通って味わった、あぶきみな音を立てて肉の中に喰い込んでくるいやな機械も、先につける道具を変えて、柔らかな羽毛にでもしたら、貴女をこうこつの世界に導いてくれると思います。

下に描いた丸い器は、浣腸責めの時の用意です。

図の洗濯ばさみは、バネの強いものほど良く、足の拇指に繋ぐのもよいでしょう。ご主人の責めが進むにつれ、苦しみのたうつ足の動きに比例して本来の目的を達するはずですが。

浣腸責めについては、もう少し案をまとめてからお知らせしますが、浣腸器の代りにローソクを利用して、前記の緊縛に加えてプレイすると、ご主人が一服している



私の捕獲したペット 柿 淳 五 郎

か。いくら全館の各室が暖房完備といっても、地下の湿気多いカビ臭い所で裸でいたら、夏でも風邪ぐらいはひくと思うし、女性本来の生理や、誘拐者の二つのグループ間にも人間本能的（続篇で銀子が静子へ一度あったが……）なものが、幹部の主要人物以外にもあるはずだと思います。それらが、S Mプレイを四カ年に亘って書かせ

きな要因ではないのでしょうか。創作とか、娯楽物にいちいち理窟をつけていたのではキリがないから、都合よくしてあるというの

は当然でしょうが、楽しく読ませるためだけのご都合なら、そういう必然的なものも織り込んだ方が

効果的ではないでしょうか。

お前ならどうする？ と反問される

と困りますが、そこは読者の

身勝手と許して貰いたい。

間もローソクは燃え、私流のラビア責めがより効果的になることはたしかです。

誌上で拝見すれば、お二人の子供さんがおられるので大丈夫とは思いますが、乳頭は人によりあまり出ていない方があります。もし貴女が出ておられたら、図のように乳頭と鼻の連結責めも面白いのではないのでしょうか。

つまらぬアイデアを書き綴りま

初めまして。私はごくありふれた会社員ですが、今、淳子というO・Lを飼育しております。

女子大出身で、大変気位の高い娘ですが、何度かはねつけられた末、一昨年の暮にやっと捕獲しました。調教は彼女のアパートで月に一度行います。

犬の首輪をつけて、鎖をジャラジャラいわせて這いまわらせ、次に三十分ぐらいかけて、靴でむれた私の脂足を舐らせ、その間中私が噛んでクチャクチャになったスルメを投げ与えるのです。淳子は悦んでそれを床から直接口でひらうところまで進んでいます。筆先だけで、まだ、カメラの前でじっとすることは出来ません。私は彼女にペロという名をつけ

したが、満足にプレイも出来ぬ男の夢の中で見たタワ言とご笑納下さい。

股間縛りが好きとの事ですがフォートを戴けるのでしたら、正面から撮影したものをお願いしたいと思えます。妻にもよく見せて協力させ、私も貴女方と同じように夫婦プレイの実現を早めたいと思っていますので、よろしくご指導願います。

てやりましたが、調教してみるとなかなか可愛いペットです。寒い時のコタツにもなり、机に向う時の椅子にもなります。そして面倒な時には、便器の役目も果たしてくれます。気位の高いインテリ娘も、近頃はすっかりペットの身分が気に入っているようですが、ただ一つ残念なことは、月に一度しか逢えないことです。

ペットである以上、私の気のむくままに何時でも曳き出して奉仕させたいのですが、少しでも変ったポーズを観てやろうとすると、デッサンからしてやらねばなりませんので、仲々可愛いが、手間のかかるヤツです。仕事の関係上、つい月に一度ということになります。余計に可愛い想いです。

私 評 二 点

沢 瀉 し の

贗作イーリアスについて

久しぶりに黒瀧大人の御作品を拝読しました。その雄大な構想と筆致は正に奇ク連合の軍師ならではの名編と云うべきでしょう。

その上、随所に展開されるあやしきS・Mムードの数々は歴史的現実と夢幻の交錯する不思議の世

界へと読む者をさそひ込みます。とくに東西の神々の性格づけはまことに軽妙洒脱、思わず膝を打つものがあるかと思えば、ふき出して終うのまで数えるいとまもありません。

かつて学校で、ただ退屈な時間として何となく聞き流してしまつた歴史が、これ程面白い物語と同一内容を有していたとは、何というおどろきでしょう。

俊秀なる嬰一氏は御本職も又、産業界において日本国中は申すに及ばず各国に集散する製品原料を一手に取り捌いて過不足なからしめる平和産業における軍師であられ、名は体をあらわすとか申しませんが、正に黒瀧嬰一（クラウゼビ

ッツ）の名をはずかしめない佳編だと思ひます。

カジバシ座の

“女牢”について

この所異色軽演劇で話題を呼んでいる東京のカジバシ座に、「女牢」が出ました。映画のおんな牢に刺戟されて出た様な感じですが、れども、筋書は全然ちがいます。

おどりの師匠で浮気女の多角関係を軸にして、身代りの殺人犯人に仕立てられる女が主人公になっており、その他、女牢の囚人たちの悪事の寸劇をはさんで、御色気たっぷり（大変にたっぷりと有ります）のストリップ系軽演劇にまとめられております。

旧劇出身らしい男優は、皆達者な人ばかりで牢内の女囚にも老婆役の女形が入っており、以前の舞台に較べると大分やわらかく、その分だけ惨酷味が少くなり、その代り演劇としてはよほどまとまってきたました。

先発の大映のおんな牢では縛りシーンらしい所は始めの方の大番

屋から牢屋敷まで歩かされて行く所だけで、これは安田道代の演技もよく、色つやを付けず神妙に曳かれて行く所は、縛り方のあらさがしさえしなれば、この一場面だけで見に来た甲斐があったと思ひました。その外は身体を横にすると自由に通れる牢屋格子だの映画拷問でもやっていた外鞘の戸を開けたまま牢屋の戸を開ける所など、どうにも仕方のないものでした。

したがって、その映画の影響を多分に受けたストリップ「女牢」にも、縛りはほとんどないと云つてもよく、白洲に曳出された女の身体にも全然縄目はなく、ただ後で手首だけ止めてあるだけです。

この芝居の見せ場は、おんな牢同様女囚同志の乱痴気さわぎで、入牢者の身体改めやら、女ばかりのプロレスまがいの喧嘩など、見物も大よろこびしておりました。

その外は、何分表向の敵、石抱き等、この前すでに出ておりますので、大分趣向の変つた私刑風なもので、一その話をどこか地方の藩の物語にしてこしらえたら面白い芝居になったのではないでしょう。とは申しても実際の取調べに当っては、江戸でも正式の牢

懐しの大道芸人

予世場 良 三

小生が幼い頃、父の商売の都合でか、大阪の鶴見橋という処にしばらく住んだことがあったらしいのだ。すでに三十五、六年も以前のこと、ハッキリしたことは云えないが、当時みた記憶のある大道芸がいくつかある中で、子供心にシヨックを受け、今だに忘れ得ない「縄抜け」の芸人をご存知の方は居られないだろうか。

今でいう奇術の一種だが、十三か四の女児が、道の片隅でこの縄抜けを觀せて投銭集めをしていたのだ。幾人かの人が狭い半円を描いてゐる中で、その女の児が、いかつい大男の手によって、入念に後手縛りにされ、客に点検を受け縄目をコヨリ封印した後、両足も棒縛りにされた上、男にひっかつがれて袋詰めされ、袋ごと三、四回程振り廻わされてからドサツと地上に置かれる。男がなにやらごちゃごちゃと口上などを云つて袋の口を開けると、縛られていた縄を片手に女の子が両手を拡げて

問とは別に、役人たちが創意工夫をこらした拷問法を用いて事件処理の能率を上げていた事は事実です。死刑が予想される囚人には殺さないでいどならば大抵の事はしてもかまわないともいえるわけですが、今回の舞台はどれも極めて形式的なもので、中には歌舞伎よりも能に近い様な感じのものもあり、私共には少々物足りませ

小春梶 天平

うらうらと陽炎の燃えそめ

娘ら

かわいた笑い声を

陽だまりにひろげ干す

ひるのひなか

窓の陽が恥ずかしい

といて戻ってくるわけじゃない

さ

女学生のころ

ころころこげまわってただけじ

やない

白い瀬戸物に

チツとついた赤い斑

海老責めにあうと自分の体重を感じ

じちゃう

そうそうその調子

とにかくうらうらの小春日和

んが、演技としては仲々面白い行き方だと思いました。

一番最後に打首があります。これはそれまでの惨酷乱痴気ムードとはがらりと交って、石灯籠なども見える御殿風の庭先を表した書割りで、布製の面紙を着け、腰巻一枚の半裸の囚女の手を引いて来てムシロの上に坐らせ、足軽の太刀取が演技をします。

私のイメージ画集……

これは舞台監督に対する苦情ですが、囚女は真直ぐ坐ったままなので、豊胸の観賞には都合がよくても斬るのには工合が悪そう、今少し前屈みになって首を差伸べてほしいと思いました。

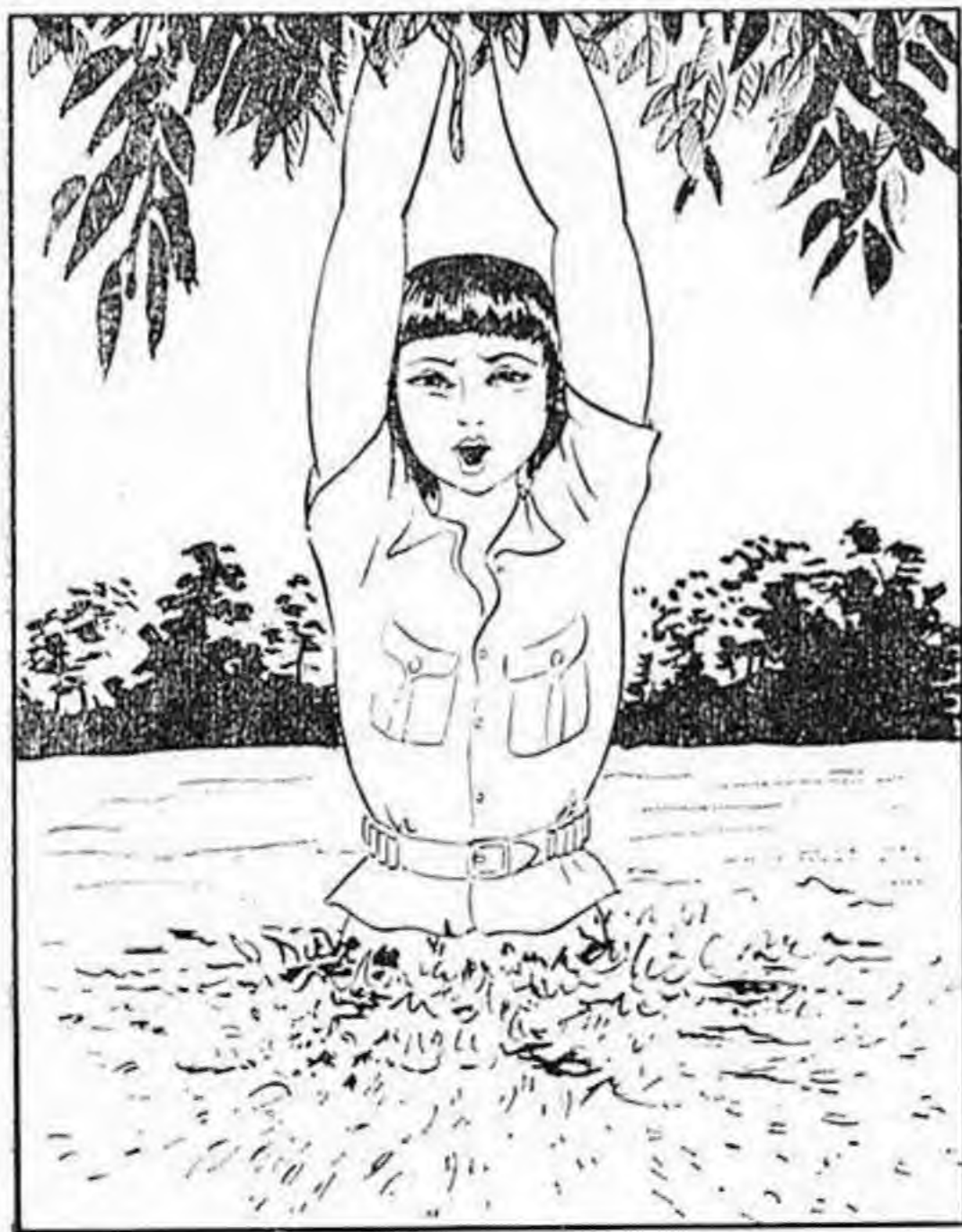
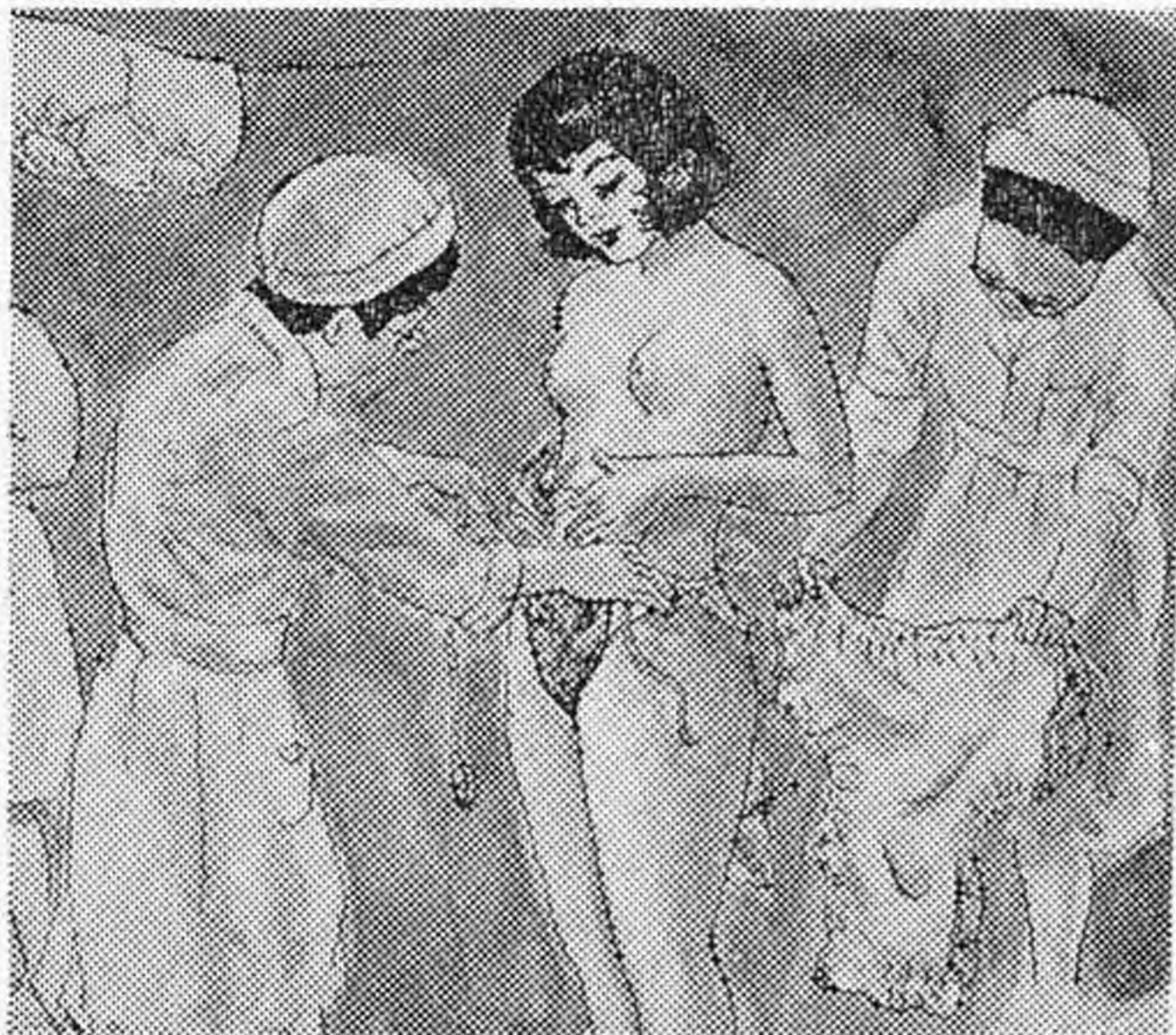
とび出してくる、という芸だ。ギリギリと縛られてゆく様や、客の前に縄目を見せて歩いたりした女の子の姿が印象的だった。ずっと後年になって大阪を訪れた際に記憶を頼りに当時の住所を探してみたが、激変にその片鱗すら見出せなかった。あの縛られ役の女の子は、今いればもういい年令だろうが、どうしているだろうか。

(上)「さあ、ぴったりのを作りましょう」

—原由貴子—

(下)「ピラニヤは特に若い女を喜んで喰う」

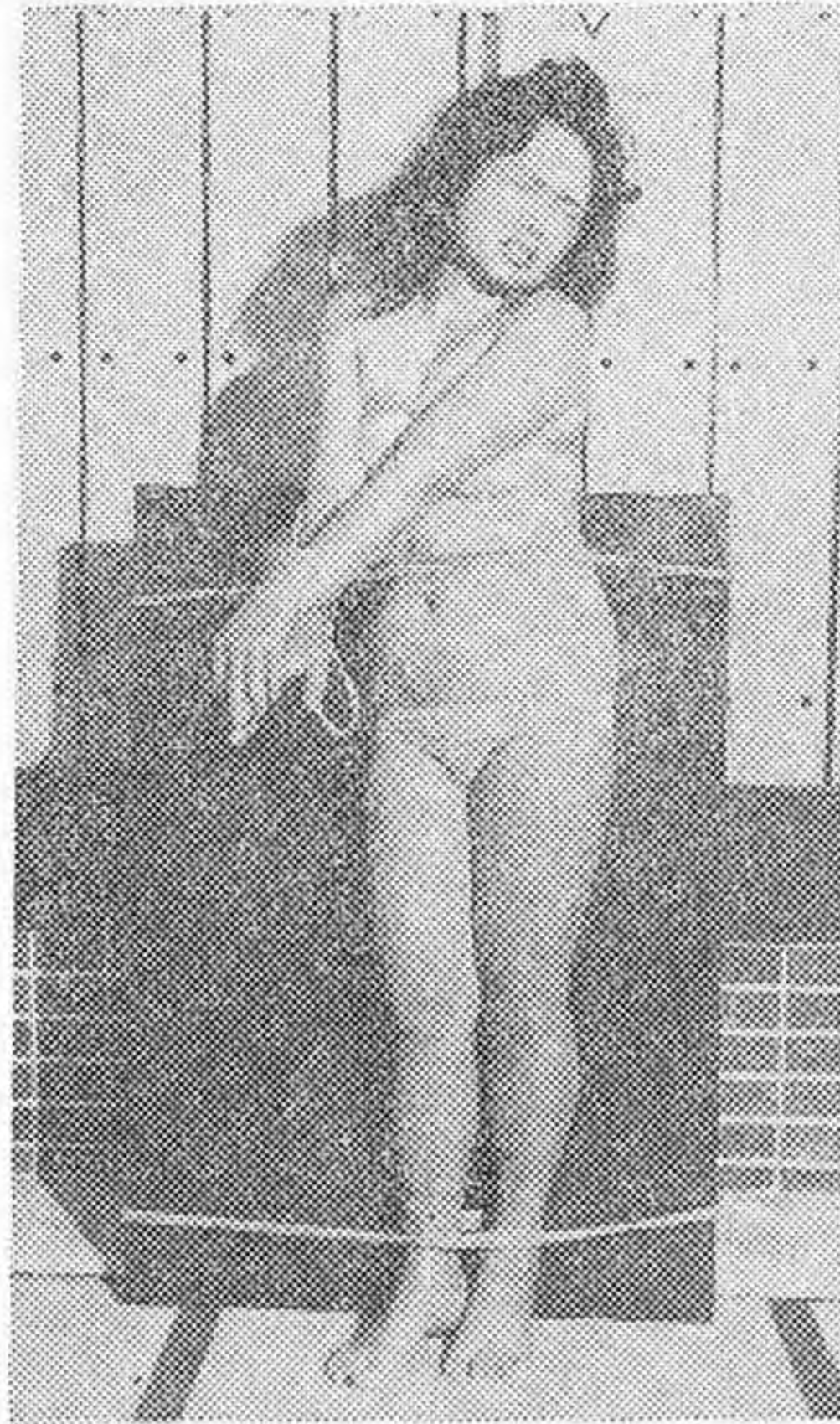
—桐原紫門—



〔告白〕

鞭打ちと逆さ吊り

関谷 富佐子



私の大好きな鞭打ちの中でも逆さ吊りにされて三十分ばかり連続でやられたときのことが、一番印象に残っております。

先ず全裸にされた私は鴨居の前で逆立ちをします。踏台をした夫は私の両足首を揃えて縛り鴨居にしっかりと固定してしまいます。ここで夫は皮のムチで私のお尻を叩

きながら「両手を後へまわせ、手を背中へやれ」と命ずるのです。

始め逆立ちをするときには、両手を畳についているのですが、上へ垂直に伸した足首が吊られてい

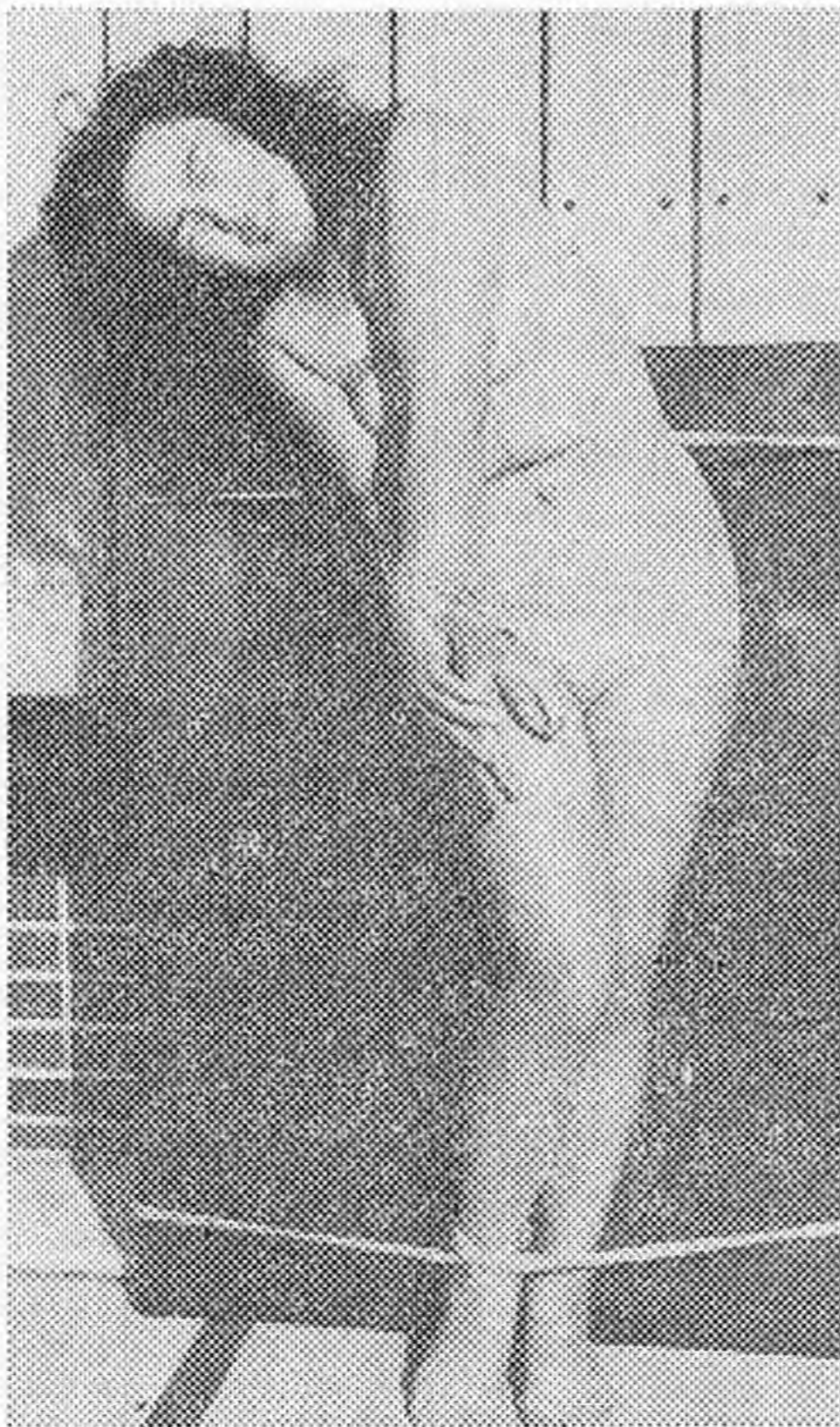
と両手を畳から放すことが出来ません。自分で手首を背中で交叉させますと、夫は紐で縛ってしまいます。これで私は完全に逆吊りになってしまい、自分だけではどうにもならなくなりました。

それから夫は、私の全身くまなく好みの個所を思いのままにムチ打つのです。やはり中心は臀部ですが、太腿、胫、足の裏なんかには激しいムチが飛びます。でも私はムチが腹部や前部に飛んでくるのも好きです。時間の経過は私にはわかりません。長かったのか短かったのか、そんなことよりも私には激しいムチ打ちの後に襲

ってくる恍惚感の方が楽しくて時間の観念はありません。

夫の話によりますと、いつも吊られているのは三十分ぐらいだということなのですが、ムチ打ちのプレイが終って畳の上に長々と伸びてしまつて夢心地でいるときの時間の方がずっと長いように思います。

夢幻の境をさまよっているときムチ打たれようが、何にされようが、私には只子守唄の伴奏としか感じないのです。次の機会には是非、逆吊りでムチ打たれてほしい。私の表情の変化を写真にしたい。ただきたいと思っております。



ヨーロッパ旅行土産

女性乗馬フォト展

春らしくなってきました。

お変わりありませんか。私は本誌の長年の愛読者ですが、幸運にも北ヨーロッパへ旅行することが出来て、数多くの年若い女性の乗馬姿を見る事が出来ました。

本誌の愛読者の中にも女性の乗馬姿を愛好される方々が沢山おられる事と思い、各種の写真を撮影してまいりました。特にマゾ愛好者の方には、こよなく魅力あるも

佐野 寿

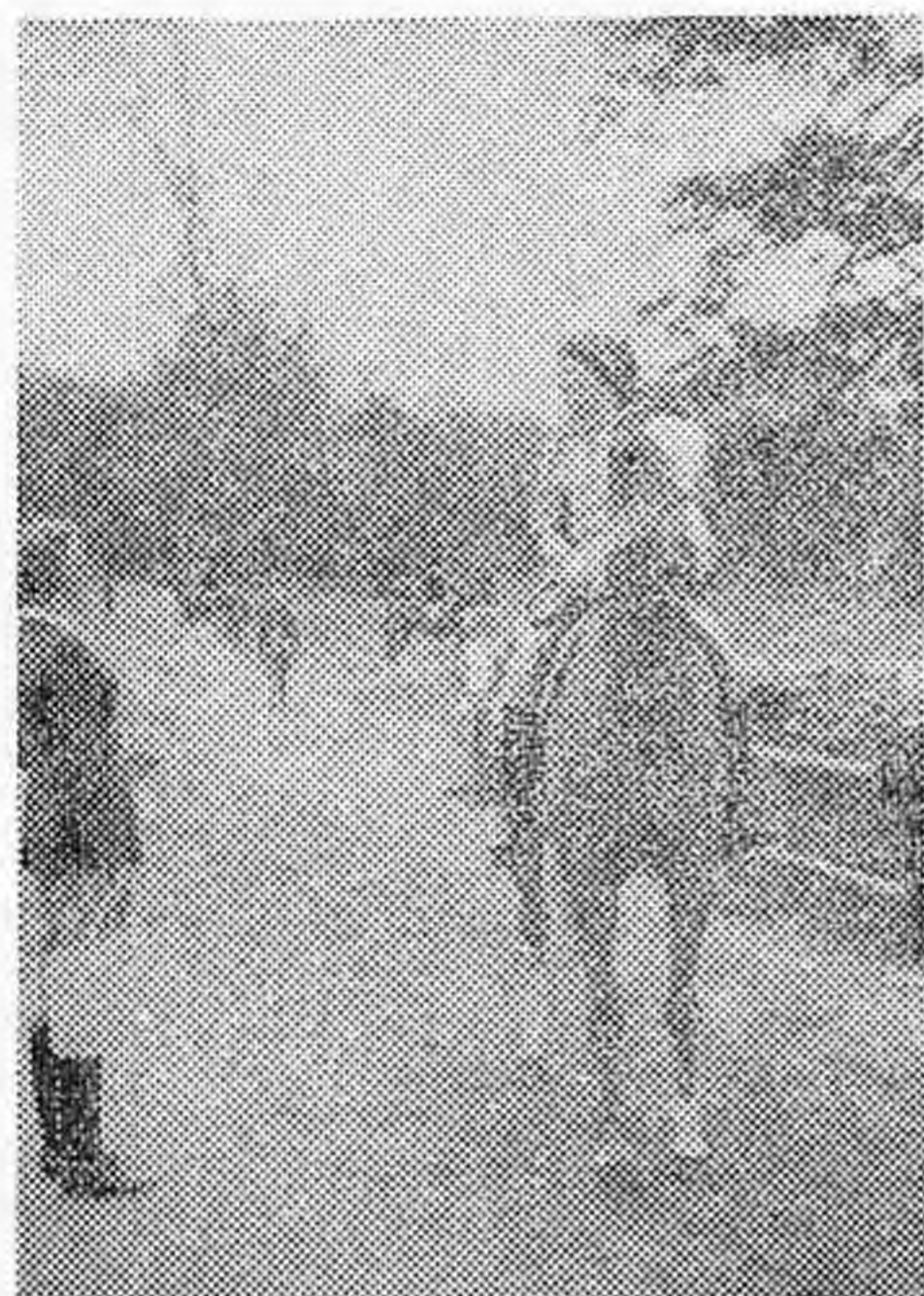
のではないかと考え、ここにお送りしたく思います。貴誌にこの中のいくらかを掲載していただければ大いに満足です。

裏面に大まかな説明をつけておきました。尚、来月号に間に合うように「女性乗馬考」という短文を写真と共に、お送りしたいと思っています。末筆ながら愛読者の一人として貴誌の御発展を祈ります。

愛知・佐野 寿

〔写真説明〕

(一)、スエーデンの婦人馬術大会に出場せんとするお嬢さんを、その途上にてスナップしたもの。(二)、フィンランドの婦人騎馬警官隊の一人、ソーニヤ嬢。このような婦人騎



馬警官は、ここではそう珍しくはない。(三)、コペンハーゲン郊外にてのスナップ。屋外馬場で殊の外激しく馬を乗りまわしている年若き北欧女性の勇姿。ギャロップの猛練習中の様子。以上拙い作品ですが、ごらんいただければ幸いです。私は勿論貴

誌の昔からの愛読者ですが、殊の外、M的性質の記事、女性乗馬や男に跨る勇婦には、いつも心ときめかして読んでいました。一層の充実を期待いたします。





ショート・ショート

鞭のあるバー

緑川奈緒美

高貴なる美貌、ひき締ったしなやかな肢態、黒光りするブーツの高い踵の先端は、針のように細く鋭い。形よい唇をついて出る声は男に命令するだけの為に生を授けられた女性……の声だ。

繁華街の裏、細い小路の一隅。黒い扉の内側に別世界はある。

バー・S。

ズラリと壁に並べられている幾種類もの鞭。カウンターの止り木に居る私を、チラッと眺めたマダムはすき透るような腕を伸して、その一本を手にする。私がゾクツとしながら見詰める眼の前で、その鞭が鋭く音立てて空を切る。

「やはり折れてるワ」

マダムが鞭の中程をまさぐる。

「あの血の噴きようじゃあ、折れたって不思議じゃないよネ」

美人の娘バーテンが微笑して肯

く。私は全身がしびれるのを覚えてグラスを落しそうになる。

特別室は床もカーテンもすべて深紅一色。隅に木馬が一つ。天井から鉄鎖が二本、冷たい鈍光をみせて垂れている。

「さっさと脱いで！」

マダムの叱声が立ちすくむ私をドキッとさせる。

「眺められながら脱ぐのも悪くはないはずよ」

美しい眸が、獲物を吟味する冷酷さに変る。女豹の輝きだ。

黒革のブラジャーとパンティ。

エナメルの光りも鋭いハイヒールブーツ。真白く透ける肌の鮮やかなコントラストに圧倒される。

背くことを許されぬ気高い叱声に操られ、二本の鉄鎖に自ら手首を噛ませて吊り下る。

鞭が空を斬る音と、消音拳銃の

発射音とは似ているようだ。

その音につられ、私の願望意識がムラムラと湧き上ってくるのがわかる。身震いが襲う。

マダムの冷酷な眸が、会心の笑みを漂わせ、鞭がゆっくりと孤を描く。私の眼がそれを追う。

ビシッ！

突然、私の視線から消えた鞭が思いもかけないところへ炸裂。

痛覚がノドの奥のうめきを引き起し、全身を走り抜ける。

憧憬の的であった鞭の味とは、かくも冷酷で激烈なものだったのか？ 私はウロタエる。

畏怖の眼に、マダムの美しく冷やかな嘲笑をみとめたとたんに、第二の痛撃。続いて第三、第四。

両足の爪足がやっと床につく程度の体重を支えていた両手首の痛さなど、どこかヘッ飛んでしま

って、全身を灼かれる想いの私は無意識にとびはねていた。

「いもむしの宙吊りネ」

面白そうなマダムの声が、遠くに聞えたような気がした。

ハジケ、突き刺されるような鞭の来襲はハタと止った。ホッと救われたような気がする。思わずグンナリとなつて、忘れていた両手

首の痛さにあわてて爪先き立つ。

全身が火照って、ズキズキする。

「いかが？ 鞭のお味は」

「女王様。もう、もうお赦しを」

マダムは無言で、両手首の鎖を外してくれる。ぼろ屑のように床にノビる私。だが、すぐに背中を一撃されてとび上る。

「木馬にお伏せ！」

赦してくれるために鎖を外したのではないらしい。

「早くッ！」

今度はマダムのブーツの先が脇腹に蹴り込まれる。

私は命令通り、ズキズキする体で木馬のせまい背板に腹這いに伏せ、背中にマダムの体重を掛けられてから、始めて木馬の置いてある目的を知らしめられた。

「これが私の美容体操よ。脚のゼイ肉をとるのに効果的な」

私は、胴を締めつけられながら臀に乗馬鞭を受けては、必死の力で背中を波打たせねばならない。

「それ！ もっとしっかり！」

マダムの声が叱咤するのが聞こえはするが、それは、ずんずん遠のいて行くように私には思えた。

翌週、バーの止り木に腰掛た私の前に、マダムは優雅な手付でグラスを置いた。何事もなかった人の笑顔であった。

印画紙焼付極鮮明写真

「新しいモデル強烈縛り」

Y字型宙ハリツケ

大手札四枚一組 略号八ちねV

開股逆さ吊り姿態

大手札三枚一組 略号八ちてV

強烈菱縄柔肌縛り

大手札四枚一組 略号八ちやV

豊満な臀部への責め

大手札四枚一組 略号八ちみV

猪吊りの滑車責め

大手札四枚一組 略号八ちつV

悶々たる尻立て縛り

大手札四枚一組 略号八ちなV

股間立縛りの表情

大手札四枚一組 略号八ちすV

全裸立縛りの表情

大手札四枚一組 略号八ちさV

豊満女体緊縛のあえぎ

大手札四枚一組 略号八ちにV

緊縛と柔肌の交錯

大手札四枚一組 略号八ちこV

投げ出された裸女

大手札四枚一組 略号八ちくV

輝美表と裏の二態

大手札二枚一組 略号八ちけV

美女の鼻をもてあそぶ

大手札四枚一組 略号八ちるV

美女の鼻孔を鑑賞する

大手札四枚一組 略号八ちれV

開孔器で美女の鼻腔検査

大手札四枚一組 略号八ちきV

開股拷問椅子正面縛り

大手札四枚一組 略号八なたV

甘美な椅子縛りプレイ

大手札四枚一組 略号八なあV

のけぞる痛打の果て

大手札四枚一組 略号八なちV

臀部に炸烈するムチ

大手札四枚一組 略号八なつV

痛打による絶妙表情

大手札四枚一組 略号八なてV

絶妙なるバック姿態

大手札四枚一組 略号八せきV

強烈猿ぐつわ哀歎

大手札四枚一組 略号八せかV

息づくボリウムを縛る

大手札四枚一組 略号八せもV

左右に開股を縛る

大手札四枚一組 略号八せみV

ゴムカバの猿ぐつわ

大手札三枚一組 略号八せなV

羞恥椅子開股縛り

大手札四枚一組 略号八せけV

黒布の猿ぐつわと緊縛

大手札四枚一組 略号八せこV

甘美なる開股椅子プレイ

大手札四枚一組 略号八せまV

開股吊り縛りの極致

大手札四枚一組 略号八せむV

菱縄雁字搦目縛り

大手札四枚一組 略号八せえV

私を虐めて下さい

大手札四枚一組 略号八せろV

豆絞りの猿轡縛り

大手札四枚一組 略号八せれV

悶える全裸の表情

大手札四枚一組 略号八せりV

麗身の裏と表の表情

大手札四枚一組 略号八せとV

竹棒と猿轡と縄と

大手札四枚一組 略号八せてV

豊満な緊縛全裸を晒す

大手札四枚一組 略号八せゆV

陽光に映える亀甲裸身

大手札四枚一組 略号八せいV

縄で弄ぶ豊満緊縛女体

大手札四枚一組 略号八せたV

後手縛りに狂い泣く

大手札四枚一組 略号八せのV

遅ましき臀部責め

大手札四枚一組 略号八せねV

強烈縛りに喘ぐ裸身

大手札四枚一組 略号八せにV

大の字笞打ちの悶え

大手札四枚一組 略号八わりV

絶妙の尻立て鞭打姿態

大手札四枚一組 略号八わもV

鞭打ちの女王昇天す

大手札四枚一組 略号八わめV

狂い咲く鞭打の妖花

大手札四枚一組 略号八わみV

大の字ハリツケで鞭打

大手札四枚一組 略号八わまV

蒲団に狂いまわる女王

大手札四枚一組 略号八わとV

印画紙焼付極鮮明写真

〔美人モデル緊縛フォト〕

鞭打ちによる感涙の表情

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

関谷富佐子 略号 (めち)

股裂縛りで痛打する

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

関谷富佐子 略号 (めの)

海老縛りの鞭打地獄

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

関谷富佐子 略号 (めぬ)

尻立縛りで強打に泣く

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

関谷富佐子 略号 (めし)

ムチは臀部の双丘に炸裂

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

関谷富佐子 略号 (めけ)

鞭に悶える鉄砲責め女体

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

関谷富佐子 略号 (めま)

逆手吊りで晒す臀部

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

関谷富佐子 略号 (めむ)

鞭の縛りに夢心地表情

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

関谷富佐子 略号 (めり)

鞭は美体にからみつく

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

関谷富佐子 略号 (めも)

狂う鞭に狂い泣く女体

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

関谷富佐子 略号 (める)

両手吊りの女体に強打

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

関谷富佐子 略号 (めさ)

鉄砲縛りに鞭打の雨

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

関谷富佐子 略号 (めせ)

鞭打ちに示す感涙の極致

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

関谷富佐子 略号 (めて)

逆海老開股縛りに鞭打ち

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

関谷富佐子 略号 (めひ)

ムチに悶絶した美夫人

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

関谷富佐子 略号 (めへ)

のけぞる悦虐表情の露呈

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

関谷富佐子 略号 (めふ)

責めによる美的法悦表情

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

関谷富佐子 略号 (めら)

妊婦開股縛り哀歎

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

中河 恵子 略号 (わう)

八カ月の妊婦開股責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

中河 恵子 略号 (わの)

妊婦太鼓腹開股縛り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

中河 恵子 略号 (わえ)

妊孕美人媚態の立像

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

中河 恵子 略号 (わお)

妊孕美人媚態坐像

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

中河 恵子 略号 (わき)

両手吊り片足挙げ妊婦

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

中河 恵子 略号 (わく)

八カ月の妊婦両手吊り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

中河 恵子 略号 (わさ)

突き出した腹部の妊孕美

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

中河 恵子 略号 (わし)

両手吊りの妊婦正面

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

中河 恵子 略号 (わす)

縛られた妊婦の艶姿

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

中河 恵子 略号 (わせ)

両手一本吊りの妊婦

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

中河 恵子 略号 (わち)

恵子の妊孕美緊縛

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

中河 恵子 略号 (おに)

初妊娠の太鼓腹の美

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

中河 恵子 略号 (おぬ)

裸身縛りの妊孕美

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

中河 恵子 略号 (おす)

身籠った裸身責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

中河 恵子 略号 (おも)

麗わしの妊婦縛り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

中河 恵子 略号 (おひ)

膨満の腹部緊縛美

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

中河 恵子 略号 (おみ)

立縛り髪責め引回し

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

安井喜久子 略号 (おけ)

猿轡の裸身を晒す

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

安井喜久子 略号 (おふ)

後手縛りで引回す

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

安井喜久子 略号 (おく)

片足吊り上げ責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

安井喜久子 略号 (おて)

憂愁夫人の菱縄縛り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

安井喜久子 略号 (おや)

柱対向立ち縛りの夫人

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

安井喜久子 略号 (おあ)

片足吊り股裂き責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

安井喜久子 略号 (およ)

逆エビ責めに泣く女

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

安井喜久子 略号 (おわ)

柱正面立ち縛り媚態

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

安井喜久子 略号 (おの)

股間縛りにもかく女体

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

安井喜久子 略号 (おう)

豊満の女体をくびる

大手札四枚一組 略号 五〇〇円

愛知 葉子 略号 (おれ)

開股前屈愛撫責め

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

愛知 葉子 略号 (おね)

逆エビ縛りの愛撫

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

愛知 葉子 略号 (おな)

「最近作緊縛傑作フォト」

開股竹棒羞恥責め	大手札三枚一組 中河 恵子 略号「ねろ」	四〇〇円
逆エビ責め手足縛り	大手札三枚一組 中河 恵子 略号「ねき」	四〇〇円
竹棒開股強烈繋り	大手札三枚一組 中河 恵子 略号「ねく」	四〇〇円
鼻責めと鼻孔大写真	大手札三枚一組 中河 恵子 略号「ねけ」	四〇〇円
首縄後手強烈縛り	大手札三枚一組 中河 恵子 略号「ねこ」	四〇〇円
全裸開股膝頭縛り	大手札三枚一組 中河 恵子 略号「ねさ」	四〇〇円
菱縄縛り竹棒責め	大手札三枚一組 中河 恵子 略号「ねし」	四〇〇円
柔肌に喰込む縄目	大手札三枚一組 大島 照代 略号「ねす」	四〇〇円
豊満な全裸を弄る	大手札三枚一組 大島 照代 略号「ねせ」	四〇〇円
逆エビに痛める魔手	大手札三枚一組 大島 照代 略号「ねそ」	四〇〇円
黒髪をいたぶる手	大手札四枚一組 大島 照代 略号「そや」	五〇〇円

菱縄縛りにあえぐ	大手札四枚一組 大島 照代 略号「そゆ」	五〇〇円
強烈後手縛りの狂態	大手札四枚一組 大島 照代 略号「そき」	五〇〇円
牝犬奴隷の醜態	大手札四枚一組 大島 照代 略号「そよ」	五〇〇円
全裸二つ折り縛り	大手札四枚一組 中河 恵子 略号「そむ」	五〇〇円
菱縄しばりの表情	大手札四枚一組 中河 恵子 略号「その」	五〇〇円
八の字開股羞恥責め	大手札四枚一組 中河 恵子 略号「そか」	五〇〇円
菱縄縛りの全裸を晒す	大手札四枚一組 中河 恵子 略号「そえ」	五〇〇円
奴隷捨札開股縛り	大手札三枚一組 木村 洋子 略号「きむ」	四〇〇円
菱縄強烈開股縛り	大手札三枚一組 木村 洋子 略号「きま」	四〇〇円
竹柱立縛り晒し者	大手札三枚一組 木村 洋子 略号「きみ」	四〇〇円
柱宙縛り苦痛表情	大手札三枚一組 木村 洋子 略号「きめ」	四〇〇円
猿轡股間縛り歩き	大手札三枚一組 木村 洋子 略号「きも」	四〇〇円

浣腸にむせび泣く女	大手札四枚一組 大島 照代 略号「つゆ」	五〇〇円
身動き出来ぬ強制浣腸	大手札四枚一組 大島 照代 略号「つえ」	五〇〇円
竹棒開股苦打ち縛り	大手札三枚一組 関谷富佐子 略号「つひ」	四〇〇円
後手吊りにもかく女体	大手札四枚一組 川越美佐子 略号「くて」	五〇〇円
逆エビ縛りの色々	大手札四枚一組 愛知 葉子 略号「つか」	五〇〇円
逆さ吊りと足吊り	大手札四枚一組 愛知 葉子 略号「つよ」	五〇〇円
片足吊り上げ縛り	大手札四枚一組 愛知 葉子 略号「つお」	五〇〇円
美しき臀部を晒す	大手札四枚一組 左近麻里子 略号「つや」	五〇〇円
階段に晒す全裸身	大手札四枚一組 左近麻里子 略号「つく」	五〇〇円
花瓶を太股で挟む裸身	大手札四枚一組 左近麻里子 略号「つの」	五〇〇円
麻里子の裸身をあばく	大手札四枚一組 左近麻里子 略号「つね」	五〇〇円
柱に立縛りの全裸身	大手札四枚一組 左近麻里子 略号「つな」	五〇〇円

絶妙の鞭打ちポーズ	大手札四枚一組 左近麻里子 略号「つに」	五〇〇円
悶える白肌を俯瞰する	大手札四枚一組 左近麻里子 略号「つめ」	五〇〇円
両膝頭開股宙吊り	大手札四枚一組 中河 恵子 略号「くち」	五〇〇円
片足挙げ吊り責め	大手札四枚一組 中河 恵子 略号「くも」	五〇〇円
両手吊りに悶える女	大手札四枚一組 中河 恵子 略号「くい」	五〇〇円
開股責めを悦ぶ女	大手札四枚一組 中河 恵子 略号「くあ」	五〇〇円
両手万歳吊りにもかく	大手札四枚一組 中河 恵子 略号「くむ」	五〇〇円
静子夫人への羞恥責め	大手札四枚一組 中河 恵子 略号「くめ」	五〇〇円
雁字搦目縛りにうめく	大手札四枚一組 川越美佐子 略号「くと」	五〇〇円
八力月の妊婦に草具責め	大手札四枚一組 増田みゆき 略号「へね」	五〇〇円
九力月の妊婦に首枷責め	大手札四枚一組 増田みゆき 略号「への」	五〇〇円
激痛に耐える鞭打ち表情	大手札四枚一組 関谷富佐子 略号「わつ」	五〇〇円



始めまして。通信を見ますと、うらやましいことばかりです。私は女性の方とプレイなど一度もしたことがありません。もちろん男性の方ともなく、プレイをされた方々を思うと、うらやましいかぎりです。もし私が女性だったら、きっと皆様方からの、うれしい便りがどっさりと……。でも私は悲しいかな男性です。どうかこの私とプレイして下さる方がありましたら、と思ひながら書いております。大木淳様、この私とプレイが

できるようなおねがいします。私を女性と書いていいじめて下さい。どんなことでも我慢いたします。体をきつく縛られ、手や足でなぶられ体中にネクターをかけられる。両手両足をしばられてムチ打ちでも浣腸でも、何でも我慢しますから、ぜひこの私をおねがいします。私はエネマ、イチジク、ピシクのガーター、靴下、女学生用水着などありますので、プレイの時には縄と一しょにもって行きます。どうぞ、このあわれな私を一度おさそい下さるよう、お願いします。京都、大阪、近県の皆様、よろしく。同封の写真は私の恥ずかしい姿です。

(京都市左京区・立見生)

私にとっては「花と蛇」あつての奇譚クラブであり、静子夫人あつての「花と蛇」である。奇ク購入決定権は静子夫人のみが持つてゐる。この意味で、いよいよ静子夫人がショー実演に至った最近の「花と蛇」は、最高である。長い間の調教生活も、全ては実演のためである筈であり、又森田組のため一生働くことを誓った静子夫人のためにも今後どしどし実演させて欲しいと思う。ここでファン

として希望と注文をつけさせていだきたい。実演というと常にヤクザ、ズベ公の爆笑、ドナリ合の酒、騒々しさが描写されるが、ムードとして好ましくない。雰囲気としては、その道の好事家の薄笑い、好色な含み笑い、ホクソ笑み冷笑といった淫らな暗いムードが欲しいと思う。ガナリ合の爆笑の中では、静子夫人も幾分、気が楽になるのではないかと。選りすぐった五、六名の好色男女客の冷笑薄笑いという、静子夫人にとって最もつらい雰囲気の中で、はじめな排便ショー、哀れな全スト踊りフランス式、そして交合態の数々が繰り上げられること、このことが我々静子夫人を愛する者にとつて最も美しい姿であり、森田組財政を豊かにし、かつ奇譚クラブの一層の発展を決定づけるものと信じて疑わない。何卒ぜひ実現されることをお祈りいたします。

(一静子ファン)

奇ク愛読の諸先輩、御機嫌いかがお過ごしですか。私はネットのストッキングとピンクの女子用ブラジャー（パンティ）と白のブラジャーをつけています。私は、やっと今年成人しましたので始めて手紙

を書かさせていただきました。私より年上のお姉様方、もしくはお兄様方（なるべく衣装や化粧の關係から三十才以上の女性の方）に女として苦しい目にあわせていただきたいのです。私の横には今二巻きの白いロープと三〇〇CCのグリセリン三十パーセント水があります。これらによって私は責められるのです。でも一人じゃつまらない。誌上での便りをお待ち申しております。

(東京板橋区・三上健三)

長本居一郎様、二月号の貴方様の投稿を拝見し、始めてペンをとりました。小生は今年二十六才になる独身でS好みの男性です。SMプレイに興味を持ち始めて数年、最近はお夫婦同志のSMプレイが益々ふえてゐる様子ですが、対ご夫婦とは、なかなか機会に恵まれず、現在九州のご夫婦の方との文通のみで、経験の方は全くありません。やっとな長本様にはご理解ねがえそうなので、ぜひプレイねがいたく思います。文面では奥さまのことがかなり詳しい様子ですが、長本様ご自身の好みなどもお知らせ頂いて、お互いに納得のゆくプレイをしたいと思ひま

す。詳細につきましては、後便にて連絡いたします。

(東京都文京区・立石)

三月号の瀬沼四郎氏の「妊婦に魅せられては」同好マニアの一人として興味深く読んだ。あの中で氏は、縛りなしの芸術的な妊婦の裸像を望んでおられるが、小生も同感である。妊婦マニアは、責めの美しさより、むしろ妊孕美そのものを求めているのだ。下腹部を突き出した妊婦姿を醜悪とみなす者もいるかも知れぬが、これを充

実した女性美の極致と見る者も決して少なくない。特に芸術家にはよく妊婦をモデルに絵も写真も制作する例も多い。瀬沼氏は、妊婦ファッションなど少ないのではないかと、やや悲観的な発言をしておられたが小生の知るかぎりでは案外、多い。ただ妊婦のヌードは普通のヌードと違って、そう簡単に入手で

◎分譲品総目録◎

多数の方々から御予約を頂いておりますが作成が大変おくれにて申し訳ありません。完成次第必ずお送りいたしますから、今しばらくお待ち願います。尚予約お申込

きない。だから、みんな諦めているのである。その点、奇クなどは日本唯一の資料提供者として貴重な存在というべきだろう。小生も妊孕美に魅せられて、辻村氏の真似ではないが「妊婦ハント」など試みたことも二、三ある。とくに最近の妊婦の氾濫をみては、全く無限の欲求をそそられる。同好の士として、瀬沼氏と文通、及び資料の交換などしたいが如何なものだろうか。(三重県・戸田清)

皆様、おさわりなく御壮健のことと存じます。昨年三月号より愛読いたしております二十九才の青年です。現在、都内のアメリカ空軍基地の施設局工務部にて、ヘリコプターの乗務員として働いております。例えば大学在学中、将校ハウスの芝刈りのアルバイトがきっかけで、基地に就職しました。半年しまして、小生もエコノミー

みの方は切手五十円同封の上、大阪市阿倍野郵便局私書箱第十四号、天星社箕田京二宛へお便りして下さい。分譲品満載の豪華なカタログを出来次第お送りいたします。尚、分譲写真のお申込みも、箕田京二宛にお願いいたします。

クラス(下士官から中尉ぐらい)のパーティに出席できるようにになりました。その夜、米軍人の婦人よりMの教育を受けました。受けたいというより無理に受けさせられたという方が正しいと思います。それから以後は金曜日のたびに教育を受けました。いつぞやハウスメイドがいるにかかわらず緊縛されました。三十七才の米国婦人の肥大なヒップ、肉づきの良い背。中年とはいえ、その肉体はMの小生には正に女王様でした。主人の一遍間ないし二週間の国外勤務時又はメイドの休日は、小生がハウス・ボーイです。PXでの買物は日本人は出来ないもので奥さんが買ってきますが、その調理は全部、小生の仕事です。この小生の女王様も四月二十三日付で主人の兵役免除でミシガンへ帰ります。都内のS的な女性で、小生の女王様になっただけの方方は御一報下さいませ。無理を書かせていただきますならば、中年の方か、又は肥満体の方が良いかと思えます。自分は流腸はもとより採尿も教育されております。ではお便りをお待ちいたします。

(東京都・端野次郎)

グラビア頁がなくなり、スクラップの楽しみが消えた奇ク。内容は充実してきたが、中の写真には以前程の緊縛感が見られない。時と共に変わりゆく奇クに一抹の淋しさを感じるが、これも世相故に仕方がないことだ。私は二十七才の独身男性、奇クを知って十年になり、今までの旧号のスクラップは相当数あります。最近号ではカメラハントで月々モデルが変わってゆくことは良いことだと思う。二月号の三好留美さんなど、あれだけの肉体の持主も少いであろう。今後の活躍を期待したい。私はSでMの出現を待っている。既婚、独身のMの方、お便り下さい。

(岡崎市・中上淳一)

佐藤喜久子様御足下。謹んで始めてお便り申し上げます。私儀、本来の性向なのか、毎日夢想の段階で悩み居りますが、思い切って御足下に俯したく犬馬の誓いを申し上げて、お呼びつけのほどお願い申し上げます。女王様の玩具として、犬馬として従順に御奉仕いたします。家族もあり年令三十五才、会社では勤勉な下級管理者でありながら、女王様の馬になりました、恥ずかしくとも、いまや止む

(東京・忠犬より)



三好留美様、二月号を買求め、早速、辻村先生のハントの頁を開いて、がっかりしました。初めは

貴女のすばらしい緊縛写真が一面にあり、急ぎ頁をめくって見ましたが、どれも同じで大したことなく、そのまま内容も読まずにおりました。私の想像では、一月号にも投稿したように、グラマーの割に柔軟な身体の持主と想像していたのが、後手は下の方で縛っておるではありませんか。私は二頁、三頁には、さぞ肩まで吊り上げられた貴女を考えておったのですが。ところが一月十四、十五日の連休の際、徒然なるままに辻村先生の手ノの記事を読んでゆくと、なるほど私の想像どおりと確信しました。貴女は大分、反抗したらしいですが、けしからん話です。急いで縛って、あのぐらいでしたらゆっくり腰を据えて縛れば素晴らしいものになること間違いなしでしょう。今までの奇クのモデルを見ても、又実際しばった女性でも、グラマーな女性は総じて手を肩まで捻じ上げて中々上らないもので瘦せ型の女性の方が柔軟です。梨花嬢が、この最も代表的な人と思います。只、この中で愛川嬢だけが別だったようです。五、六年前、誌上を賑わした彼女は、素晴らしいグラマーで、しかも貴女と同じく素晴らしい乳房の持主でした。

大手札印画紙極鮮明焼付フオト

開股羞恥責めの姿態

大手札四枚一組 五〇〇円
安井喜久子 略号△しう▽

髪吊りで強烈ムチ打ち

大手村四枚一組
安井喜久子
略号△した▽

片足首引きつけ縛り

大手札四枚一組 五〇〇円
安井喜久子 略号△しち▽

屍立て鞭打ち艶姿

大手札四枚一組 五〇〇円
安井喜久子 略号 八しつV

柔肌に炸裂するムチ

大手札四枚一組 五〇〇円
安井喜久子 略号△して▽

エビ縛りの鞭打ち

大手札四枚一組 五〇〇円
安井喜久子 略号△しと▽

貞操帶着用鞭打ち

大手札四枚一組
五〇〇円
安井喜久子
略号△しや▽

痛打にもかく美女体

大手札四枚一組 五〇〇円
安井喜久子 略号△しゆ▽

あぐら縛りの羞恥責

大手札四枚一組 五〇〇円
安井喜久子 略号△しよ▽

片脚挙げて晒す裸身

大手札三枚一組 四〇〇円
中河恵子 略号△とは▽

強烈エビ縛りで苦悶

大手札三枚一組
中河恵子
略号△と▽
四〇〇円

膝頭縛り開股竹棒責め

大木三枝組
中河恵子
略号△とほ▽

竹棒開股足首縛り

大手木三枝一組
中河恵子
略号△とへ▽

股間縛りの裸身表情

中河 恵子 略号△とち▽

大手札三枚一組

中河 恵子 略号△とり▽

舌發處馬きの紐末
大手札三枚一組

中河 恵子 略号△とぬ▽

大手札三枚一組

中河 恵子 略号△とる▽
完陽責めの甘い恐怖

大手札三枚一組

中河 恵子 略号△とか▽

大手札三枚一組

中河 恵子 略号△とま▽
強制浣腸の各姿態――

大手札三枚一組

中河 恵子 略号ハとみ
浣腸責めの美態開陳

大手札三枚一組

中河 恵子 臨終／とめ
浣腸を待つポーズ

大手札三枚一組 四〇〇円
中河恵子 略号△とも▽

そして責めにはいくらでも持ちこたえる上に、非常に柔軟な身体をしており肩まで捻じ上りました。

たいと思いますので、気に入れば通信欄にお知らせ下さい。待っております。(神戸市・寺口宅雄)

○

ただ奇クの先生達が、この素晴らしい彼女を縦横に使いこなさなかつたようで、私の気に入った写真が少なく残念です。ところが貴女は愛川嬢よりも、もっと素晴らしいです。素晴らしいグラマー、素晴らしい乳房、柔軟な身体、しかも愛川嬢よりは、ずっと美人ときてるではありませんか。しかも貴女の肌は非常に柔かそうで、縄でしめればしめるほど肌に喰い込んでしまいくらいです。肌の柔らかいのは二種類あり、縄をしめれば肌に縦しわがよって喰い込まないのと喰い込むのとありますが、丁度貴女は後者の方で、写真のようなつまらない縛りではわかりませんが、四カ所ぐらい腕をしめつけると、自動車のチューブをしめたようで、小気味のよいものと思われまふ。これだけの貴女でありながら、残念なのは愛川嬢ほどMでないことです。いや、もしかすると貴女は愛川嬢よりMは強いかわかりませんが、貴女はそれから逃げるか又、目をおおって、見ようともしません。若し一月号のような私で良ければ、一度ゆっくりお目にかかり

奇クファンの方、お久しぶりです。私が奇クのトリコにされたのが昭和二十八、九年頃で、当時の美少年(ほんとの話)も今では二児の父で、昔の本を隠れて読む程度で、奇クが再出発しているとは夢にも思わなかったのですが、ふとしたことで二月号が店頭に並べられていた時は、自分の目を疑ったぐらいです。約十年ぶりに手にした時の気持は、筆舌にいいあらわせないほどです。写真等が出ていないのが物足りないのですが、一気に読み通しました。それに付けても、昔の本書や写真等を昨年の水害で流出したことが、何んといっても心残りです。誠に厚かましいお願いですが、どんなものでも結構ですから、寄贈、又は安く分譲して頂けないでしょうか。當時も本欄を借りてM女性に呼びかけたのですが、女に縁がないのか協力して下さる女性の方がありませんでした。ここに再度、女性の方に私の悩みを、解消して下さいよう、お願い申し上げます。私はSといっても加虐的ではなく紐を

つかって女体美を創造しようとする者です。二月号の村まり子様、こんな男は、物足りないでしょう。か。又、最近夫婦でブレイされている人が多いようですが、羨ましい限りです。早木夢二様、長本居一郎様、森幸一郎様、どんなにしたら妻が協力するようになるのか、ご伝授下さい。M女性からのお便りを祈りつつ……

(新潟・山口正彦)

○

昨夏関西地方へ出張の際、貴誌を発見、あまりにも私共夫婦の生活にピッタリのためにオドロキとヨロコビを感じました。それ以来出張の度に貴誌を購入して楽しんでおります。家内も小生が出張する毎に貴誌を購入して帰るのを楽しみに待っている始末で、最近では自分から貴誌を参考にしてアイデアを申し出る位になりました。夕食の食膳を囲んで新しい趣向を相談するのも楽しいものです。家内は特に写真を見るのが好きで、変った縛り方のフォトを見せたあとでは必ずハッスルするので、小生もこれからの生長を楽しみにしています。(松山市・久我永夫)

四月号拝見、この号は近來にな

い出来ばえで満足しました。特にカメラ・ハントに載ったモデルさんは最高のモデルの出現でこの本一冊の値が出たようなものです。これから、このように映画の中の良いモデルさんを載せて頂きたいと思ひます。分譲品としての発売もお願いしたいと思ひます。今後カメラ・ハントのモデルさんの総登場というような臨時増刊も大いに期待しております。

(長野市・田中和夫)

○

連載小説のピカー『花と蛇』をいつも楽しく拝読させて頂いております。最近は一回の頁数が少いので淋しく思っております。せめて三十頁か四十頁ぐらいは欲しいと思ひます。又この『花と蛇』の画集を早急に計画して頂きたくいのです。何んでしたら誌上で募集されては如何ですか。私は何んといっても『花と蛇』を第一番に愛読しております。勝手な言い分ですが、私の興味のひかない読物が多くて残念です。「女囚」ものの早期掲載を望んでいます。女囚の牢内での生活やサディズムを大いに期待しています。それから年に二回か三回ぐらい集りモデルを囲んで座談会を開催して下さい。

楽しいと思います。

（京都・東山道夫）

金原奈加子さんの可愛らしいのには全く驚きました。印画紙に焼付けられた彼女は本当に気にいり長く保存したいと思います。奇くは大分前から愛読しておりますが辻村氏のカメラ・ハントをいつも羨ましく読んでいたものです。金原さんのフォトを見つつ、改めて3月号の彼女の投稿を読み、ここにお便りする次第です。是非一度金原さんとお会いしたい、会って出来ればプレイをし写真をとらせて頂きたいと思ひます。奈加子さんのいう雲助や或いはヤクザになり彼女を縛り上げるといふようなことが出来たら、どんなにうれしい事でしょう。もしプレイが駄目ならお手紙だけでも頂きたい、そしてお互にこういう事をしたい、或いはされたいという事を手紙を通して語り合えたらと思ひます。

（滋賀・長沼 朗）

初めて投稿致します。奇くを發見したのが六年位前の事で、それ以来、毎月購読しておりますが、私の事務所の棚にはダンボール箱に、ぎっしり詰った奇くが「禁開

封」と朱書されて保存されています。カメラハントの辻村さん、全くうらやましいと四六時中思っておりますよ。二月号の小竹一浩氏の「SM日記」には実に心動かされるものがありました。此の程度のもものが私共、庶民にびったりで協力者を得れば十分に出来る事と存じております。小説をはなれて私共の実際の肌で感じる事の出来るもので、活字の一字一字から親しみを肌より感じる事が出来て強く胸にささります。小生三十八才の者ですが一度実際にM女性とこの程度のプレイをしたいと毎日願っております次第で、今日勇気をもって投稿させて頂きます。東京在住のM女性の方、是非楽しく語らい、楽しくプレイしましょう。私の行動は良心的である事を約束致します。編集の箕田さん、今後の御健斗を期待致しております。

（東京・湊 新一）

三月号の巻頭を飾った「私達夫婦の甘い秘密」という告白は、近來にないすばらしい読物でした。十一月号でしたかに、やはり巻頭に「増縄の記」というのがのっていましたが、私達ファンにとって、三月号の安井夫人の文章の方

大手札印画紙焼付

〔緊縛女体美のシリーズ〕

両手吊りに悶える女体

大手札印画紙焼付 四〇〇円
略号△もえ▽

強烈なる甘いムチの洗礼

大手札三枚一組 四〇〇円
略号△もゆ▽

ムチに狂い哭く美貌の夫人

大手札三枚一組 四〇〇円
略号△もよ▽

半吊りでムチ打つ

大手札三枚一組 四〇〇円
略号△もす▽

逆エビの味に感泣する

大手札三枚一組 四〇〇円
略号△もせ▽

ムチの一打に反りかえる

大手札三枚一組 四〇〇円
略号△もれ▽

関谷夫人の女体陳列

大手札三枚一組 四〇〇円
略号△もる▽

尻立ての鞭撻ポーズ

大手札三枚一組 四〇〇円
略号△もて▽

片足吊り挙げて喘ぐ

大手札三枚一組 四〇〇円
略号△もな▽

私をムチ打って頂戴

大手札三枚一組 四〇〇円
略号△もね▽

脂ぎった女体を縛る

大手札三枚一組 四〇〇円
略号△もむ▽

鞭は柔肌に炸裂する

大手札三枚一組 四〇〇円
略号△もう▽

滑車吊りに甘い鞭

大手札三枚一組 四〇〇円
略号△もき▽

両手万才吊りに鞭打ち

大手札三枚一組 四〇〇円
略号△もこ▽

狂う鞭に哀切表情の夫人

大手札三枚一組 四〇〇円
略号△もみ▽

浴後の剥玉子縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
略号△はゆ▽

投げだす白い緊縛裸身

大手札四枚一組 五〇〇円
略号△はよ▽

待望の脚挙げ緊縛姿態

大手札四枚一組 五〇〇円
略号△はて▽

二つ折り女体エビ責め

大手札三枚一組 四〇〇円
略号△はお▽

柱の前に緊縛された全裸

大手札四枚一組 五〇〇円
略号△はの▽

神妙なプレイ寸前の女身

大手札三枚一組 四〇〇円
略号△はひ▽

中河 恵子

が、心から共感をもって読むことが出来ました。喜久子夫人が今後ますます幸福になられるよう、心から祈ります。私も彼女のような協力的な女性を細君にしたら、きっと幸福になれたらうにと考えると、残念でなりません。私は三年前に結婚しましたが、家内はそういうことに全然興味も関心も示しません。少しぐらいなんとか興味を持ってくれたら教育のしようもあるのですが、一向に話にのつてくれませんので、今ではあきらめていきます。本誌を読むことでせめてものうさ晴しをしています。現在の境遇です、どうか、私の満足できるような記事をどしどし載せて下さるよう願います。

(北九州市・宇野和夫)

三月号の奇クを拝見して、フォトの所で妊婦姿(異常哀歎)安原さゆりとしてあったのを見て、実に立派だと感心しました。さゆり様の名前は、去年の何月号だか失念いたしました。通信サロンに出たことがありましたね。その時に貴女のことを知りました。あの時の文を拝見した時、まさきにお便りをおったのですが、勇気がなくて他の人に貴女を取られ、

残念に思っております。さゆり様のお顔、お体をあれやこれやと想像して、あきらめておりました矢先に、偶然にも写真を見て、矢も盾もたまずお手紙を書いたしだけです。あつかましいお願いかしりませんが、宜ろしかったら、私にしばりの事をご指導下さい。私は、しばりと共に女性の股間に六尺鞭をしめる事が、趣味でございます。私も、さゆり様がいわれるように軽いプレイを望みます。安原ご夫妻、どうぞよろしくお願ひします。(東京・藤田利夫)

厳寒に、貴社益々お忙しいことと存じます。日頃はSMについていろいろと貴重な資料を刊行下さって、ありがとうございます。さて私も読者通信の仲間入りをしたく、拙い文を書いてみました。奇ク編集者の皆様、又愛読者の皆様お元気ですか。ぼくは24才の独身男性ですが、41年頃から奇クを愛読しています。始めて見たときは驚きでドキドキし、夢中で読んでしまいました。永い間読んでいるうち、自分も誰か美しい女性とプレイをしたく思うようになりました。女性を縄、羽毛、鞭などのいろんな小道具を用いて、柔肌を

開股縛りに喜悦する女

大手札四枚一組 略号△はわV 五〇〇円

全裸の女体立ち縛り

大手札三枚一組 略号△はふV 四〇〇円

黒縄は白肌を酷に彩る

大手札三枚一組 略号△はほV 四〇〇円

悦虐に身もたえる美女

大手札四枚一組 略号△はあV 五〇〇円

菱縄は白肌をくびる

大手札三枚一組 略号△はうV 四〇〇円

柱に立縛りでさらす

大手札四枚一組 略号△はさV 五〇〇円

卓上の開股羞恥責め

大手札四枚一組 略号△はめV 五〇〇円

無防備の女体を開陳

大手札四枚一組 略号△はしV 五〇〇円

遠山静子夫人の立縛り

大手札四枚一組 略号△はもV 五〇〇円

若妻の魅力を発散する

大手札三枚一組 略号△はむV 四〇〇円

後手縛り全裸身の魅力

大手札三枚一組 略号△はめV 四〇〇円

悶える猿轡の裸身

大手札三枚一組 略号△はもV 四〇〇円

ムチ打ちの陶酔境

大手札三枚一組 略号△はさV 四〇〇円

両手吊りで痛める女身

大手札四枚一組 略号△はしV 五〇〇円

後手縛りの竹棒責め

大手札四枚一組 略号△はすV 五〇〇円

強烈開股強制縛り

大手札三枚一組 略号△はせV 四〇〇円

両手吊りであえぐ女体

大手札四枚一組 略号△はゆV 五〇〇円

竹棒強烈開股責め

大手札三枚一組 略号△はたV 四〇〇円

厳しき緊縛の正坐責め

大手札四枚一組 略号△はちV 五〇〇円

責めの魔手に屈伏する

大手札四枚一組 略号△はつV 五〇〇円

竹棒の胴絞め責め

大手札四枚一組 略号△はてV 五〇〇円

竹棒開股胴絞め縛り

大手札四枚一組 略号△はとV 五〇〇円

地獄へ落したらと夜ごと想像し、胸を熱くしています。ぼくの足下に屈服する女奴隷の出現を一日千秋の思いで待っています。どうかこの気持ちを察して下さい。又、夫人をその夫の目の前で責めたく思いますので、御希望の方はお便り下さい。

(兵庫県飾磨郡・夢前広作)

編集部の皆様、いつも充実した本誌を作るために苦勞なさっていることを心から感謝します。小生はフェチのM男の一読者でございます。Sの女性の皆様、どなたか小生の女王様になっていただけないでしょうか。小生は二十八才の男性で、奇クを愛読している中に自分がフェチのMであることに気づき、今ではどうすることもできずペンをとりました。小生は、いつも芳野眉美様の読み物をくりかえし読む中に、自分が奴隷になつてしまい、ああ神酒を下さいと、一人つぶやいてしまいます。三月号から眉美様の読み物が消えまして、自分には、淋しい思いです。小生は、女性の下着にすごく興味がありまして、汚れたパンティを、いやというほど嗅がされたいと思っています。又、女王様

の心から忠実な奴隷となり、飼育実験をされ、女王様の膝下にひれ伏してムチでのおどされ裸にされ、縛られ思いきりムチ打ちや平手打ちで泣かせて下さい。その外、尻敷台になり舌奉仕をさせられ、後は神酒神糞をいただき、舌でトイレペーパー代用に使用下さい。絶対に忠実に女王様の一切の命令に服従いたします。心の底からの忠誠を、ここにお誓いいたします。美しき足に踏んづけられ、どんなことも女王様の思いのままに料理して下さい。小生は五尺二寸、十五貫二百のおとなしい男です。女王様のお目にとまりましたら、お返事下さい。(横浜・マゾ茂男)

私は六、七年前、主人が浮気しているらしいことを感じ、非常にショックを受けましたが「絶対に浮気などしてはいない」という主人に対して、それが本当なら、他人の前で裸になることなどないのだから、と私のパンティを着用させましたところ、始めは具合が悪るそうでしたが、色がキレイとか型がよいとか嬉しそうなので、以後ことあるごとに何だかんだといふ現在では上衣、ズボン、ワイシャツ以外は靴下にいたるまで常時出

最新撮影総天然色
カラー・プリント写真

両手吊りに悶える女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
大塚 啓子 略号八てき

後手裸身柱縛り

大手札四枚一組 略号一二〇〇円
大塚 啓子 略号八てか

縄目にあえぐ裸女

大手札四枚一組 略号一二〇〇円
大塚 啓子 略号八てく

豊麗な裸身をくびる縄目

大手札四枚一組 略号一二〇〇円
大塚 啓子 略号八てこ

後手高手小手縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
大塚 啓子 略号八てま

長襦袢の緊縛色模様

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
東浦ひかる 略号八てみ

緋の腰巻緊縛色模様

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
東浦ひかる 略号八てむ

猿ぐつわに呻く女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
東浦ひかる 略号八てめ

柱宙吊り強烈縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
東浦ひかる 略号八ても

ポリウムを縛りあげる

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
東浦ひかる 略号八てん

縄に苦悶する裸女を狙う

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
東浦ひかる 略号八てる

真紅の腰巻着用姿態

大手札二枚一組 略号八〇〇円
大塚 啓子 略号八うお

縄に悶える緊縛色模様

大手札二枚一組 略号八〇〇円
東浦・大塚 略号八うて

真紅の腰巻着用縛り

大手札四枚一組 略号一二〇〇円
大塚 啓子 略号八うこ

華麗なる緊縛裸身

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子 略号八るむ

みだらな開股縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子 略号八るの

責めに疲れた諦観

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子 略号八るお

真紅の腰巻姿で緊縛

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子 略号八るま

羞らしい真正面縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子 略号八るけ

若肌に喰い込む縄目

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子 略号八るふ

高手小手後手縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子 略号八るや

股間縛りの開股姿態

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
中河 恵子 略号八れよ

羞らしい股間縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
中河 恵子 略号八れに

張中でも女性下着のみ使用させ、男性用下着類は全部、捨て、パジャマまで男性用は一枚も家にはおいておりません。又、四年ほど前出張予定より一日遅れの帰宅を理由に、太股のところに私の名前を墨にて彫り込みました。普通では入墨、女性用下着の常用等、考えられませんが、私がSで主人はM性のためか、かえって喜びます。入墨以来、毎週一、二回は両手を上に縛り、宙吊りの上、笞打ち、浣腸等しておりましたが、貴誌を拝見して私どものは子供の遊びごとのような気がいたしますので、どなたか本格的S女性、又は、M男性になるよう、男性飼育法（たとえば本格的縛り、その他）を教えてください。又、当地では小都市のため、大きな金物店、革具店などなく、滑車（逆吊、海老吊等ができるもの、コマが二個ついた小型鉄製のもの二個）浣腸用ゴム球付ポンプ、調教用笞、小説等に出てくる電気ムチ、男性貞操帯、又その他男性飼育用具、責具等の入手方法がなく困っております。製作、分譲しているところ、又簡単に出来るものはその造り方等を教えて下さい。（山口県徳山市・前田容子）

大阪の金原奈加子様、貴女の告白、三月号で拝読いたしました。貴女こそ私の永年の夢を実現させて頂く方だと思いますので、お願いする次第です。縄によって真の女性美を作り出す、こんなプレイを試みたいと常に思っておりまして。一度お会いして、その上でプレイを承諾して下さい。こんな嬉しいことはございません。その時には、それ相当の報酬を差し上げます。どうかよろしくお願い致します。（神戸・原田良一）

増田様、みゆき様、そしてお二人のお子様、皆元気の由、何よりです。昨年、誌上にて鼻責めプレイの競技を申し入れた者ですが、その後、何とか連絡をとりたいたいものと思ひながら、その機会を得ませんでした。残念です。鼻責めに、千葉青鬼氏の発表した鼻枷があります。私は毎夜、犬の首輪をはめられ、その鎖をつなぐ環に牛につける鼻環を通して、そしてその鼻環が鼻中隔にあけられた穴に通されています。そうすると口が開けられず、声は絶対に出ません。全くよく考えたものです。鼻環と犬の首輪とをつないだ、さるぐつわで

双胎臨月蛙腹鮮烈写真	大手札六枚一組 二〇〇〇円	略号八れや	腰巻一つで縛られる刺青女	大手札三枚一組 一〇〇〇円	略号八やみ
増田みゆき	大手札六枚一組 二〇〇〇円	略号八れや	女相撲迫力投業連続動作	大手札十二枚一組 五〇〇〇円	略号八なる
臨月腹裸身の媚態	大手札六枚一組 二〇〇〇円	略号八れや	恵子の妊孕美観賞	大手札四枚一組 二〇〇〇円	略号八ぬめ
増田みゆき	大手札六枚一組 二〇〇〇円	略号八れや	中河恵子	大手札四枚一組 二〇〇〇円	略号八ぬめ
黒縄縛りの媚態	大手札三枚一組 一〇〇〇円	略号八れぬ	孕み若妻の羞らい	大手札四枚一組 二〇〇〇円	略号八ぬめ
中河恵子	大手札三枚一組 一〇〇〇円	略号八れぬ	八の字の開股責め	大手札三枚一組 一〇〇〇円	略号八しい
立縛りにあうの裸女	大手札三枚一組 一〇〇〇円	略号八れぬ	足枷強制開股責め	大手札三枚一組 一〇〇〇円	略号八しい
開股された股間縛り	大手札三枚一組 一〇〇〇円	略号八れぬ	全裸強烈逆エビ責め	大手札三枚一組 一〇〇〇円	略号八しけ
木村洋子	大手札三枚一組 一〇〇〇円	略号八れぬ	両手吊り足枷責め	大手札三枚一組 一〇〇〇円	略号八しこ
豆絞りの猿ぐつわ縛り	大手札三枚一組 一〇〇〇円	略号八れぬ	両腕逆手吊り責め	大手札三枚一組 一〇〇〇円	略号八しら
木村洋子	大手札三枚一組 一〇〇〇円	略号八れぬ	豊満なる臀部責め	大手札三枚一組 一〇〇〇円	略号八しれ
柱宙縛りに喘ぐ刺青女	大手札三枚一組 一〇〇〇円	略号八れぬ	大の字縛りと足挙げ責め	大手札三枚一組 一〇〇〇円	略号八しわ
大手札三枚一組 一〇〇〇円	略号八れぬ		お申込みは大阪阿倍野局私書箱		
山原清子	大手札三枚一組 一〇〇〇円	略号八れぬ	第14号箕田京二宛へ願います。		
緊縛に映える入墨の肌	大手札三枚一組 一〇〇〇円	略号八れぬ			
山原清子	大手札三枚一組 一〇〇〇円	略号八れぬ			
脱がされた緊縛刺青女体	大手札三枚一組 一〇〇〇円	略号八れぬ			
山原清子	大手札三枚一組 一〇〇〇円	略号八れぬ			
縄にのたうつ入墨裸身	大手札三枚一組 一〇〇〇円	略号八れぬ			
山原清子	大手札三枚一組 一〇〇〇円	略号八れぬ			

す。夜通しつけられて寝るので
す。それから先に発表したように
鼻中隔にあけた穴の更に奥の方に
穴をあけて鼻柱ちようちん責めを
受けることもあります。これは大
変激しく痛いものですが、ついに
その奥の穴がちぎれてしまい、更
に又その奥に穴をあけて責められ

秋山夫妻残酷ショー写真

逆エビに狂い泣く女

大手札四枚一組 略号 (たな) 五〇〇円

髪吊りに悶える女

大手札四枚一組 略号 (たに) 五〇〇円

黒髪をふり乱して

大手札四枚一組 略号 (たぬ) 五〇〇円

股間縛りを熱演する

大手札四枚一組 略号 (たの) 五〇〇円

女馬を調教する男

大手札四枚一組 略号 (たか) 五〇〇円

尻帆立て縛りの実演

大手札四枚一組 略号 (たき) 五〇〇円

秋山式縛りに喘ぐ女

大手札四枚一組 略号 (たけ) 五〇〇円

熱帯は柔肌を焦す

大手札四枚一組 五〇〇円

又ちぎれてしまい、そのため鼻中
隔の穴は一層大きくなって、今で
は四センチ八ミリの事務用の環が
通るほどになってしまいました。
奥の穴がちぎれたので今もう一つ
奥に穴をあけたいと思っています。
す。現在は、四八ミリの事務用の
環を通して更に牛の鼻環を通し

ローズ秋山 略号 (たあ) 五〇〇円

鞭と羽毛の擦り責め

大手札四枚一組 略号 (たら) 五〇〇円

早縄術を披露する

大手札四枚一組 略号 (たお) 五〇〇円

急所縄に慟哭する女

大手札四枚一組 略号 (たそ) 五〇〇円

熱気を帯びた実演

大手札四枚一組 略号 (たさ) 五〇〇円

強烈な緊縛プレイ

大手札四枚一組 略号 (たし) 五〇〇円

弄られる緊縛女体

大手札四枚一組 略号 (たす) 五〇〇円

鞭と縄に追われて

大手札四枚一組 略号 (たむ) 五〇〇円

ローズ秋山 略号 (たむ) 五〇〇円

◎お申込みは、大阪市阿部野局
私書箱第14号 箕田京二へ

て、それに重いものを吊します。
事務用の環は奥へつきあげられて
鼻翼一杯に拡がり扁平になって、
鼻腔からは苦しさの余り鼻汁を吹
き出して苦しめられています。一
度鼻柱十字の責めを受けました。
これは右の鼻翼から左の鼻翼へと
太さ二ミリの、とがらした棒を貫
通され、更に同じ太さの棒を十字
に交差するように通されました。
そして、それを抜くと事務用の環
と入れかえ、その環に石を下げら
れました。これには苦痛のため閉
口しました。この後、傷痕がなか
なかとれずに困りました。それで
も二十日ほどでほとんど消えてし
まいました。私は化膿などは一度
もしたことはありません。そのほ
か、まだまだ残酷な鼻責めが考え
出されて苦しめられています。ぜ
ひ、プレイの機会がありましたら
公開したいと思っています。
(千葉・橋本常男)

川村順子様、四月号でのお呼び
かけ、大変うれしく拝見いたしま
した。私四十才、旧制の専門学校
を卒業し名古屋近郊の都市で商店
を自営している者でございます。
従って、いつでも順子さまのご都
合に合わせて、楽しいアブの世界

のプレイを味わうことができま
す。私はMの傾向が強いのですが
順子さんもMであれば、きつとご
満足のいくようにお相手すること
もできると存じています。私もM
ですから相手のMも、よく理解で
きるからです。浣腸やムチはお嫌
いとのこと、私も空想的マゾヒス
トとでもいうのでしょうか。現実
の苦痛は好まず、空想によって楽
しむプレイの方が好きなのです。
お互いに家庭もあることですし、
アブのプレイでの、よいお友達と
いうことです。そして順子さんの
お望みになることは、どんなこと
でもし、お望みにならないことは
決してしないことをお約束しま
す。秘密は固く守り迷惑をかける
ようなことのないよう、長くおつ
き合い願いたいと存じます。
(名古屋・美柳輪生)

高知市の丸沢様、その後いかが
ですか？ 私もおなたと同じくS
とMに加えてゴム・フェチです。
異性に対して鞭打ったり、お尻に
針を刺すかと思えば、逆に異性か
らいたぶられることも悪としませ
ん。(ただMの方はSより軽度で
す) また同様にオムツの愛用者で
もあり、あなたとそっくりなので

嬉しくなりました。ただ私は、あなたほど長く奇ク誌を愛読してはいず、今年でやっと三年目ほどです。でも買った買わなかったりです。ですから、あなたの通信(十二月号)も二月になって、やっと見つけた次第です。そうそう、あなたに感謝しなければなりません。私の作品? 「母子契約」を賞めて下さってありがとうございます。あんなものでも読んで下さるのかと思います、また編集部で、よくあんなものを載せてくれたと、心恥かしい気持ちです。奇クの世界に本格的に入る前の作で、今は井上俊彦と名をあらため、つたなき文で時おり、誌上を汚しています。呼びかけの件、うまく成功しましたか? 私年上の婦人とS・Mや特にオムツのプレイをしたいと思っているのですが、どうも勇気がありません。ぜひ、あなたの成功談を本誌に載せてくれるようお願い致します。それに、あなたがどんなプレイをしているのか詳しくお聞かせ下さい。そして、どんなプレイの世界を広げたいと思います。東京では十七年ぶりとかの暴風雪警報が発令されました。寒さの折、編集部の皆様、マニアの方々、丸沢様の健康をお祈りし

て。

(東京都・井上俊彦)

奇譚クラブ愛読者の皆様、毎月二十八日頃、この雑誌を書店より買い求めて帰途につくという気持は、本当に楽しいことですね。満員電車もさほど気にならないのが不思議です。小生は中央官庁に勤務致す技術公務員です。同じ局の研究所に勤務していた女性と結婚いたしました——というのが現在の妻です。結婚して三年になりましたが、一向に子宝にめぐまれず、依然として共稼ぎです。小生は二十九才、少々ボディ・ビルのなスポーツマンです。妻をSないしMに調教してみました。全然反応がありません。瘠せぎすな妻にはS・Mも無理なことがわかりました。元来、M的ですが、Sも三分の一ほどあります。どなたか小生と交際していただけませんか。ただし関東地方の方に限ります。地方の方ですと、小生の中古車パブリカが走り回ってくれません。御相手なさって下さる方は、仙台の美川美子様の如く、肥満した女性に限りません。このような妊婦に近いだけのお腹とお乳、又お尻の大きな女性ならば、女王様の如く下頭いたします。口中の汚物処理

器になったり、顔面を玩弄されたりネクタールの洗礼、尻尾をかぐなど貴女の満足のできるだけいじめて下さいませ。又、許して下さいならば今度は反対になり、浣腸責め股間縛り、そして膨んだ腹部をいじめるなどのプレイを楽しみたいものです。若い女性よりは二十六才ぐらいから中年までの方が良いかと存じます。又、夫婦プレイをなさっておられる方で、大阪の長本居一郎、山梨の中曾根様、大阪の梅田五月様、一月号の松永多可子様、金原喜代子様、よろしかったら小生にお便り下さい。三人プレイにも、ぜひ出席させて下さい。(東京都立川市・大杉繁雄)

奇ク愛読者のM女性の貴女様にお呼びかけを致します。私は三十才の男性ですが、ぜひ一度、貴女様とSMプレイが出来ますようにと毎日思っております。しかしながら、一度のSMプレイの体験もありませんから、貴女様を満足させてあげる縛りが出来ず不安ですが、奇クにて先生方の作品などを拝見して、真似ごとながら貴女様が喜ばれるだろうと思う色々な縛り責めを、一生懸命に致します。SMハントに毎回出て見え

ます女性のように縛られたいと願望していただける貴女様に、ぜひお会いしましょう。

(岐阜・山本新平)

大阪の金原奈加子様、三月号の「或る願望に托して」を読み、強く興味をひかれ、矢もたてもたずラズベンをとった次第です。小生は常日頃、貴女が思っているような事を考えていました。はからずも貴女の空想を実現してみたくなりました。写真の方も非常に興味を抱いております。小生のこの気持が、きつと貴女に通じるものと思ひ、ぜひぜひお便り下さい。一日千秋の思いで貴女のお便りをお待ち致しております。

(名古屋・伊知川)

皆様お元気ですか。始めてお便りしますが、私は五、六年前からK誌を愛読している者で、一月も欠かしたことはありません。現在三十才、独身で、ある小会社の役員をやっています。どちらかというとSの方ですが、Mの方も大いにあります。今までの経験は二、三回、若い女性の全裸緊縛のフォートをとったことがあります。なかなかM趣味の方に会うことが少

次号(六月号)は四月二十五日に発売いたします

く、もしつき合って頂ける若い女性の方がありません。プレイしたいと思います。今まで、フォートをとった方とも全く紳士的で、希望しないことは全然しておりません。(心の中では希望していたのかも知れませんが)時にはトルコ風呂で、頼んで縛ってもらったこともあります。これ又、変な顔をされることもあり、案外、SM趣味の人は少いものだという感じが致します。ところで今までの「花と蛇」特集を買いそねた方に、御希望の方がありません。今までのを集めていますので、差し上げてよいと思います。その他、「痴人の愛」「カメラ・ハント」なども一括まとめています。御希望の方は、K誌上で送り先をお知らせ下さい。あるいは連絡方法など御連絡頂いても結構です。男性女性を問わず、同好の方とおつき合いしたいと思っております

(熊本 今野文夫)

小生はフンドシの大的ファンです。以前は、なんだか後めいた気がして隠れてフンドシを締めてい

たのですが、奇クを読むようになってから同じファンが少からずいることに心強く感じ、今では正々堂々と締めています。下腹から股にキューツと締まる快感は、フンドシを締めた者のみが知る幸福感でしょう。毎号、必ずフンドシに関する記事を書いて下さい。男性のフンドシの記事を是非おねがいします。それからフンドシを好む者の心理学的解説を、専門の先生方に一度くわしく説明していただきたいと思ひます。

(東京・愛輝生)

金原奈加子君、十九才の若さで写真を堂々とのせて呼びかけるとは大した勇氣ですね。感心しました。しかし若しボーイフレンド欲しさのためなら、気をつけられたら良いでしょう。若い男性なら君を裸にして緊縛すれば、とてもそれだけで辛抱できないでしょう。その場合、交際の前に、あくまで相手の勤務先、素姓を調べ、一流会社の社員で真面目な人なら将来も約束して間違いないと思ひますので委すのも方法でしょう。しか

し十九才で結婚のことなど考えるのは早いというなら、私のような中年サラリーマンが適していると思ひます。これは、ある程度身分も出来、普通であれば体面上からも信用できるのではありませんか。勿論、勤務先が一流会社でなければなりません。何年かかかって築き上げた地位を捨ててまで、体面を汚すような事は出来ません。そのかわりある程度、ねちこく縛っても念が入ると考えられますが、これは仕方がありません。又、貴女もその方が良いのではありませんか。月に一度か二度遊ぶのも案外、良い経験になるかも知れません。一つためしてみませんか。勿論、私を信用するかしないかは貴女の勝手です、ここでいくら美辞麗句を並べても、その証はどこにもありませんので止めます。私は年令四十二才、会社の課長をしております。出来れば日曜日がよく昼間から緊縛がいやなら平日夜でもかまいません。御返事お待ちしています。

(芦屋市・森一夫)

待ちに待った三月号を読ませて頂き、ありがとうございます。二十五日から五日間、毎日日本屋さんに通いつめ御誌を買いに行きま

したが入荷しておらず、こんなに気のもめた辛いことはありませんでした。三十日にやっと入荷して本屋さんの棚に三月号を見つけた時の嬉しい気持は、たとうようもありませんでした。店員さんも毎日くる私を気の毒そうにして見ておりましたが、三十一日うれしそに買う私をジロジロ見るので、私もはずかしくて胸がドキドキいたしました。二度と私をこんな心配させないで下さい。三月号の竹本雅敏様、ありがとうございます。した。私のような女を、そんなにまで思ってくれて私はうれしくてたまりませんでした。チャンスがあれば、あなたをこの乳房に埋めて寝かしてやりたいと思います。私はあなたを子供のよう可愛がり、あなたが私のお乳を吸いながら、寝る優しい顔を想像すると、涙が出てきます。私は、あなたに私の大きなお腹を見せ「赤ちゃんが生れたら、もうあなたにはこのお乳はやりませんよ」と言うと、きつとあなたは私のお腹を蹴ったり殴ったりして「お腹の赤ちゃんを殺してやる」と言うでしょうね。又、おたより下さい。東京の佐藤勝雄様、うれしく通信拝見致しました。あなたの私に対して思

われてる中で一番うれしかったのは、私の大きなお腹に注射をうって血をとろうと言うことでした。私はこの一言で凄いいショックを受け、うれしく思いました。私はあなたの前に立ち、ゆっくりと服を脱いで行きます。私の乳房は大きく張って、青い筋が出て一寸でも押せばお乳がとび散るぐらいに見えるでしょう。そして最後に腹帯だけの私になります。私は腹帯の上から丸々としたお腹をなで廻し注射器を持ってかまえてるあなたをじらします。私は、ゆっくりとサランを取りはずし、最後に丸々と脂肪がたっぷりついた、私のこの自慢の太鼓っ腹が、あなたの目

の前に表われます。あなたは、ため息をついて、このお腹を見ているでしょうね。私は、締めつけてたお腹が楽になって、やや下へ一寸垂れ加減のお腹に空気を一杯吸いこんで、思いつき切りふくらませ、お腹を両手で下から上に持ち上げるようにマッサージを繰り返して苦しそうに「坊や、こんなに腹が張っちゃって苦しくて苦しくて張り裂けそうよ」と言います。あなたは「おばさん、僕がそのお腹を楽にしてやるよ」と言って、大きな注射器を私の一番でっばっているお臍の下にブツツリと突き立てます。私は苦痛に涙を浮かべ、ブツツリ突き立っている針を見なが

らあえぎます。あなたは冷めたい表情で血をとろうとしますが、脂肪で厚くおおわれている私のお腹からは、そう血は出ないでしょう。あなたは必死に注射器をいじります。私は、そのたびに苦しみお腹を両手でもみながら苦しみもだえます。私はこの自分の、まるで動物のような体を鏡にうつしては、私を本当に理解してくれる人を探しております。

(仙台・美川美子)

一年ほど前から奇クを愛読しています。若いときから小生のS精神は相当強い欲求を持ちながら、今日まで空想と焦燥の中に空転し

ていたに過ぎなかったことが悔まれます。奇クによっていつわらざる同好の士の声に接しつづけている中に、人生の夢でしかもてないと思っていたことを現実に経験したい、又そのチャンスなきにしもあらずと知って読者通信にこの希望を托しました。初心者ですからテクニクは未熟ですが意欲的に行きます。四月号の山本広子さん小生は邦楽を趣味としています。長唄が主ですが十数年つづけています。邦楽の趣味とS・M趣味との結びつきに人生の快があるかどうかと強い誘惑を感じ、投稿した次第です。

(広島市・山田生)

本誌既刊号在庫一覧表

○本誌既刊雑誌は左記一覧表の通り在庫しておりますが、39年に発行のものについては在庫の僅少な御注文願います。
○従来、雑誌の送料は当社にて負担しておりますが、今後は三カ月以上予約注文以外（既刊号は含まず）は一部につき送料二〇円の御負担を願います。多数一括してお求めの際は八小包Vにて発送

申し上げます。

昭和40年5月号	昭和40年4月号	昭和40年3月号	昭和40年2月号	昭和39年12月号	昭和39年11月号	昭和39年10月号	昭和39年9月号	昭和39年8月号	昭和39年7月号	昭和39年6月号	昭和39年5月号	昭和39年4月号	昭和39年3月号	昭和39年2月号	昭和39年1月号	昭和38年12月号	昭和38年11月号	昭和38年10月号	昭和38年9月号	昭和38年8月号	昭和38年7月号	昭和38年6月号	昭和38年5月号	昭和38年4月号	昭和38年3月号	昭和38年2月号	昭和38年1月号	昭和37年12月号	昭和37年11月号	昭和37年10月号	昭和37年9月号	昭和37年8月号	昭和37年7月号	昭和37年6月号	昭和37年5月号	昭和37年4月号	昭和37年3月号	昭和37年2月号	昭和37年1月号	昭和36年12月号	昭和36年11月号	昭和36年10月号	昭和36年9月号	昭和36年8月号	昭和36年7月号	昭和36年6月号	昭和36年5月号	昭和36年4月号	昭和36年3月号	昭和36年2月号	昭和36年1月号	昭和35年12月号	昭和35年11月号	昭和35年10月号	昭和35年9月号	昭和35年8月号	昭和35年7月号	昭和35年6月号	昭和35年5月号	昭和35年4月号	昭和35年3月号	昭和35年2月号	昭和35年1月号	昭和34年12月号	昭和34年11月号	昭和34年10月号	昭和34年9月号	昭和34年8月号	昭和34年7月号	昭和34年6月号	昭和34年5月号	昭和34年4月号	昭和34年3月号	昭和34年2月号	昭和34年1月号	昭和33年12月号	昭和33年11月号	昭和33年10月号	昭和33年9月号	昭和33年8月号	昭和33年7月号	昭和33年6月号	昭和33年5月号	昭和33年4月号	昭和33年3月号	昭和33年2月号	昭和33年1月号	昭和32年12月号	昭和32年11月号	昭和32年10月号	昭和32年9月号	昭和32年8月号	昭和32年7月号	昭和32年6月号	昭和32年5月号	昭和32年4月号	昭和32年3月号	昭和32年2月号	昭和32年1月号	昭和31年12月号	昭和31年11月号	昭和31年10月号	昭和31年9月号	昭和31年8月号	昭和31年7月号	昭和31年6月号	昭和31年5月号	昭和31年4月号	昭和31年3月号	昭和31年2月号	昭和31年1月号	昭和30年12月号	昭和30年11月号	昭和30年10月号	昭和30年9月号	昭和30年8月号	昭和30年7月号	昭和30年6月号	昭和30年5月号	昭和30年4月号	昭和30年3月号	昭和30年2月号	昭和30年1月号	昭和29年12月号	昭和29年11月号	昭和29年10月号	昭和29年9月号	昭和29年8月号	昭和29年7月号	昭和29年6月号	昭和29年5月号	昭和29年4月号	昭和29年3月号	昭和29年2月号	昭和29年1月号	昭和28年12月号	昭和28年11月号	昭和28年10月号	昭和28年9月号	昭和28年8月号	昭和28年7月号	昭和28年6月号	昭和28年5月号	昭和28年4月号	昭和28年3月号	昭和28年2月号	昭和28年1月号	昭和27年12月号	昭和27年11月号	昭和27年10月号	昭和27年9月号	昭和27年8月号	昭和27年7月号	昭和27年6月号	昭和27年5月号	昭和27年4月号	昭和27年3月号	昭和27年2月号	昭和27年1月号	昭和26年12月号	昭和26年11月号	昭和26年10月号	昭和26年9月号	昭和26年8月号	昭和26年7月号	昭和26年6月号	昭和26年5月号	昭和26年4月号	昭和26年3月号	昭和26年2月号	昭和26年1月号	昭和25年12月号	昭和25年11月号	昭和25年10月号	昭和25年9月号	昭和25年8月号	昭和25年7月号	昭和25年6月号	昭和25年5月号	昭和25年4月号	昭和25年3月号	昭和25年2月号	昭和25年1月号	昭和24年12月号	昭和24年11月号	昭和24年10月号	昭和24年9月号	昭和24年8月号	昭和24年7月号	昭和24年6月号	昭和24年5月号	昭和24年4月号	昭和24年3月号	昭和24年2月号	昭和24年1月号	昭和23年12月号	昭和23年11月号	昭和23年10月号	昭和23年9月号	昭和23年8月号	昭和23年7月号	昭和23年6月号	昭和23年5月号	昭和23年4月号	昭和23年3月号	昭和23年2月号	昭和23年1月号	昭和22年12月号	昭和22年11月号	昭和22年10月号	昭和22年9月号	昭和22年8月号	昭和22年7月号	昭和22年6月号	昭和22年5月号	昭和22年4月号	昭和22年3月号	昭和22年2月号	昭和22年1月号	昭和21年12月号	昭和21年11月号	昭和21年10月号	昭和21年9月号	昭和21年8月号	昭和21年7月号	昭和21年6月号	昭和21年5月号	昭和21年4月号	昭和21年3月号	昭和21年2月号	昭和21年1月号	昭和20年12月号	昭和20年11月号	昭和20年10月号	昭和20年9月号	昭和20年8月号	昭和20年7月号	昭和20年6月号	昭和20年5月号	昭和20年4月号	昭和20年3月号	昭和20年2月号	昭和20年1月号	昭和19年12月号	昭和19年11月号	昭和19年10月号	昭和19年9月号	昭和19年8月号	昭和19年7月号	昭和19年6月号	昭和19年5月号	昭和19年4月号	昭和19年3月号	昭和19年2月号	昭和19年1月号	昭和18年12月号	昭和18年11月号	昭和18年10月号	昭和18年9月号	昭和18年8月号	昭和18年7月号	昭和18年6月号	昭和18年5月号	昭和18年4月号	昭和18年3月号	昭和18年2月号	昭和18年1月号	昭和17年12月号	昭和17年11月号	昭和17年10月号	昭和17年9月号	昭和17年8月号	昭和17年7月号	昭和17年6月号	昭和17年5月号	昭和17年4月号	昭和17年3月号	昭和17年2月号	昭和17年1月号	昭和16年12月号	昭和16年11月号	昭和16年10月号	昭和16年9月号	昭和16年8月号	昭和16年7月号	昭和16年6月号	昭和16年5月号	昭和16年4月号	昭和16年3月号	昭和16年2月号	昭和16年1月号	昭和15年12月号	昭和15年11月号	昭和15年10月号	昭和15年9月号	昭和15年8月号	昭和15年7月号	昭和15年6月号	昭和15年5月号	昭和15年4月号	昭和15年3月号	昭和15年2月号	昭和15年1月号	昭和14年12月号	昭和14年11月号	昭和14年10月号	昭和14年9月号	昭和14年8月号	昭和14年7月号	昭和14年6月号	昭和14年5月号	昭和14年4月号	昭和14年3月号	昭和14年2月号	昭和14年1月号	昭和13年12月号	昭和13年11月号	昭和13年10月号	昭和13年9月号	昭和13年8月号	昭和13年7月号	昭和13年6月号	昭和13年5月号	昭和13年4月号	昭和13年3月号	昭和13年2月号	昭和13年1月号	昭和12年12月号	昭和12年11月号	昭和12年10月号	昭和12年9月号	昭和12年8月号	昭和12年7月号	昭和12年6月号	昭和12年5月号	昭和12年4月号	昭和12年3月号	昭和12年2月号	昭和12年1月号	昭和11年12月号	昭和11年11月号	昭和11年10月号	昭和11年9月号	昭和11年8月号	昭和11年7月号	昭和11年6月号	昭和11年5月号	昭和11年4月号	昭和11年3月号	昭和11年2月号	昭和11年1月号	昭和10年12月号	昭和10年11月号	昭和10年10月号	昭和10年9月号	昭和10年8月号	昭和10年7月号	昭和10年6月号	昭和10年5月号	昭和10年4月号	昭和10年3月号	昭和10年2月号	昭和10年1月号	昭和9年12月号	昭和9年11月号	昭和9年10月号	昭和9年9月号	昭和9年8月号	昭和9年7月号	昭和9年6月号	昭和9年5月号	昭和9年4月号	昭和9年3月号	昭和9年2月号	昭和9年1月号	昭和8年12月号	昭和8年11月号	昭和8年10月号	昭和8年9月号	昭和8年8月号	昭和8年7月号	昭和8年6月号	昭和8年5月号	昭和8年4月号	昭和8年3月号	昭和8年2月号	昭和8年1月号	昭和7年12月号	昭和7年11月号	昭和7年10月号	昭和7年9月号	昭和7年8月号	昭和7年7月号	昭和7年6月号	昭和7年5月号	昭和7年4月号	昭和7年3月号	昭和7年2月号	昭和7年1月号	昭和6年12月号	昭和6年11月号	昭和6年10月号	昭和6年9月号	昭和6年8月号	昭和6年7月号	昭和6年6月号	昭和6年5月号	昭和6年4月号	昭和6年3月号	昭和6年2月号	昭和6年1月号	昭和5年12月号	昭和5年11月号	昭和5年10月号	昭和5年9月号	昭和5年8月号	昭和5年7月号	昭和5年6月号	昭和5年5月号	昭和5年4月号	昭和5年3月号	昭和5年2月号	昭和5年1月号	昭和4年12月号	昭和4年11月号	昭和4年10月号	昭和4年9月号	昭和4年8月号	昭和4年7月号	昭和4年6月号	昭和4年5月号	昭和4年4月号	昭和4年3月号	昭和4年2月号	昭和4年1月号	昭和3年12月号	昭和3年11月号	昭和3年10月号	昭和3年9月号	昭和3年8月号	昭和3年7月号	昭和3年6月号	昭和3年5月号	昭和3年4月号	昭和3年3月号	昭和3年2月号	昭和3年1月号	昭和2年12月号	昭和2年11月号	昭和2年10月号	昭和2年9月号	昭和2年8月号	昭和2年7月号	昭和2年6月号	昭和2年5月号	昭和2年4月号	昭和2年3月号	昭和2年2月号	昭和2年1月号	昭和1年12月号	昭和1年11月号	昭和1年10月号	昭和1年9月号	昭和1年8月号	昭和1年7月号	昭和1年6月号	昭和1年5月号	昭和1年4月号	昭和1年3月号	昭和1年2月号	昭和1年1月号	昭和0年12月号	昭和0年11月号	昭和0年10月号	昭和0年9月号	昭和0年8月号	昭和0年7月号	昭和0年6月号	昭和0年5月号	昭和0年4月号	昭和0年3月号	昭和0年2月号	昭和0年1月号	昭和-1年12月号	昭和-1年11月号	昭和-1年10月号	昭和-1年9月号	昭和-1年8月号	昭和-1年7月号	昭和-1年6月号	昭和-1年5月号	昭和-1年4月号	昭和-1年3月号	昭和-1年2月号	昭和-1年1月号	昭和-2年12月号	昭和-2年11月号	昭和-2年10月号	昭和-2年9月号	昭和-2年8月号	昭和-2年7月号	昭和-2年6月号	昭和-2年5月号	昭和-2年4月号	昭和-2年3月号	昭和-2年2月号	昭和-2年1月号	昭和-3年12月号	昭和-3年11月号	昭和-3年10月号	昭和-3年9月号	昭和-3年8月号	昭和-3年7月号	昭和-3年6月号	昭和-3年5月号	昭和-3年4月号	昭和-3年3月号	昭和-3年2月号	昭和-3年1月号	昭和-4年12月号	昭和-4年11月号	昭和-4年10月号	昭和-4年9月号	昭和-4年8月号	昭和-4年7月号	昭和-4年6月号	昭和-4年5月号	昭和-4年4月号	昭和-4年3月号	昭和-4年2月号	昭和-4年1月号	昭和-5年12月号	昭和-5年11月号	昭和-5年10月号	昭和-5年9月号	昭和-5年8月号	昭和-5年7月号	昭和-5年6月号	昭和-5年5月号	昭和-5年4月号	昭和-5年3月号	昭和-5年2月号	昭和-5年1月号	昭和-6年12月号	昭和-6年11月号	昭和-6年10月号	昭和-6年9月号	昭和-6年8月号	昭和-6年7月号	昭和-6年6月号	昭和-6年5月号	昭和-6年4月号	昭和-6年3月号	昭和-6年2月号	昭和-6年1月号	昭和-7年12月号	昭和-7年11月号	昭和-7年10月号	昭和-7年9月号	昭和-7年8月号	昭和-7年7月号	昭和-7年6月号	昭和-7年5月号	昭和-7年4月号	昭和-7年3月号	昭和-7年2月号	昭和-7年1月号	昭和-8年12月号	昭和-8年11月号	昭和-8年10月号	昭和-8年9月号	昭和-8年8月号	昭和-8年7月号	昭和-8年6月号	昭和-8年5月号	昭和-8年4月号	昭和-8年3月号	昭和-8年2月号	昭和-8年1月号	昭和-9年12月号	昭和-9年11月号	昭和-9年10月号	昭和-9年9月号	昭和-9年8月号	昭和-9年7月号	昭和-9年6月号	昭和-9年5月号	昭和-9年4月号	昭和-9年3月号	昭和-9年2月号	昭和-9年1月号	昭和-10年12月号	昭和-10年11月号	昭和-10年10月号	昭和-10年9月号	昭和-10年8月号	昭和-10年7月号	昭和-10年6月号	昭和-10年5月号	昭和-10年4月号	昭和-10年3月号	昭和-10年2月号	昭和-10年1月号	昭和-11年12月号	昭和-11年11月号	昭和-11年10月号	昭和-11年9月号	昭和-11年8月号	昭和-11年7月号	昭和-11年6月号	昭和-11年5月号	昭和-11年4月号	昭和-11年3月号	昭和-11年2月号	昭和-11年1月号	昭和-12年12月号	昭和-12年11月号	昭和-12年10月号	昭和-12年9月号	昭和-12年8月号	昭和-12年7月号	昭和-12年6月号	昭和-12年5月号	昭和-12年4月号	昭和-12年3月号	昭和-12年2月号	昭和-12年1月号	昭和-13年12月号	昭和-13年11月号	昭和-13年10月号	昭和-13年9月号	昭和-13年8月号	昭和-13年7月号	昭和-13年6月号	昭和-13年5月号	昭和-13年4月号	昭和-13年3月号	昭和-13年2月号	昭和-13年1月号	昭和-14年12月号	昭和-14年11月号	昭和-14年10月号	昭和-14年9月号	昭和-14年8月号	昭和-14年7月号	昭和-14年6月号	昭和-14年5月号	昭和-14年4月号	昭和-14年3月号	昭和-14年2月号	昭和-14年1月号	昭和-15年12月号	昭和-15年11月号	昭和-15年10月号	昭和-15年9月号	昭和-15年8月号	昭和-15年7月号	昭和-15年6月号	昭和-15年5月号	昭和-15年4月号	昭和-15年3月号	昭和-15年2月号	昭和-15年1月号	昭和-16年12月号	昭和-16年11月号	昭和-16年10月号	昭和-16年9月号	昭和-16年8月号	昭和-16年7月号	昭和-16年6月号	昭和-16年5月号	昭和-16年4月号	昭和-16年3月号	昭和-16年2月号	昭和-16年1月号	昭和-17年12月号	昭和-17年11月号	昭和-17年10月号	昭和-17年9月号	昭和-17年8月号	昭和-17年7月号	昭和-17年6月号	昭和-17年5月号	昭和-17年4月号	昭和-17年3月号	昭和-17年2月号	昭和-17年1月号	昭和-18年12月号	昭和-18年11月号	昭和-18年10月号	昭和-18年9月号	昭和-18年8月号	昭和-18年7月号	昭和-18年6月号	昭和-18年5月号	昭和-18年4月号	昭和-18年3月号	昭和-18年2月号	昭和-18年1月号	昭和-19年12月号	昭和-19年11月号	昭和-19年10月号	昭和-19年9月号	昭和-19年8月号	昭和-19年7月号	昭和-19年6月号	昭和-19年5月号	昭和-19年4月号	昭和-19年3月号	昭和-19年2月号	昭和-19年1月号	昭和-20年12月号	昭和-20年11月号	昭和-20年10月号	昭和-20年9月号	昭和-20年8月号	昭和-20年7月号	昭和-20年6月号	昭和-20年5月号	昭和-20年4月号	昭和-20年3月号	昭和-20年2月号	昭和-20年1月号	昭和-21年12月号	昭和-21年11月号	昭和-21年10月号	昭和-21年9月号	昭和-21年8月号	昭和-21年7月号	昭和-21年6月号	昭和-21年5月号	昭和-21年4月号	昭和-21年3月号	昭和-21年2月号	昭和-21年1月号	昭和-22年12月号	昭和-22年11月号	昭和-22年10月号	昭和-22年9月号	昭和-22年8月号	昭和-22年7月号	昭和-22年6月号	昭和-22年5月号	昭和-22年4月号	昭和-22年3月号	昭和-22年2月号	昭和-22年1月号	昭和-23年12月号	昭和-23年11月号	昭和-23年10月号	昭和-23年9月号	昭和-23年8月号	昭和-23年7月号	昭和-23年6月号	昭和-23年5月号	昭和-23年4月号	昭和-23年3月号	昭和-23年2月号	昭和-23年1月号	昭和-24年12月号	昭和-24年11月号	昭和-24年10月号	昭和-24年9月号	昭和-24年8月号	昭和-24年7月号	昭和-24年6月号	昭和-24年5月号	昭和-24年4月号	昭和-24年3月号	昭和-24年2月号	昭和-24年1月号	昭和-25年12月号	昭和-25年11月号	昭和-25年10月号	昭和-25年9月号	昭和-25年8月号	昭和-25年7月号	昭和-25年6月号	昭和-25年5月号	昭和-25年4月号	昭和-25年3月号	昭和-25年2月号	昭和-25年1月号	昭和-26年12月号	昭和-26年11月号	昭和-26年10月号	昭和-26年9月号	昭和-26年8月号	昭和-26年7月号	昭和-26年6月号	昭和-26年5月号	昭和-26年4月号	昭和-26年3月号	昭和-26年2月号	昭和-26年1月号	昭和-27年12月号	昭和-27年11月号	昭和-27年10月号	昭和-27年9月号	昭和-27年8月号	昭和-27年7月号	昭和-27年6月号	昭和-27年5月号	昭和-27年4月号	昭和-27年3月号	昭和-27年2月号	昭和-27年1月号	昭和-28年12月号	昭和-28年11月号	昭和-28年10月号	昭和-28年9月号	昭和-28年8月号	昭和-28年7月号	昭和-28年6月号	昭和-28年5月号	昭和-28年4月号	昭和-28年3月号	昭和-28年2月号	昭和-28年1月号	昭和-29年12月号	昭和-29年11月号	昭和-29年10月号	昭和-29年9月号	昭和-29年8月号	昭和-29年7月号	昭和-29年6月号	昭和-29年5月号	昭和-29年4月号	昭和-29年3月号	昭和-29年2月号	昭和-29年1月号	昭和-30年12月号	昭和-30年11月号	昭和-30年10月号	昭和-30年9月号	昭和-30年8月号	昭和-30年7月号	昭和-30年6月号	昭和-30年5月号	昭和-30年4月号	昭和-30年3月号	昭和-30年2月号	昭和-30年1月号	昭和-31年12月号	昭和-31年11月号	昭和-31年10月号	昭和-31年9月号	昭和-31年8月号	昭和-31年7月号	昭和-31年6月号	昭和-31年5月号	昭和-31年4月号	昭和-31年3月号	昭和-31年2月号	昭和-31年1月号	昭和-32年12月号	昭和-32年11月号	昭和-32年10月号	昭和-32年9月号	昭和-32年8月号	昭和-32年7月号	昭和-32年6月号	昭和-32年5月号	昭和-32年4月号	昭和-32年3月号	昭和-32年2月号	昭和-32年1月号	昭和-33年12月号	昭和-33年11月号	昭和-33年10月号	昭和-33年9月号	昭和-33年8月号	昭和-33年7月号	昭和-33年6月号	昭和-33年5月号	昭和-33年4月号	昭和-33年3月号	昭和-33年2月号	昭和-33年1月号	昭和-34年12月号	昭和-34年11月号	昭和-34年10月号	昭和-34年9月号	昭和-34年8月号	昭和-34年7月号	昭和-34年6月号	昭和-34年5月号	昭和-34年4月号	昭和-34年3月号	昭和-34年2月号	昭和-34年1月号	昭和-35年12月号	昭和-35年11月号	昭和-35年10月号	昭和-35年9月号	昭和-35年8月号	昭和-35年7月号	昭和-35年6月号	昭和-35年5月号	昭和-35年4月号	昭和-35年3月号	昭和-35年2月号	昭和-35年1月号	昭和-36年12月号	昭和-36年11月号	昭和-36年10月号	昭和-36年9月号	昭和-36年8月号	昭和-36年7月号	昭和-36年6月号	昭和-36年5月号	昭和-36年4月号	昭和-36年3月号	昭和-36年2月号	昭和-36年1月号	昭和-37年12月号	昭和-37年11月号	昭和-37年10月号	昭和-37年9月号	昭和-37年8月号	昭和-37年7月号	昭和-37年6月号	昭和-37年5月号	昭和-37年4月号	昭和-37年3月号	昭和-37年2月号	昭和-37年1月号	昭和-38年12月号	昭和-38年11月号	昭和-38年10月号	昭和-38年9月号	昭和-38年8月号	昭和-38年7月号	昭和-38年6月号	昭和-38年5月号	昭和-38年4月号	昭和-38年3月号	昭和-38年2月号	昭和-38年1月号	昭和-39年12月号	昭和-39年11月号	昭和-39年10月号	昭和-39年9月号	昭和-39年8月号	昭和-39年7月号	昭和-39年6月号	昭和-39年5月号	昭和-39年4月号	昭和-39年3月号	昭和-39年2月号	昭和-39年1月号	昭和-40年12月号	昭和-40年11月号	昭和-40年10月号	昭和-40年9月号	昭和-40年8月号	昭和-40年7月号	昭和-40年6月号	昭和-40年5月号	昭和-40年4月号	昭和-40年3月号	昭和-40年2月号	昭和-40年1月号	昭和-41年12月号	昭和-41年11月号	昭和-41年10月号	昭和-41年9月号	昭和-41年8月号	昭和-41年7月号	昭和-41年6月号	昭和-41年5月号	昭和-41年4月号	昭和-41年3月号	昭和
----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	----------	----------	----------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	----------	----------	----------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	----------	----------	----------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	----------	----------	----------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	----------	----------	----------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	----------	----------	----------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	----------	----------	----------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	----------	----------	----------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	----------	----------	----------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	-----------	-----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	------------	------------	------------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	------------	------------	------------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	------------	------------	------------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	------------	------------	------------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	------------	------------	------------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	------------	------------	------------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	------------	------------	------------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	------------	------------	------------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	------------	------------	------------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	------------	------------	------------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	------------	------------	------------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	------------	------------	------------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	------------	------------	------------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	------------	------------	------------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	------------	------------	------------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	------------	------------	------------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	------------	------------	------------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	------------	------------	------------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	------------	------------	------------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	------------	------------	------------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	------------	------------	------------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	------------	------------	------------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	------------	------------	------------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	------------	------------	------------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	------------	------------	------------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	------------	------------	------------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	------------	------------	------------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	------------	------------	------------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	------------	------------	------------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	------------	------------	------------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	------------	------------	------------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	------------	------------	------------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	----

☆編集後記☆

○カメラハントでは先月号の辰巳典子嬢に引き続き今月号では谷ナオミ嬢に登場して貰った。豊満で美しい彼女の緊縛姿態を辻村氏の麗筆にのせて十分鑑賞して頂きたい。
○江戸女囚の哀歌を描いた懸賞入選作八理恵女献身Vを今月号より五回に亘って分載することにした。女囚物の待望されているとき、是非ご愛読願いたい作品の一つである。
○同じく時代物として『緋縮緬地獄』を推したい。白鳥大蔵氏は嘗て本誌でも活躍したところのあるS派のベテラン。新しく試みた野心作にご期待ありたい。山本一章氏の久々のカメラ・ルポは、可憐な愛読者長井葉津子嬢が控え目で羞らいに満ちた姿態を登場させた。

○団氏のシナリオ『残酷・性の賛』はオールスター出演の豪華メンバーによるピンク映画で既に房州海岸にてロケを行ったとのこと。鬼六先生もエキストラとして出演されている。そうなので封切を期待している。
○六角京之介氏のフオストリー八月形千浪の自刃Vは一つの新機軸として切腹ファンに捧げたい。芳野眉美氏は相変らずの軽快洒脱な筆を誇っているし、田代俊夫氏、みはらひろし氏とM派中心の読物も活発である。
○久方ぶりに「かずひこのノートから」が顔を見せた。異色作『贗作イリーリアス』の精緻な筆致に先ず目を瞠って頂こう。今月号では誌面の関係で相当数の翌月回しになった作品が生じたが、いずれも力作なので大いに楽しみにして待っていて貰いたい。

◎懸賞原稿募集

△体験、告白、手記△

皆さまが自分で直接体験されたことや、自らの性癖や性向について訴えたいこと、或はこれだけは、どうしても人に話したい、書いて残しておきたいといった事柄を、どうか腹藏なくお寄せ下さい。皆さまの真実の叫びや思い出などの寄稿を心からお待ちしております。採用篇には賞金三千円以上贈呈いたします。

△創作、小説、物語△

本誌の内容に適したものでしたら如何なる傾向のもので

も結構です。皆さまの平常抱かれていた夢を文章に托してお寄せ下さい。形式も敢えて問いません。但しすべて未発表のもの、自作に限りません。若し引用する部分がありましたら、必ず出処の明記をお願いします。採用原稿に対しては賞金十万円迄贈呈します。

△感想、論評、批判△

本誌に掲載された内容についてでも結構ですし、又関連したもので結構です。とにかく本誌を読まれて感じられたことを忌憚なく皆さまのペンのままとめて下さい。採用篇

には賞金二千円以上を贈呈いたします。

△(映画、雑誌)通信△

映画、雑誌、演劇、新聞、週刊誌、或はその他見聞などで特に興味をお持ちになった事項の通信をお待ちします。出処は出来るだけ詳しく記載下されば幸いです。採用篇には本誌三カ月贈呈致します。◎尚、以上の採用篇に対する本誌贈呈の代りに、写真や御希望の方には、代理部分譲品の中から御指定下されば、贈呈いたします。

☆本誌御購読の榮☆

一月分(1冊)三五〇円△送20円V
三月分(3冊)一〇五〇円△送共V
半年分(6冊)二一〇〇円△送共V

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手困難の方は直接代金御送付の上、御予約下さい。毎月二十日前後、印刷完成と同時に厳重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

奇譚クラブ 定価 三五〇円

五月号

〔第二十二巻第六号〕
〔通刊第二四〇号〕

昭和四十三年 四月二十日 印刷
昭和四十三年 五月一日 発行

編集人 箕田 京二
発行人 吉田 稔
印刷人 北村 俊夫

大阪市住吉郵便局私書函第四十一号

発行所 暁出版株式会社

△振替口座大阪四二七八三番V
(昭和三十一年四月二〇日第三種郵便物認可)
(昭和四十二年四月二一日)
国鉄大局特別扱承認雑誌第二二〇号

☆書店の皆様方へお願い☆

○本誌は口絵、グラビヤ写真の廃止、挿絵の削減、内容の改訂等につとめ、青少年の健全なる育成に努める各条例に指定されないうち、本誌は充分に注意して編集いたしております。但し、本誌の発行を企図して下さる方には、十八才未満の方には絶対販売し下されません。特にくれぐれもお願ひ申し上げます。